

福岡東バイパス関係 埋蔵文化財調査報告

福岡県粕屋郡篠栗町所在遺跡群の調査

高 田 遺 跡
塚 元 遺 跡
トヲノ尾遺跡

1990

福岡県教育委員会

福岡東バイパス関係 埋蔵文化財調査報告

福岡県粕屋郡篠栗町所在遺跡群の調査

たか た 遺 跡
高 田 遺 跡
つか もと 遺 跡
塚 元 遺 跡
トヲノ^お尾遺跡



1. 高田遺跡全景



2. トラノ尾遺跡全景

序

一般国道201号線福岡東バイパス建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、昭和60年度、昭和63年度に実施しました。

この報告書は、昭和60年度、昭和63年度に行った粕屋郡篠栗町大字津波黒、高田地区6箇所についての発掘調査の記録であります。

その内容は、縄文時代の遺物、弥生時代の集落跡、古墳時代の集落跡と古墳、歴史時代の集落跡と火葬墓群から構成されています。

調査の結果、この地方の歴史を知る上で、貴重な資料をわたくしたちに提示してくれています。

本書が、学問研究に、教育の場に、文化財愛護の普及の活動に活用頂ければ幸いです。

なお、発掘調査、整理、発刊にあたり、本文中に記名した方々をはじめ、種々の協力を頂いた関係各位に対し深い感謝を捧げます。

平成2年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 御手洗 康

例 言

1. 本書は、一般国道201号線福岡東バイパス建設のために破壊される埋蔵文化財を発掘調査した、福岡県粕屋郡篠栗町所在の遺跡群の報告書である。
2. 発掘調査は、昭和60年度と昭和63年度に、福岡県教育委員会が建設省から委託されて実施した。
3. 本書の執筆分担は次の通りである。

第1章 第1節1	副島邦弘，緒方 泉
第1節2，第2節	緒方 泉
第2章	副島邦弘
第3章	飛野博文
第4章 第1節，第2節1・3，第3節，第4節2	緒方 泉
第4章 第2節2，第4節1	馬田弘稔
4. 遺構の実測図は柳田康雄，副島邦弘，馬田弘稔，飛野博文，緒方泉の調査担当者
と長家伸，野田徹，森山栄一，宮田弘之の各氏が，遺物の整理，図面の作成には，
担当者の柳田，副島，馬田，飛野，緒方の他に，岩瀬正信，豊福弥生，原かよ子，
福島育子，森山シズ子の各氏が従事した。
5. 掲載写真のうち，遺構は柳田，副島，馬田，飛野，緒方が撮影したが，遺物は九
州歴史資料館技術主査石丸洋氏と須原悦子，矢野明美各氏の協力があった。
6. 出土鉄器の保存処理は，九州歴史資料館参事補佐横田義章氏にお願いした。
7. 本書の編集は，各執筆分担者が行い，そのとりまとめを緒方が担当した。

本文目次

第1章	はじめに	
第1節	調査の組織と経過	1
1.	調査に至る経過	1
2.	調査の経過	3
第2節	位置と環境	7
1.	遺跡の位置	7
2.	周辺の遺跡	10
第2章	高田遺跡の調査	
第1節	はじめに	11
第2節	生活遺構と遺物	13
1.	概要	13
2.	竪穴住居跡と遺物	13
3.	掘立柱建物と遺物	39
4.	土壇・Pit遺構と遺物	48
5.	溝状遺構と遺物	57
6.	その他の遺構と遺物	66
第3節	小結	77
第3章	塚元遺跡の調査	
第1節	はじめに	79
第2節	I区の調査	79
1.	塚元1号墳	79
2.	井戸	82
3.	石組水路跡	83
4.	出土遺物	86
5.	小結	91
第3節	II区の調査	93
1.	塚元2号墳	93
2.	住居跡	94
3.	土壇墓	100

4. 溝状遺構	101
5. 神社関係遺構	112
6. 柱穴等の出土遺物	113
7. 小結	117
第4節 おわりに	118

第4章 トヲノ尾遺跡の調査

第1節 はじめに	121
第2節 弥生時代の遺構と遺物	123
1. はじめに	123
2. 遺 構	125
1号住居跡	125
2号住居跡	126
3号住居跡	130
4号住居跡	133
5号住居跡	133
6号住居跡(新・古)	134
7号住居跡(新・古)	136
8号住居跡(新・中・古)	137
9号住居跡	138
10号住居跡(新・古)	139
11号住居跡	141
12号住居跡	141
13号住居跡(新・古)	142
14号住居跡	143
15号住居跡	143
3. 遺 物	143
第3節 歴史時代の遺構と遺物	151
1. はじめに	151
2. 遺 構	151
1号火葬墓	152
2号火葬墓	153
3-A号火葬墓	154
3-B号火葬墓	155

4号火葬墓	156
5号火葬墓	156
6号火葬墓	156
7号火葬墓	159
8号火葬墓	159
9号火葬墓	160
10号火葬墓	160
1号火葬関連施設	161
3. 遺物	162
第4節 おわりに	164
1. 1・4号住居跡模式図について	164
2. 火葬墓群について	166

図 版 目 次

- 巻頭図版 1. 高田遺跡全景
2. トヲノ尾遺跡全景

高田遺跡

- 図版 1 高田遺跡遠景（俯瞰）
図版 2 高田遺跡発掘区全景（東から）
図版 3 1. 高田遺跡Ⅰ区近景（東から）
2. 高田遺跡Ⅱ区近景（東から）
図版 4 1. 高田遺跡Ⅰ区東側遺構近景
2. 高田遺跡Ⅰ区西側遺構近景
図版 5 1. 高田遺跡Ⅰ区東南側遺構近景
2. 高田遺跡Ⅰ区東北側遺構近景
図版 6 1. 高田遺跡Ⅰ区中央部遺構全景
2. 高田遺跡中央部溝2付近全景
図版 7 1. 高田遺跡Ⅱ区北側ピット群全景
2. 高田遺跡Ⅱ区南側住居跡と溝，柱穴群全景
図版 8 1. 高田遺跡1号竪穴住居跡全景
2. 高田遺跡2号竪穴住居跡全景
図版 9 高田遺跡3号竪穴住居跡全景①全景（遺物出土状態）②全景（遺物取上げ後）
③住居跡床面出土状態④カマド（立ち割り後）
図版 10 1. 高田遺跡4・5号竪穴住居跡全景
2. 高田遺跡6号竪穴住居跡全景，1号土壙全景
3. 高田遺跡7・19・20・21号竪穴住居跡全景
図版 11 1. 高田遺跡8号竪穴住居跡全景
2. 高田遺跡17号竪穴住居跡全景
図版 12 1. 高田遺跡9・10号竪穴住居跡全景

- 2. 高田遺跡9号竪穴住居跡全景
- 3. 高田遺跡10号竪穴住居跡全景
- 図版 13 1. 高田遺跡11号竪穴住居跡全景
- 2. 高田遺跡12号竪穴住居跡全景
- 図版 14 1. 高田遺跡13・14号竪穴住居跡全景
- 2. 高田遺跡13号竪穴住居跡全景
- 3. 高田遺跡14号竪穴住居跡全景
- 図版 15 1. 高田遺跡15・16号竪穴住居跡全景
- 2. 高田遺跡15・16号竪穴住居跡全景
- 3. 高田遺跡15・16号竪穴住居跡全景
- 図版 16 1. 高田遺跡22号竪穴住居跡全景
- 2. 高田遺跡23号竪穴住居跡全景
- 図版 17 1. 高田遺跡カマド立ち割り状態
- 図版 18 1. 高田遺跡4・5号掘立柱建物全景
- 2. 高田遺跡9号掘立柱建物全景
- 図版 19 1. 高田遺跡3号土壇全景
- 2. 高田遺跡4号土壇全景
- 図版 20 1. 高田遺跡Ⅱ区ピット1・ピット2全景
- 2. 高田遺跡Ⅱ区ピット3全景
- 3. 高田遺跡Ⅱ区ピット4全景
- 図版 21 高田遺跡溝遺構全景①溝1②溝2(上流)③溝3(下流)
- 図版 22 高田遺跡出土遺物1
- 図版 23 高田遺跡出土遺物2
- 図版 24 高田遺跡出土遺物3
- 図版 25 高田遺跡出土遺物4
- 図版 26 高田遺跡出土遺物5
- 図版 27 高田遺跡出土遺物6
- 図版 28 高田遺跡出土遺物7
- 図版 29 高田遺跡出土遺物8
- 図版 30 高田遺跡出土遺物9
- 図版 31 高田遺跡出土遺物10
- 図版 32 高田遺跡出土遺物11

塚元遺跡

- 図版 33 塚元遺跡調査区全景（東上空より）
- 図版 34 1. 塚元1号墳現況（南から）
2. 塚元2号墳現況（北から）
- 図版 35 1. 塚元1号墳主体部（東から）
2. 塚元1号墳主体部左側壁背面（西から）
- 図版 36 1. 塚元1号墳墳丘内焼土坑（北から）
2. 塚元1号墳墳丘内焼土坑（北から）
- 図版 37 1. 塚元1号墳西側水路跡（北から）
2. 塚元1号墳西側水路跡土層（北から）
- 図版 38 1. 塚元1号墳西側水路跡（北から）
2. 塚元1号墳西側水路跡礫群検出状況（東から）
- 図版 39 1. 塚元1号墳南側水路跡土層（東から）
2. 塚元1号墳南側水路跡（北から）
- 図版 40 1. 塚元遺跡Ⅱ区北半（上空より）
2. 塚元遺跡Ⅱ区南半（上空より）
- 図版 41 1. 塚元2号墳（上空より）
2. 塚元2号墳（北から）
- 図版 42 1. 3号住居跡（北から）
2. 4号住居跡（南から）
- 図版 43 1. 1号土塚墓検出状況（北から）
2. 1号土塚墓完掘状況（西から）
- 図版 44 1. 神社関係遺構全景（東から）
2. 2号鳥居跡（北から）
- 図版 45 1. 1号鳥居跡東柱穴（北から）
2. 1号鳥居跡西柱穴（南から）
- 図版 46 塚元1号墳出土遺物1
- 図版 47 塚元1号墳出土遺物2
- 図版 48 住居跡出土遺物
- 図版 49 1号溝出土遺物1
- 図版 50 1号溝出土遺物2
- 図版 51 1号溝出土遺物3, 2号溝・2号土塚墓出土遺物, 李朝青磁, 滑石製品
- 図版 52 柱穴・包含層その他の出土遺物

トヲノ尾遺跡・和田遺跡

- 図版 53 1. トヲノ尾遺跡全景（南から）
2. トヲノ尾遺跡全景（西から）
- 図版 54 1. トヲノ尾遺跡1980年夏予備調査伐開風景
2. トヲノ尾遺跡1980年夏予備調査作業風景
- 図版 55 1. トヲノ尾遺跡1980年夏予備調査発掘後風景（北から）
2. トヲノ尾遺跡1980年夏予備調査発掘後風景（東から）
- 図版 56 1. トヲノ尾遺跡発掘区表土剥ぎ風景（東から）
2. トヲノ尾遺跡発掘区表土剥ぎ風景（南から）
- 図版 57 1. トヲノ尾遺跡南斜面作業風景（北から）
2. トヲノ尾遺跡南斜面作業風景（南から）
- 図版 58 1. トヲノ尾遺跡第1頂上部作業風景（東から）
2. トヲノ尾遺跡第1頂上部発掘後風景（西から）
- 図版 59 1. 和田A遺跡発掘調査前全景（東から）
2. 和田A遺跡試掘風景（南から）
- 図版 60 1. 和田A遺跡東側試掘風景（南から）
2. 和田A遺跡発掘区表土剥ぎ風景（東から）
- 図版 61 1. 和田A遺跡発掘調査後風景（東から）
2. 和田A遺跡発掘調査後風景（北から）
- 図版 62 1. 和田A遺跡発掘調査後全景（東から）
2. 和田B遺跡及び福岡平野をみる（東から）
- 図版 63 1. トヲノ尾遺跡気球写真撮影風景
2. トヲノ尾遺跡発掘事務所及び休憩所近景
- 図版 64 1. トヲノ尾遺跡全景（真上から）
2. トヲノ尾遺跡第1頂上部西南側斜面遠景（真上から）
- 図版 65 1. トヲノ尾遺跡第1頂上部南側斜面遠景（西から）
2. トヲノ尾遺跡第1頂上部南側斜面遠景（南から）
- 図版 66 1. トヲノ尾遺跡試掘調査の東西トレンチ（東から）
2. トヲノ尾遺跡試掘調査の南北トレンチの2号溝状遺構出土状態（南から）
- 図版 67 1. トヲノ尾遺跡1号住居跡（南から）
2. トヲノ尾遺跡2号住居跡と1号溝状遺構（西から）
- 図版 68 1. トヲノ尾遺跡2号住居跡と1号溝状遺構（南から）
2. トヲノ尾遺跡2号住居跡北壁部の遺物出土状態（南から）

- 図版 69 1. トヲノ尾遺跡 2 号住居跡の試掘調査時の土層断面 (西から)
2. 同 〃
3. 同 〃
- 図版 70 1. トヲノ尾遺跡 2 号住居跡壁堤と壁堤外溝 (西から)
2. トヲノ尾遺跡 2 号住居跡壁堤の土層断面 (西から)
- 図版 71 1. トヲノ尾遺跡 2 号住居跡と西側緩斜面の状態 (南から)
2. トヲノ尾遺跡 3 号住居跡中央土壇の土層断面 (南から)
- 図版 72 1. トヲノ尾遺跡 3 号住居跡と 2 号溝状遺構 (西から)
2. トヲノ尾遺跡 3 号住居跡と壁外地山整形の状態 (西から)
- 図版 73 1. トヲノ尾遺跡 3 号住居跡の土層断面 (南から)
2. トヲノ尾遺跡 2 号溝状遺構の土層断面 (西から)
- 図版 74 1. トヲノ尾遺跡 3 号住居跡周堤外溝の土器出土状態 (西から)
2. 同 〃
- 図版 75 1. トヲノ尾遺跡 4 号住居跡 (南から)
2. トヲノ尾遺跡 5・6・10 号住居跡と 3 号溝状遺構 (南から)
- 図版 76 1. トヲノ尾遺跡 6・10 号住居跡の土層断面 (西から)
2. トヲノ尾遺跡 10 号住居跡の遺物出土状態 (南から)
- 図版 77 1. トヲノ尾遺跡 10 号住居跡の遺物出土状態 (西から)
2. トヲノ尾遺跡 7 号住居跡と壁外地山整形の状態 (南から)
- 図版 78 1. トヲノ尾遺跡 7 号住居跡の土層断面 (東から)
2. トヲノ尾遺跡 8・9 号住居跡と壁外地山整形の状態 (北から)
- 図版 79 1. トヲノ尾遺跡 8 号住居跡の土層断面 (東から)
2. トヲノ尾遺跡 11 号住居跡 (西から)
- 図版 80 1. トヲノ尾遺跡 12 号住居跡 (西から)
2. 同 の土層断面 (北から)
- 図版 81 1. トヲノ尾遺跡 14 号住居跡 (南から)
2. トヲノ尾遺跡 15 号住居跡 (西から)
- 図版 82 1. トヲノ尾遺跡 5 号住居跡と 3 号溝状遺構
2. トヲノ尾遺跡 13 号住居跡 (西から)
- 図版 83 1. トヲノ尾遺跡第 1 項上部全景 (真上から)
2. トヲノ尾遺跡火葬墓群遠景 (真上から)
- 図版 84 1. トヲノ尾遺跡火葬墓群全景 (南から)
2. トヲノ尾遺跡火葬墓群全景 (西から)

- 図版 85 1. トヲノ尾遺跡1号火葬墓
2. トヲノ尾遺跡2号火葬墓
- 図版 86 1. トヲノ尾遺跡3—A号火葬墓
2. トヲノ尾遺跡3—B号火葬墓
- 図版 87 1. トヲノ尾遺跡4号火葬墓
2. トヲノ尾遺跡5号火葬墓
- 図版 88 1. トヲノ尾遺跡6号火葬墓
2. トヲノ尾遺跡7号火葬墓
- 図版 89 1. トヲノ尾遺跡8号火葬墓
2. トヲノ尾遺跡10号火葬墓
- 図版 90 トヲノ尾遺跡7号(新・古)住居跡出土土器
- 図版 91 トヲノ尾遺跡各住居跡及びその他出土土器
- 図版 92 トヲノ尾遺跡各住居跡出土石製品類

挿 図 目 次

第 1 図	福岡東バイパス路線図 (1/200,000)	2
第 2 図	推定粕屋郡家付近の字図	8
第 3 図	福岡東バイパス路線内各遺跡とその周辺の遺跡 (1/25,000)	9
高田遺跡		
第 4 図	高田遺跡発掘状況	11
第 5 図	高田遺跡地形測量図 (1/2,000)	12
第 6 図	高田遺跡遺構配置図 (1/1,500)	12~13
第 7 図	1号住居跡実測図 (1/60)	14
第 8 図	2号住居跡実測図 (1/60)	15
第 9 図	2号住居跡カマド実測図 (1/30)	15
第 10 図	2号住居跡出土遺物実測図①(1/3)	15
第 11 図	2号住居跡出土遺物 (石器) 実測図 (1/2)	16
第 12 図	3号住居跡実測図 (1/60)	16
第 13 図	3号住居跡カマド実測図 (1/30)	17
第 14 図	3号住居跡遺物出土状態実測図 (1/80)	17
第 15 図	3号住居跡出土遺物実測図①(1/4)	18
第 16 図	3号住居跡出土遺物実測図②(1/4)	19
第 17 図	3号住居跡出土遺物 (石器) 実測図 (1/2)	20
第 18 図	4・5・6・7・19・20・21号住居跡実測図 (1/60)	20~21
第 19 図	4号住居跡出土遺物実測図① (1/3, 1/6)	21
第 20 図	4号住居跡出土遺物 (石器) 実測図 (1/2)	22
第 21 図	5号住居跡出土遺物実測図 (1/3)	23
第 22 図	7~19号住居跡出土遺物実測図① (1/3)	25
第 23 図	7~19号住居跡出土遺物実測図② (1/3)	26
第 24 図	8号住居跡実測図 (1/60)	28
第 25 図	9・10号住居跡実測図 (1/60)	29
第 26 図	9号住居跡出土遺物実測図 (1/3)	30
第 27 図	10号住居跡出土遺物実測図 (1/3)	30

第 28 図	11号住居跡実測図 (1/60)	31
第 29 図	11号住居跡出土遺物実測図 (1/3).....	31
第 30 図	12号住居跡実測図 (1/60)	32
第 31 図	12号住居跡出土遺物実測図 (1/3).....	32
第 32 図	11・12号住居跡カマド実測図 (1/30)	33
第 33 図	13・14号住居跡実測図 (1/60)	34
第 34 図	15・16号住居跡実測図 (1/60)	35
第 35 図	15・18号住居跡出土遺物実測図 (1/3).....	36
第 36 図	17号住居跡実測図 (1/60)	36
第 37 図	18号住居跡実測図 (1/60)	37
第 38 図	22号住居跡実測図 (1/60)	38
第 39 図	22号住居跡カマド実測図 (1/30)	38
第 40 図	22・23号住居跡出土遺物実測図 (1/3).....	38
第 41 図	23号住居跡実測図 (1/60)	38
第 42 図	1号掘立柱建物実測図 (1/60)	40
第 43 図	2号掘立柱建物実測図 (1/60)	41
第 44 図	3号掘立柱建物実測図 (1/60)	41
第 45 図	4・5号掘立柱建物実測図 (1/60)	42~43
第 46 図	6・7号掘立柱建物実測図 (1/60)	42~43
第 47 図	8号掘立柱建物実測図 (1/60)	42~43
第 48 図	9号掘立柱建物実測図 (1/60)	43
第 49 図	10号掘立柱建物実測図 (1/60)	43
第 50 図	11号掘立柱建物実測図 (1/60)	44
第 51 図	12号掘立柱建物実測図 (1/60)	44
第 52 図	13号掘立柱建物実測図 (1/60)	46
第 53 図	14号掘立柱建物実測図 (1/60)	46
第 54 図	15号掘立柱建物実測図 (1/60)	47
第 55 図	22号掘立柱建物実測図 (1/60)	47
第 56 図	1・3・4号土壇実測図 (1/60).....	48
第 57 図	2号土壇実測図 (1/60)	49
第 58 図	2号土壇出土遺物実測図 (1/3).....	49
第 59 図	ピット36出土遺物	50
第 60 図	ピット1・2実測図 (1/60)	51

第 61 図	ピット 2 出土遺物実測図① (1/3).....	52
第 62 図	ピット 2 出土遺物 (石器) 実測図② (1/2).....	53
第 63 図	ピット 3 実測図 (1/60)	53
第 64 図	縄文甕棺実測図 (1/20)	54
第 65 図	縄文甕棺出土遺物実測図 (1/3)	55
第 66 図	その他柱穴より出土した遺物実測図 (1/3)	56
第 67 図	その他柱穴より出土した遺物 (石器) ①実測図② (1/1)	56
第 68 図	1 号溝出土遺物実測図.....	57
第 69 図	1～5 号溝実測図 (1/3).....	58
第 70 図	2 号溝出土遺物実測図① (1/4).....	59
第 71 図	2 号溝断面図 (1/40)	60
第 72 図	2 号溝出土遺物実測図② (1/4).....	61
第 73 図	2 号溝出土遺物実測図③ (1/4).....	62
第 74 図	2 号溝出土遺物実測図④ (1/2).....	63
第 75 図	2 号溝出土遺物実測図⑤ (1/3).....	63
第 76 図	3 号溝出土遺物実測図 (1/4).....	64
第 77 図	4 号溝出土遺物実測図 (1/4).....	64
第 78 図	その他表土出土遺物実測図① (1/4)	66
第 79 図	その他表土出土遺物実測図② (1/1)	66
第 80 図	高田遺跡遺構展開図	78

塚元遺跡

第 81 図	周辺地形図 (1/2,000)	80
第 82 図	塚元 1 号墳地形測量図 (1/200)	80～81
第 83 図	塚元 1 号墳主体部実測図 (1/60).....	81
第 84 図	塚元 1 号墳焼土坑実測図 (1/20).....	83
第 85 図	井戸実測図 (1/60).....	83
第 86 図	塚元 1 号墳周溝土層図 (1/60).....	84
第 87 図	塚元 1 号墳周溝礫群実測図 (1/80).....	84
第 88 図	塚元 1 号墳周溝石組実測図 (1/80).....	85
第 89 図	塚元 1 号墳出土ガラス玉実測図 (1/1)	86
第 90 図	塚元 1 号墳出土鉄器実測図 (1/3)	87
第 91 図	塚元 1 号墳周溝出土遺物実測図 1 (1/6)	89

第 92 図	塚元 1 号墳周溝出土遺物実測図 2 (1/3)	90
第 93 図	塚元 1 号墳周溝出土遺物実測図 3 (1/3)	91
第 94 図	井戸 (西から).....	92
第 95 図	Ⅱ区遺構配置図 (1/200)	92~93
第 96 図	塚元 2 号墳主体部実測図 (1/60).....	94
第 97 図	1 号住居跡実測図 (1/60).....	95
第 98 図	2 号住居跡実測図 (1/60).....	95
第 99 図	3 号住居跡実測図 (1/60).....	96
第 100 図	4 号住居跡実測図 (1/60).....	96
第 101 図	住居跡出土遺物実測図 1 (1/3)	98
第 102 図	住居跡出土遺物実測図 2 (1/3)	99
第 103 図	1 号土塚墓実測図 (1/30).....	100
第 104 図	2 号土塚墓実測図 (1/30).....	101
第 105 図	2 号土塚墓出土遺物実測図 (1/3)	101
第 106 図	1 号溝土層図 (1/60).....	102
第 107 図	1 号溝出土遺物実測図 1 (1/3)	103
第 108 図	1 号溝出土遺物実測図 2 (1/3)	104
第 109 図	1 号溝出土遺物実測図 3 (1/3)	105
第 110 図	1 号溝出土遺物実測図 4 (1/3)	106
第 111 図	1 号溝出土遺物実測図 5 (1/3)	108
第 112 図	1 号溝出土遺物実測図 6 (1/3)	109
第 113 図	1 号溝出土遺物実測図 7 (1/3)	110
第 114 図	2 号溝出土遺物実測図 (1/3)	111
第 115 図	神社関係遺構実測図 (1/30).....	112~113
第 116 図	柱穴出土遺物実測図 (1/3)	114
第 117 図	包含層その他の出土遺物実測図 (1/3)	115

トヲノ尾遺跡

第 118 図	トヲノ尾遺跡・和田遺跡調査区地形図 (1/2,000)	122
第 119 図	住居跡模式図と柱穴間距離計測例図 (1/2)	124
第 120 図	1 号住居跡実測図 (1/60).....	126~127
第 121 図	4 号住居跡実測図 (1/60).....	134~135
第 122 図	8・9 号住居跡実測図 (1/60).....	138~139

第123図	1～4号住居跡出土土器実測図(1/4).....	145
第124図	7号住居跡出土土器実測図(1/4).....	146
第125図	6・8号住居跡出土土器実測図(1/4).....	148
第126図	9・13・14号等住居跡等出土土器実測図(1/4).....	149
第127図	火葬墓群配置図(1/100).....	152
第128図	1号火葬墓実測図(1/20).....	153
第129図	2号火葬墓実測図(1/20).....	153
第130図	3-A号火葬墓実測図(1/20).....	154
第131図	3-B号火葬墓実測図(1/20).....	154
第132図	4号火葬墓実測図(1/20).....	155
第133図	5号火葬墓実測図(1/20).....	155
第134図	6号火葬墓実測図(1/20).....	156
第135図	7号火葬墓実測図(1/20).....	157
第136図	8号火葬墓実測図(1/20).....	158
第137図	9号火葬墓実測図(1/20).....	159
第138図	10号火葬墓実測図(1/20).....	160
第139図	1号火葬関連施設実測図(1/20).....	161
第140図	7・8号火葬墓出土土器実測図(1/2).....	163
第141図	5号火葬墓銭貨拓影図(1/1).....	163
第142図	1号円形住居跡模式図(1/30).....	164
第143図	4号方形住居跡模式図(1/30).....	165
第144図	明治時代の篠栗とトラノ尾遺跡火葬墓群位置(1/40,000).....	170

表 目 次

表 1	福岡東バイパス関係発掘調査遺跡一覧表	6
-----	--------------------	---

高田遺跡

表 2	竪穴住居跡一覧表	13
表 3	主要土壇・ピット一覧表	48
表 4	溝状遺構一覧表	57
表 5	出土遺物観察表	67

トラノ尾遺跡

表 6	住居跡模式計測表	124
表 7	1号住居跡計測表	125
表 8	1号住居跡算出表	125
表 9	2号住居跡計測表	126
表 10	2号住居跡算出表	126
表 11	3号住居跡計測表	130
表 12	3号住居跡算出表	130
表 13	4号住居跡計測表	133
表 14	4号住居跡算出表	133
表 15	5号住居跡計測表	133
表 16	5号住居跡算出表	133
表 17	6号A(新)住居跡計測表	134
表 18	6号A(新)住居跡算出表	134
表 19	6号B(古)住居跡計測表	135
表 20	6号B(古)住居跡算出表	135
表 21	7号A(新)住居跡計測表	136
表 22	7号A(新)住居跡算出表	136
表 23	8号A(新)住居跡計測表	137
表 24	8号A(新)住居跡算出表	137
表 25	8号B(中)住居跡計測表	138

表 26	8号B(中)住居跡算出表	138
表 27	8号C(古)住居跡計測表	138
表 28	8号C(古)住居跡算出表	138
表 29	10号A(新)住居跡計測表	139
表 30	10号A(新)住居跡算出表	139
表 31	11号住居跡計測表	141
表 32	11号住居跡算出表	141
表 33	12号住居跡計測表	141
表 34	12号住居跡算出表	141
表 35	13号A(新)住居跡計測表	142
表 36	13号A(新)住居跡算出表	142
表 37	13号B(古)住居跡計測表	143
表 38	13号B(古)住居跡算出表	143
表 39	火葬墓出土銭貨一覧表	163

付 図 目 次

付図1	福岡東バイパス路線内調査全体図(1/200,000)	2
付図2	高田遺跡遺構実測図(1/200)	13
付図3	トラノ尾遺跡遺構配置図(1/200)	121
付図4	和田A遺跡遺構配置図(1/200)	121
付図5	トラノ尾遺跡2号住居跡実測図(1/60)	126
付図6	トラノ尾遺跡3号住居跡実測図(1/60)	130
付図7	トラノ尾遺跡5~7・10号住居跡実測図(1/60)	133~136・139
付図8	トラノ尾遺跡11~13・15号住居跡実測図(1/60)	141~143

第 1 章

は じ め に

目 次

第1節 調査の組織と経過

第2節 位置と環境

第1章 はじめに

第1節 調査の組織と調査の経過

1. 調査に至る経過

道をとおして人々は、常に人と人、集団と集団との交流をはかり、生活・産業・文化の発達をなしてきてきた。

一般国道201号線は、福岡市を起点として筑豊地方の飯塚市・田川市を経て周防灘に面する行橋市に至り、北九州市を起点として南九州に至る一般国道10号線に接続する。いわば福岡県の北部を横断する重要な幹線道路である。

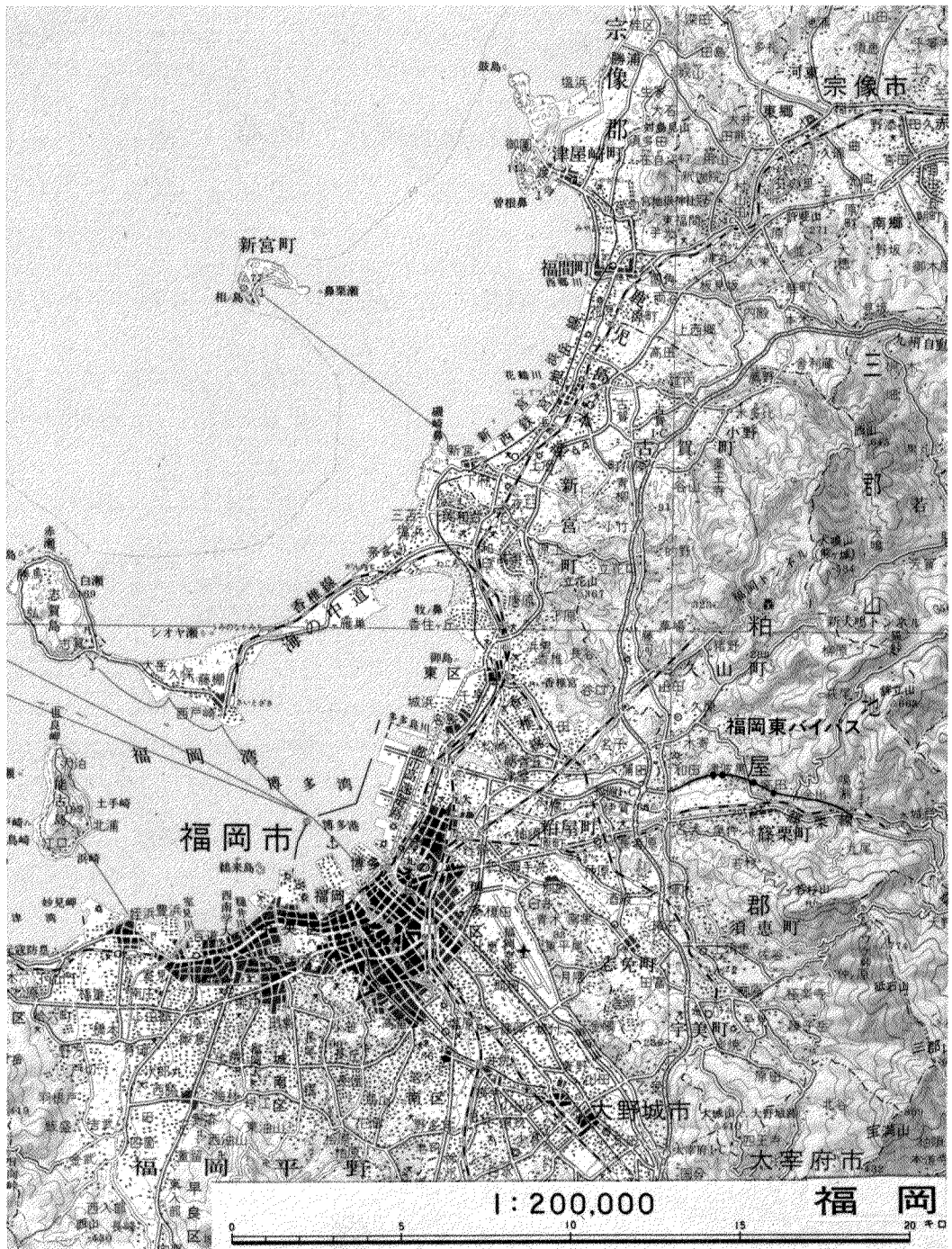
近年の車社会の発展は、いうまでもなく交通の混雑をまねき、その対策として交通網の整備を図る必要が生じた。高速道路や一般国道バイパス建設などはその対策の一つである。

ところで、今回建設する一般国道201号バイパスは、九州縦貫自動車道路福岡インターから東に延び、将来は行橋市にまで延長し、筑豊横断道路とし筑豊ならびに京築地区の産業、経済の高揚を図ろうとするものである。難所の一つである八木山峠を越えなければならず、冬季には積雪や凍結により、しばしば交通が規制されるなどの欠点があり、その改良が望まれていた。

建設省では、福岡県や地元の要望にそって、201号バイパスの建設を計画、同バイパスのうち粕屋郡篠栗町と嘉穂郡穂波町間を有料化し、当区間を八木山バイパスとして、県道路公社に建設させ、これにつづいて、建設省は一般国道201号福岡東バイパスの建設を打ち出した。

昭和47年、福岡県教育委員会（以後県教委）は、建設省福岡国道事務所から、7路線の一般国道バイパス計画に伴う文化財調査についての依頼があり、各路線ごとに回答がなされた。この中に一般国道201号（粕屋郡粕屋町大隈～田川市見立迄間）があった。前述の八木山バイパスが1期、福岡東バイパスが2期工事として位置づけられた。

建設省の依頼によって、昭和52年同バイパス周辺の文化財等の分布調査を実施し、これをもとにルートを選定協議を県教委を通じ、文化庁に通知した。文化庁では、おおむねルートについて了承し、ルート内に遺存するものと考えられる6ヶ所については、十分な事前調査を実施する旨に回答がなされた。これを受けて、用地の買収が開始された。昭和59年には八木山バイパスが開通したことにより、遅れていた用地買収が進展し、昭和60年度から用地の終了した部分より、予備調査をふくむ発掘調査が実施されることになった。発掘調査は昭和60年度と昭和63年度を充てた。



第1図 福岡東バイパス路線図 (1/200,000)

2. 調査の経過

1) 第1次調査(昭和60年度)

第1次調査は、第3地点(津波黒遺跡)、第4地点(トヲノ尾遺跡)、第5地店(和田A遺跡)、第6地点(和田B遺跡)で実施された。第1次調査は予備調査と本調査の2回に分けられる。

予備調査は、本調査に先立つもので、津波黒遺跡、トヲノ尾遺跡、和田A遺跡、和田B遺跡について昭和60年8月19日から9月14日まで実施された。

津波黒遺跡の調査は、昭和60年9月9日から9月14日まで実施された。調査面積は約700㎡(調査対象面積3,000㎡)で現状は山林と田畑であった。遺物の散布があったため、4箇所にとレンチを入れたが、表土はすぐに地山層となり遺構の検出はなかった。

トヲノ尾遺跡の調査は、8月19日から9月7日まで試掘調査及び部分調査(約360㎡)が実施され、住居跡2、溝3、土壇、ピット等が検出された。

和田A遺跡の調査は、9月9日から9月14日まで実施された。調査面積は約450㎡(調査対象面積3,000㎡)で、現状は田畑であった。この遺跡は、大正から昭和初期の土地改良で殆ど削平を受け、遺構の検出は困難で、土壇、ピットを検出するに留まった。

また、遺跡東西に計10箇所のトレンチを入れたが、遺構の検出はなかった。

和田B遺跡の調査は、9月9日から9月14日まで実施された。調査面積は約300㎡(調査対象面積4,000㎡)で、現状は田畑であった。遺物の散布があったため、4箇所にとレンチを入れたが、床土下はすぐに地山層となり、遺構の検出はなかった。

本調査は、トヲノ尾遺跡について、昭和60年12月2日から昭和61年3月19日まで実施され、予備調査で確認された住居跡等のほか、新たに住居跡15、火葬墓10、火葬施設1、土器溜り、溝、土壇、ピット等を検出した。住居跡は、南、西斜面に現在の分譲住宅のような形態で、上から下へ階段状に築造されていた。中でも、2号住居跡は、弥生時代中期のもの(今から1,900年前)で、九州初例の周堤を有していた。

以上のように、第1次調査は、昭和60年夏から昭和61年春にかけて、予備調査と本調査と2回に分けて実施された。無事に終了することが出来た。

発掘調査にあたっては、建設省ならびに地元の方々に多大な協力をいただいた。また、篠栗町文化財保護指導委員の安河内乙先生(前福岡県文化財保護指導委員)には、格別の御配慮をいただいた。ここに記して感謝の意を表するものである。

昭和60年度の組織と調査関係者は下記のとおりである。

建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所

所 長	澤 山 民 幸
副 所 長(事務)	末 松 敬

副 所 長 (技術)	猪 須 哲 夫	
工務課課長	小 林 允	
◇ 第一係長	米 原 利 幸	
◇ 第二係長	古 閑 一 征	
◇ 第三係長	松 下 敏 男	
調査課課長	松 嶋 憲 昭	
◇ 調査係長	後 藤 昌 隆	
建設専門官 (技術)	中 山 東	
建設監督官	九 谷 秀 明 (前任)	井 上 喬
◇	下 川 勲	
◇	永 田 恭 一	
◇	淵 幸 一	
◇	川 上 義 幸 (前任)	尾 中 正 臣

福岡県教育委員会

総 括	教 育 長	友 野 隆
	教 育 次 長	安 部 徹
	管 理 部 長	大 鶴 英 雄
	文 化 課 課 長	前 田 栄 一
	◇ 課長補佐	平 聖 峰
	◇ 課長技術補佐	宮小路 賀 宏
	◇ 参事補佐	栗 原 和 彦
庶 務	文 化 課 庶 務 係 長	平 聖 峰 (兼務)
	◇ 主任主事	川 村 喜 一 郎
調 査	文 化 課 調 査 第 二 係 長	宮小路 賀 宏 (兼務)
	◇ 技術主査	柳 田 康 雄
	◇ 主任技師	馬 田 弘 稔
	◇ 技師	緒 方 泉

2) 第2次調査 (昭和63年度)

第2次調査は第1次調査の後を受けて、3年間の間隔をあけて、昭和63年4月上旬より調査を開始した。その前年度には試掘調査を行って、調査面積をほぼ決定していた。これに基づいて全面調査を行うこととなったわけで、二箇所の遺跡に6ヶ月の予定で実施することになった。

当該遺跡は東バイパス第1地点と第2地点で、粕屋郡篠栗町大字高田に所在する高田遺跡(約

11,500㎡)と塚元遺跡(約7,000㎡)である。

調査期間は2ヶ所で、4月中旬から10月上旬まで6ヶ月間を充てることになった。

調査は、高田遺跡を4月14日から7月31日まで、塚元遺跡は8月1日から10月8日までであった。ほぼ計画どおりの期間で終了した。(副島)

昭和63年度の組織と調査関係者は下記のとおりである。

建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所

所 長	朝 倉 肇	
副 所 長 (事務)	林 幸 紀	
副 所 長 (技術)	境 鉄 雄	
工務課課長	谷 本 誠 一	
〃 第一係長	河 野 良 行	
〃 第二係長	石 橋 彦 実 (前任)	井出上 美津男
〃 第三係長	緒 方 郁 夫	
調査課課長	岩 屋 信一郎	
〃 調査係長	後 藤 昌 隆	
建設専門官 (技術)	内 田 昇	
建設専門官 (事務)	香 月 敏 明	
建設監督官	安 部 純 弘	
〃	入 部 秀 信	
〃	佐土原 修	
〃	石 原 俊 郎	
〃	西 原 広 寿	

福岡県教育委員会

総 括	教 育 長	竹 井 宏
	教 育 次 長	大 鶴 英 雄
	指 導 第 二 部 部 長	大 平 岩 男
	文 化 課 課 長	葉 石 勲
	〃 課 長 補 佐	平 聖 峰
	〃 課 長 技 術 補 佐	宮小路 賀 宏
	〃 参 事 補 佐	柳 田 康 雄
庶 務	文 化 課 庶 務 係 長	池 原 脩 二
調 査	文 化 課 参 事 補 佐	柳 田 康 雄
	〃 技 術 主 査	副 島 邦 弘

- ♪ 主任技師 飛野博文
- ♪ 主任技師 緒方泉
- ♪ 技師 水ノ江和同

表1 福岡東バイパス発掘調査遺跡一覧表

地点	遺跡名	所在地	遺跡の概要	調査期間	調査面積
1	高田遺跡	篠栗町大字高田	集落跡	昭和63年4月14日から7月31日	11,500㎡
2	塚元遺跡	篠栗町大字高田	古墳及び集落跡	昭和63年8月1日から10月8日	7,000㎡
3	津波黒遺跡	篠栗町大字津波黒	散布地	昭和60年9月9日から9月14日	700㎡
4	トラノ尾遺跡	篠栗町大字津波黒	墓地及び集落跡	昭和60年8月19日から9月7日	6,400㎡
				昭和60年12月2日から 昭和61年3月9日	
5	和田A遺跡	篠栗町大字和田	散布地	昭和60年9月9日から9月14日	450㎡
6	和田B遺跡	篠栗町大字和田	散布地	♪	300㎡

なお、平成元年度の整理報告に当たっての組織と関係者は、下記のとおりである。

建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所

- 所長 中垣光弘
- 副所長(事務) 津原博司
- 副所長(技術) 岩田秀人
- 工務課課長 肥後橋讓治
- ♪ 第一係長 笹山勝之
- ♪ 第二係長 井出上美津男
- ♪ 第三係長 緒方郁夫
- 調査課課長 岩屋信一郎
- ♪ 調査係長 後藤昌隆
- 建設専門官(技術) 中島貞市
- 建設専門官(事務) 小森忠由
- 建設監督官 入江邦昭
- ♪ 松尾藤親
- ♪ 西原広寿(前任) 梅田正信
- ♪ 石原俊郎
- ♪ 山田茂利

福岡県教育委員会

総括	教育長	御手洗	康		
	教育次長	大鶴	英雄（前任）	淵上	雄幸
	指導第二部部长	大平	岩男（前任）	月森	清三郎
	文化課長	葉石	勲（前任）	六本木	聖久
	◇ 参事	森本	精造		
	◇ 課長補佐	平	聖峰		
	◇ 課長技術補佐	宮小路	賀宏		
	◇ 参事補佐	柳田	康雄		
	◇ 参事補佐	井上	裕弘		
庶務	文化課管理係長	池原	脩二		
整理	文化課参事補佐	柳田	康雄（兼調査班総括）		
	◇ 技術主査	副島	邦弘		
	北九州教育事務所 技術主査	馬田	弘稔		
	◇ 主任技師	飛野	博文		
	◇ 主任技師	緒方	泉		

第2節 遺跡の位置と環境

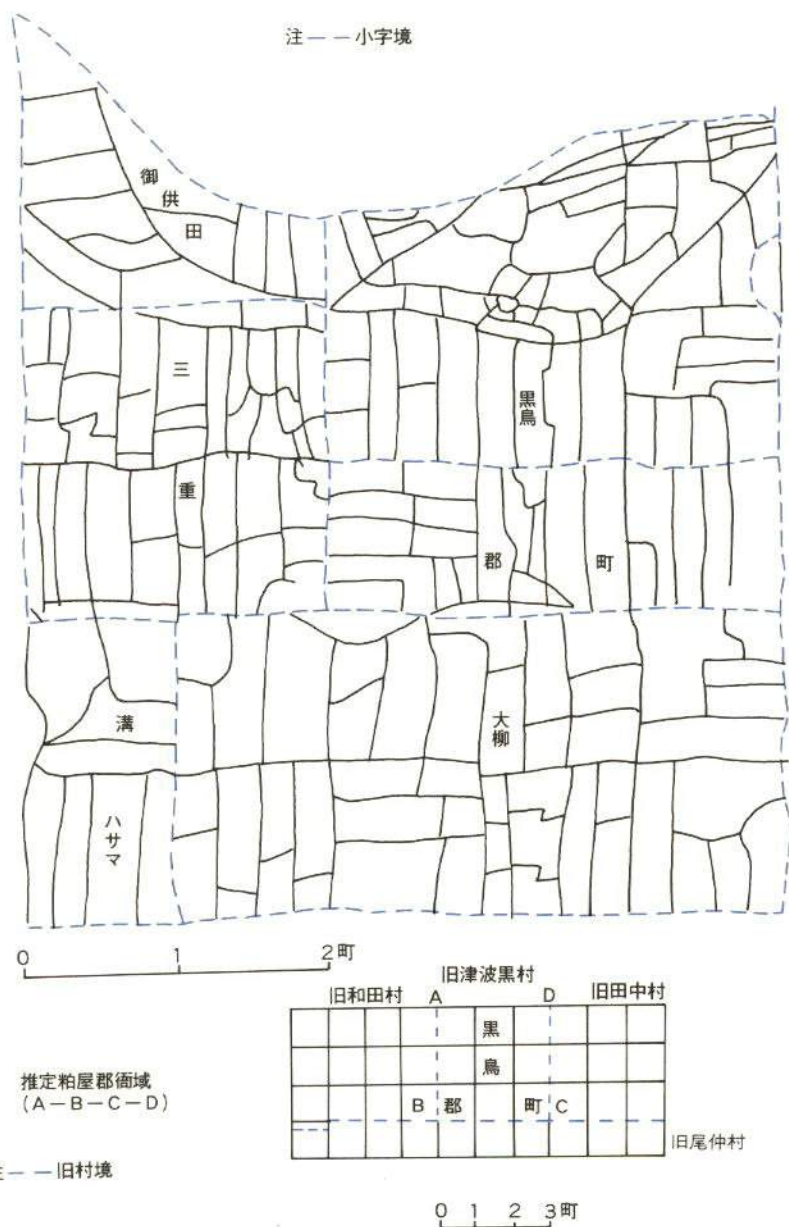
1. 遺跡の位置（第3図）

和田A遺跡は福岡県粕屋郡篠栗町大字和田に、トラノ尾遺跡は大字津波黒に、塚元遺跡、高田遺跡は大字高田に所在する。

篠栗町は、福岡市東部に位置する人口2.2万人の町で、その中央を国道201号線とJR篠栗線が並走している。近年、福岡広域都市圏に入り、住宅開発が急激に進み、人口は急増している。福岡東バイパス開通に伴い、その勢いはさらに拍車を駆けられるだろう。

東の三郡山地は南北に屏風状に伸び、福岡地方と筑豊地方を分ける。篠栗町は、東の三郡山地に並ぶ三頭山（標高553m）、畝原山（標高658m）、若杉山（標高681m）を結ぶ山脈から西に派生した丘陵の北側の粕屋町大隈の丸山（標高86m）と南側の篠栗町乙栗町乙犬の乙犬山（標高185m）で南北を挟まれ、西側に開口する福岡平野東端の扇の要の位置にある。

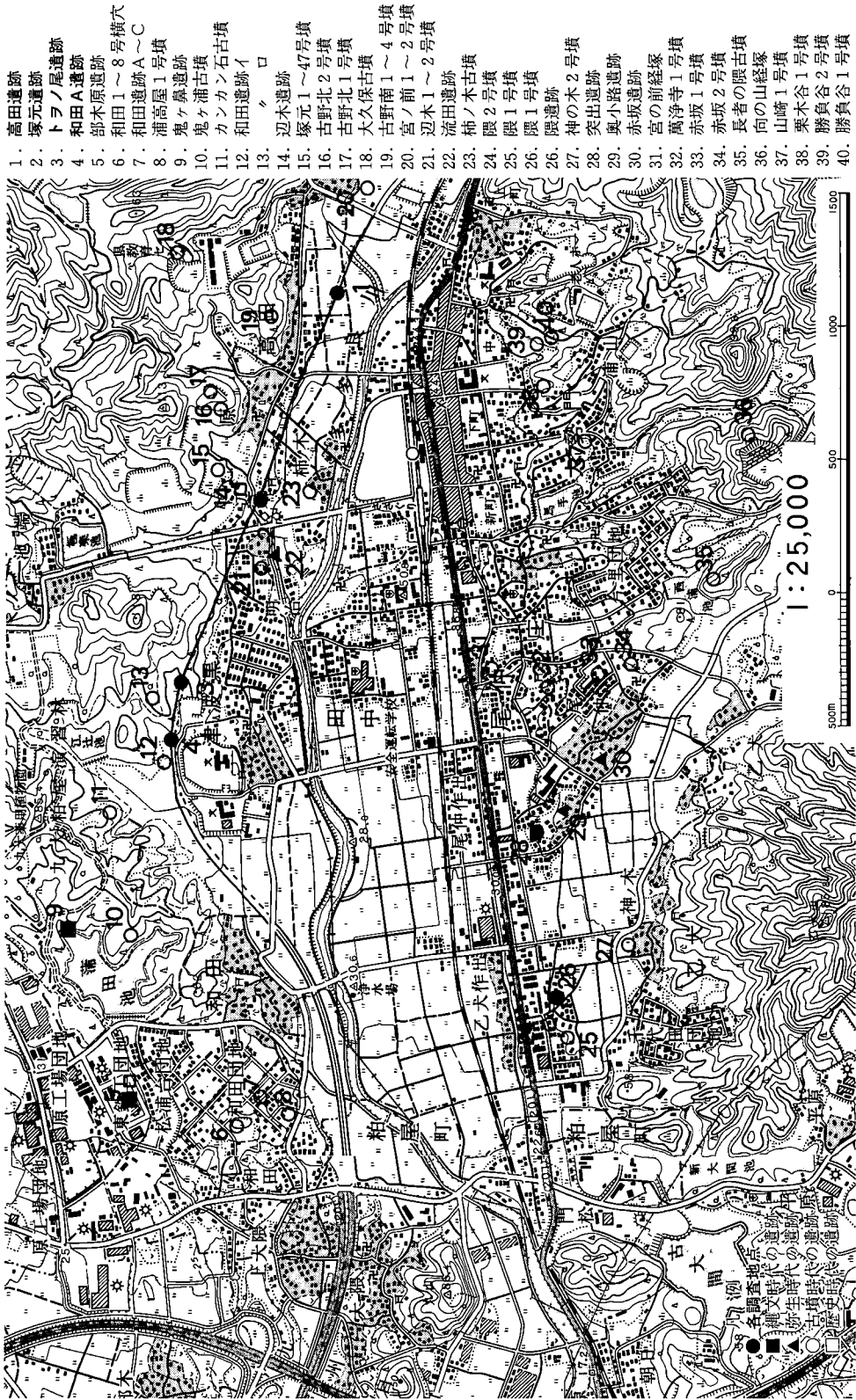
町中央には、三郡山地に源を発する多多良川が貫流し、そこに広がる沖積地や微高地上には



第2図 推定粕屋郡家付近の字図

数多くの遺跡が所在している。

今回報告した遺跡群の位置する篠栗町北側丘陵の各所には、現在も幾つかのボタ山が見受けられる。これらは、明治初年より開かれた篠栗炭坑、高田炭坑などで、昭和35年まで操業していた。このため、かなりの遺跡がこれらのボタ山の下に埋まっている可能性が高い。



第3図 福岡東バイパス路線内各遺跡とその周辺の遺跡 (1/25,000)

第 2 章

高田遺跡の調査

目 次

- 第1節 はじめに
- 第2節 生活遺構と遺物
 - 1. 概要
 - 2. 住居跡と遺物
 - 3. 掘立柱建物と遺物
 - 4. 土壇、ピット遺構と遺物
 - 5. 溝状遺構と遺物
 - 6. その他遺構と遺物
- 第3節 小 結

第2章 高田遺跡の調査

第1節 はじめに

当該遺跡は福岡県粕屋郡篠栗町大字高田字中坪にあって、南側に多々良川と東側から飯盛川の合流点の河岸段丘状に位置している。

遺跡は水田となっている場所で、南側に若杉山を望み、北東側に飯盛山系の丘陵が迫ってくる地域である。

この調査には、篠栗町・篠栗町教育委員会の協力を受けて、作業に関して、地元高田区の区長及び各位の助力を得た。なお社会科学学習の一環として篠栗小学校の5年生・6年生の見学が実施された。また、高田区公民館で遺跡説明会を開催した。

発掘調査は昭和63年4月13日から同年7月31日までを充てた。発掘調査対称面積は13,000㎡で、その内側道・農道部分を除く11,500㎡について全面調査を実施した。

遺跡の中央部に農道が南北に走っており、これを境として東側をⅠ区とし、西側をⅡ区と調査区を大別した。

検出された遺構は下記の通りである。

- 竪穴住居跡 23軒
- 掘立柱建物 15棟
- 土坡・大ピット 8
- 溝状遺構 近世溝 溝5
- 柱穴群

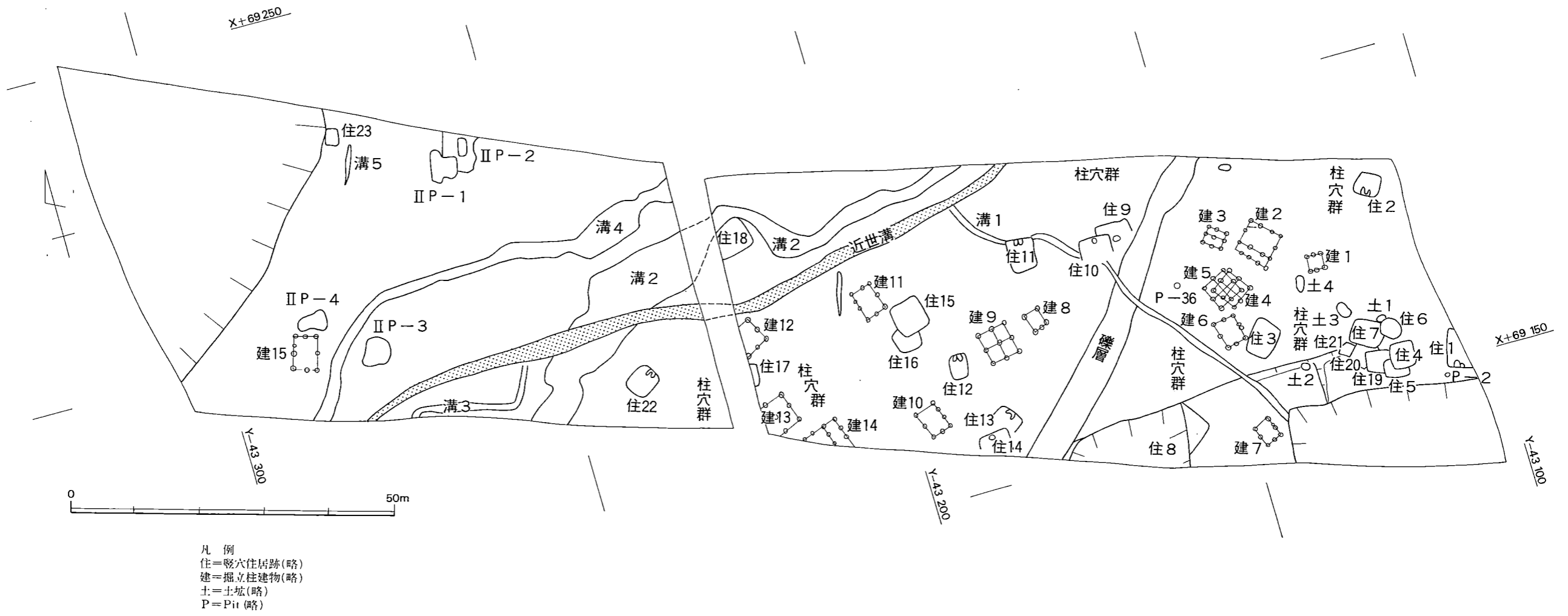
次節より各遺構の説明を行なう。



第4図 高田遺跡発掘状況
(上)発掘前(中)表土剥ぎ(下)発掘中



第5図 高田遺跡地形測量図 (1/2,000)(アミが發掘地域)



第6図 高田遺跡遺構配置図 (1/1,500)

第2節 生活遺構と遺物

1. 概要(第4～6図, 図版1～32, 付図2)

竪穴住居跡群と建物遺構を主体とする。住居の場を検出した。

今回検出遺構は第5図で示す様に、竪穴住居跡23, 掘立柱の建物遺構15, 土坑と大Pit 8が,

時期的には、6世紀後半から8世紀にわたる約200年間ぐらいが中心の年代で、他に旧石器・縄文後・晩期から近世までの遺物が検出されている。

2. 竪穴住居跡と遺物(第7～41図, 図版1～10, 22～26)

I区に21軒とII区に2軒検出されている。I区すなわち東側に集約されて、その北側から西側に溝状遺構が走っている。地形的に見ると飯盛川と小さな川(溝2)に挟まれた部分に立地している集落で、若干の時間差をもっている。

その配置は付図1と第6図を参照にされたい。またこれを要約すると次表の通りである。

表2 高田遺跡竪穴住居跡一覧表

住居跡番号	地区名	規模 (たてm×よこm)(最短)	※面積㎡	主柱穴	伊		備考	遺物	時期	切り合い関係※ (新→古)
					焼土	カマド				
1号 竪穴住居跡	I区	3.65+α×1.05+α	9.6+α㎡	4本柱?		○	半欠		6世紀後半	
2号 竪穴住居跡	I区	4.40(4.18)×4.55(4.40)	21.2㎡	4本柱		○	完	須恵器(杯蓋)・土師器(甕片)flake・玉・耳飾・ 磁石・手捏土器・土師器(高杯・杯・壺・甕・甗)	6世紀後半	
3号 竪穴住居跡	I区	4.10(4.00)×5.40(4.90)	25.5㎡	4本柱		○	完	須恵器(杯・高杯・甕・甗・甗等) 須恵器(甕・杯)・土師器(甕・壺・甗・甗)	6世紀後半	
4号 竪穴住居跡	I区	4.00(3.50)×4.00(3.70)	15.2㎡	2本柱			完	白玉・石鏡・ワイゴの羽1片	6世紀後半	住4→住5
5号 竪穴住居跡	I区	3.20+α×1.30+α(0.70+α)	5.12+α㎡				半欠	須恵器(杯・壺)・土師器(甕・高杯・タコ壺)	6世紀後半	住4→住5
6号 竪穴住居跡	I区	2.50(1.60)×2.80(2.20)	6.1㎡	2本柱			完	須恵器(杯)・土師器(高杯・甕)	6世紀後半	住7→住20→住21
7号 竪穴住居跡	I区	4.00(2.30+α)×4.50(3.00)	16.4㎡				完		6世紀後半	住6→住7→住20
8号 竪穴住居跡	I区	3.60 × 4.10	13.4+α㎡				完			
9号 竪穴住居跡	I区	5.00×2.50+α(1.70+α)	15.55+α㎡	4本柱		○	欠	須恵器(杯・線)・土師器(甕)	6世紀後半	住10→住9
10号 竪穴住居跡	I区	4.40×2.50+α(2.0+α)	12.0+α㎡			○	欠		6世紀後半～末	溝1 住10→住9
11号 竪穴住居跡	I区	5.0(4.5)×4.2(4.6)	21.0㎡	4本柱		○	完	須恵器(杯・高杯)・土師器(甕・手捏土器)・土鏡	6世紀後半～末	住11→溝1
12号 竪穴住居跡	I区	3.0 × 2.40(3.05)	8.375㎡	4本柱		○	完	須恵器(杯・壺)・土師器(甕)	6世紀後半	
13号 竪穴住居跡	I区	4.7 × 1.50+α(1.2+α)	6.95㎡	4本柱		○	欠		6世紀後半	住11→住13?
14号 竪穴住居跡	I区	5.00×3.20+α(0.60+α)	11.15+α㎡	4本柱		○	欠(末)		6世紀後半	住14→住13?
15号 竪穴住居跡	I区	5.00(4.30)×4.10(3.80)	18.1㎡				完	須恵器(杯)	6世紀後半～末	住15→住16
16号 竪穴住居跡	I区	3.60(2.3+α)×2.7(1.7+α)	9.7+α㎡	4本柱			完	土師器(甕)	6世紀後半	住15→住16
17号 竪穴住居跡	I区	3.20 × 0.5+α(0.3+α)	5.03+α㎡				欠(末)		6世紀後半	
18号 竪穴住居跡	I区	2.7+α×3.8+α	11.75+α㎡				欠	須恵器(杯・壺)・土師器(甕)	7世紀前半	溝2→住18
19号 竪穴住居跡	I区	3.0(2.3)×2.0(2.3)	6.8+α㎡	2本柱			半欠		6世紀後半	住5→住19→住20
20号 竪穴住居跡	I区	3.0 × 2.20	6.55+α㎡				半欠	須恵器(甕・高杯・壺・杯) 土師器(甕・壺・甗・甗・甗)	6世紀後半	住7→住20 住19→住20
21号 竪穴住居跡	I区	2.0(1.8)×1.8(1.5)	2.93+α㎡				半欠		6世紀後半	住20→住21 住7→住21
22号 竪穴住居跡	II区	3.45(3.0)×3.8(2.9)	11.266㎡	4本柱		○	完	須恵器(杯)	6世紀後半	
23号 竪穴住居跡	II区	3.50 × 2.0+α	6.0+α㎡				半欠	近世ベニ皿	7世紀後半か	

※グラフィックス7を
使用した。

完=完全
半欠=半
欠=1部欠/略

※住=住居跡(略)
土=土坑(略)

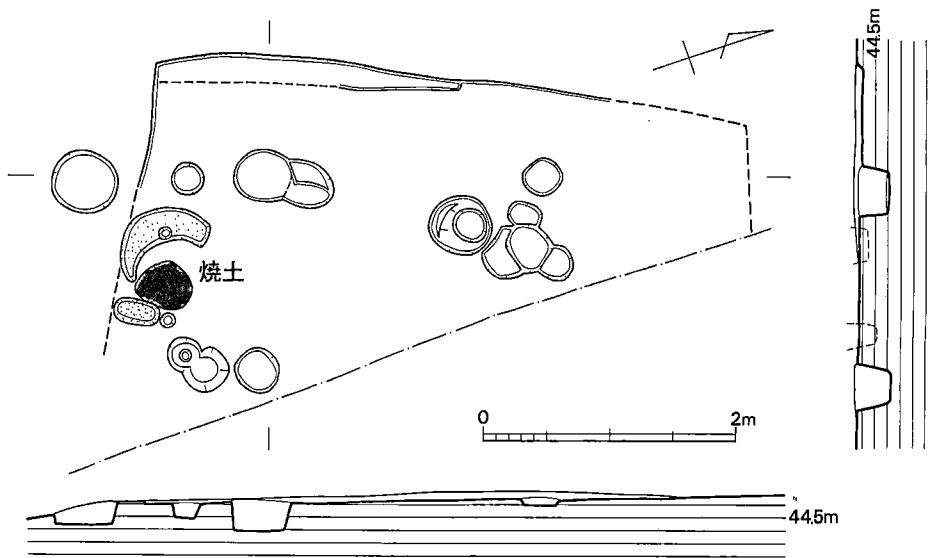
1号竪穴住居跡(第7図, 図版8-1)

I区の南東端部の近くにあつて、遺構の残りが $\frac{1}{3}$ で、他は農道の下にはいつている。南側に竈を有するもので、残りぐあいはよくないが、竈の中央部は赤変し硬化している。住居跡の平面形は方形を呈するもので、西側の一辺を計測すると4.6m前後である。支柱穴は4本柱と考えられる。出土遺物は検出されず。

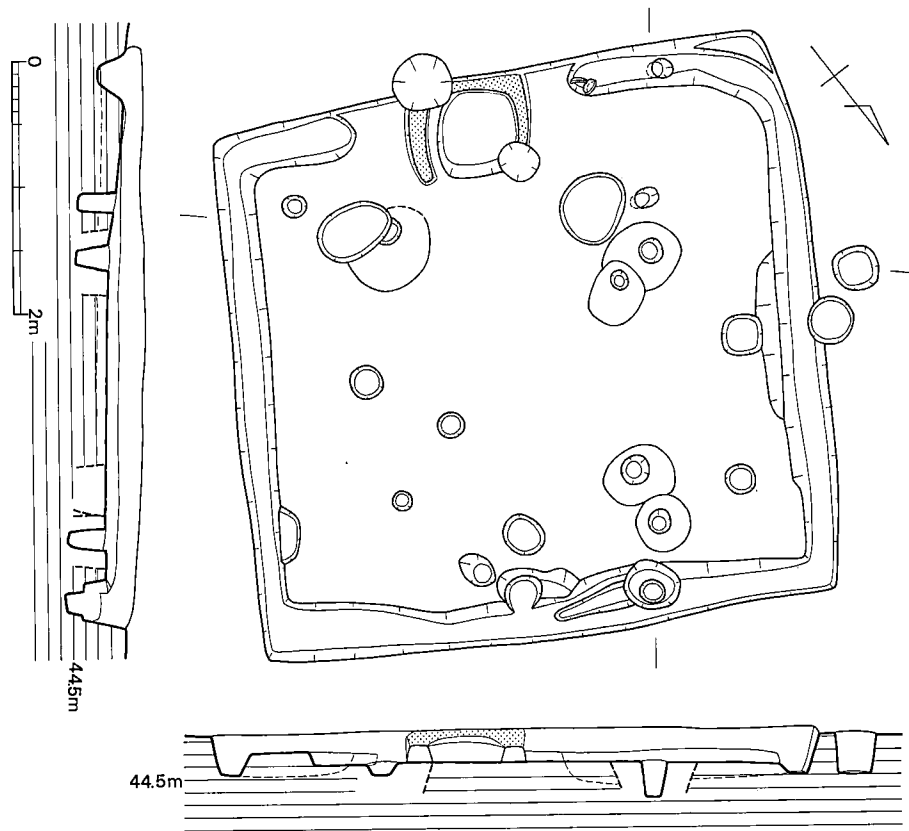
時期は2号住居跡と同時期をあてたい。

2号竪穴住居跡(第8~11図, 図版8-2)

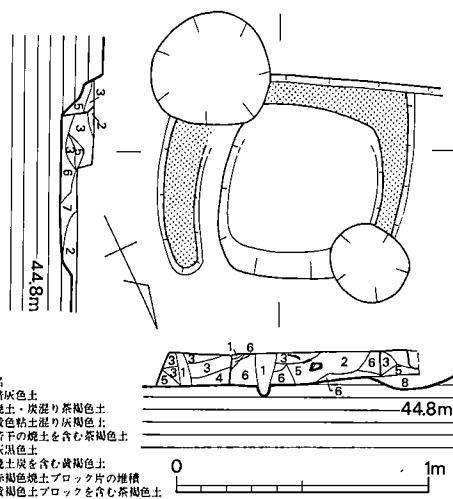
遺跡の東北側に位置し、残り具合は良好な住居跡で、平面形は正方形に近く、東辺の一辺が4.2mと他辺よりも30cm短い。南側の中央部に竈を有している。これを中心として四辺に20~30cmの幅の周溝が壁を巡っている。溝底は床面から20cm前後の深さである。竈の残り具合は良好で、中央部は赤変し硬化している。裾は第9図の様に黄色粘土混りの灰褐色で構築されている。支柱は四本柱で、建て替が行なわれている。遺物の出土状態は竈がある南側辺の西側で半分に割れた須恵器の杯蓋が出土し、その北側に若干の土師器片がみられたが、図示にたえる様なものはみられなかった。



第7図 1号竪穴住居跡遺構配置図 (1/60)

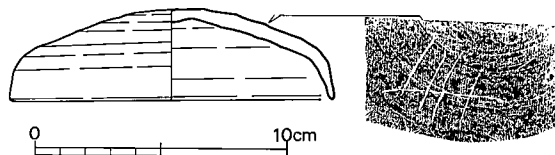


第8図 2号竪穴住居跡遺構実測図 (1/60) (アミ目 カマド)



- 土層名
1. 暗灰色土
 2. 焼土・灰混り茶褐色土
 3. 黄色粘土混り灰褐色土
 4. 若干の焼土を含む茶褐色土
 5. 灰褐色土
 6. 焼土灰を含む黄褐色土
 7. 赤褐色焼土ブロックの堆積
 8. 黄褐色土アロックを含む茶褐色土

第9図 2号竪穴住居跡
カマド遺構実測図 (1/30)



第10図 2号竪穴住居跡出土遺物実測図① (1/3)

出土遺物 (第10・11図, 図版22)

竈の西側の同溝の出土した須恵器が1点, 他は土師器の甕の胴部の小破片である。石器は黒曜石のflake 1点床面より出土。

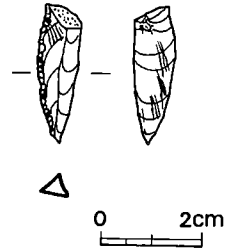
須恵器 (第10図, 図版22-1)

半分に分れて, 周溝底にあるものと同溝の上部にあったものが合体して完形となった。杯蓋で, 口径12.8cm, 器高3.6cmで, 色調は灰色,

胎土に細砂粒含み，調整は天井部は回転ヘラケズリで，他は内面までヨコナデしている。回転方向は天井部中心から時計回りで，螺旋状に内から外へまき上げている。ヘラ記号冊がみられる。調整等からみても興味を引くものである。

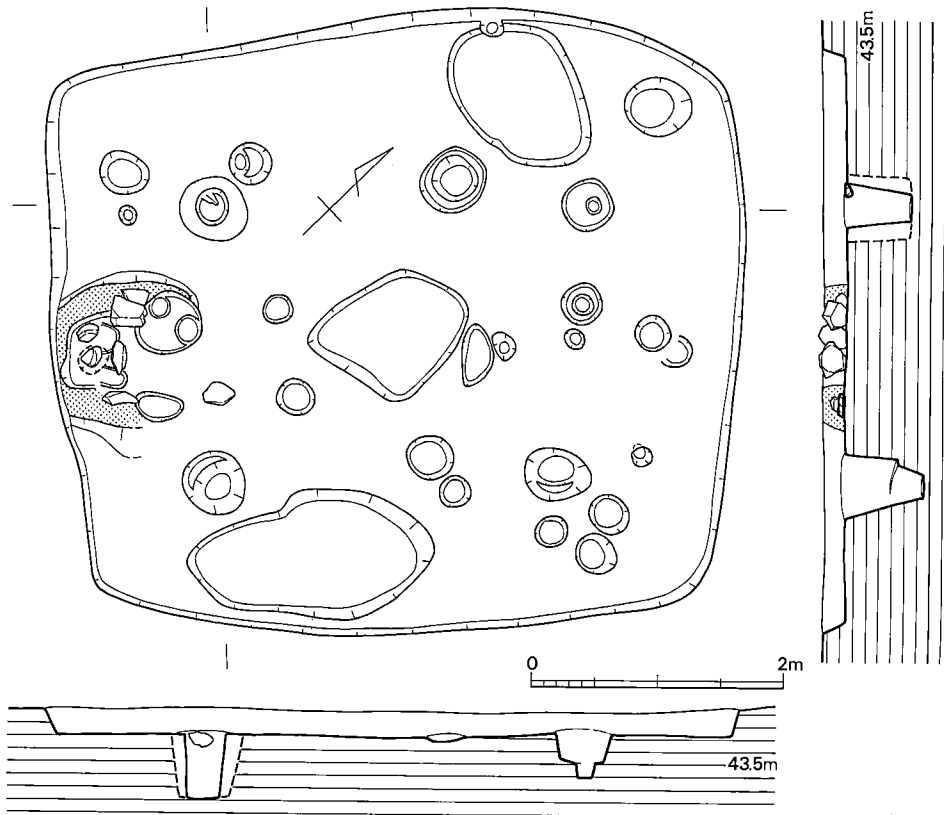
石器 (第11図)

黒曜石製のフレイクで，形はスキー状スポールに類似し，原面を頭に残している。床面中より出土したもので，この住居跡のものとは考えられない。



第11図 2号竖穴住居跡出土遺物(石器)実測図(1/2)

この住居跡の時期は，遺物の須恵器は小田氏編年では4期Aにはいるもので，6世紀後半と考えたい。

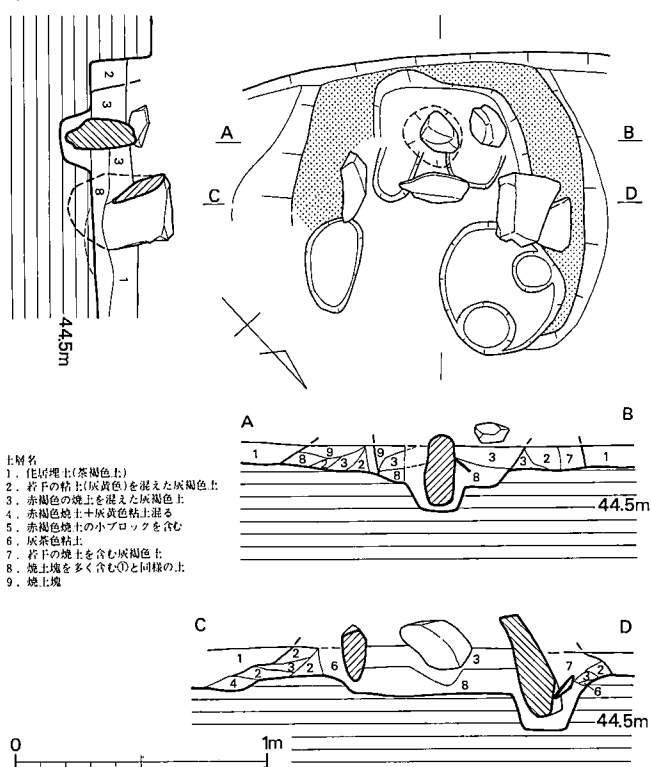


第12図 3号竖穴住居跡遺構実測図(1/60)

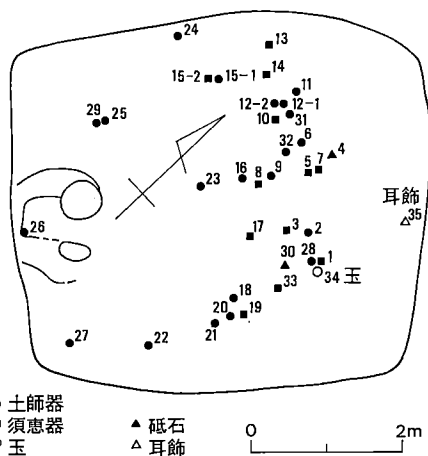
3号竪穴住居跡 (第12~17図, 図版9)

建物遺構の6号掘立柱建物の東隣にあって、残り具合の良好な住居跡である。平面形は長方形に近く、南側に竈をもつもので、東側の一辺は4.90mで、南側の一辺は4.0mを計測する。主柱は4本柱で、断面図の通りである。壁高は20cmで、周溝はみられない。遺物の出土状況は第14図の様に床面真上から検出されている。特に耳飾や玉の装飾具が出土は興味を引く、作業に使用された砥石の出土も北側の壁に近い。竈の袖には石を組んで使用している。西側の袖部の柱穴は、赤変し硬化した部分を切って掘れており、住居跡の廃絶後の柱穴である。中央部には支脚に使用された細長い河原石があって、頂上部は赤変している。第13図の様に西側袖は床面を掘りくぼめて、掘り方を作り河原石の角礫を利用し袖としている。東側についても同様である。竈内面は石をもって配石している。住居跡外にも赤変の部分が見られ、煙出しの一部である。特に竈の袖部分に特長をもつもので、袖石として立石を使用し、その外側に若干の粘土と灰褐色土で固めている。

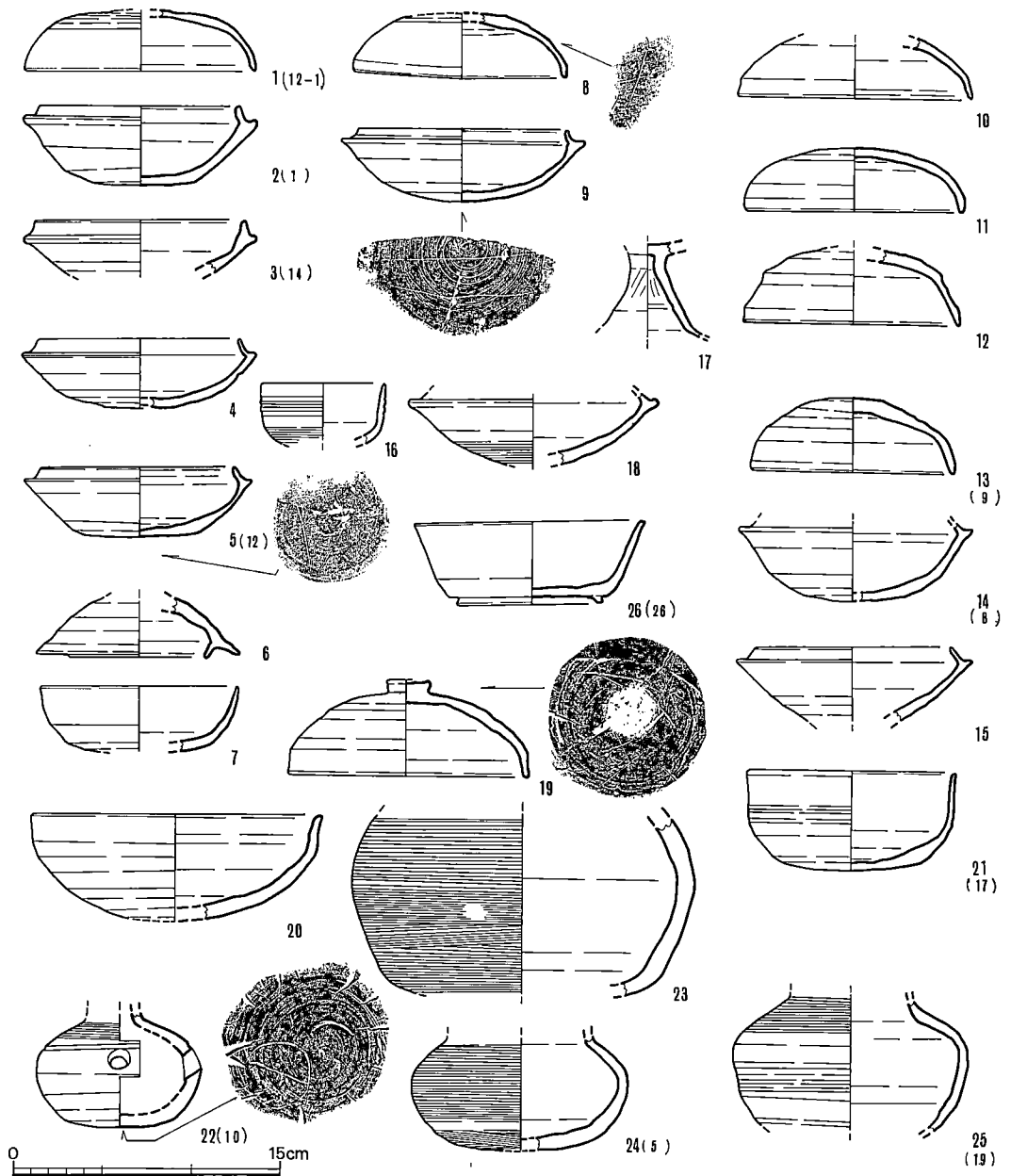
出土遺物の残りは多く、住居跡の中では一番である。



第13図 3号竪穴住居跡カマド遺構実測図 (1/30)



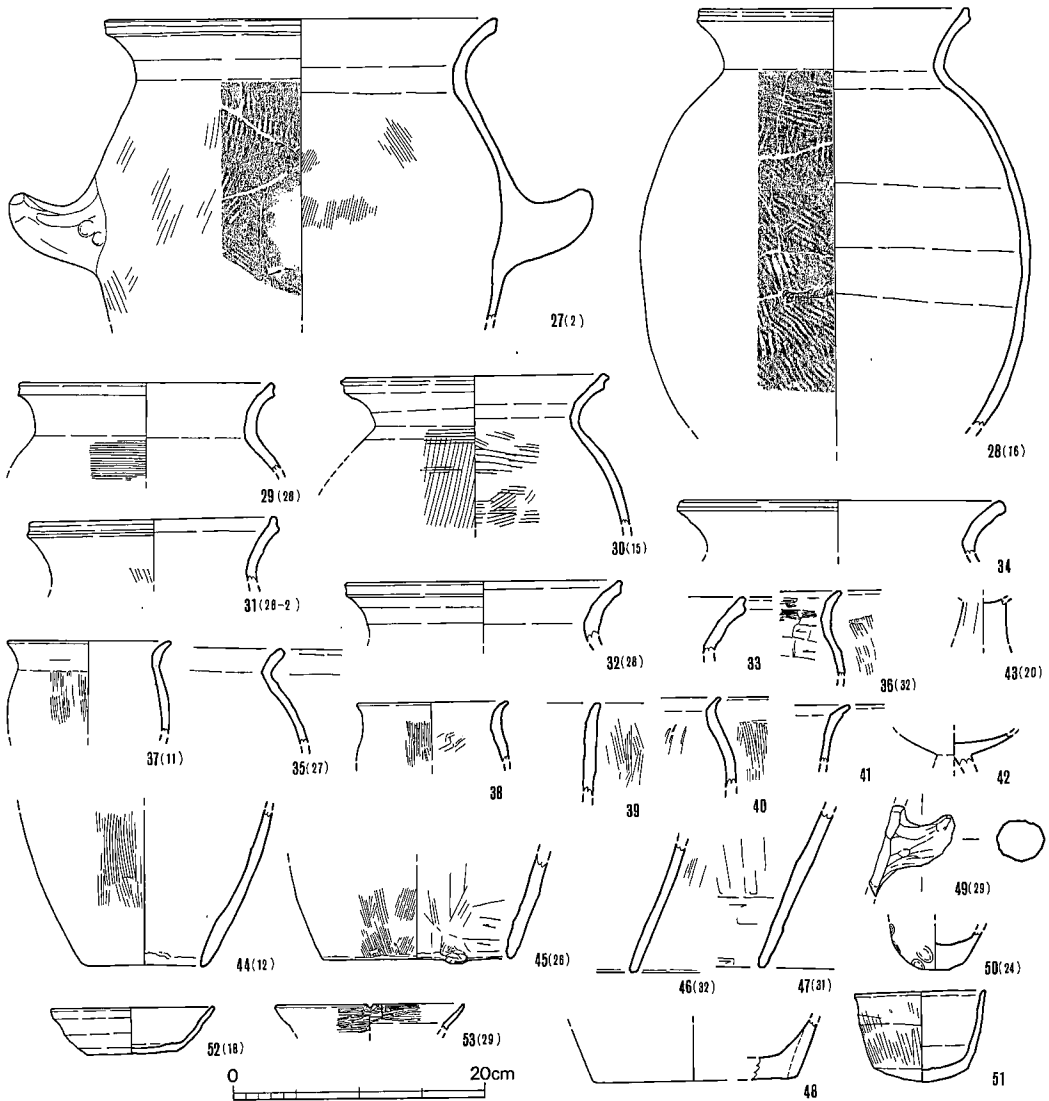
第14図 3号竪穴住居跡遺物出土状態実測図(1/80)



第15図 3号竪穴住居跡出土遺物実測図① (1/4) (()内の番号は遺物取上げ番号 第14図参照)

出土遺物 (第15~17図, 図版22・23)

須恵器と土師器と特殊な遺物(玉・耳飾・砥石)として, 図示した。主に第14図の出土状況のものを中心とおいた。



第16図 3号竪穴住居跡出土遺物実測図② (1/4) (()内の番号は遺物取上げ番号 第14図参照)

須恵器 (第15・16図, 図版22・23)

器種は杯身・杯蓋・高杯と蓋・賦・短頸壺・平瓶高台付杯等見られる。

①～⑮までは杯身・杯蓋類である。口径は11～12cm前後で、身と蓋が逆転するものが⑥である。⑯～⑲は高杯とその蓋である。⑯は小形の高杯で、⑰は脚部。⑱は杯部で体部にカキ目がある。⑲は蓋である。⑳も高杯の蓋ともみえる。

⑳⑳は杯身とした。㉑は賦である。㉒は平瓶。㉓・㉔は短頸壺である。㉕は高台付杯でぐつと新しくなるもので、流れ込みであろう。

土師器 (第16図, 図版23)

器種は甕と甑が大半で, 高杯・杯・手捏土器鉢が見られる。

②⑦~④①は甕類で, 大形甕と小形甕に分けられる。②⑦は把手付の甕である。④⑦の把手も甑に付くか甕に付くかである。口唇部の特長で細分できる。口縁部によっても分類できる。口縁部が外反しているもの④④③⑤大形甕で, 口縁部がなだらかに落ちながら底部にいたる小形甕類である。

④④~④⑨甑で, ④⑧は底部の透しの部分, ④⑨は把手の部分である。⑤⑩は手捏土器で, ⑤①は埴であり, ⑤②・⑤③は杯である。

石器 (第17図②③, 図版23)

砥石と玉の未整品が出土している。

②は砥石で, 三面を丁寧に使用しているもので, 石質は硬砂岩である。重量は1,056g。

③は玉の未整品で, 石質は滑石製で穿孔されている。厚さは5mm前後で, 孔径は3mmである。重量は1.3g。

耳飾 (第17図①, 図版23)

装飾具で, 銅の土台に金張りのもので, 内側に金張り一部が残っていた。重量は5.1g。

時期的には, 遺物から6世紀の後半に位置付けられる。

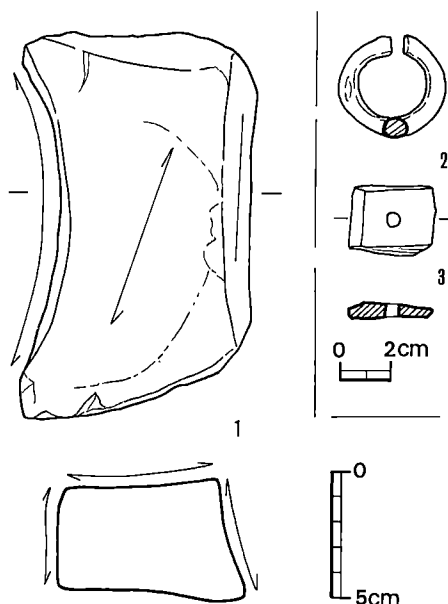
4号竪穴住居跡 (第18図, 図版9・24)

1号住居跡の西隣にあつて, 5号住居跡, 19号住居跡を切っている。切り合い関係が微妙にかかわってくる。その中でも, 4号住居跡は一番新しくなってくる。

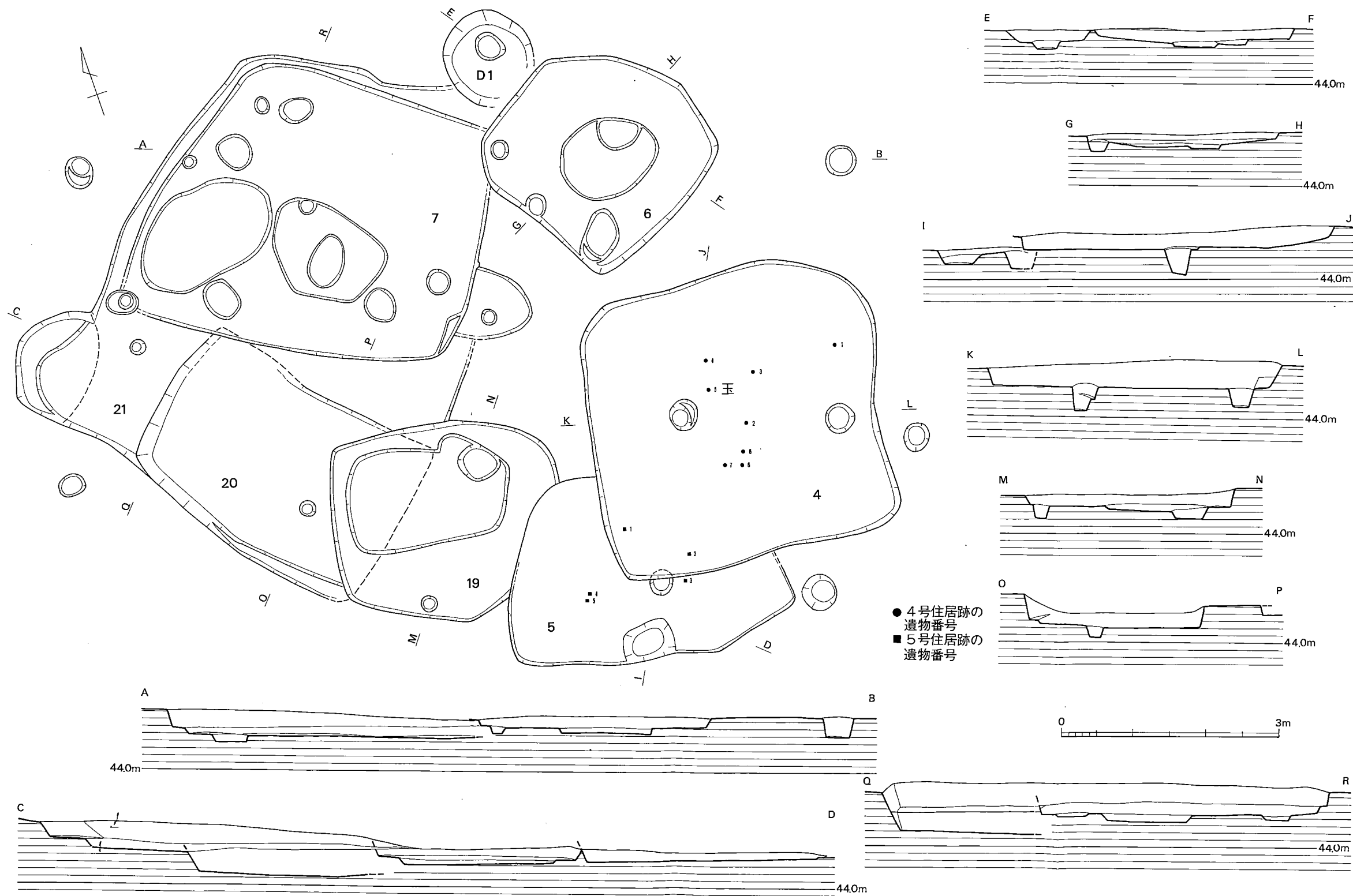
平面形は不整形を呈し, 一辺が4.0m×4.0mで, 柱穴が2本である。床面より出土遺物がみられている。赤変した場所が見られない。

出土遺物 (第19図, 図版24)

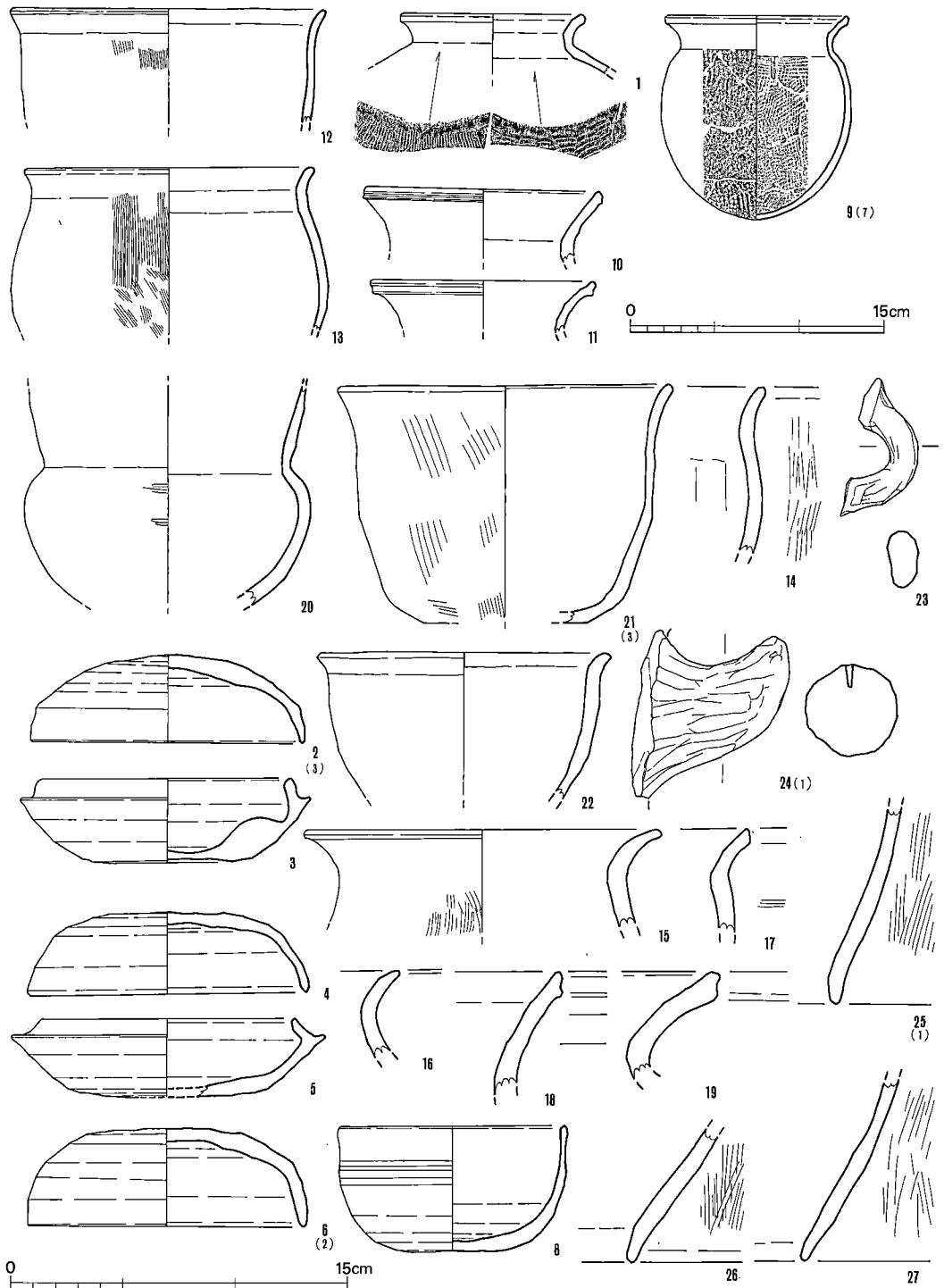
床面に近いものは, 下層として, それより上のは上層として, 取り上げた。上層は覆土中のものである。須恵器, 土師器と石器の石鏃と白玉である。



第17図 3号竪穴住居跡出土遺物
(石器)実測図(1/2)



第18図 4・5・6・7・19・20・21号竪穴住居跡遺構実測図 (1/60) (住居跡の中の番号は住居跡番号, D1は1号土坑)



第19图 4号竖穴住居跡出土遺物実測図① (1/3, 1/6)

須恵器 (第19図, 図版24)

甕と杯身・杯蓋である。

①は大形の甕である。②～⑦は杯身・杯蓋で, ③は内側は焼きぶくれがある。回転ヘラケズリが特長である。

土師器 (第19図, 図版24)

器種には大形・小形の甕・壺・甑・把手等がみられる。

⑨～⑲は甕で大形と小形に分類できる。口縁部が外反し口唇部に特長があるもので⑨・⑩・⑪・⑰・⑱がそれである。いわゆる須恵器に似せたもの。

⑫・⑬・⑭・⑮・⑯は本来のもの。前者は製塩土器である。

⑳・㉑・㉒は壺で, ㉑は小形丸底壺である。㉓・㉔は把手で, ㉓は鉢形のものに付く, ㉔は甕・甑に付くものである。

㉕以下は甑である。

石器 (第20図, 図版24)

石鏃と臼玉が出土している。

臼玉 (第20図①) 床面から出土しているもので, 直径0.5cmで孔径2mm, 石質は滑石製である重量0.2gを計る。

石鏃 (第20図②) 覆土中から出土したもので流れ込みである。丁寧に押圧加工を施しているもので, 姫島産の黒曜石と思われる。縄文時代の所産のものである。

時期的にも6世紀後半から末に位置する。

5号竪穴住居跡 (第18図, 図版10・25)

4号住居跡から切られているもので, 全体の把握ができない。平面形は長方形をなすものと思われるが, 一辺のみを捉えることができる。4.0mを計測す。床面より遺物が検出されている。4号住居跡の床面の下より出土したのは, 土師器の高杯他は甕である。覆土中から須恵器の杯身・壺がみられ, 土師器のタコ壺が一点出土していた。ファイゴの羽口の破片が一点みられた。

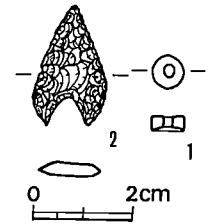
出土遺物 (第21図, 図版25)

須恵器と土師器が出土している。床面に近いものを下層とし, 他を上層として分けた。

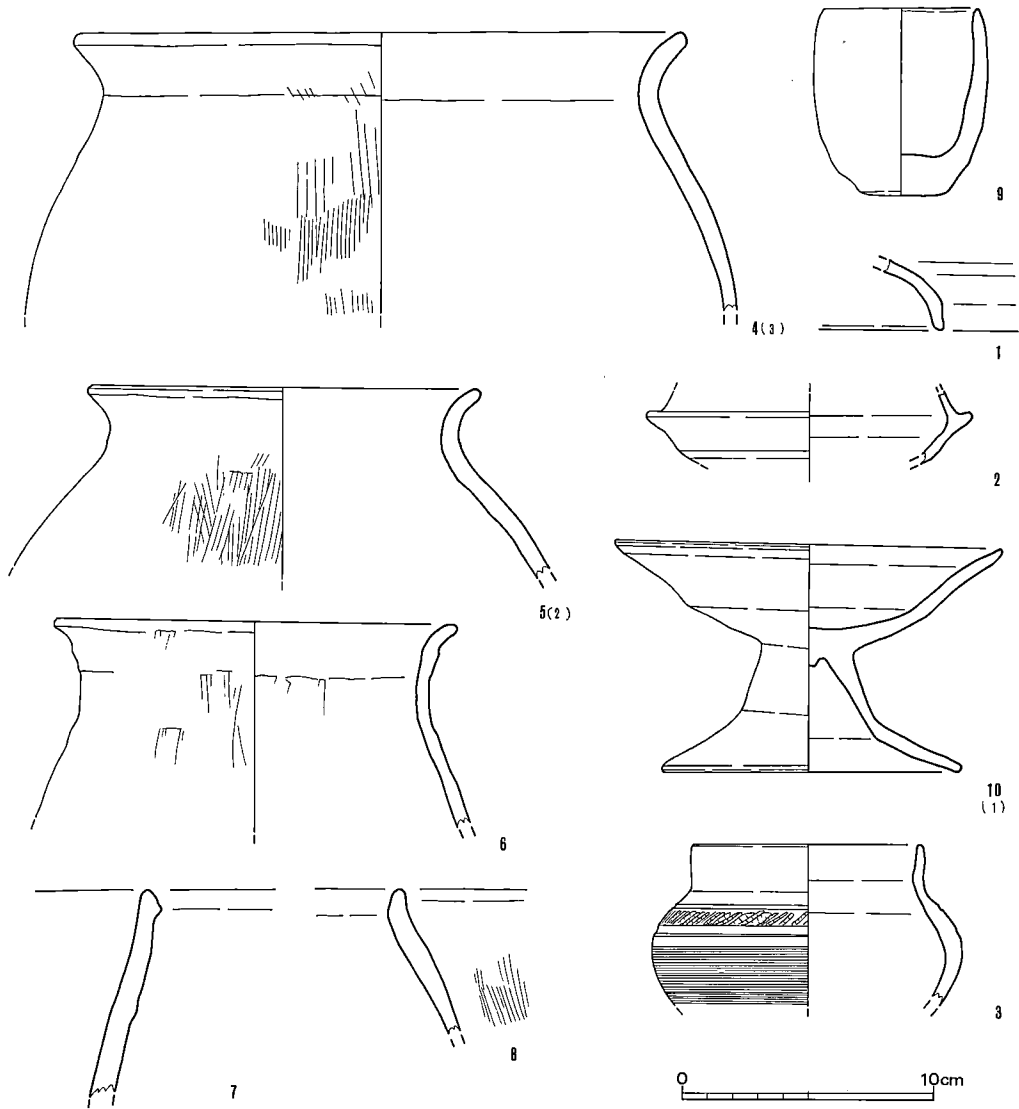
須恵器 (第18図)

器種は杯身・杯蓋・壺である。

①・②は杯身と杯蓋, ③は直口壺である。覆土中から出土したものである。



第20図 4号竪穴住居跡出土遺物実測図② (2/3)



第21図 5号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/3) (()内の番号は遺物取上げ番号)

土師器 (第21図)

④～⑧は甕で、大形と小形に分けられる。⑨は手捏手法で作られたタコ壺である。⑩高杯で完形のものである。調整にヘラミガキを使用している。

時期的には6世紀後半である。

6号竪穴住居跡 (第18図, 図版11)

4号住居跡の北側にあつて、7号住居跡を切っている。また、1号土壇から切られている。一応住居跡として上げてみた。平面形は不整形を呈するもので、一辺2.5m×2.5mを計測するが、西側の辺は短い。床面の柱穴が少ないが、中央を含めて2本柱としか考え様がない。

7号竪穴住居跡 (第22図, 図版11)

6号住居跡に切られているもので、この住居跡が20号住居跡を切っている。平面形は不整長方形を呈するもので、床面から若干の須恵器の杯身・杯蓋が出土している。一辺4m×5m前後を計測する。近代の水路が遺構を通っているため、方々に攪乱がはしっていた。支柱穴を求めたが北東側の柱穴を見つけ出すことができなかった。二本柱で住居跡が建つか疑問であるが、いたしかたない。どうも不明瞭な住居跡である。

出土遺物 (第22図, 図版25)

床面から出土したものを中心に述べる。土師器高杯と甕, 他は須恵器の杯身と杯蓋である。

須恵器 (第22図, 図版25)

①②は杯身と杯蓋である。①は内面にヘラ記号が残っている。

土師器 (第22図, 図版25)

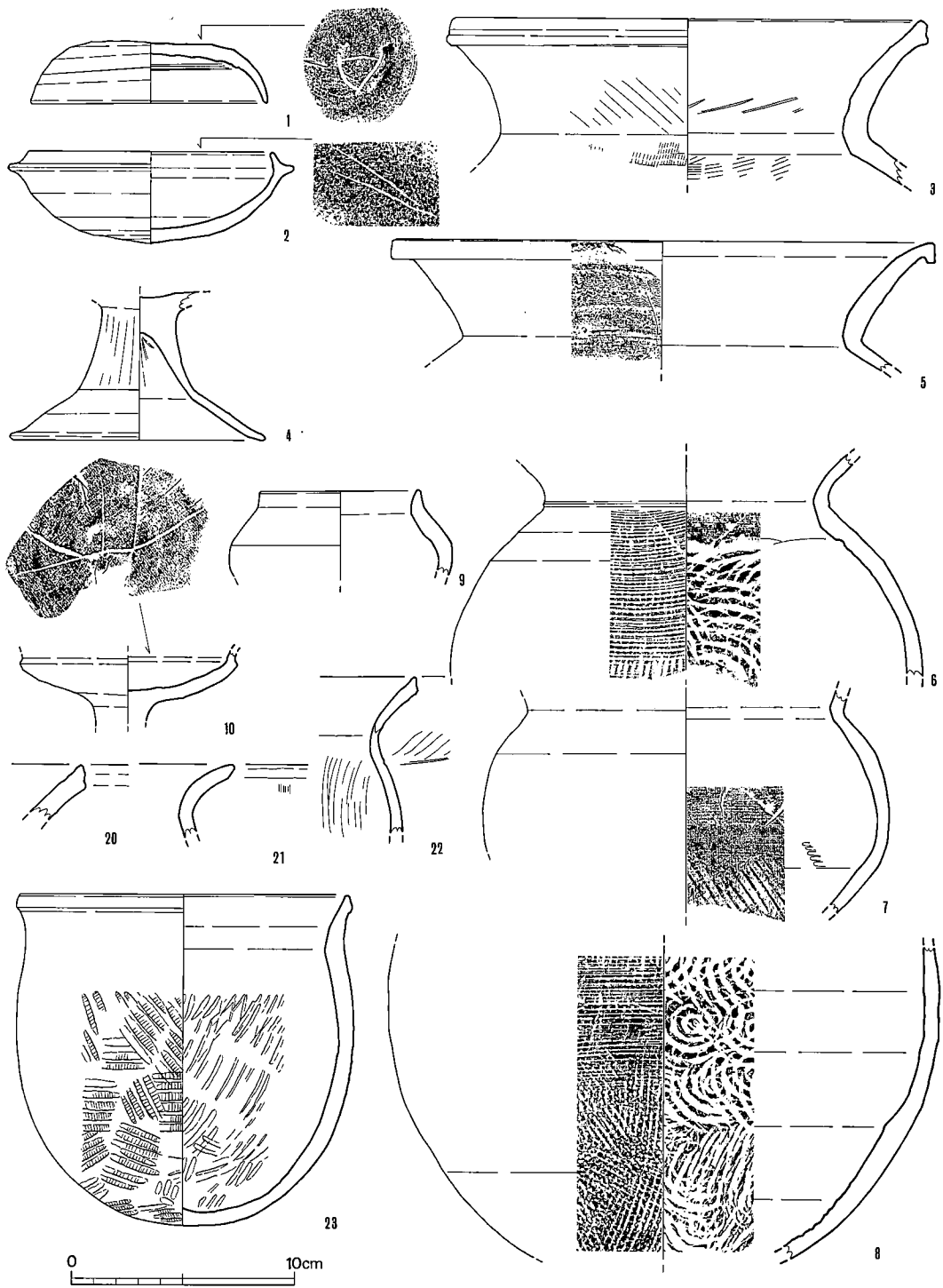
④は高杯の脚部である。裾は段をなして、スカート状に広いもので、5号住居跡出土のものと同じである。③は甕の口縁部破片で、口唇部に特長をもつものである。製塩土器である。

この住居跡の時期は、6世紀の後半から末に近い年代を充てたい。

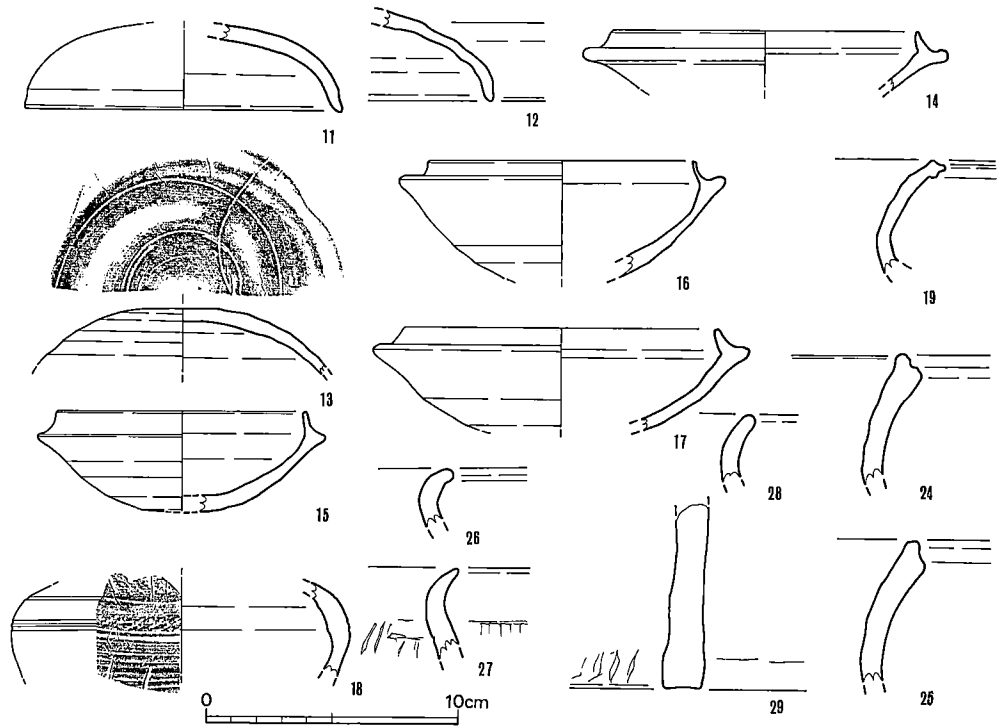
竪穴住居跡番号が前後するが、7号住居跡と4号住居跡・5号住居跡に切られている19号・20号・21号住居跡を先に述べる。

19号竪穴住居跡 (第18図, 図版12)

5号住居跡に切られて、20号住居跡を切っている住居跡で、平面形は不整方形を呈している。1辺が3.0m×2.5mで、壁高は20cm前後のものである。床面からの遺物の出土はみられないが、覆土から出土している。柱穴は2本検出している。



第22图 7~19号竖穴住居跡出土遺物実測図① (1/3)



第23図 7～19号竪穴住居跡出土遺物実測図② (1/3)

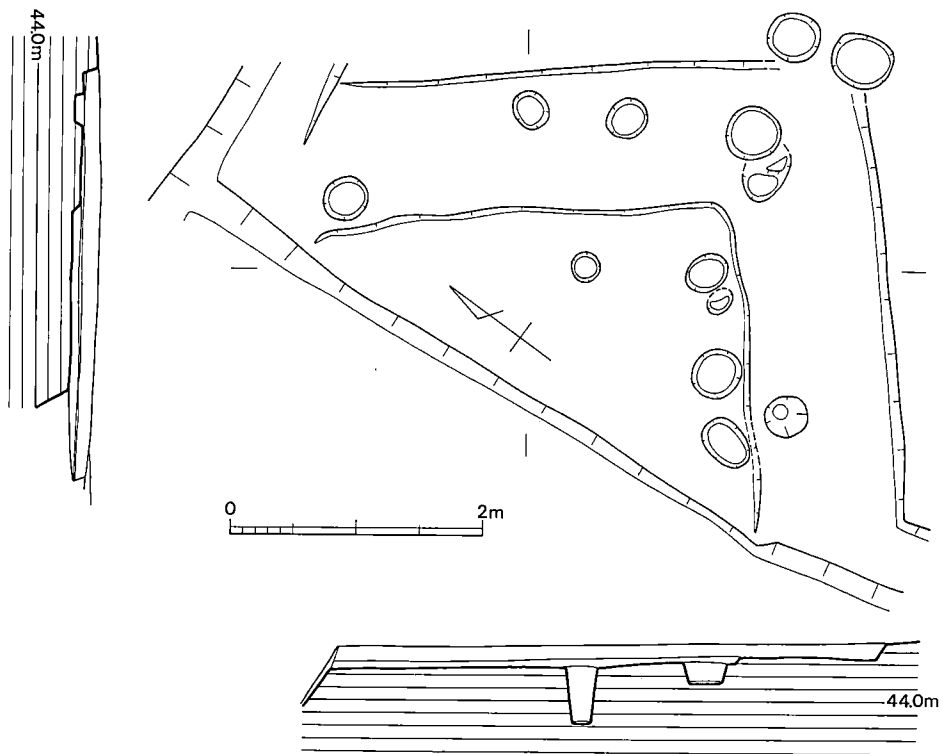
20号竪穴住居跡 (第18図, 図版12)

19号住居跡の西側にあつて、7号住居跡と19号住居跡に切られて、21号住居跡を切っている。平面形は不整長方形を呈するもので、南側の一辺のみが計測できた。4m×2m+αである。壁高は断面図より50cmと深い。出土遺物は床面よりみられず、柱穴は1本確認した。火力を受けた場所はみられない。

21号竪穴住居跡 (第18図, 図版12)

20号住居跡の西側にあつて、20号・7号住居跡から切られて一つのコーナのみが残っているもので、平面形は不整形をなすもの、壁高は30cmの高さである。柱穴を一個確認した。床面から出土遺物はみられなかった。

出土遺物 (第22, 23図)



第24図 8号竪穴住居跡遺構実測図 (1/60)

出土遺物 (第26図)

須恵器と土師器がみられ、覆土中より出土したもの。

須恵器 (第26図)

①は杯身である。②は縁の破片である。①によって時期が理解できる。

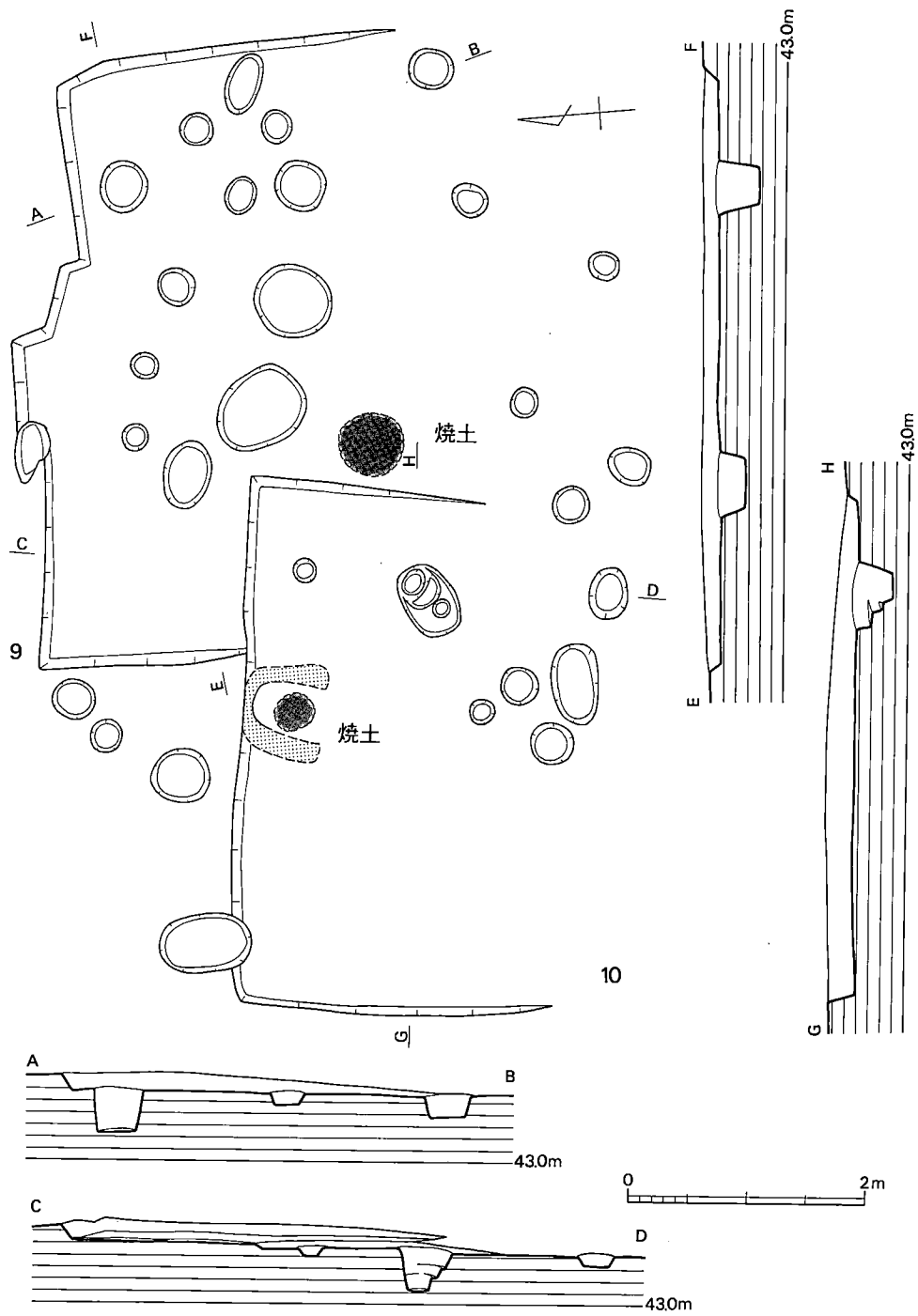
土師器 (第26図)

③は甕の口縁部、口唇部に特長を有す。④は甕の胴部破片である。

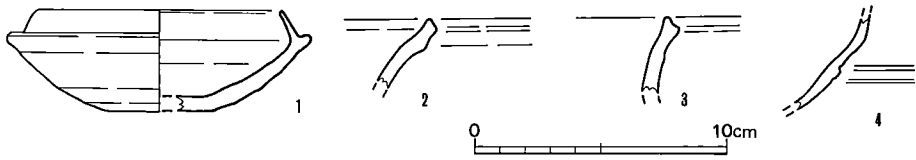
時期的には6世紀後代の前半に位置するものである。

10号竪穴住居跡 (第25・27図, 図版14)

9号住居跡の西側にあつて、この住居跡を切っているもので、平面形は長方形に北側辺に中央部に竈をもっている。北側の一辺は4.40mで、他辺は $2.6m + \alpha$ である。東側辺側の柱穴は通るが、西側辺は確認できず。出土遺物は竈の中から出土している。溝1が床面の下を通る。



第25图 9·10号竖穴住居跡遺構実測图 (1/60)



第26図 9号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (第27図)

高杯と甑は竈の袖の部分から出土したもの。

須恵器 (第27図)

①は高杯の脚部で、裾の部分である。

土師器 (第27図)

②は甑の裾部である。

時期的には6世紀後半の後葉で、9号住居跡より新しい。

11号竪穴住居跡 (第28・29・32図, 図版15)

溝1が完全に埋ったところに、この住居跡がつくられている。平面形は長方形で、東側辺は4.5mで西側辺はそれよりも50cm長い5.0mである。南側の辺は4.2mで、北側辺は4.5mでほぼ中央部に竈を有している。主体は4本柱である。壁高は10cm前後を計る。竈の袖は灰黄褐色の緻密な土を用い残りぐあいは一様である。竈内の穴はブロック状に焼土を有する。支脚はみられず。出土遺物は北側辺の柱穴から出土している。土錘が2点、小形なものである。

出土遺物 (第29図, 図版26)

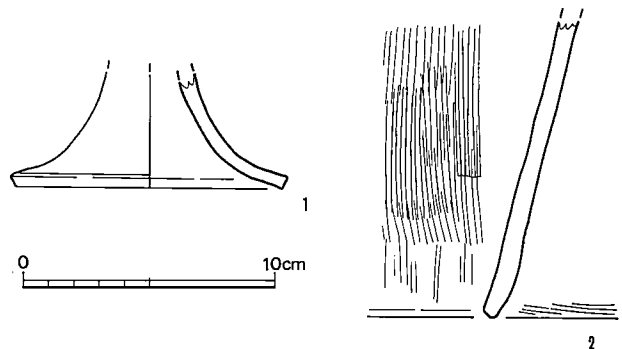
須恵器と土師器が柱穴中より出土した。

須恵器 (第29図, 図版26)

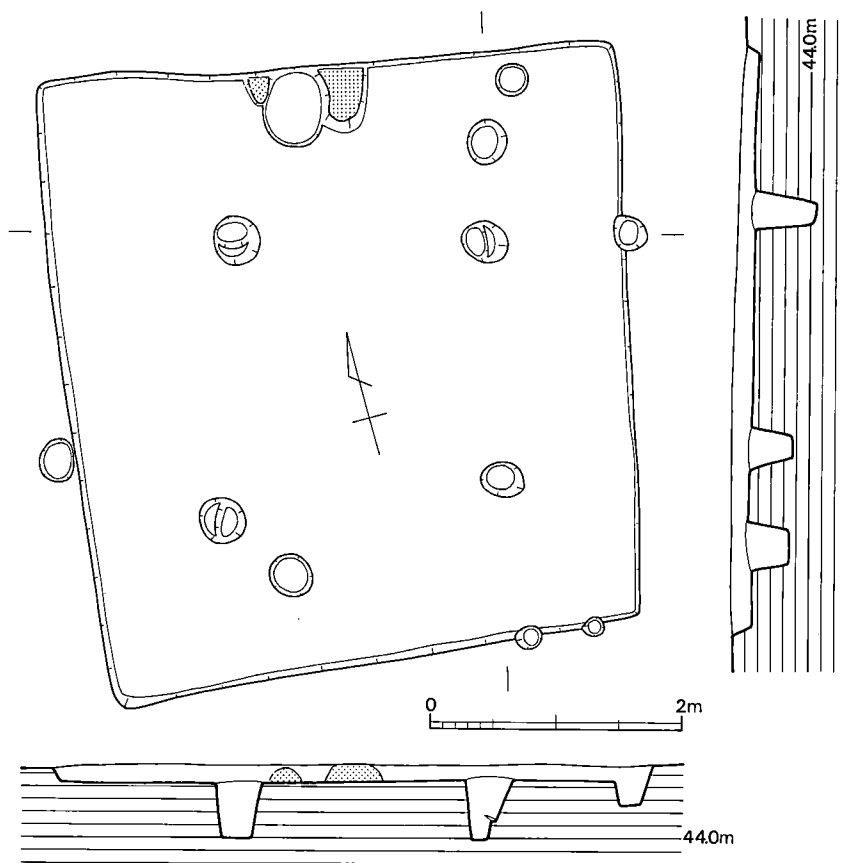
①は杯身で、口唇部が欠損している。②は高杯の脚部の裾である。

土師器 (第29図)

③は甕の口縁部、④は手捏土器土



第27図 10号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/3)



第28図 11号竪穴住居跡遺構実測図 (1/60)

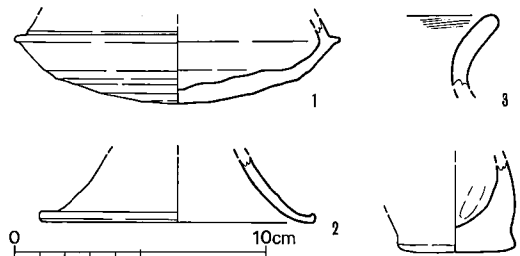
器で5号住居跡出土のタコ壺に類似する。

土錘 (図版26-⑥・⑦) 両者とも小形のものである。

時期は6世紀後半の後葉で、10号住居跡と同時期と考える。

12号竪穴住居跡 (第30・31・32図, 図版15)

9号掘立柱建物の西側にあつて、北側辺に竈を有するもので、平面形は不整長方形で、東西側辺はほぼ同じ3.0mで、南側辺が2.5mで、北側辺で3.10m、中央部に竈を有している。壁高は20cm前後を計る。支柱は四本柱である。竈の東袖の基底部には土師



第29図 11号竪穴住居跡遺構実測図 (1/60)

器の甕片を使用し、中央部は赤変し硬化していた。袖には明黄褐色粘土を使用している。竈の中から土師器の甕片が出土している。覆土中から須恵器の杯蓋・杯身・蓋と土師器の甕が出土している。

出土遺物 (第31図, 図版26)

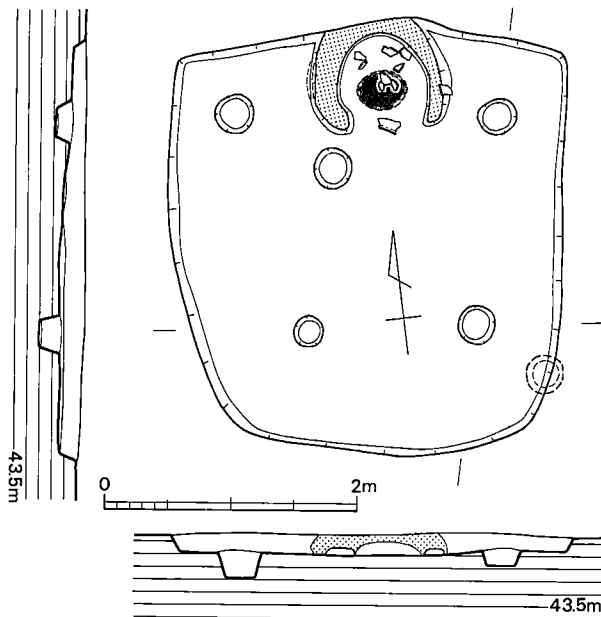
覆土中から出土したものと竈の中から出土したものを図示した。

須恵器 (第31図)

①・②は杯蓋で、③は杯身である。④は短頸壺の蓋である。

土師器 (第31図, 図版26-1)

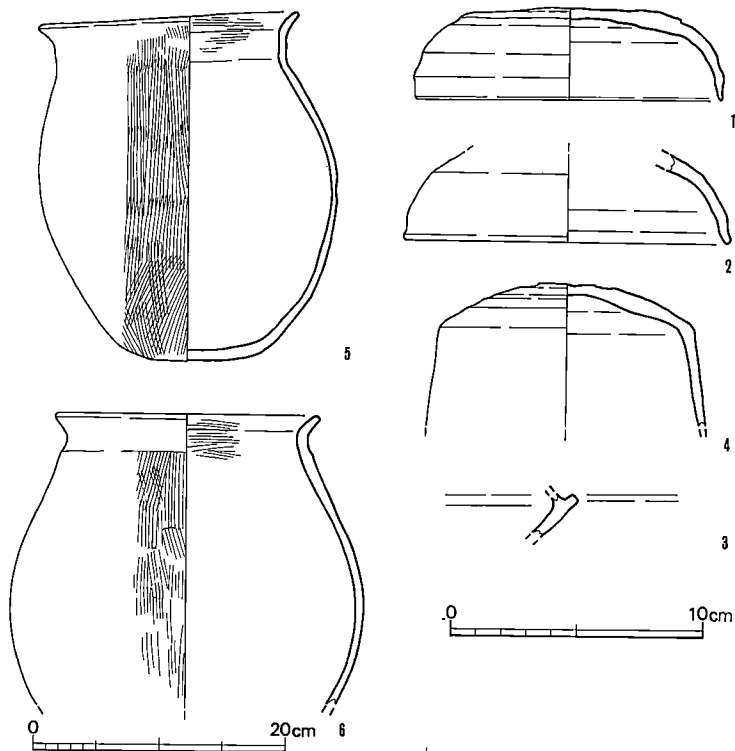
⑤・⑥甕である。⑤は覆土中より出土したもので、口縁直下に一



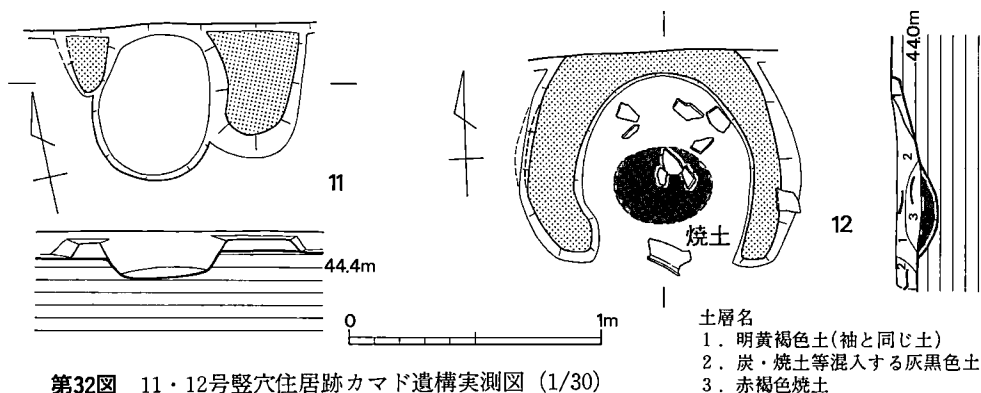
第30図 12号竪穴住居跡遺構実測図 (1/60) (アミ目 カマド)

段段をもつもので、底部は平底に近い丸底である。⑥は竈の中から出土したもので、口縁部はくの字状に外反するものである。底部は前者のものになると思われる。

時期的には、6世紀後半の代である。



第31図 12号竪穴住居跡遺構実測図 (1/3) ▶



第32図 11・12号竪穴住居跡カマド遺構実測図 (1/30)

13号竪穴住居跡 (第33図, 図版15)

I区の中央部の南側にあつて、14号住居跡から切られているもので、北東側の $\frac{1}{2}$ ほどが検出された。一辺は4.6mで他の辺は $1.5m + \alpha$ で、平面形は方形を呈する。東側の中央部に竈を有しているもので、長期間に使用されたのではないとみられる。主柱は4本柱である。出土遺物はみられなかった。

時期的には、竈の位置等から22号住居跡と同時期か。

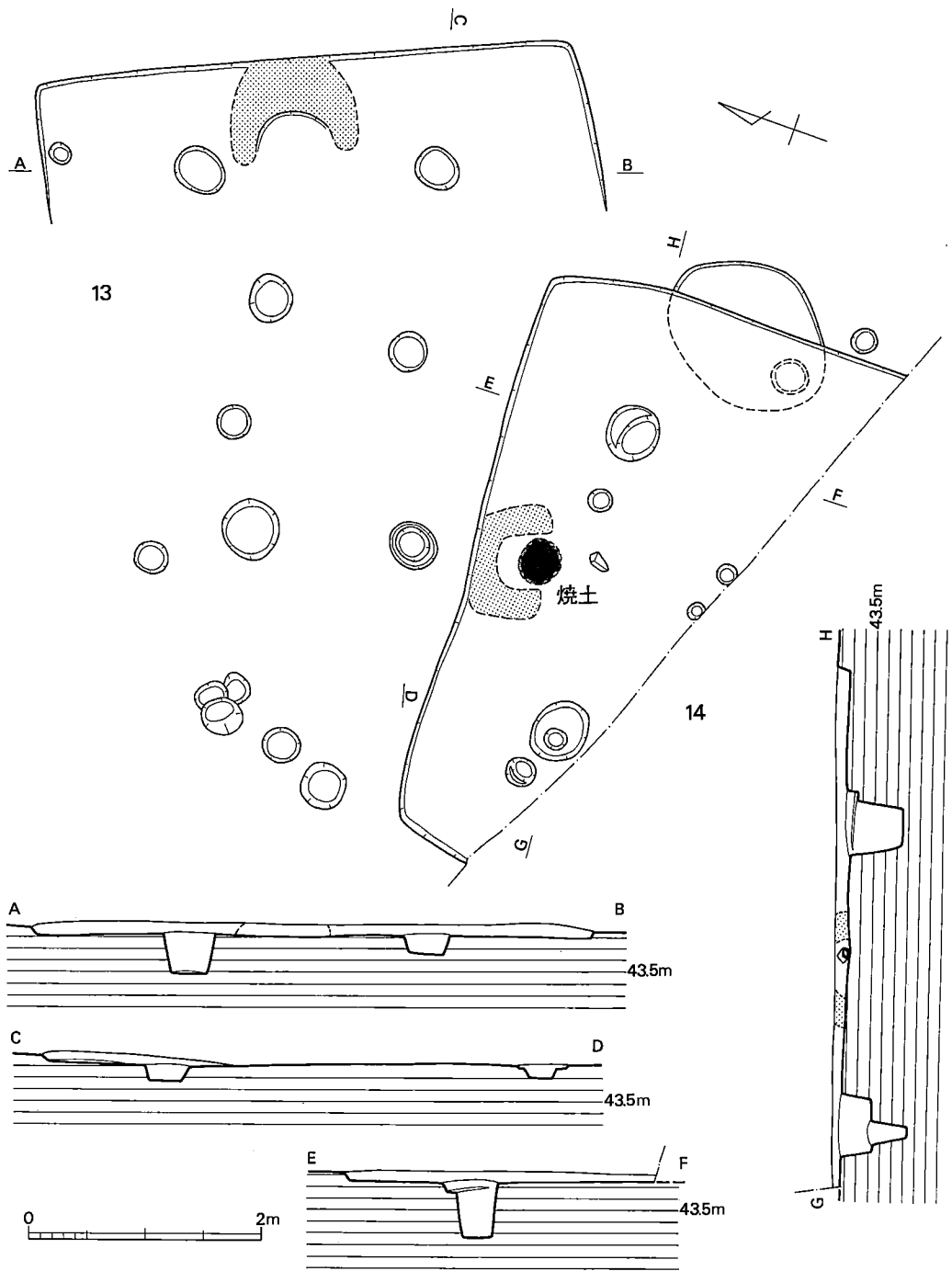
14号竪穴住居跡 (第33図, 図版15)

13号住居跡を切つてつくられているもので、北側辺の一辺と他辺は区域外であつた。一辺の長さは5.0mで、その中央部に竈が設けられている。平面形は方形を呈するものである。竈は火床の部分のみで、赤変硬化している。竈の左右が主柱である。4本柱と考えられる。出土遺物はみられなかった。住居跡としても辛じて残つたものである。

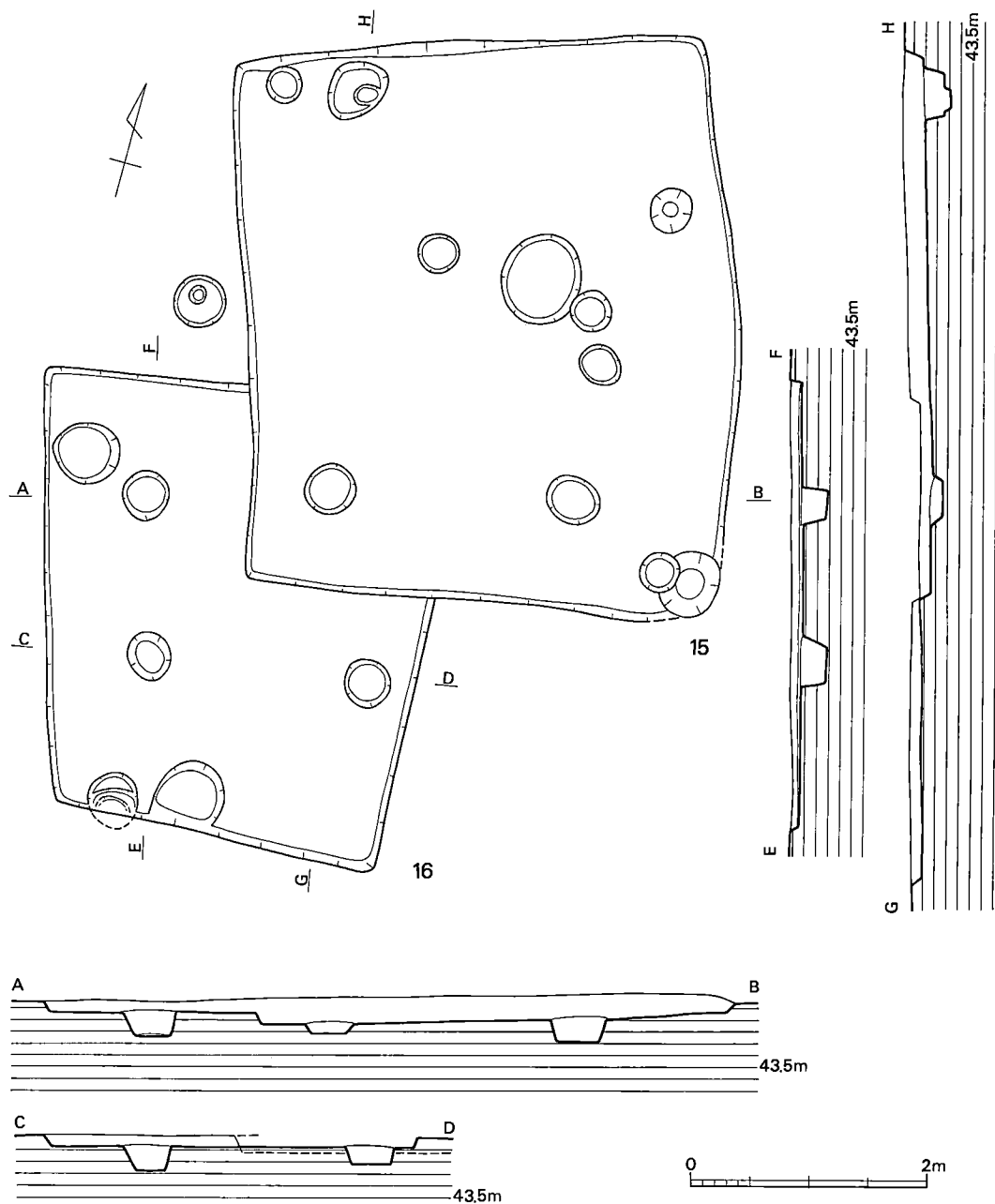
時期的には6世紀後半の後葉を充てたい。

15号竪穴住居跡 (第34図, 図版15)

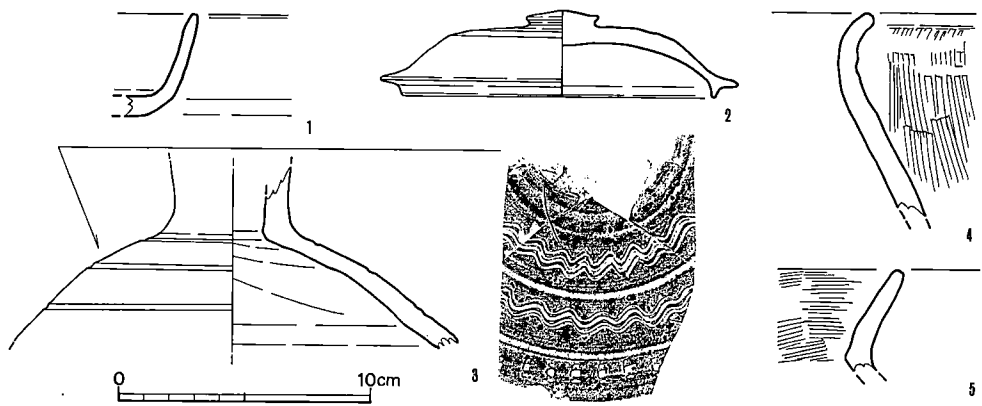
16号住居跡の北側にあつて、これを切っている。平面形は長方形で一辺が $4.0 \times 4.5m$ である。主柱は4本柱である。覆土中から出土している。北側中央部に竈と思われる部分をたち切つたが、その結果は竈ではなかつた。若干焼けた部分がみられたのだが？



第33图 13・14号竖穴住居跡遺構実測図 (1/60)



第34图 15・16号竖穴住居跡遺構実測図 (1/60)



第35図 15・18号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (第35図)

須恵器の杯蓋で、中央部の柱穴付近から出土したもの。

須恵器 (第35図)

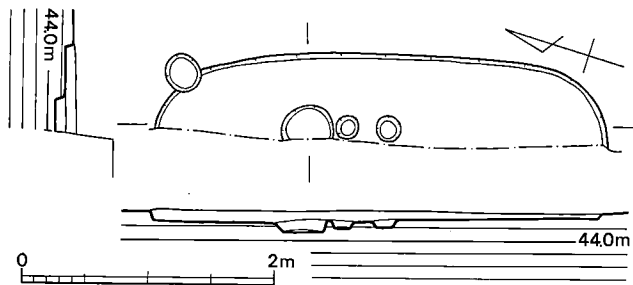
①は杯の身である。

時期的には、6世紀後半から末にかけてを充てたい。

16号竪穴住居跡 (第34図, 図版16)

15号住居跡の南にあって、15号住居跡がこれを切っている。平面形は不整長方形で、南側辺が3.0m、西側辺が3.6mで、台形状になっている。支柱は4本柱と考えられる。出土遺物は床面から浮いた状態で土師器の甕の胴部破片が出土している。しかしながら図示するにはいたらなかった。

時期的には6世紀後半を充てたい。



第36図 17号竪穴住居跡遺構実測図 (1/60)

17号竪穴住居跡 (第36図, 図版16)

I 区の西南端にあって、大半の部分は農道にはいつている。東側辺の一辺のみが検出されている。長さ3.6mで平面形は方形をなすものである。床面には若干の柱穴を確認した。

時期的には、6世紀後半から7世紀前半ごろと考えられる。

18号竪穴住居跡 (第35・37図, 図版16)

I 区の北側にあって、溝2によって流失している部分もある。東南のコーナーのみが残っているもので、北側は溝で切られている。平面形は方形のもので、出土遺物は覆土中より出土している。一番新しい時期の住居跡であろう。

出土遺物 (第35図, 図版26)

覆土中より、須恵器と土師器が若干出土した。

須恵器 (第35図一②・③, 図版26-2)

②は杯蓋で、擬宝珠状のつまみを有しているものである。③は長頸壺で頸部から肩にいたる破片である。櫛描等に興味を引くものである。

土師器 (第35図一④・⑤)

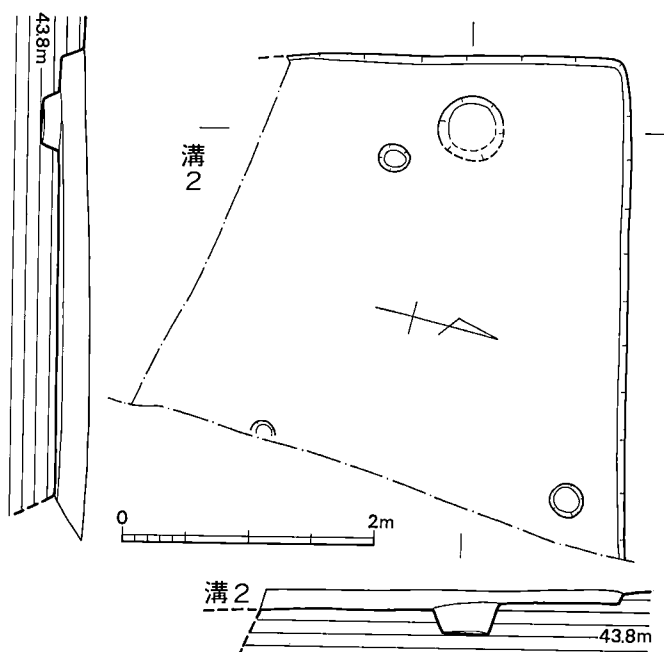
④・⑤は甕の口縁部である。⑤は「く」の字状に外反するものである。④とは相違する。

時期的には7世紀の前半である。

22号竪穴住居跡

(第38・39・40図, 図版17)

II 区の東南側にあって、北側辺の中央部に竈を有す



第37図 18号竪穴住居跡遺構実測図 (1/60)

るもので、平面形は不整形を呈する。東側辺は3.0m, 西側辺3.5mで、南側辺は2.6mで北側辺は3.0mを測る, 中央部に竈が位置している。支柱は4本柱である。壁高は10m前後を計測する。竈は火床の奥に支脚の痕跡があり, 火床は赤変して硬化していた。袖には黒色, 黄色の粘土が均等に混在している。出土遺物は床面より検出されなかった。覆土から杯身が見られた。

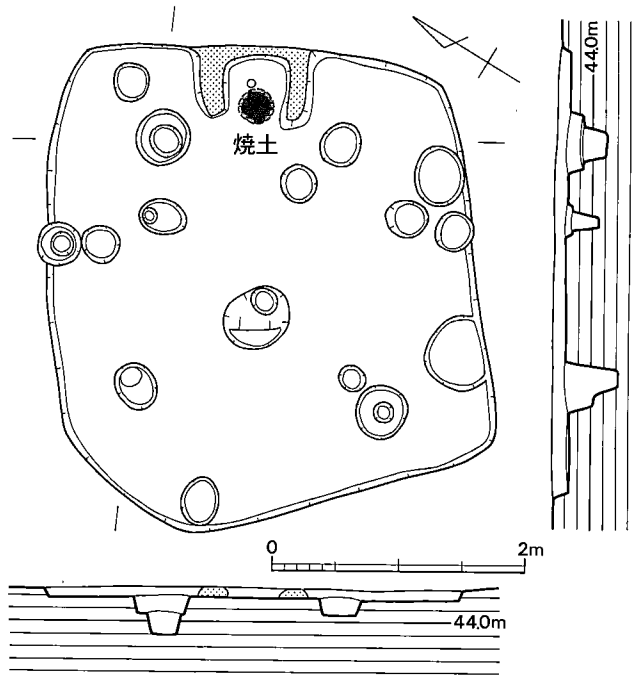
出土遺物 (第40図)

覆土中から須恵器が出土している。

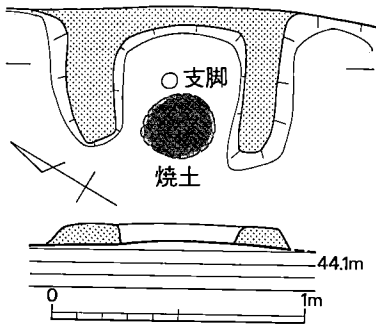
須恵器 (第40図-①)

①は杯身の破片で、口径16cmで器高は4cmである。

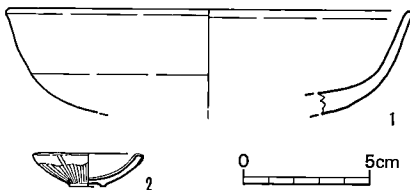
時期的には6世紀の後半頃に位置付けたい。



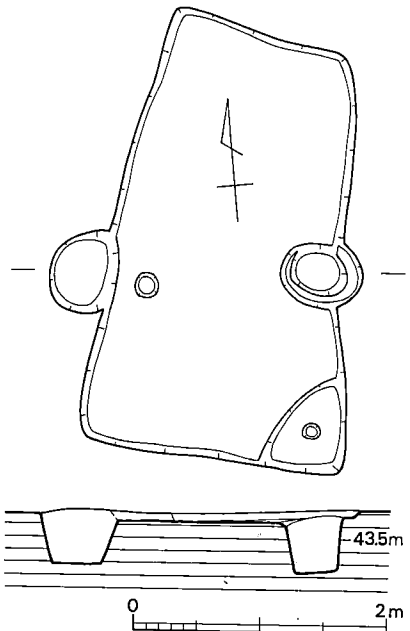
第38図 22号縦穴住居跡遺構実測図 (1/60)



第39図 22号縦穴住居跡カマド遺構実測図 (1/3)



第40図 22, 23号縦穴住居跡出土遺物実測図 (1/3)



第41図 23号縦穴住居跡遺構実測図 (1/60)

23号竪穴住居跡 (第41図, 図版17)

Ⅱ区北側端部にあって、西側はカットされている。傾斜面であるため、貼り床を行なっていたと考えられる。出土遺物は覆土中から近世のベニ皿が流れ込みとして検出されている。一応住居跡として上げてみた。

出土遺物 (第40図)

覆土中からベニ皿が1点出土している。

ベニ皿 (第40図一②)

江戸時代のもので、猪口形を呈するものである。この紅皿には、薬指を紅差し指という名が残っていた。

時期的には、溝5の土質と同じである。

3. 掘立柱建物と遺物 (第42~55図, 図版18・19)

遺跡では住居跡群の付近には、柱穴群がそれぞれ集中する部分があった。一応建物が考えられるのは下記の通りである。第6図と付図を参照されたい。

I区 14棟 2間×2間 5 2間×2間(総柱) 3

2間×3間 3 その他不明 3

Ⅱ区 1棟 (2間×3間)

1号掘立柱建物 (第42図, 図版2)

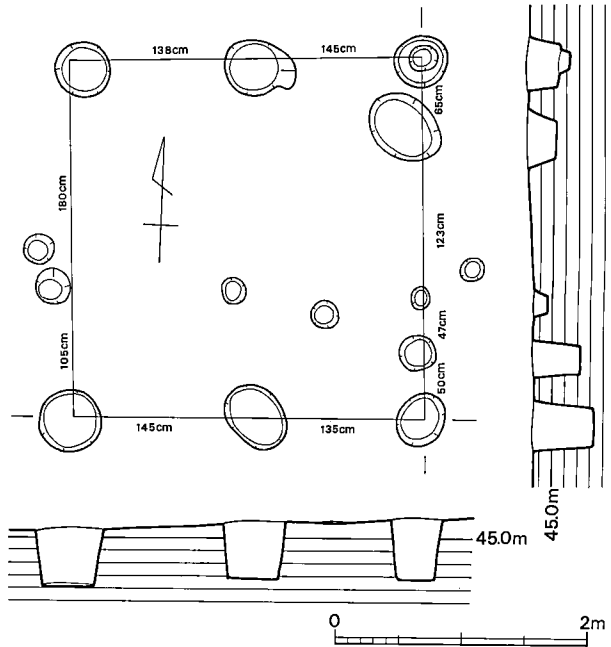
2間×2間の建物で、柱穴の大きさは30~50cmでほぼ平均しており、深さも一部をのぞき30~50cmと深い。柱間寸法は図のとおりである。なお柱筋は多少の出入があるので各柱穴の中心で測った距離を柱間寸法として示す。以下15号まで同様である。

図示したごとく柱間寸法は必ずしも一定しない。5尺・5尺を基準としている。

2号掘立柱建物

(第43図, 図版2)

2間×3間で東西方向に位置する建物で南西側に廂をもったものである。寸法は図示の通りである。梁行が6尺・6尺, 桁行は北から5尺・7尺・5尺となり, これに5尺の廂をつけている。



第42図 1号掘立柱建物遺構実測図 (1/60)

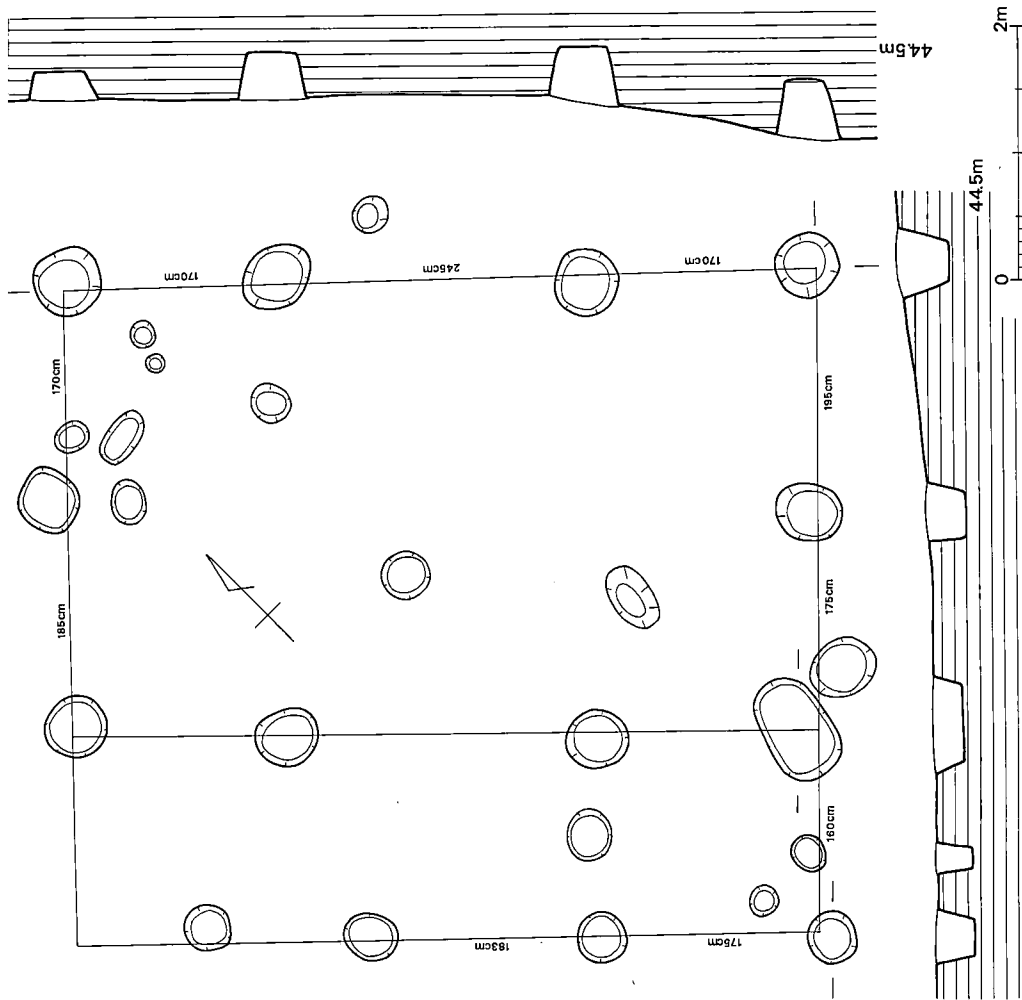
2間×2間の総柱の建物である。東西方向が梁, 南北方向が桁と考えられる。柱穴の大きさは50cm前後で, 深さは40~50cmと根石を固めに使用しているものもある。柱間の寸法は図示の通りである。梁行が5尺・5尺で, 桁行が5尺・5尺を基準としたものであろう。

4号掘立柱建物 (第45図, 図版18)

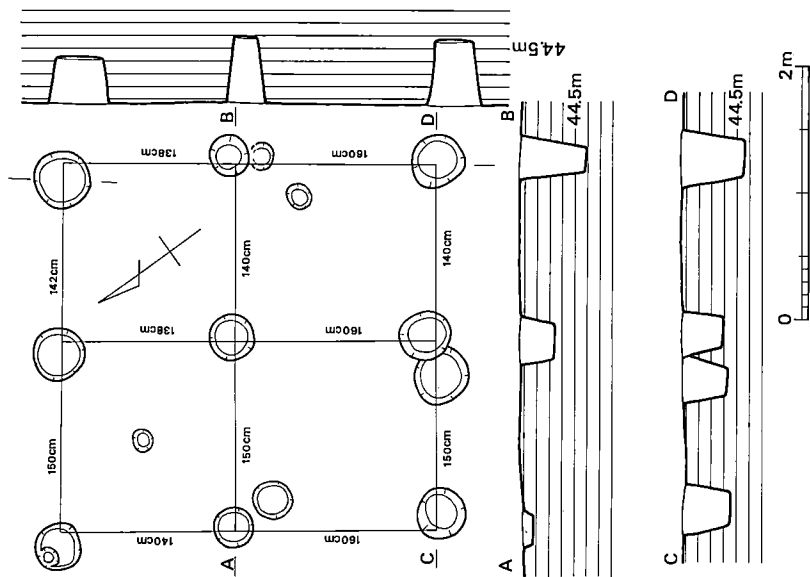
2間×2間の総柱の建物である。東西方向が梁, 南北方向が桁と考えられる。柱穴の大きさは60~70cm前後で, 深さは50cm前後で, 根石を後詰として使用している。柱間の寸法は図示の通りである。梁行が6尺・6尺で, 桁行も6尺・6尺を基準としている。中央部の柱までは7尺・7尺である。

5号掘立柱建物 (第45図, 図版18)

2間×2間の総柱の建物である。4号建物の建て替であろう。建物の方向は同一で, 1尺ずつ大きくなっている。東西方向が梁で, 南北方向が桁と考えると, 柱穴の大きさは50cm前後で深さは50cm前後である。柱間の寸法は図示の通りである。梁行が7尺・7尺で, 桁行も7尺7尺を基準としている。中央部の柱までは7尺・7尺である。



第43图 2号立柱建筑物遺構実測図 (1/60)



第44图 3号立柱建筑物遺構実測図 (1/60)

6号掘立柱建物（第46図，図版3）

2間×2間の建物である。東西方向が梁で南北方向が桁と考えられる。柱穴の大きさは30～50cmである。根石の後詰のものはない。柱間の寸法は図示の通りである。柱穴の埋土は黒褐色を呈しているもので、梁行は6尺・6尺で、桁行は7尺・7尺を基準としている。柱穴中の遺物については、どの柱穴中からも検出されなかった。

7号掘立柱建物（第46図，図版3）

2間×2間の建物である。柱穴の大きさは40～80cm前後で、深さ40～50cmを計る。柱間の寸法は、図示の通りである。梁行は4尺・6尺で桁行は5尺・5尺を基準としている。柱穴中の遺物については、どの柱穴中からも検出されなかった。柱穴の埋土は黒褐色を呈しており、検出時は確認しやすかった。

8号掘立柱建物（第47図，図版3）

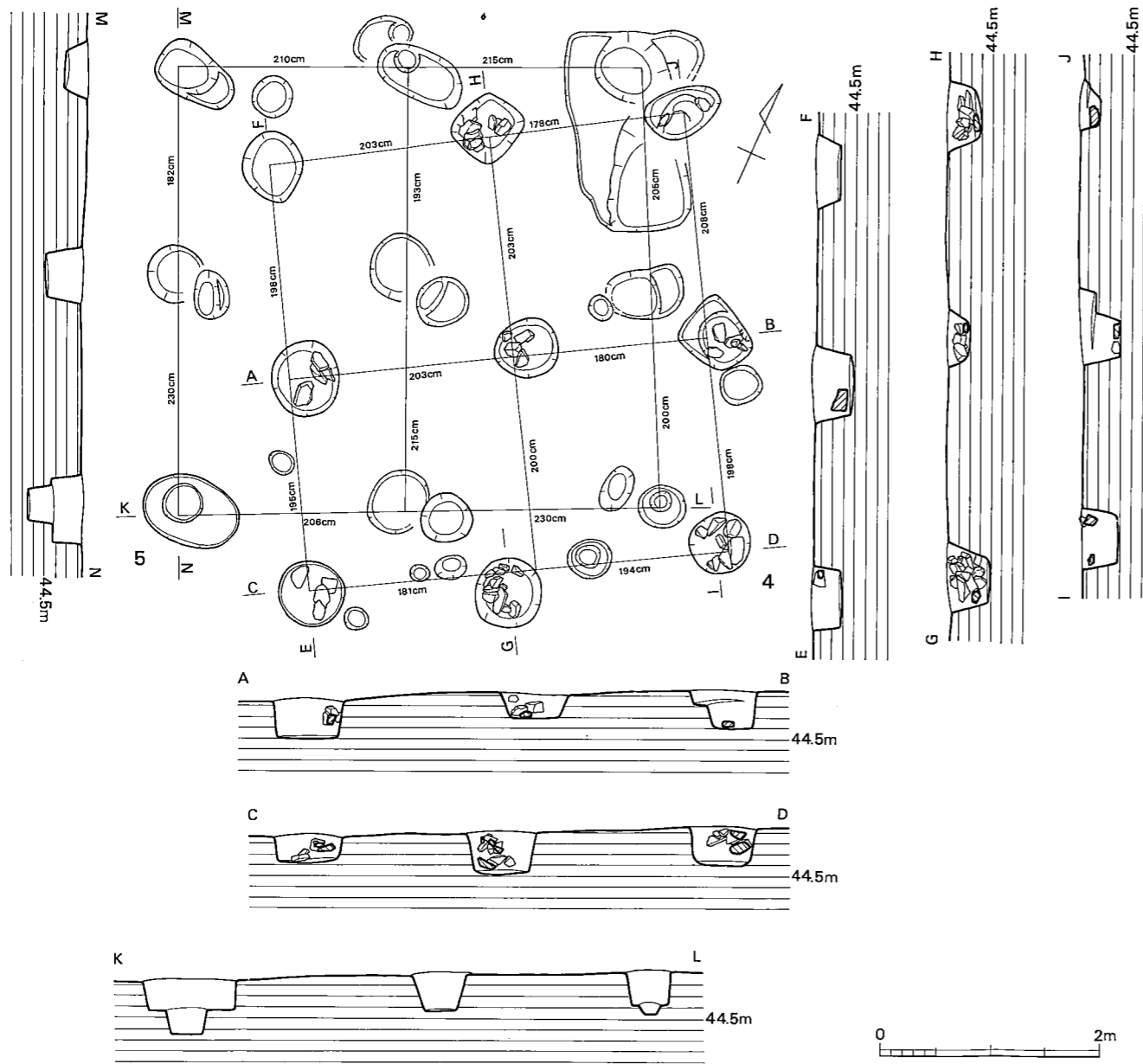
2間×2間の建物と考えられるが、桁行の方向に柱穴を見出せなかった。柱穴の掘り方の大きさは80cm前後で、柱は30cm前後のものを使用していたと考えられる。柱の埋土は黒色を呈し、検出は楽であった。柱間の寸法は図示の通りである。梁行は5尺・5尺で、桁方向に一本の柱も検出できなかった。柱穴からの出土遺物はみられなかった。

9号掘立柱建物（第48図，図版3）

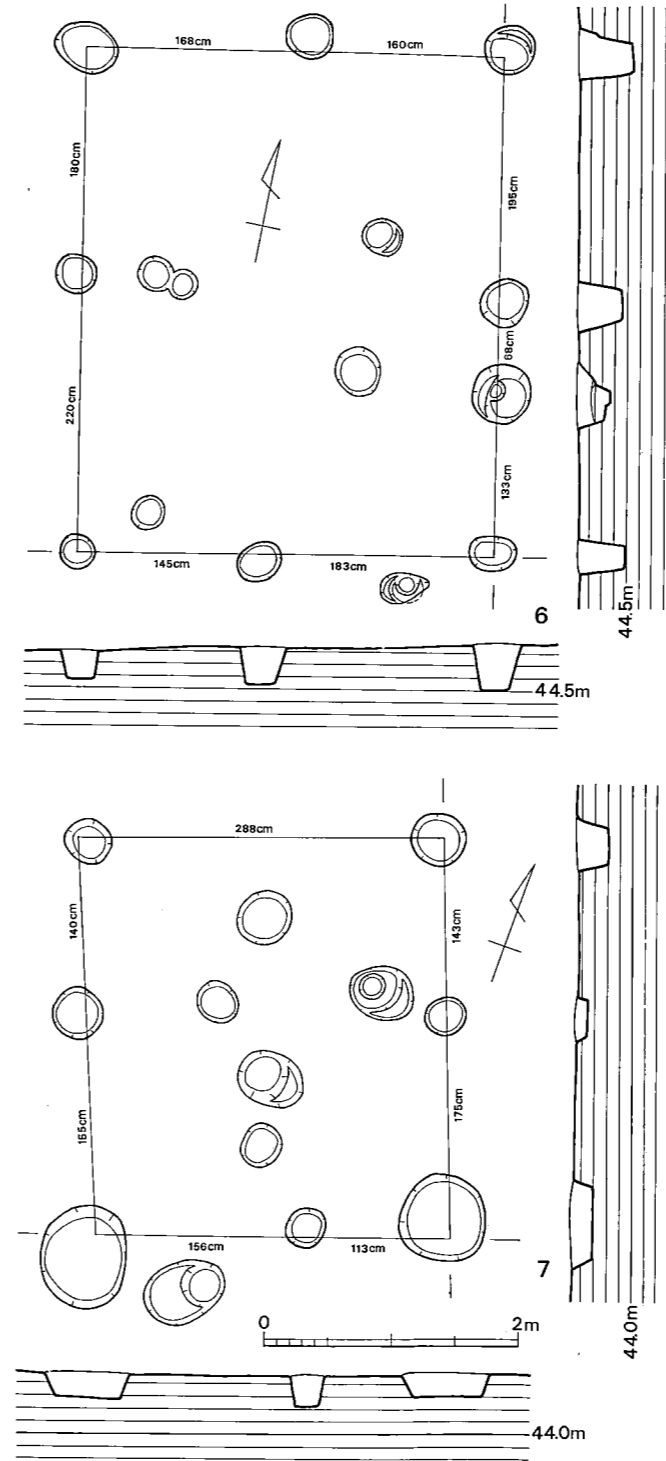
2間×2間の総柱の建物で、柱穴は掘り方を有するもので、柱は30cm前後1尺のものと考えられる。深さは50cm～70cm前後で、柱間の寸法は図示した通りである。梁行は8尺・8尺で桁行は東辺は10尺・10尺で西辺は10尺・9尺で1尺ほど短い。中央部柱は東西が7尺・7尺で、南北が10尺・10尺となっている。掘り方や柱穴からは遺物等の検出はみられず、柱穴の埋土は黒色を呈していた。

10号掘立柱建物（第49図，図版3）

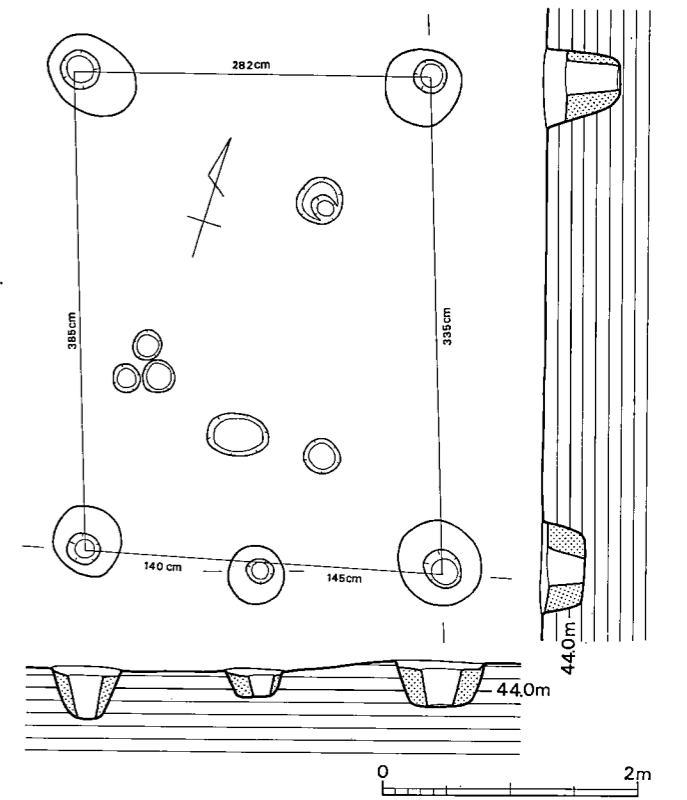
2間×2間の建物で、東西方向の梁行は10尺で、5尺・5尺をとり、南北方向の桁行は14尺で7尺・7尺を基準としている。柱穴の大きさは50～80cmで、深さは50cm～70cmを計測する。



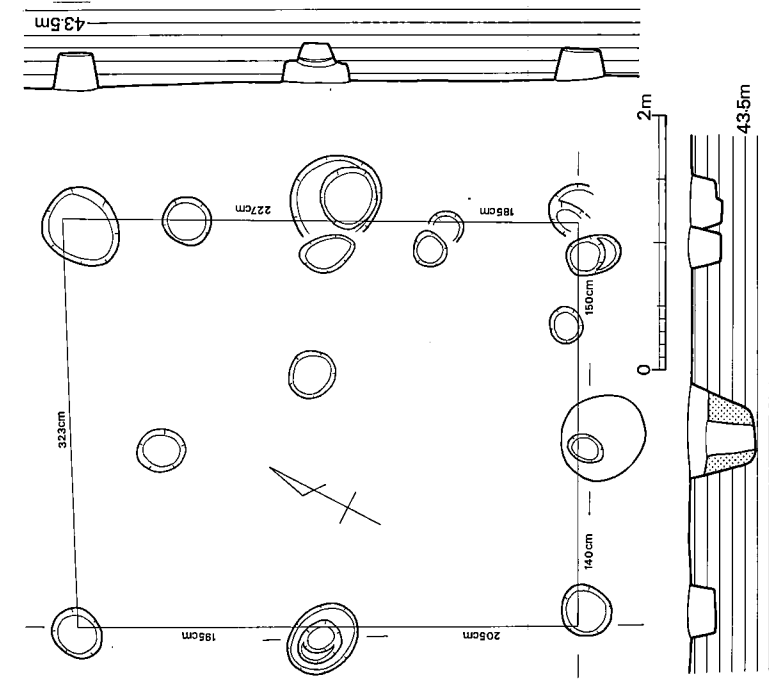
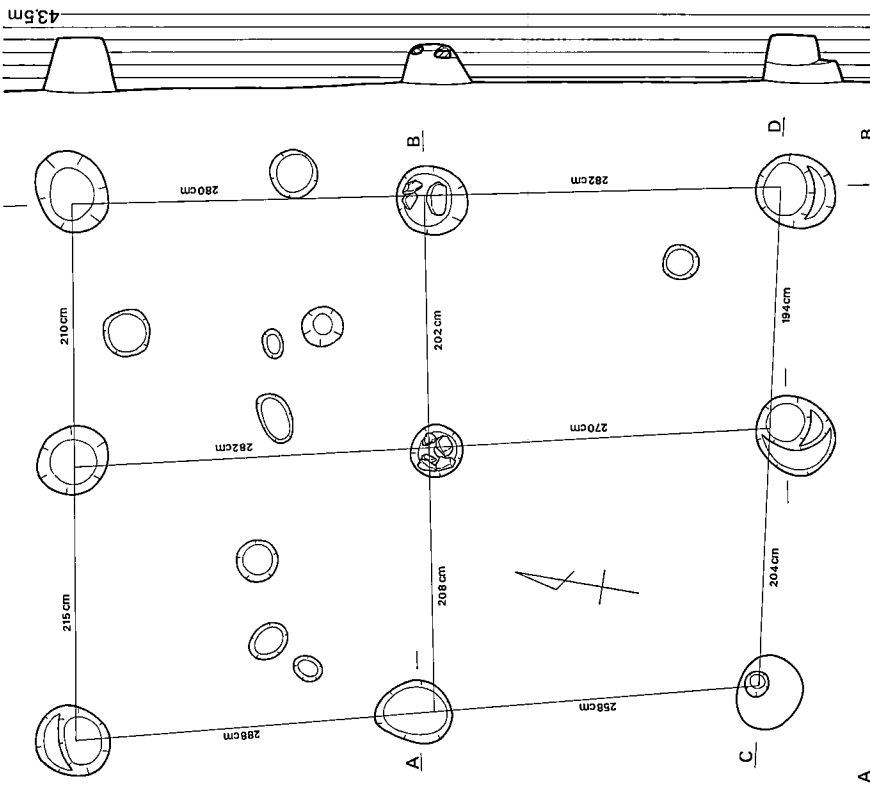
第45图 4·5号掘立柱建物遺構実測図 (1/60)



第46图 6·7号掘立柱建物遺構実測図 (1/60)

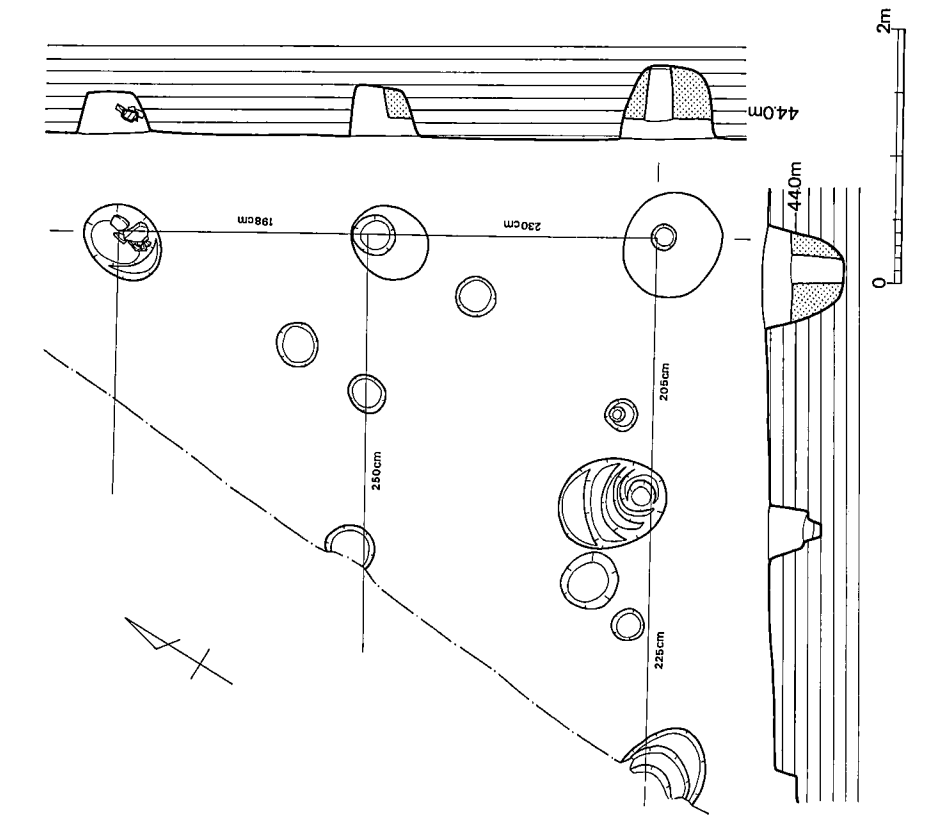


第47图 8号掘立柱建物遺構実測図 (1/60)

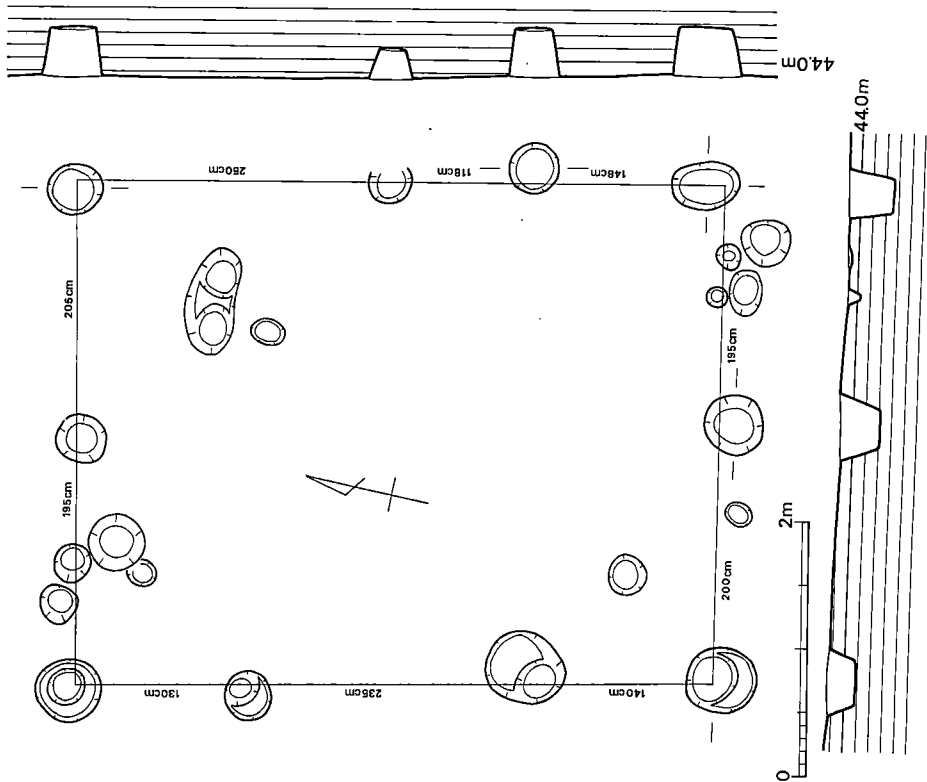


▲第49图 10号掘立柱建筑物遺構実測図 (1/60)

◀第48图 9号掘立柱建筑物遺構実測図 (1/60)



第51图 12号掘立柱建筑物遺構実測図 (1/60)



第50图 11号掘立柱建筑物遺構実測図 (1/60)

柱間の寸法は、図示の通りである。柱穴の埋土は黒褐色を呈していた。

11号掘立柱建物（第50図，図版3）

2間×3間の建物である。東西方向を梁行で7尺・7尺を基準にして、南北方向の桁行は18尺で、東辺は9尺・4尺・5尺と、西辺では5尺・8尺・5尺となっている。埋土は、黒色を呈しているもので、遺物の出土は見られなかった。建物の大きさは図示の通りである。

12号掘立柱建物（第51図，図版3）

2間×2間+ α の建物で、農道によって全体をつかむことができなかった。2間×2間の総柱の可能性もある。I区西端の遺構、柱穴には掘り方を伴うものが多く、柱間の間隔は8尺を基準としている。柱穴からは出土遺物は見られなかった。柱穴の埋土は黒褐色を呈している。

13号掘立柱建物（第52図，図版3）

12号の南側にあって、建物方向は同じである。2間×1間+ α で建物になると思われる。農道によって、末調査地区である。梁行は南北方向で、桁行は東西方向である。梁行は15尺で、9尺と6尺である。総柱の可能性もある。埋土には黒褐色土がつまっていた。遺物としては須恵器の破片が、北辺の桁行の中央柱から出土している。薄手の椀で、図示できなかった。

14号掘立柱建物（第53図，図版3）

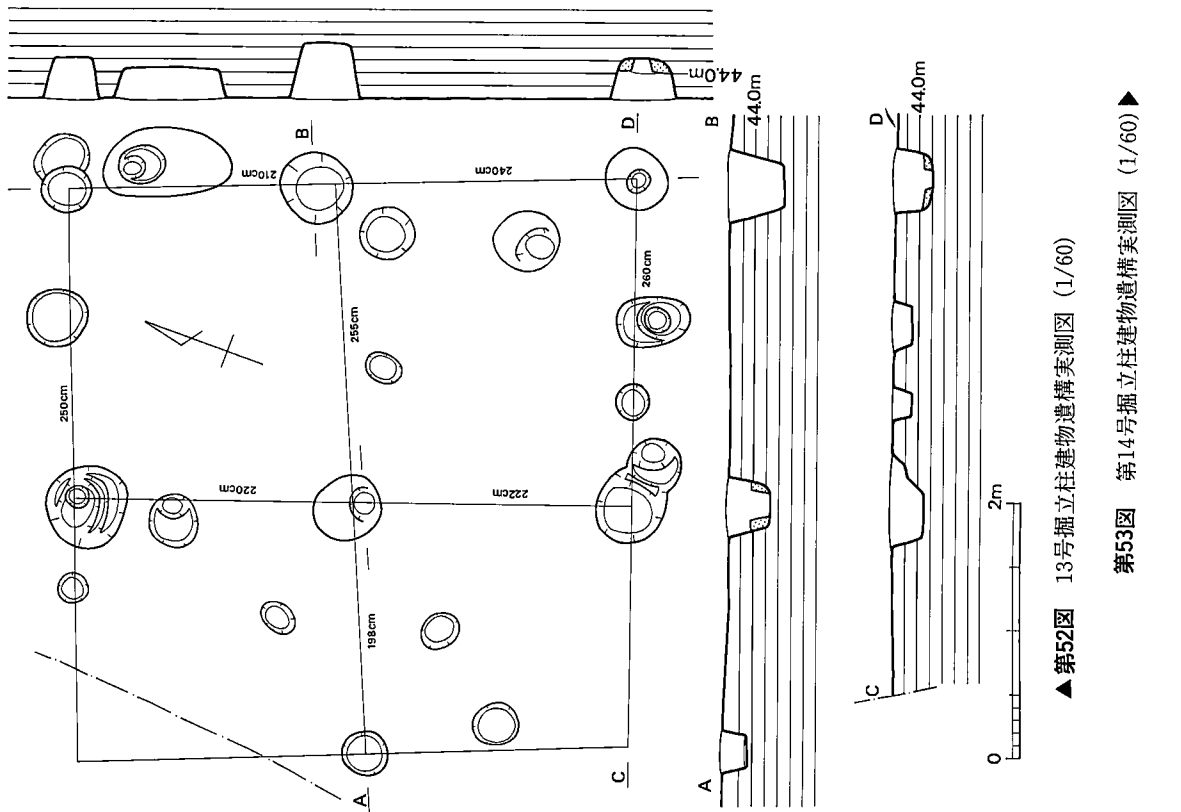
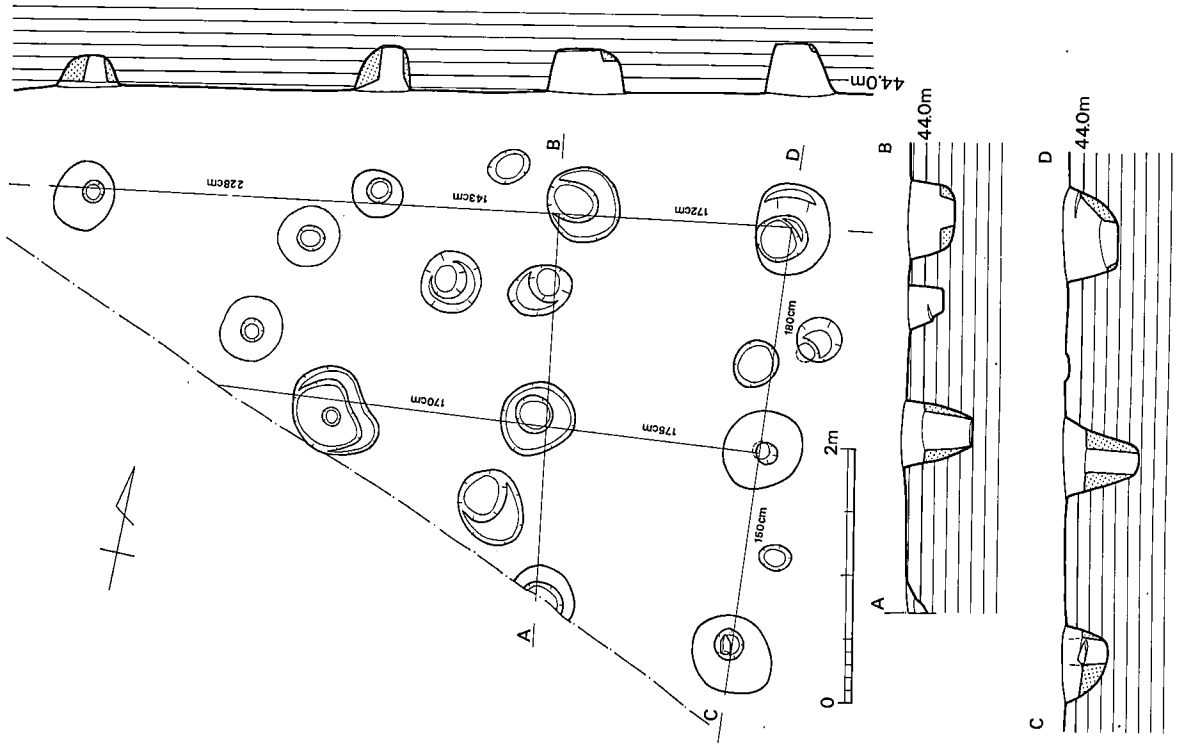
2間+ α ×4間+ α の総柱の建物と推定されるが、区域外であるため全体が捉めなかった。柱穴は掘り方を有するものも多く、12・13・14の建物方向は同一である。周辺部の柱穴から出土している須恵器片は7世紀後半から8世紀代にかかるものもあるので、ほぼ同時期として傍証してよいものであろう。柱穴間の寸法は図示の通りで、埋土は黒褐色土がつまっていた。

15号掘立柱建物（第54図，図版3）

2間×3間の建物である。東西方向が梁で、南北方向が桁と考えられる。柱穴の大きさは30cm前後で、深さ40～50cmである。根石の後詰のものはない。柱間の寸法は、図示の通りである。梁行は6尺・6尺で、桁行が6尺・6尺・7尺を基準としている。埋土は黒褐色を呈した。

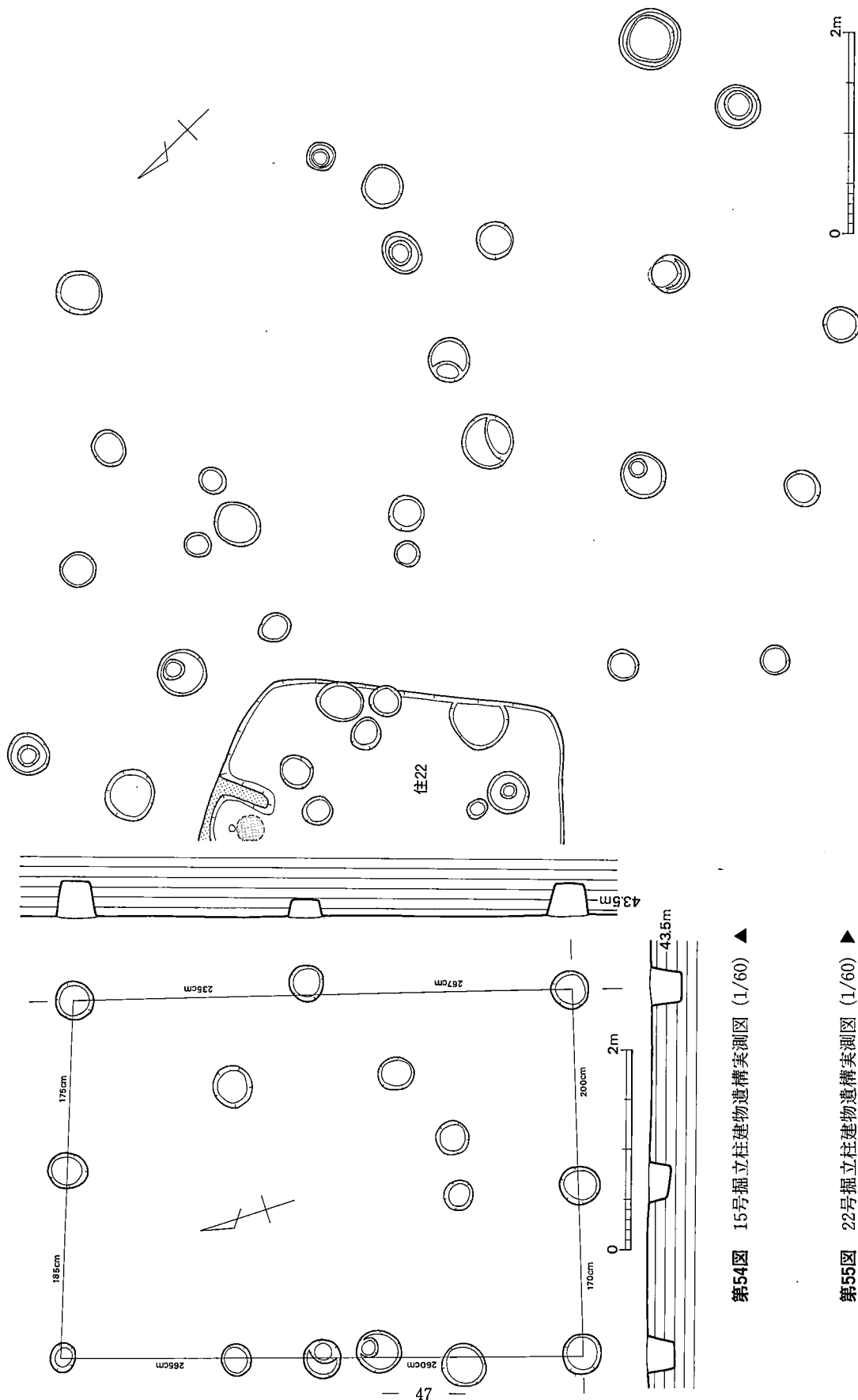
22号住居跡東側出土柱穴群（第55図）

22号住居跡と農道との間にある柱穴群は、掘立柱としてまとまるように思われるけれども、如何とも成し難かった。他の柱穴群も同様である。



▲ 第52图 13号掘立柱建物遺構実測図 (1/60)

第53图 第14号掘立柱建物遺構実測図 (1/60) ▲



柱22

第54图 15号掘立柱建物遺構実測図 (1/60) ▲

第55图 22号掘立柱建物遺構実測図 (1/60) ▲

4. 土壇・Pit遺構と遺物（第56～67図，図版4）

I区では，柱穴のPitより大きいものを土壇と称した。II区では同じ様な穴をPitと称したが，II区のII Pit 1…2と番号を付して遺物のとり上げと混在を防いだ。その結果I区で土壇4とPit-36，縄文甕棺の検出をみた。II区ではII Pit 1～II Pit 5まで5基を検出した。それらの寸法等は一覧表の表2を参照の事。

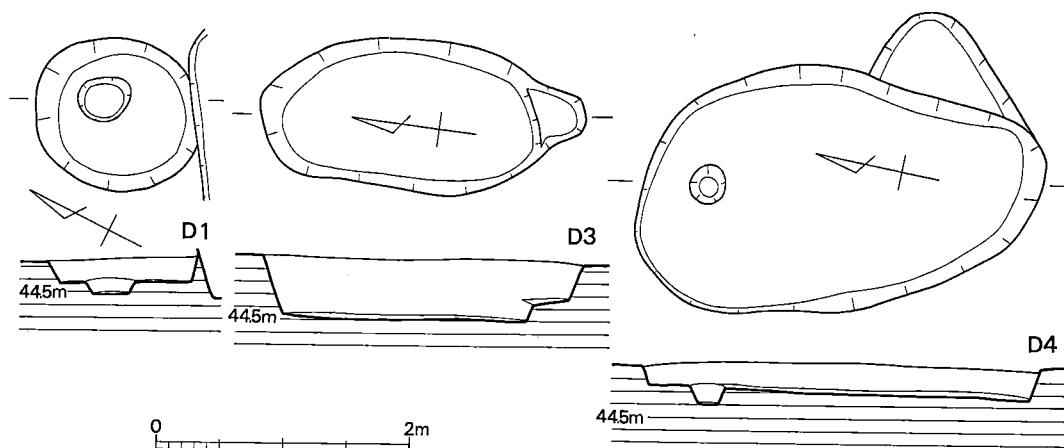
表3 高田遺跡土壇・Pit遺構一覧表

土壇・Pit番号	地区	規模 (たて×よこ×深さcm)	出土遺物	時期	切り合い	備考
1号土壇	I区	30×35×30	縄文土器片	古墳時代?	住6→土1 排水溝→土2	
2号土壇	I区	25×35×30				
3号土壇	I区	60×30×49				
4号土壇	I区	80×50×20				
II Pit 1	II区	110×95×30	近世陶器キセル，縄文土器片 ツマミ形石器・剥片	近世 縄文後期	P ₁ →P ₂	
II Pit 2	II区	110+α×120×100				
II Pit 3	II区	85×60×20				
II Pit 4	II区	40×25×35				
P-36	I区	45×40×18	縄文土器片・黒曜石剥片	縄文後期		配石

※土=土壇の略

1号土壇（第56図，図版12）

6号住居跡の横にあって，この住居に切られている。平面形は円形を呈し，中央部に柱穴をもっている。遺物等の出土は見られない。土壇の大きさ等は一覧表を見られたい。

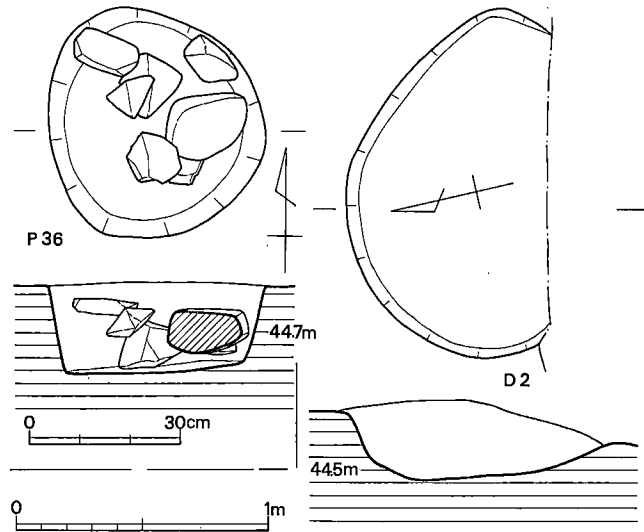


第56図 1・3・4号土壇遺構実測図 (1/60)

2号土坑

(第57図, 図版4)

3号住居跡の南東側にあつて、現代の排水溝によって上部を切っており、また農地の折りに一段下げているか、畦の端部にあたるため辛うじて残ったものである。平面形は楕円形に近い不整形である。この土坑の覆土下部からは、縄文土器の破片が出土している。土坑の内法等は表2を参照の事。



第57図 P-36・2号土坑遺構実測図 (1/60)

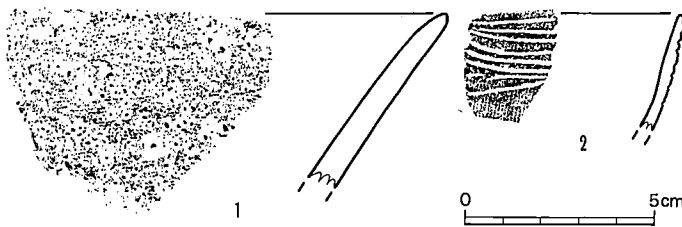
出土遺物 (第58図)

出土した縄文土器は小さな破片のものが13点ほどで、図示できるものはこれだけであった。主体は無文土器であった。①は無文土器の口縁部である。胎土に細粒砂を含み、色調は黄灰色で、粗製土器片である。②は口縁部破片で、器面の文様は沈線文で、器壁は薄い。胎土に細粒砂を含み黄褐色で、黒色研磨があり、精製土器である。

①・②とも縄文後期末に位置付けられる。

3号土坑 (第56図, 図版4)

1号掘立柱遺構の横にあつて、平面形は楕円形を呈している。出土遺物は検出されず。土坑の寸法等は表2の通りである。



第58図 2号土坑遺構出土遺物実測図 (1/3)

4号土坑

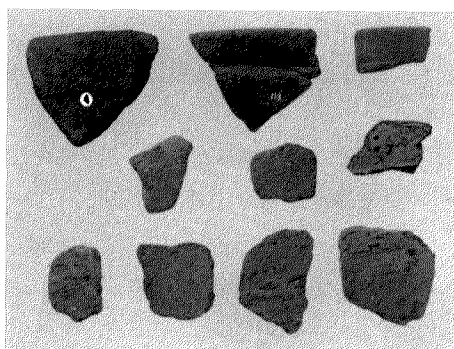
(第56図, 図版4)

7号住居跡の北側にあつて、平面形は楕円形に似た不整形で、切り合い関係のあるもので、南側

の土壇が切っている。下部で土壇の壁を追及した。遺物等の検出はみられなかった。土壇の寸法等は表3の通りである。

P-36遺構 (第57・59図)

5号掘立柱遺構の西側にあつて、平面形は円形を呈し、人頭大の石がはいつていた。遺物としては縄文土器片・黒曜石が若干出土したが、その他、変わった様子はなかった。遺物は流れ込みとも思われる。



第59図 ピット36出土遺物

出土遺物 (第59図)

縄文土器片が若干出土している。土器片には黒色磨研土器や無文土器、条痕文土器片等がみられる。縄文後期の所産のものが多い。

Ⅱ区 Pit 1 (第60図, 図版4)

Ⅱ区のPit 1は、Ⅱ区のほぼ中央北側にあつて、Ⅱ Pit 2を切っている。平面形は不整形を呈し、形が定まらない。出土遺物は染付の破片やキセル等の近世の所産のものが出ている。

Ⅱ区 Pit 2 (第60図, 図版4・30)

Ⅱ区のPit 2は、Pit 1の横にあつて、平面形は不整の楕円形状を呈している。これの覆土からは縄文土器の破片や石斧・石鏃・滑石製の玉等が検出され、黒曜石の剝片が小さなポリ袋一杯分出てきている。縄文時代後期頃の狩猟作業用の土壇か、あるいは落とし穴遺構として捕えてもよいものである。非常に興味深い例である。

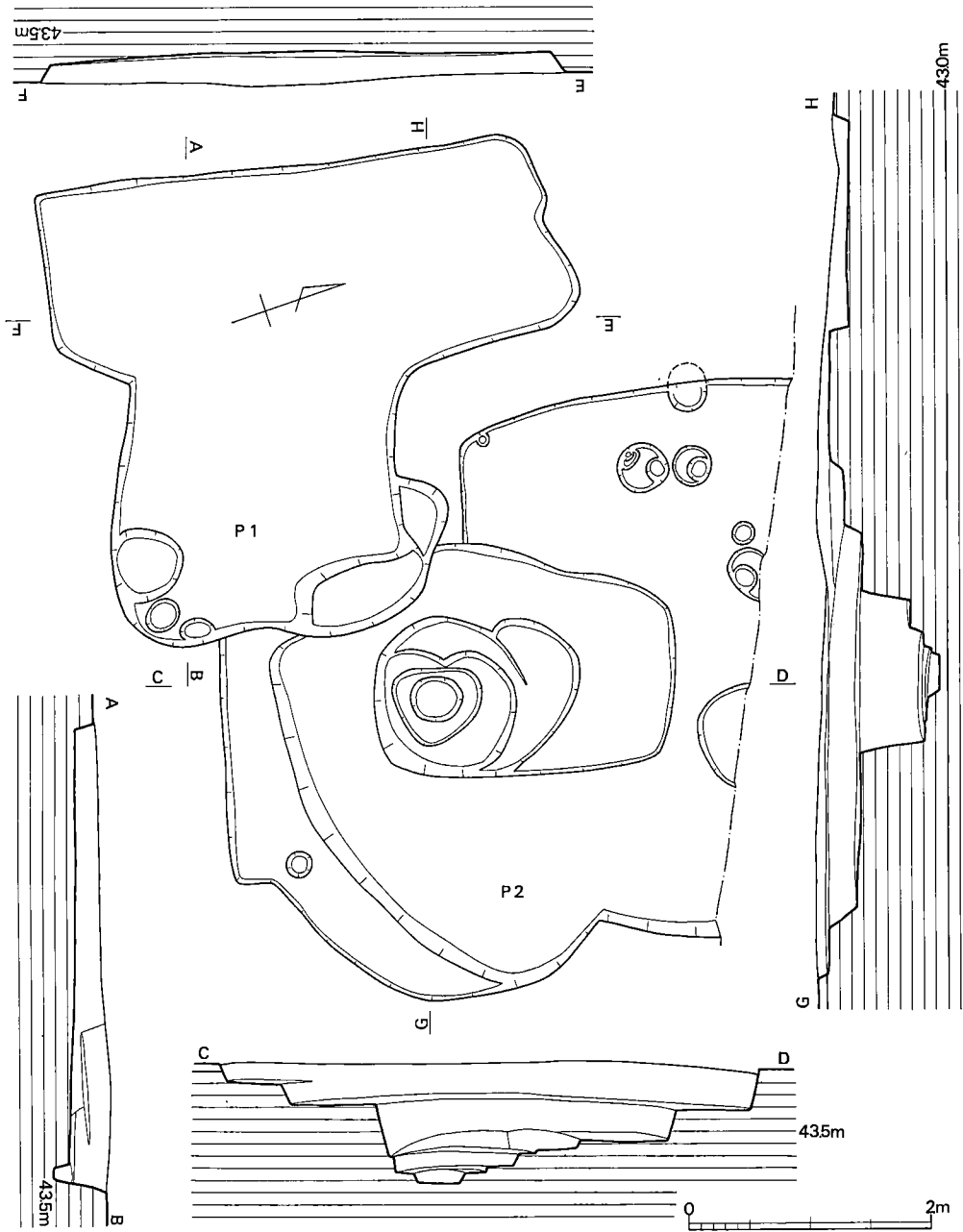
出土遺物 (第61・62図, 図版30)

縄文土器は第61図で、石器は第62図である。

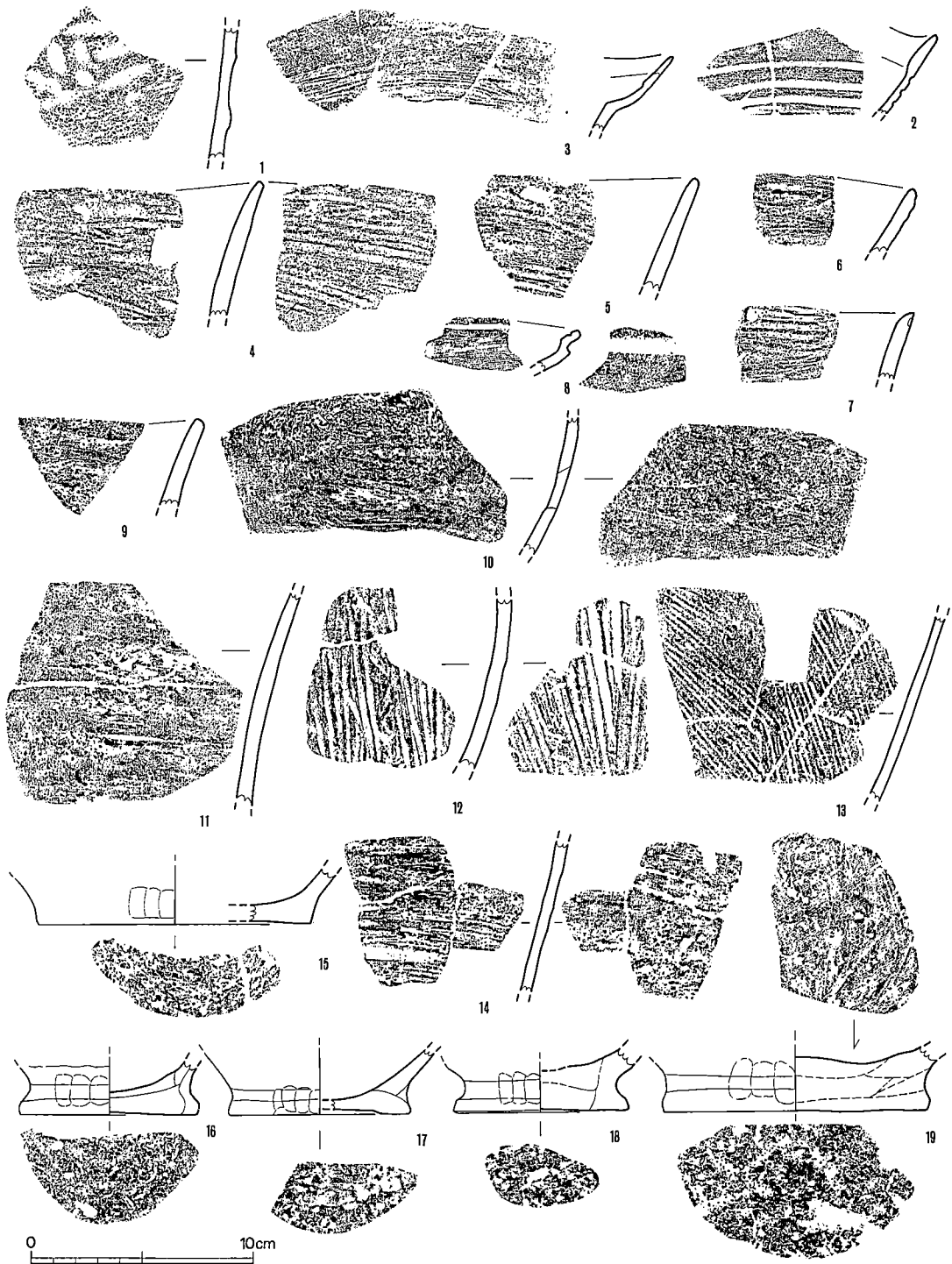
縄文土器 (第61図, 図版30)

土器は浅鉢と深鉢を主体とする器形である。文様の構成は、無文土器が中心でポリ袋2杯分であった。その中で文様を分類中心にして述べてみたい。

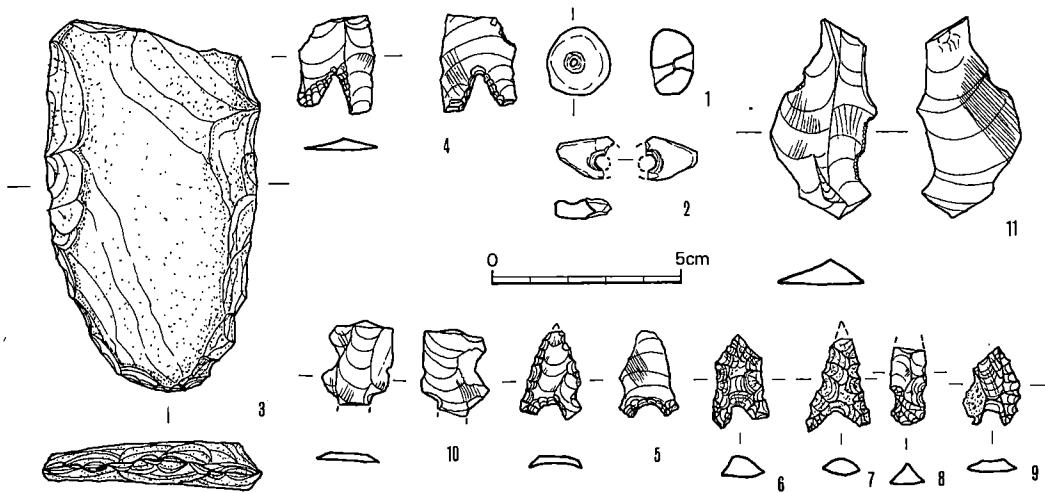
沈線文土器 (第61図①②) ①と②を沈線文として分類したが、時期は相違する。①は阿高系土器で、Pit 1・Pit 2の境界付近から出土したもので、胎土に細粒砂を含み滑石の混入は見られない。焼成はあまり良くなく色調は茶褐色である。時期は縄文後期初頭から始め頃に位置付



第60図 ピット1・2遺構実測図 (1/60)



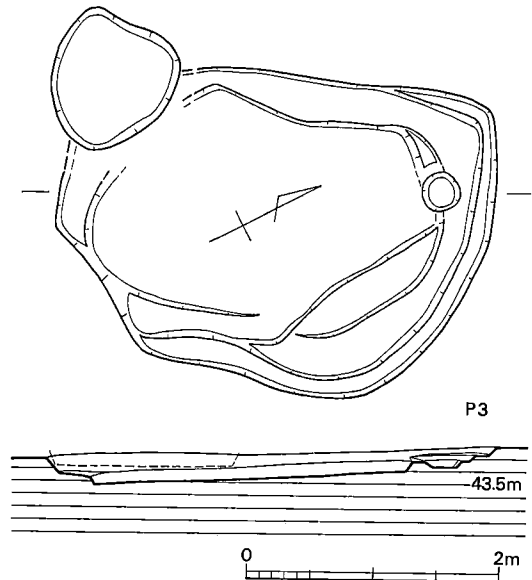
第61図 ビット2遺構出土遺物実測図① (1/3)



第62図 ピット2遺構出土遺物（石器）実測図②（1/2）

けられる。同様な土器は佐賀県の西有田町の坂の下遺跡から出土している。②の沈線は波状口縁の直下に位置する精製土器のもので、①より新しく縄文後期末から晩期にかけてのものである。胎土に細粒砂を含み、色調は灰褐色、焼成は良好なものである。

条痕文土器（第61図④～⑦・⑩～⑭）④～⑦は口縁部破片で、他は胴部破片である。④の様に表裏に斜行の条痕を有しているもので、これはアナガラ貝系の貝殻腹縁文である。粗製の深鉢形の土器で、胎土に細粒砂を含み色調は赤褐色を呈している。焼成は良好である。この傾向のものは⑤～⑦である。⑬・⑭の条痕は荒目のものである。⑬は板状原体の条痕で表裏同一のものである。胎土に細粒砂を含み、色調は黄灰色で焼成は良好である。器面の調整は板状原体での斜行状に施文している。⑭はアナガラ条痕で斜行方向に施文している。深鉢の胴部で、色調は表が黄灰色、裏面は黒色で、ヘラ状工具でのナデ仕上げである。胎土には細粒砂と金雲母を含み、若干ススの付着がみられている。焼成は良好である。時期は縄文後期末から晩期初頭頃の所産。



第63図 ピット3遺構実測図（1/60）

精製土器（第61図③・⑧）両方とも器形

は浅鉢の口縁部破片である。③は波状口縁を呈し、胎土に細粒砂と金雲母片が混入している。口縁部直下に条痕がみられ、口唇部付近にはススの付着がみられる。色調は表面が黄灰色を呈し、内面が黒色でヘラ状工具でナデている。焼成は良好である。⑧は浅鉢の口縁部破片である。胎土に細砂を含み、金雲母が混入している色調は灰褐色を呈している。焼成は良好である。縄文後期末の所産である。

無文土器（第61図⑨・⑩・⑪・⑭）粗製土器の深鉢の口縁部破片である。胎土に細粒砂を含み、色調は灰褐色で、焼成は良好である。器面の調整はヘラ状工具等のナデと考えられる。時期的には縄文後期末から晩期にかけてのものである。

底部（第61図⑮～⑰）全て平底をなすものである。若干中心部に向かって上がりぎみである。底部直上で、押え込む様に指痕が残っている。縄文晩期初頭の粗製深鉢の底部である。

石器（第62図，図版30）

器種は玉・石斧・石鏃・剝片で滑石製の玉から説明する。

玉（第62図①・②）両者とも滑石製で、①は大振の丸玉で、直径が1.6cmで厚さが1.1cmで、両面から穿孔している。重量は5.9g。②は猪牙玉に似せたもので、半分から欠損しているが、穿孔は両面からである。重量は1.0gである。

石斧（第62図③）覆土から出土したもので、石質は凝灰岩製の打製石斧である。重量は64gで、側縁部から加工を加えている。半分に欠損したものである。

石鏃（第62図④～⑨）安山岩製は⑦で、それ以外は黒曜石製である。④・⑤は剝片鏃、⑧は三角形鏃か、他は打製石鏃である。丁寧な加工を施しているもので、重量が1g～2gの間にある。

ツマミ形石器（第62図⑩）黒曜石製で、剝片鏃をつくる工程の中で生まれる石器といわれている。重量1.4gである。

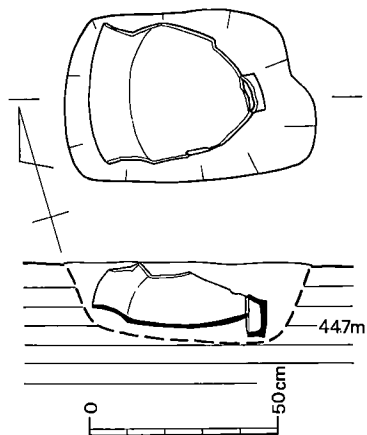
剝片（第62図⑪）黒曜石製で、石器を作製するためにつくられる剝片で、他に小さなポリ袋一杯分が出ている。

時期的には縄文土器の時期と同じと考えてよいものである。

Ⅱ区 Pit 3（第63図，図版19）

Ⅱ区の南側で、15号掘立柱遺構の東側に位置するもので、平面形は不整形である。出土遺物は見られない。

縄文甕埋設遺構（第64図，図版31）



第64図 縄文甕棺遺構実測図（1/20）



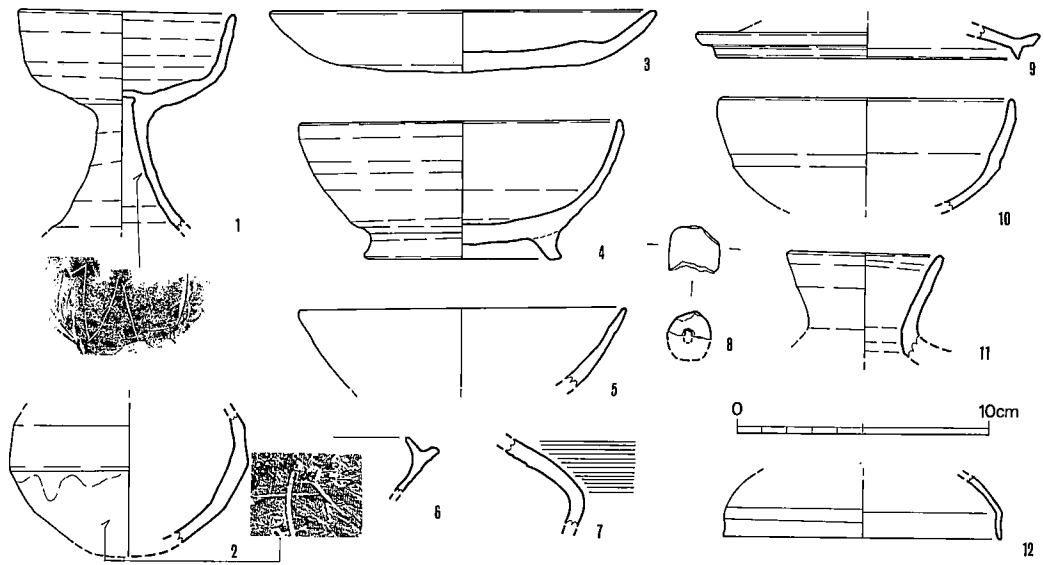
第65図 縄文甕棺出土遺物実測図 (1/3)

I区の東側，礫層面の近くで3号掘立柱建物北側にあつて，遺構検出作業時には掘り方は全く気付かず土器がのぞいたので，それを広げた。断切つて，掘り方を確認したが，積極的には掘り方を認めることはなかった。単に流れて横転したものか，積極的には言えないが，縄文晩期の甕棺墓はこんなものかと思われる。

出土遺物 (第65図)

縄文土器 (第65図)

半欠品ではあるが，ほぼ完形に復元できるもので，器面には条痕を付している甕形土器である。胎土には細砂を多く含み，色調は黄褐色で，内面は茶褐色から黄褐色で，内底部にはスス



第66図 その他柱穴より出土した遺物実測図① (1/3)

が付着している。口径31.9cm，器高39.4cm，底径8.4cmである。底部は平底ぎみの凹レンズ状に上がっている。器壁は薄く5～8mmである。口唇部に特長をもつものである。

時期的には，縄文晩期の始め頃に位置付けられるであろう。形式的に言うと大石式と黒川式の間位置する。小池氏の言う広田式より新しいと考えたい。

その他の柱穴より出土した遺物 (第66・67図，図版32)

遺物を出土した柱穴は107を数える。その大部分は図示できない様な少破片である。第66図に上げているものはその中でも図がとれるものである。

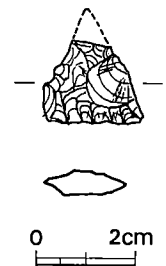
出土遺物 (第66図)

土器

小破片ながら図が取れるものを上げた。①はP-5から出土した須恵器の高杯である。②はP-95から出土した須恵器埴である。③はP-5から出土した土師器の皿である。④はP-101から出土した須恵器の高台付杯である。⑤はP-11から出土した須恵器の杯身である。⑥はP-109から出土した須恵器の杯身。⑦は⑥と同じ場所から出土したもので須恵器の短頸壺である。⑧はP-71から出土した土錘で半欠品である。⑨はP-102から出土した須恵器の有蓋椀。⑩はP-77から出土した土師器椀。⑪はP-29から出土した須恵器の瓶の注水部の破片。⑫はP-74から出土した須恵器の杯蓋である。

石器 (第67図)

東北端の柱穴より石鏃が1点出土している。黒曜石製である。先端部が欠失している。



第67図 その他柱穴より出土した遺物 (石器) 実測図② (2/3)

5. 溝状遺構と遺物 (第68～77図, 図版20・26～29)

高田遺跡のほぼ中央部から西側の $\frac{1}{3}$ は排水溝と大溝で, この溝から小溝が掘られている。一番新しいものは近世溝が遺構として, 水路が築れている。またその上に現代の三面側溝が作られていた。第1図の様に発掘調査区の中央を対角線に横切る様に農道がつくられ, これが江戸期よりずっと残っていた道である。このことを踏まえながら溝(1～5)までについて説明していきたい。表3を参照にされたい。

表4 溝状遺構一覧表

溝番号	溝名	地区	規模(巾m×長m×深さcm)	断面	出土遺物	切り合関係	時期	備考
1	溝1	I区	0.6m×70m×40cm	□	須恵器(甕破片)	住10・住11に切られている。	6C前半	斜行6C中頃には廃棄されている。溝2の方向にそれ以前の溝アリ。
2	溝2	I・II区	長(10m) 短(2.5m)×60m×150cm	U	縄文土器片・須恵器片 土師器片・竜形土器 土鍾	住18を切っている。	6C後半～ 8C前半	斜行
3	溝3	II区	1.5m×35m×30cm	U	須恵器片		中世～近世	直角に曲る
4	溝4	II区	長(5.0m) 短(1.5m)×62m×30cm	U	須恵器片		近世以前溝	斜行
5	溝5	II区	長(0.5m) 短(0.3m)×5m×20cm	U	須恵器		7C後半～	南北方向に直進
6	近世溝	I・II区	長(2m) 短(0.5m)×100m×50cm	U	須恵器片 近世染付等		近世～近代	現代の三面側溝以前斜行

溝1 (第69図)

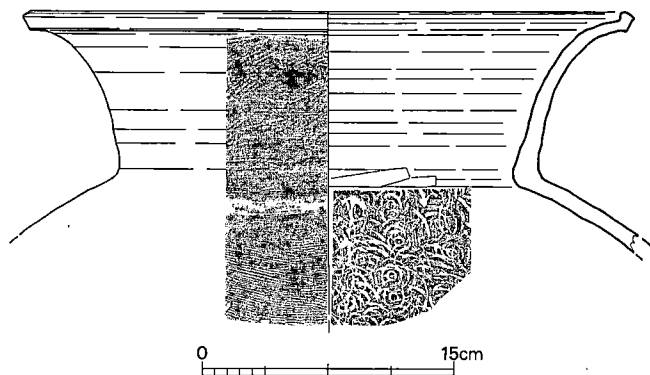
I区の中央の礫層面を横切ってつくられたもので, 溝2から用水を引き入れたものである。断面は□字状をなしている黒土色が覆土であった。出土遺物は甕の破片が出土している。11号住居跡・10号住居跡から切られている。この時期には, 水路として不使用で完全に, 廃絶されているものと思われる。廃絶されたのは6世紀の中頃である。

出土遺物 (第68図)

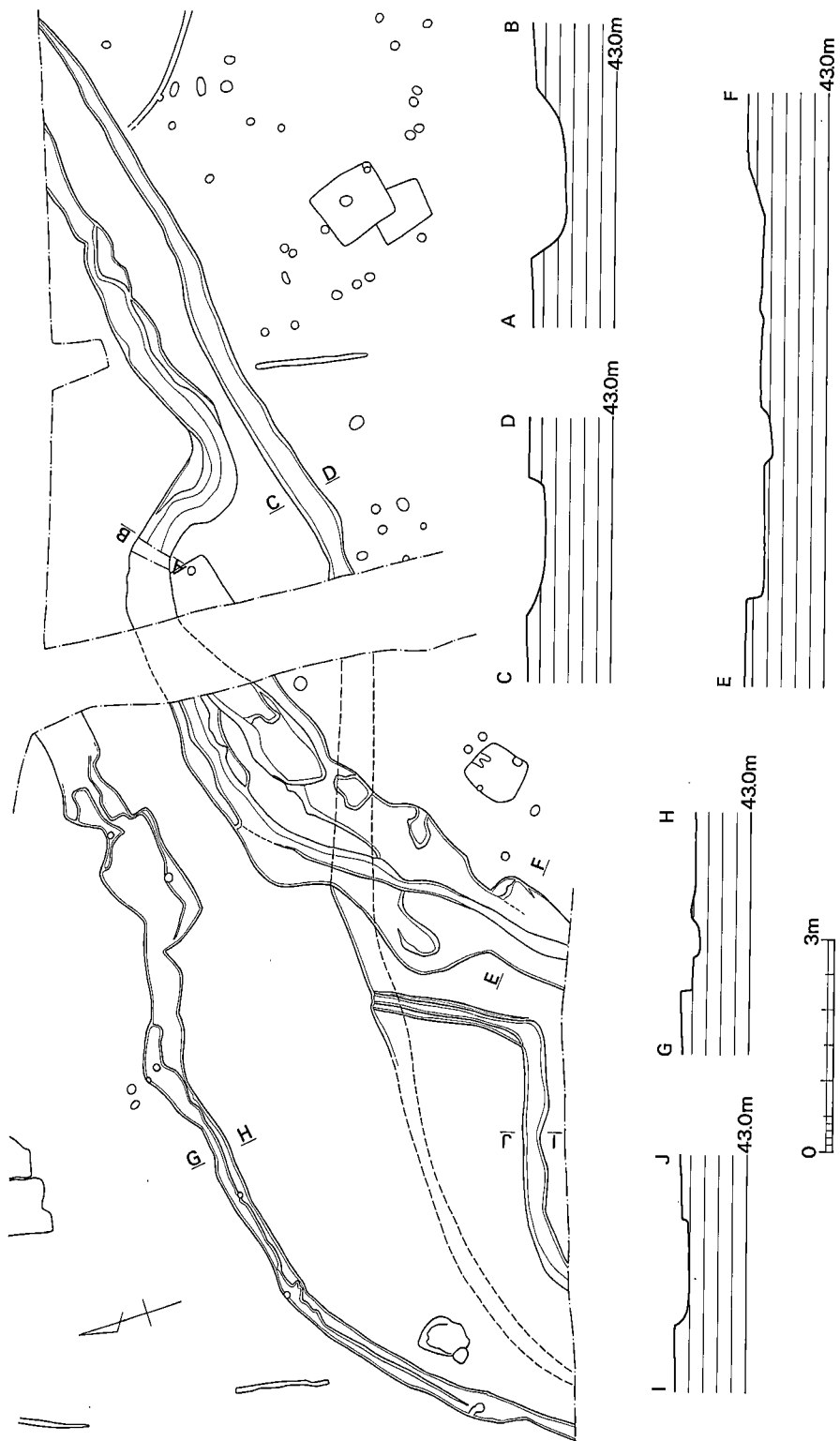
溝の中からはこの須恵器甕の破片が1点見い出された。

須恵器 (第68図, 図版26-4)

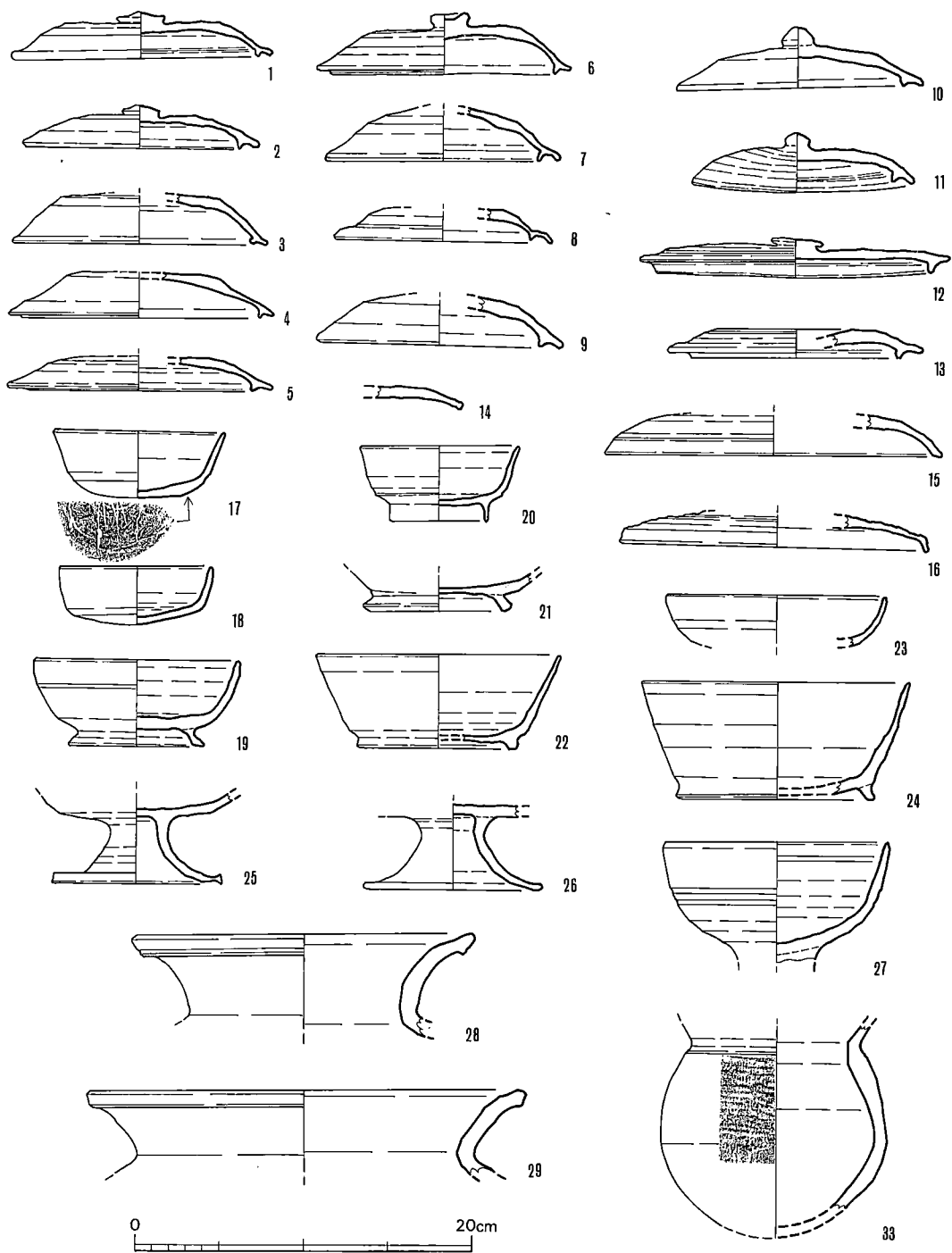
甕の破片で10号住居跡の西側で検出されたもので, 時期的には6世紀の前半頃の所産である。



第68図 溝1遺構出土遺物実測図(1/6)



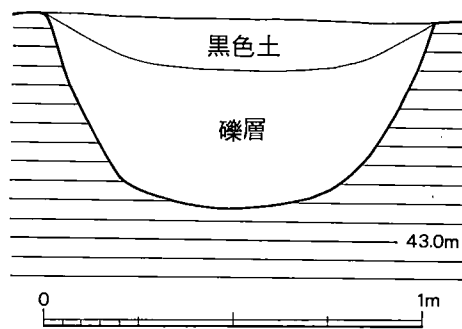
第69図 溝 (1~5) 遺構実測図 (1/100)



第70图 溝2遺構出土遺物実測図① (1/4)

溝2 (第66~72図, 図版20)

この遺跡で一番大きな大溝で、斜に構切る。最大幅が10m, 最小幅は1.5mで、下流にいくほど広がってくる。出土遺物は黒色土層より多くみられ、流れこんだ遺物が多量にみられた。時期的には6世紀中頃から7世紀後半を中心にする遺物がみられ、流れ込みとしては縄文土器の破片等もみられている。20cmほどの黒色土層の下に深さ90~100cmほどの礫層がびっしりつまっている。これが流れ込んだ溝(水路)として考えられる。この溝によって18号住居跡が流失している。



第71図 溝2遺構断面図(1/40)

出土遺物 (第70・72~75図, 図版28・29)

黒色土層を中心にまとめてみたものである。

須恵器 (第70・72図①~③7)

器種は杯蓋(①~⑬)・杯身(⑭・⑮)・椀(⑯~⑳)・高杯(㉑~㉓)・甕(㉔~㉖)・壺(㉗~㉙)・長頸壺(㉚~㉜)である。

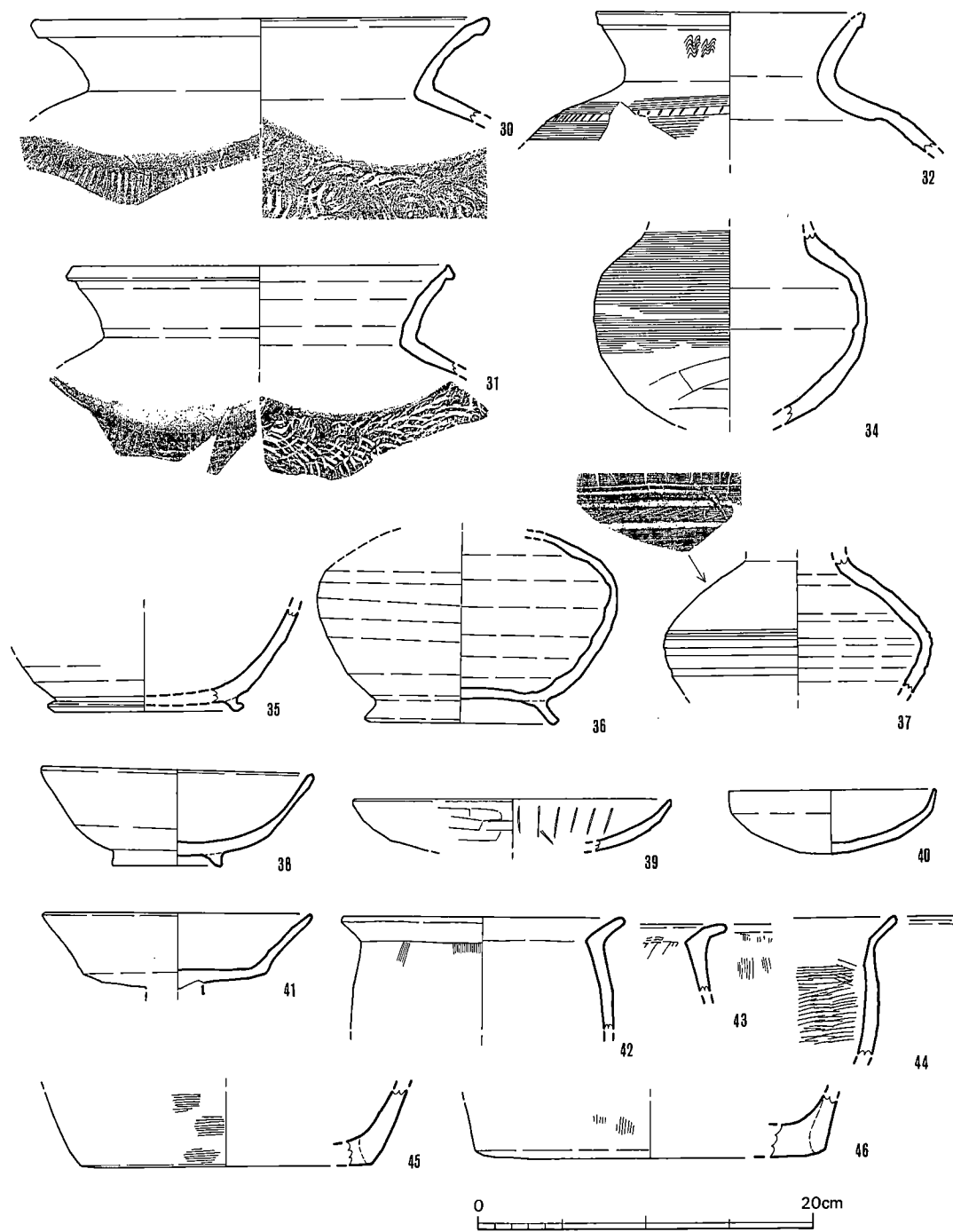
杯蓋(第70図①~⑬)天井部にすべて、ツマミをもっているもので、擬宝珠状の鈕とに分類できる。蓋は合せ蓋式であるが、蓋受けはあるものの、いっそう退化して、内側に隠れているもので、⑭・⑮・⑯の様に口唇部が三角形状断面に変化している。⑰・⑱は杯身で、⑲~㉒までは有蓋椀で、時期差がみられる。㉑~㉓までは高杯である。㉓は胎土に細砂粒含み、破口をみると小豆色を呈している。これまで見た須恵器の感じが相違する。㉔~㉖は大形甕・中形甕の破片である。㉗~㉙までは壺の破片で、器種的には、㉗は中形壺・㉘は短頸壺の胴部を中心とした破片である。㉚~㉜は長頸壺である。その特徴は観察表に記述している。

土師器 (第72図㉝~㉞)

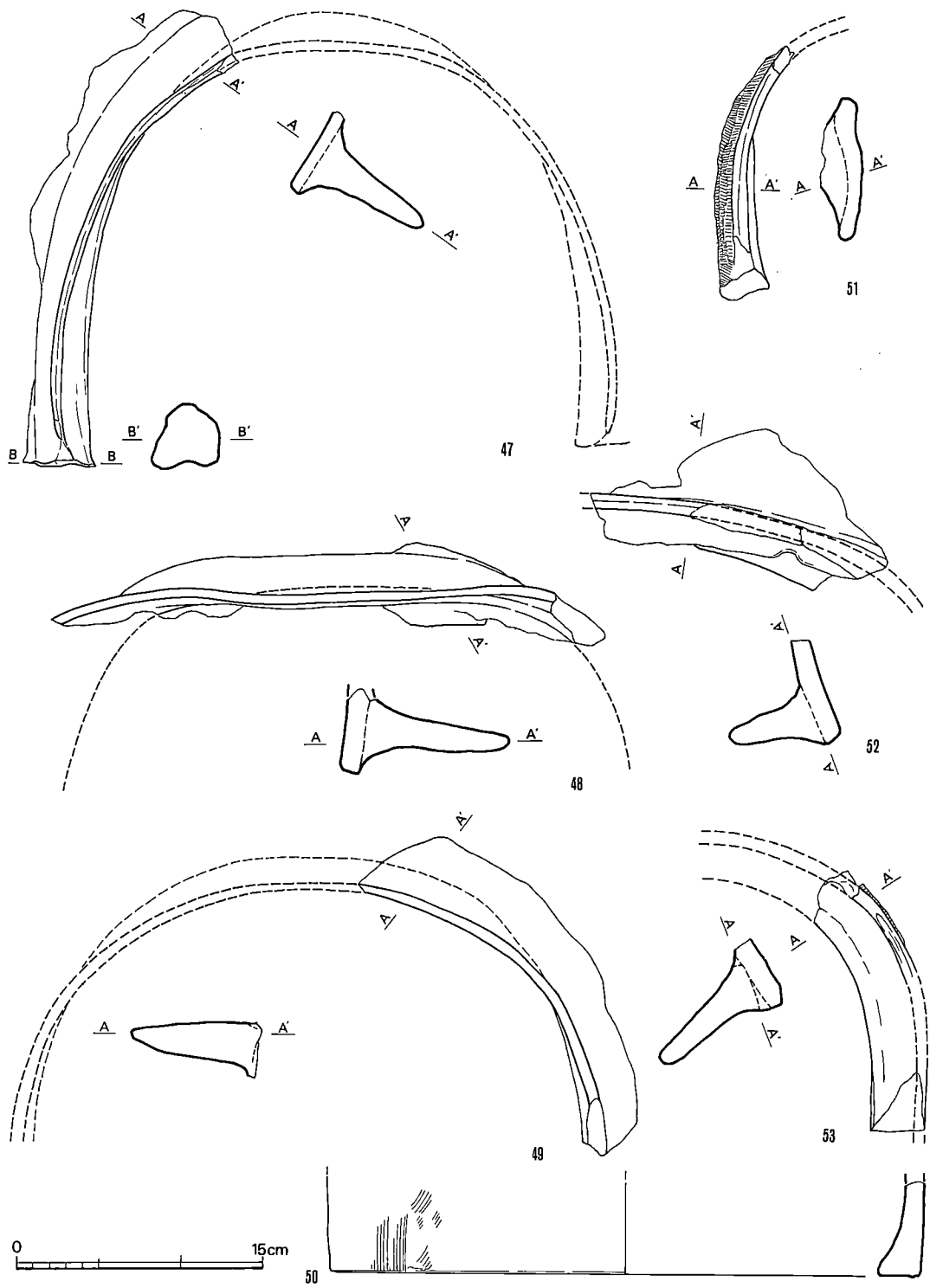
器種は椀・皿・杯・高杯・甕・壺・甗等である。㉝は高台の断面が三角形をなしているもので、瓦器質に近い椀で、平安時代末から中世にかけてのものである。最上層から出土している。㉞は皿で器面の内面に暗文が残り、外面は横方向のケズリがはいっている皿である。㉟は小形の皿で杯と考えられる。㊱は高杯の杯部の破片である。㊲・㊳は壺の口縁部で、だらだらと落ちて平底になるものである。㊴は甕の口縁部破片である。㊵・㊶は甗で底部に十文字の透しを有するものであろう。

甗形土器 (第73図)

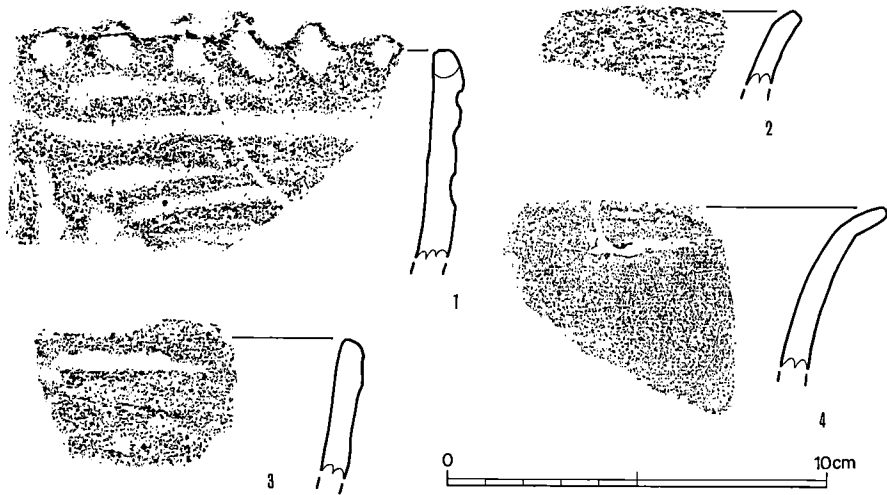
新しい器種で移動式の竈である。現代風に言えば七輪とかガスレンジである。㊷は焚口の庇



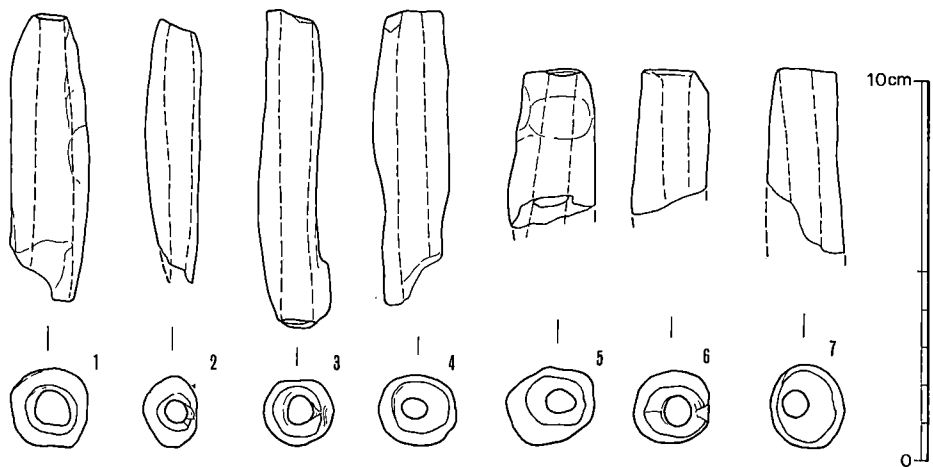
第72図 溝2 遺構出土遺物実測図② (1/4)



第73图 溝2遺構出土遺物実測図③ (1/4)



第74図 溝2遺構出土遺物実測図④ (1/2)

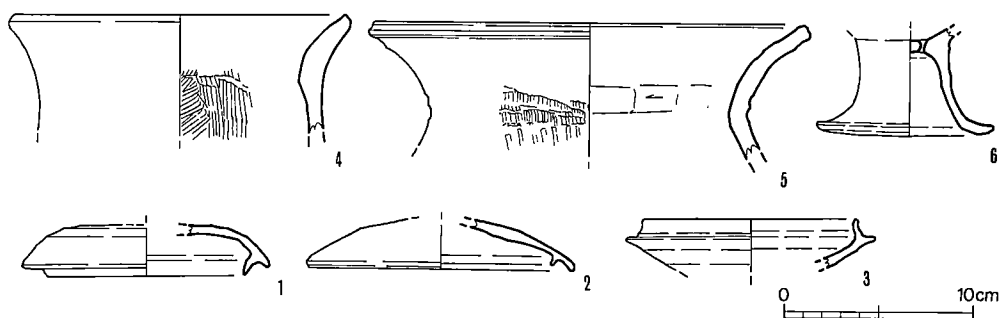


第75図 溝2遺構出土遺物実測図⑤ (1/3)

の部分、④も底の部分で、④～③も底の部分を中心にとった。使用されているため、2次的な火焼を受けているし、黒変ススが付着している部分がある。いわゆる現在言うところの羽釜である。⑤は羽釜の裾の部分である。

縄文土器 (第74図, 図版26)

縄文土器の破片が2点黒色土層に混入していた。①は阿高系の土器で、いわゆる坂の下遺跡出土したものに類似するが、滑石を含んでいない。時期的には新しくなる。②は条痕文土器である。①は縄文後期の所産で、②も同じ時期である。③P-8から出土したもの。④は3号住



第76図 溝3遺構出土遺物実測図 (1/4)

居跡の竈の周辺部から出土したものである。これも縄文後期のものと思われる。

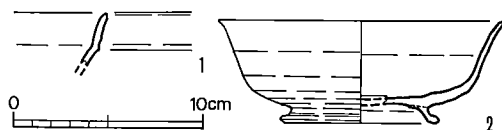
土錘 (第75図, 図版26)

溝の黒色土中から出土したもので、漁撈具として使用される。点数は7点である。完形のもの①から測ると、長さは7.5cm、最大幅2.2cm前後で、この遺跡から出土した土錘としては、ほぼ中形のものと同小形のものに分類できる。中形ものは溝2から出土したもの、小形ものは11号住居跡から出土している点である。図版26-3のもので、重量が15g前後のものである。①は紡錘状をなすもので、孔径は8~10mmで長さ7.4cm、幅(最大)2.2cm、重量は34gである。色調は灰褐色で、指圧痕が残り、仕上げの整形はない。②は細身のもので、長さは7.3cm前後で、幅が1.5cm、重量は20gで、丁寧に仕上げられている。色調は黄褐色。③は胴部の部分が欠損しているが長さ8.3cm、推定幅2.0cm前後、重量は24gである。④は使用されて消耗している部分があるもので、長さ7.8cm、幅2.1cm、孔径5~6mm、重量28gで、色調は灰褐色。⑤は半欠品である。残長が4.8cm、幅1.9cm、重量25g。孔径は6~7mm、色調は④と同じ。⑥も半欠品で、残長3.8cm、幅2.0cm、孔径8~10mmで重量15g。色調は灰褐色。⑦も半欠品で残長4cm、幅2.4cm、孔径6~9mm、重量20g、色調は褐色を呈し、指圧痕が残っている。

以上、溝2から出土した遺物は7世紀後半代を中心とするものが多量に出土している。

溝3 (第69・77図, 図版21)

近世の溝からの水口を入れたもので、田圃の畦状に直角に曲っている。地山を切り込んでつくられている。この地山には6世紀後半代の遺構面があるため、覆土中からはそれらの遺物が検出されている。



第77図 溝4・5遺構出土遺物実測図 (1/4)

出土遺物 (第76図, 図版26)

溝中より出土したものである。

須恵器（第76図①②③）

杯身と杯蓋の破片で、前者は③で、後者が①②である。①②は蓋の部分で返りがついている。②にはツマミを付けてもよいものである。③は杯身で、返りが付いているものである。

土師器（第76図④⑤⑥）

④は壺で、⑤は甕である。⑥は高杯の脚部で小形のものである。④は口縁部破片で17.5cmでただらたとして、平底にいたるものである。⑤は口縁部で「く」の字状に外反するもので、口径23cmである。

遺物からみると時期は6世紀後半に位置付けられるが、7世紀代まで流れていたものと考えられる。

溝4（第69・77図）

溝2と同じ方向の溝で、下流に行くほど幅がせまくなっている。覆土中からは若干の遺物が検出された。新しい時代の溝で近世溝以前の溝である。埋土は灰褐色土で締っていた。

出土遺物（第77図）

①は須恵器の杯身の口縁部の破片である。その他に黒曜石のコアが数点出土している。

溝5（第69図）

Ⅱ区の北西側の肩の近くにあつて、横に23号住居跡がある。上部は完全に削平され、下部の一部が残っているもので北から南へと、遺跡に直交しているもので、溝4に合流するものと考えられる。溝底より須恵器碗が出土している。時期としては7世紀後半代に位置するもので、黒褐色土が覆土として、つまっていた。

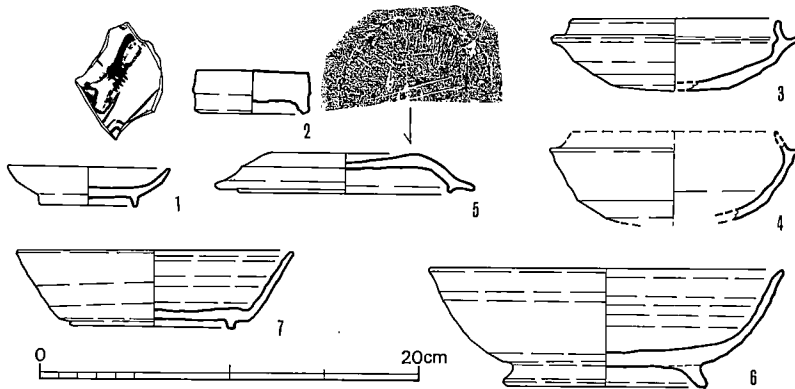
出土遺物（第77図，図版26）

溝底から出土したものが1点あった。

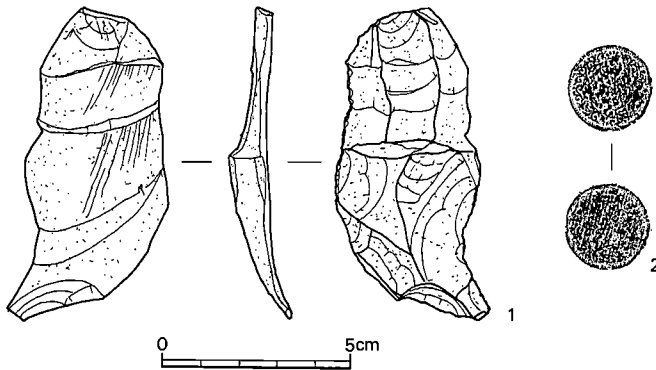
須恵器（第77図②）

②は碗である。口径15cmで器高5.4cm，高台に特長を有する。須恵の6型式である。

時期的には7世紀の後半頃である。



第78図 その他表土遺物
遺物実測図① (1/4)



第79図 その他表土出土
遺物実測図② (1/2)

6. その他の遺構と遺物 (第78・79図, 図版32)

表土から出土したものをまとめてみた。遺物は、近代の一銭銅貨や染付、古くは旧石器の遺物まで採集されている。

表土層の出土遺物 (第78・79図, 図版32)

①は近世陶器で染付で、肥前糸のものである。②中世期の中国磁器で、福建省の同安窯白磁の高台である。13~14世代の貿易陶磁である。④・⑤は須恵器の杯身で、⑤は須恵器の杯蓋である。⑥・⑦は須恵器の有蓋杯である。③・④の年代は6世紀後半、⑤は7世紀前半、⑥は7世紀中頃で、⑦は7世紀末から8世紀前半にはいると考えられる。⑨は縄文時代以前の旧石器時代にはいるもので、石質は堆積岩系のものである。縦長剝片で、打瘤痕が残り、側縁部に細い加工がみられ、サイドスクレイパーとしてみてもよいであろうが、ここでは縦長剝片として上げる。⑩は大正8年製の一銭銅貨である。

表5 高田遺跡遺物観察表

※ 小田富士雄氏の編年使用。

器種	挿図番号 図版番号	出土 地点	法量 (cm)	形態の 特徴	手法の 特徴	ヘラ 記号	型式 名	備考
須恵器 杯蓋	第10図 図版22-1	住2 床面	口径12.8 器高3.6	口縁部は、ゆるやかに内傾し、口唇端部は丸くなっている。天井部は丸くならぬ。器高は高い。 胎土：細粒砂を含み、焼成堅固、色調：灰色。	天井部が回転ヘラ削り、他はヨコナデ。天井部内面ヨコナデ仕上げである。	○	4A	
〃	第15図①	住3 (No.12-1)	口径13.0 器高3.0(残)	口縁部は、ゆるやかに内傾し、口唇端部は丸く、天井部は丸くならぬである。 胎土：砂粒を含み、焼成良、色調：灰青色。	天井部が回転ヘラ削り、他はヨコナデ。内面ヨコナデ仕上げである。		4A	反転、 残片
須恵器 杯身	第15図② 図版22-2	住3 (No.1)	口径11.0 器高4.4	受け部の返りはシャープさはなく、厚い感じで平底をなしている。体部の器高は高い。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：灰色。	体部が回転ヘラ削り、他はヨコナデ。内面ヨコナデ仕上げ、作りは雑。		4A	
〃	第15図③	住3 (No.14)	口径11.8	受け部の返りは鈍く厚手である。平底をなす。 胎土：精良、焼成良、色調：灰色。	体部が回転ヘラ削り、他はヨコナデ。焼きぶくれしている。		4A	反転、 残片
〃	第15図④	住3 覆土	口径11.0 器高3.6(推)	受け部の返りは鋭く平底をなす。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：内外とも明るい灰色。	体部が回転ヘラ削り、他はヨコナデ、作りは良好。		4A	反転、 残片
〃	第15図⑤ 図版22-3	住3 (No.12)	口径10.9 器高3.8	受け部の返りは鈍く平底をなす。 胎土：細粒砂を含み、焼成堅固、色調：灰色。	底部から体部下回転ヘラ削り、他はヨコナデ。	○	4A	
須恵器 杯蓋	第15図⑥ 図版22-4	住3 張り床	口径7.8 最大径12	小形のもので、返りがつく。天井部は平坦である。	天井部が回転ヘラ削り、他はヨコナデ。		4B	反転、 残片
須恵器 杯身	第15図⑦	住3 覆土	口径11.0 器高3.4	小形のもので、体部はゆるやかに外にひらき、平底をなす。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：背灰色。	体部が回転ヘラ削り、他はヨコナデ仕上げ。		4B	反転、 残片
須恵器 杯蓋	第15図⑧ 図版22-5	住3 覆土	口径11.7 器高3.8(推)	口縁部はゆるやかに内傾し、口唇端部は丸くなっている。天井部は丸くならぬになる。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：灰色。	天井部が回転ヘラ削り、他はヨコナデ仕上げ。	○	4A	
須恵器 杯身	第15図⑨	住3 覆土	口径13.5 器高4.1	受け部の返りは短く、ゆるやかに丸味をおびている。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：灰色。	体部の回転ヘラ削り、他はヨコナデ仕上げ。	○	4B	
須恵器 杯蓋	第15図⑩	住3 覆土	口径13.0	口縁部はゆるやかに内傾し、天井部は丸くなる。 胎土：砂粒を含み、焼成良、色調：灰色。	天井部から1/2回転ヘラ削り他はヨコナデ。内面もヨコナデ仕上げ。		4A	反転、 残片
〃	第15図⑪ 図版22-6	住3 覆土	口径12.0	口縁部はゆるやかに内傾し、天井部は丸くなる。 胎土：細粒砂を含み、焼成堅固、色調：灰色。	天井部から1/2回転ヘラ削り他はヨコナデ。内面もヨコナデ仕上げ。		4A	
〃	第15図⑫	住3 (No.32)	口径12.2	口縁部はゆるやかにひらき、天井部は丸くなる。 胎土：細砂を多く含み、焼成良、色調：灰色。	天井部はヘラ起しでヨコナデを内面まではいっている		4A	反転、 残片
〃	第15図⑬ 図版22-7	住3 (No.9)	口径11.2 器高4.1	口縁部はゆるやかに内傾し、天井部は丸くなり、器高は高い。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：黄褐色。	天井部から1/2回転ヘラ削り他はヨコナデ。内面もナデ仕上げ。		4A	
須恵器 杯身	第15図⑭	住3 (No.8)	最大径13.0	受け部の返りは鋭く、しかし打欠いている体部から底部は丸味をおびている。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：黄褐色。	体部から底部が回転ヘラ削り、他はヨコナデ。内面もナデ仕上げ。		4A	反転、 残片
〃	第15図⑮	住3 覆土	口径10.8	受け部の返りは鋭く内傾し、体部は丸味をおびている。 胎土：砂粒を少し含み、焼成良、色調：灰色。	体部から底部が1/2回転ヘラ削り、他はヨコナデ。内面もナデ仕上げ。		4A	反転、 残片
須恵器 高杯	第15図⑯	住3 覆土	口径10.0	小形の高杯の皿部で、体部下は丸味をおびながら脚分となる。 胎土：砂粒を含み、焼成良、色調：黒灰色。	体部下にカキメ、他はヨコナデ。内面もナデ仕上げ		4A	反転、 残片
〃	第15図⑰	住3 (No.2)		高杯の脚部。 胎土：細砂を含み、焼成良、色調：青灰色。	脚部はヨコナデ。		4A	
〃	第15図⑱	住3 覆土	最大径12.2	高杯の皿部、受け部の返りは鋭い。しかし打欠いている。 胎土：細砂を含み、焼成良、色調：灰色。	体部下にカキメ、他はヨコナデ。内面ナデ。		4A	反転、 残片
須恵器 高杯蓋	第15図⑲ 図版22-8	住3 覆土	口径13.4 器高5.5	高杯の蓋、天井部にツマミをもつ。丸味をおびながらだらだらと内傾している。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：灰色。	天井部が回転ヘラ削り、他はヨコナデ。内面ナデ。	○	4	
須恵器 杯身	第15図⑳ 図版22-9	住3 (No.3)	口径16.3 器高6.0(推)	大形のもので、底部から体部へは丸味をおびながら口縁部にいたっている。 胎土：細砂を含み、焼成は軟質、色調：灰青色。	体部下1/2から底部にかけて回転ヘラ削り、他はヨコナデ。内面もヨコナデからナデ仕上げ。		4A	
〃	第15図㉑	住3 (No.17)	口径11.6 器高5.6	大形のもので、口縁部から底部は丸味をおびながら平底となっている。灰かぶりや気泡が多くはいつている。 胎土：細粒砂を含み、焼成堅固、色調：灰色。	全てナデで、口縁部から下半までヨコナデ、他ナデ。		4A	反転、 残片
須恵器 泉	第15図㉒	住3 (No.10)	最大径9.1	球体状の脚部で、一孔をもち平底に近い丸底。 胎土：細粒砂を含み、焼成堅固、色調：灰青色。	底部は回転ヘラ削り、孔より上半はカキメで、底にヘラ記号。内面はナデ、内底には竹輪の様なもので押し、明いた痕跡あり。	○	4A	

器種	挿図番号 図版番号	出土 地点	法量 (cm)	形態の 特徴	手法の 特徴	ヘラ 記号	型式 名	備考
須恵器 瓶	第15図⑳	住 3 覆 土	最大径19.0	平瓶の胴部、平底をなす。 胎土：砂粒を若干含み、焼成良好、色調：青灰色。	器面全体にカキメ、内面は ヨコナデ。		4	反転、 残片
須恵器 壺	第15図㉑	住 3 (No.5)	最大径12.0	小形の壺の胴部、平底に近い丸底をなす。 胎土：砂粒を含み、焼成良好、色調：青灰色。	口縁部はヨコナデ、他はカ キメ。内面はヨコナデ、底 部はケズリのちにカキメ。		4	反転、 残片
〃	第15図㉒	住 3 (No.19)	最大径13.0	中形の壺の胴部、平底に近い丸底をなすもの。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：灰色。	胴部は全体カキメ、粗カキ メ。下部にはヘラケズリ。 灰をかぶったものである。 内面はヨコナデからナデ。		4	反転、 残片
高台付 杯	第15図㉓	住 3 (No.26)	口径13.0 底部 8.1 高台高 0.4 器高 4.6	口縁部はゆるやかにひらき、平底に高台付く。高台が 外張りして末端が若干外に張り出す。	内外面ともナデである。		6	反転、 残片
土師器 甌	第16図㉔	住 3 (No.2)	口径29.3(復)	把手付のもので、口縁部は外反し、口唇部に若干のく ぼみをつくる。 胎土：細砂を含み、焼成良、色調：黄褐色。	口縁直下はナデで頸部から はタタキである。内面はナ デでハケメの後ナデ仕上げ			製埴土器 (玄海式)
土師器 甕	第16図㉕	住 3 (No.16)	口径21.6 胴部径30.8	口縁部は外反し、最大径は胴部中央部、口唇部にくぼ みをつくる。内面には二次焼成により黒変あり。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：黄褐色。	内外面とも頸部以下はタタ キ。			製埴土器 (玄海式)
土師器 甕	第16図㉖	住 3 (No.28)	口径20.2	口縁部は外反し、口唇部にくぼみをつくる。二次的な 焼成による黒変ある。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：黄褐色。	器面は頸部以下はハケメ、 以上はヨコナデ。内面ナデ 仕上げ。			製埴土器 (玄海式)
土師器 甕	第16図㉗	住 3 (No.15)	口径21.3	口縁部は外反し、最大径は胴部中央にあるもので、口 唇部に特長をもつ。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：黄褐色。	内外面とも頸部以下タタキ (平行線状工具)			製埴土器 (玄海式)
〃	第16図㉘	住 3 (No.28)	口径18.6(復)	口縁部は外反し、口唇部に特長をもつもの。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：黄褐色。	頸部以上はヨコナデ、以下 はタタキ。内面はヨコナデ			製埴土器 (玄海式) 反転、残片
〃	第16図㉙	住 3 (No.28)	口径22.0(復)	口縁部は外反し、口唇部に特長をもつ。 胎土：細砂、雲母片を多く含み、焼成良、色調：黄褐 色。	頸部以上はヨコナデ、内外 面とも。			製埴土器 (玄海式) 反転、残片
〃	第16図㉚	住 3 (No.26)		口縁部は外反するもの、口唇部に特長をもつ。 胎土：細砂を含み、焼成良、色調：黄褐色。	頸部以上、内外面ともヨコ ナデ。			製埴土器 (玄海式)
土師器 甕	第16図㉛	住 3 (No.28)	口径26.0	口縁部は外反し、口唇部は丸味をおびている。 胎土：細砂を多く含み、焼成良、色調：黄褐色。	頸部以上ヨコナデ、内外面 とも。			反転、 残片
〃	第16図㉜	住 3 (No.27)		口縁部は外反し、口唇部は丸味をおびている。く字状 口縁。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：茶褐色。	頸部以上、内面はヨコナデ 以下外面はハケメ。			
土師器 壺	第16図㉝	住 3 (No.32)		口縁部はゆるやかに外反している。 胎土：細粒砂を多く含み、焼成良、色調：黄褐色。	頸部以下外面はハケメ、以 上ヨコナデ。内面はヨコナ デからハケメ、以下はケズリ。			
〃	第16図㉞	住 3 (No.11)	口径13.0(復)	口縁部はゆるやかに外反して、だらだらと落ちて平底 の底部にいたるもの。 胎土：細砂を含み、焼成良、色調：黄褐色。	口縁部ヨコナデ、頸部以下 ハケメ、内面はヨコナデ、 以下はナデ。			反転、 残片
〃	第16図㉟	住 3 覆 土	口径12.0(復)	口縁部はなだらかに傾斜をもちながら、平底の底部に なるもの。 胎土：細粒砂を多く含み、焼成良、色調：黄灰色。	口縁部外面はヨコナデ、以 下ハケメ。内面はヨコナデ 以下はケズリ。			反転、 残片
〃	第16図㊱	住 3 (No.21)		口縁部が直立に近いもので、だらだらと落ちて平底と なる。 胎土：細粒砂を多く含み、焼成良、色調：黄灰色。	口縁部外面はヨコナデ、以 下ハケメ。内面はヨコナデ 以下はナデ。			
土師器 壺	第16図㊲	住 3 (No.32)		口縁部は外反し、だらだらと落ちて平底の底部になる もの。 胎土：細粒砂を含み、焼成良好、色調：黄褐色。	口縁部はヨコナデ、以下は ハケメ。内面ヨコナデ、以 下はナデ。			
〃	第16図㊳	住 3 カマド 付 近		口縁部は外反し、なだらかに内傾して平底となる。 胎土：細砂を含み、焼成良好、色調：黄褐色。	口縁部はヨコナデ、他は不 明。			
土師器 高 杯	第16図㊴	住 3 (No.6)		高杯の皿と柱状部着装部。 胎土：砂粒を含み、焼成良好、色調：黄褐色。	手法は磨滅して不明。			
〃	第16図㊵	住 3 (No.2)		高杯の柱状部。 胎土：砂粒を多く含み、焼成良、色調：茶褐色。	同 上			
土師器 甌	第16図㊶	住 3 (No.12)	底径10.0	甌の橋部。 胎土：細砂を多く含み、焼成良、色調：黄褐色。	外面はハケメからナデ、内 面はナデ。			反転、 残片
〃	第16図㊷	住 3 (No.26)	底径15.4	甌の橋部。 胎土：細砂を多く含み、焼成良、色調：黄褐色。	外面はハケメ、内面はナデ 底付近は部分的なケズリ。			反転、 残片
土師器 甌	第16図㊸	住 3 (No.31)		甌の橋部。 胎土：小砂を含み、焼成良、色調：黄褐色。	外面ハケメからケズリ、底 付近ナデ。内面ナデからケ ズリ横位方向。			

器種	挿図番号 図版番号	出地 土点	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	ヘラ 記号	型式 名	備考
〃	第16図④	住 3 (No.31)		甌の裾部。 胎土：細砂を含み、焼成良、色調：黄褐色。	外面格子状タタキ、内面ナ デから底付近横位方向ケズ リ。			
〃	第16図⑤	住 3 覆 土		甌の裾部、透しあり。 胎土：細粒砂を含み、焼成良好、色調：黄褐色。	内外面とも磨滅して不明。			
土師器 把手	第16図⑥	住 3 (No.29)		甌の把手また甌の把手。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：黄褐色。	外面ナデ、内面タタキ。			
手捏 土器	第16図⑦	住 3 (No.24)		丸底で手捏。 胎土：砂粒を多く含み、焼成良、色調：黄褐色。	内外面ともナデ、指痕残る			タコ壺 か
土師器 罎	第16図⑧	住 3 (No.23)	口径10.3 器高 7.2	口縁部は直口して丸底となる。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：黄褐色。	外面はハケ目、底部はナデ 内面ナデ。			
土師器 杯身	第16図⑨	住 3 (No.18)	口径12.9 器高 3.6	口縁はゆるやかに外へ開くもので底部は平底。 胎土：細粒砂を含み緻密、焼成良、色調：黄褐色。	底部はヘラ切り離し、内外 面ともナデ、口縁部付近ヨ コナデ。			
土師器 杯身	第16図⑩	住 3 (No.29)	口径15.5(復)	口縁部はゆるやかに外へ開くもの。穿孔がある。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：黄褐色。	内外面ともミガキ。			反転、 残片
須恵器 甌	第19図① 図版24-1	住 4 下 層	口径16.4	口縁部は外反し、口唇部は丸味をおびている。最大径 が胴部中央にある。 胎土：細粒砂を含み、焼成堅固、色調：灰色。	口縁部は内外面ともヨコナ デ、以下はタタキ。	4 A		反転、 残片
須恵器 杯蓋	第19図② 図版24-2	住 4 (No. 3)	口径12.2 器高 3.9	天井部からゆるやかに丸味をもたせ、口縁部に内傾さ せる。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：黄灰色。	天井部は回転ヘラ削り で他ヨコナデ。内面ナデ仕上 げである。	4 A		
須恵器 杯身	第19図③ 図版24-6	住 4 上 層	口径11.0 器高 3.7	受け部の返りは厚く、焼きぶくれである。 胎土：細粒砂を含み、焼成堅固、色調：灰色。 焼きぶくれが目立つ。	底部は回転ヘラ削り、体部 ヨコナデ、内面ナデ。	4 A		
須恵器 杯蓋	第19図④ 図版24-4	住 4 上 層	口径12.6 器高 3.7	天井部からゆるやかに丸味をもたせ、口縁部に内傾さ せる。 胎土：細粒砂を含み、焼成堅固、色調：灰色。	天井部は回転ヘラ削り、体 部ヨコナデ。内面はヨコナ デからナデへ。	4 A		
須恵器 杯身	第19図⑤	住 4 上 層	口径11.2 器高 3.5	受け部の返りは鈍く、返りは内傾している。 胎土：細粒砂を含み、焼成堅固、色調：灰色。	底部は回転ヘラ削り、体部 ヨコナデ。内面ヨコナデか ら内底面はナデ。	4 A		
須恵器 杯蓋	第19図⑥ (No. 2)	住 4	口径12.3 器高 4.3	天井部からゆるやかに丸味をもたせ、口縁部に内傾さ せる。器高は高い。 胎土：細粒砂を含み、焼成堅固、色調：灰色。	天井部は回転ヘラ削り、体 部ヨコナデ。内面ヨコナデ からナデ。	4 A		
	第19図⑦			欠 番				
須恵器 椀	第19図⑧	住 4 上 層	口径10.2 器高 5.5	底部からゆるやかに丸味をおびながら、口縁部にいた り、口縁下半に三条の沈線をもつ。 胎土：細粒砂で、焼成堅固、色調：暗灰色。	底部は回転ヘラ削り、口縁 まではヨコナデ、内面もヨ コナデからナデ、内底面に いたる。	4 A		
土師器 甌	第19図⑨ 図版24-7	住 4 (No. 7)	口径16.5 器高17.9	口縁部は外反し丸底を呈する。二次的に火勢を受ける 口唇部に特長あり。 胎土：細粒砂、金雲母少含む、焼成良、色調：褐色。	口縁部から頸部まではヨコ ナデ、他は内外面ともタタ キ、黒変部分あり。			製塩土器 (玄海灘式)
〃	第19図⑩	住 4 上 層	口径21.2(復)	口縁部は外反し、口唇部に特長をもつ。二次的に焼成 を受く。 胎土：細粒砂、焼成良、色調：茶褐色。	口縁部から頸部まではヨコ ナデ。			〃 反転、 残片
〃	第19図⑪	住 4 上 層	口径20.0(復)	口縁部は外反し、口唇部に特長をもつ。二次的に焼成 を受く。 胎土：砂粒を含み、焼成良、色調：褐色。	口縁部から頸部まではヨコ ナデ。			〃 反転、 残片
〃	第19図⑫ 図版24-8	住 4 上 層	口径28.0(復)	口縁部はゆるやかに外反し、口唇部は丸味をもつ。 胎土：細粒砂を多く含み、焼成良、色調：黄灰色。	口縁部直下ハケメ、他はヨ コナデ。			反転、 残片
〃	第19図⑬	住 4 下 層	口径25.8(復)	口縁部はゆるやかに外反し、口唇部は丸味をもつ。 胎土：細粒砂を多く含み、焼成良、色調：黄褐色。	口縁部直下から胴下半まで ハケメ。内面はヨコナデ、 擦過。			
〃	第19図⑭	住 4 下 層		口縁部はゆるやかに外反し、口唇部は丸味をもつ。 胎土：細砂を多く含み、焼成良、色調：黄褐色。	口縁部直下ハケメ、口縁部 ヨコナデ、内面はタテ方向 ナデ。			
〃	第19図⑮	住 4 上 層	口径16.0	口縁部はゆるやかに外反し、口唇部は丸味をもつ。 胎土：細小砂を多く含み、焼成良、色調：黄褐色。	口縁部直下ハケメ、口縁部 ヨコナデ、内面はケズリ。			反転、 残片
〃	第19図⑯	住 4 上 層		口縁部はゆるやかに外反。 胎土：細砂を含み、焼成良、色調：茶褐色。	口縁部直下ハケメ、口縁部 ヨコナデ。			
土師器 甌	第19図⑰	住 4 上 層		口縁部はゆるやかに外反し、口唇部に特長をもつ。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：黄褐色。	口縁部ヨコナデ、以下ハケ メ、内面ナデ。			

器種	挿図番号 図版番号	出土 地点	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	ヘラ 記号	型式 名	備 考
土師器 甕	第19図①	住 4 上 層		口縁部は外反し、口唇部に特長をもつ。 胎土：細砂を多く含み、焼成良、色調：黄褐色。	内外面ヨコナデ。			
土師器 甕	第19図②	住 4 上 層		口縁部は外反し、口唇部に特長をもつ。	内外面ヨコナデ。			
土師器 罎	第19図③	住 4 上 層	最大胴径12.7	丹塗で球形から口縁部がラップ状に開く。 胎土：細粒砂を含み、焼成軟、色調：黄灰色。 (外)丹残。	内面はナデ、外面はマメツ しているため丹残る。			反転、 残片
土師器 壺	第19図④ 図版24-9	住 4 (No. 3)	口径15.0	口縁部からだらだと平底にいたるものである。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：茶褐色。	外面はハケメ、口縁部付内 外面ともヨコナデ、他ナデ			反転、 残片
土師器 壺	第19図⑤	住 4 下 層	口径13.0	口縁部からだらだと平底にいたるもの。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：茶褐色。	口縁部付近両面ともヨコナ デ、他ナデ。			反転、 残片
把 手	第19図⑥	住 4 上 層		椀付くものである。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：茶褐色。	調整ナデ。			
把 手	第19図⑦ (No. 1)	住 4		甕か甕につくものである。 胎土：細粒砂を多く含み、焼成良、色調：茶褐色。	調整ナデ。			
土師器 甕	第19図⑧ (No. 1)	住 4		裾部の破片。 胎土：細粒砂を多く含み、焼成良、色調：茶褐色。	外面ハケメ、内面はナデ。			
土師器 甕	第19図⑨	住 4 上 層		裾部の破片、外面部分的に黒変している。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：黒褐色。	外面粗いハケメ、内面はナ デ。			
土師器 甕	第19図⑩	住 4 上 層		裾部の破片である。 胎土：細粒砂を多く含み、焼成良、色調：灰黄色。	外面ハケメ、内面ナデ。			
須恵器 杯 蓋	第21図①	住 5 覆 土		丸味をおびて内傾している。 胎土：砂粒を含み、焼成良、色調：(内)暗灰色・(外) 黒灰色。	外面は回転ヘラケズリ、内 面ナデ。		4 A	
須恵器 杯 身	第21図②	住 5 覆 土		受け部の破片で返り鋭いもの。 胎土：細砂を若干含み、焼成良、色調：(内)白灰色・ (外)灰色。	外面底部付近は回転ヘラケ ズリ、他ナデ仕上げ。			反転、 残片
須恵器 壺	第21図③	住 5 覆 土	口径 9.2(復) 胴最大径12.2	直立の口縁で、胴部最大径あり。 胎土：精良粘土、焼成良、色調：灰色。	外面は口縁ヨコナデ、胴部 下半カキメ、洗線にはさま れた部分刺突文、内面ヨコ ナデ。		4 A	反転、 残片
土師器 甕	第21図④	住 5 (No. 3)	口径24.0	口縁部は外反している。最大径は胴部あるもので、丸 底になる。 胎土：細砂を多く含み、焼成良、色調：黄褐色。	外面は頸部以下はハケメで 口縁部から内面はヨコナデ からナデ。			反転、 残片
土師器 甕	第21図⑤	住 5 (No. 2)	口径15.6	口縁部は外反している。最大径は胴部にある。 胎土：細砂を多く含み、焼成良、色調：黄褐色。	外面は頸部以下ハケメで、 口縁部から内面はナデ。			反転、 残片
土師器 甕	第21図⑥	住 5 覆 土	口径16.0	口縁部は外反し、最大径は胴部にある。 胎土：細砂を含み、焼成良、色調：黄褐色。	外面は頸部以下ハケメの上 からナデ仕上げ、内面もナ デ。			反転、 残片
土師器 甕	第21図⑦	住 5 下 層		口縁部直立して、口唇部に特長あり。 胎土：細砂を多く含み、焼成良、色調：黄褐色。	外面にはタタキを用い、内 面ヨコナデ。			製埴土器 (玄海灘式)
土師器 壺	第21図⑧	住 5 下 層		口縁部はゆるやかに外反し、最大径は胴部である。 胎土：細砂を多く含み、焼成良、色調：黄褐色。	外面は頸部以下ハケメ、口 縁部から内面はナデ。			
手捏土器 タコ壺	第21図⑨	住 5 覆 土	口径 6.2 器高 7.5	口縁部から底部までずん胴のものである。 胎土：細砂を含み、焼成良、色調：灰黄色。	内外面ともナデ。			
土師器 高 杯	第21図⑩ (No. 1)	住 5 (No. 1)	口径15.3 脚径11.8 器高 9.1	脚部は一段段つけて大きく開く。皿部も肩に段をつけ ながら大きく外側に開く。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：赤褐色。	器面風化著しいため不明、 脚内面ヨコナデ、脚柱状部 はヘラケズリ取り。			
須恵器 杯 蓋	第22図①	住 7	口径10.5 器高 2.8	天井部は丸味をおびて、口縁部は内傾している。 胎土：細、粗砂を含み、焼成堅固、色調：灰色。	天井部は回転ヘラケズリで 口縁部ヨコナデ、内面はナ デ。	○ (内面)	4 A	
須恵器 杯 身	第22図②	住 7	口径11.0(復) 器高 4.1	受け部や返りは鈍く、内面にヘラ記号あり。 胎土：細・粗砂粒を多く含み、焼成堅固、色調：灰黒 色。	底部から肩は回転ヘラ削り で、他はヨコナデ、内面も ナデ仕上げ。	○ (内面)	4 A	
土師器 甕	第22図③	住 7	口径21.2	口縁部は外反し、口唇部に特長をもつもの。二次的に 焼成を受けている。 胎土：細、粗砂粒を多く含み、焼成良、色調：黄褐色。	外面は頸部以下タタキ、口 縁部ハケメ後ナデ。内面も 同じ。内面の肩以下はタタ キ(平行線)			製埴土器 (玄海灘式)
土師器 高 杯	第22図④	住 7	底径11.3	脚部の破片一段段を有しながら大きく開く椀である。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：赤褐色。	柱状部外面はヘラ削り、ナ デ。内面ヨコナデからナデ そして柱状部は挟り取る。			

器種	挿図番号 図版番号	出地 土点	法量 (cm)	形態の 特徴	手法の 特徴	ヘラ 記号	型式 名	備考
須恵器 甕	第22図⑤	住 19-21 覆土	口径24.2	口縁部は外反し、最大径が胴部にある。口唇部に特長あり。 胎土：細粒砂を含み、焼成堅固、色調：灰黒色。	口唇直下に波状文で頸部の肩までヨコナデ。それ以下カキメ。内面ヨコナデ、以下ナデ。		4A	反転
須恵器 甕	第22図⑥	住 19-21 覆土	最大胴径21.0	口縁部が外反し、丸底になるもの。最大径は胴部あり 胎土：細粒砂を含み、焼成堅固、色調：灰色。	頸部以下カキメタタキ、口縁部ヨコナデ。内面もヨコナデ、肩以下は同心円タタキ。		4A	反転
須恵器 甕	第22図⑦	住 19-21 覆土	最大胴径18.2	口縁部が外反し、丸底になるもので、最大径が胴部にある。 胎土：細粒砂を含み、焼成堅固、色調：灰色。	頸部以下カキメを後でナデで胴下半部にタタキ、内面ナデ仕上げ。		4A	反転
須恵器 甕	第22図⑧	住 19-21 覆土	最大胴径24.6	胴部下破片。 胎土：細粒砂を含み、焼成堅固、色調：灰色。	外面はカキメ。そしてタタキ。内面は同心円タタキ。		4A	反転
土師器 壺	第22図⑨	住 19-21 覆土	口径 7.2 最大胴径10.0	口縁部は直口し、最大径が胴部にある。 胎土：精良、焼成良、色調：灰色。	内外面ともヨコナデ。			反転
須恵器 高杯	第22図⑩	住 19-21 覆土		小形なもので、皿部と柱状接点、内面ヘラ記号。 胎土：細砂を含み、焼成堅固、色調：黄褐色。	外面ヨコナデ、内面ヨコナデ。	○ (内面)	4A	
須恵器 杯蓋	第23図⑪	住 19-21 覆土	口径12.6	丸味をおびてなだらかに内傾するものである。 胎土：砂粒を含み、焼成良、色調：灰色。	内外面ナデ、口縁部付近ヨコナデ。			反転、 残片
須恵器 杯蓋	第23図⑫	〃		口縁部破片、ゆるやかに内傾しながら口縁部にいたっている。 胎土：砂粒を含み、焼成良、色調：灰色。	天井部は回転ヘラケズリで他ヨコナデ、内面ヨコナデ		4A	
須恵器 杯蓋	第23図⑬	〃		天井部の破片、ヘラ記号あり。 胎土：細粒砂含み、焼成良、色調：灰青色。	天井部は回転ヘラ削り、他ヨコナデ、内面ヨコナデ。	○	4A	
須恵器 杯身	第23図⑭	〃	口径12.2	受け部は鈍く、厚い感じである。 胎土：砂粒を含み、焼成良、色調：灰青色。	内外面ヨコナデ。		4A	反転、 残片
須恵器 杯身	第23図⑮	〃	口径10.0 器高 3.9	受け部は鈍く、返りは鋭い。底部が丸味をおびた平底である。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：暗灰色。	底部から先は回転ヘラ削り他ヨコナデ、ナデ仕上げ。		4A	反転
須恵器 杯身	第23図⑯	〃	口径10.7	受け部は鈍く、返りは鋭い。底部は丸底となる。 胎土：砂粒を含み、焼成良、色調：白黄色。	底部付近は回転ヘラ削り、他はヨコナデ。		4A	反転
須恵器 杯身	第23図⑰	〃	口径15.0	受け部は鈍く、返りは鈍い。底部は丸底となる。 胎土：砂粒を含み、焼成良、色調：茶褐色。	底部付近は回転ヘラ削り、他はヨコナデ。		4A	
須恵器 壺	第23図⑱	〃		胴部付近の破片。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：灰色。	外面は刺突文と沈線以下カキメ。内面ヨコナデ。			
須恵器 甕	第23図⑲	〃		口縁部破片。 胎土：細砂を含み、焼成良、色調：灰青色。	内外面ナデ。			
土師器 甕	第22図⑳	住 19-21 覆土		口縁部破片、口唇部に特長あり。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：黄褐色。	内外面ヨコナデ。			製埴土器 (玄海灘) (式土器)
〃	第22図㉑	住 19-21 〃		口縁部破片、口唇部に特長㉑に類似する。 胎土：砂粒を含み、焼成良、色調：黄褐色。	内外面マメツ、不明。			〃
〃	第22図㉒	住 19-21 〃		口縁部破片、口唇部に特長㉑に類似する。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：黄褐色。	外面は口縁からヨコナデ、頸部以下ハケ、以下格子のタタキ。内面はヨコナデ、ハケとなってくる。			〃
〃	第22図㉓	住 19-21 〃	口径15.0 器高14.8 胴径15.1	ゆるやかに外反し、口唇部に特長あり、部分的にススの付着が見られる。丸底を呈する。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：褐色。	外面は口縁部ヨコナデ、頸部以下タタキ黒変する。内面はヨコナデ、タタキ、スス付着する。			〃
〃	第23図㉔	住 19-21 〃		口縁部破片、口唇部に特長。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：黄褐色。	外面はヨコナデ、内面ナデ			〃 反転、 残片
土師器 甕	第23図㉕	住 19-21 覆土		口縁部破片、口唇部に特長。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：黄褐色。	外面ヨコナデ、内面ナデ。			〃 反転、 残片
土師器 壺	第23図㉖	〃		口縁部破片、ゆるやかに外反する。 胎土：細砂を多く含み、焼成良、色調：暗茶褐色。	内外面ヨコナデ。			
〃	第23図㉗	〃		口縁部破片、ゆるやかに外反する。 胎土：細砂を多く含み、焼成良、色調：黄褐色。	内外面ヨコナデ、以下ハケメ。			
〃	第23図㉘	〃		口縁部破片、ゆるやかに外反する。 胎土：細砂を多く含み、焼成良、色調：黄褐色。	内外面ヨコナデ。			

器種	挿図番号 図版番号	出土 地点	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	ヘラ 記号	型式 名	備 考
甌	第23図②	々		裾部破片。 胎土：細砂多く含み、焼成良、色調：黄褐色。	内外面ナデ。			
須恵器 杯 身	第26図①	住 9	口径 9.6	受け部は鈍く、返りも鈍い。丸底に近い底部である。 胎土：砂粒を多く含み、焼成軟、色調：黄褐色。	底部は回転ヘラケズリ、内 面ナデ。		4 A	
須恵器 甕	第26図②	住 9		口縁部破片、口唇部に特長。 胎土：砂粒砂を含み、焼成良、色調：黒灰色。	灰かぶり調整不明。			
土師器 甕	第26図③	住 9		口縁部破片、口唇部に特長。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：黄褐色。	内外面ヨコナデ。			
土師器 甕	第26図④	住 9		胴部下半の破片か。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：黄褐色。	内外面ヨコナデ、外面の下 半部にハケメか。			
土師器 高 杯	第27図①	住 10	裾部径11.0	脚部の破片、裾は大きく開く。 胎土：砂粒を含み、焼成良、色調：黄褐色。	内外ナデ。			
土師器 甌	第27図②	住 10		裾部の破片。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：黄褐色。	外面ハケメ、内面ナデ。			
須恵器 杯 身	第29図①	住 11 P ₁	最大径13.0	受け部の破片、返りは鈍い。 胎土：砂粒を含み、焼成良、色調：青灰色。	外面灰かぶり、底部は回転 ヘラ削り。		4 A	反転、 残片
須恵器 高 杯	第29図②	住 11 P ₁	裾部径11.0	高杯の脚部破片。 胎土：砂粒を含み、焼成良、色調：暗灰色。	内外ヨコナデ。			反転、 残片
土師器 壺	第29図③	住 11 P ₁		口縁部の破片。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：黄灰色。	内外ヨコナデ、内面一部に ハケメ。			
手 捏 土 器	第29図④	住 11 P ₁	底部径	手捏土器底部 胎土：砂粒を含み、焼成軟、色調：黄灰色。	内外ナデ、手びねり。			
須恵器 杯 蓋	第31図①	住 12 覆 土	口径12.1 器高 3.6	天井部からゆるやかに内傾する。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：灰黒色。	天井部、回転ヘラケズリ、 他ナデ及びヨコナデ。		4 A	残片
須恵器 杯 蓋	第31図②	住 12 覆 土	口径13.0	口縁部破片。 胎土：砂粒を含み、焼成良、色調：青灰色。	内外面ヨコナデ。		4 A	
須恵器 杯 身	第31図③	住 12 覆 土		受け部破片。 胎土：砂粒を含み、焼成良、色調：灰黒色。	内外面ヨコナデ。			
須恵器 杯 蓋	第31図④	住 12 覆 土		肩が張るもので、蓋破片。 胎土：砂粒を含み、焼成良、色調：白灰色。	天井部回転ヘラケズリ、他 内外面ヨコナデ。			反転、 残片
土師器 甕	第31図⑤ 図版26-1	住 12 覆 土	口径 20.3~21.1 器高 21.4~22.8	丸底を呈するもので、口縁部は外反する。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：黄褐色。	外面ハケメ、口縁部ヨコナ デ、内面の口縁部はハケメ の後にヨコナデ。			
土師器 甕	第31図⑥	住 12 カマド 内	口径21.0	口縁部から胴部破片で、口縁部は外反する。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：黄褐色。	外面ハケメ、口縁部ヨコナ デ、内面ナデ、口縁部ハケ メが残る。			反転、 残片
須恵器 杯 蓋	第35図①	住 15 P ₁		杯蓋の破片。 胎土：砂粒を含み、焼成良、色調：黒灰色。	内外面ヨコナデ、天井部回 転ヘラケズリ。			
須恵器 杯 蓋	第35図② 図版26-2	住 18 覆 土	口径12.4 器高 3.5 ツمام径 2.9 ツمام高 3.5	ツمام付の蓋、返りがつくものである。 胎土：細粒砂を含み、焼成堅固、色調：灰色。	天井部にツمامを有し、回 転ヘラケズリ、他ヨコナデ 内面もヨコナデ、ナデ。		5	
須恵器 長頸壺	第35図③	住 18 覆 土		頸部から胴部の破片。 胎土：細粒砂を含み、焼成堅固、色調：灰色。	頸部下半ヨコナデ、胴部沈 線文、波状文、ヨコナデ、 刺突文、ヨコナデ。			
土師器 甕	第35図④	住 18		口縁部破片。 胎土：細粒砂を含み、焼成良好、色調：褐色。	口縁部はハケメで、内面は ナデ。口唇部ヨコナデ。			
土師器 壺	第35図⑤	住 18 覆 土		口縁部破片、く字状外反する。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：褐色。	口縁部ヨコナデ、内面ハケ メ。			
須恵器 杯 身	第40図①	住 22 P ₁	口径16.0	杯部の破片。 胎土：砂粒を含み、焼成良、色調：青灰色。	内外面ヨコナデ、自然釉付 着。			反転、 残片
ハニ皿	第40図②	住 23 P ₁	口径 4.4 器高 1.4 底径 1.4	カタスキのもの、内面白釉を施している。 胎土：精良、焼成良、色調：乳灰色。	内面施釉、外面クシハ状の もの、カタスキのもの。		江戸 時代 中頃	反転、 残片

器種	挿図番号 図版番号	出地 土点	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	ヘラ 記号	型式 名	備考
須恵器 高杯	第66図① 図版32-11	Ⅱ Pit 5	口径	裾部が欠損しているが、脚部内面にヘラ記号あり、小形高杯である。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：灰色。	皿部から脚部にかけてヨコナデ、皿部内面もナデ、脚部内面ヨコナデ。			
須恵器 壺	第66図②	Pit 95	最大径 4.6	丸味をおびて球状をなすもので、外・内面釉溜あり、ヘラ記号あり。 胎土：精良、焼成良、色調：灰黒色(釉)・灰青色	内外面自然釉がかかっている。ヘラケズリが中心となっている。	○		反転、 残片
土師器 皿	第66図③ 図版32-12	Ⅰ Pit 5	口径15.4	中形皿である。器高が浅い。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：黄褐色。	底部に粘土紐の痕が見られ内外共風化が著しいため調整不明。			
須恵器 椀	第66図④ 図版32-13	住 22 横Pit	口径12.9 器高 5.5 高台径 7.8 高台高 0.8	丸味をおびながら口縁が外へ開くものである。高台が外張りで末端が外にはねている。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：灰色。	内外面ヨコナデ、内底面ヘラ状のものナデ、高台内面ナデ、ヘラ状のものでヨコナデ、凹がくつきりしている		6	
須恵器 杯身	第66図⑤	Pit11	口径13.0(復)	口縁部破片。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：灰青色。	内外面ナデ。			反転、 残片
須恵器 杯身	第66図⑥	Pit 109		受け部破片、返りは鈍く短い。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：灰色。	内外面ナデ。		4 A	
須恵器 壺	第66図⑦	Pit 109		胴部破片。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：灰青色。	外面カキメ、下ナデ、内面水ビキ			
土 鐘	第66図⑧	Pit 71		土鐘破片。 胎土：細砂を含み、焼成軟、色調：褐色。				
須恵器 杯蓋	第66図⑨	Pit 102	口径12.0	ツمام付の杯蓋破片、返り部分直立する。 胎土：細粒砂を含み、焼成堅固、色調：灰黒色。	内外面ともヨコナデ。		6~7	反転、 残片
土師器 高杯	第66図⑩	Pit 77	口径11.8	口縁部破片の皿部。 胎土：細粒砂を含み、焼成軟、色調：赤褐色。	内外共風化著しく調整不明			反転、 残片
須恵器 瓶	第66図⑪	Pit 29	口径 6.2(復)	瓶の注水部破片(短い) 胎土：細砂を含み、焼成堅固、色調：灰色。	内外面ともヨコナデとナデ			反転、 残片
須恵器 杯蓋	第66図⑫	Pit 74	口径11.0(復)	口縁部破片。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：灰色。	内外面ともヨコナデ。			
須恵器 甕	第 68 図 図版26-4	溝 1 覆 土	口径46.2	大形甕の口縁部破片「く」の字状に外反する。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：灰青色。	外面は口縁部下半カケメ後にナデ、内面ナデ、胴部は平行タタキ、内面同心円タタキ。		3~4	
須恵器 杯蓋	第70図① 図版27-6	溝 2 覆 土	口径15.4 器高 2.7 ツمام径 2.8 ツمام高 2.7	ツمام付蓋で、天井部から口縁部へは肩がついたものである。内側に隠れて蓋受けがある。 胎土：細粒砂を含み、焼成堅固、色調：内一灰色、外一灰黒色。	外面はヨコナデ、肩部分に回転ヘラ削り、内面ヨコナデからナデ仕上げ。		6	反転、 残片
須恵器 杯蓋	第70図② 図版27-4	溝 2 覆 土	口径14.0 器高 2.5 ツمام径 2.2 ツمام高 0.7	ツمام付蓋で、肩がついたもので、蓋受けは内側に隠れる。 胎土：細粒砂を含み、焼成堅固、色調：灰色、灰かぶり	外面はヨコナデ、肩部分に回転ヘラ削り、内面ヨコナデからナデ仕上げ。		6	反転、 残片
須恵器 杯蓋	第70図③	溝 2 覆 土	口径15.0	ツمام付蓋で、肩から蓋受けまでの破片である。 胎土：砂粒を含み、焼成良、色調：灰青色。	同 上		6	反転、 残片
〃	第70図④ 図版27-2	〃	口径15.5(復) 器高 2.7(復)	同 上	器面調整、マメツしているため不明。		6	反転、 残片
須恵器 杯蓋	第70図⑤	溝 2 覆 土	口径15.6	ツمام付蓋で、ツمامの部分欠損している。蓋受けは内側にある。 胎土：細粒砂を含み、焼成堅固、色調：灰色~青灰色	肩部分まで回転ヘラ削り、他ヨコナデ、内面もヨコナデからナデ仕上げ。		6	反転、 残片
須恵器 杯蓋	第70図⑥ 図版27-8	溝 2 覆 土	口径14.9 器高 3.5	ツمام付蓋で、肩をつけて蓋受けにいたっている。受けは内側に隠れる。 胎土：細粒砂を含み、焼成軟、色調：茶褐色。	肩部分回転ヘラ削り、他ヨコナデ。内面の中心部ナデ		6	
〃	第70図⑦ 図版27-1	〃	口径13.8(復)	ツمام付蓋で肩は張らず、蓋受けにいたり、受け部は内側に隠れる。 胎土：細粒砂を含み、焼成堅固、色調：灰色。	天井部回転ヘラ削り、他ヨコナデ、内面ナデ。		6	反 転
〃	第70図⑧	〃	口径13.0(復)	ツمام付蓋の破片で、肩をつけて蓋受け部になっている。受けは内側に隠れている。 胎土：細砂を含み、焼成良、色調：灰色。	天井部回転ヘラ削り、他ヨコナデ、内面ヨコナデからナデへ。		6	反 転
〃	第70図⑨	〃	口径14.5(復)	ツمام付蓋の破片で、肩をつけて蓋受けにいたっている。受けは内側に隠れている。 胎土：細砂を含み、焼成良、色調：灰色。	同 上		6	反 転
〃	第70図⑩ 図版27-3	〃	口径14.3 器高 3.5 ツمام径 1.9 ツمام高 1.0	宝珠ツمامが付くもので、肩をつけて蓋受けにいたっている。 胎土：砂粒を含み、焼成軟、色調：白灰色・青灰色。	マメツして調整不明。		5	反 転 残片
〃	第70図⑪ 図版27-5	溝 2 覆 土 黒褐色土	口径13.0 器高 3.4	宝珠ツمامが付くもので、肩をつけて蓋受けにいたっている。 胎土：細粒砂を含み、焼成堅固、色調：灰黒色。	天井部にツمامを有しカキメ、口縁部付近カキメ後ヨコナデ、内面はヨコナデ。		5	

器種	挿図番号 図版番号	出土 地点	法量 (cm)	形態の 特徴	手法の 特徴	ヘラ 記号	型式 名	備考
◇	第70図⑭ 図版27-7	◇	口径16.3 器高 2.3	ツمامミをもって平坦な器形である。いびつな感じである。 胎土：細・粗砂粒を多く含み、焼成堅固、色調：灰色	天井部にツمامミを有し、回転ヘラ削り、ヨコナデ、ナデ。		6	
◇	第70図⑮	◇	口径12.4 器高 1.7	ツمامミがつくもので、蓋受け部は内側に隠れている。 胎土：細粒砂を多く含み、焼成堅固、色調：黄褐色。	天井部にツمامミがつくもの 回転ヘラ削り、ヨコナデからナデ。		6	
◇	第70図⑯	◇		口縁部破片で、口唇端部が嘴状をなす。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：灰青色。	内外面ともヨコナデ。		7	
◇	第70図⑰	溝 2 覆 土	口径20.0(復)	口縁部破片。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：青灰色。	内外ヨコナデからナデ。			反 転
◇	第70図⑱	◇	口径18.0(復)	口唇部が嘴状にまがるもので、ツمامミを有する。 胎土：細粒砂を含み、焼成良好、色調：灰青色。	内外ヨコナデからナデ。		7	反 転
須恵器 杯 身	第70図⑲ 図版28-4	◇	口径10.0(復) 器高 3.9	丸底を呈し、ゆるやかに口縁部にいたっている。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：茶褐色。	内外ヨコナデからナデ仕上げ。	○	6	反転、 残片
◇	第70図⑳	溝 2 黒褐色 土	口径 9.0(復) 器高 3.4	丸底を呈し、ゆるやかに口縁部が内傾する。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：灰青色。	口縁部内外面ヨコナデ。内 底面ナデ、底部回転ヘラ削 り。		6	反 転
須恵器 高台付 椀	第70図㉑ 図版28-2	◇	口径12.1 器高 5.0 高台径8.0(復) 高台高 1.0	高台は外へ開く。口縁部直下に沈線をもつ。 胎土：細粒砂を含み、焼成堅固、色調：灰色。	口縁部内外面ともヨコナデ 高台内ヨコナデ、内底ナデ		6	反 転
◇	第70図㉒ 図版28-1	◇	口径 9.4(復) 器高 4.4 高台径 5.8 高台高 1.0	高台は直立し、口縁部はゆるやかにひらく。 胎土：細砂を含み、焼成堅固、色調：灰色。	口縁部内外面ともヨコナデ 内底面ナデ、高台ヨコナデ		7	反 転
◇	第70図㉓	◇	底径 8.7 高台高 1.0	高台端部は外へ開き、高台部分の破片。 胎土：細砂を含み、焼成良、色調：青灰色。	内外面ともヨコナデ。		6	
◇	第70図㉔ 図版28-3	◇	口径14.5 器高 5.4 高台径 9.5 高台高 0.5	腰の張りがなく、口縁部にいたっている。 胎土：細砂を含み、焼成良、色調：灰色。	内外面ともヨコナデ、高台 もヨコナデ、壺付はナデ、 内底面ナデ。		7	
◇	第70図㉕	◇	口径13.0	口縁部破片。 胎土：細砂を含み、焼成良、色調：青灰色。	内外面ともヨコナデ。		6	反転、 残片
◇	第70図㉖	◇	口径16.4(復) 器高 6.9 底径11.6 高台高 0.8	腰の張りがなく、口縁部にいたっている。 胎土：細砂を含み、焼成良、色調：灰白色。	内外面ともヨコナデ、内底 部ナデ。		7	
須恵器 高 杯	第70図㉗ 図版28-8	溝 2	脚部径10.0 脚部高 3.5	脚部の破片。 胎土：細砂を含み、焼成堅固、色調：暗灰色。	内外面ともヨコナデ、皿部 内面ナデ。		4 B	
◇	第70図㉘ 図版28-7	◇	脚部径10.6 脚部高 4.2	脚部の破片。 胎土：細粒砂を含み、焼成堅固、色調：灰色。	内外面ともヨコナデ、皿部 内面ナデ。		4 B	反 転
◇	第70図㉙ 図版29-3	◇	口径13.2(復)	皿部の破片、二条の沈線をもつ。 胎土：細粒砂を含み、焼成堅固、色調：灰黒色。	口縁部内外面ともヨコナデ 内底面ナデ、二条沈線以下 はヘラケズリ、脚部ナデ。		4 B	反 転
須恵器 甕	第70図㉚	◇	口径20.0(復)	口縁部破片、大きく外反する。口縁部に特長。 胎土：砂粒を含み、焼成良、色調：青灰色。	内外面ともヨコナデ。		4	反転、 残片
須恵器 甕	第70図㉛	溝 2	口径26.0(復)	口縁部破片大きく外反する口唇部に特長。 胎土：砂粒を含み、焼成良、色調：青灰色。	内外面ともヨコナデ。		4	
◇	第72図⑩	◇	口径27.0(復)	口縁部破片、大きく外反する口唇部に特長。 胎土：砂粒を含み、焼成良、色調：黒灰色。	口縁部内外面ともヨコナデ 頸部以下タタキ、内面は青 海波。		4	
◇	第72図⑪ 図版29-2	◇	口径23.1(復)	口縁部破片、大きく外反する。口唇部に特長。 胎土：細粒砂を含み、焼成堅固、色調：灰色。	口縁部内外面ともヨコナデ 頸部以下タタキ(平行線)、 内面は同心円タタキ。		4	反 転
◇	第72図⑫ 図版29-1	◇	口径15.8(復)	口縁部破片、大きく外反する。 胎土：砂粒を含み、焼成良、色調：灰色。	口縁部波状文、以下ヨコナ デ、カキメ、内面ヨコナデ		4	
須恵器 壺	第72図⑬ 図版29-4	◇	胴径13.2	胴部破片、口縁部が外反するもので丸底。 胎土：細粒砂を含み、焼成堅固、色調：灰色～黒色。	頸部以下タタキ、そしてナ デ、内面ナデ、黒変部分あ り。		4	反 転
◇	第72図⑭ 図版29-5	◇	胴径16.1	胴部破片、丸底になるもの。 胎土：砂粒を含み、焼成良、色調：灰色。	頸部以下カキメ、以下工具 によるナデ、内面ヨコナデ 、ナデ。		4	反転、 残片
◇	第72図⑮	◇	底径11.7	胴部破片、高台は外張り出し、先端外にはねる。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：灰色～黒色。	内外面ヨコナデ、内底ナデ		6	長頸蓋

器種	挿図番号 図版番号	出土 地点	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	へら 記号	型式 式	備考
〃	第72図⑳ 図版29-6	〃	胴径18.2 高台径11.5 高台高 1.3	長頸壺の胴部破片。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：灰色～灰黒色。	内外面ヨコナデ。		7	
〃	第72図㉑	〃	胴径15.6	長頸壺の胴部上半破片。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：灰色。	外面頸以下カキメ二条沈線 下半沈線の間に刺突文以下 カキメ、内面ヨコナデ。		7	反転
土師器 椀	第72図㉒ 図版29-7	〃	口径16.0 器高 5.6 底径 6.5	断面三角形の貼付高台をもつもので、口唇部はふ厚い。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：黄灰色。	内外面はマメツして不明。			中世 残片
土師器 皿	第72図㉓	〃	口径19.0	口縁部の破片である。 胎土：細粒砂を多く含み、焼成良、色調：黄褐色。	内外面へらにてケズリとミ ガキをかけている。			中世 反転、 残片
〃	第72図㉔ 図版29-8	〃	口径12.2 器高 3.8	丸底のもので、口縁部が内傾するもの。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：黄褐色。	風化して調整不明。		中世 ?	反転
土師器 高杯	第72図㉕ 図版29-9	〃	口径15.8(復)	皿部破片、口縁部はラッパ状に外にひろく。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：茶褐色。	内外面ヨコナデ、皿部内底 ナデ。			
土師器 壺	第72図㉖	〃	口径17.0	口縁部破片。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：黒色。	口縁部ヨコナデ、以下ハケ メ、内面ケズリ。			反転、 残片
〃	第73図㉗	〃		口縁部破片。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：黒色。	口縁部外面ハケメ、内面ケ ズリ。			
土師器 甕	第73図㉘	〃		口縁部破片。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：黄褐色。	口縁部ヨコナデ、以下タタ キ(格子目)、内面タタキ(同 心円)。			製埴 土器?
甕	第73図㉙	〃	底径17.3	底部の破片、透しを有するもの。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：内…灰黄褐色、 外…黄褐色。	外面ハケメ、内面ナデ。			反転
甕	第73図㉚	〃	底径21.0	底部の破片、透しを有するもの。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：黄褐色。	外面ハケメ、内面ナデ。			反転
甕形	第73図㉛	〃		底の部分と側縁部の破片。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：黄褐色。	底の内外面はハケメで、内 面は擦過。			
〃	第73図㉜	〃		底の部分で焚口の破片、二次的な火勢を受く。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：黄褐色。	外面ハケメ、内面ナデ、黒 変している。			
〃	第73図㉝	〃		底の部分、焚口の前面、二次的な火勢を受く。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：黄褐色。	底部分外面ハケメ、内面ナ デ、内面擦過。			
〃	第73図㉞	〃		底の部分、前面。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：黄褐色。	風化著しく調整不明。			
〃	第73図㉟	〃		底の部分、二次的な火勢を受く。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：黄褐色。	底部分外面ハケメ、内面ナ デ。			
甕形	第73図㊱	溝 2		底の部分、二次的な火勢を受く。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：黄褐色。	底部分、外面ハケメ、内面 ナデ。			
〃	第73図㊲	〃		脚底部分。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：黄褐色。	脚部、外面ハケメ、内面擦 過、黒変あり。			
土師器 壺	第76図①	溝 3		口縁部破片。 胎土：砂粒を若干含み、焼成良、色調：灰褐色。	外面タタキ、口縁内側ナデ 以下ハケメ。			
土師器 甕	第76図②	〃	口径23.2(復)	口縁部が外反している。 胎土：細砂を含み、焼成良、色調：黄褐色。	口縁部ヨコナデ、以下ハケ メ、タタキ、内面ケズリ、 ナデ。			反転、 残片
須恵器 杯蓋	第76図③	〃	口径10.4	ツمامいがつくもので、蓋受けは内側にある。 胎土：細砂を含み、焼成良、色調：灰色。	天井部は回転ヘラケズリ、 他ヨコナデ。		4 B	反転、 残片
〃	第76図④	〃	口径14.2(復)	ツمامいがつくもので、蓋受けは退化している。 胎土：細砂を含み、焼成良、色調：灰色。	内外面ヨコナデ。		6	反転、 残片
須恵器 杯身	第76図⑤	〃	口径11.3	受け部の破片。 胎土：細砂を含み、焼成堅固、色調：灰色。	内外面ヨコナデ。		4 A	反転
土師器 高杯	第76図⑥	〃	底径 9.2	脚部破片。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：黄褐色。	脚の外面、風化して調整不 明、内面はへら状のもので挟 り取る。			

器種	挿図番号 図版番号	出地 土点	法量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	ヘラ 記号	型式 名	備 考
須恵器 高 杯	第77図①	溝 4		口縁部破片。 胎土：砂粒を含み、焼成良、色調：青灰色。	内外面ナデ。			
土師器 椀	第77図②	溝 5	口径15.0(復) 器高 5.4 高台径 8.4 高台高 0.8	腰の張りを有するもので、口縁部は外側にひらく。 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：黄褐色。	内外面ヨコナデ。		中世 か	反 転
磁 器 付 皿 染 小	第78図①	表 土		染付(近世のもの) 胎土：細粒砂を含み、焼成良、色調：長石釉。			近世 江戸 後期	肥前系
磁 器 白磁椀	第78図②	〃		高台部分。 胎土：細粒砂、カオリン、焼成良、釉調：緑灰色	高台部分はケズリ出し。		中世	貿 易 陶磁器 福建省
須恵器 杯 蓋	第78図③ 図版32-8	〃	口径13.0 器高 2.0	蓋受け部で、返りは内側に隠れる。 胎土：細粒砂を含み、焼成堅固、色調：灰色～灰黒色	内外面ともヨコナデ、かなり 歪みがある。	○	4 B	反転、 残片
須恵器 杯 身	第78図④	〃	口径11.0(復)	受け部破片。 胎土：細粒砂を含み、焼成堅固、色調：灰色。	底部はヘラケズリ、他ヨコ ナデ、内底ナデ。		4 A	反 転
〃	第78図⑤	〃	口径10.8(復)	受け部破片。 胎土：細砂を含み、焼成良、色調：灰色。	底部はヘラケズリ、他ヨコ ナデ、内底ナデ。		4 A	反転、 残片
須恵器 椀	第78図⑥ 図版32-9	〃	口径13.7 器高 3.8 高台径 8.2 高台高 0.3	腰の張りがなく、すらっと口縁部にいたるもの。 胎土：細砂を含み、焼成堅固、色調：灰色。	内外面の口縁部ヨコナデ、 内底ナデ、高台近くにヘラ ケズリが残り、他ナデ。		7	
〃	第78図⑦ 図版32-10	〃	口径17.6(復) 器高 5.9 高台径10.1 高台高 1.1	腰の張りが少なく、なだらかにひらくもので、口唇部 はなめらかである。 胎土：細砂を含み、焼成堅固、色調：灰色。	内外面ともヨコナデ主体で 内底ナデ、高台付近はヨコ ナデ。		6	反 転

遺物についての若干のまとめ

高田遺跡から検出された遺物で、今後問題になるものについて、若干まとめてみたい。

当該遺跡で判明したことは、①縄文後期末から晩期の遺構と遺物、②6世紀後半に伴なう土師質の甕形土器の両面にタタキを有するもので、いわゆる製塩土器と称せられる土器群。③7世紀後半から8世紀にかけての建物群に伴なう遺物が問題とされよう。

この中で、②の製塩土器について述べて、今後の研究の端緒としたい。

福岡市東区海の中道遺跡において、土師質の甕で両面タタキで二次的に火勢を受けているもので、横山浩一氏が提唱された玄海灘式製塩土器と考えられるものが、住居跡内から出土している。特に3号住居跡からは、須恵器杯等6世紀後半代の年代があたえられ、横山氏の製塩土器Ⅰ類に類似する様相をもっている。この手のものが煎熬用製塩土器であろうと認知したのは、内外面にタタキを印する厚手大型の土器で、器壁の剝離や紫紅色（黄褐色が赤味がかった）への変色が認められるということから考えた。このことは、この手の製塩土器が6世紀後半代まで上ることを意味している。多々良川に沿った高田遺跡は、現在河口から直線で約10kmである。6世紀当時は、まだ海が入り込んできてたわけで、中世にいたって多々良の浜が砂浜としてあらわれる、5km付近の内橋付近まで海がはいって、万葉人が詠んだ香椎潟になっていた。この海で塩を荒塩の形、個人的に搬入したもので、この交易の中で生まれたのがこの手の甕形土器と考えられる。

また、この高田遺跡から1km下流域の地名が勢門と呼ばれている、『和名抄』で言う糟屋郡の九郷の勢門に比定される位置である。この中に当該遺跡も含まれて存在することは考えられる。

(註) 横山浩一・山崎純男編『福岡市海の中道遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第87集 1982
横山氏は『九州文化史研究所紀要』の中で一連の研究論文がある。昭和59年、昭和60年。

第3節 小 結

ここでは、前節を踏まえながら、当該遺跡について、若干まとめてみたい。

1. 高田遺跡の展開について（第80図）

今回の発掘調査の面積は11,500㎡である。道路幅全域の調査である。

遺跡の西側1/3には水利に関する遺構(水路・排水)などの農業に関する用水関係の部分と住居遺構である。

遺物からは旧石器時代のものが採集されているし、縄文時代後期から晩期にかけての遺構と遺物が検出されている。その後、弥生時代及び古墳時代の始めまでの遺構の存在はみられず、古墳時代の終頃、6世紀の後半頃の高田村の一部が集落が捕捉され、7世紀末～8世紀前半までの遺構が検出されている。この高田遺跡はこの200年間が中心に展開したもので、奈良時代以降には、条里制がひかれ、遺跡地図には条里の線がひかれている。しかしながら、調査中にはその傾向はみられず、畦状のものは断面等にもみられなかった。ただこの遺跡の小字名は中の坪と称されているところからも、条里に関係する地名であることは理解できる。

遺跡では、I区の中央部付近で南北方向に礫層面を道路敷きと考えると、奈良時代以前からの利用されていたものと考えられる。これを切って溝1の水路が築れている。その水路は6世紀前半代までは使用されていたが、すぐさま廃絶されて、住居跡が下になっている。

この遺跡から検出された住居跡は23軒である。切り合い関係があるものを中心に抜き出すと。

(旧→新) 住7 → 1号土壇 → 住6
 ↗
住21 → 住20 → 住19 → 住5
住9 → 住10 住16 → 住15 住13 → 住14

となる。6世紀後半の中で、3グループに分けられる。その位置付けは遺物によってで、また竈の位置によっても分離される(第80図を参照)。

竈を南側にもつもの 住1・住2・住3・住9

竈を北側にもつもの 住11・住12・住14

竈を東側にもつもの 住13・住22

また、掘立柱遺構と住居跡が切り合っているのは、捕捉できなかったが、柱穴群と住居跡の切り合は多数みられた。柱穴の覆土は黒褐色土で、住居跡の柱穴とは相違するものである。

掘立柱の建物の方向は、ほぼ磁北を向く建物列と、東側に梁行をもつものとの二分される。

掘立柱の建物の時期は、他の柱穴群から出土した遺物によって、傍証すると、北を向く建物

列は7世紀後半、東側のものは7世紀末から8世紀にかけてと分離したいが、建12・建13・建14がこれにあたるわけである。しかしながら、全体を掘ったわけでないために、若干の疑問を残すが、遺物は相違する。

これを、時期ごとに分類し整理すると、第80図(1)→(2)→(3)→(4)の流れになってくる。この展開図は左上から下、そして右上→右下へと動いてくるわけで、最後の新聞切り抜きは、発掘調査に参加された作業員が新聞に投書された一文である。その上は、江戸時代後半の19世紀始めごろの篠栗宿の俯瞰の絵図で、この中に高田村の名がみえている。
(註3)
(註4)

註1 小田富士雄「九州の須恵器」『世界陶磁大系2』日本古代 小学館 1979

註2 日野尚志「筑前国那珂・席田・粕屋・御笠四郡における条里について」『研究論文集』第24集(I) 佐賀大学教育学部 1976

註3 西日本新聞 投書欄 昭和63年7月25日付朝刊

註4 奥村玉蘭『筑前名所図会』春日古文書を読む会編 文献出版 1985

2. 総括

今回の調査は、6世紀後半から約200年間、古墳時代後半から奈良時代初頭頃の村落遺構の一部と水利を捕えたもので、この時期の粕屋郡の一村落共同体の一部を発掘した。

当該遺跡は福岡東バイパス建設予定地で、遺構はカットされることなく、土盛されるわけでI・II区の大半は道路敷きの下になる。このバイパスが今後にもたらす波及効果は大きい。これによって、周辺部の開発が行なわれると、当然遺跡の存在が知られるわけで、今後の文化財行政が課題となってくる。

物を言わぬ遺構達にどれだけの歴史を語らせることができたのか、調査担当者として重い責務を感じている。

そして、この土地に刻まれた歴史が、将来篠栗町の歴史の中で、どのように意義付けされるかは、今後の問題となってくる。

『21世紀の人達よ、貴方がたは、この報告書から何を語らすのでしょうか?』

最後に、当遺跡の発掘調査の作業員として参加されました高田・金出・池の端・中町・新田・尾仲・田中等の人達には感謝を表したい。また、この調査に関して、篠栗町教育委員会をはじめ篠栗町役場等の協力を得たことを記して謝意を表わす。

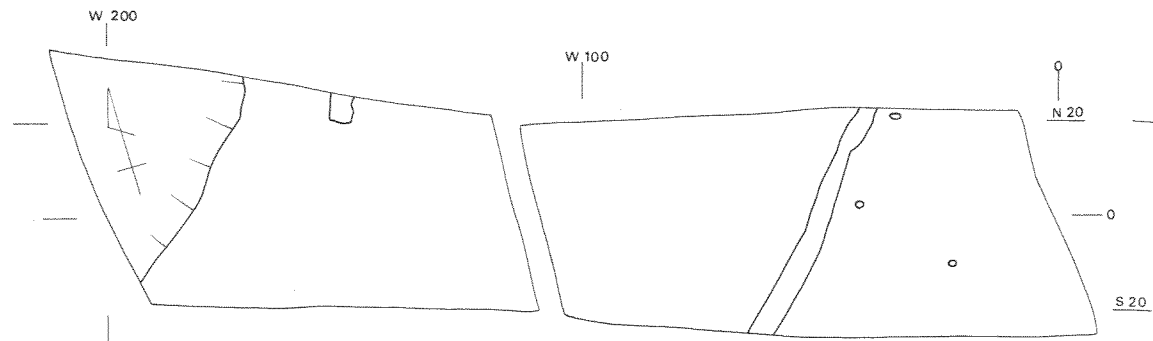
東B.Pの調査にて、

篠栗の

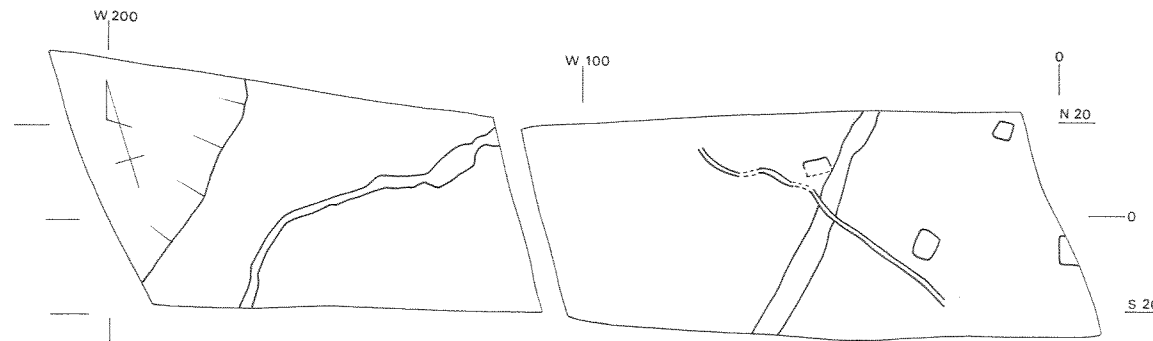
花満ちたりし

遍路道

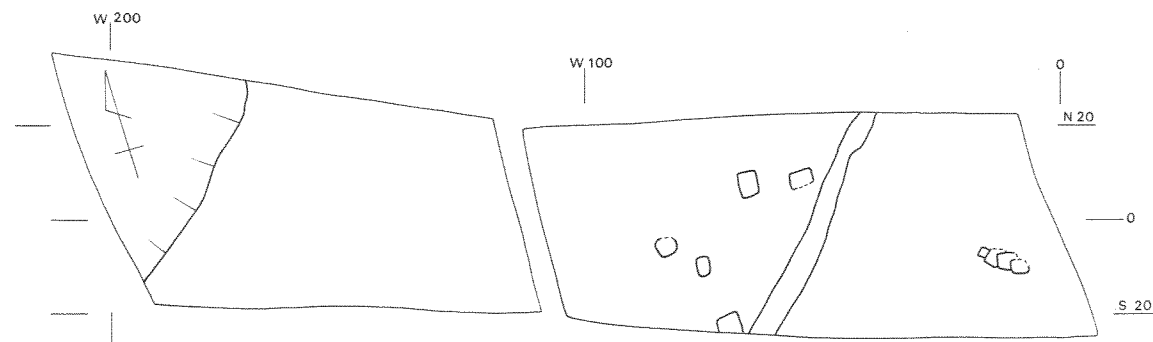
久仁



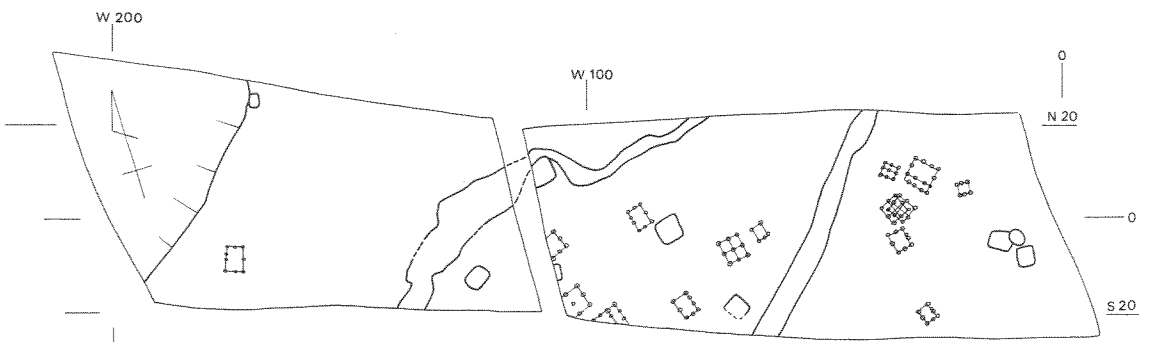
(1) 縄文後晩期



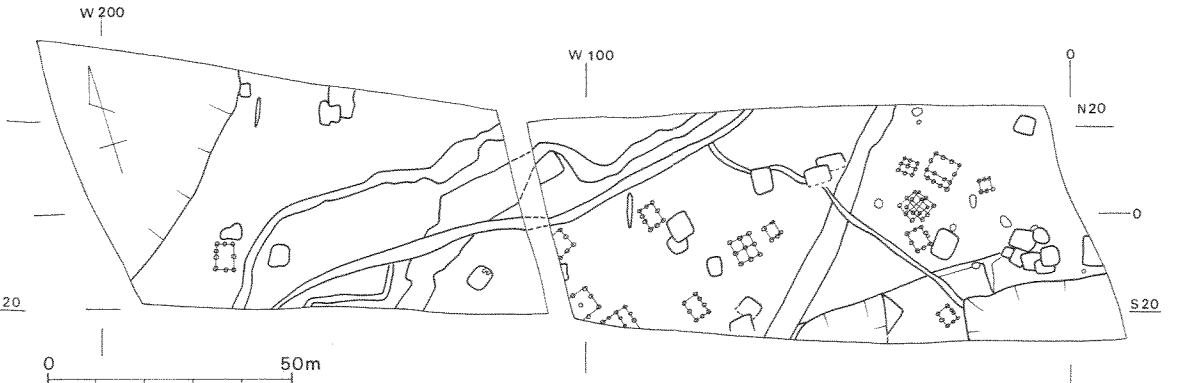
(2) 6世紀中頃



(3) 6世紀後半



(4) 7世紀~8世紀



検出された遺構



高田村 江戸時代笹栗町 (1840年代) 奥村玉蘭 絵 (矢印接点が高田村)



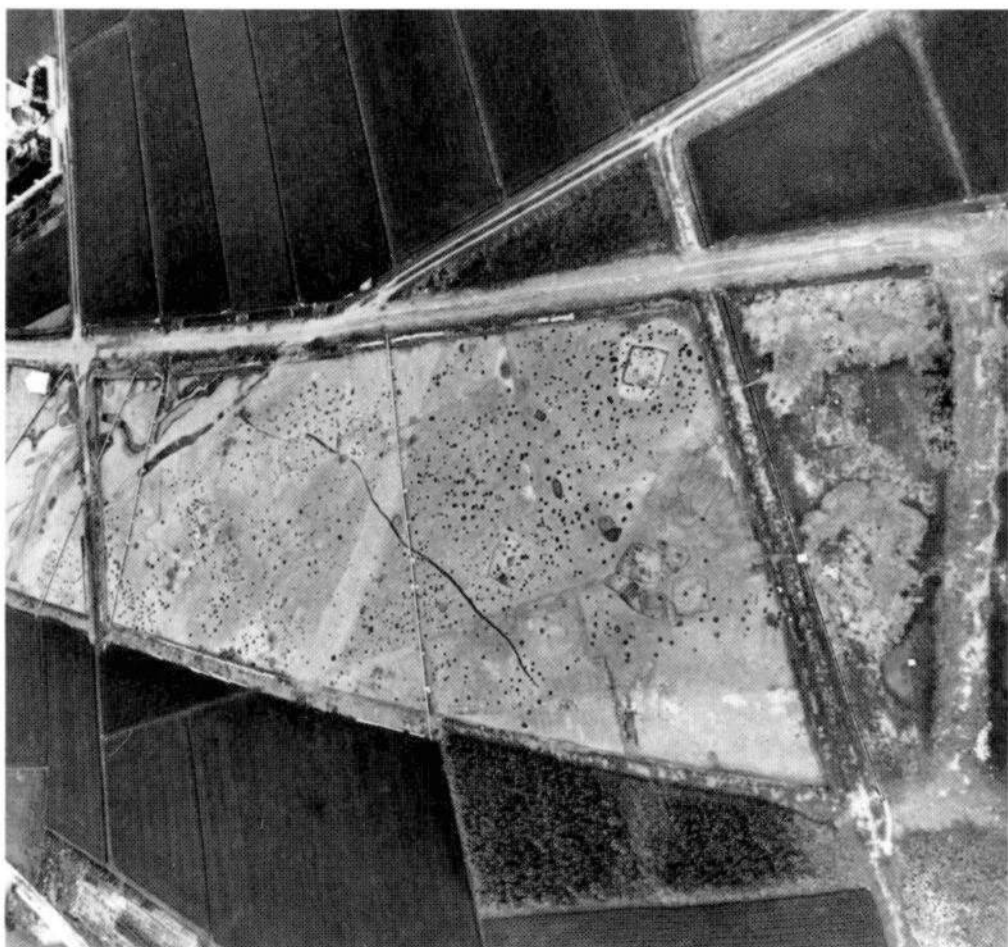
版 图



高田遺跡全景(俯瞰) ○は塚元遺跡



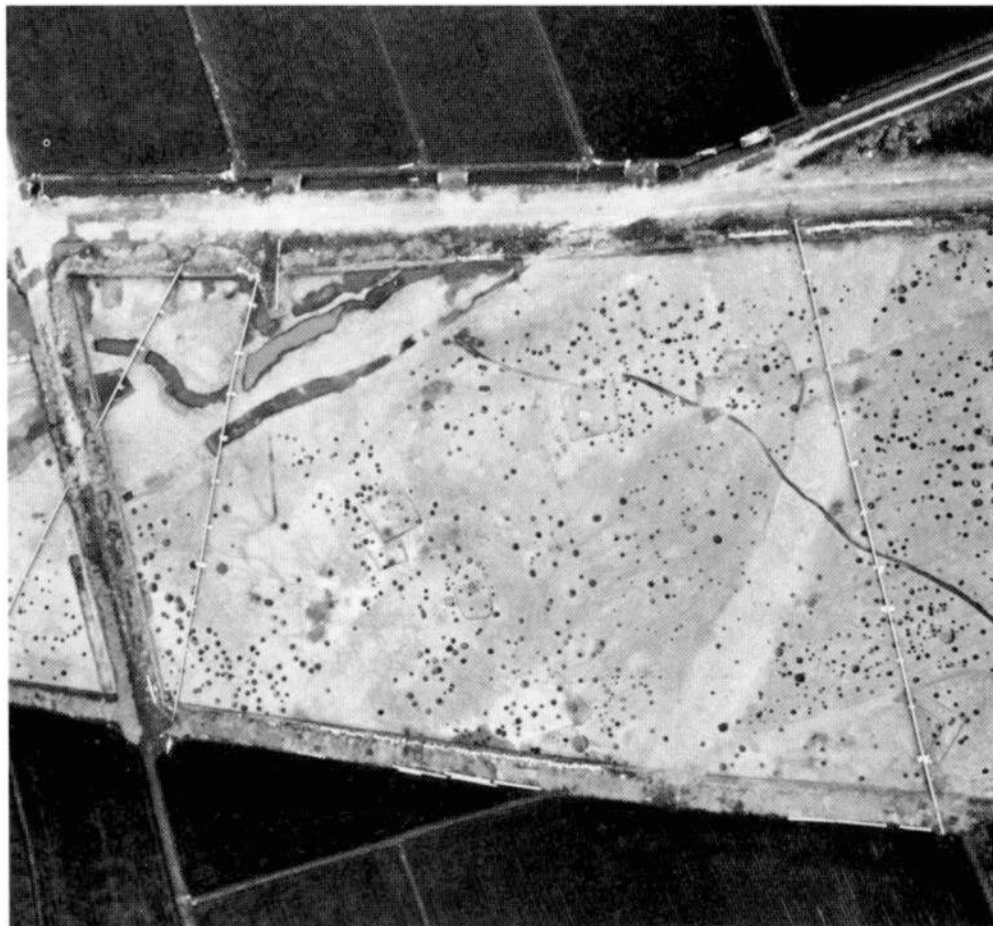
高田遺跡発掘区全景(東から)



1. 高田遺跡Ⅰ区近景(東から)



2. 高田遺跡Ⅱ区近景(東から)



2. 高田遺跡 I 区西側遺構近景



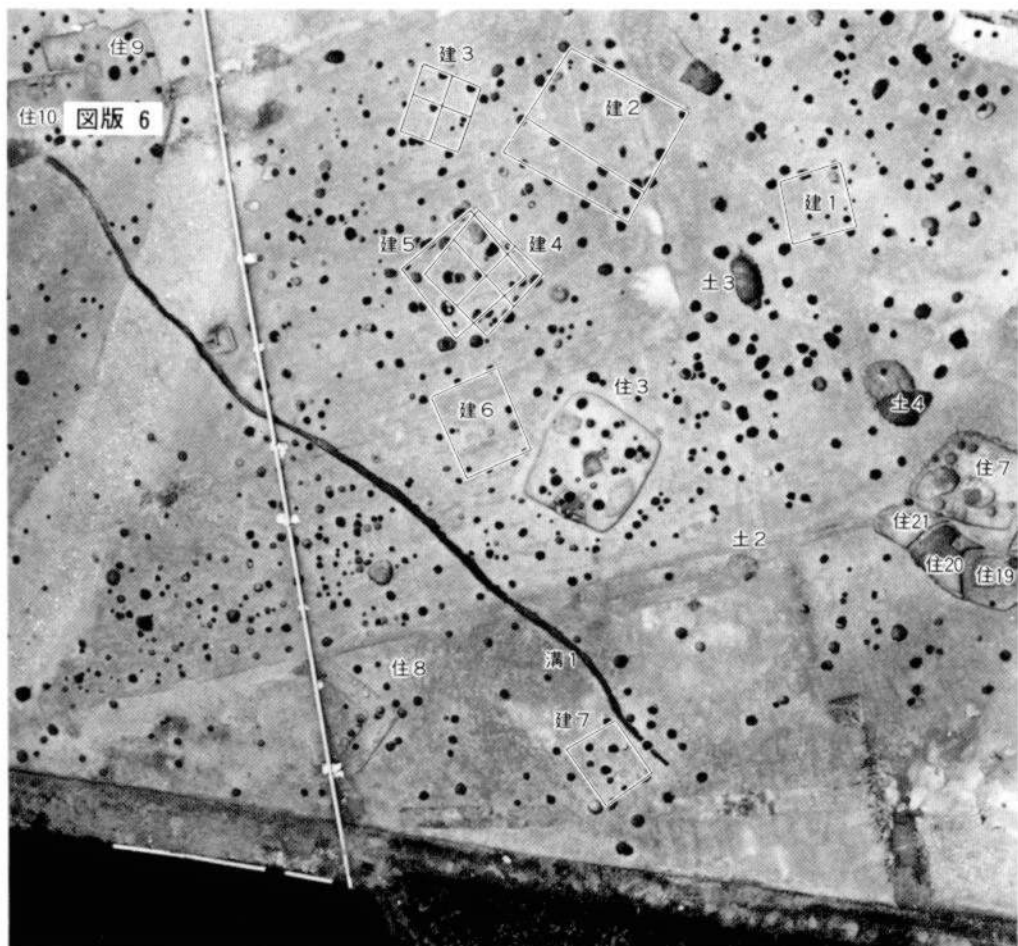
1. 高田遺跡 I 区東側遺構近景



1. I区東南側遺構
近景



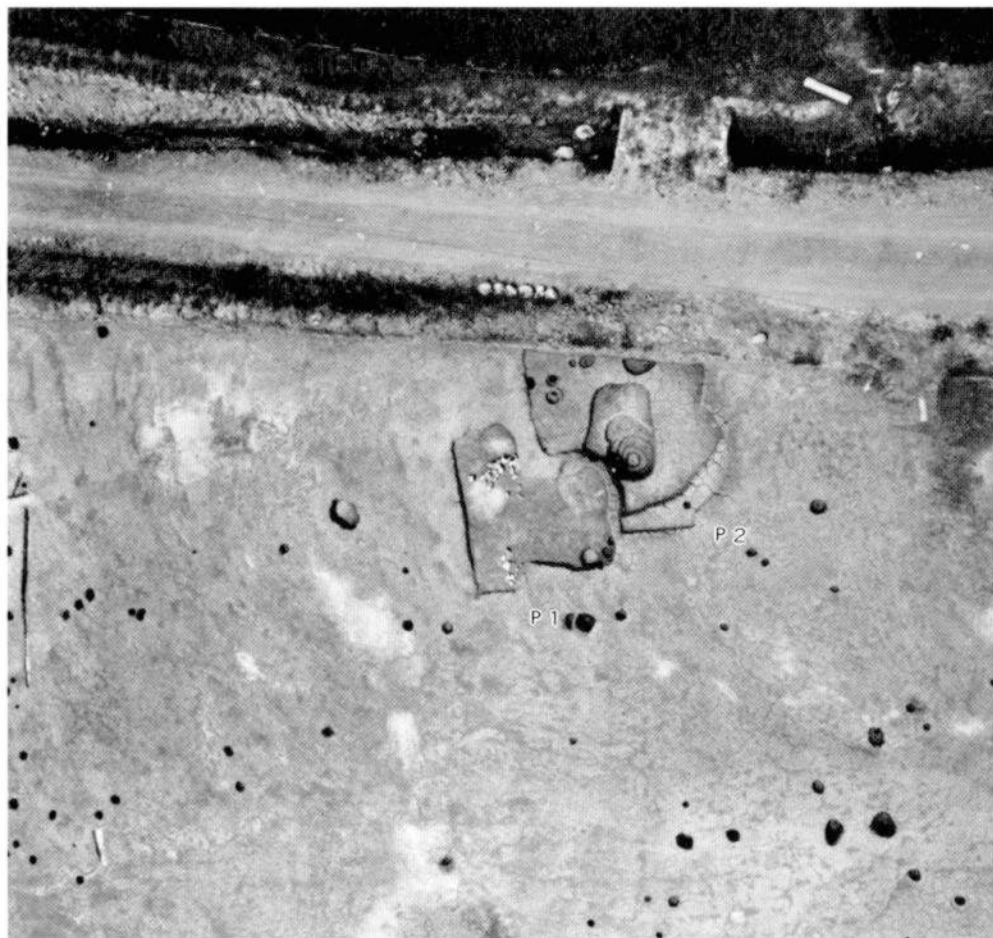
2. I区東北側遺構
近景



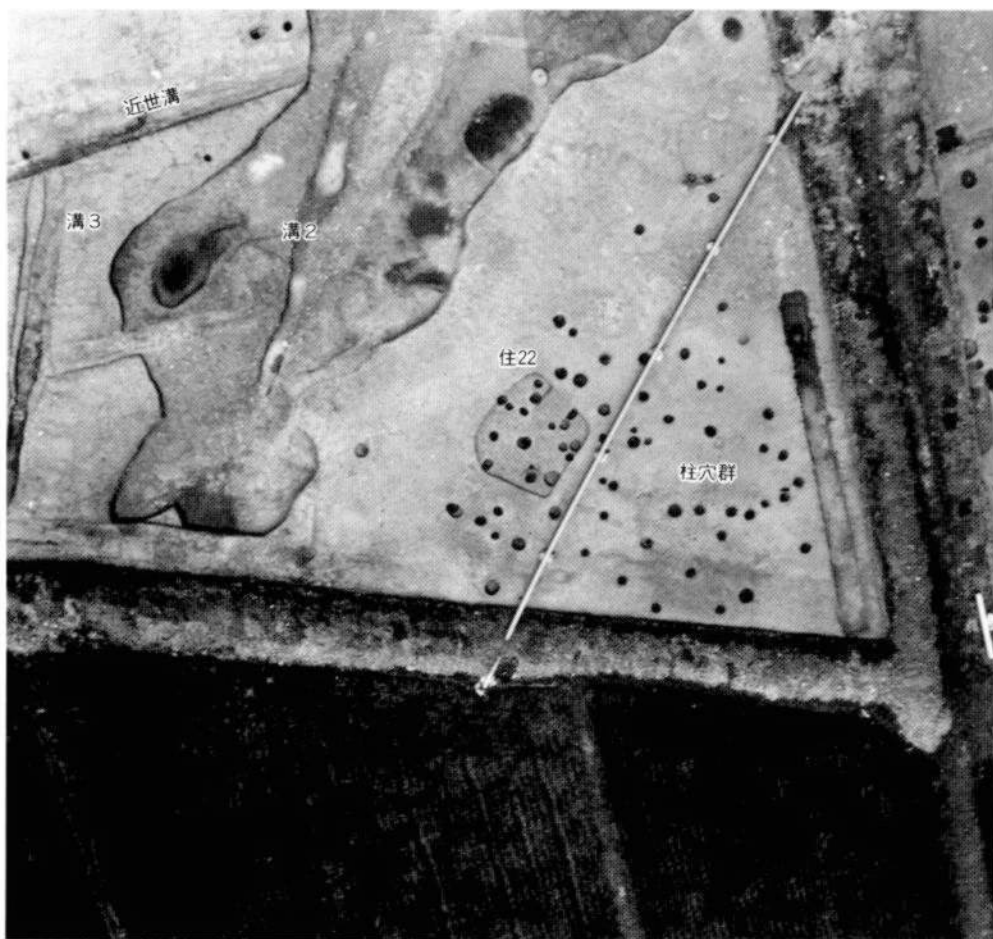
1. I区中央部遺構全景



2. 遺跡中央部溝全景



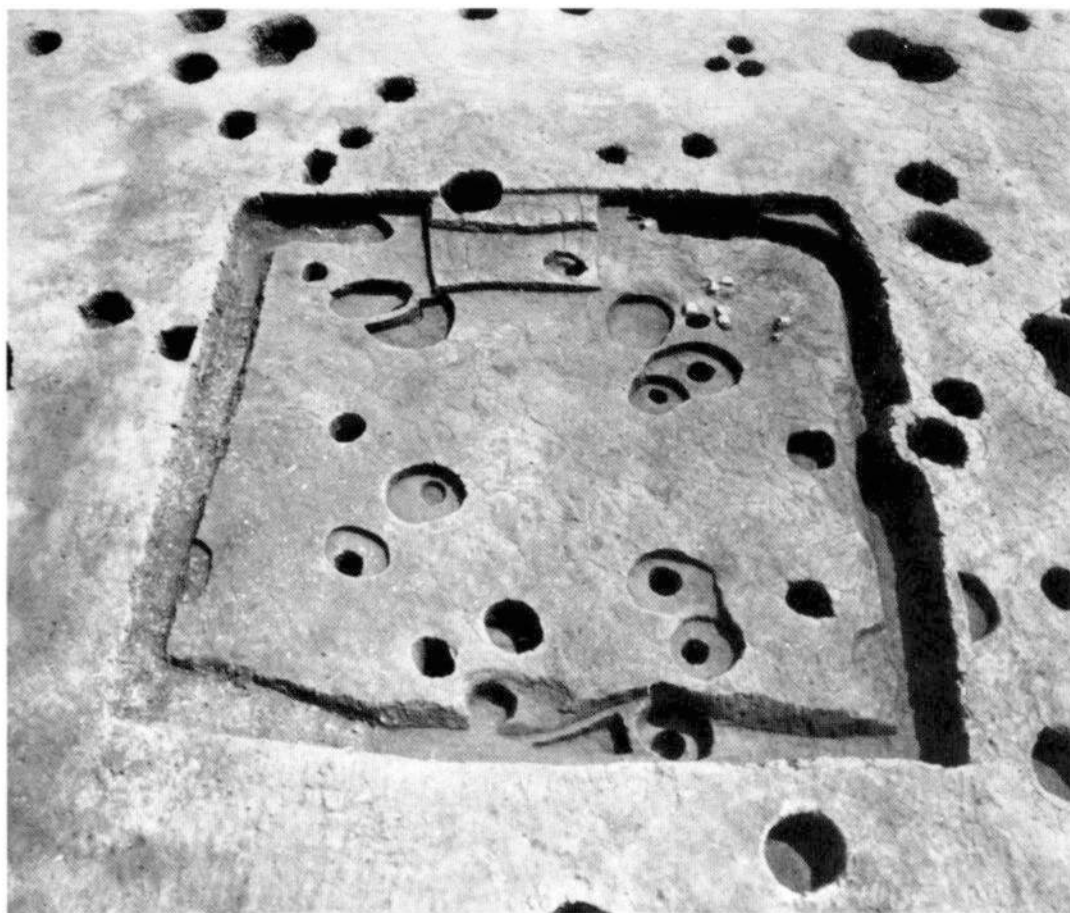
1. II区北側
Pit群



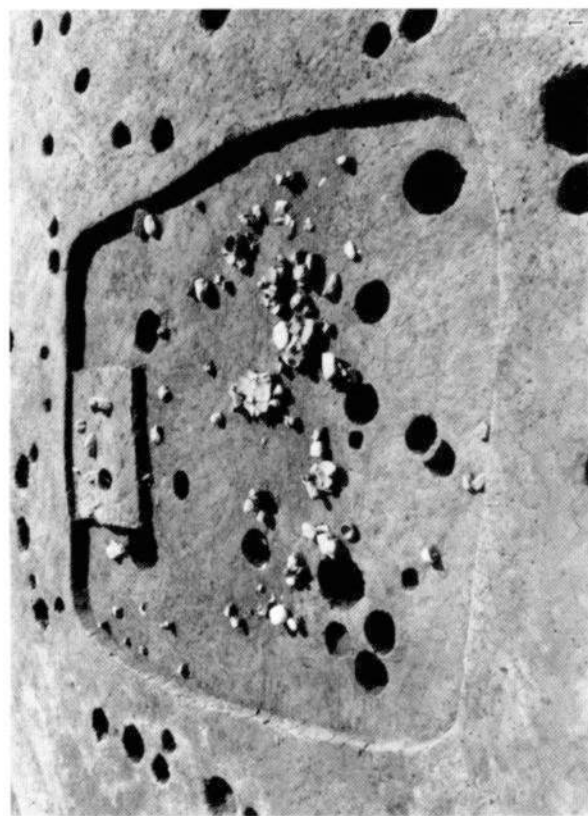
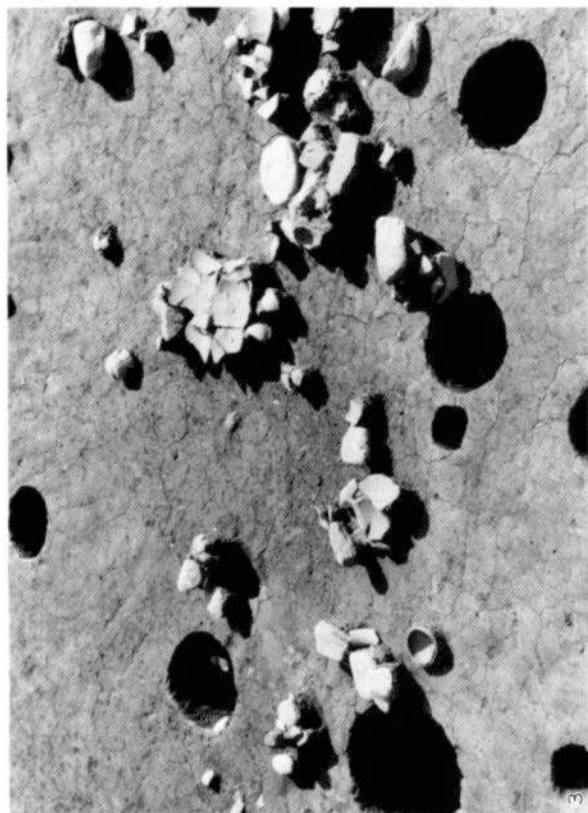
2. II区南側
住居跡と溝・
柱穴群



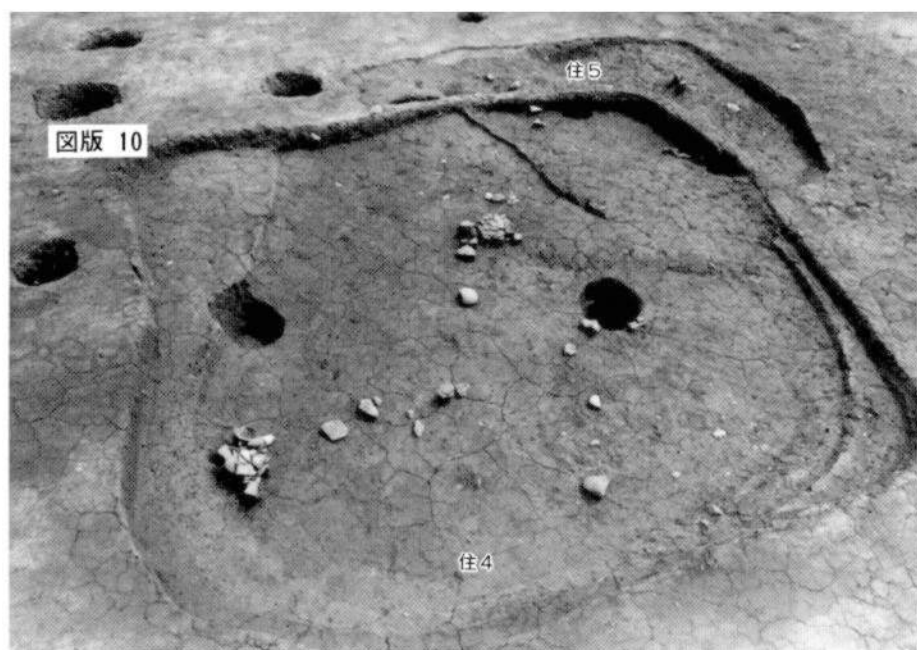
1. 1号住居跡全景



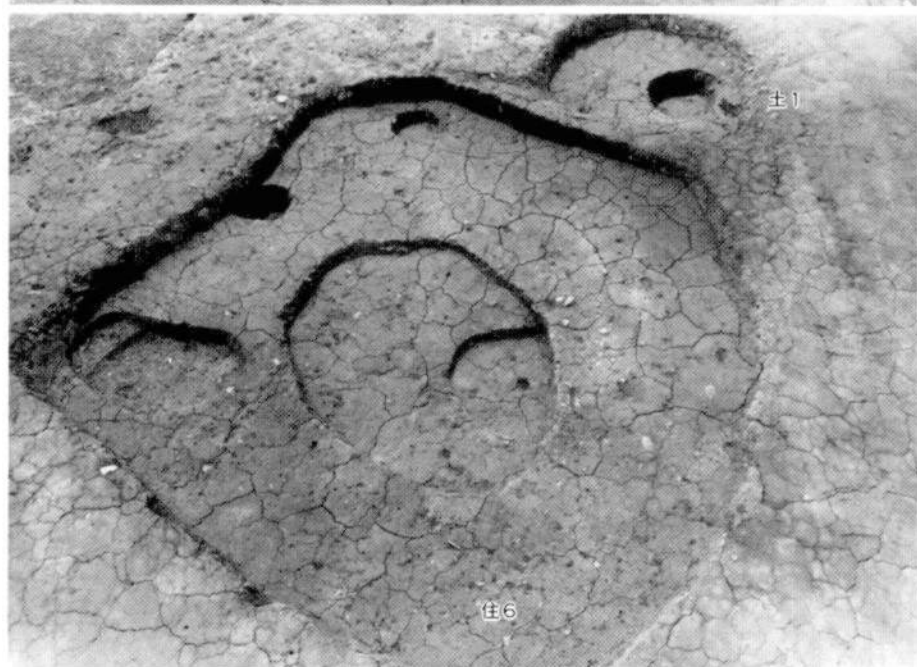
2. 2号住居跡全景



3号住居跡 1. 全景(遺物出土状態) 3. 住居跡床面出土状態
2. 全景(遺物とり上げ後) 4. カマド(断わり後)



1. 4·5号
住居跡全景



2. 6号住居跡全景



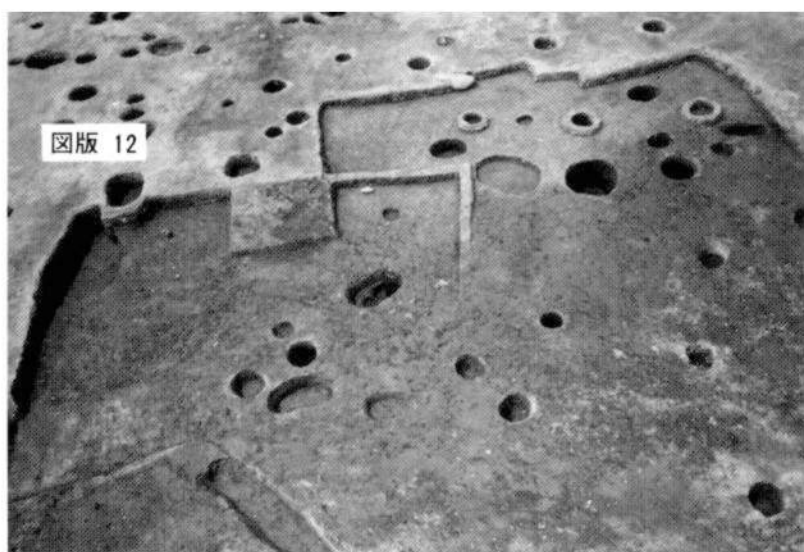
3. 7·19·20·21号
住居跡全景



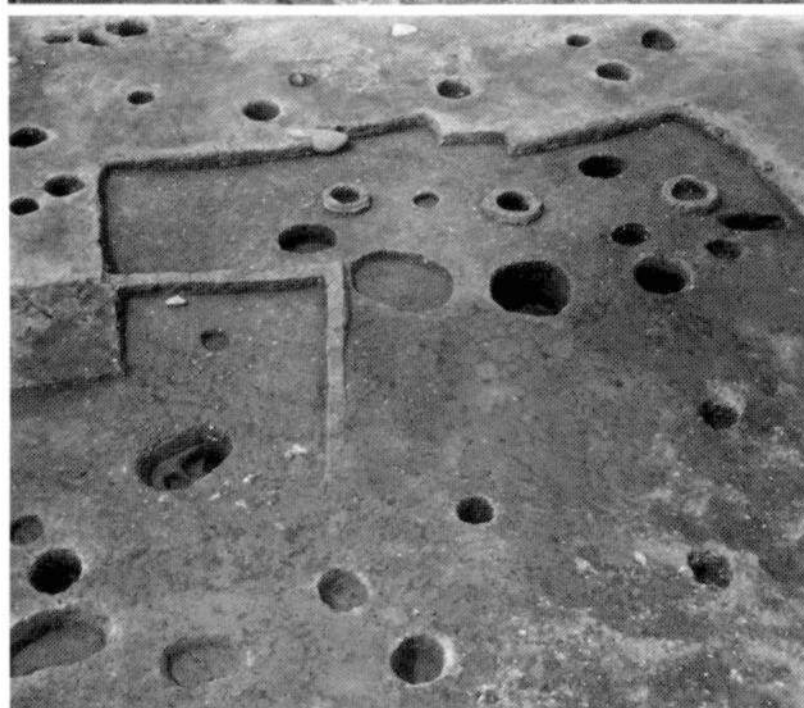
2. 17号住居跡全景



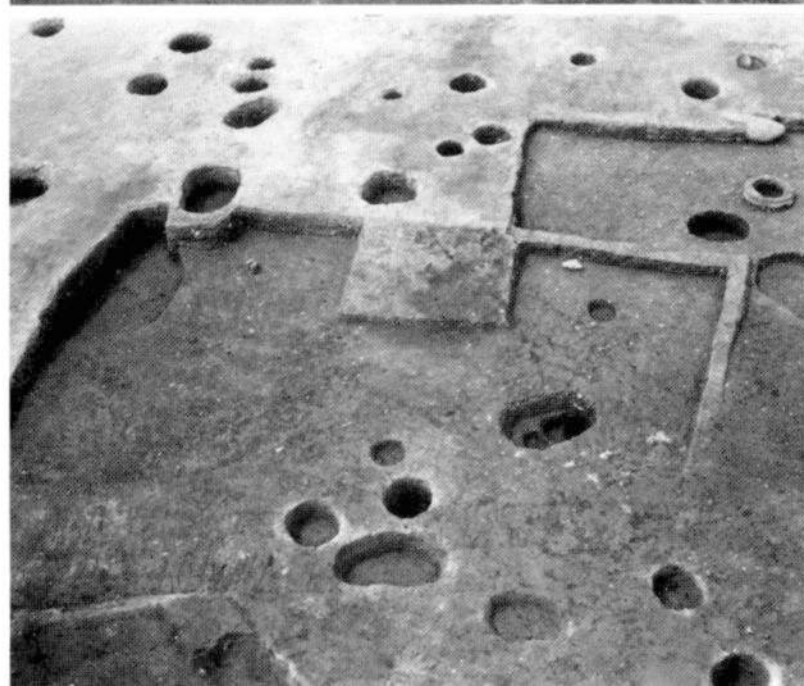
1. 8号住居跡全景



1. 9・10号住号跡
全景



2. 9号住居跡全景



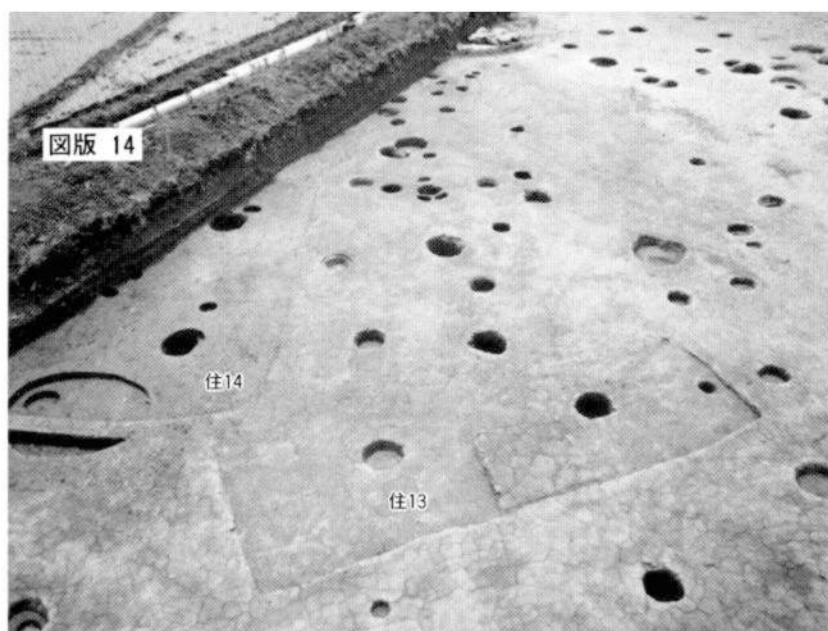
3. 10号住居跡全景



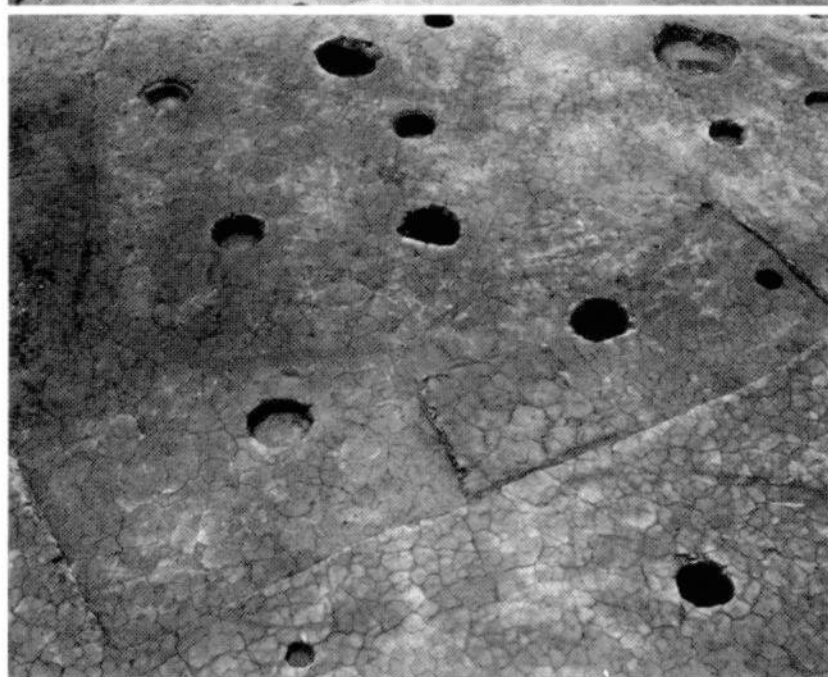
1. 11号住居跡全景



2. 12号住居跡全景



1. 13·14号住居跡全景



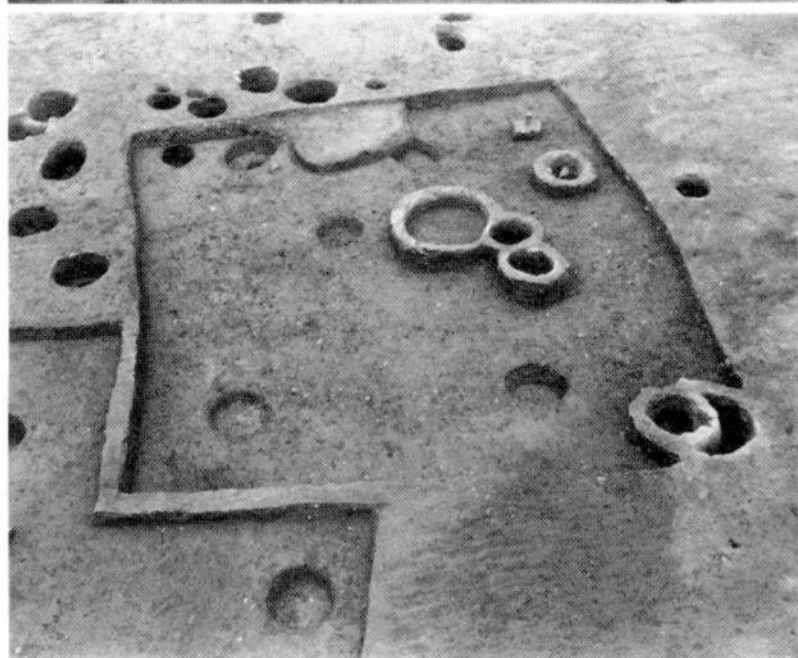
2. 13号住居跡全景



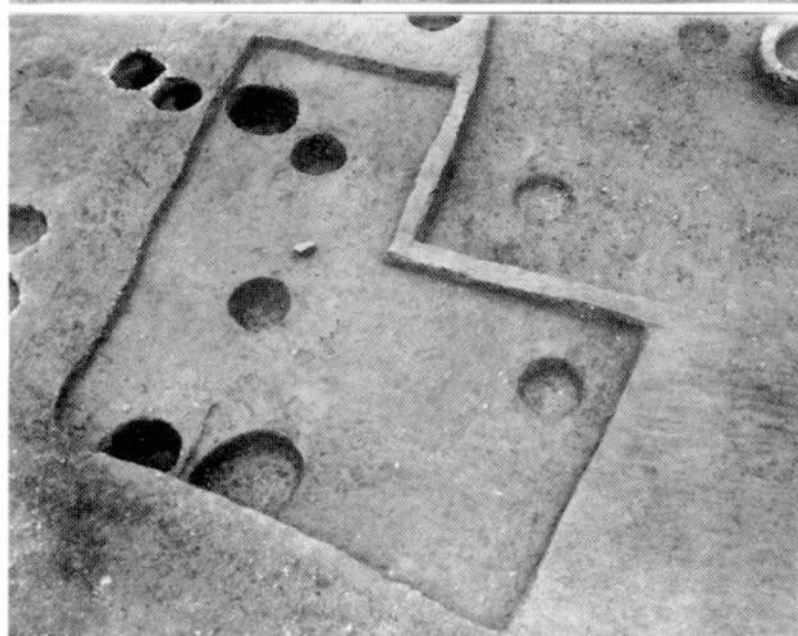
3. 14号住居跡全景



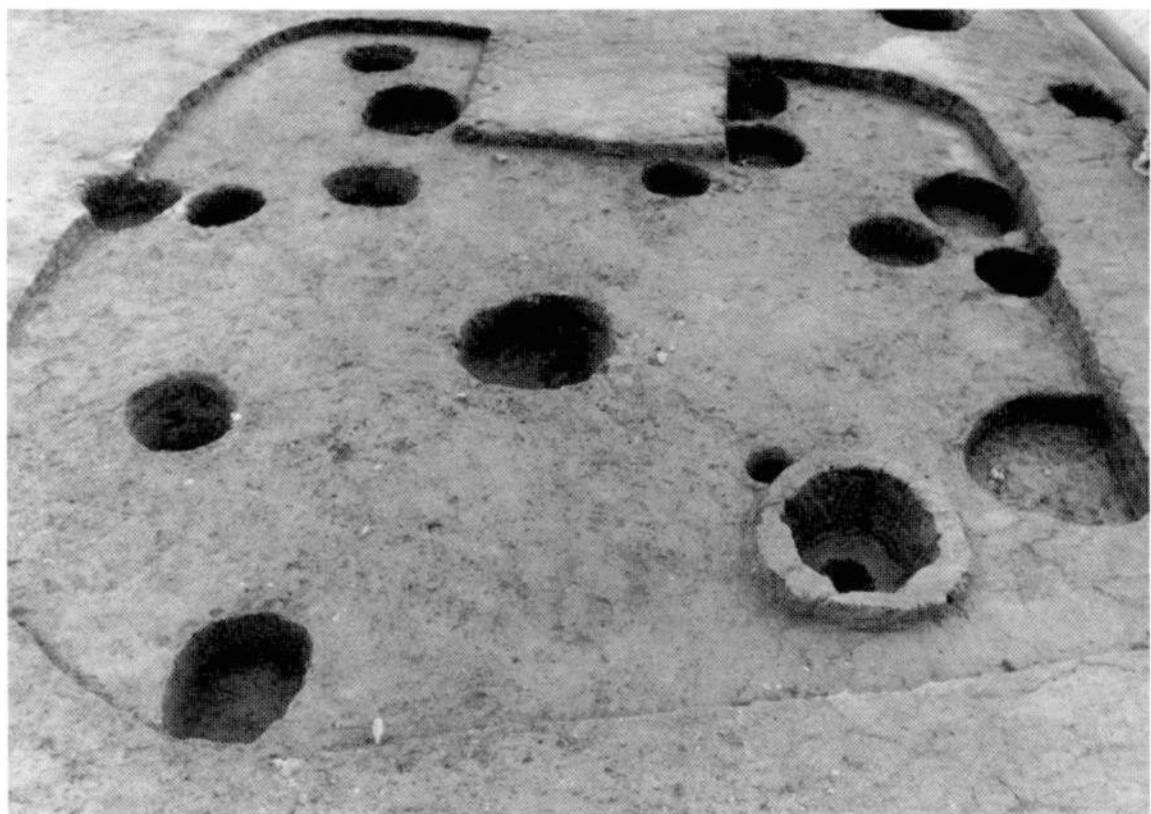
1. 15·16号住居跡
全景



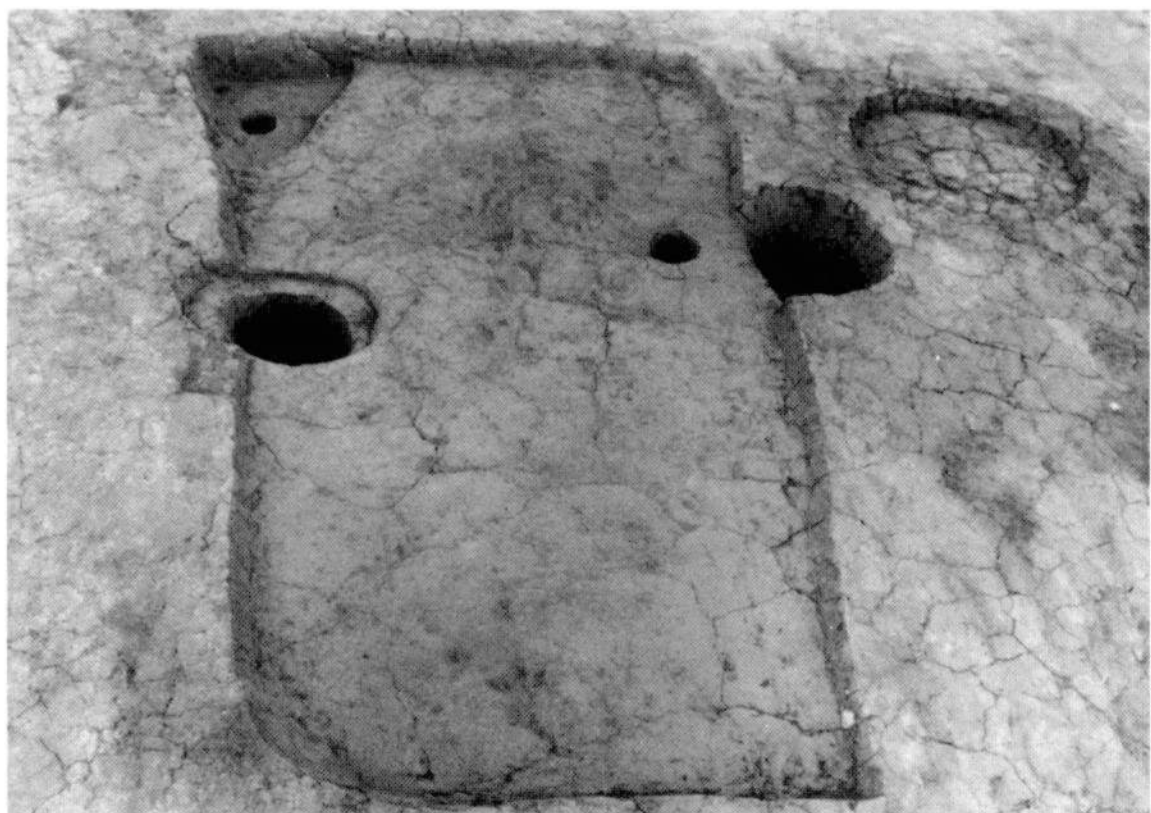
2. 15号住居跡全景



3. 16号住居跡全景



1. 22号住居跡全景



2. 23号住居跡全景



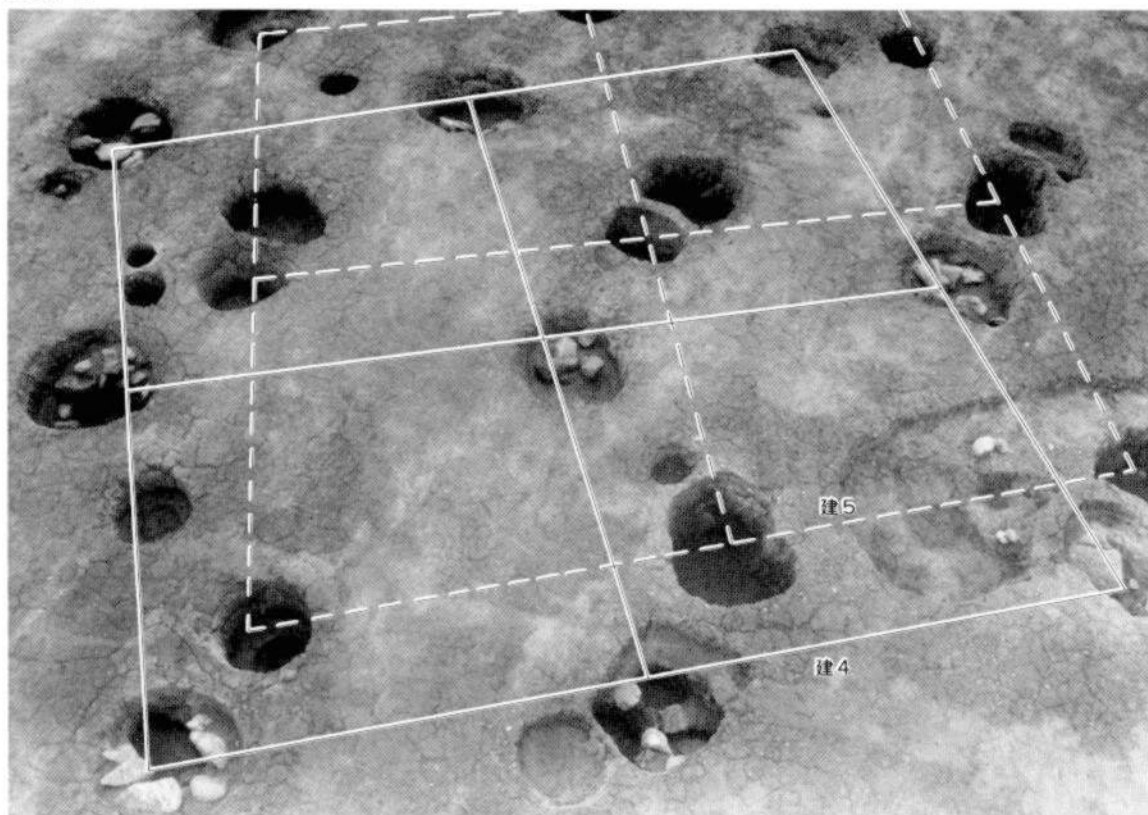
カマド断切状態
1. 2号住居跡カマド



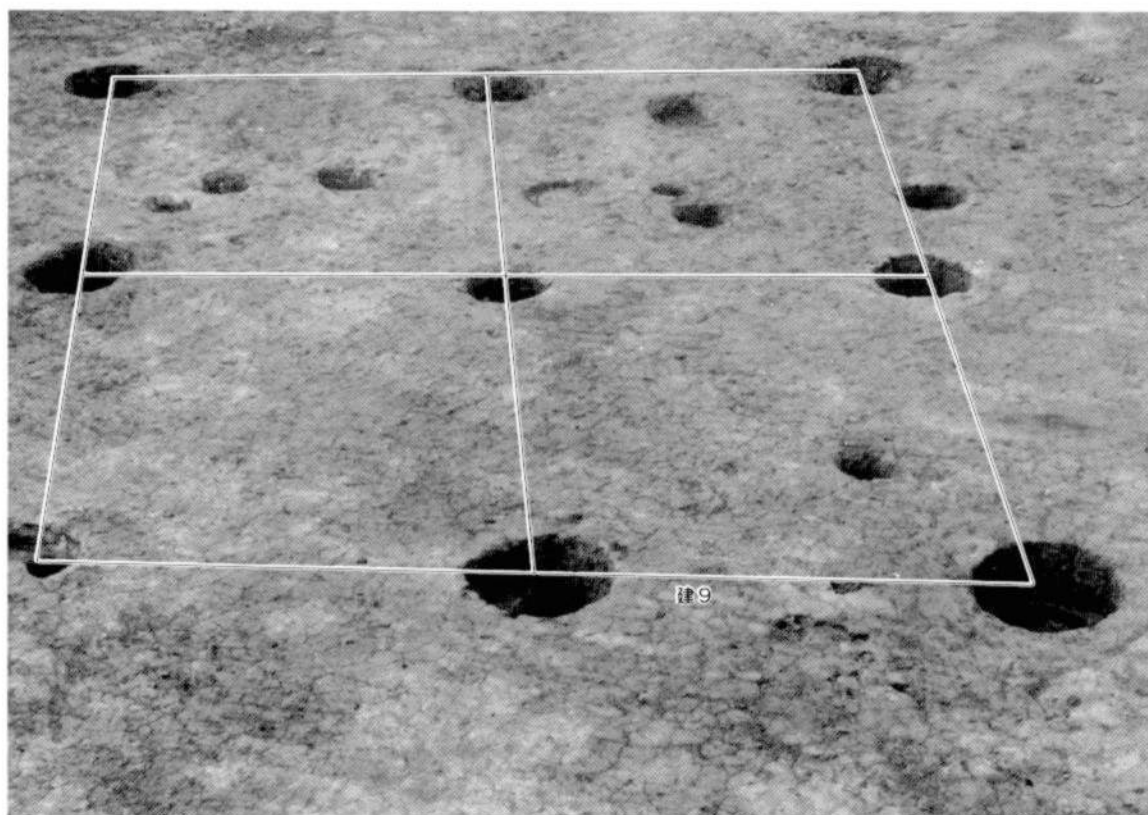
2. 12号住居跡カマド



3. 22号住居跡カマド



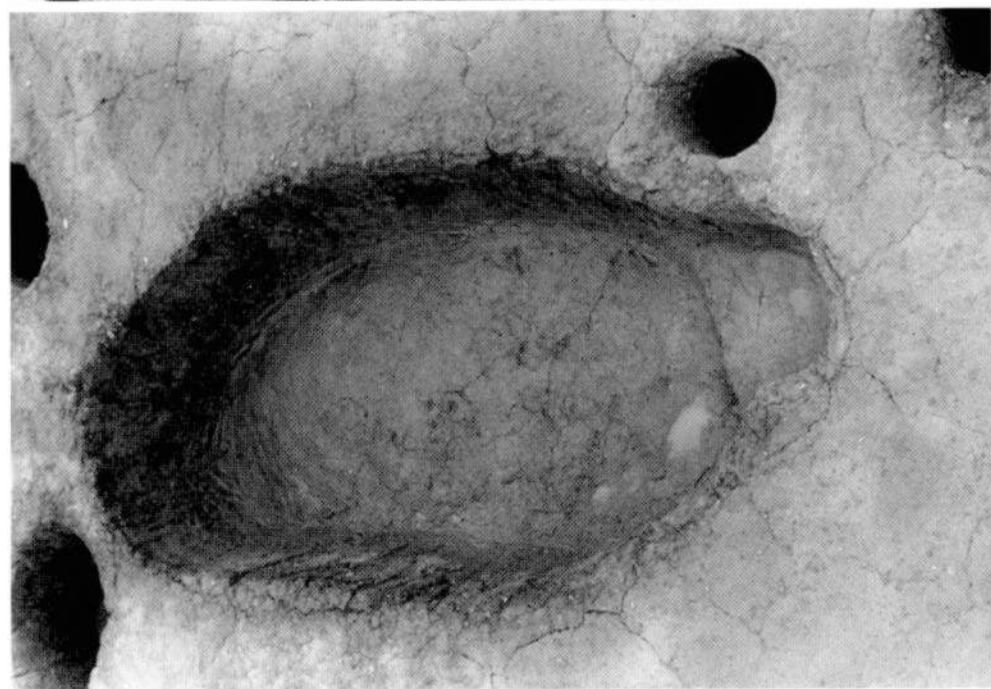
1. 4・5号掘立柱建物全景



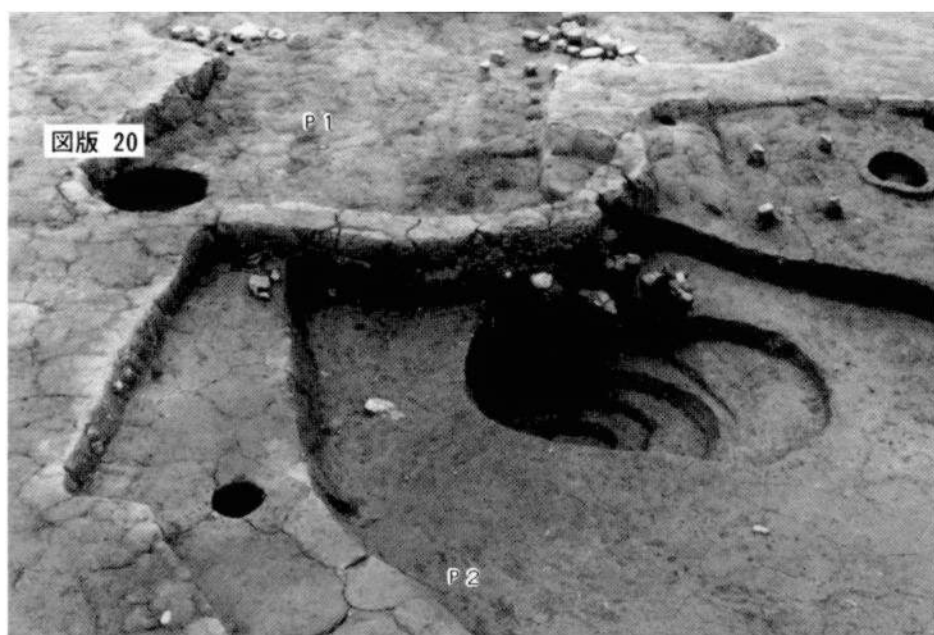
2. 9号掘立柱建物全景



2. 土坑 4 全景



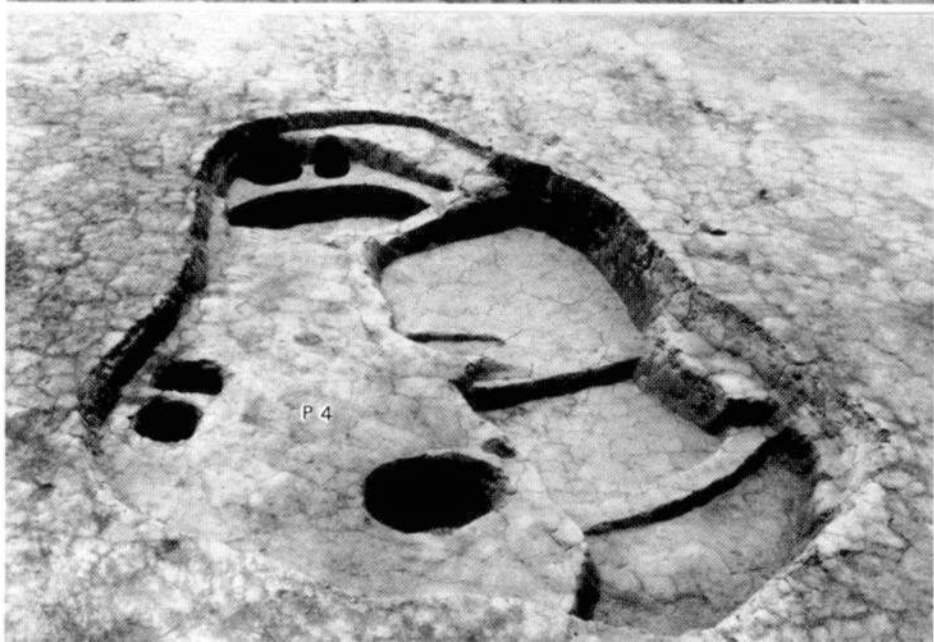
1. 土坑 3 全景



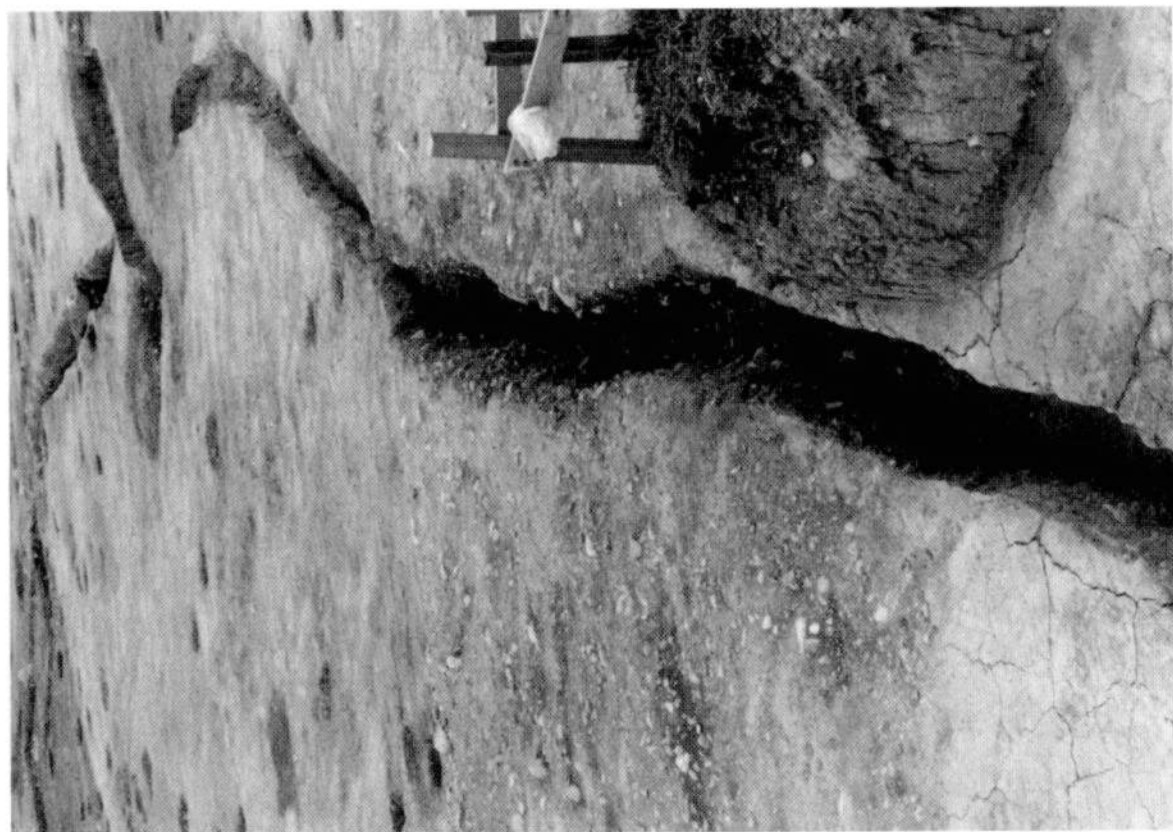
1. II区
Pit1·2全景



2. II区Pit3全景



3. II区Pit4全景



2. 溝2(上)上流I区側(下)下流II区側

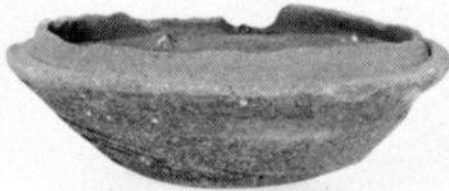
1. 溝1近景



1

高田遺跡出土遺物

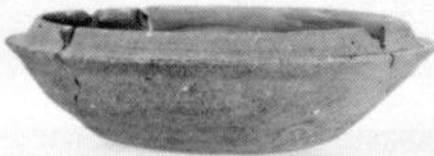
- 1. 2号住居跡出土遺物杯蓋
- 2. 3号住居跡出土遺物杯身 (No. 2)
- 3. " (No. 5)
- 4. " (No. 6)
- 5. " 杯蓋 (No. 8)
- 6. " (No. 11)
- 7. " (No. 13)
- 8. " 高杯蓋 (No. 19)
- 9. " 杯 (No. 20)



2



5



3



6



4



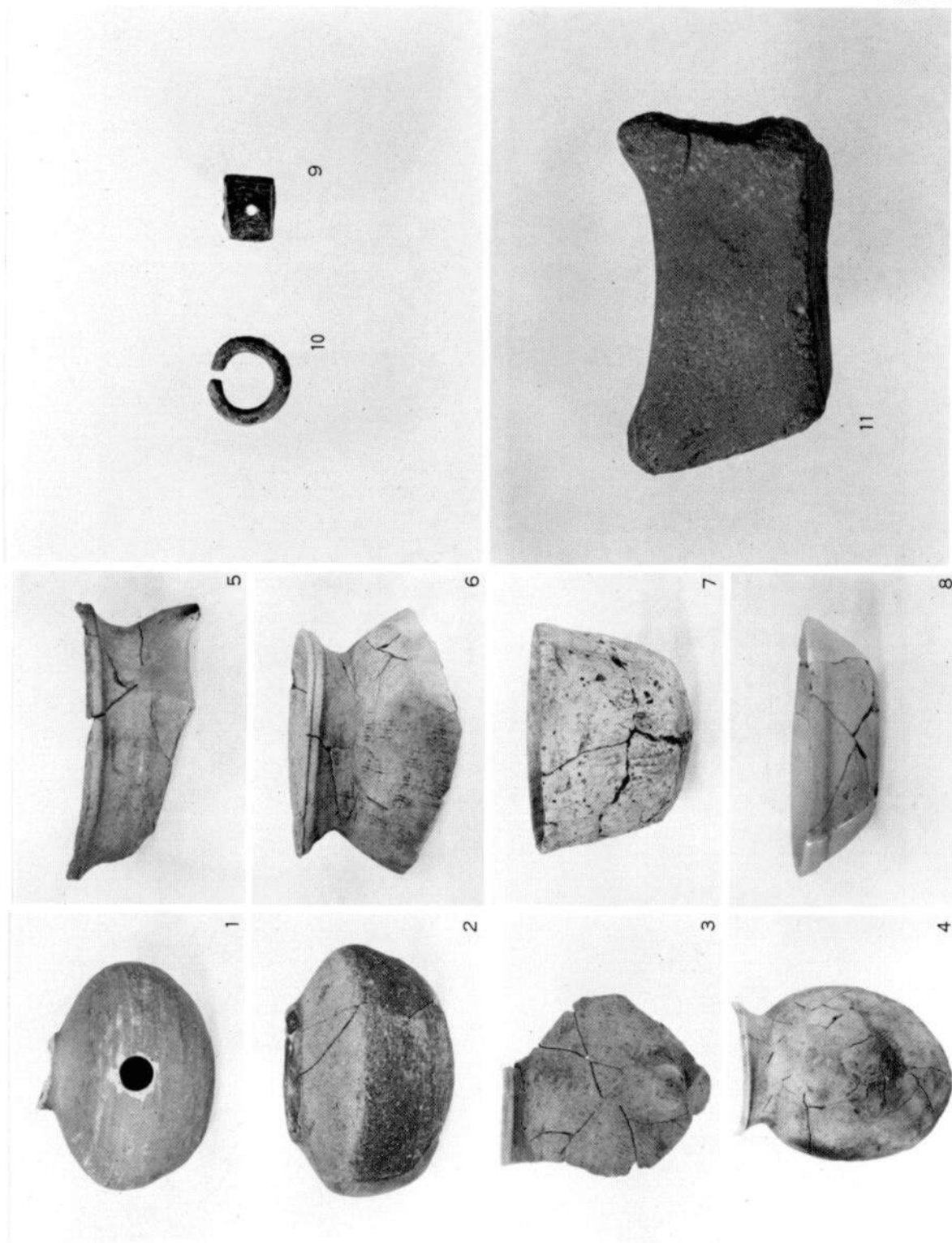
7



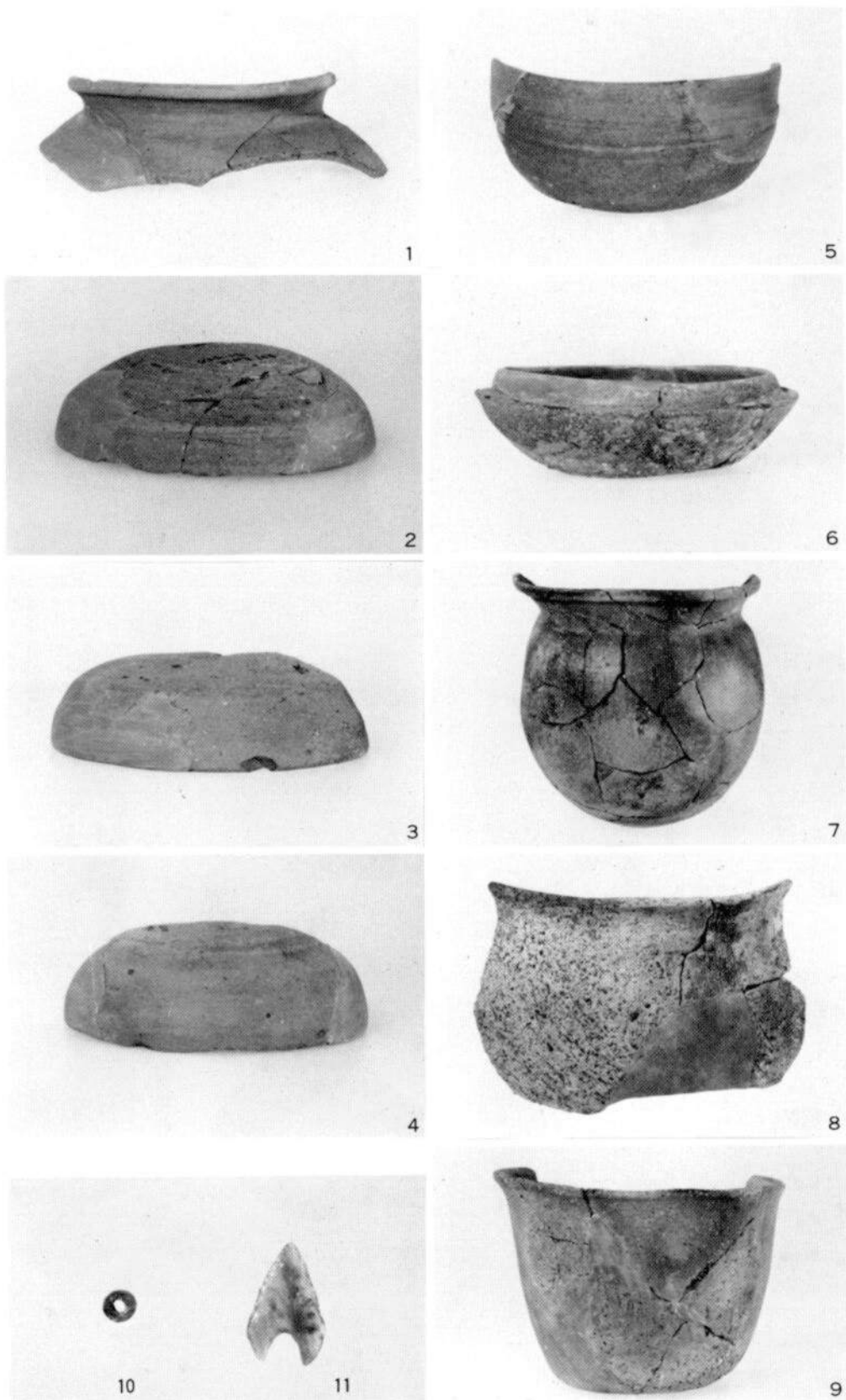
8



9

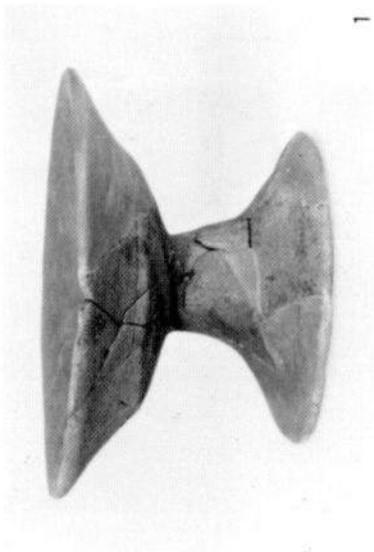


1. 3号竖穴住居跡出土遺物②
 1. 須惠器壺No.22 4. 土師器壺No.28 7. 土師器壺No.51 10. 耳飾(金環)
 2. 須惠器壺No.25 5. 土師器壺No.29 8. 土師器杯No.52 11. 砥石
 3. 土師器壺No.27 6. 土師器壺No.30 9. 白玉(未整品)

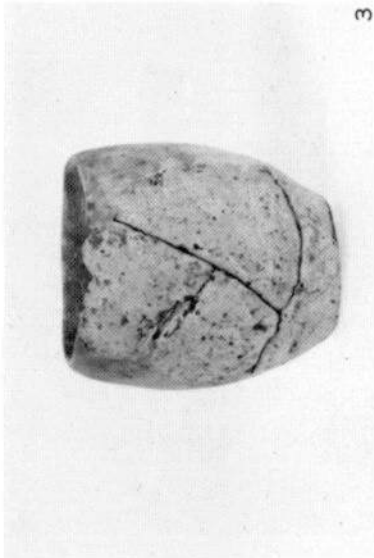


高田遺跡出土遺物 3・4号住居跡

- | | | |
|-------------|-------------|-------------|
| 1. 須恵器甕 | 5. 須恵器碗 | 9. 土師器壺No.3 |
| 2. * 杯蓋No.3 | 6. * 杯身 | 10. 白玉 |
| 3. * | 7. 土師器甕No.7 | 11. 石鏃 |
| 4. * No.2 | 8. * | |



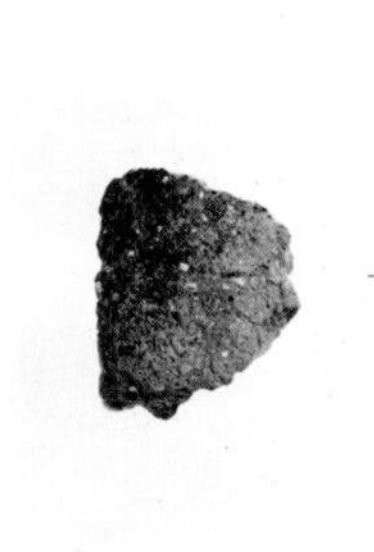
1



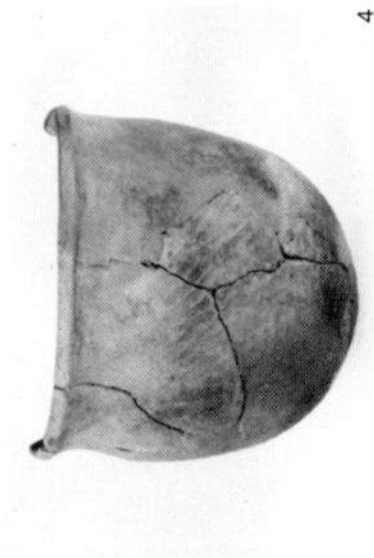
3



6



2



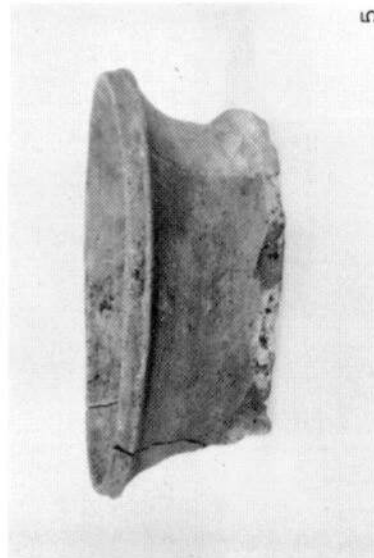
4



7



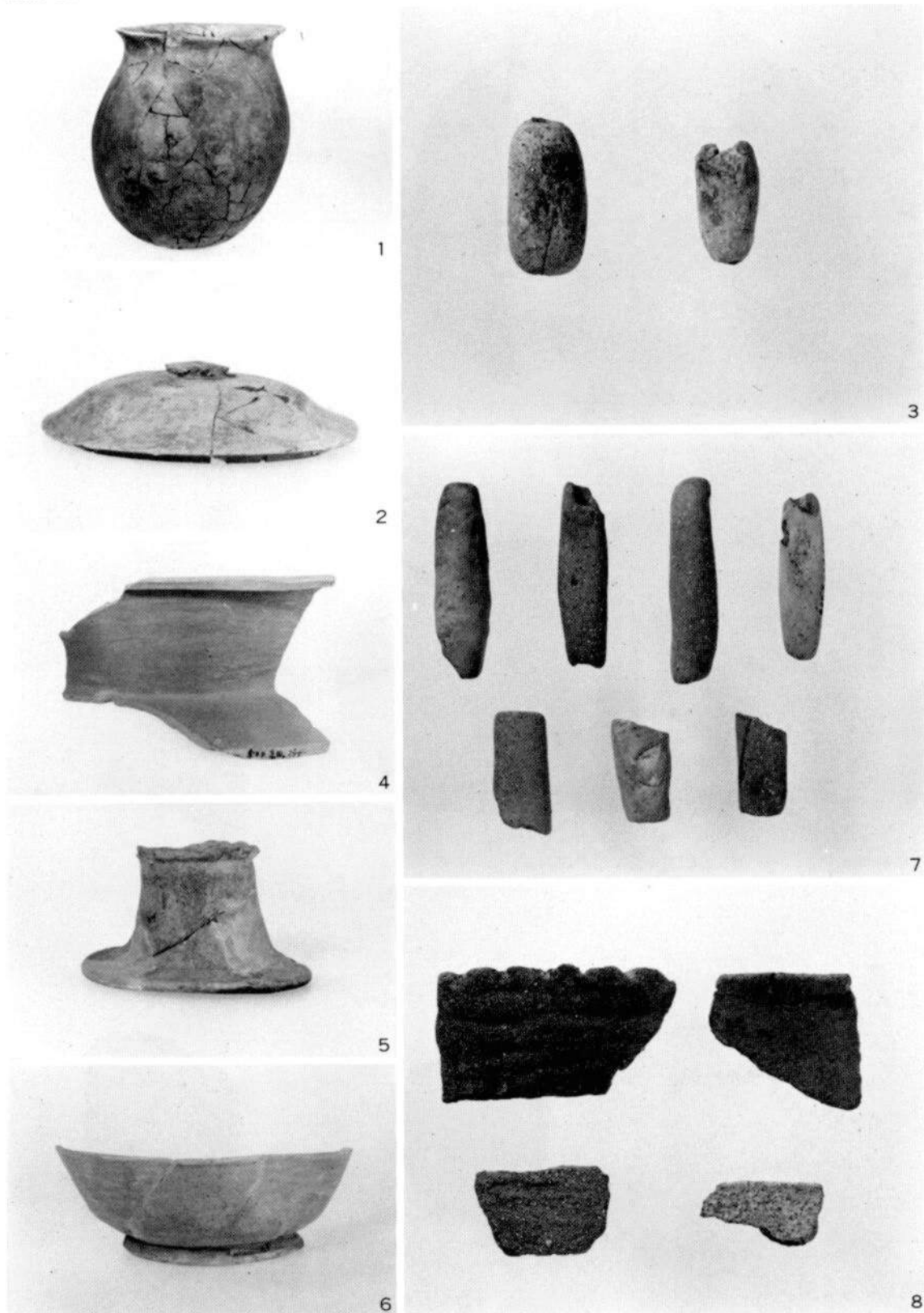
5



8

高田遺跡出土遺物 4 1. 5号住居跡高杯(No.10)
2. 5号住居跡7イニ
3. 5号住居跡タコ壺

2 4. 7号住居跡甕(No.23) 7. 7号住居跡付近(No.2)
5. 7号住居跡甕(No.3) 8. 7号住居跡杯蓋(No.4)
6. 7号住居跡杯蓋(No.1)

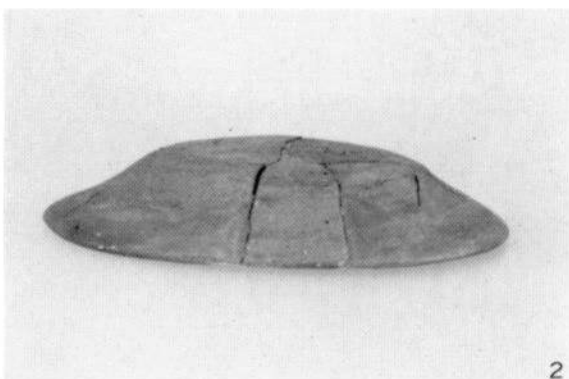


高田遺跡出土遺物 5

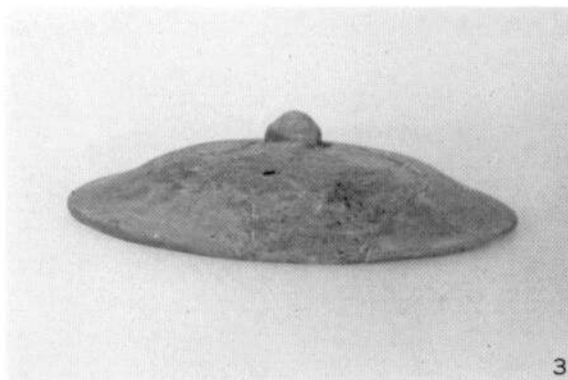
- | | |
|---------------------|------------------|
| 1. 土師器甕(12号住居跡)No.5 | 5. 高杯(溝3) |
| 2. 須恵器蓋(18号住居跡)No.2 | 6. 須恵器椀(溝5) |
| 3. 土鍾(11号住居跡) | 7. 土鍾(溝2) |
| 4. 須恵器甕(溝1) | 8. 縄文土器(溝2出土その他) |



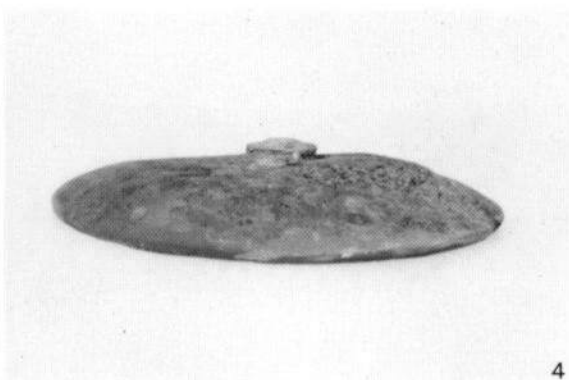
1



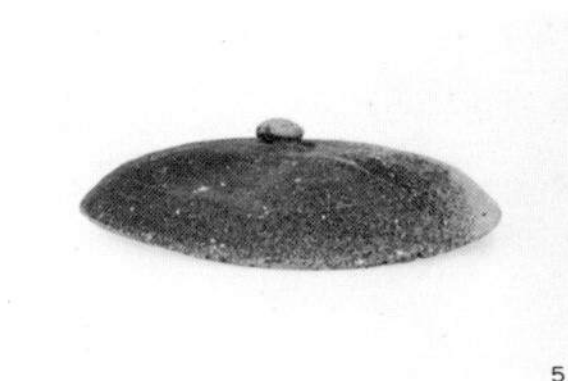
2



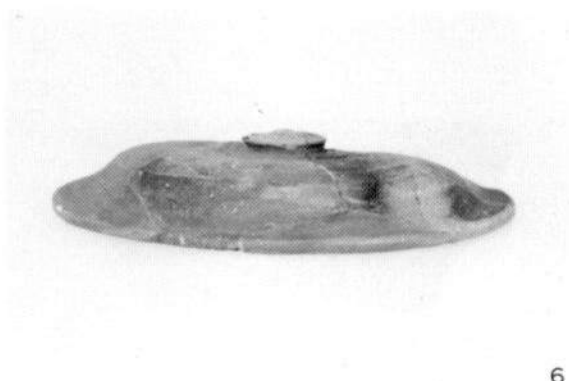
3



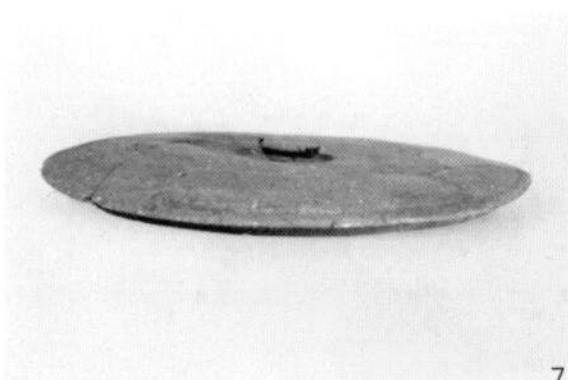
4



5



6



7



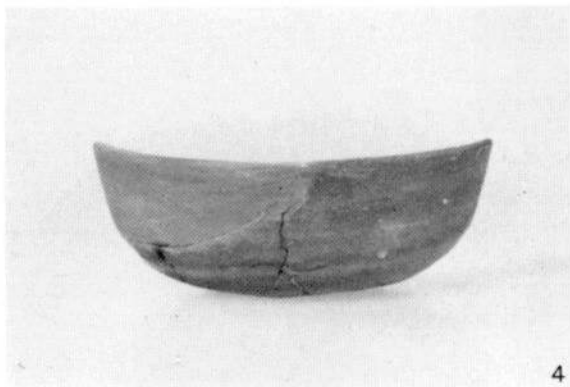
8

高田遺跡出土遺物 6 溝 2

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1. 須恵器蓋杯No.7 | 5. 須恵器蓋杯No.11 |
| 2. " No.4 | 6. " No.1 |
| 3. " No.10 | 7. " No.12 |
| 4. " No.2 | 8. " No.6 |



1



4



2



5



3



6



7

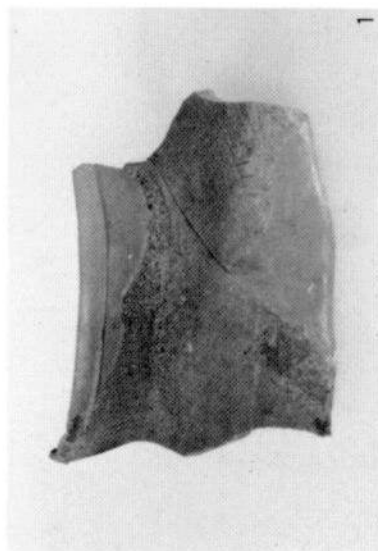


8

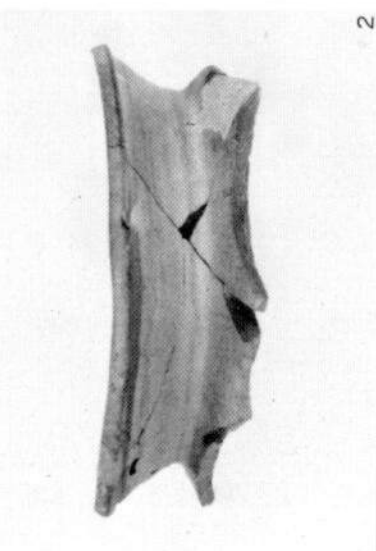
高田遺跡出土遺物 7

- 1. 須惠器碗
- 2. 〃
- 3. 〃 杯
- 4. 〃 杯
- 5. 土師器杯
- 6. 須惠器杯
- 7. 〃 高杯

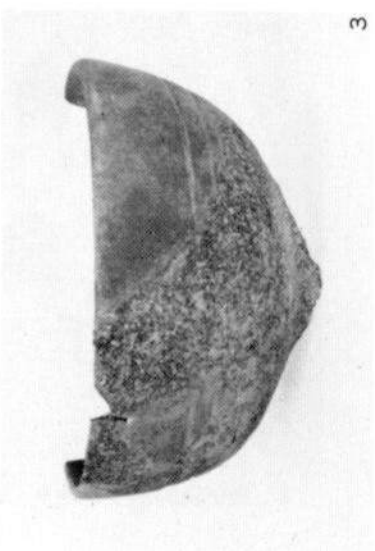
8. 須惠器高杯



1



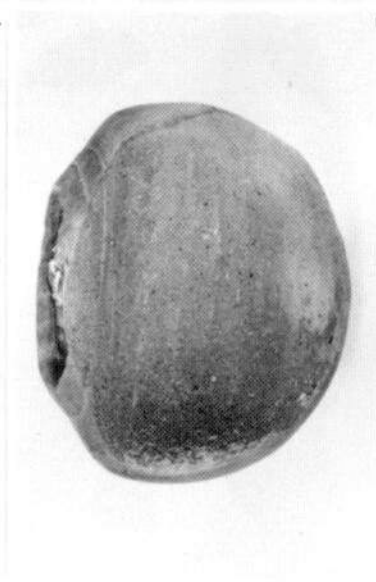
2



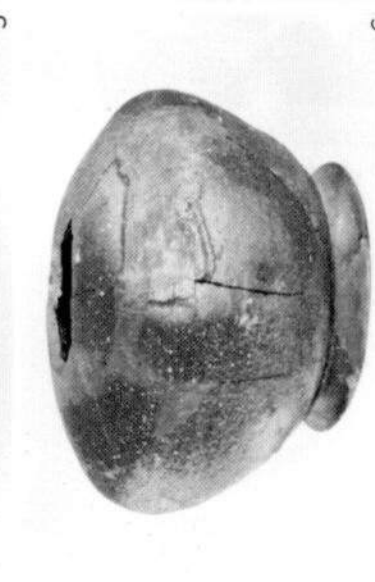
3



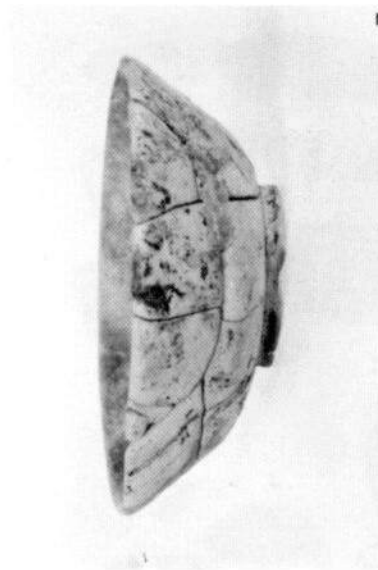
4



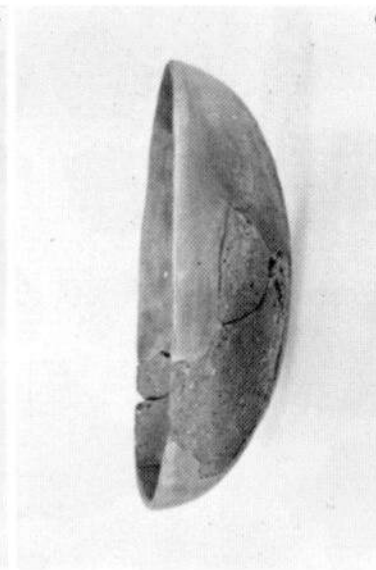
5



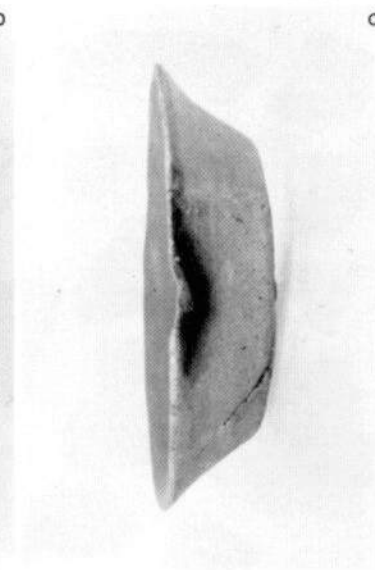
6



7

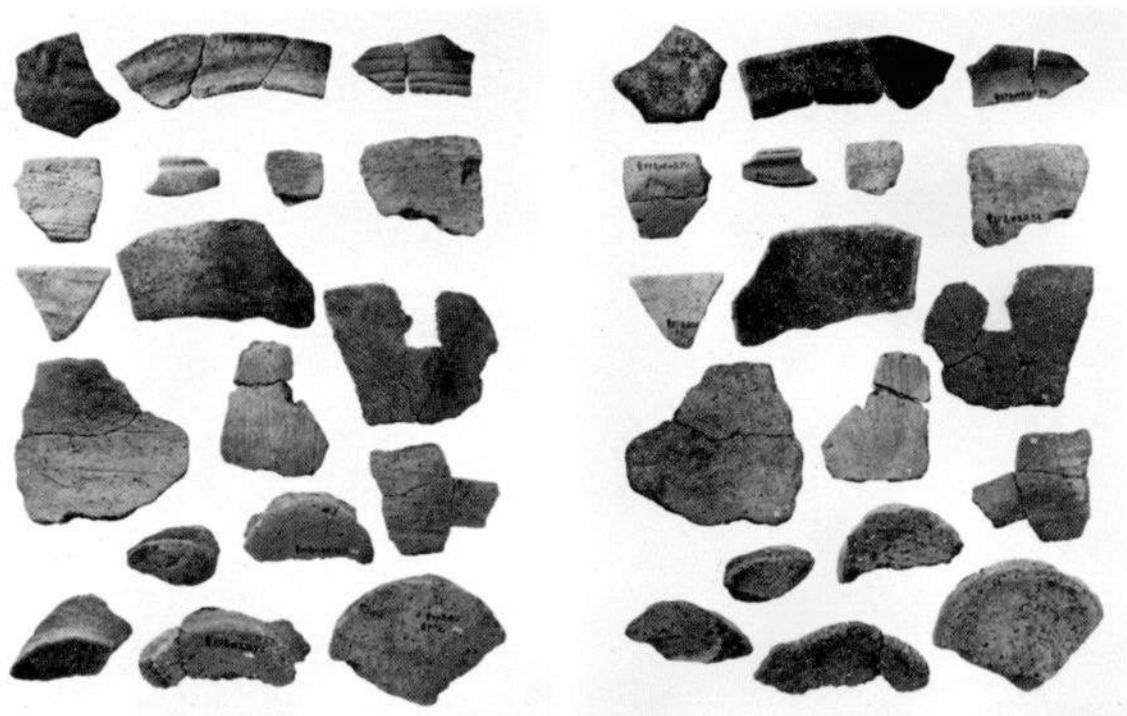


8

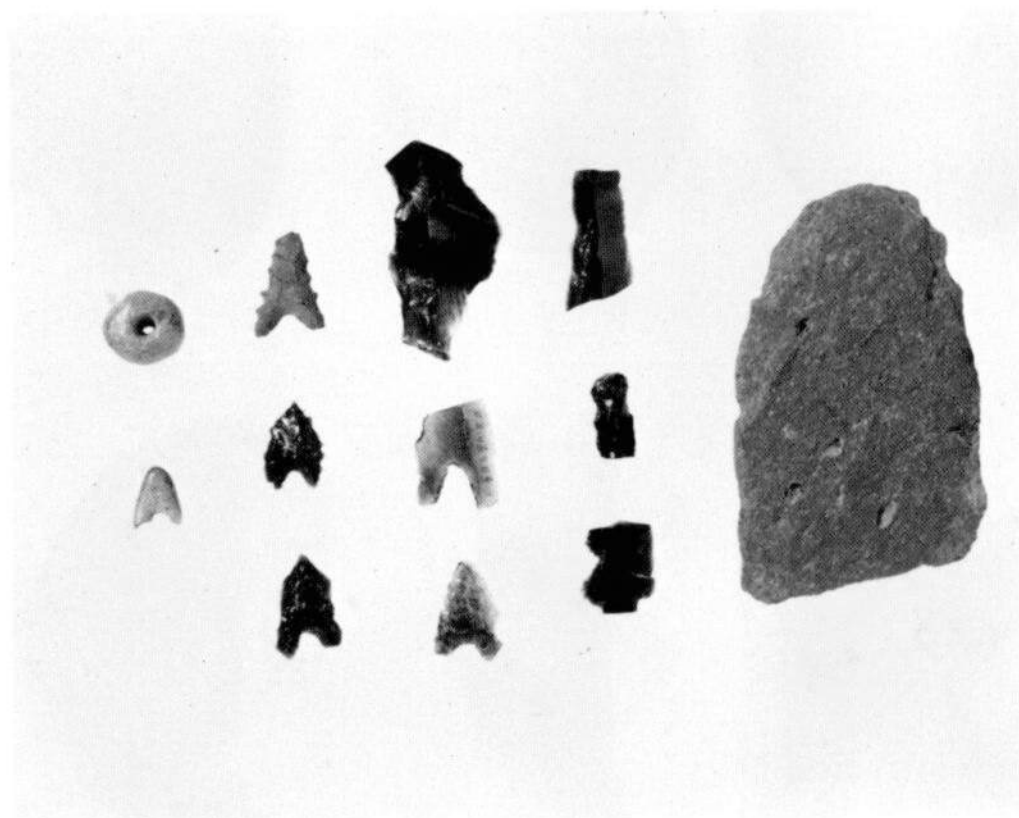


9

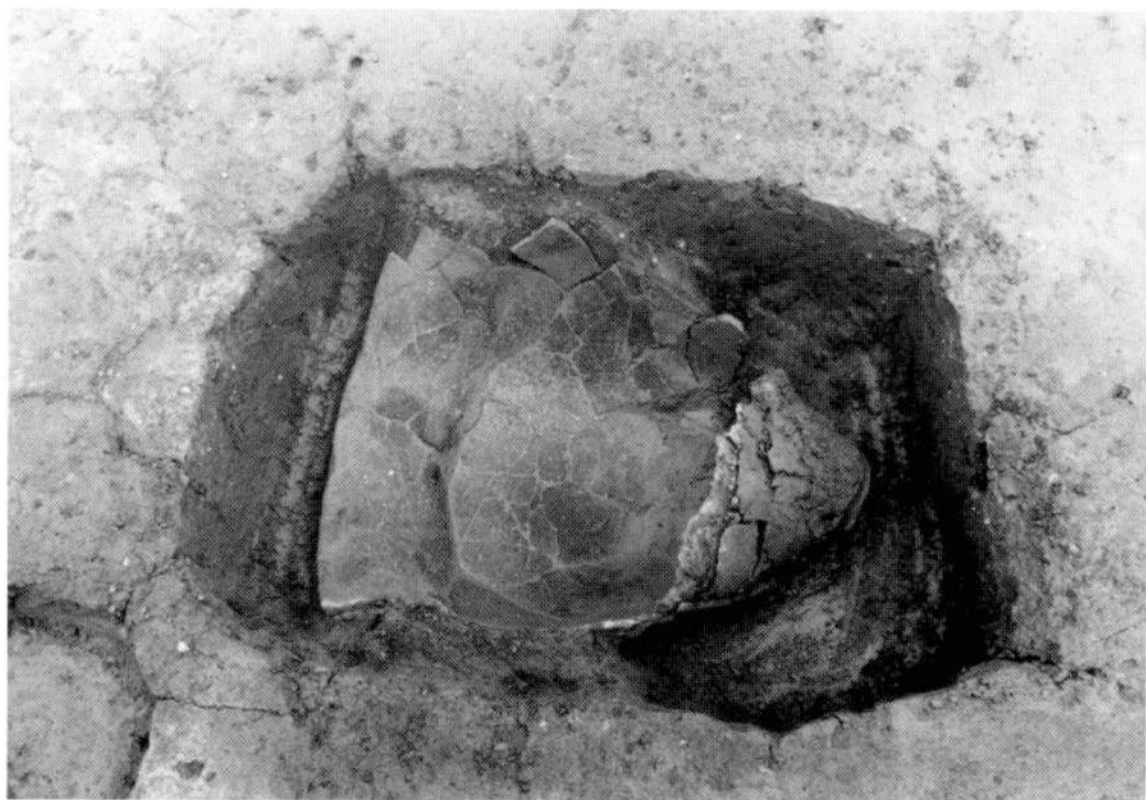
高田遺跡出土遺物 8
 1. 須恵器壺No.32 溝 2 4. 須恵器壺No.33 7. 土師器椀No.38
 2. 須恵器No.31 5. 須恵器No.34 8. 土師器皿No.40
 3. 高杯No.27 6. 高杯No.27 9. 土師器高杯No.41



1. II区Pit 2 出土縄文土器(左)表、(右)裏



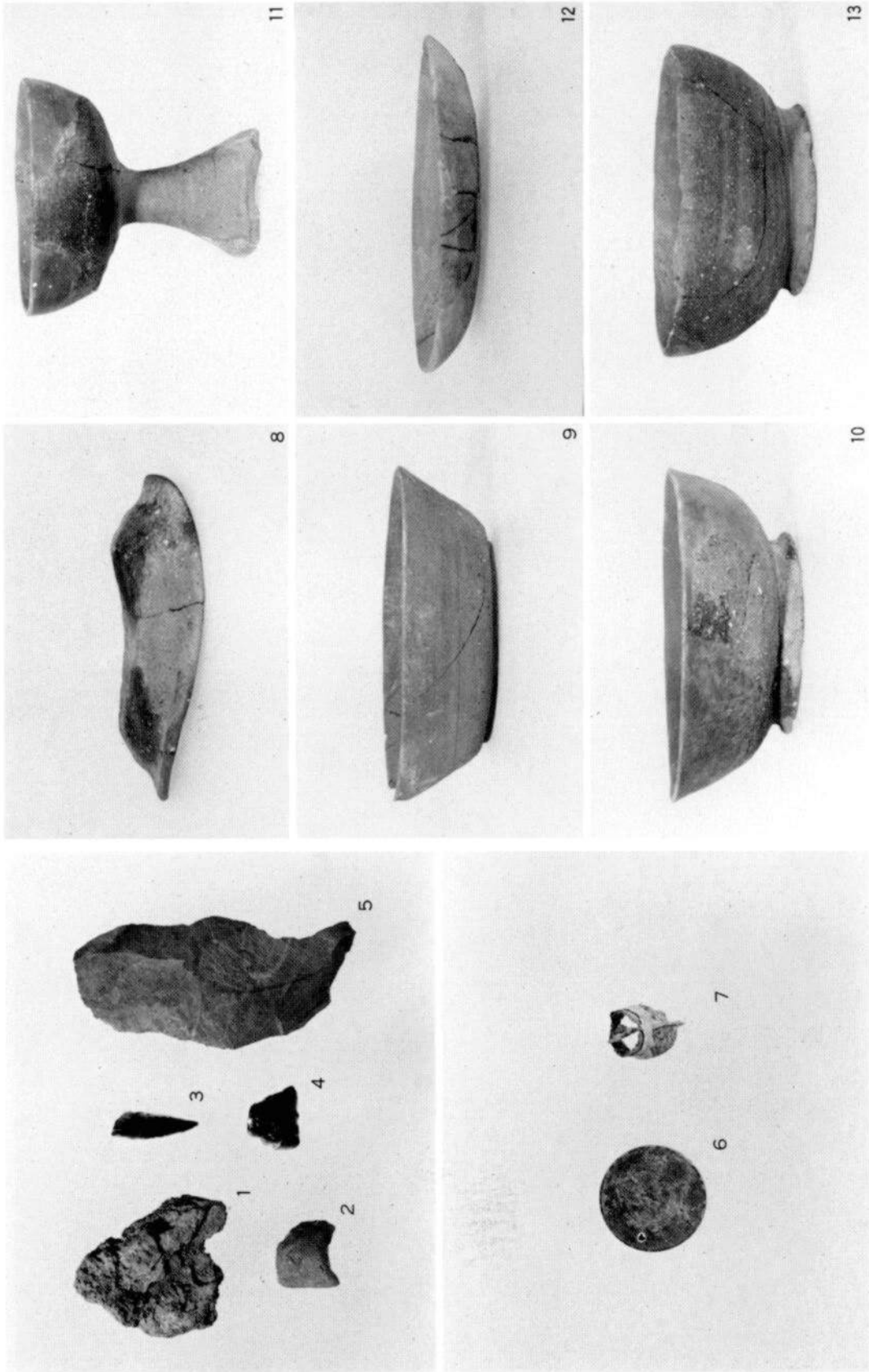
2. 高田遺跡出土遺物 9 II区Pit 2 出土縄文時代石器・玉類



1. 縄文土器深鉢出土状態



2. 高田遺跡出土遺物10 出土した縄文土器



高田遺跡出土遺物11
 1. 軽石 2. 土罐(P71) 3. 剥片(2号住居跡) 4. 石槌 5. 縦長剥片 6. 一銭貨幣 7. キセリ 8. 須恵器蓋(表土) 9. 須恵器極(表土) 10. 須恵器極(表土) 11. 高杯(P.5) 12. 土師器皿(P.5) 13. 須恵器極(住22横柱穴)

第 3 章

塚元遺跡の調査

目 次

- 第1節 はじめに
- 第2節 I区の調査
- 第3節 II区の調査
- 第4節 結 語

第3章 塚元遺跡の調査

第1節 はじめに

ここに報告する塚元遺跡は、福岡県粕屋郡篠栗町大字津波黒・同高田にまたがる遺跡で、現状は津波黒に属する1号墳周辺が畑地、高田に属する2号墳および集落跡のあたりは畑地・水田となっていた。両者の間には遺跡を確認できない部分があつて調査区を二分する格好となる。ここでは便宜上、前者をⅠ区、後者をⅡ区として記述する。各々で検出した遺構は以下の通りである。

Ⅰ区…1号墳とその付属遺構、1号墳周溝を利用した中世の水路（溝状遺構）そして時期不明の井戸などがある。1号墳は大破していたが初期須恵器を出土する町内最古の横穴式石室墳となった。

Ⅱ区…2号墳、4棟の古墳時代住居跡、中世の溝跡・土壇墓そして近世と思われる鳥居跡など。

遺跡名について若干を付記しておく。

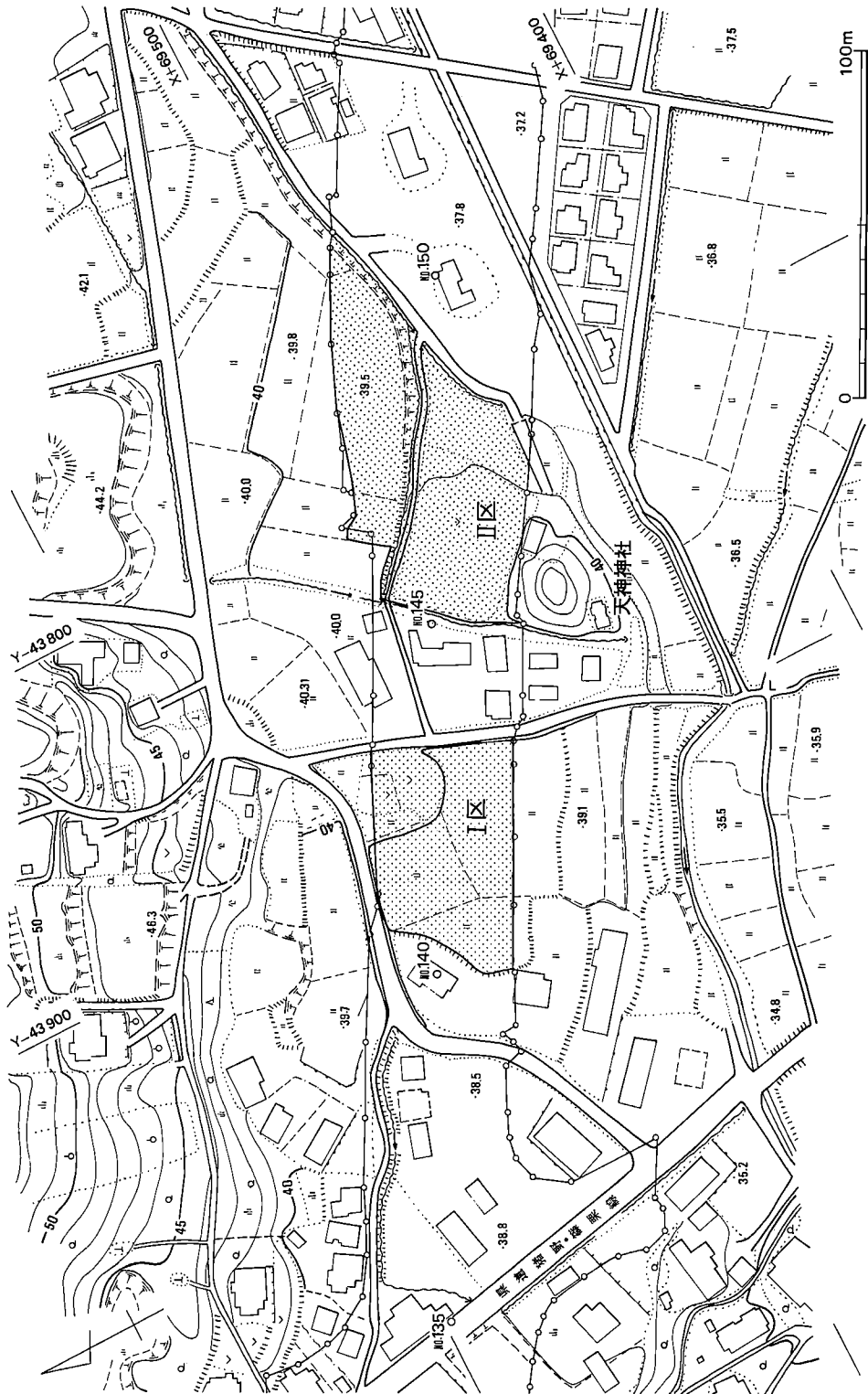
昭和54(1979)年に刊行された『福岡県遺跡等分布地図—粕屋郡編—』にはここで言うⅠ区に「辺木遺跡……散布地、鎌倉時代」と「塚元古墳群……第1～第47号墳（第1号墳を除いて消滅）」との両者が重複して記されている。「塚元古墳群」としてくくられる古墳の大部分が大字高田字塚元に属するためである。Ⅱ区に相当する箇所には遺跡は記されていない。したがって今回調査した遺跡の名称は本来は「(津波黒) 辺木遺跡」と称するのが妥当であるが、建設省との交渉時から一切の書類関係を「塚元遺跡」として処理してきた経緯から、本報告に当たってもこれを継承していることを明記しておく。

第2節 Ⅰ区の調査

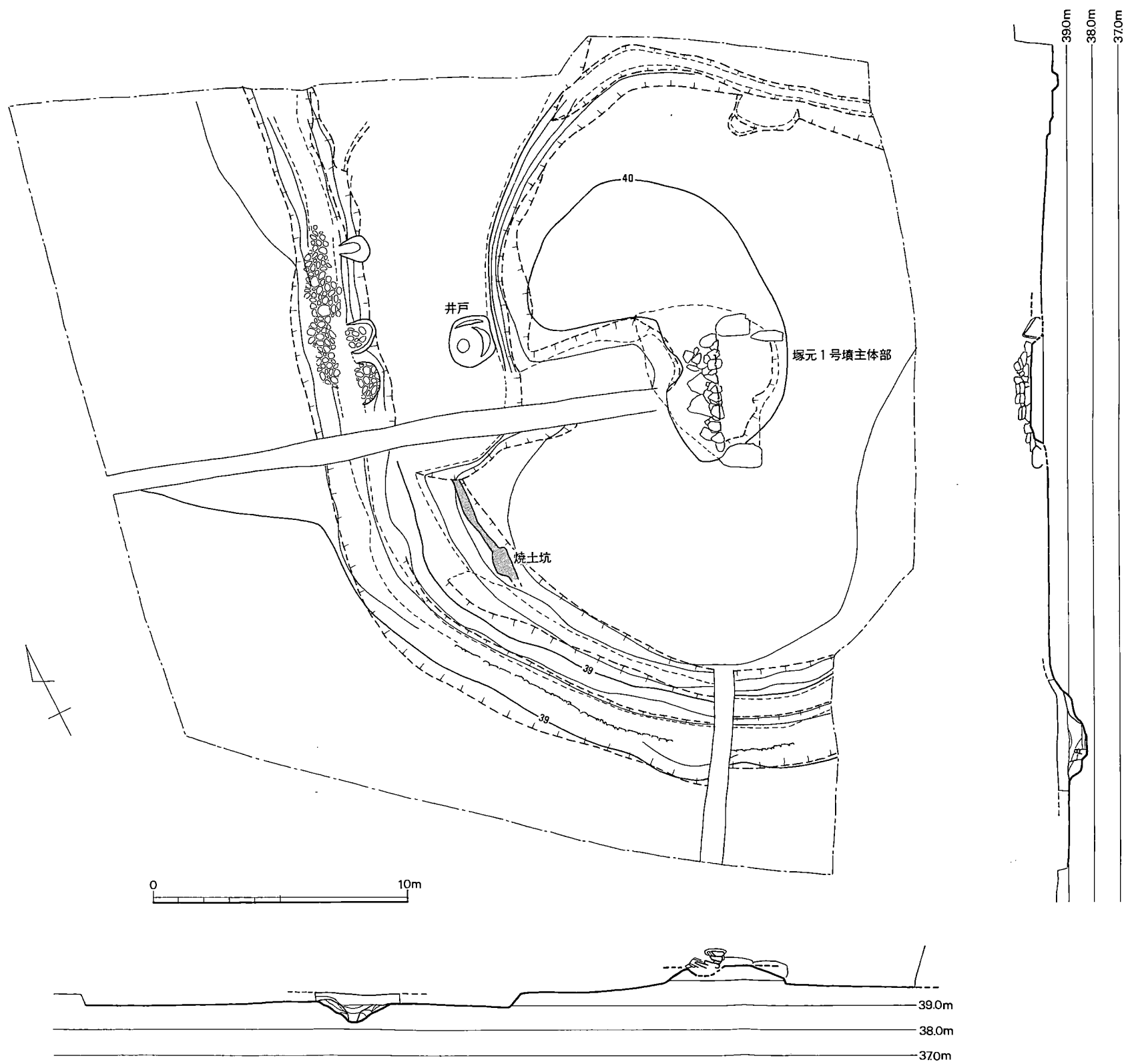
上記したように『福岡県遺跡等分布地図』に「塚元古墳群」中の一基、そして「辺木遺跡」とが記載された地点に当たる。調査地点の地番は大字津波黒67-1・68-1外である。

1. 塚元1号墳

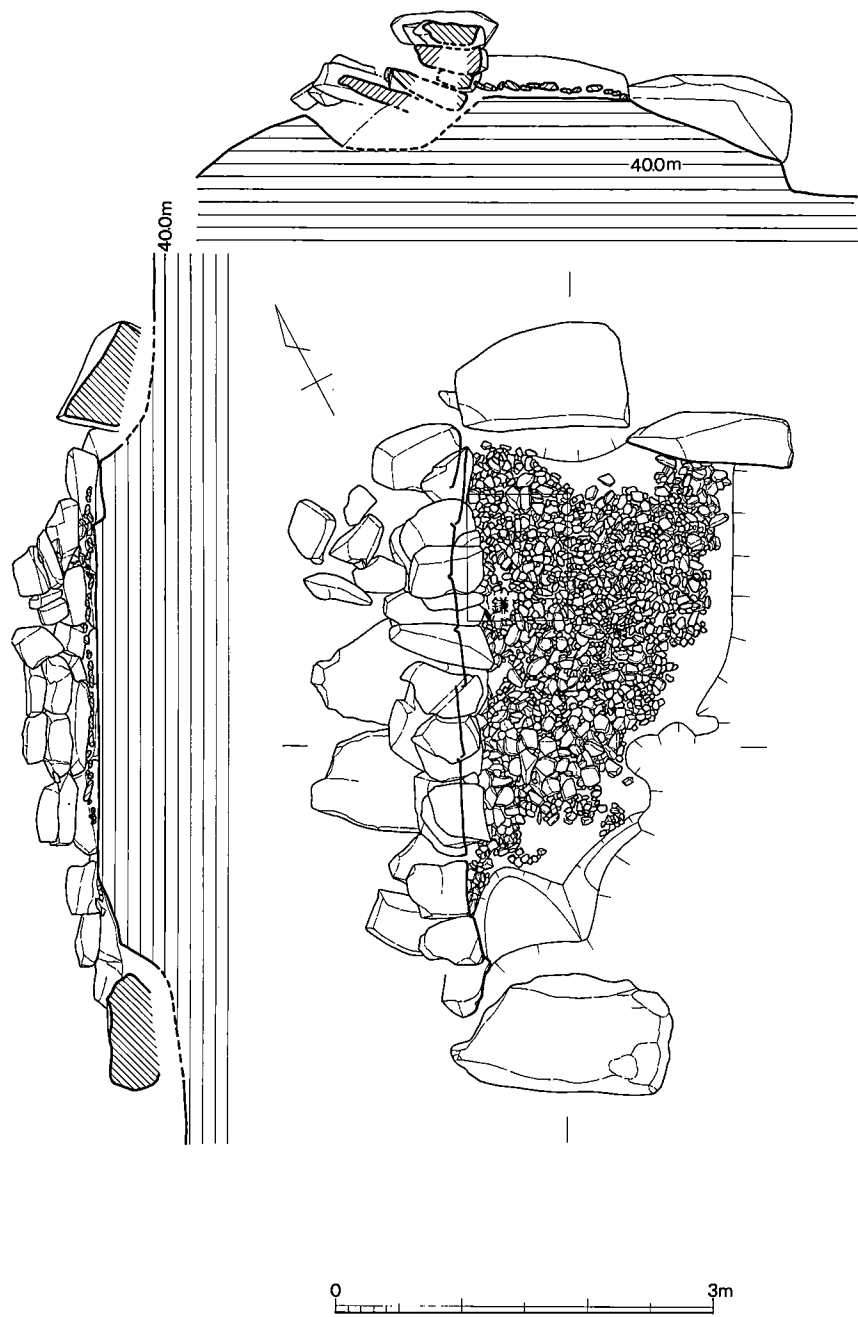
畑地の一角に積み上げられた石材と弧状に巡る畦畔がわずかに古墳を偲ばせるものであり、壊滅的な破壊を被っていると考えていた。が、幸いにも左側壁の下部および敷石の大部分が遺存し、奥壁腰石も原状を失いつつも辛うじて残っていた。



第81图 周边地形图 (1/2,000)



第82図 塚元1号墳地形測量図 (1/200)



第83图 塚元1号墳主体部実测图 (1/60)

墳丘 (図版34, 第82図)

主体部のみが高まりとして残っていたがそこも含めて表土・畑の耕作土を除去するとすぐに地山の黄褐色土が現れ、盛土はまったく遺存していなかった。原状をよく保つ南側では、周溝を含めて2段の地山整形が見られる。南畦の土層ではその上段まで盛土が施されていた様子が窺え、単純計算では盛土径22mほどの円墳を推定できる。それは調査区北端の段落ち部分とも整合することからほぼ間違いないと思われる。ただ、北側段落ち部分は調査区境界に近く、周溝の続きを確認するに至っていない。なお、周溝の幅は2.7m前後であり、深さは0.5mほどとなる。

主体部 (図版35, 第83図)

長さ4m強、幅2.5m前後の長方形プランを有する横穴式石室である。左側壁は基底部から偏平な石材を小口積みで積み上げている。また、基底部にはより大きな石材を用い、かつ壁体を持ち送りさせるために内傾させて据える。ベンガラ塗布は見られない。奥壁は2個の大型石材を立てて腰石としている。しかし、左側の腰石は転倒し、原状を保っていない。

敷石は径5～20cmの小礫で構成し、その配列に規則性は見られない。

なお、入口部分にある珪化木の巨石は天井石が転落したものであろう。

焼土坑 (図版36, 第84図)

墳丘の西南部、地山に掘り込まれた幅0.3m、深さ0.2mの溝状遺構の中にあり、両者の先後関係は確認できていない。が、ともに墳丘内に相当する位置にあること、そして溝状遺構を発掘するまで焼土坑の存在に気づかずに行ったことから両遺構は当古墳に付随すると考えている。

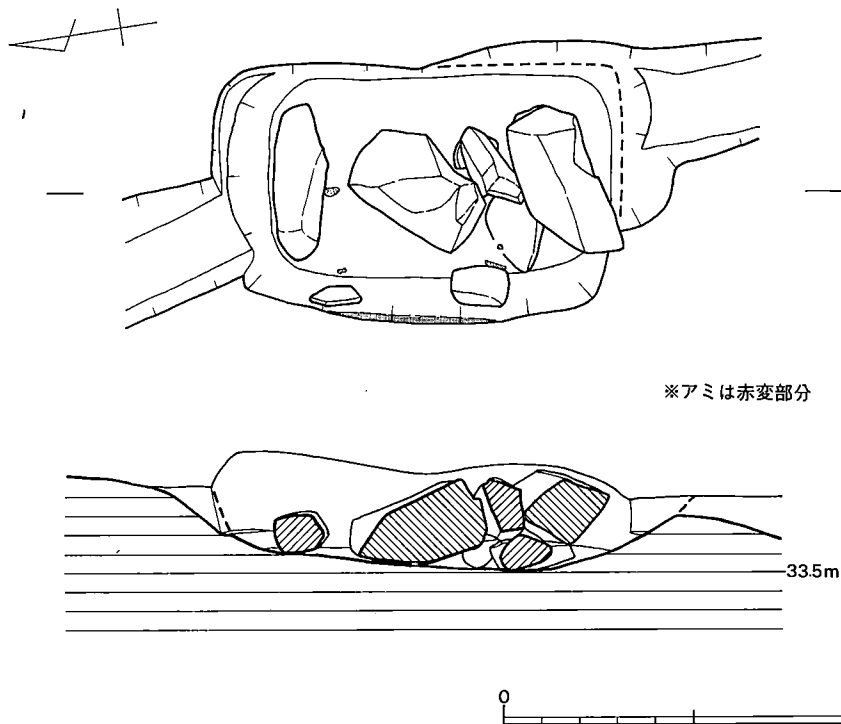
平面プランは1.1×0.65mの長方形を呈し、深さは0.25mを測る。中から大小9個の石材が転落した状態で出土し、そのなかで北側の2個の大型石材は下面のみならず側面も焼けて赤変するものの、南側上段の2個の石材は焼けた痕跡を見出せない。壁は西側長側辺の中央付近のみが焼けて赤変していた。埋土中に多くの焼土ブロック・炭片を含み、それに混ざって骨片がまんべんなく出土した。

骨は確実に焼けた状況を呈しており、人骨であろうという。^{註1}

2. 井戸 (第85, 94図)

1号墳墳丘が大きくカットされる地点にある。検出面から約60cmほど掘り下げた部分までは挙大ないしは人頭大の川原石が多く出土したが、意図的に組んだ様子はなく乱雑な様を呈していた。それらを除去して掘り進むうちに湧水が甚だしくなったために完掘を諦め、重機を用いて断ち割を行ったものの、やはり底面の確認はできなかった。

平面形は1.8～2mの円形に近く、深さ1.6mまでは摺鉢状の、以下は最大径0.5mの円筒形断



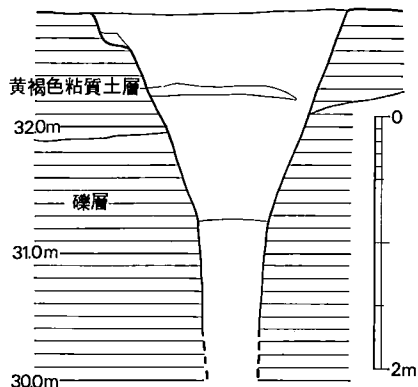
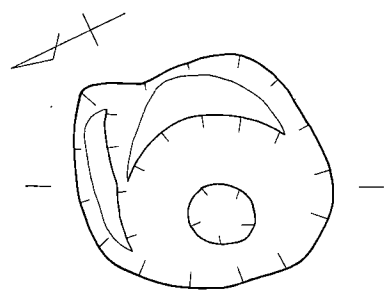
第84図 塚元1号墳焼土坑実測図 (1/20)

面形態となり、確認できた最深部は検出面の下2.6mであった。地山の黄褐色粘(質)土層は南から北へ向かって緩やかに下降し、その下位には砂礫層が堆積し、両者の境は標高32m前後の位置にある。

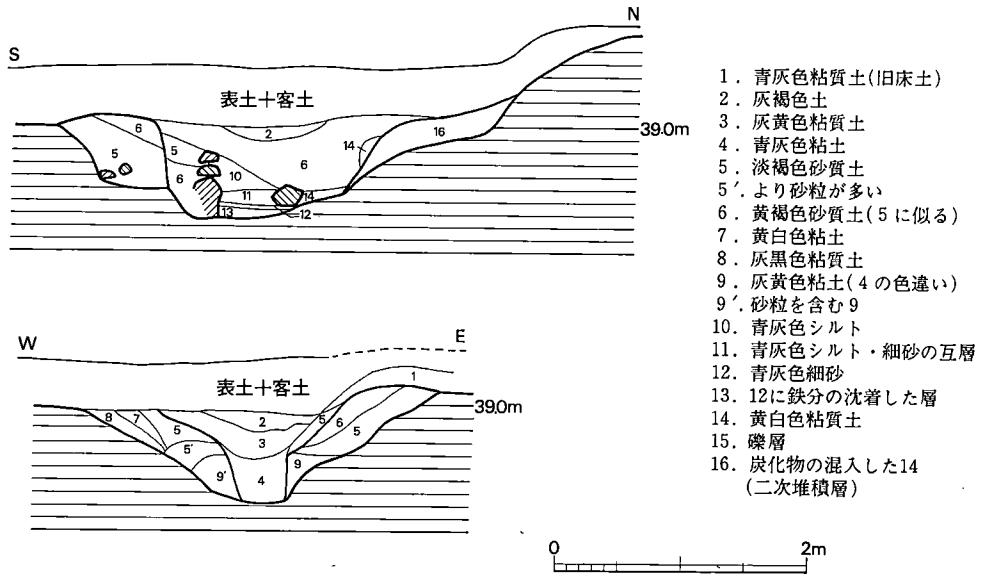
年代を知る手掛かりとなるような遺物は出土していないが、埋土中に水田耕作に伴うような青灰色土のブロックを含んでいることから近世以降に掘削・埋没したものと考えられる。

3. 水路跡 (図版37~39, 第86~88図)

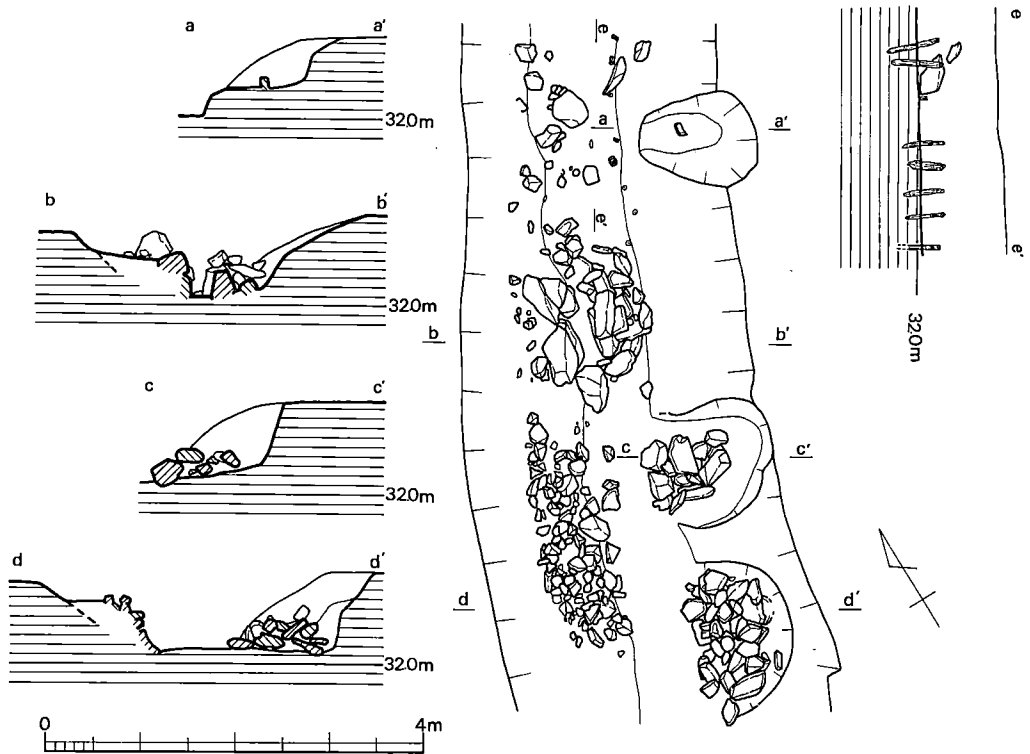
1号墳の周溝を再利用した水路で、古墳の西側ではほぼ南北に走り、南側から周溝に添って東西方向へと向きを変える。その先はⅡ区の調査区を東西に横断する水路に続くものと思われる。Ⅰ区調査区内



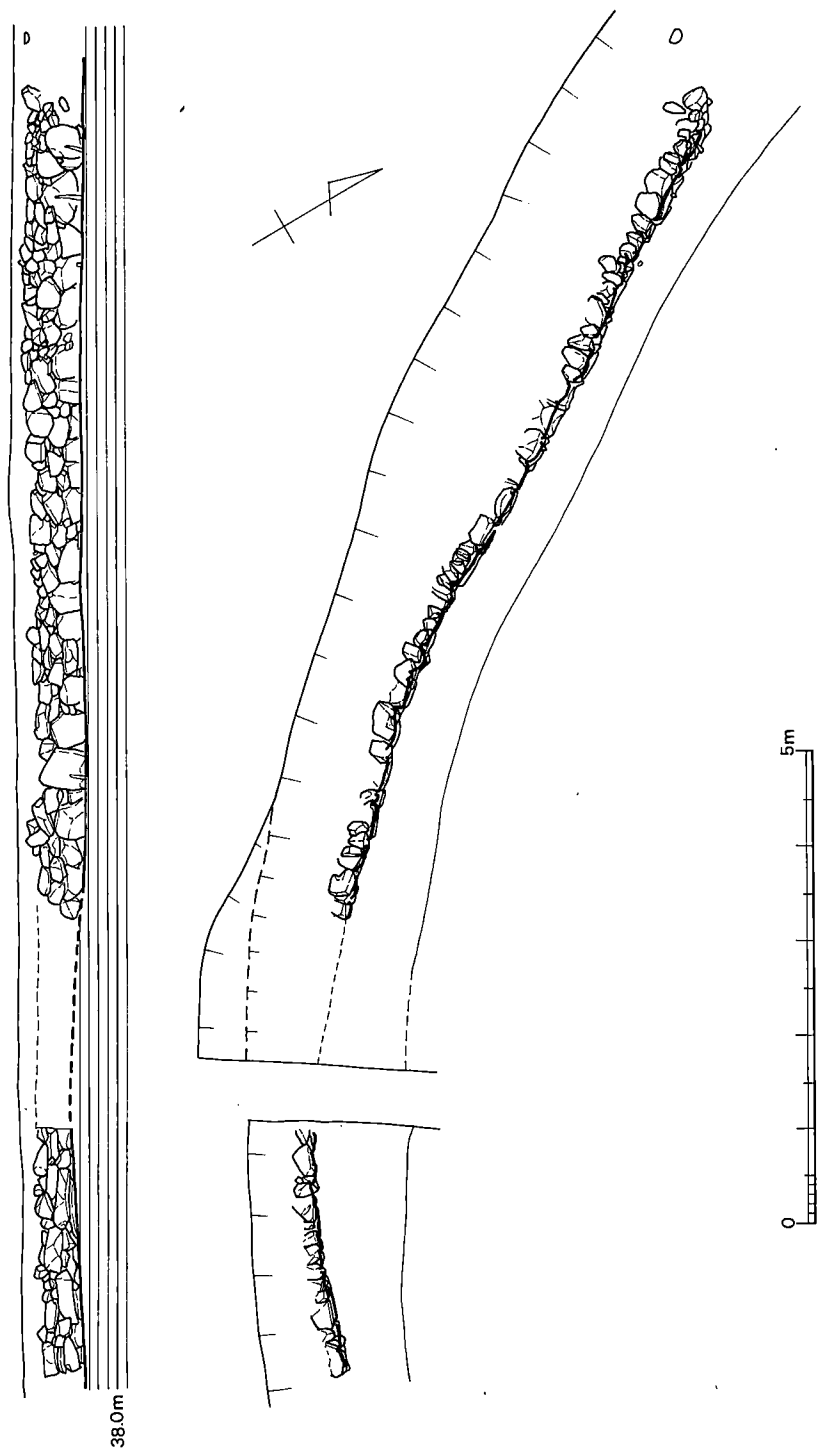
第85図 井戸実測図 (1/60)



第86図 塚元1号墳周溝土層図 (1/60)



第87図 塚元1号墳周溝礫群実測図 (1/80)



第88图 塚元1号墳周溝石組実測図 (1/80)

で検出した全長は39mの長さに達する。直線部分とカーブする部分とでは状況が大いに異なっており、記述の便宜上分けて説明を加える。

直線部分の水路は東西畦の土層の観察によれば、幅1.4m、深さ0.7mの規模となり、底面の幅0.3mで、0.4mの高さまでは垂直に近く直線的に立ち上がっている。掘削は古墳周溝のほぼ中央部で行われており、埋没しきらずに窪地であった部分を有効に活用しているといえる。埋土は下層に厚く青灰色粘土層が堆積し、以上を粘質土・砂質土が順に覆っている。

この直線部分では第7図に示したような状態で多くの石材が出土している。b-b'断面では石組みを行うように見えるものの、その他の部分では乱雑な状況を呈しており、a-a'・c-c'・d-d'断面部分では掘り込みを掘削し、さらに石材を投げこんだ（廃棄した？）様子を呈する。b-b'間の石材のあり方を石組みの痕跡と見るならば、その他の状況は壊れた石組水路を再構築する事なく、邪魔になった石材を脇へ遺棄したものとも考えられる。

なお、若干の杭列を検出している。径5～10cm、長さ40～60cmの丸太材で一度焼いた後に一端を尖らせている。0.2～0.5mの間隔で直線的ではない。

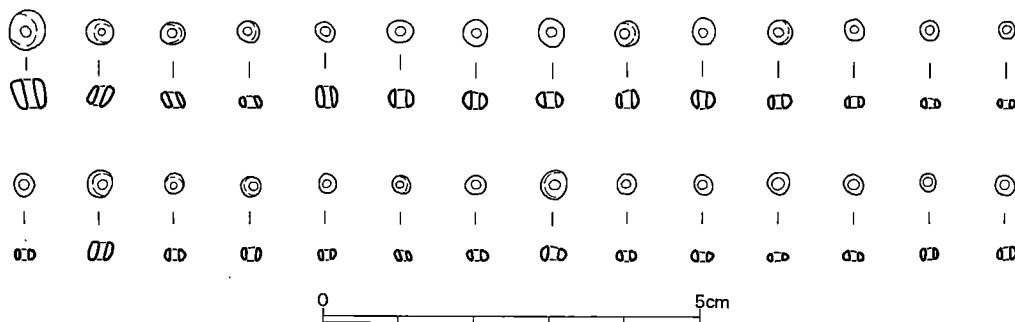
石組水路は長さ16mまでを検出したが、東側に道路があることなどからそれ以上の追跡は行っていない。また、南畦の際は重機を用いて試掘を行ったために破壊してしまった。

土層の観察ではこの部分の幅は2.2mとなり、深さは0.7mである。調査時には石組みは外周にしかなかったが、水路壁の立ち上がり外側では急であるのに対し、内側では緩やかになっており本来的なあり方を示していると考えられる。水流が直接当たる面の保護を意図したものであろう。直線部分のような顕著な粘土層はなく、埋土は砂質土が主体となる。

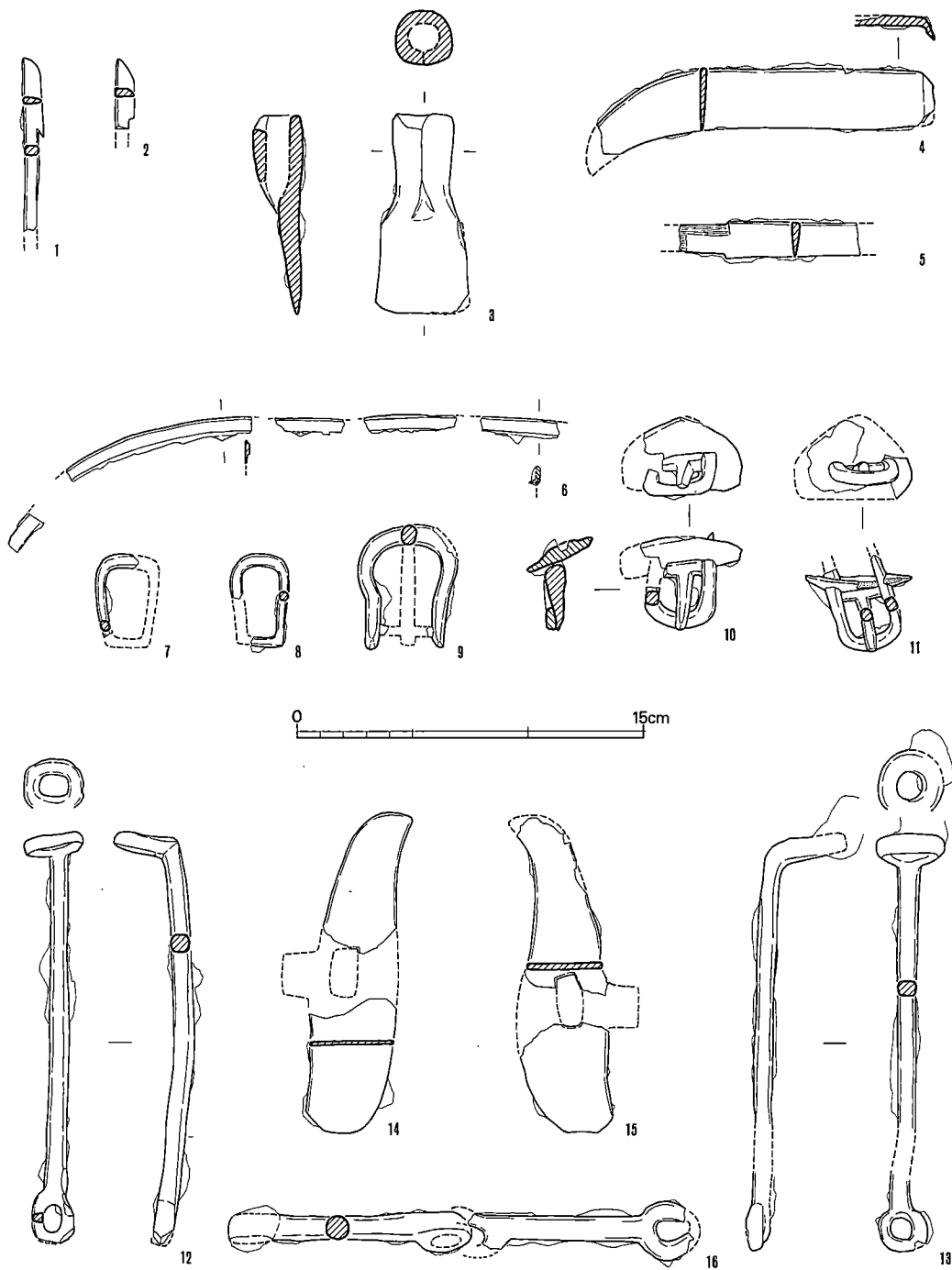
石組みは0.7mの高さまで残っており、最下段には大型の石材を立て、その上は横積みしている。立ち上がりはほぼ垂直で、そのすぐ前面に4本の杭が遺存していた。

4. 出土遺物（図版46・47・51，第89～93図）

主体部からガラス玉と鉄製品を、中世に再利用された周溝跡から若干の須恵器と多量の中世遺物を出土している。須恵器の帰属については問題があるかも知れないが、異なる時期の個体



第89図 塚元1号墳出土ガラス玉実測図 (1/1)



第90图 塚元1号墳出土鉄器実測図 (1/3)

がほとんどないこと、石室の形態にふさわしいことなどから本古墳に伴うものとしてよからう。

ガラス玉 主体部奥壁近くの左半分に集中して出土した。破損品も含めて87点分が確認できる。大部分が直径4mm以下、高さ2mm以下の小型品で、最大のもので直径5mm、高さ4mmを測るに過ぎない。

15点が濃青色(紺色)、2点が淡青色(水色)、淡黄緑色・赤褐色を呈するものが各1点あるがその他のすべては青灰色を基調とする。うち、赤褐色を呈する個体は孔と平行な方向に濃淡の縞文様が見える。

鉄器

鉄鏃 (1・2) 鋒部の残るものは2点のみである。いずれも片刃箭式に属する。

鉄斧 (3) 有袋斧の小型品で手斧であろう。

鉄鎌 (4) 曲刃鎌で、基部の折返しは小さい。

刀子 (5) 鋒と柄を欠く。鏑等のために関ははっきりしない。

馬具 (6~16) 6は鞍の一部である。細片化するがそれらの総延長は67cmとなる。厚さ2mmの縁に鉄板が続いていたようだが一部に痕跡をとどめるだけで、鋌も1点が確認できるに過ぎない。10・11は鞍で、座金具は半円形に近く中央に稜を持つ、厚さ2mmの鉄板である。12・13は引手で、一方の環は直角に近く折り曲げている。14・15はf字形鏡板で、いずれも中央部を欠くために立間は確認できない。銜を通す孔も一部が残るのみである。厚さ2~3mmの鉄板である。16は二連式の銜で、図左側の鉄棒の右環には鉄が錆着し、左環も鏑のために塞がるが他の鉄器が付着しているかどうかはわからない。

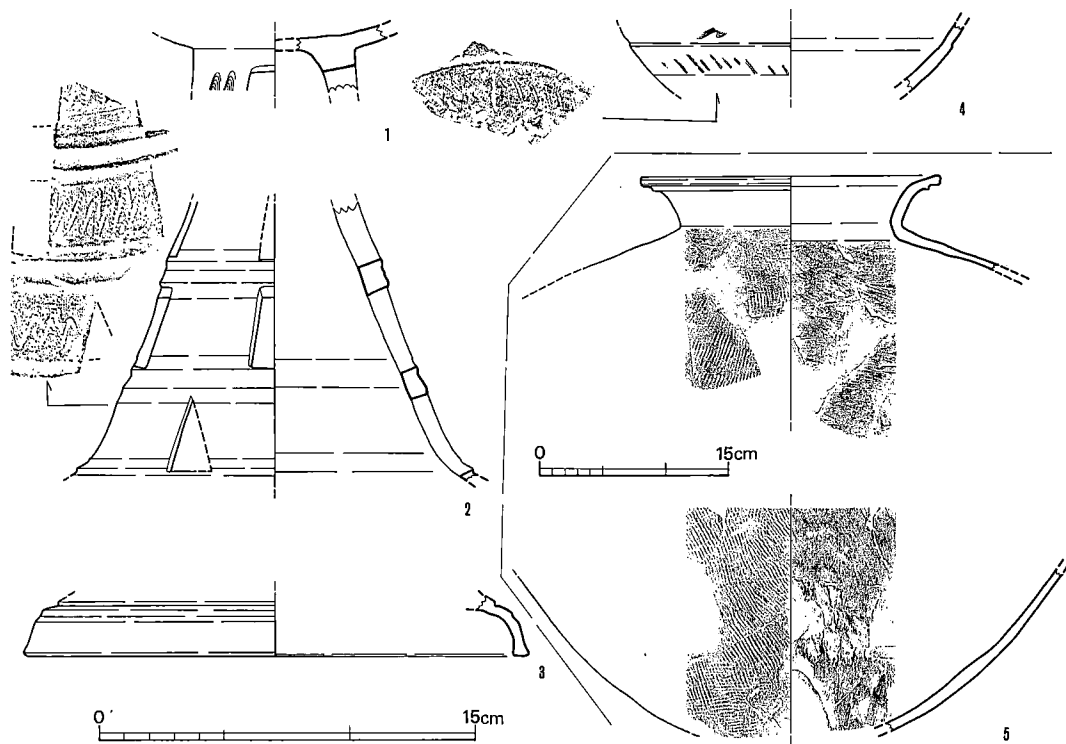
須恵器

器台 (1~3) 1・2は同一個体の残片である。杯部・脚部接合部は小片であるが、脚部片は3段の透孔と同一文様帯の二つの透孔にまたがる部分が残っており大まかな文様構成は判る。文様帯は比較的均整の取れた櫛描波状文で構成され、上下に二本の甘い凹線を施して界線とする。残存する上二段の透孔は長方形で縦に並び、5~6個穿たれているようである。三段目の透孔は三角形で長方形透孔とは千鳥の位置にある。その直下で器体が強く外反することから脚端部に近いと思われる。3の脚端部片も胎土・焼成等から見て同一の器台としてよからう。接地面が肥厚し、立ち上がりは高い。上端には透孔の一辺が見える。以上の焼成は良好である。胎土は精良と言えないが、仕上げの調整が丁寧なために砂粒のほとんどが沈み込んでいる。

高杯 (4・47) 4は無蓋高杯と思われる小片である。残存部上位に明瞭な段を有し、その上位に櫛描波状文を、下位に同刺突文を刻む。胎土は精良だが焼成は甘く、瓦質に近い。器表外面は灰黒色を呈する。仕上げの横撫で調整は丁寧である。

47も小片で、径を復原できない。透孔は4個と推測でき、一段のようである。

甕 (5) 出土点数は多いがいずれも細片化著しく全体の復原はできなかった。口縁部は浅



第91図 塚元1号墳周溝出土遺物実測図1 (1/3)

く大きく開き、端部は小さく肥厚するもののほぼ断面四角形に仕上げている。装飾は口縁部直下の断面三角突帯一条のみである。口縁部内外面を横撫でで仕上げ、胴部外面にシャープな平行叩き痕を残し、同内面の同心円文は丁寧に撫で消している。復原口径は約24cmとなる。

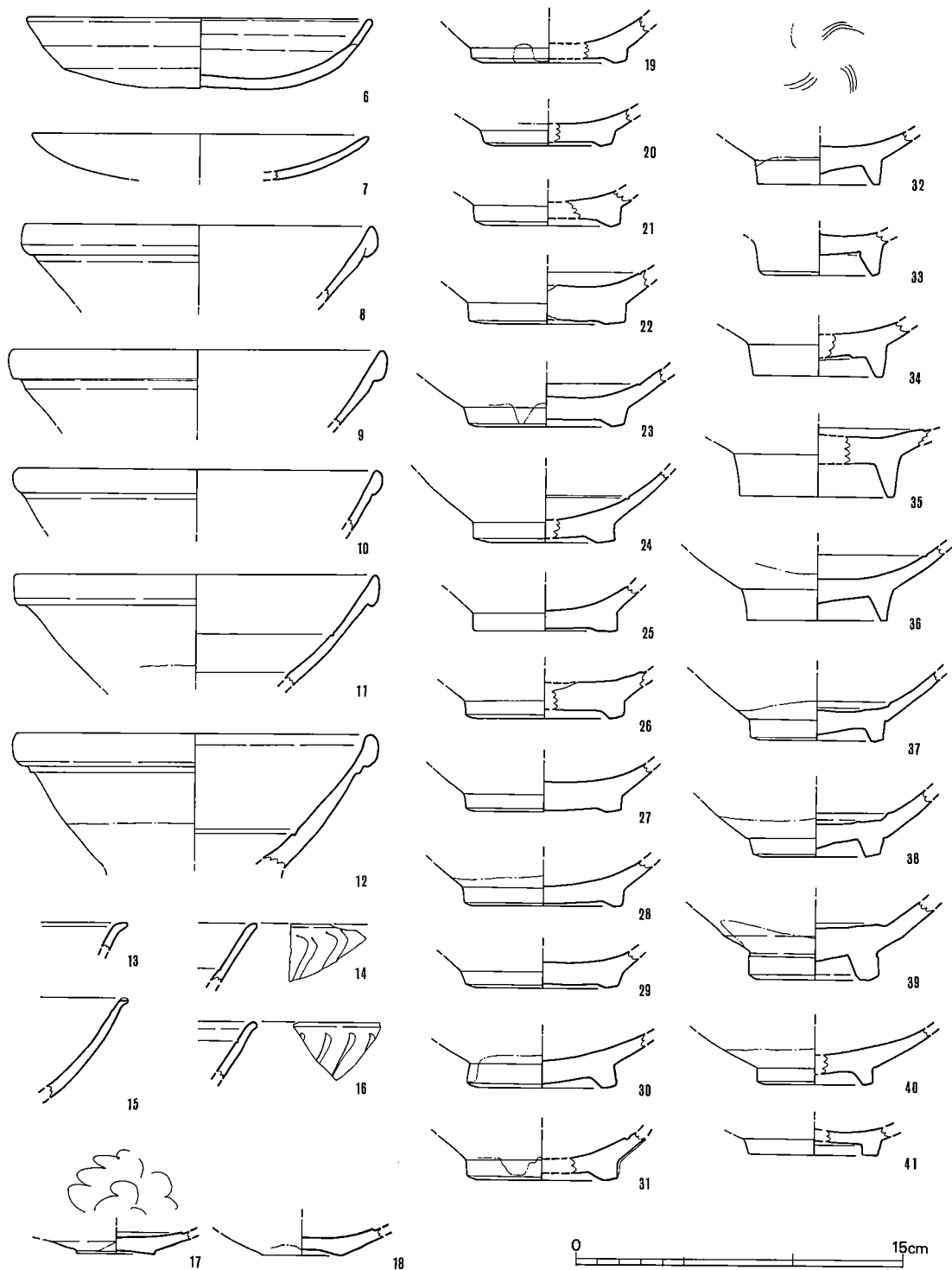
土師器

皿(6・7) 石組み部分の裏込め上から出土したもので、6は完形、7は小片である。いずれも器表の風化著しく調整痕は残らない。6は石組部分に対する祭祀行為の結果であろう。

白磁

皿(17・18) 17は削り出しの低い高台を持ち、見込みに釘彫りの連続渦文を施文して外縁を沈線で画する。18は上げ底の底部を有し、見込みの外縁にはやはり沈線を刻む。二次的な加熱を受けたようで釉が弾け飛んでいる。

椀(8~41) 8~12は大玉縁の口縁を有し、11・12は胴部内面に一条の沈線を巡らせる。14は外面を釘彫りで、15は片切彫りで施文し、ともに内面に沈線を刻む。15の口縁部は小さく外反し、端部に面取りを施して断面四角形に成形する。19~31は低く、肉厚となる高台を削り



第92图 塚元1号墳周溝出土遺物実測図2 (1/3)

出して成形するものである。中、22～26・31は見込み外縁に沈線を施す。32～36は高く尖った高台を有する。いずれも削り出しており、29が畳付け・高台内を除いた全面に施釉するほかは胴部下端付近以下を露胎とする。32は見込みに楡描文を施文するが、焼成が甘いせいか釉が灰黄色不透明となって不明瞭なものに仕上がっている。35・36は見込みのやや上方に一条の沈線を刻む。37・38は見込み外縁の釉を蛇の目状に掻き取るものである。39は肉厚で高い高台を有する。見込み外縁はシャープな段を付けてくぼめ、対応する外面には稜を付して腰折れとする。

青磁

椀 (42～45) 42は胴部外面に楡描き文を有する同安窯系の青磁椀で、内面は無文である。43は竜泉窯系の青磁椀で無文。淡緑色釉を厚く被り、高台内外底面のみ釉を掻き取る。44もオリーブ色の釉を被る竜泉窯系青磁椀で無文となる。

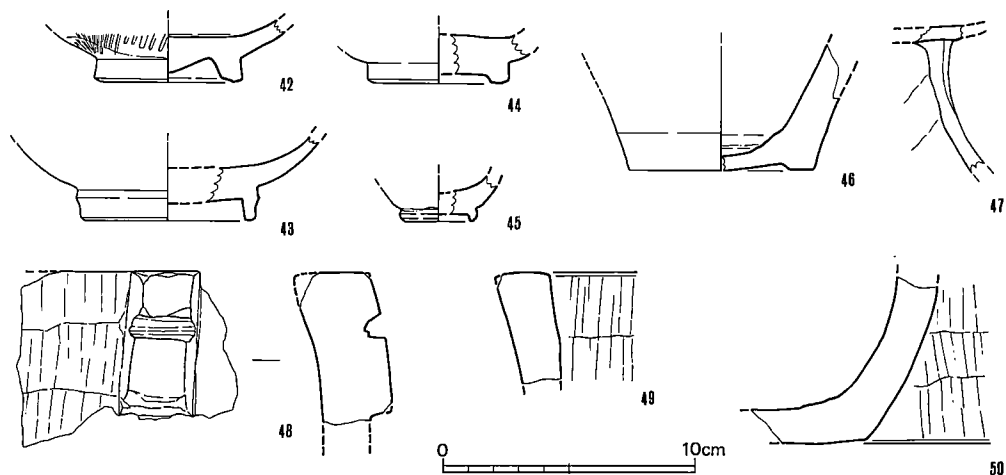
45は李朝青磁椀の小品である。^{註2}胎土は精良で灰赤色を呈し、胴部内外面にのみ暗灰色不透明釉を施す。焼成温度が低いせいか器肉は陶器質である。

褐釉陶器

壺 (46) 濃いオリーブ色の釉が施され、胎土はごく精良だが焼成は甘いようである。底部は内側をくり抜いて高台状に仕上げ、露胎のままで終わる。

石製品

石鍋 (48～50) 滑石製である。49の胴・底部片は他の二点に比べて器表が粗く材質が劣る。



第93図 塚元1号墳周溝出土遺物実測図3 (1/3)

5. 小 結

以上、I区で検出した遺構について記述してきたが、ここで簡単にまとめておく。

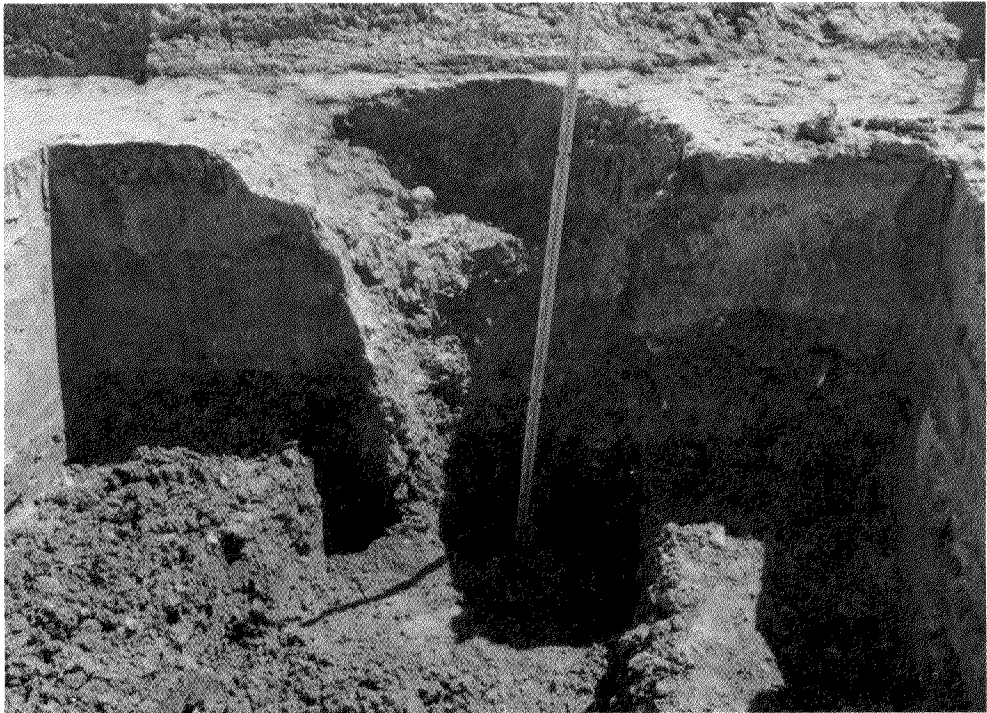
塚元1号墳は竪穴系横口式石室を内部主体とする径22mの円墳と推測でき、その周囲に幅2.7m、深さ0.5mの周溝を巡らしていた。出土した須恵器は田辺昭三氏のいうTK216型式に相当するもので、北部九州においても古墳出土資料としてまだ稀少な部類に属すると思われる。^{註3}

出土遺物のなかでは須恵器とともに馬具も貴重な資料である。装飾性に乏しく、鉄製品のみで構成されたそれらは実用的であり、従来の金銅製品とは一線を画する。粕屋郡という玄海灘に程近い地域に位置することを考慮すれば当然朝鮮半島との関連も想起される。

規模・立地条件・出土遺物を考慮すれば、塚元古墳群中の盟主墳あるいは盆地状の地形をなす現篠栗町域の首長級の古墳といっても言過ぎではなかろう。

墳丘内の焼土坑出土の骨は細片化し、かつ頭骨・歯等の識別ができなかったことから人骨であるという以上のことは不明である。いずれにしても埋葬位置から推して最初の被葬者に捧げられたあるいは殉じた祭祀行為の結果とする点に異論はなかろう。

周溝の再利用は、石組みの裏込めに供された土師器の皿（第92図6）によって11世紀前半頃に始まったと考えられる。また、ごく一部に14世紀代に属する青磁碗などを含むものの大部分を占める玉縁の白磁碗、横田・森田氏のいうⅣ-1類によって11世紀後半を中心とする頃にはすでにほとんどが埋没していたと考えられる。^{註4}^{註5}



第94図 井戸（西から）

第3節 II区の調査

II区の北寄りを水路と農道が東西に走り、以北は鉱害復旧事業によって1.5～2mの客土がなされた水田、以南の東半は天神神社の旧社地であったようで現状は畑地であり、西半は0.7mほど低い水田となっていた。この西南隅の水田部分は耕作土・床土の下部は砂礫層となって遺構は存在しなかった。遺構面は西から東へ、また北から南へと傾斜しており、調査区南西部分に中世以前の遺構が見られないことは後世の削平が著しかったことを示すと考えられる。柱穴の分布・2号墳の残存状況はそれをよく示している。

調査区内を東西に走る水路はI区で検出した1号墳周溝を再利用した中世の水路に続くと思われるが確認できていない。

なお、現況地形図にある天神神社北隣りの古墳状の高まりは現地にはなく、在住の人々の記憶にもないという。神社境内には樹木が茂っており、測量時の誤認であろう。

調査区の地番は大字高田571～573・576—1・561—2・3等である。

1. 塚元2号墳

現状ではまったく判明しておらず、表土掘削後に発見したものである。盛土はもちろん、周溝も遺存せず外形・規模を推し量る資料はまったくない。

現在の地形から判断して、南へ張り出す低丘陵の西縁を選地している。

古墳の名称については『福岡県遺跡等分布地図』及びその基礎資料である遺跡カードを見ても第2～47号墳については所在を特定できないために当古墳をこのように呼称しておく。

主体部（図版41、第96図）

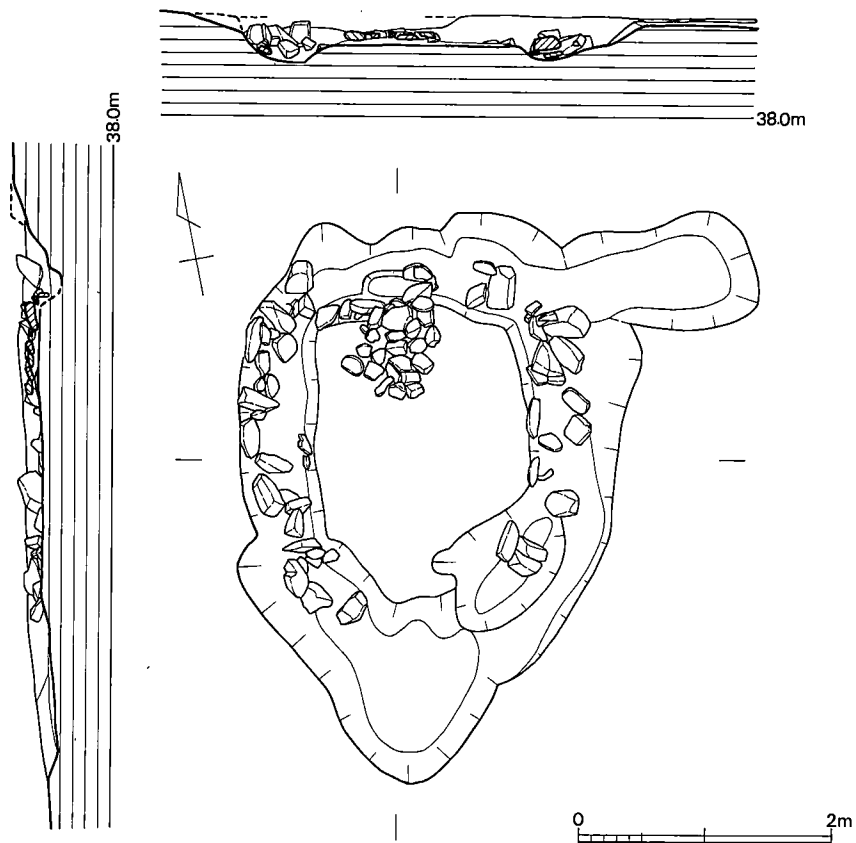
掘形と敷石の一部を残すのみで、壊滅的な破壊を被っている。北東隅から東へ延びる小坑は盗掘坑であろう。

主体部は単室の横穴式石室で、石室内法は推定左袖石抜き取り痕を基準とすれば長軸1.8m、幅1.7mの正方形に近い平面プランに復原できる。しかし、北部九州の同様な石室では長方形プランがより一般的であり、その場合には南端の落ち込みを框石の抜き取り痕と想定し、長軸2.3mに復原できる。二案を比較した場合は後者がより妥当と考えられる。

敷石は奥壁部分の一部が残存するのみである。径10cm前後の川原石を密に敷き詰める。

壁体の石材はすべて抜き取られ、根石あるいは抜き取り痕に転落した敷石が検出されたのみである。抜き取り痕が浅いこと、一部の敷石が遺存する点を考慮すれば、腰石として使用された石材はさほど大型ではなかったと思われる。

出土遺物は皆無であるが、想定される石室形態から推測して、6世紀代に築造された古墳と



第96図 塚元2号墳主体部実測図 (1/60)

して大過なからう。

2. 住居跡

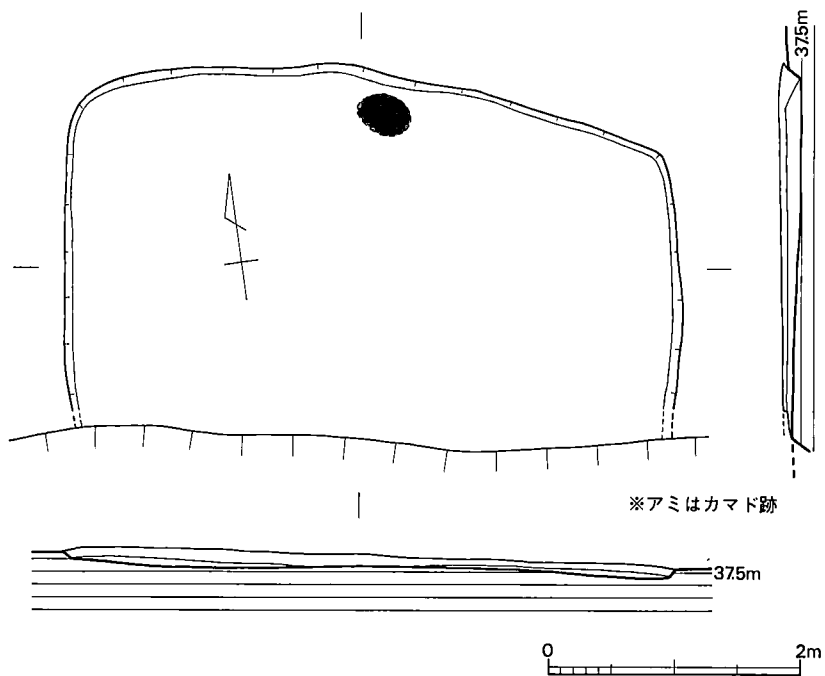
調査区を二分する水路の北側で4棟の竪穴式住居を検出した。遺存状況は必ずしも良好とはいえない。

1号住居跡 (第97図)

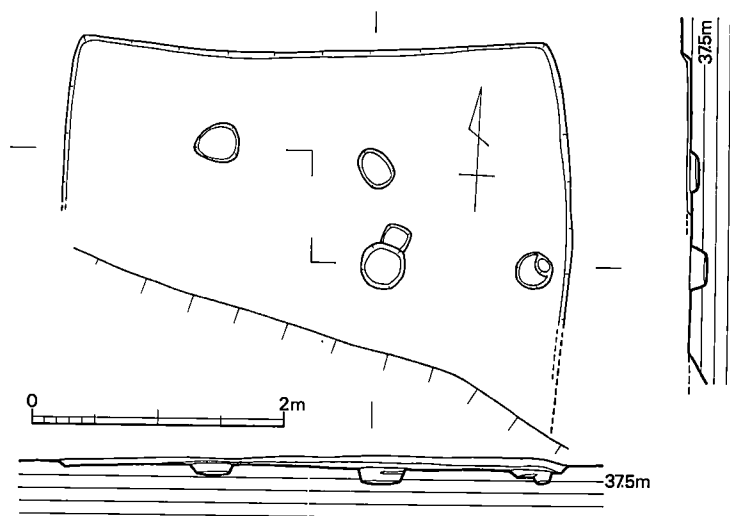
調査区の東端近くにある。一辺を削平されるが、残存する辺長は4.8mで、深度は最大0.1mが遺存する。北辺中央部付近に径0.3~0.4mの偏円形の範囲で焼土が分布しており、竈が存在していたものと思われる。なお、柱穴は確認できなかった。

出土遺物 (図版48, 第101図)

竈跡と思われる場所から出土した土師器の甕で、完形に近い。頸部のくびれは弱く、底部は刷毛目を施して平底風に成形する。外面を刷毛目で仕上げ、内面に指頭痕を残す。低部外面の



第97図 1号住居跡実測図 (1/60)



第98図 2号住居跡実測図 (1/60)

周縁は灰黒色、内面の上半は焦げつきのためか灰褐色を呈する。支脚として用いられたものであろう。

2号住居跡（第98図）

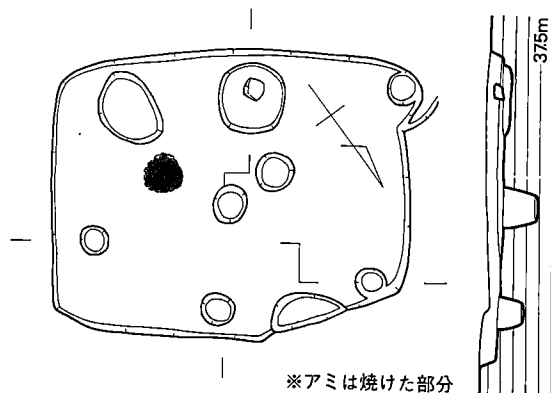
1号住居跡の西約6mの地点にあり、これもほぼ半分を破壊されている。残存する一辺長は4mで、最大0.07mの深さで遺存し、かろうじてそれと判明するものである。

柱穴はいずれも浅く、かつその配置から見ても主柱穴とは言えない。

竈・炉等も確認できていない。

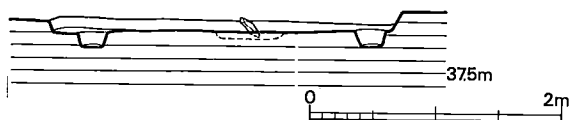
出土遺物（第101図）

埋土中から出土した土師器の甕の小片で、実測に耐える唯一の遺物である。胴部外面は刷毛目、内面は篋削りで仕上げている。



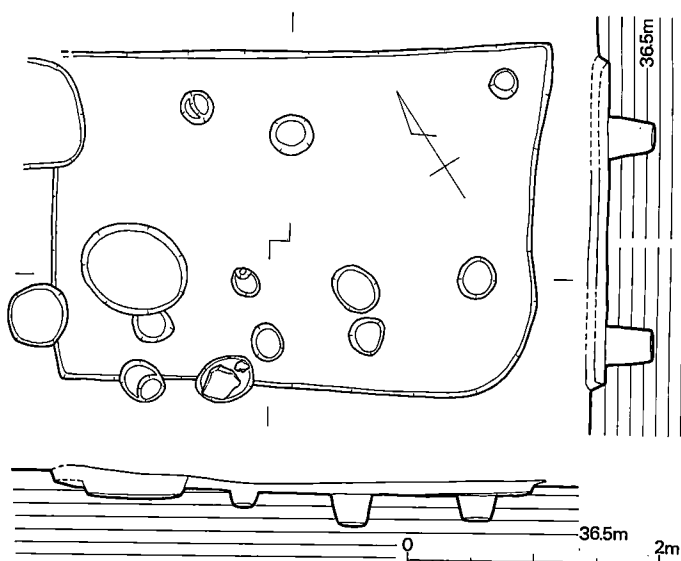
3号住居跡（図版42、第99図）

Ⅱ区北半の中央付近にある。辺長2.8×2.3mの長方形プランを有する小型住居跡である。遺存深度は0.1m強とこれも浅い。



第99図 3号住居跡実測図 (1/60)

南辺中央付近に、径約0.5m、深さ0.1mほどの土坑があり、内部に焼土・炭が詰まるとともに偏平な石材が立っていた。袖などの上部構造を検出できていないが竈が存在していたものと思われる。また、竈跡の西側0.6mの地点でも火熱を受けて赤変・硬化した部分を検出したが、住居跡の床面上0.1mにあり、遺構検出面に相当することから住居跡と



第100図 4号住居跡実跡実測図 (1/60)

は無関係としてよい。

北辺中央部にある径0.2mの円形ピットは同時期の住居跡に一般的な「竈対面土坑」に相当するものときょうか。

通有の4本柱の支柱穴配置は見られず、中央部のピットが深さ0.25m、南西隅のピットが同様の深さを有するほかはいずれも0.1m前後の浅いもので、かつその配置も規則的とはいえない。また、南西隅のピットは住居に伴うものとは必ずしも言えないことなどを考え合わせると、所謂支柱穴と呼べる柱穴は中央にある一本のみとなる。住居跡の規模が小さいことからみてあながち考えられないことではなかろう。

出土遺物 (第101図)

これも埋土中より出土した、甑の底部と把手である。底部は小片のため傾きは任意である。

4号住居跡 (図版42, 第100図)

3号住居跡の南に接してある。2.6×3.8mの規模の長方形プランを有し、深さは0.1mほど遺存するに過ぎない。

支柱穴は定かではなく、竈跡も残っていない。

出土遺物 (図版48, 第100・101図)

土師器

甕 (1～3) いずれも小片である。3の胴部内面には刷毛目・指頭痕が残る。

甑 (4・5) これも小片で、傾きは任意である。復原径も不確実。

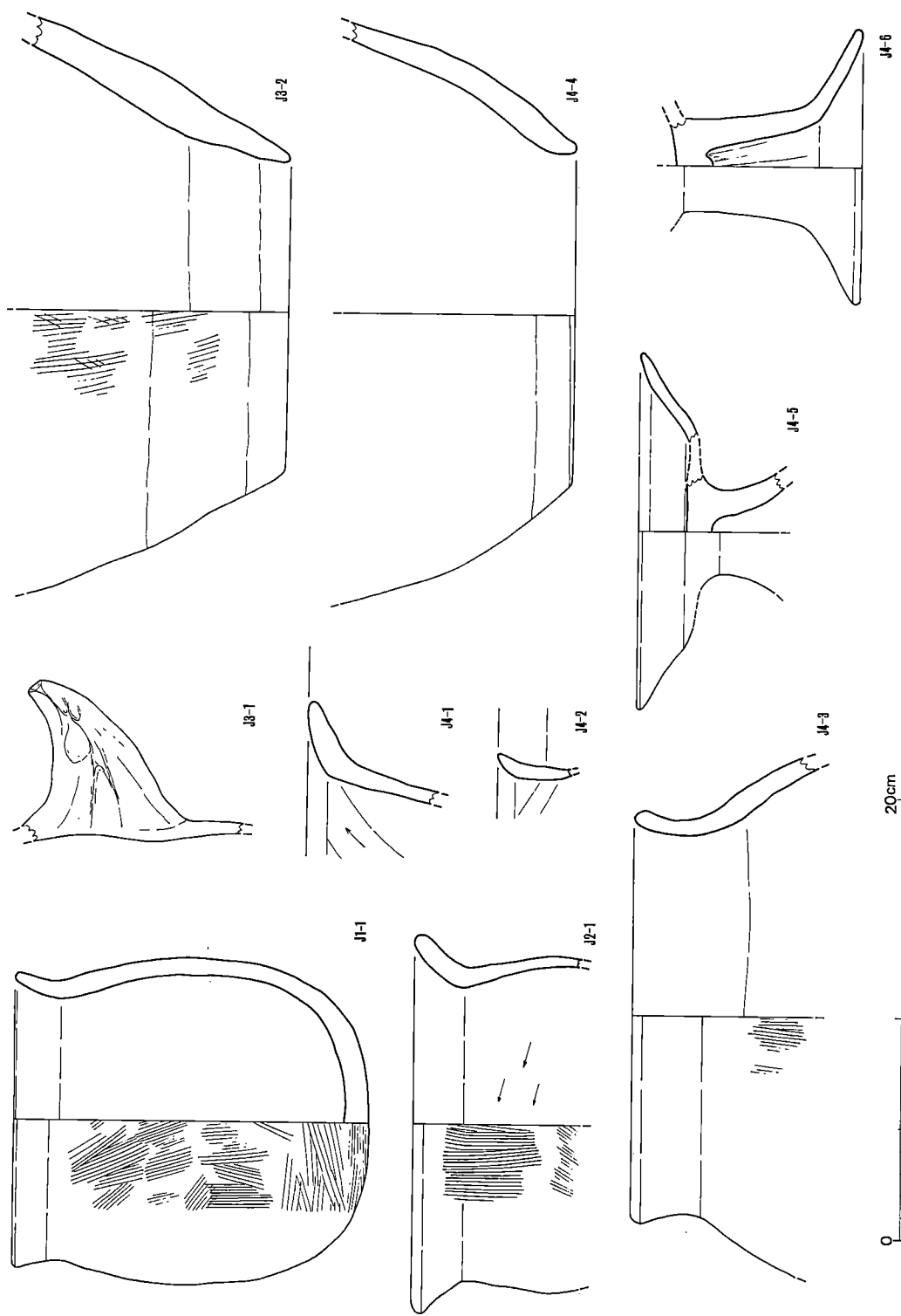
高杯 (6・7) 6は小片から復原したもので、杯部の口縁部が緩く反転する。7は図示部分のほぼ1/2が残る。軸部は太く腰が折れ、内部は中空で、抉り取ったような痕を残している。

須恵器

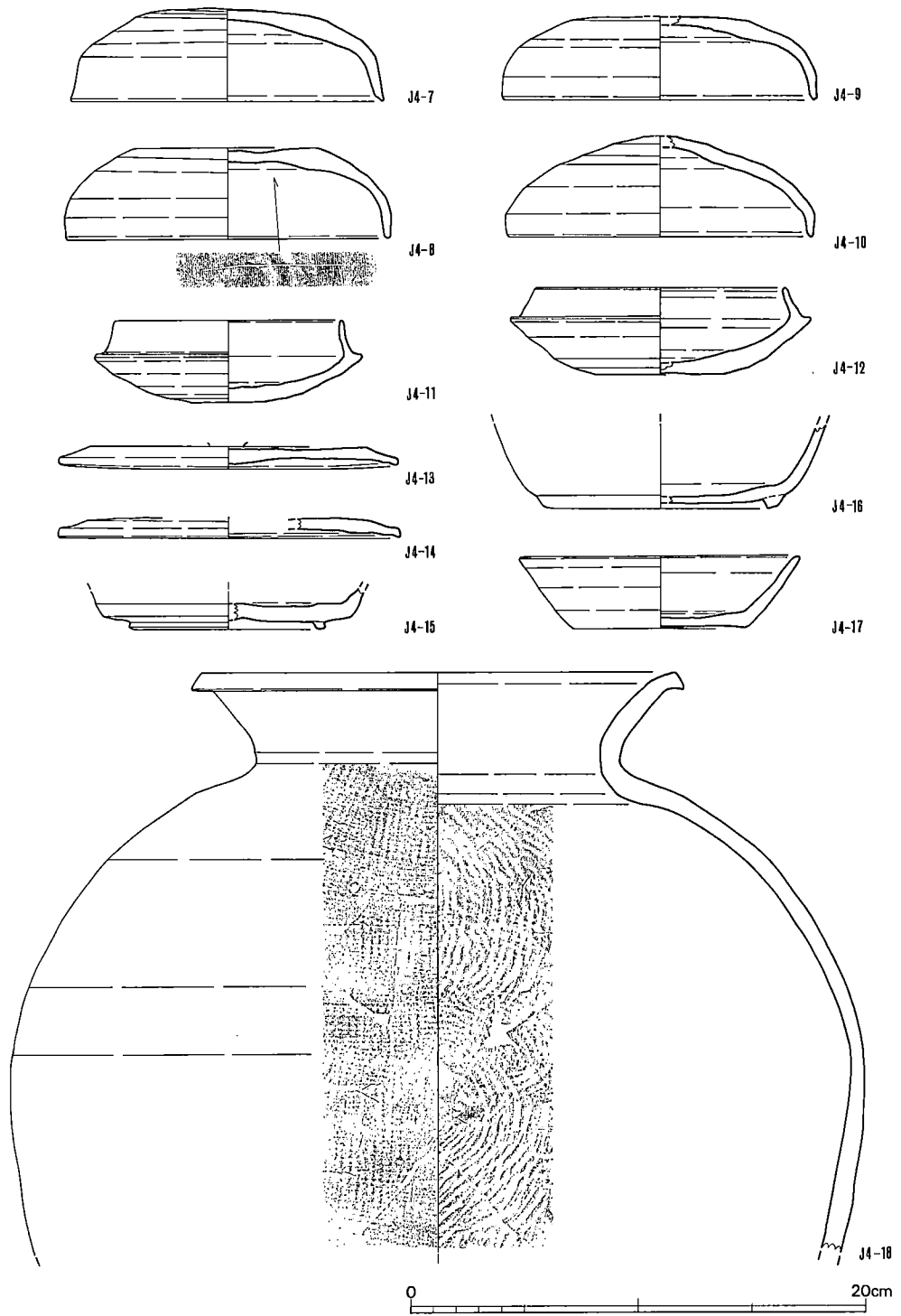
蓋杯・蓋 (8～11・14・15) 8は1/2の残片で、口縁端部が凹面となる。胎土はごく精良で、仕上げ調整も丁寧である。天井部内面に一条の篋記号が残る。9もほぼ1/2が残る。胎土は粗く、口端部も丸く納めるなど8と大いに異なる。10は小片で、外面の灰被りが著しい。11も小片。口縁部が屈曲してやや内側に向く。胎土はごく精良で、仕上げも丁寧である。

14は1/2弱の残片で、つまみを欠失する。天井部に膨らみがなく、口縁部は小さく垂下する。15は約1/4の小片。形態は14と同様で、外面に火襷が走る。

蓋杯・身 (12・13・16～19) 12は1/4弱の小片で、胎土・仕上げ調整ともに雑である。13は1/4強の残片で、灰白～黄白色を呈し焼成は甘い。16も生焼けに近く、小さな高台の畳み付けの部分に乾燥時に付いたと思われる圧痕が残る。約1/2が遺存する。17も焼成不良で、1/4強が残る。高台は屈曲部のすぐ下に付き、調整痕は不明。18は篋切り痕を底部外面に残す。調整は丁寧で、篋切りの後で一部に刷毛目を施す。約1/4の残片。



第101图 住居跡出土遺物実測図1 (1/3)



第102図 住居跡出土遺物実測図2 (1/3)

甕 (20) 口縁部を小さく肥厚させ、外側下方に垂下させる。胴部外面の叩き痕は擬格子のようである。復原口径は21cmを測る。

3. 土壇墓

東西に走る現在の水路を挟んで南北に各1基を検出した。南側に位置するものを1号土壇墓、1号溝発掘後に検出した北側のものを2号土壇墓とする。

1号土壇墓 (図版43, 第103図)

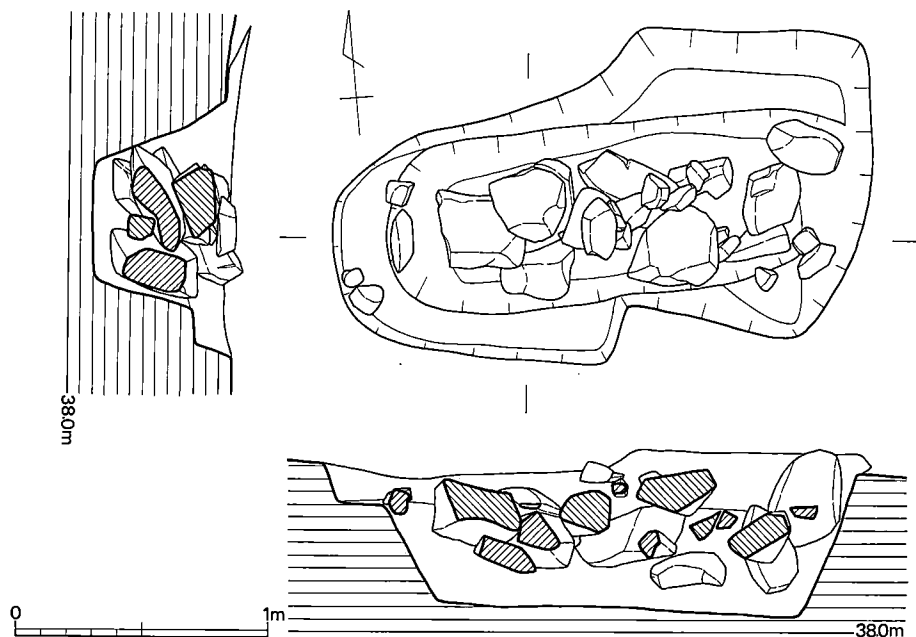
主軸をほぼ東西にとり、検出面では発掘を失敗したが、床面規模で $1.4 \times 0.4 \sim 0.5$ mの長方形プランを有し、深さは0.55mが遺存する。埋土上層には拳大から人頭大の大小の礫がほぼ全面に陥没していた。埋土中には炭の小片を含むが、塊や焼土等はまったく出土しておらず、礫・壁面にも変化は見られなかった。床面近くには若干粘質土が堆積していた。出土遺物はない。

2号土壇墓 (第104図)

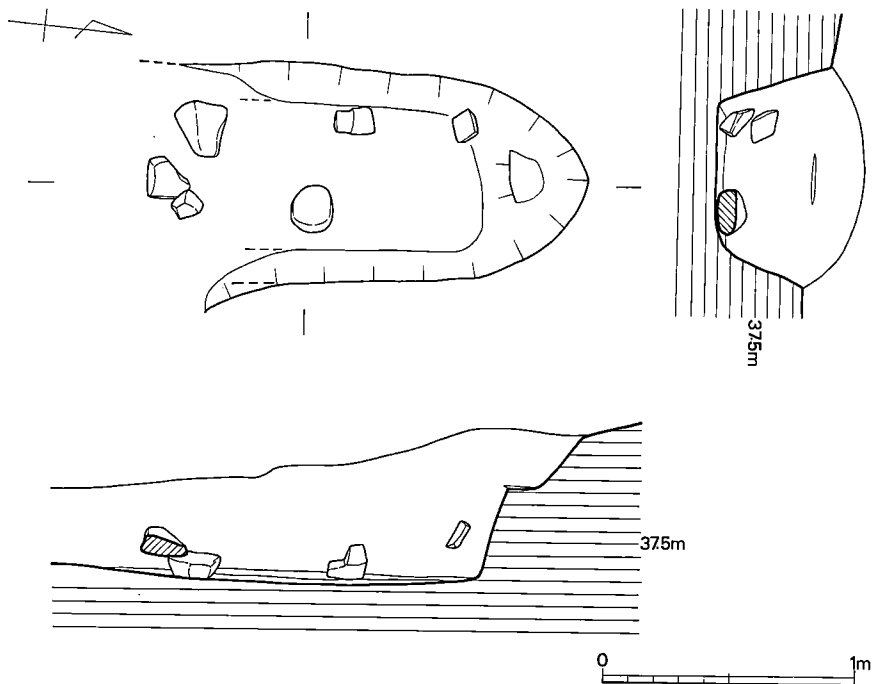
平面的には大溝中であって、両者の切り合い関係は把握できていない。南東側の小口は検出できなかったが、残存する部分は床面で 1.4×0.6 m弱の規模となる。埋土中に数点の礫が出土したが規則性は認められない。また、炭・焼土等の出土はなく、壁体の変化も認められない。

出土遺物 (図版51, 第105図)

土師器 (1) 黄白色を呈する碗の小片である。体部から口縁部にかけて内彎しつつ立ち上がり、底部は平底となる。器表が荒れており、調整・底部の切り離し技法等は不明である。^{註6}



第103図 1号土壇墓実測図 (1/30) — 100 —



第104図 2号土塚墓実測図 (1/30)

青磁 (2) 同安窯系の椀の小片である。

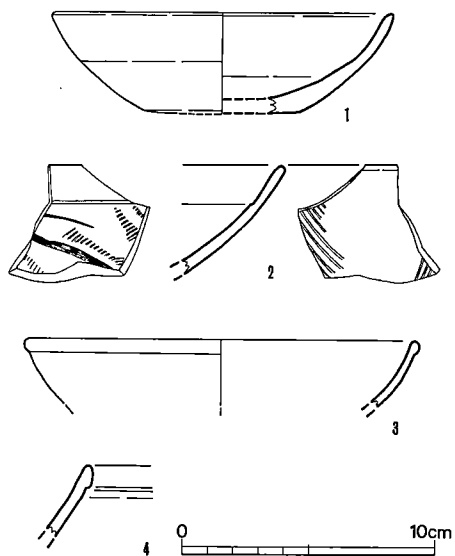
白磁 (3・4) いずれも小片。3は黄味おびる釉を被り、玉縁は整った形である。4は青味を帯びる釉を被り、玉縁は下方へ流れる。

4. 溝状遺構

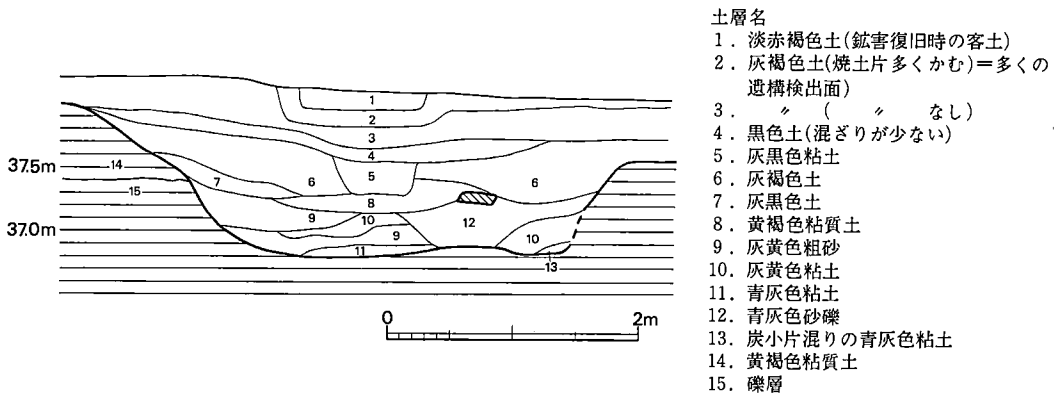
数条の溝を検出したが、ある程度の遺物を出土したものは以下に記述する二条だけである。したがって他の浅い溝については省略する。

1号溝 (第106図)

幅4m強、深さ1.1mの規模で調査区北半を南北に走り、元来は南半の段落ち部分に対応するものかも知れない。土層図に見るように規模を縮小して幾度かの掘り直しが行われており、鉦



第105図 2号土塚墓出土遺物実測図 (1/3)



第106図 1号溝土層図 (1/60)

害復旧が行われるまでの長期間断続的に使用されていたようである。

出土遺物 (図版49~51, 第107~113図)

図示したように各種の遺物が多く出土している。出土層位を上層・下層と別けて記述するが便宜的な分層であり、必ずしも第何層かに対応するものではないことを断わって置く。ただ、取り上げ時にはさらに細かく注記がしてあり、それに従って上方から下方へと配列してある。

上層

須恵器

蓋杯・蓋 (5) 天井部が高く、口縁部は肥厚する。つまみは遺存しない。約1/4の残片。

蓋杯・身 (1~4・32) 1は小片で胎土は粗い。2は約1/4の残片。底・体部間の屈曲は鋭く、高台の形状も整う。3は完周する底部で、焼成は甘く瓦質に近い。高台は低く、接合部の仕上げも雑である。4も焼成が甘い。底部外面に篋切り痕が残る、その仕上げは粗い。32は口縁部のほぼ半分が残る。底部の屈曲部は明瞭で、口縁部まで直線的に開く。

皿 (6・33) 6は底部に篋切り痕が残る、約1/4の小片。

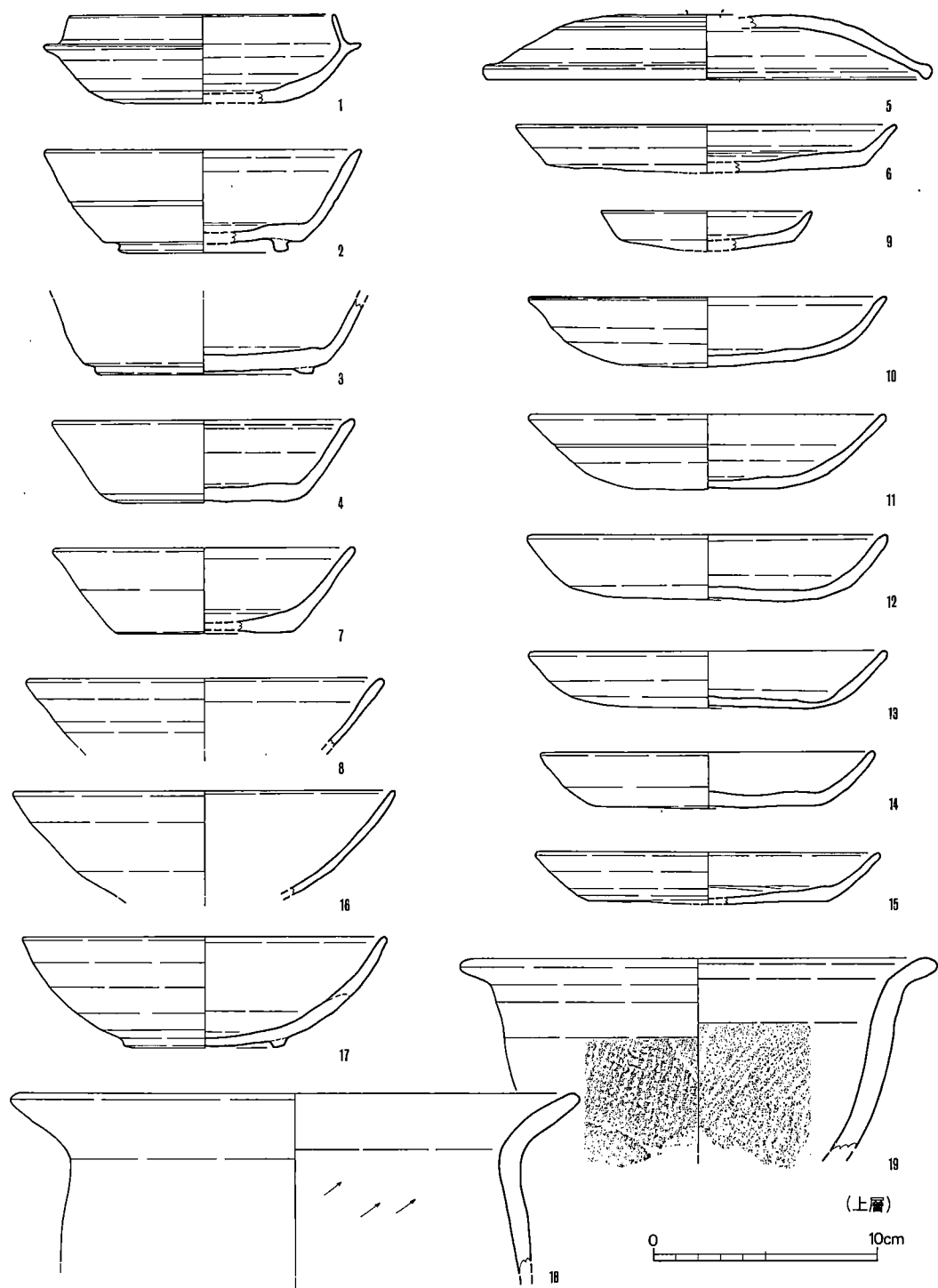
33は底部外縁まで横撫でを施すために底・体部間の稜が丸くなる。篋切り痕が残る小片。

壺 (34) 長頸壺であろう。外面上半を横撫でで、下半を篋削りで仕上げる。肩部に一条の凹線らしき痕跡があるが、磨滅しており断定は困難である。焼成は甘く、外面が灰白色、内面は黄褐色となっている。

土師器

杯 (7・8) 7は小片。二次的な火熱を受けているようで器表は荒れ、調整痕等は一切不明である。8は黄白色を呈する。碗と呼ぶべきかも知れない。

皿 (9~15・35・36) 9は灰白色の小片。調整痕は不明である。10は1/2強が遺存する。口縁部は横撫でで仕上げ、小さく外反する。外面の口縁部下には指頭痕が、同底部には板状の圧痕が残る。11は灯明皿として用いられたようで、内面全体が真黒に煤けている。底部に顕著



第107图 1号沟出土遗物实测图1 (1/3)

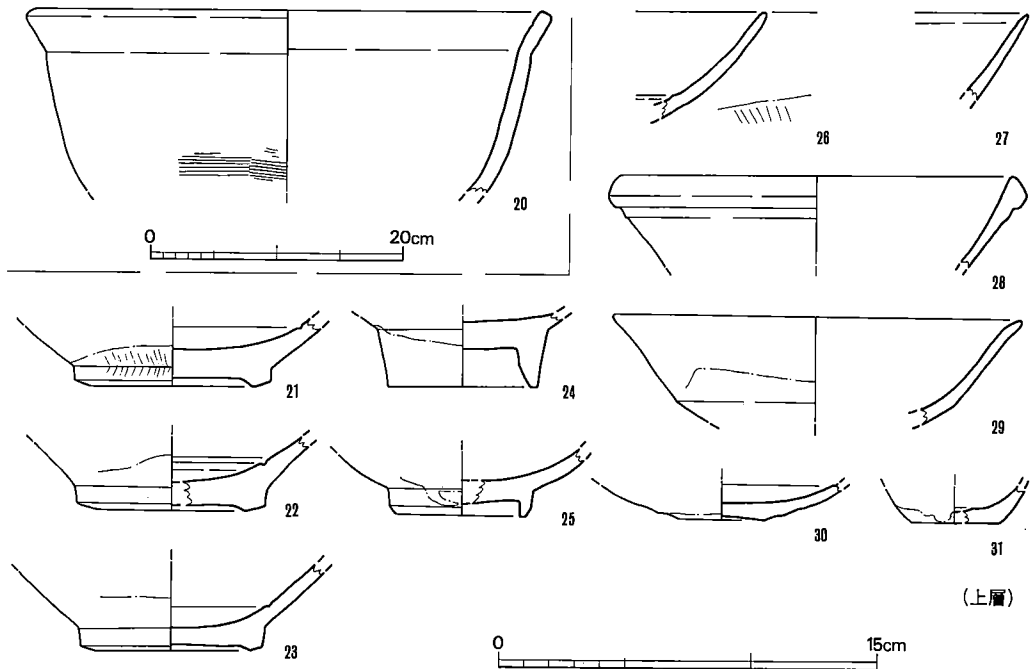
な痕跡は残らない。1/4弱の薄片。12はほぼ3/4が残るが、器表の風化が著しい。13は完形に近いが、やはり器表が荒れている。14は薄片。立ち上がり部分のほぼ全面に横撫でを施すが、中位に明瞭な盛り上がりがあって二段撫で技法と呼べるような形状を呈している。底部外面には顕著な痕跡が認められないが、内面は篋削りと同様な手法を用いて平滑化を図っている。15は底・体部間の屈曲が非常に明瞭で、体部全面を横撫でで仕上げている。底部外面の調整技法は定かでない。薄片である。

35は薄片で調整痕は不明。36も薄片。体部が内彎しつつ立ち上がり、底部外面に回転糸切り痕を残す。37はほぼ完形で出土した。底部から体部への移行が曲線的で、底部外面に板状圧痕を確認できるほかは器表が荒れて定かでない。内面の全面にわたって黒褐色の光沢を持つ附着物が塗布されていた痕跡がある。

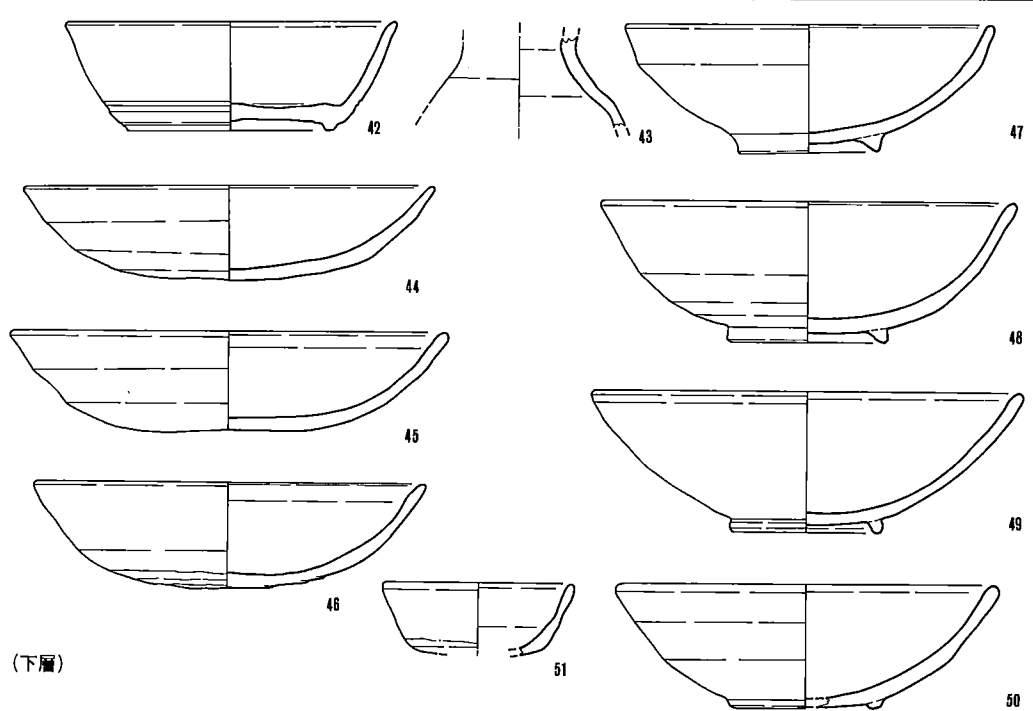
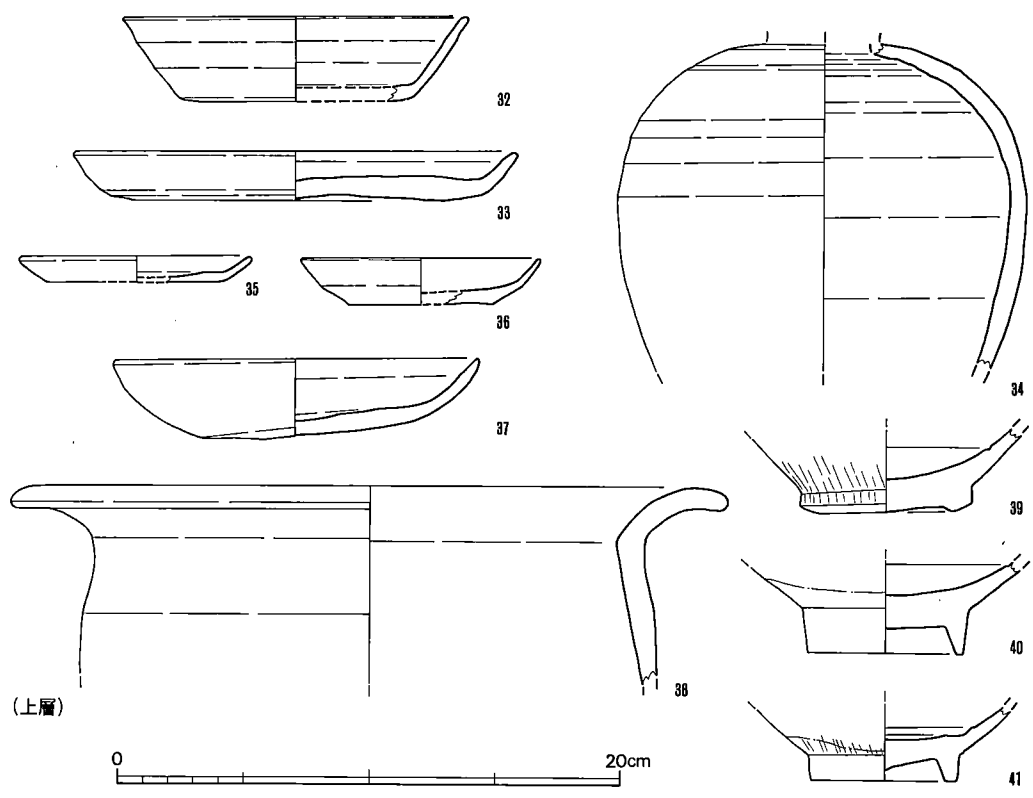
甕 (18・19・38) 18は体部内面を篋削りで仕上げるが、外面調整は不明。薄片である。19は鉢としたほうが妥当かも知れない。体部外面に格子叩き痕を、内面に平行線当て具痕を残すが、二次的な火熱を受けており、器表の遺存状態はあまりよくない。明らかに土師質である。

38は口縁部の開きが大きくかつ外彎する。体部内面を篋削り調整する。

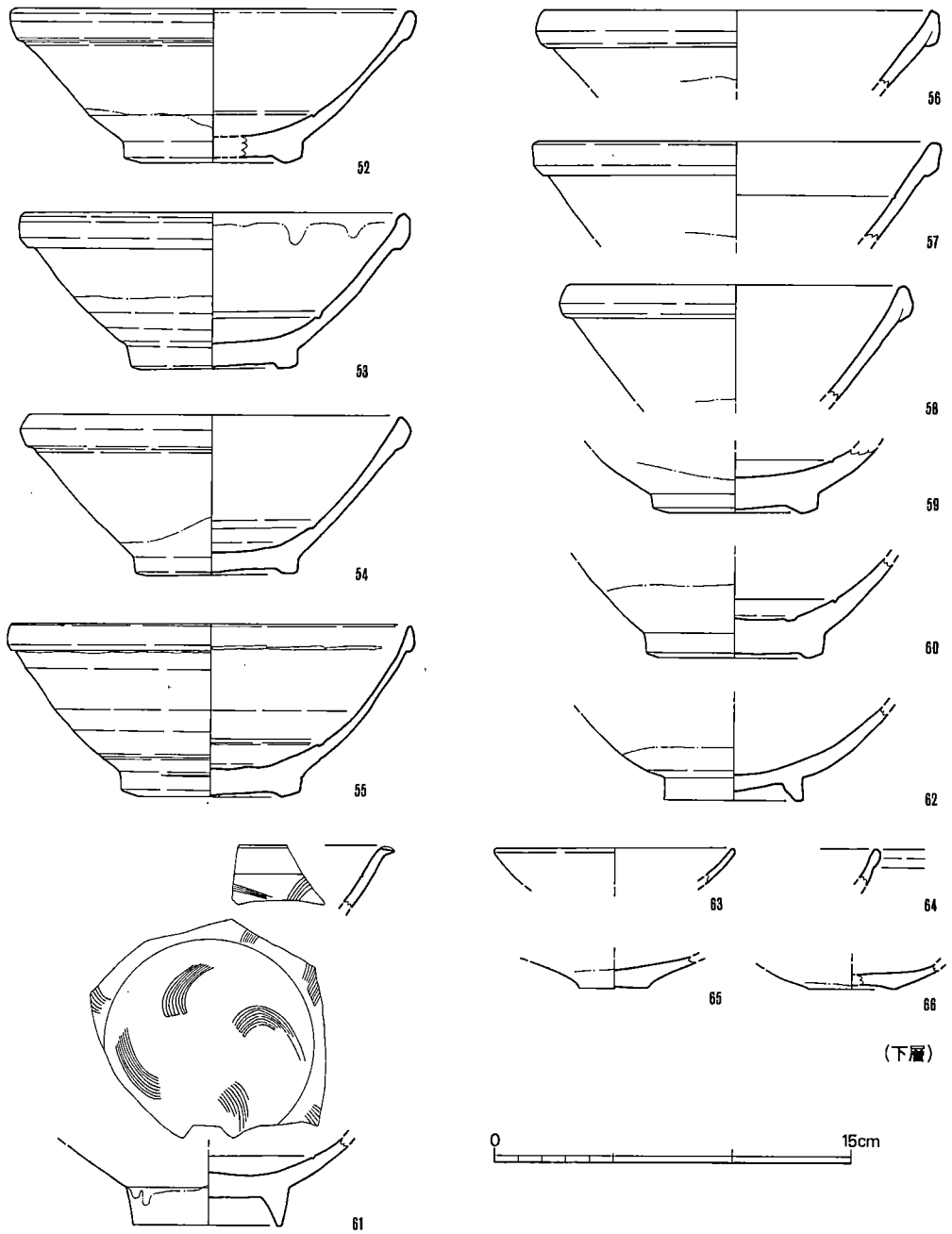
鉢 (20) 口縁部の開きが小さく、端部を面取りする大型品。胎土粗く、焼成も甘い。



第108図 1号溝出土遺物実測図2 (1/6, 1/3)



第109図 1号溝出土遺物実測図3 (1/3)



第110图 1号沟出土遗物实测图4 (1/3)

瓦器

椀 (16・17) 16は小片で、内面口縁部から外面にかけて黒変している。焼成不良のため調整痕は不明である。17はまったく炭素の吸着がなされていない。高台は比較的しっかりしており、畳み付けの部分に乾燥時の置台の圧痕が残る。これも小片。

白磁

皿 (30) 底部を上げ底として、体部中位に沈線を刻む。釉は淡灰黄色を呈する。

椀 (21~28・39・40) 21~23は肉厚の低い高台を有し、見込み周縁に沈線を巡らせる。21の露胎部には縦位の篋削り痕が明瞭に残る。25は焼成不良のために陶器質となる。26は見込み周縁の釉を蛇の目状に掻き取る。

39・40も見込みに圏線を刻む。

合子 (31) 焼成が甘く陶器質となる。釉は灰黄緑色に発色し、内面も薄く被る。

青磁

椀 (29) 淡黄緑色透明釉を施された同安窯系の残片。無文で腰折れとなっている。

石製品

石鍋 (84) 1/4弱の小片。滑石製で石質は灰黒色に近い緻密なものである。外面に煤の付着が著しい。

下層

須恵器

蓋杯・身 (42・70) 42は底部のほぼ半分が残存する。形状の整った高台は底・体部間の屈曲部にあり、体部は内彎しつつ立ち上がって小さく外反する口縁部へと続く。調整・焼成ともに良好。77は体部の立ち上がりが急で、口縁部が小さく反転する。胎土が粗く、灰白色となる。

壺 (43) 図示部分はほぼ完周する。雑な横撫でで仕上げ、胎土も粗い。

土師器

杯 (69) 赤褐色軟質の土器で、底部の1/2強が遺存する。器表の風化著しく調整痕は見えない。

皿 (44~46・67・68) 44は1/2強が遺存する。底部から口縁部へと丸みをもって移行し、口縁部は二段撫で技法を用いて仕上げ、端部は外反する。45もほぼ1/2が残る。口縁部は二段撫で技法を用い、底部外面には板状の圧痕が観察できる。46も同程度の残片。全体の形状は44に似るが、口縁部が直行のまま終わるためにより丸みが強調される。口縁部に顕著な特徴はないが、底部外面には幅1cm前後の粘土紐の巻き上げ痕がよく残る。

67は口縁部が強く外反し、底部外面に粘土紐巻き上げ痕と板状の圧痕を残す。黄白色を呈する1/2強の残片。68は底部のみ残る。屈曲部内面には沈線状の境を刻む。

椀 (47・48) 47は1/4弱の残片。器表の剝離した部分は淡黄褐色を呈するが、本来は淡赤褐色であったと思われる。淡赤褐色部分には暗文と断言はできないが篋磨きを確認できる。48は約1/2が遺存する。口縁部が稜をもって屈折し、重心が上位にある。

把手 (73) 風化著しい。

甕 (74) 縦長の残片であり、径および傾きには問題がある。内面は細密な刷毛目、外面はやや粗い刷毛目で仕上げるようである。火に掛けたと思われる痕跡がある。

瓦器

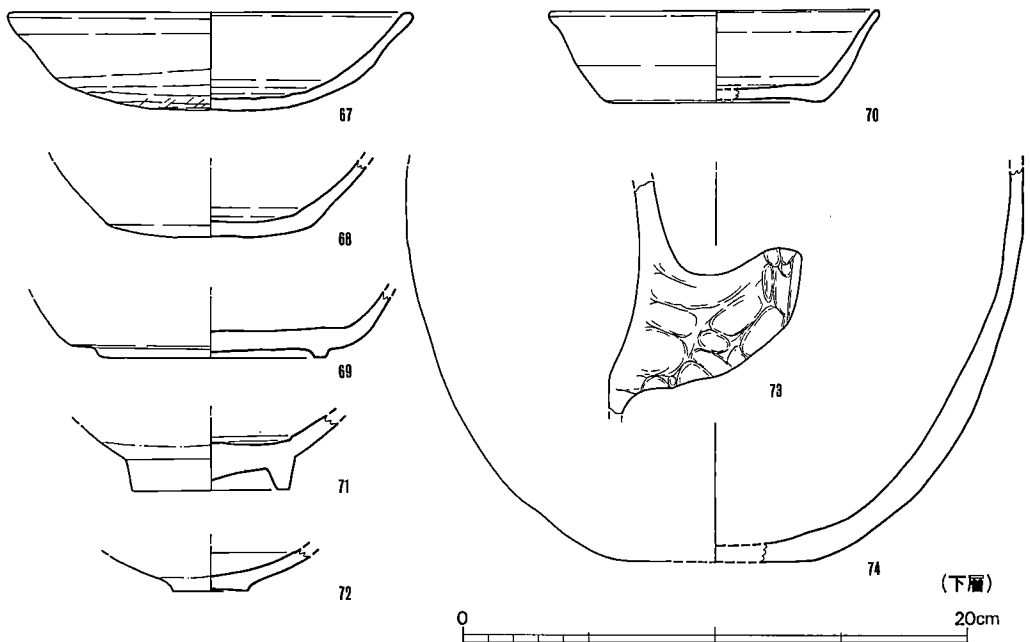
皿 (51) 約1/2が残る小皿で、炭素の吸着には成功しているが、焼成は甘い。

椀 (49・50) 49は内面から口縁部外面にかけてが灰黒色、外面のそれ以下は灰白色となる。高台は高く断面方形に近い。体部中位の外面に指頭痕が見えるほかは調整痕不明。約1/4の残片である。50は小片。高台は低く、断面は方形に近い。体部中位で弱く折れる。焼成不良で器表の観察はできない。

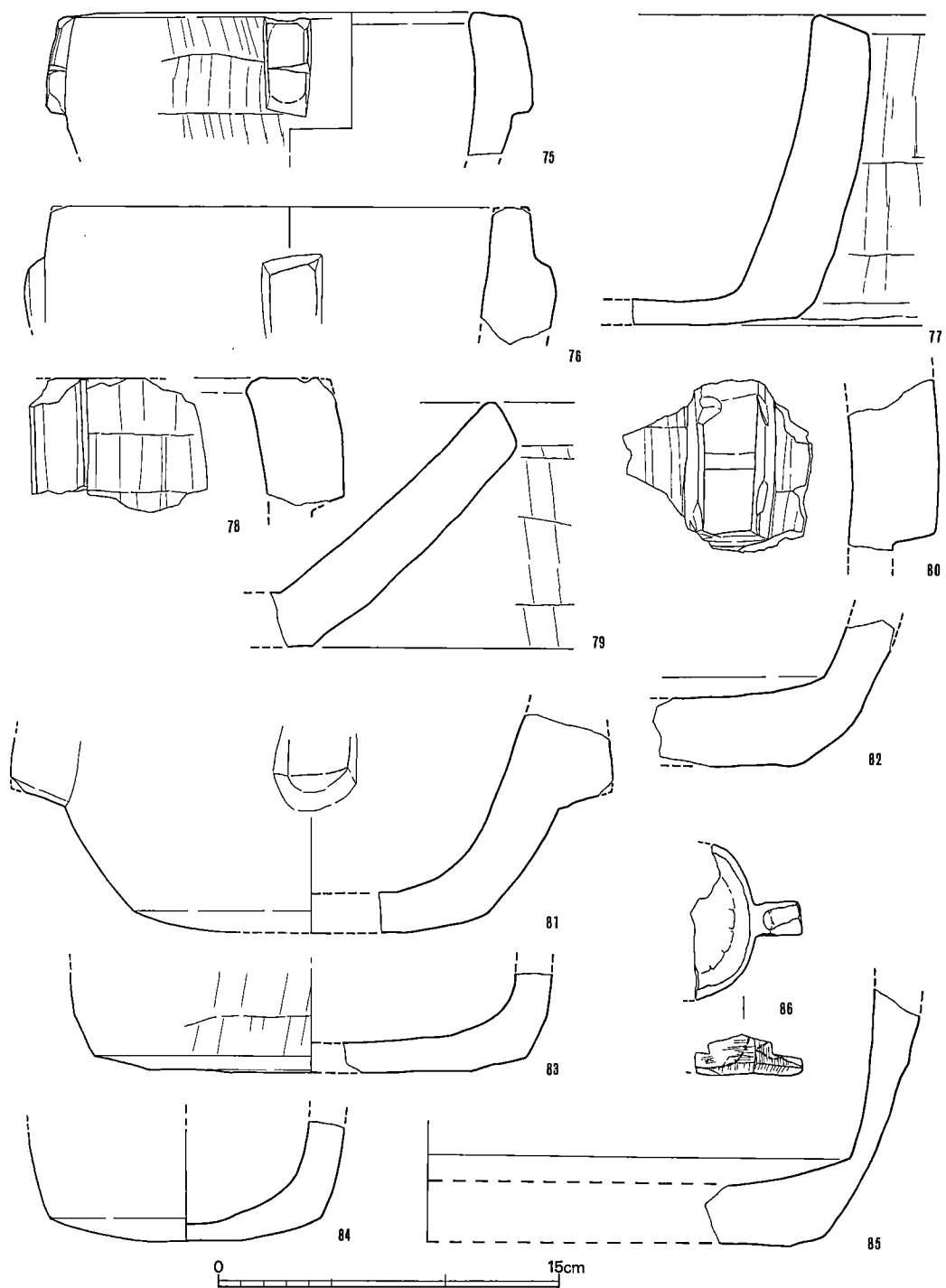
白磁

皿 (65・66・72) 65・72の底部は小さな上げ底となり、立ち上がりの基部がくびれる。69は体部内面の中位に沈線を施す。66は立ち上がり部分が膨らむ。

椀 (52~64・71) 52~55は全体が窺える資料で、いずれも1/4前後が残る。釉は53が青味お



第111図 1号溝出土遺物実測図5 (1/3)



第112图 1号沟出土遗物实测图6 (1/3)

びる白色に発色するものの、他の三点は焼成不良のために黄味が強く現れている。62も焼成不良で陶器質である。61は同一個体と考えられる。見込み周縁と口縁部下の内面に沈線を施し、内面の全面に櫛描文を付す。63は小品。64は小型の玉縁を持つ小片で、釉は淡い黄緑色に発色する透明釉である。

71は見込みの釉を蛇の目状に掻き取る。

石製品

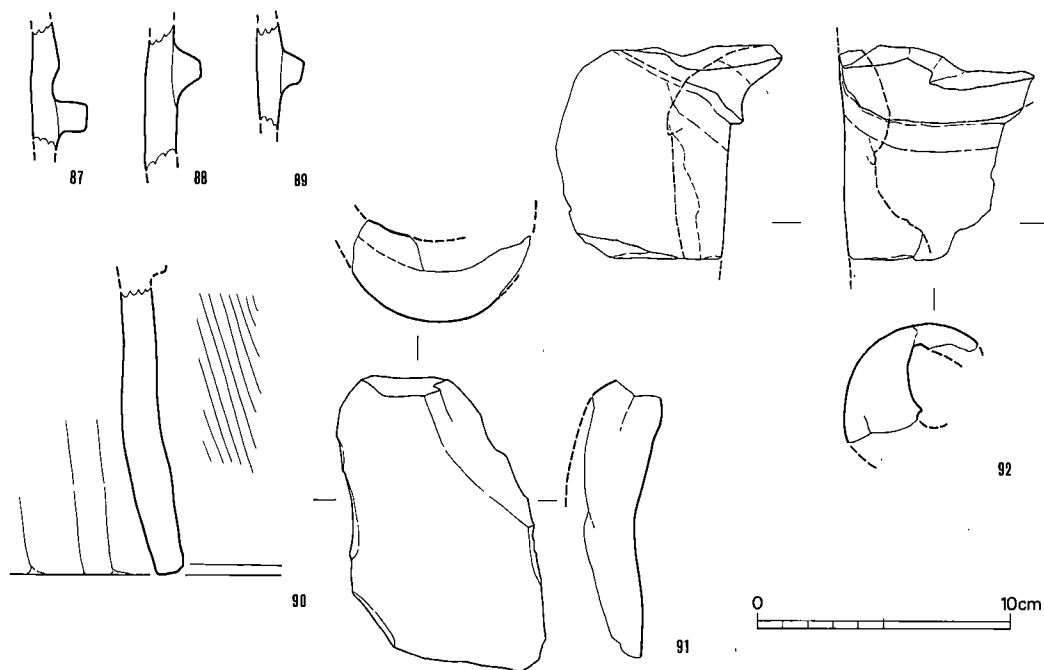
石鍋 (75~83・85) 石質の粗密によって二種に分かれる。75・80・83の器表が滑らかであるのに対し、その他のものは器表に小孔が非常に多く、液体の煮沸以外の用には堪えないのではないと思われるほどである。近隣の若杉山山塊で滑石層が知られており、このような商品価値の劣る粗質の石鍋の産地の一候補と考えられる。

滑石製品 (86) 片手鍋状の小型品で、外面底部は把手部分まで全面に煤が付着している。石質は良好。

埴輪

数点が出土しており、調査区の北方、塚元古墳群から流入したものであろう。

円筒埴輪 (87~90) 87~89はタガの部分である。いずれも断面は方形に近く、突出度も高い。器表の風化が著しく調整痕は残らない。90は外面に粗い刷毛目、内面には指撫でと思われ



第113図 1号溝出土遺物実測図7 (1/3)

る調整痕がわずかに見える。径は復原できない。

形象埴輪 (91・92) 91は図の中央部がくびれて下方が若干広がる円筒で、内面の大部分が剝離している。外面は刷毛目調整と思われる。92は人物埴輪の胴から足にかけての部分。図左上は正面観で、上着の裾は反転し、端部と前面を欠失する。これも円筒を基本とする。

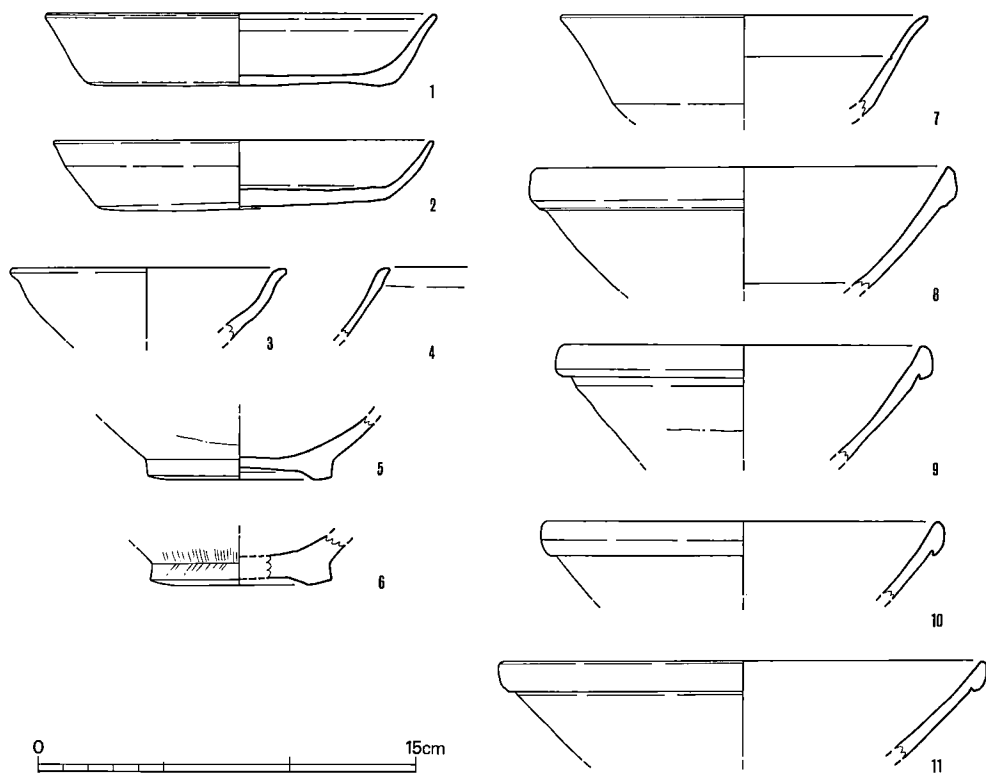
2号溝

1号溝とほぼ平行に走る幅0.4m前後、深さ0.2mほどの規模の溝である。壁の立ち上がりはほぼ垂直となる。現在の水路の北側で直角に折れて西へ流路をとり、そこで消える。

出土遺物 (図版51, 第114図)

土師器

皿 (1・2) 1は口縁部が小さく反転する。底部外面の器表の遺存状況がよくないが、回転糸切りの後に板材状の圧痕が押されたように見える。約1/2の残片。2は口縁部の一部を欠く。底部外面には回転糸切り痕・板材状圧痕とともに粘土紐の巻き上げ痕までが観察できる。底部内面中央付近は指撫でで仕上げしており、1と共通する。2点ともに焼成は良好で、淡赤褐色を



第114図 2号溝出土遺物実測図 (1/3)

呈する。

白磁

椀（4～11） 5・6・8～11は同一形式に属するもので、いずれも小片である。6の見込み外縁には浅い沈線が刻まれる。4は黄緑色をおびる透明釉が施された小片。7は外面下位に弱い稜を有し、内面の中位には沈線を刻む。釉は白濁する。

青磁

椀（3） 青灰色の生地にむらのある黄緑色半透明釉を施釉したもので、陶器質に近い。口縁部が強く反転し、体部は内彎ぎみとなる。李朝青磁の小片^{註7}。

5. 神社関係遺構

2号墳の西方にあり、2個一対の柱穴2組と浅く大きい土坑等からなる。南からそれぞれ1号鳥居・1号土坑・2号鳥居として以下に説明を加える。

1号鳥居跡（図版44・45、第115図）

1×0.7mほどの長円形（隅丸長方形）プランを有する、深さ0.65mの掘形内に設置された木製の鳥居でその基部が遺存していた。残存する丸太材の直径は西側のもので0.2m、東側のもので最大0.3mほどとなる。両者の心中心距離は1.65mを測る。丸太材の周囲には大小の礫を詰めこんで安定を図っているが、詰め方は乱雑で規則性は看取できない。

1号土坑（図版44、第115図）

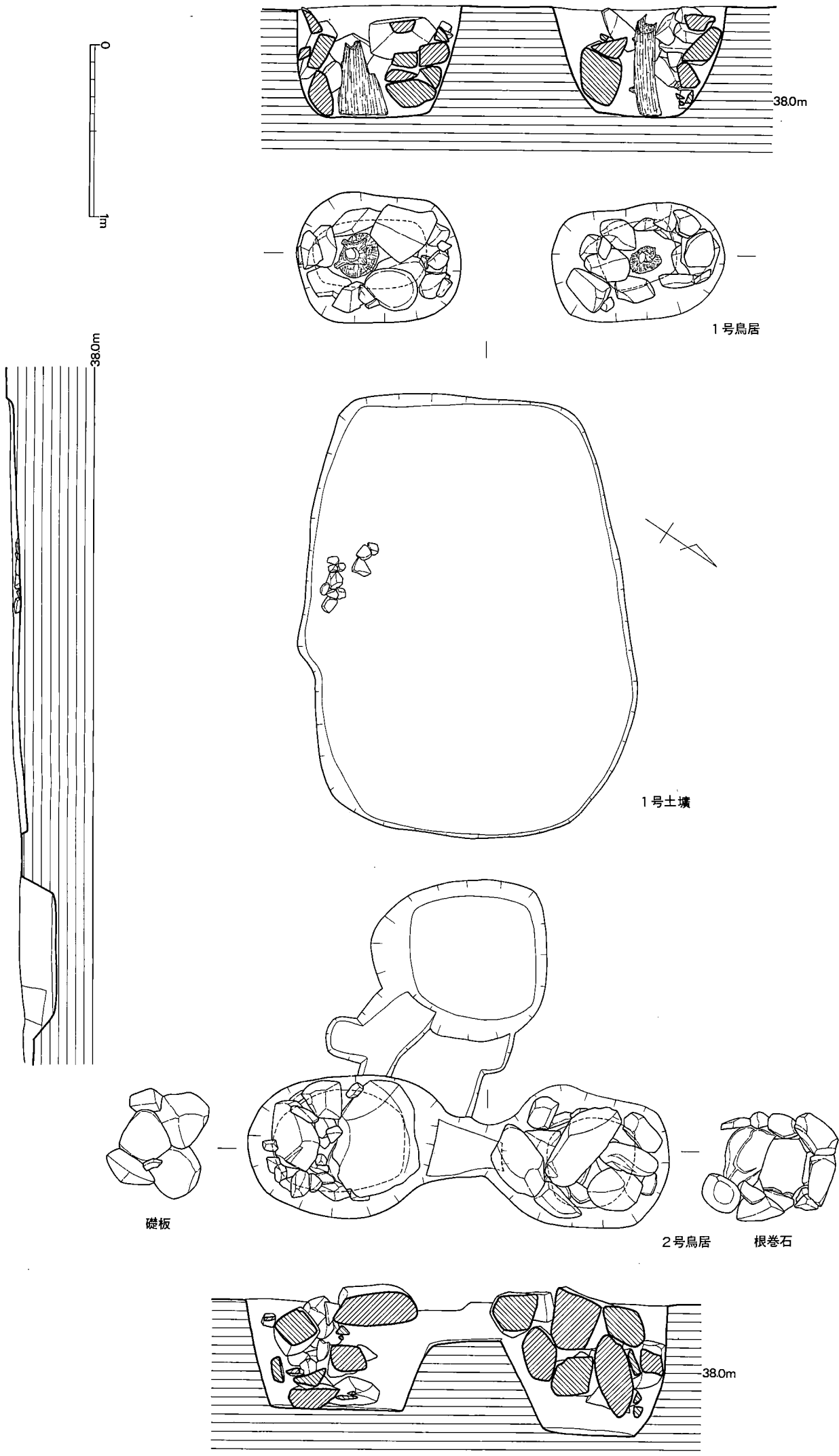
長辺が張り出す長方形プランを呈し、平面規模は2.5×1.8mとなる。深さは0.1mに満たない浅いもので、一部にのみ小礫が遺存していたが規則的にあるとは言い難い。埋土の状況は床面を薄く砂が覆い、その上位に炭が堆積していた。

出土遺物はない。

2号鳥居跡（図版44、第115図）

1×0.8mほどの長円形（隅丸長方形）プランを有し、深さ0.7mの柱穴2個で構成される。その心中心間の距離は約1.5mである。検出時、内部には大小の礫が充填しており旧状を想像することは困難であったが、崩れ落ちた礫を除去してようやく理解できた。

西側柱穴では明らかに四周に礫を組み上げた状況が看取でき、それも断面図に見られるように礫を縦位置で使用するという、鳥居のように細く高い柱を安定化するのにより効果的な方法を採用している。内部に落ちこんだ礫は鳥居除去後に入れ込んだものであろう。東側柱穴では西側柱穴で見られたような石組は見られない。が、床面に接して上面を揃える敷石が残ってお



第115図 神社関係遺構実測図 (1/30)

り、礎板との認識があったと考えられる。その上位は乱雑に礫が積み重なっていた。

以上の鳥居等に関しては調査時に古老の言として耳にしており、明治9（1876）年に編纂された『福岡県地理全誌』にも次のような記載がある。

〔(高田村) 村社菅原神社 本殿四尺四面 拝殿二間四面 木鳥居一基 (中略) 本 (高田) 村の西四町余 天神森にあり (以下略)〕

ここに記された木製の鳥居が調査で検出した1号鳥居を示す事はほぼ確かであろう。地籍図でもこの地点は572-2番地として幅員1.8mの町道が走っており、合致する。記録には2号鳥居・1号土坑についての記載がないが、先の古老によれば「法験行」、所謂「どんど焼き」の場があったといい、1号土坑に関しては埋土の状況からそれと想定しうる。

6. 柱穴等の出土遺物

多くの柱穴を発掘したが積極的に建物を構成すると判断できるものがないために、その出土遺物の一部をここにまとまる。併せて包含層出土遺物、あるいは取り上げ時のミスから出土地不明となってしまったものも記述する。なお、P157は遺構番号を示す。

柱穴出土遺物（図版51, 第106図）

須恵器

蓋杯・蓋（1） 口縁部外側面はほぼ垂直になり、小さく垂下する。胎土・焼成ともに良好な小片。若干焼けひずみ、中央部がくぼむ。

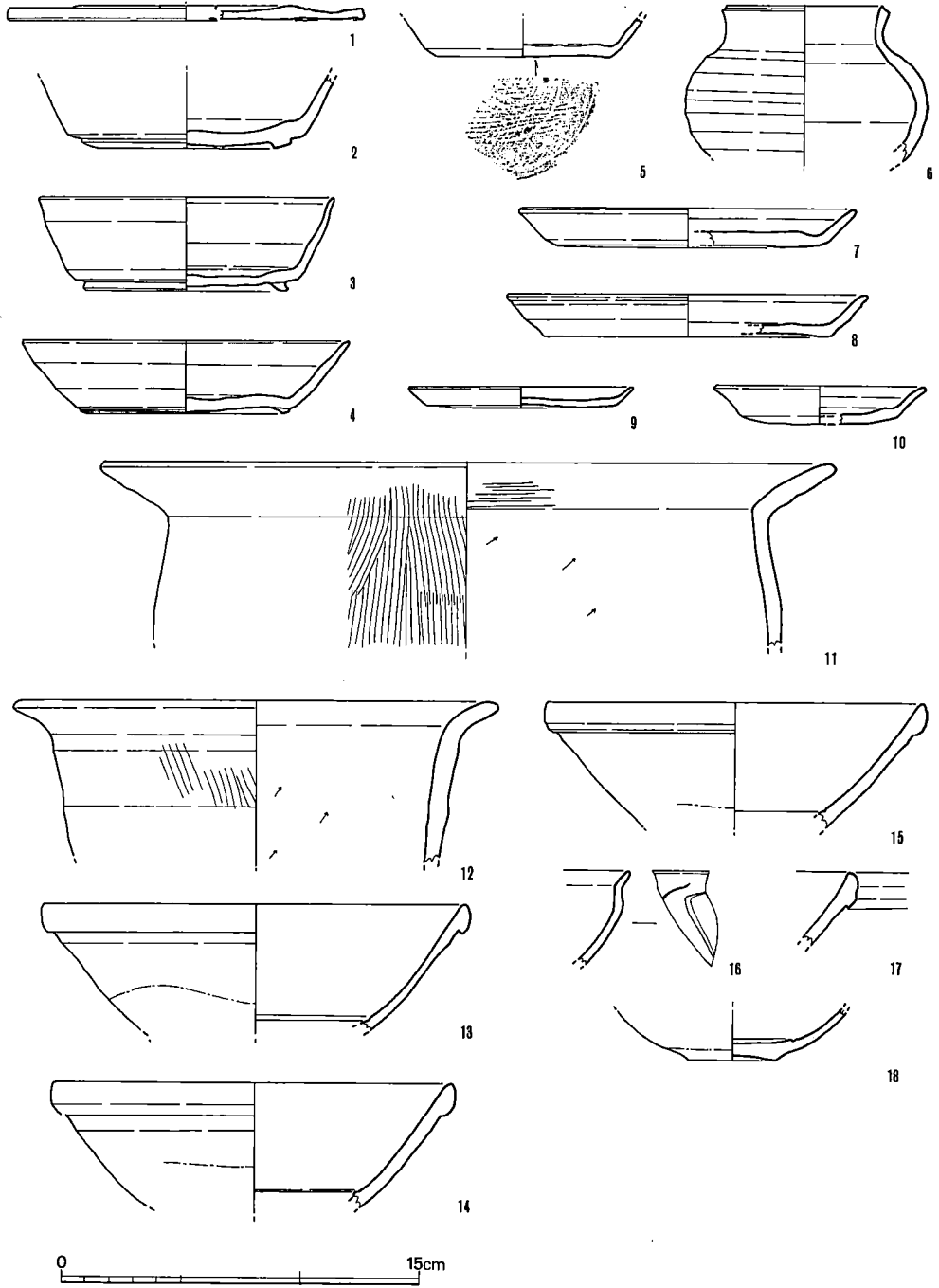
蓋杯・身（2～5） 2は底部の約 $\frac{1}{2}$ が残る。底・体部間の屈曲は鋭く、そのやや内側の高台は低いものの形状は整う。3は小片。高台は外方へ踏んばる格好となり、底・体部間の屈曲はこれも明瞭。胎土・焼成ともに不良と言える。4は体・口縁部が大きく開き、底・体部間の屈曲部に形の崩れた高台を付す。底部外面に篋切り痕を残す小片。5は底部外面に篋切り痕と不定方向の平行叩き痕を残す。胎土・焼成ともに良好で、仕上げも丁寧である。

皿（7・8） 7は胎土に溶融する黒色粒を多く含む点で特徴的である。また底部外面に仕上げ調整を施していないようで、細密な植物（禾本科？）の圧痕が残る。 $\frac{1}{4}$ の残片。8は体部を強く横撫でするために口縁部・底部側縁が小さく突出する。小片である。

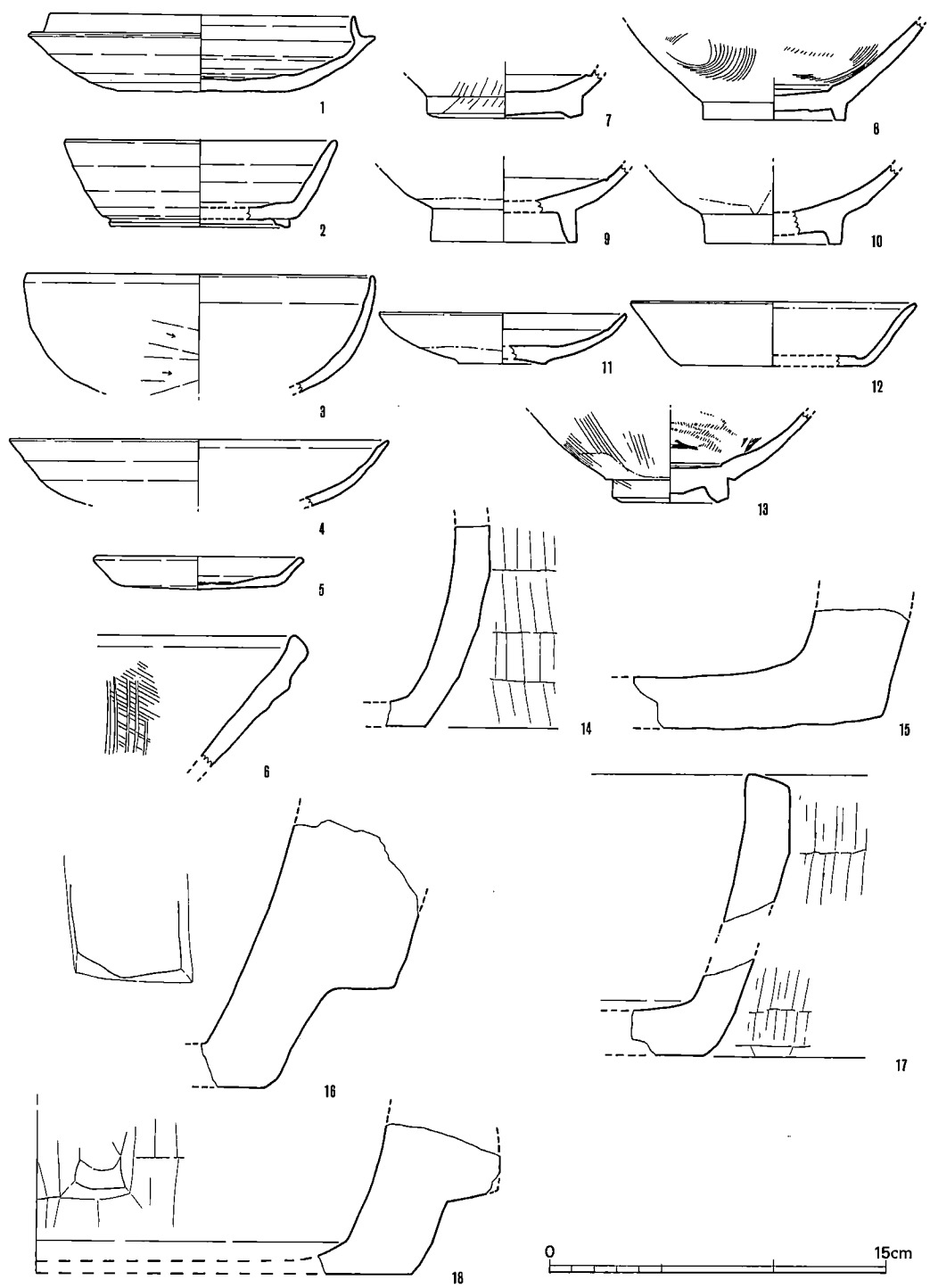
壺（6） 口縁部はほぼ直立し、端部は外傾する匙面となる。体部は横撫でが著しく、凹凸が目立つ。あるいは装飾的效果を意識したものかも知れない。

土師器

皿（9・10） 9は体部が直線的に開き、底部外面には篋切り痕と思われる痕跡がかすかに見える。10は体部が外彎して開く。底部外面に同心円状の砂粒の移動した痕が見え、判然とし



第116图 柱穴出土遺物実測図 (1/3)



第117図 包含層その他の出土遺物実測図 (1/3)

ないが篋切り痕と思われる。

甕 (11・12) 11は1/4強が残っている。外面は刷毛目が著しく、体部内面は篋削り調整で仕上げる。12は小片。口縁部の開きが小さく、外面には煤が付着している。

白磁

皿 (18) 底部は上げ底となり、体部は内彎しつつ開く。見込み外周に沈線を刻む。胎土は陶器質に近く、淡灰緑色釉を施釉する。約1/2の残片。

椀 (13~17) 13~15・17は大型の玉縁を有するもので、遺存度のよい3点は体部内面下方に沈線を施している。16は口縁部が「S」字状の形態となり、外面に片切彫りで施文する。

包含層その他の出土遺物 (図版51, 第107図)

須恵器

蓋杯・身 (1・2) 1は約1/4が残る。調整が雑である。2は胎土が粗く、底部に対する高台の張り付け位置が一定しないととも高台の形状も整わない。これも1/4の破片。

土師器

皿 (4・5) 4は二段撫で技法が用いられた小片で、口縁部は薄く開いて終わる。5は底部外面に回転糸切り痕を残し、口縁部が小さく外彎して開く。

椀 (3) 外面に静止篋削り痕が観察できるが、器表が荒れており他は不明。橙褐色を呈する約1/4の破片。

瓦質土器

摺鉢 (6) 内面を刷毛目調整した後に摺目を入れる。調整・焼成ともに粗雑である。

白磁

皿 (11・12) 11は体部が内彎し、内面中位に段を有する。釉は淡い灰黄緑色を呈する。12は本遺跡中唯一の口禿げである。約1/4が残る。

椀 (7~10) 7は露胎部に縦位の篋削り痕が目立ち、見込みの外周に沈線を刻む。8は見込み外周に段を有し、体部の内面にのみ櫛描文を施文する。体部は直線的に開き、高台の外周まで黄味の強い黄白色釉を施釉し、畳み付けから高台内のみ露胎である。9も見込み外周に沈線を刻む。淡い黄白色釉を被り、焼成は甘い。10も黄白色釉を被り、焼成も甘い。

青磁

椀 (13) 同安窰系の製品で、外面に繊細な櫛描文、内面にも櫛描文と片切彫りを用いて施文する。

石製品

石鍋 (14~18) 14・17が上質の、他は粗悪な滑石を原料としている。

7. 小 結

塚元2号墳に関する資料は乏しく、上記した以上のことは言及できない。

4棟の住居跡については、出土遺物の豊富な4号住居跡が6世紀後半に比定でき、甕1点を出土した1号住居跡も同時期と言える。他の2棟に関しても甚だしくかけ離れた時期の遺構と考える理由はなく同時期の所産として大過なからう。集落は北側へ向かってより広い範囲に展開しているのであろうが、そこで問題となるのは古墳との関係である。ほぼ同時期の古墳と住居跡とが近接して密集することは考えられなくもないが稀な現象であると言える。しかし、本遺跡においては確実に墓地と生活跡とが時間的に共存している。両者の間には平面的には1号溝があって画しているものの、後述するように溝が当時から存在していたという確証はない。調査面積が狭いこともあって両者の関係について臆測を重ねることは危険であるが、墓所と生活の場として有機的な関連を有していたと考えることは許されよう。

2基の土壇墓は必ずしも墓と断定できるものでなく、出土遺物も小片で時期的な幅があると考えられることから遺構に伴うとするには無理がある。土壇墓と1号溝との先後関係は重要であるが残念ながら不明のままである。

1号溝は幅4～5mの大規模な溝で、6世紀代の須恵器を始めとして長期間にわたる遺物を出土している。しかし、統計的処理を行っていないものの量的には玉縁を有する白磁碗、横田・森田氏のいう「白磁碗Ⅳ-1類」が多い。遺物整理の過程で、口縁・底部を抽出し、その時点で玉縁を有する白磁碗が際立ったためにその他の白磁・青磁は極力図化して報告し、玉縁碗はかなりの部分を省略した。したがって実数では図に見る以上に玉縁碗が凌駕している。以上のことから溝の埋没は11世紀中葉～12世紀初頭にその中心があったとできる。掘削の時期は確信を持てる資料がないが、6世紀代の遺物は少量でかつ住居跡が卑近に存在することから混入と考えることもできる。そうした場合に残るのは高台付き杯に代表される一群である。それらは体部が直線的であり、高台が屈曲部近くに位置し、かつその形状も粗雑なものになる。そうした特徴は「牛頸窯跡群」で編年されたⅣ期に相当し、8世紀後半～9世紀初頭に比定されている^{註7}。しかし、溝の掘削時期を6世紀代とするか、あるいは9世紀前後に比定するかは集落・古墳の意義付けに大きく影響し、今時の調査で結論を出すことは困難であり、周辺の発掘調査を待つて考えてみたい。

近世の神社関係の遺構については上記した通りである。地誌を裏付けることとなった。

第4節 おわりに

以上が今回発掘調査を行った塚元遺跡の内容である。再度この調査の成果と今後の課題を記して終わりとしたい。

塚元1号墳について

1号墳は大破していたものの古式の横穴式石室、いわゆる竪穴系横口式石室を主体部に持ち、かろうじて若干の武器・農工具と轡一式等を検出できた。轡を構成する鏡板はf字形を呈するが、この種で従来出土しているものの大部分が金銅製の装飾性豊かな遺品であるのに比して、本例はごくシンプルな、より実用的な鉄製品であり、換言すれば模倣品ともいえる。そのことは本古墳の被葬者像を暗示していよう。この種の出土例を捜しえなかったことは筆者の怠慢でもあるが稀少な例であることは大方の認めるところであろう。年代的な事柄も考慮すればこの被葬者が玄海灘を行き来する交流に直接関係していた、あるいは近い位置にいた首長級の人物であったと推測したい。

6世紀の集落と古墳

6世紀後半と考えられる4棟の竪穴式住居跡、ほぼ同じ頃に築造されたと想定される古墳1基を検出している。古墳は塚元古墳群として調査区の北方に50基近くが存在したと言われるものの一基として間違いなからう。住居跡に特殊な性格を看取するにいたらず、通有の生活跡であったとできる。したがって墓所と集落がきわめて近い位置に同時に展開していたといえるのだが、このような構成を有する遺跡も例は少ないであろう。両者の間に存在する1号溝が当時から存在していたとするならばこの現象も納得できる。先述したように溝の掘削は8世紀末頃と考えられるが、住居跡・古墳と同時期の遺物も出土しており、墓所と集落を画していた溝を再度掘削したという推測も十分に成立しうるし、可能性は高いと思われる。ただ、調査範囲が限られており、掘削時期の有力な手掛かりをつかめなかったことから今次の調査の所見としては推測の域を出ない。

古代～中世にいたる開拓の様相—水利運用

I区の水路は11世紀前半に掘削され、ほぼ11世紀代のうちに埋没していた。II区の水路（1号溝）に関しては掘削時期の確定に問題を孕むものの、遅くとも9世紀前半頃には利用されており、その廃絶時期はI区水路と同時期としてよい。しかし、II区1号溝の土層図を見てわかるようにその後も溝さらえあるいは規模を縮小しての再掘削が幾度か行われ今日に至っている。

そのことはⅠ区水路についても同じで、この溝の延長は現在でも排水路として利用されている。

それはさておき、『福岡県遺跡等分布地図』では今回の調査地点のすぐ南に条里遺跡が記されている。その主軸方位はほぼ磁北に添い、今回調査した水路とは30度以上のずれがあることからこれらの水路は条理の規範に添わない。が、Ⅱ区1号溝はバイパス予定地北側の畦畔に痕跡を留めてその延長が谷へと向かい、天水を集めて利用していたと思われる点で機能的には条理制のうちにあったとできる。今回調査した2古墳が丘陵上にあることは上記したが、Ⅱ区1号溝はその東麓に添って掘削されており、土地をより有効に活用している様子が窺える。

かって、この付近には太宰府安楽寺天満宮の荘園「小中荘」が存在しており、現篠栗町尾仲付近に比定される。この荘園との関係も無しとはしないであろう。

今後の課題として上述した、集落と古墳との同時的な近接立地、条理遺構・荘園制との関係等があるがいずれにしても資料的制約から深く言及できない状態にある。バイパス開通後に頻繁化すると予想される開発行為と緊急調査の積み重ねの中からいずれ回答が引き出されることであろう。

〔註〕

1. 骨については文化課文化財専門員 木村幾太郎氏に御教示を得た。細片化が著しく、かつ頭骨・歯等が不明だが人骨であろうということである。骨の中には火熱を受けて生じるヒビ割れがはっきりと観察できる部位がある。
2. 九州歴史資料館 横田賢次郎・赤司善彦・吉村靖徳氏等の御教示を得た。
3. 田辺昭三『須恵器大成』, 1981
4. 前川威洋氏のⅠ—3 B期の丸底杯に比定した。
前川威洋「土師器の分類および編年とその共伴土器について」(『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第8集下, 1978)
5. 横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について一型式分類と編年を中心にして一」(『九州歴史資料館研究論集』4, 1978)
6. 前出, 横田・赤司・吉村氏の御教示を得た。それによるとこの土師器(酸化炎焼成であるが、須恵器とすべきであるかも知れない)と同様の例は太宰府では出土しない異質なもので、あえて年代を推測するならば、器形・法量などからみて8世紀後半～9世紀前半におさまるのであるという。
7. 註2に同じ。
8. 福岡県教育委員会「牛頸窯跡群Ⅱ」(『福岡県文化財調査報告書』第89集, 1989)

版 圖



調査区全景(東上空より)



1. 塚元1号墳現況(南から)



2. 塚元1号墳現況(北から)



1. 塚元1号墳主体部(東から)



2. 塚元1号墳主体部左側壁背面(西から)



1. 塚元1号墳墳丘内焼土坑(北から)



2. 塚元1号墳墳丘内焼土坑(北から)



1. 塚元1号墳西側水路跡(北から)



2. 塚元1号墳西側水路跡土層(北から)



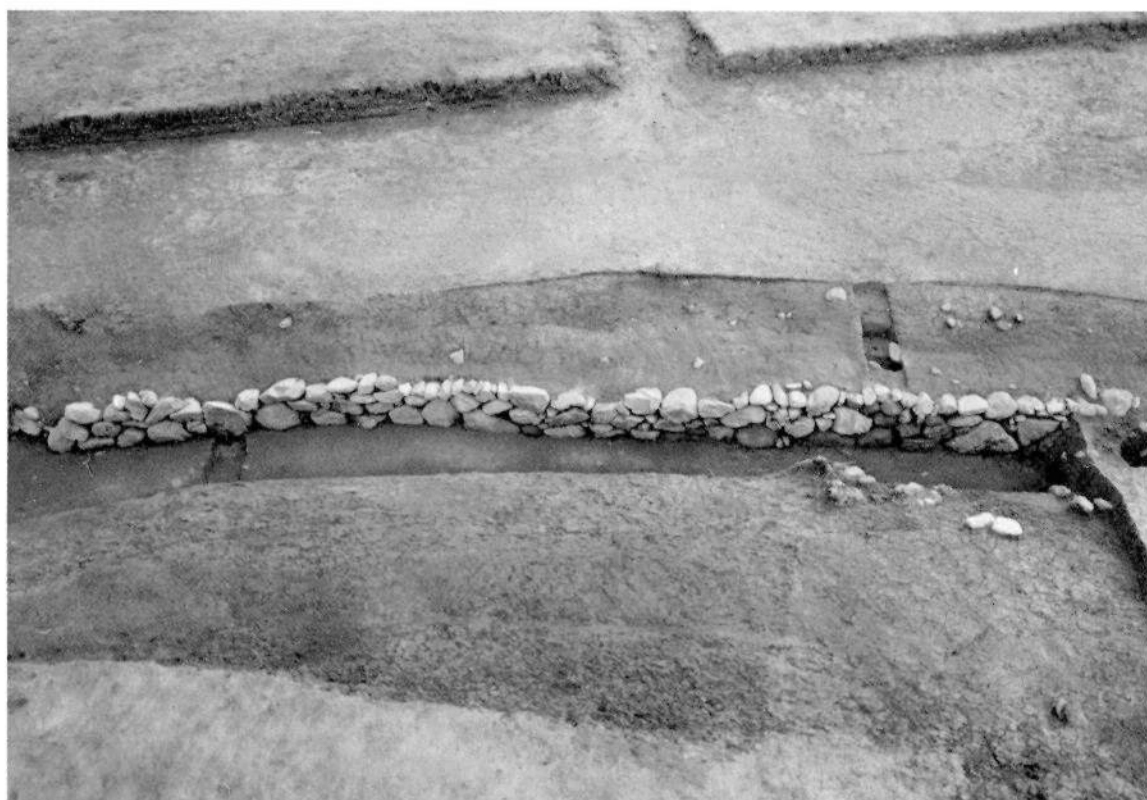
1. 塚元1号墳西側水路跡(北から)



2. 塚元1号墳西側水路跡礫群検出状況(東から)



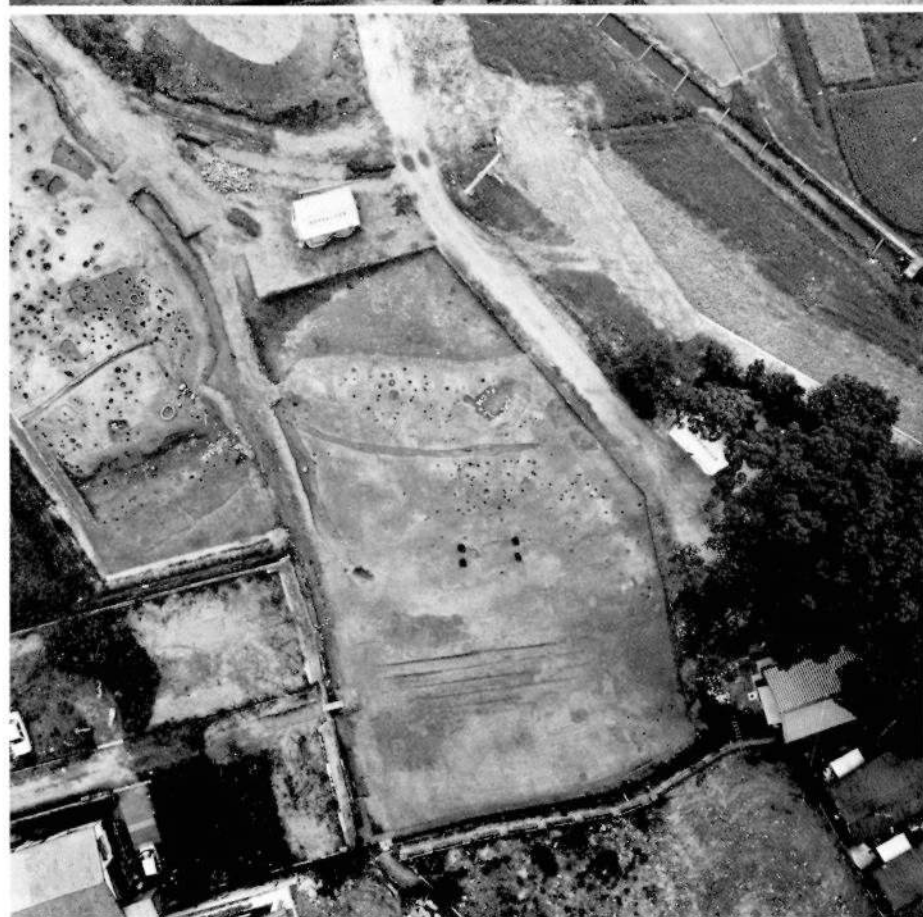
1. 塚元1号墳南側水路跡土層(東から)



2. 塚元1号墳南側水路跡(北から)



1. 塚元遺跡Ⅱ区
北半(上空より)



2. 塚元遺跡Ⅱ区
南半(上空より)



1. 塚元2号墳



2. 塚元2号墳(北から)



1. 3号住居跡(北から)



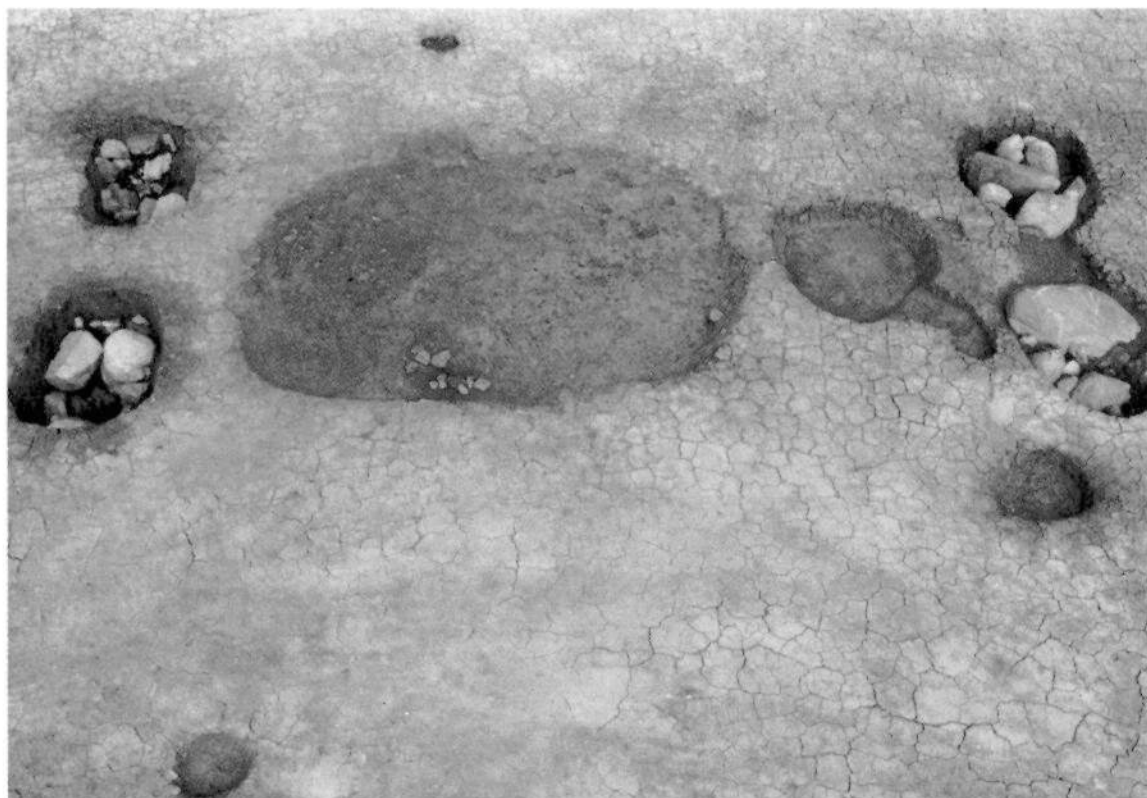
2. 4号住居跡(南から)



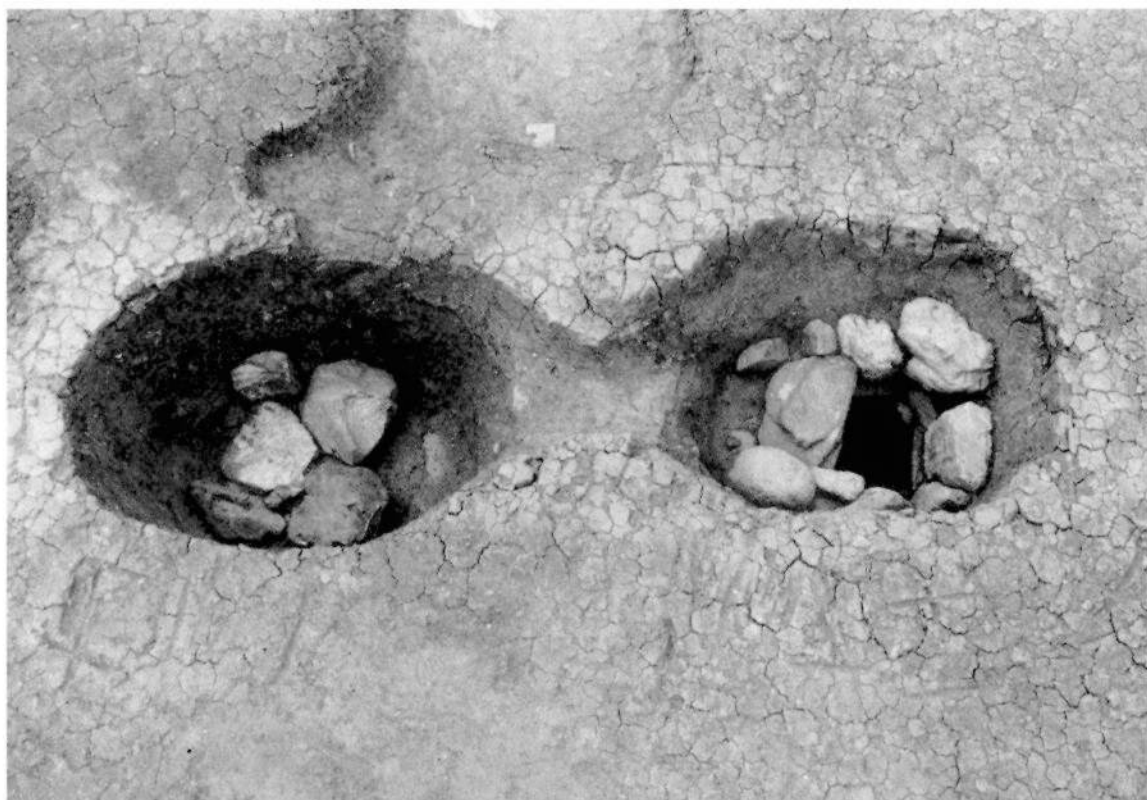
1. 1号土壇墓検出状況(北から)



2. 1号土壇墓完掘状況(西から)



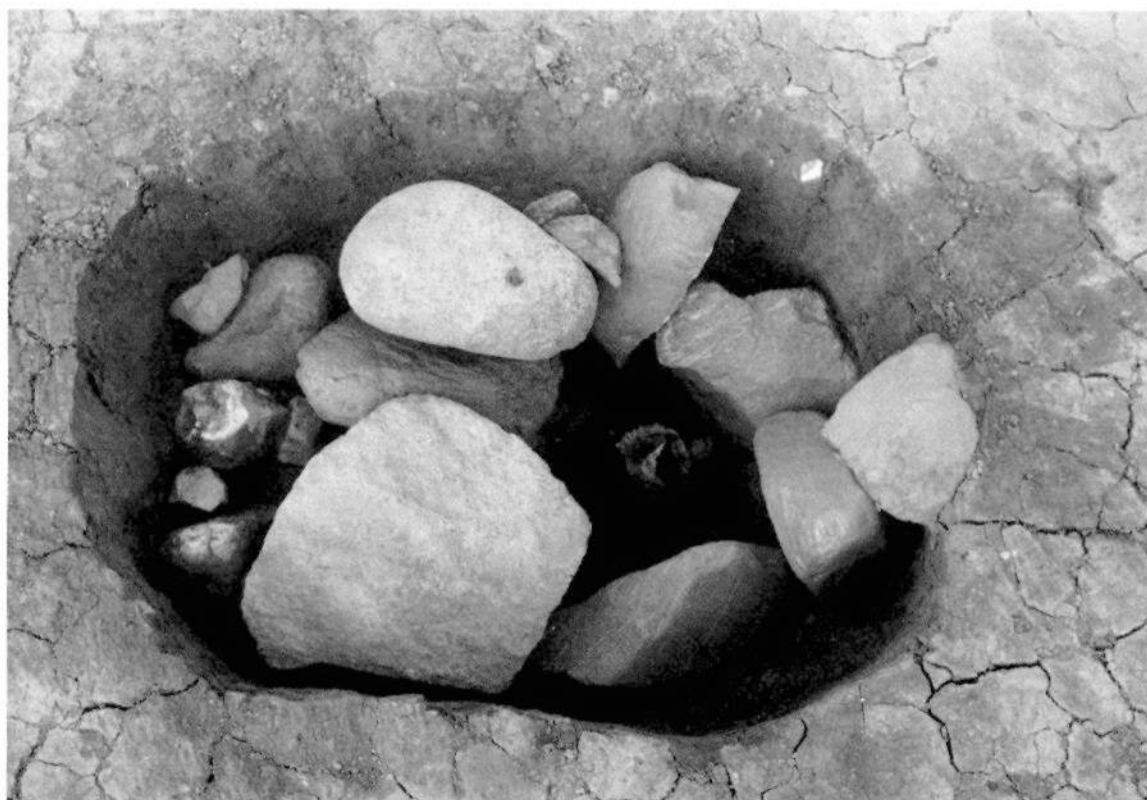
1. 神社関係遺構全景(東から)



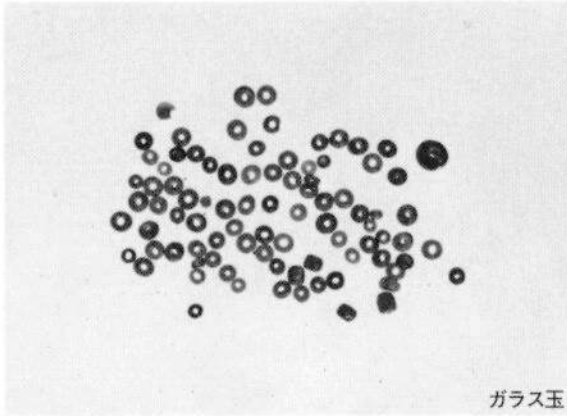
2. 2号鳥居跡(北から)



1. 1号鳥居跡東柱穴(北から)



2. 1号鳥居跡西柱穴(南から)



ガラス玉



5



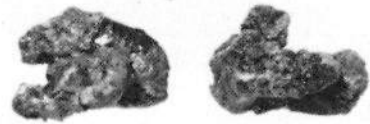
1・2



7~9



3



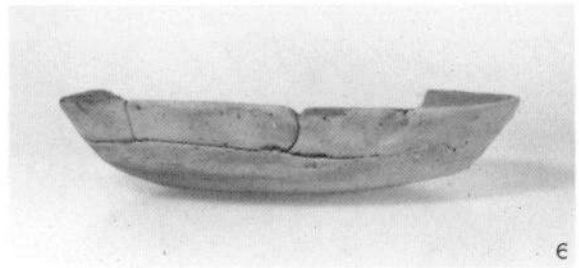
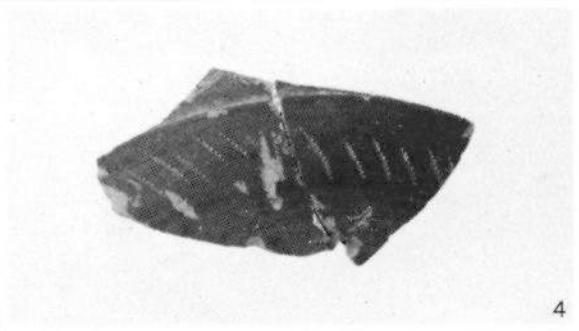
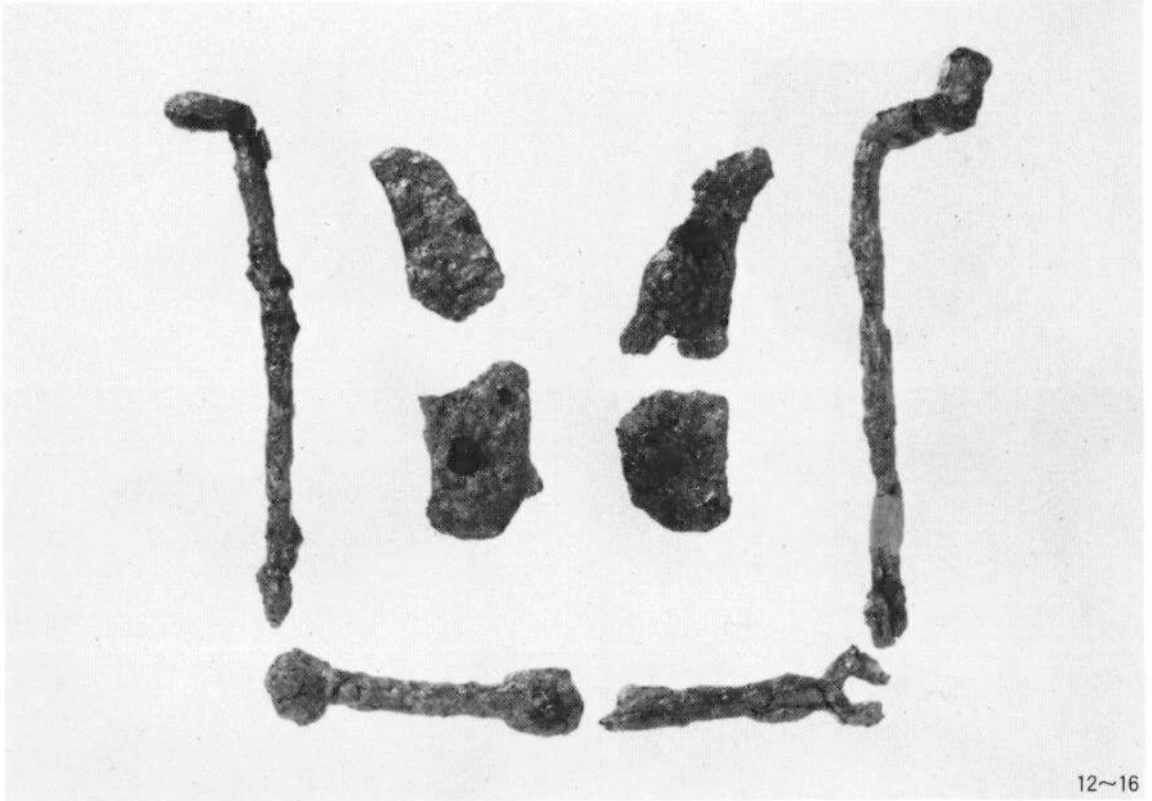
10・11



4



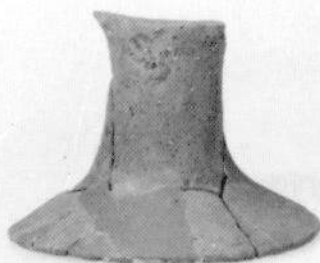
6



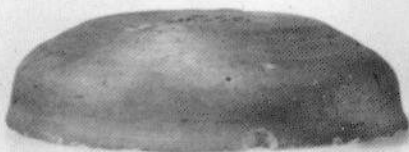
塚元1号墳出土遺物2



J1-1



J4-6



J4-7



J4-11



J4-8



J4-12



J4-9



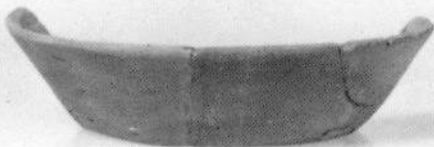
J4-13



J4-10



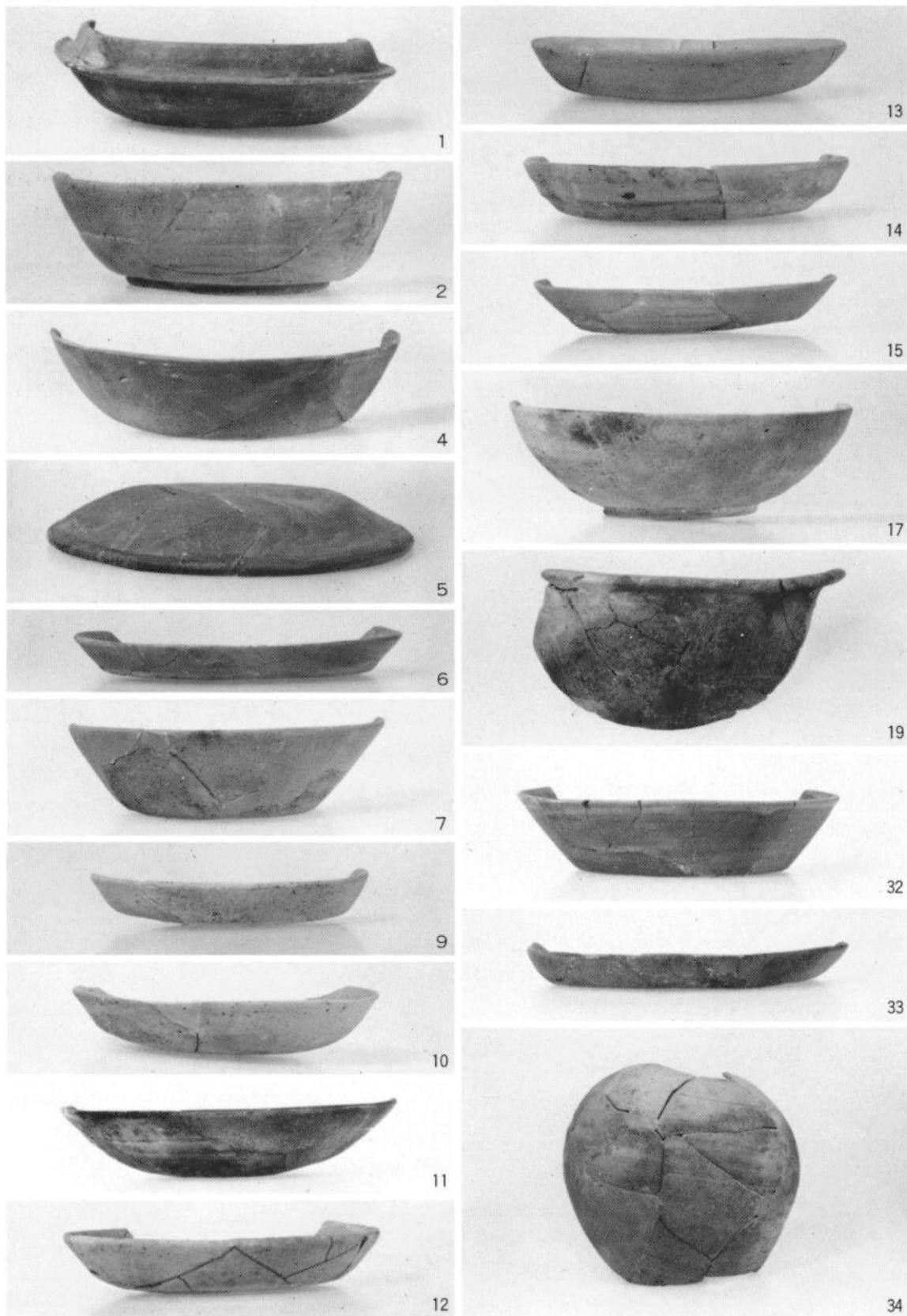
J4-14



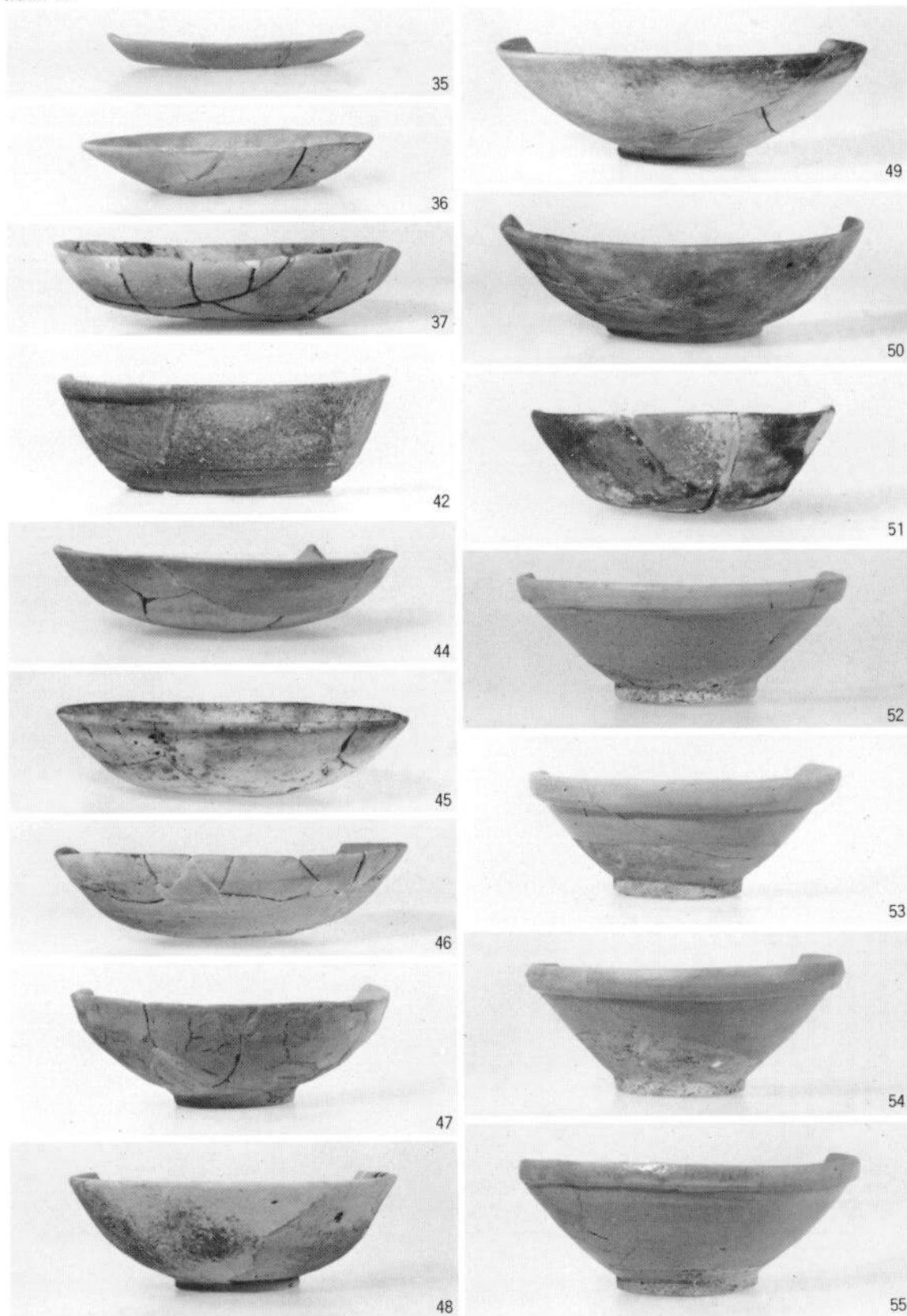
J4-17

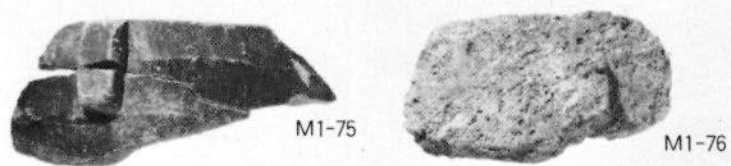
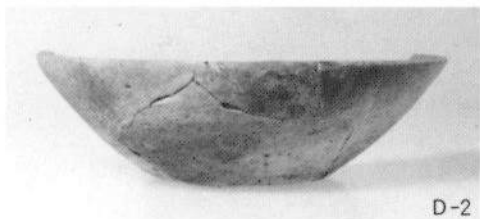
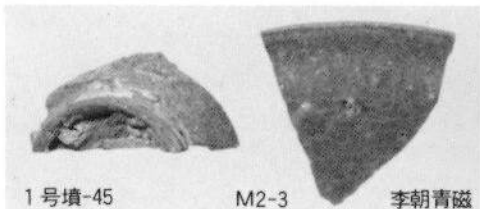
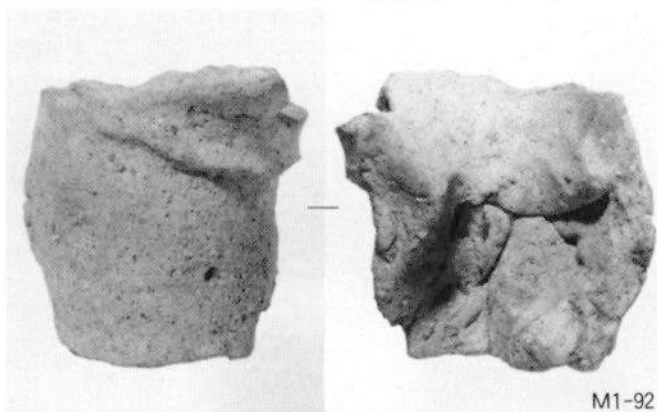
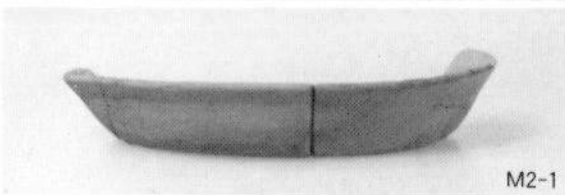
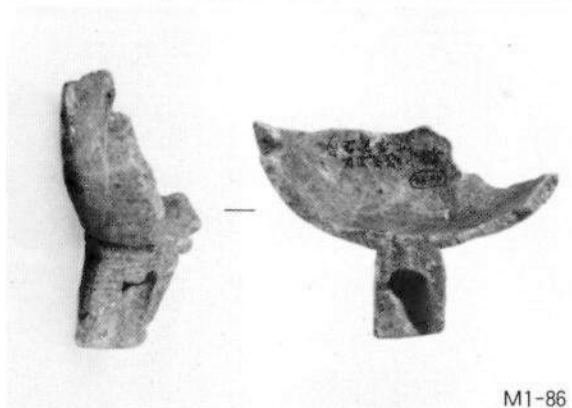
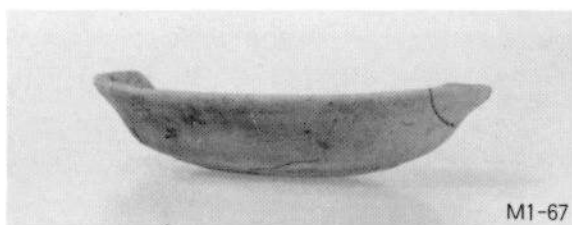


J4-18

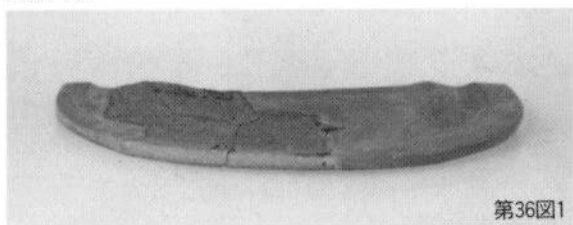


1号溝出土遺物1

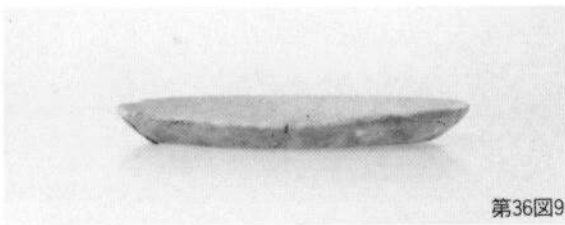




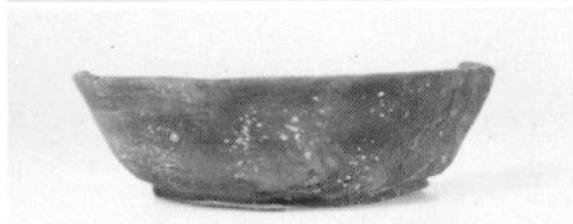
1号溝出土遺物3、2号溝・2号土塚墓出土遺物、李朝青磁、滑石製品



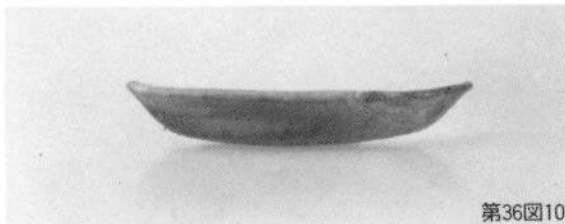
第36図1



第36図9



第36図3



第36図10



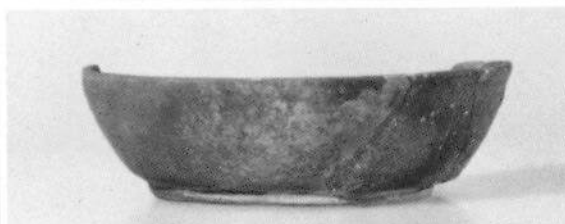
第36図4



第37図1



第36図6



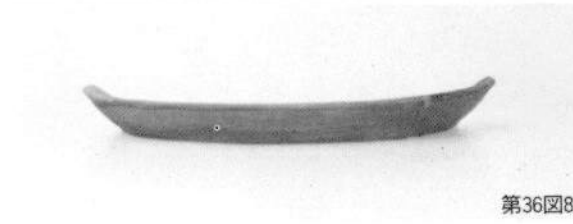
第37図2



第36図7



第37図3



第36図8



第37図5

柱穴・包含層その他の出土遺物

第 4 章

トヲノ尾遺跡の調査

目 次

- 第1節 はじめに
- 第2節 弥生時代の遺構と遺物
- 第3節 歴史時代の遺構と遺物
- 第4節 おわりに

第4章 トヲノ尾遺跡の調査

第1節 はじめに

トヲノ尾遺跡は、粕屋郡篠栗町大字津波黒に所在する。三郡山地から派生した丘陵端部（標高50m前後）から傾斜面上に立地する。

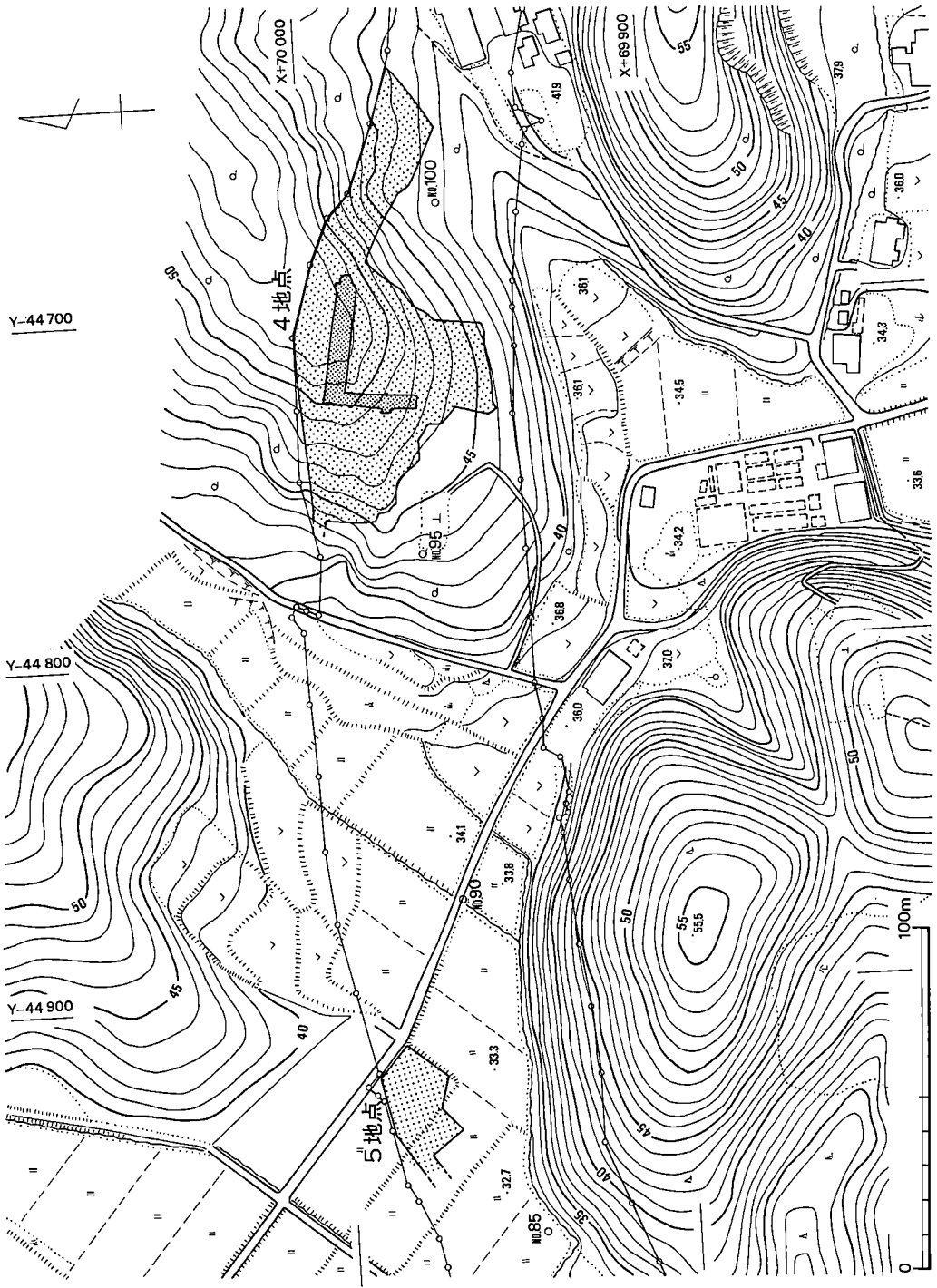
調査は、昭和60年8月19日から9月7日の予備調査（調査面積360㎡）と同年12月2日から昭和61年3月19日の本調査（調査面積6,400㎡）の2回に分けて実施された（第118図）。

発掘の結果、弥生時代の集落跡（住居跡、土器溜り、溝、土壇、ピット）と歴史時代の墓地（火葬墓、火葬関連施設）を検出した（付図3）。

また、併行して和田A遺跡（粕屋郡篠栗町大字和田所在）の調査が、昭和60年9月9日から9月14日まで実施された。この付近は、田畑のあぜなどに遺物の散布がみられたが、大正から昭和初期にかけての大規模な土地改良で、削平を著しく受けており、発掘の結果、溝状遺構、土壇、ピットはあったものの、顕著な遺構、遺物の検出はなかった。ここに、遺構配置図のみ添付する（付図4）。



トヲノ尾遺跡 弥生時代住居跡近景



第118図 トヲノ尾遺跡・和田遺跡周辺地形図 (1/2,000) [4地点のトレンチは1980年夏調査]

第2節 弥生時代の遺構と遺物

1. はじめに

住居跡（以下、住居と略す）は、1～15号住居までを検出したが、この中で2・3・6～8・10号住居ではA（新）・B（中）あるいはA・B・C（古）期の柱穴・中央土壇・壁溝・壁などの一部を確認した。

したがって、以下では1，2A・B，3A・B，4・5，6A・B，7A・B，8A～C，10A～C号住居の17軒について説明する。

また、上記の住居群のなかで、2・3・5号住居では壁堤・壁堤外溝・周堤なども確認され、これら諸遺構と関連の深い大規模な1・2号溝状遺構を確認した。

ところで、住居内外の各種柱穴・中央土壇・壁溝などについては、第119図の古墳時代も含む方形住居模式図や第143図の1号円形住居模式図・第144図の4号方形住居模式図に示す統一名称・番号を使用して以下の説明をするので留意されたい。

なお、弥生時代と古墳時代の方形住居では、中央土壇・壁土壇・カマドなど施設の有無や用途の変化が認められ、古墳時代については福岡県浮羽郡吉井町所在の塚堂遺跡で若干言及したことがあるので参照されたい。

^{〔註1〕}
住居説明の統一名称・番号（第119・143・144図）

主柱穴 P11から付す。4個の主柱穴を配すと考えられるときで、P13の位置で柱穴が確認されなかった例でも、P11～P14を使用し、計測表にP13を欠番と明記する。

なお、P11～14の位置で柱穴が検出されず、P21・22（後述）の位置でそれぞれ1個が確認された例では、P21・22の番号を使用せずに、P11・12を付して、主柱穴2個とする。

主軸柱穴 P21から付す。主柱穴間のほぼ中央に位置する柱穴。

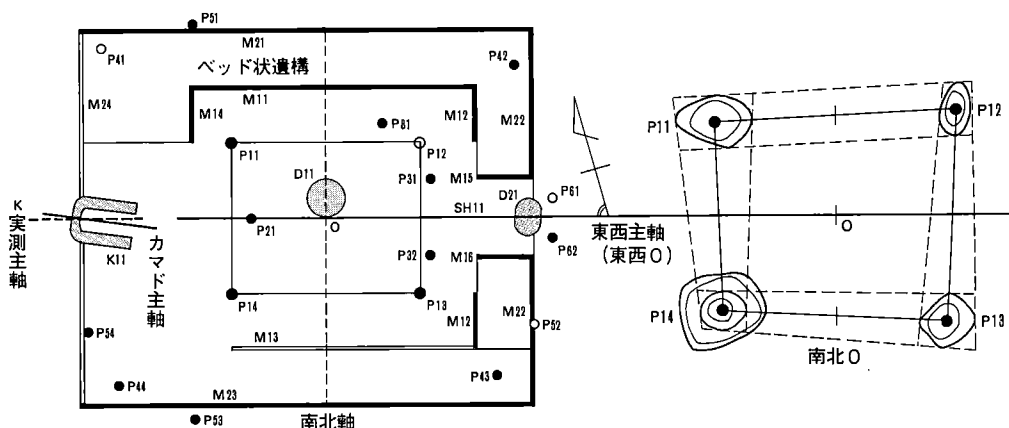
なお、P21側の主柱穴列とは反対の主柱穴列側に、当初からP22を設けない例も多く、計測表にはP22を欠番と明記しない。

主軸間柱穴 P31から付す。主柱穴からやや離れ、P31～32間の方がP11～14・P12～13間よりも小さい柱穴。

なお、主柱穴から大きく離れ、あるいはP11～14・P12～13間よりも柱穴間距離が大きい例は、他の機能を考えて、後述の環柱穴などとする。

対角柱穴 P41から付す。主柱穴から離れ、主柱穴あるいは壁隅を対角線状に結んだ線上・近くに位置する柱穴。

なお、P41・43などの位置で確認されなかった例でもP41～44（P41～48の例もある）を使用し、計測表にはP41・44などを欠番と明記する。



第119図 住居跡模式図と柱穴間距離計測例図

表6 住居跡模式計測表

主軸方向	欠番	南北主柱間	東西主柱間	主軸間柱・主柱間	施設柱間	主軸柱間	番号	短径×長径	深さ
東西 N-75°-W	P ₁₂ ・P ₄₁	P ₁₁ -P ₁₄	P ₁₁ -P ₁₂	P ₃₁ -P ₁₂	P ₆₁ -東西O	P ₂₁ -南北O	P ₁₁		
	P ₆₂ ・M ₁₃		?	?	?		P ₁₂		
		P ₁₂ -P ₁₃	P ₁₄ -P ₁₃	P ₃₂ -P ₁₃	P ₆₂ -東西O	主軸間柱間	P ₁₃		
		?				P ₃₁ -P ₃₂	P ₁₄		
平均							平均		

壁柱穴 P51から付す。住居壁に位置する柱穴。壁に近い住居内・外の柱穴も含める。

施設柱穴 P61から付す。住居内・外に位置し、入口などに配された柱穴。

環柱穴 P71から付す。主柱穴列外に環状に配された柱穴。

なお、P73・74などの位置で確認されなかった例では、計測表にP73・74などを欠番と明記する。

補柱穴 P81から付す。主柱穴列に位置する柱穴。

その他の柱穴 P91から付す。上記以外の柱穴。

住居中心O P11-14・P12-13間および、P11-12・14-11間の中軸の交点。主柱穴2個例では、P11-12間の中心。

主軸O P11-14・P12-13間の中軸。主柱穴2個例では、P11-12を通る軸。

中央土塚 D11から付す。住居中央部付近に位置する土塚。

壁土塚 D21から付す。住居壁に位置する土塚。

床溝 M11から、あるいはM31から付す。M11からのものは、各主柱穴列・各壁とほぼ平行することが多く、壁から大きく離れ、床面の使用機能を、中央部と周辺部に区画する溝。所謂、ベッド状遺構に伴い、その外縁に配され、後述の壁溝や方形(半円形)区画外縁に沿うM15などに連続する例も多い。

また、M15からのものは、2条が対の例が多く、互いに平行・直行方向に配され、後述の方形（半円形）区画外沿に沿う溝で、張床の除去後に確認できる例も多く、張床の上面で検出できなかった例もあると考えられ、1条のみしか検出できなかった例でもM15・16を使用し、計測表に1条を欠番と明記する。

壁溝 M21から付す。M21～24は、壁に沿う溝で、所謂、周溝として各壁間が連続する例も多いが、壁の一部のみに配されることもある。

方形（半円形）区画 11から付す。区画形状が方形を呈する例ではSH、半円形を呈する例ではCHを、番号の前に加える。

M11～20で他の床面と区別される例が多く、壁に接した区画で、その中央部あるいは近接して、D21を設ける例が多い。

なお、所謂、ベッド状遺構が、壁の中途までしか設けられない例では、この設けられない低い床面も、中央部の低い床面とは区別し、この区画に加える。

また、この区画部のみを別途の張床とする例や、区画部を地山削り残しとする例（1号住居）などもある。

張床 住居床面のほぼ平坦な地山削平面上に除湿や化粧などのために張る床。

盛床 丘陵斜面の住居で、地山削平のみではほぼ平坦な床面全体の確保が困難なため、傾斜したままの地山削平面を埋めて、ほぼ平坦に盛る床。

また、古期の住居床面を埋めて新期の住居平坦床面を確保するための、古期住居内に盛る床。

2. 遺 構

1号住居跡（図版67—1、第120・143図、表7・8）

第1丘陵上位付近の標高52.575m（北壁遺存最高標高）で検出し、南端部床面地山標高は51.90mで、この間の現況傾斜角は6°を測る東緩傾斜面に設けられた住居である。

南北軸Oでの地山床面の比高差はわずかで、盛床は施す必要はなく、若干の張床のみでよかつたものと考えられる。

南壁側は流失し、P14の南側は後世の攪乱を受けており、P13の南側の溝状遺構も住居に伴うものではなかった。

主柱穴配置は、P11-14・P12-13の南北主柱間（平均2.79m）が、P11-12・P14-13の東西主柱間（同3.30m）よりも約50cm小さいが、後者は床面半径Rの3.30mに一致する。

上記のことは、主軸柱P21・22との関係を重視して、南北主柱間を小さくしたもので、このことは、2号住居で著しい。

2号住居では、P21が主柱穴を除くどの柱穴よりも主柱穴列に近接し、P22にあってはP12

- 13柱列に一致し、4 主柱穴と 2 主軸柱穴との関係が1号柱より、より一層安定し、大きい床面積の確保を可能なものとしている。

以上のことから、P 71・72は主軸柱ではなく、P 21・22を主軸柱とすべきであろう。

主軸柱穴 P 21・22は、上述のように、東・西側の環状柱列円上に整然と配されている。

主軸間柱穴は、東側に配され、西側では検出されていないが、西側では P 81・82を検出してある。このことから、西側の P 31・32は当初から配されず、西側の主軸間柱の不足を補柱穴 P 81・82で補い、西からの入口部柱数を意識的に減じたものと言えよう。

壁柱穴 P 51は、P 71 - 12列の北側で、環柱穴の項で後述する床削り残し部分で検出した浅い柱穴様ピットである。

施設柱穴 P 63は、東西主軸の西溝 M 24内で検出し、この部分の壁のみが、断面図に示すように段状を呈し、付近に P 62が検出された。

以上のことと、主軸間柱穴の項で既述したことから、P 63を壁柱穴とせずに入口の施設柱穴とし、P 61を欠番とした。

環柱穴 P 71・72は、南北軸 O 下で検出された。

中央土壇 D 11は、住居中心 O に配され、埋土は炭・焼土の混土層で、その床面で柱穴様ピットが 2 個 (P 91・92) 検出された。

半円形区画 C H 11は、南北軸 O と主柱穴列 P 12—13間の北壁に配され、南北方向の断面部では遺存状態が悪いが、東西方向の断面図見透しで示すように、地山床面より約 0.10m ほど高く地山を削り残した部分を確認した。

区画 C H 11の北壁には、壁溝 M 21を当初から設けていない。

P 12北側で変形するが、当初は南北軸 O 下の M 21東端～P 71～P 12～主柱穴 P 12 - 13柱列方向の M 21西端にかけて、一部盛土を施して平坦な区画 C H を配したものと考えられる。

以上のように、各柱穴・土壇などが整然と配され、床面半径 R は、環状柱列半径 $r = 2.20\text{m}$ の $\frac{2}{3}$ で復原した $R = 3.30\text{m}$ が近いが、これらのことについては、第 4 章 第 4 節で後述する。

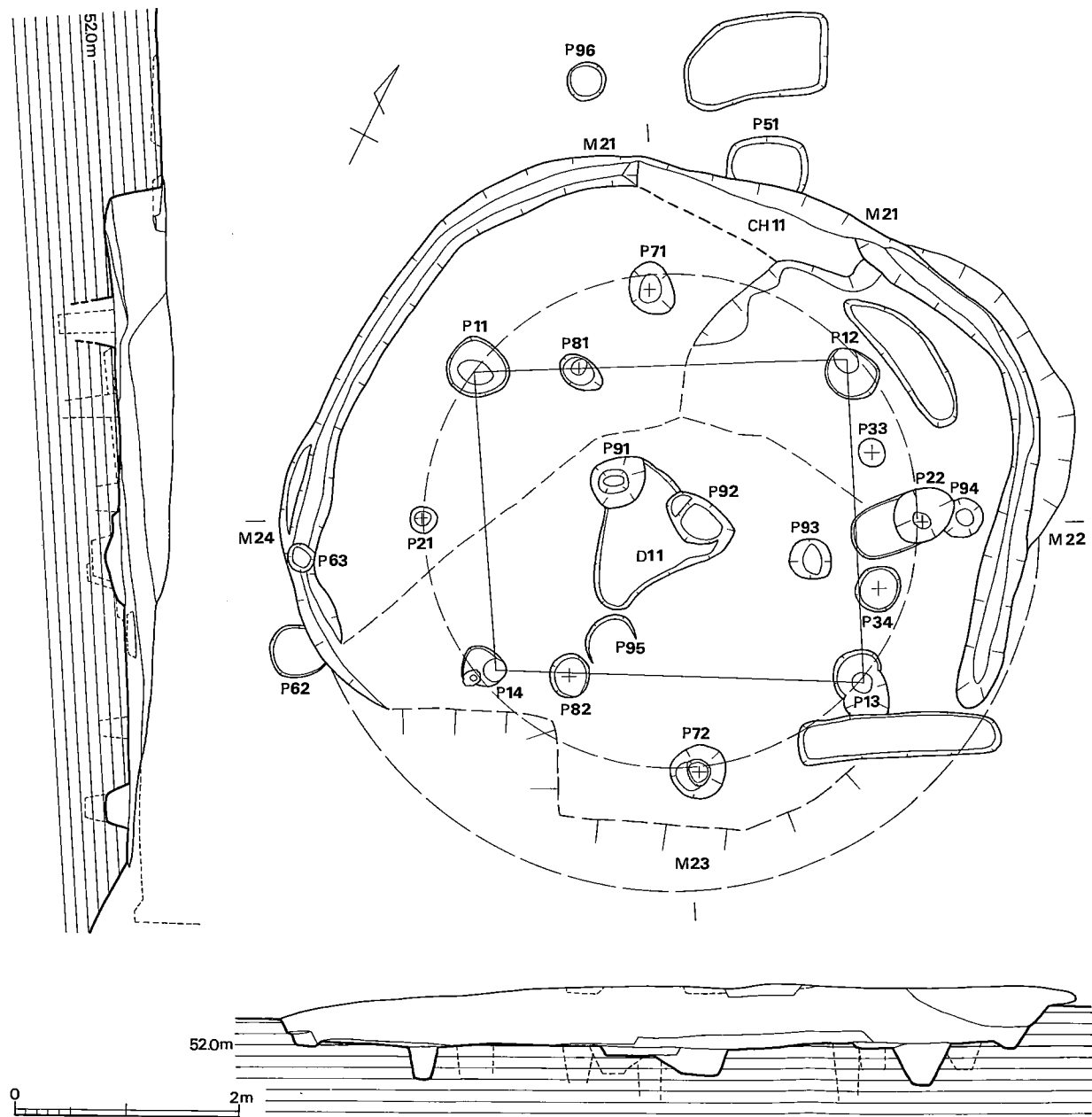
2号住居跡 (図版 67—2, 68—71—1, 付図 5, 表 9・10)

第 1 丘陵中位付近の標高 49.20m (北壁堤地山面遺存最高標高) で検出し、南端部床面地山標高は 47.60m で、この間の現況傾斜角は 9° を測る南緩傾斜面に設けられた住居である。

南北主軸での地山床面の現況比高差は約 0.5m を測り、盛床は住居南半部壁と共に流失したものと考えられる。

北壁部では、壁堤と壁堤外溝が遺存し、壁堤外溝の北側では、丘陵最上位付近から設けられた 1 号溝状遺構を確認した。

1号溝状遺構 (図版 67—2, 68—1, 付図 3)



第120图 1号住居跡実測図 (1/60)

1号溝状遺構（以下、1号溝と略す）は、丘陵最上位付近から中位の2号住居にかけて検出し、1・2・8号火葬墓に切られる。

最上位付近では、標高52.60mまで検出したが、更に標高の高い発掘区外へと続く。

1号溝は、標高51.20m付近で北側の1号北溝と南側の1号南溝に分岐した状態で検出され、1号北溝は標高50.50～49.80m間を除いて2号住居北側の標高約48.60mまで遺存し、1号南溝は標高約49.50mで同住居北側の壁堤外溝と合流する。

1号溝の全長は、分岐前と分岐後の1号北溝を加えると約38mを測る。

分岐前の1号溝は、溝幅が標高52.60m付近で2.20m・同52.20m付近で0.30m・同51.40m前後で2.40mを測るが、深さは0.05m前後しかなく、溝幅0.30m前後部は溝床面での流路の残存部と考えられ、当初の溝幅は2.50m前後はあったものか。

1号北溝は、溝幅が分岐部～標高50.50m間で0.9～1.10m、標高49.80～48.60m間で1.70～2.00m前後を測るが、後者間の流路部幅は0.9～1.10mで前者幅とほぼ同じで、前者も流路遺存部と思われる。

1号南溝は、溝幅が0.20～0.80mで、壁堤外溝東半部に近い1号南溝幅は0.20m前後を測り、壁堤外溝西半部溝幅は約0.50mを測るなど、1号北溝に比べて溝幅が狭い。

また、1号北溝からの1号南溝・壁堤外溝東半部・同西半部間は約1.5～2.0mを測り、1号北溝のカーブと1号南溝～壁堤外溝東半部～同西半部間全体のカーブは類似する。

さらに、分岐前の1号溝はほぼ直線的で、その延長方向は、ほぼ1号南溝～壁堤外東半部と一致し、住居北壁堤にぶつかる。

以上のことなどから、1号溝は2号住居に伴うもので、土層観察でも後述するように、分岐した状態で検出された1号北・南溝は、1号北溝に南接して沿う土堤が設けられ、1号溝の下流部が1号北溝であり、1号北溝のカーブは、1号溝上流からの流水および住居北側からの流水が直接壁堤を浸食することのないように、これら流水を迂回させる意図のもとに造作されたものと判断される。

また、上記のことから、1号南溝は1号溝とは本来連続するものではなく、1号北溝南沿の土堤が決壊したため、1号溝上流からの雨水が直線的に1号南溝方向に流れたために、1号溝から分岐した状態で検出されたものと判断される。

なお、前述のように連続したのは、1号溝遺棄後の土堤の流失によることも考えられるが、機能中の多量の流水により土堤が決壊したこともあったであろう。

そして、上記の土堤の決壊による住居内への流入、あるいは土堤からの漏水や土堤以南の雨水を集水するために、住居北壁壁堤外溝の東半部を深く掘り、この東半部壁堤外溝でオーバーフローした雨水を西半部壁堤外溝で排水したものと考えられ、周堤はこのオーバーフロー面よりも更に高く設けたものと判断される。

なお、この1号溝は直接的には2号住居に伴うものであるが、2号住居と併存あるいは後出した5～10号住居群でも、住居部への流量を減らすために、使用あるいは再利用されたものと考えられる。

土層観察

付図5に示した2種の土層断面図のなかで、北側の1号北溝～南側の中央土壇D11・12間の土層図は、図版69に示すように、試掘時に作成したもので、他の土層図は本調査時に作成したものである。

はじめに、試掘時作成の土層図から説明する。

既述の1号南溝内の流入土4 a層と壁堤外溝内最上層の4 b層は、共に茶褐色粘質土で、4 b層は1号南溝南沿の土堤流失後の推積層である。

また、各7・9・10 a層北壁の傾きや11 a層の検出状態から、5～10 a層は壁堤A（新）と1号南溝土壇A（新）間の壁堤外溝A（新）内流入土と判断され、後述する中央土壇D11（新）の所在などから、以上の諸遺構は2号A（新）住居に伴うものと考えられる。

同様に、14 a層の検出状態や後述する中央土壇D12（古）内の17層埋土の検出から、14 a層は壁堤B（古）遺存部、11 a層下面は壁堤外溝B（古）の遺存部で、D12（古）と共に、2号B（古）住居に伴うものと判断される。

なお、14 a層の壁堤B（古）から11 a層の壁堤A（新）への移行は、単なる壁堤B（古）の補修という小規模なものではなく、2号B（古）住居から2号A（新）住居への再築に伴う壁堤A（新）～壁堤外A（新）溝～1号南溝A（新）土壇など一連の大規模なものであったと考えられる。

そして、この2号A（新）住居への再築は、住居壁外の流入水を防ぐ壁堤～1号溝の諸施設を損壊させるだけでなく、2号B（古）住居をも倒壊させるほどの大水害を受けての再出発であったものと思われる。

本調査時作成の土層図でも、11 a層に焼土・炭片などは検出されておらず、2号B（古）住居の倒壊が、焼失によるものではない大水害によるものであったことを示しているものと思われる。

主柱穴配置は、P11—14・P12—13の東西主柱間（平均3.97m）が、P11—12・P14—13の南北主柱間（同4.16m）よりも約20cm小さいが、後者は床面半径R=4.35mにほぼ等しい。

また、P12のみが環状柱列に一致しないが、このことで、P11—12の南北主柱列以西の床面積が他の主柱列外床面積よりも大きく確保されており、中央土壇D11の南北主軸以西への配置と関係あるものか。

主軸柱穴配置は、主軸柱間（平均2.26m）が、1号住居の主軸柱間（同2.22m）と一致するに等しく、また、P21も同様に環状柱列上に配されているが、P22のみP12—13の東西主柱列に設けられている。

このことは、後述するように1号住居よりも主柱間内・環状柱列内・床面の三者の面積はいずれも拡大されているが、主軸柱間の拡大には大きい制約があったことが指摘できよう。

上記のことは、また、4主柱穴配置の住居における上部構造は、主柱ではなく、主軸柱の配置で決定されたものであり、主軸柱（棟持柱）の安定で、環状柱穴P73・74を主柱穴列P12—13・P11—12方向に、また、同P75をも主軸柱穴列P21—22方向に、それぞれ配することで、主軸（棟材）の安定を最終的に確保し、三者の面積を拡大し得たものと言えよう。

施設柱穴は、P61を流失したものとして欠番とした。

環状柱穴は、既述のP73～75の他に、P71・72・76・77が配され、P71—72・P76—77間のみ他の測点Bよりも一段と小さいが、このことは、主軸柱穴の項で既述したように、P73・74・75をそれぞれ、P12—13・P11—12・P21—22柱穴列方向に配したからに他ならない。

その他の柱穴は、P97がP14よりもまた、P98がP21よりも共に古いことを確認し、断面図に示すように中央土壇D12もD11よりも古いことから、共に改築前のものか。

なお、P96はP12—13主柱穴列方向に位置し、P77—76柱列方向にも位置するが、P92も同様にP73—72柱列方向に位置することから、P96は壁柱穴P51とはしなかった。西側、あるいは東側の補柱穴とすべきか。

以上のように、各柱穴・土壇などは整然と配されているが、環状柱列全体は円形を呈さず、長楕円形状である。

以下では、このことについて説明する。

P12・22を除く環状柱列11本には、互いに計11本の桁材が組まれ、この桁材には更に垂木がそれぞれ数本ずつ放射状に架せられたと考えられ、1号住居のように環状柱列が円形状に配されている場合、環状柱及び桁中央に位置する垂木の平面プランでの先端方向は、住居中心Oへ集中し、床面プラン（壁下端プラン）も円形状を呈する。

以上のことから、各垂木材のなかで、特に環状柱列形状の中心に放射状に架せられたと考えられる垂木である環状柱穴上の垂木方向は以下のように求められる。

O₂ ……P76垂木先端方向は、P77—P13の直角二等分線方向である。同様に、P13例ではP76—P75、P75例ではP13—74の各直角二等分線方向である。この、3本の各二等分線延長で得た三角形の中心がO₂である。

O₃ ……P74垂木先端方向は、P75—73の直角二等分線方向である。同様に、P73例ではP74—P72、P72例ではP74—71の各直角二等分線方向である。この3本の各2等分線延長で得た三角形の中心がO₃である。

O₄ ……P71垂木先端方向は、P72—P11の直角二等分線方向である。同様に、P11・21・14・77例を延長し、5本の各二等分線延長で得た三角形の中心がO₄である。

このようにして求められた、各O₂・O₃・O₄と各環状柱穴間の距離の平均が、測点O₂ = r₁ =

3.70m・同 $O_3 = r_2 = 2.70m$ ・同 $O_4 = r_4 = 3.36m$ である。

また、それぞれの環状柱穴列部の床面プランが、 $R_2 = \frac{4}{3}r_2 = 4.93m$ ・ $R_3 = \frac{4}{3}r_3 = 3.60m$ ・ $R_4 = \frac{4}{3}r_4 = 4.48m$ である。

以上のように、各柱穴・土壇・壁溝などは整然と配され、環状柱穴列形状は、 $O_2 \cdot O_3 \cdot O_4$ を中心としてそれぞれ $r_2 \cdot r_3 \cdot r_4$ で得た合成形状に、また、床面形状も同様にそれぞれを $\frac{4}{3}$ した $R_2 \cdot R_3 \cdot R_4$ で得た合成形状で復原される。

なお、2号住居の環状柱穴列半径平均 $r = 3.26m$ は、1号住居の床面半径 $R = 3.30m$ とほとんど一致し、2号住居の床面平均半径 $R = 4.35m$ は、1号住居の環状柱穴列半径 $r = 2.20m$ の2倍にほぼ一致するに等しい。

3号住居跡 (図版71—2, 72~74, 付図6, 表11・12)

第1丘陵中位付近の標高48.10m (東壁堤外地山変換線遺存最高標高)で検出し、西端部床面地山標高は46.20mで、この間の現況傾斜角は 10° を測る西緩傾斜面に設けられた住居である。

東西軸 O での地山床面の現況比高差は約0.6mを測り、張床だけでなく盛床も施したが、住居西半部壁と共に流失したものと考えられる。

住居の東側から南側にかけて、丘陵最上位付近から設けられた2号溝状遺構を確認した。

また、東壁部では、土層観察で後述するように、壁堤と壁堤外溝及び周堤と周堤外構の一部が遺存していた。

2号溝状遺構 (図版66—2, 72—1, 73—2, 付図3)

2号溝状遺構 (以下、2号溝と略す)は、丘陵最上位付近から中位の14号住居にかけて検出した。

最上位付近では、標高52.30mまで遺存したが、既述の1号溝同様に更に高位の、第1丘陵の西方向と南方向の分水部から設けられていたものと考えられる。

2号溝は、標高48.90m付近まで連続し、標高48.50m付近では2号北溝と2号南溝として2条を検出した。

ところで、標高48.90mまでの2号溝は、同51.50m部と同50.00m部の2箇所で屈曲し、また、同50.00~48.90m間の2号溝方向と2号北・南溝2条の方向も異なり、2号北溝と2号南溝は共に同47.80m部で屈曲する。

また、3号住居壁溝と2号住居壁溝との最短距離は約21mで、その中間部で検出されたのが2号南溝で、標高51.50mまでの1号までの1号溝の延長方向の同50.70~49.90m間でも溝状遺構を検出した。

以上のことや、2・3号住居が共に、大形円形住居で・丘陵中位に設けられていることなどから、1・2号溝は両住居共有の集水溝として大規模な計画のもとに造営されたものと判断さ

れる。

そして、2号南溝は2号溝と一連の溝であり、既述した多くの屈曲は、両住居への雨水の流入を共に防ぐための屈曲であり、特に、標高51.50以下の溝南沿の土堤は2号住居を考慮して、また、同50.50m以下の溝北沿部の土堤は3号住居を考慮して、共に堅固なものが造営されたものと判断される。

なお、既述の標高50.70～49.90m間の溝状遺構は、2号溝南沿の土堤決壊による雨水の流路で、2号北溝は、2号南溝の屈曲では南沿の土堤が決壊したため、新しく造営されたものと考えられる。

また、付図3にも示した3号住居東溝状遺構は、後述する住居中心O～周堤外溝間距離よりも1m以上離れた位置にあることなどから、周堤外溝ではなく、1号溝北沿の土堤流失後のなどの流路と考えられる。

主柱穴配置は、P11—14間(5.88m)が他の主柱間(平均4.61m)よりも著しく大きく、後者は床面半径 $R=4.63\text{m}$ にほぼ一致する。

主軸柱穴配置は、主軸柱間(平均2.72m)が、2号住居の主軸柱間(同2.26m)よりも約50cmも大きい。

また、P21をP11—14の東西主柱列に配し、P22を環状柱列上に配すが、2号住居ではP21・22の配置が逆となっている。

なお、主軸柱間(平均2.72m)は、2号住居の主軸柱間(同2.26m)より約45cmも大きい。南北主柱間(平均4.54m)と主軸間($2.72 \times 2 = 4.54\text{m}$)は一致し、1号住居の主軸間($2.22 \times 2 = 4.44\text{m}$)とはほぼ等しく、2号住居の主軸間($2.26 \times 2 = 4.52\text{m}$)とはほぼ一致するに等しい。

以上のことから、主軸柱の配置は、1号住居の主軸間を基本原理としつつ、1号住居から2号住居の配置の変化で床面積の拡大を計ったことを発展させて、更に、2号住居のように主軸柱穴の1個を環状柱列上に配することで、より一層の面積の拡大を計ったものであることが指摘されよう。

施設柱穴は、主軸柱P21が2号住居のように環状柱列上に配さずに、P11—14の主柱列上に配されていることを、南側からの入口部の空間を確保するための配慮であると考え、P62を入口施設柱とし、P61を流失したものとした。

環柱穴は、P71～76の6個が配され、P71—72・P75—76の柱穴列は、南北主軸と直交し、P73とP74南側柱穴様ピット列が同様に直交するので、このP74南側柱穴様ピットを環状柱穴P74とすべきか。

なお、P71—72間は3.28mで、P22—O₂間の3.30mとほとんど一致し、1号住居の床面半径が3.30mである。

中央土壇D11は、南北主軸下に配され、その中心は、 O_1 ではなく、環状柱列 O_2 と一致し、その長軸は東西 O と直交する。

また、D12の埋土はD11のような焼土・炭を含んだものではなく、住居埋土に似たものであった。東西軸 O_2 下に配されている。

以上のように、各柱穴・土壇・溝などは整然と配され、環状柱列形状は O_1 を中心とせず、 O_2 を中心とした半径 $r=3.47\text{m}$ の円形状を呈し、床面形状もこの半径を \times した $R=4.63\text{m}$ に復原されるが、2号住居との平面プランの類似から、あるいは2号住居の $R=4.35$ で復原すべきか。

土層観察

付図6に示すように、住居中央部を横断する位置ではない住居北端の調査区境界壁を利用しての土層観察で、必ずしも良好な土層図とは言えない面もあるが、付図3に示すように、断面部は前述2号溝北部のわずかな谷部に相当し、この谷部流水路部分であるため、既述2号住居以上の成果を得た。

地山は、ほぼ住居床面部が軟質であるが粘質がほとんどない白色母岩6b層で、この母岩層は壁溝以東ではやや標高を下げて傾斜し、壁以東10mにわたる赤褐色粘質土6a層（薄い白色母岩脈を含む）下に続く。

5c層は、上記白色母岩をほぼ平坦にした床面上の張床で、5a・b層と同じ土質であるが、堅く踏み固められていた。

5b層は、周堤で、周堤以東約1mから既述の赤褐色粘質土地山が掘り下げられ、周堤外構を設けている。

また、5a層は東壁上面で認められ、5a層東側には木根による攪乱もあるが、5a～b層間では3b層を検出し、この3b層は3c層と同質なことなどから、5a層が東壁上面に築かれた壁堤の遺存部、3b層が東壁外溝の流入土と判断した。

なお、壁堤・周堤の盛土下面では旧表土は検出されておらず、断面部以南～住居南側まで続けて検出した壁から0.95～2.40m離れた地山の傾斜変換線は、壁堤～周堤外溝間の地山整形範囲をほぼ示したものと考えられる。

上記のことは、1・7～10号住居壁外で検出した変換線でも同様であり、これら住居群にも壁堤・周堤などの施設が施こされていたことの証左となろう。

最後に、この3号住居による壁堤と周堤の用語上の区別も含めた識別・確認の意義は大きいものと思われる。

また、このトラノ尾遺跡同様に丘陵傾斜面に所在する住居では、1・2号溝のように住居から離れた溝状遺構の確認、住居壁外のわずかな地山の傾斜変換線の検出などに留意すべきであると考えられる。

なお、壁堤は住居を一周して屋根で覆われ、周堤は3号住居例では住居東半部のように、標高高位の斜面上半部に併設されたもので、平坦地所在の住居では壁堤のみで周堤は併設されなかったものと思われる。

4号住居跡（図版75—1，第121・144図，表13・14）

第1丘陵中位付近の標高46.56m（北壁遺存最高標高）で検出し、北壁以北の現況傾斜角は9°を測る西緩傾斜面に設けられた住居である。

南北軸での地山床面の現況比高差は約0.1mを測り、盛床と言うより張床に近いもので、張床は住居北半部壁と共に流失したものと考えられる。

壁溝M22の東側で、M21北東隅部に続くM22'を検出した。

主柱穴配置は、P12・14が欠番で、P11は柱穴底プランの実測をしていない。

なお、各主柱間距離は、後述する補柱穴P81・82とP11・13を確認したことから、南北主柱間が2.72m・東西主柱間が4.18mと復原できる。

施設柱穴P61・62は、P11—12柱列よりも東西主軸Oに近い床中央やや北寄りに配されていることや、P81・82が主軸柱P21・22ではないことなどから、主軸間柱穴P31・32とはしなかった。

補軸柱穴P81・82は、東西主柱列上に整然と配されている。

ところで、以上の復原配置を採り、東西主柱間 $4.18\text{m} \times \frac{1}{6} \div 0.70\text{m}$ を仮数cとするとき、東西主軸OからP11—12柱列間 $2.72\text{m} \times \frac{1}{2} = 1.36\text{m}$ は仮数 $c \times 2 = 1.40\text{m}$ とほぼ一致し、同軸から北壁までは仮数cの3倍となり、南北主軸Oから東・西壁までは4倍となる。

また、M22'の曲線は、住居中心Oを中心とする仮数cの5倍を半径とする円上に位置する。

5号住居跡（図版75—2，82—1，付図7，表15・16）

第1丘陵下位付近の標高45.13m（北壁遺存最高標高）で検出し、南端部床面地山標高は44.50mで、この間の現況傾斜角は12°を測る南斜面に設けられた住居である。

南北軸O下での地山床面の現況比高差は約0.1mを測り、盛床と言うより張床に近いもので、張床は住居南半部壁と共に流失したものとも考えられるが、床南端部近くに相当する標高44.60m付近に6・7・10号住居跡群の地山変換線が確認できることから、これら住居跡群のいずれかの地山整形の際に削平されたものとも考えられる。

住居の遺存状態は良くないが、住居の西壁～北壁にかけての壁外で、壁堤外溝を検出した。

壁堤外溝は、標高46.20m～45.60m間で住居北東隅壁部方向に向きを変える東側溝、同46.20～44.30m間でほぼ住居北壁方向の北側溝、同45.10mから住居北西隅壁で向き変えてほぼ住居西壁方向に後述の6号A（新）住居北壁まで続く西側溝の3条を検出した。

上記3条のなかで、東側の壁堤外溝は、あるいは後述する7・10号住居に伴う周堤から離れた、既述の1・2号溝同様の溝状遺構の一部とも思われる。

北側の壁堤外構は、住居北壁との位置関係などから、5号住居に伴うものと考えられる。

西側の壁堤外溝も、同様に5号住居に伴うものと考えられるが、あるいは丘陵下位の6・10号住居の壁堤・周堤に伴う溝状遺構の一部の可能性も若干残る。

なお、住居北側の標高47.0～46.50m間で等高線とほぼ平行し、西側の壁堤外溝近くまで続いて確認された地山傾斜変換線から、既述の3号住居例同様に、斜面北側に周堤などが併設されていたものと考えられる。

主柱穴配置は、P12のみを検出しただけであるが、補柱穴P81の配置や北側主柱列—北壁間など4号住居との類似点が多い。

P11—12間は、補柱P81の検出から4.34mと復原され、4号住居の東西主柱間の復原値4.18mとほぼ等しいことから、南北主柱間も4号住居の南北主柱間2.72mとして、主柱穴配置を復原した。

上記の復原配置を採り、東西主柱間 $4.34\text{m} \times \frac{1}{6} \approx 0.72\text{m}$ を仮数とするとき、東西主軸OからP11—12柱列間 $2.72\text{m} \times \frac{1}{2} = 1.36\text{m}$ は仮数 $\times 2 = 1.44\text{m}$ とほぼ一致し、同軸から北壁までは基数の3倍となり、南北Oから西壁までは4倍、東壁までは5倍となる。

また、M24の曲線は、住居中心Oを中心とする仮数の3倍を半径とする円上に位置する。

6号住居跡 (図版75—2, 76—1, 付図7, 表17～20)

第1丘陵の最下位付近の標高44.00～43.00m付近の南急傾斜面で、多くの住居群と重複して検出された。

付図7の土層断面図から、6号A(新)住居は、6号B(古)・7・10号住居と切り合っており、7号→10号C(古)→10号B(中)→10号A(新)→6号B(古)→6号A(新)住居の順に新しくなることが確認され、このことは、各住居柱穴の新・旧関係などでも追認できた。

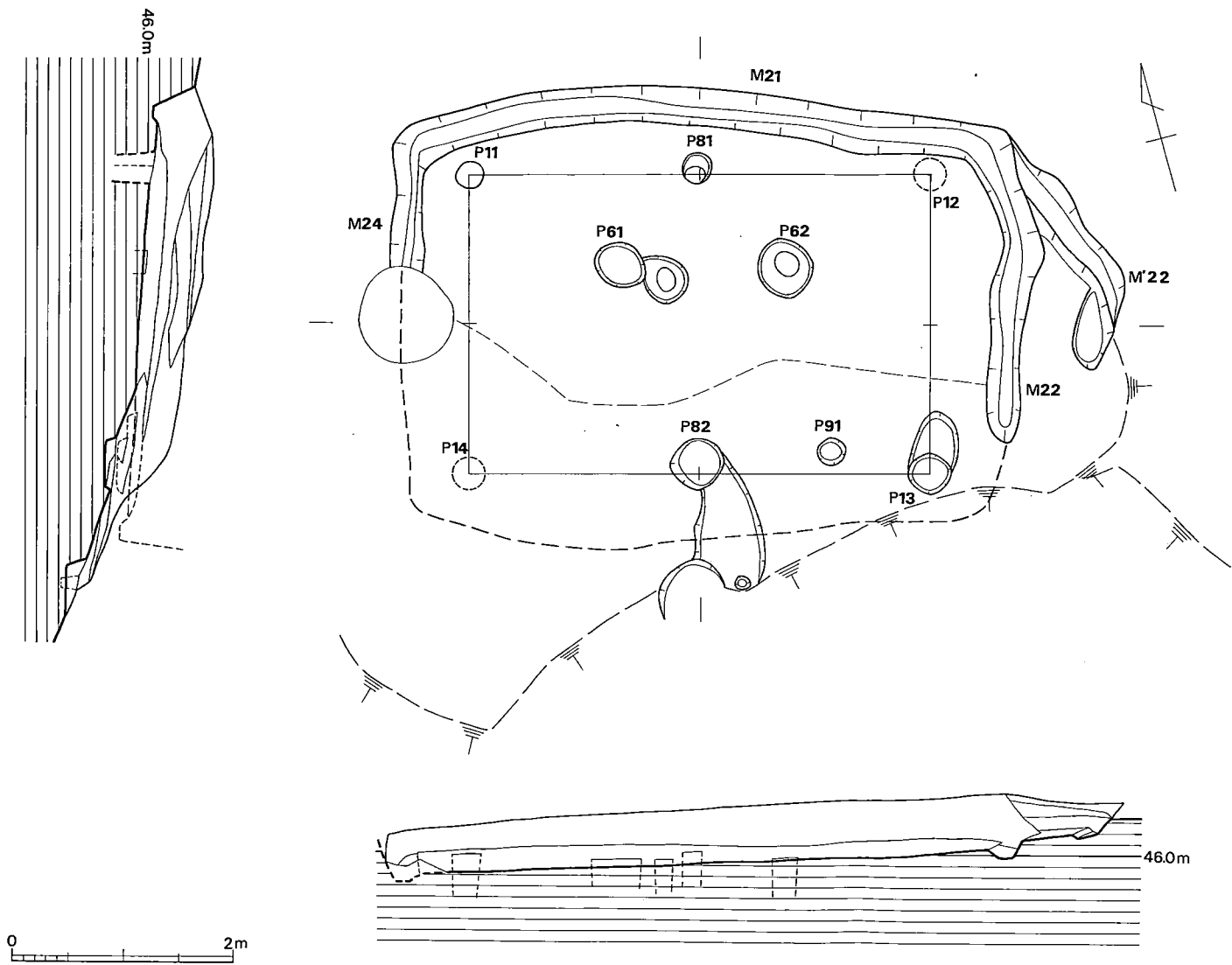
なお、付図7の平面図は、各住居完掘後の平面実測図を示したものである。

6号A(新)住居跡

標高約43.30m(北壁部)で検出し、南端部床面の調査区外の推定床面地山標高は約41.70mで、この間の現況推定傾斜角は 16° を測る。

南北軸下での地山床面の現況推定比高差は約0.8mを測り、住居南半部の厚い盛土部が流失している。

主柱穴配置は、P11—14間(3.51m)を除く他の主柱間平均が3.05mで、P11—14間のみが大きい。後述する壁柱穴や補柱穴などは東西主柱列線上に位置しており、整然とした主柱穴



第121图 4号住居跡实测图 (1/60)

配置であると言える。

主軸柱穴は、東側のP22のみを検出し、P12—13柱列下に配されている。

壁柱穴は、P11—12柱列線上でP51・52を検出し、P52は6号B（古）住居の補柱穴P81を切る。

また、P51—P11・P52—P12間の平均は1.53mで、既述のP11—14間を除く他の主柱間平均 $3.05\text{m} \times \frac{1}{2} \div 1.53\text{m}$ と一致する。

なお、北側のP51・52同様に、南側にもP53・54がP14—13柱列線上に配されたものか。

補柱穴は、P82を盛土部のP14—13柱列下で検出したが、地山部のP11—12柱列下では確認されなかった。当初から、盛土部の南側のみに補柱穴を配したものか。

その他の柱穴は、P11—12柱列線上でP91・92を検出し、南北主軸Oを中軸として、P11・12・51・52と共に整然と配されている。

また、P91—11・P92—P12間の平均は1.10mで、1号住居の東西主柱間平均 $3.30\text{m} \times \frac{1}{3}$ と一致する。

なお、壁溝M21～24は欠番としたが、断面図に示すように北壁下でM21を確認した。

また、北側のP91・92同様に、南側にもP93・94がP14—13柱列線上に配されたものか。

以上の復原配置を採り、東西主柱間 $3.08\text{m} \times \frac{1}{4} = 0.77\text{m}$ を基数とすると、東西主軸OからP11—12柱列間 $3.26\text{m} \times \frac{1}{2} = 1.63\text{m}$ は基数 $\times 2 = 1.54\text{m}$ とほぼ一致し、同軸から北壁までと南北OからP91・92間は基数の3.5倍となり、南北OからP51・52間は基数の4倍となる。

同様に、南北Oから東・西壁までは基数の5倍となるものか。

6号B（古）住居跡

6号A（新）住居から西半部を切られる。

主柱穴配置は、P13・14を検出していないが、南北主柱間は13号住居の東西主柱間4.22mに近いものか。

補柱穴は、地山部のP11—12柱列下で検出し、盛土部のP14—13柱列下では確認されなかったが、南北断面図2例に示すような傾斜から、盛土部のP14—13柱列下に配されたP82は、P13・14と共に流失したものと思われる。

中央土壇D11は、住居住心Oからやや北東部寄りで検出した焼土壇である。

壁溝は、M21西端～北東部～M22北半部にかけてを検出した。

以上の復原配置を採り、東西主柱間 $5.14\text{m} \times \frac{1}{6} = 0.85\text{m}$ を基数とすると、東西主軸OからP11—12柱列間 $4.22\text{m} \times \frac{1}{2.5} \div 1.69\text{m}$ は基数 $\times 2 = 1.70\text{m}$ とほとんど一致し、同軸から北壁と南北Oから東壁までは基数の4倍となり、南北Oから東・西主柱列間は3倍となる。

7号住居跡（図版77—2，78—1，付図7，表21・22）

第1丘陵の最下位付近の標高43.90m（新出住居北壁遺存最高標高）と標高44.09m（古出住居北壁遺存最高標高）で検出し、南北軸方向の現況傾斜角は15°前後を測る南急傾斜面で検出した。

南北軸O下での地山床面の現況推定比高差は1m前後を測り、住居南半部の厚い盛床部が流失している。

住居は前述のように2期を確認し、更に東半部に重複する住居の北壁や焼土を検出したことから、以下の説明では、7号A（新）住居の柱穴などをAPなどと呼び、7号B（古）住居の柱穴などをBPなどと呼ぶ。

7号A（新）住居跡

主柱穴配置は、AP11のみを検出したが、後述する主軸柱穴AP21・22の検出から、他のAP12～14の配置を復原した。

南北主柱間2.24mは、既述の6号A（新）住居の主柱列半径Arと一致し、1号住居の環状柱穴半径r=2.20mとほとんど一致する。

また、東西主柱間2.76mは、1号住居の南北主柱間2.79mとほとんど一致する。

主軸間柱穴は、AP21を後述の10号A（新）住居の壁溝AM22内で検出し、AP22も住居東端の攪乱を免がれた床面で検出した。

壁溝は、北壁下のAM21と、AM21東端から南に折れるAM22の一部を検出したが、AM21方向と主軸柱AP21—22方向とは一致せず、AM21の方向はN—90°—Wを測る。南側のAM23方向もAM21方向と一致し、東側のAM22はAM21・23方向と直行するものか。

なお、西側のAM24方向については後述する。

以上の復原配置を採り、東西主柱間2.76m× $\frac{1}{4}$ =0.69mを基数とすると、東西主軸OからAP11—12柱列間2.24m× $\frac{1}{2}$ =1.12mは基数×1.5≒1.04mとほぼ一致し、同軸から北壁までと主軸柱間2.86mは基数×4=2.76mとほぼ一致し、南北Oから東壁までは基数の5倍となる。

なお、西側の壁溝AM24は、北壁下のAM21西端から東に折れる一部が遺存したが、その折れる形状は、東側のAM22がAM21東端から東に折れる形状よりもカーブするようにも認められる。

このことから、既述の4号住居の東壁のM22'例のように、中心Oから半径が基数の5倍となる弧状のAM24'をAM24と共に有すものか。

7号B（古）住居跡

主柱穴を含むすべての柱穴BP群は検出していないが、AP12の東側で焼土を検出し、7号

A（新）住居外の東側で北壁と床面の北半部を検出したことなどから、新期の7号A（新）住居に切られた住居を、古期の7号B（古）住居とした。

方形住居ではあるが、住居プランなどの詳細は不明である。

8号住居跡（図版78—2，79—1，第122図，表23～28）

第1丘陵上位付近の標高51.93m（北壁側傾斜変換線最高標高）で検出し、南端部床面地山標高は50.86mで、この間の現況傾斜角は11°を測る南傾斜面に設けられた住居である。

なお、1号住居の南側遺存部2.5m以南から標高約49.0mにかけては、地山が大きく流失して陥没していたため、地山検出後に発掘の排土捨場とした。

したがって、後述する8号A（新）住居の南北軸O下での地山床面の比高差は不明であるが、前述の現況傾斜角11°としての床南端部地山標高の復原値は約50.0mとなり、0.80m前後の盛床を必要としたものか。

住居は、東壁部を9号住居に切られるが、後述するように土層観察や北壁プランなどから、8号住居には3期が認められ、8号C（古）→8号B（中）→8号A（新）→9号住居の順に新しいことが確認された。

土層観察

断面図に示すように、1～7層は2層を除いて、いずれも炭片を含む層であるが、1層は表土層を除去後での検出層である。

ところで、2・3号住居は、いずれも丘陵の中位で検出したものであるが、両住居の土層観察で既述したように、表土除去前の現況でも、埋没した地山側の住居壁部を除く床面部の所在が看取できる状態であった。

この点、8号住居は上位で検出したものであるが、前述の1層に厚く埋没しており、2・3号住居での床面部看取面は3層上面に近い。

また、8号住居北側の丘陵最上位では火葬墓群が検出され、同西側では近接して窯状遺構を検出している。

以上のことから、2層は火葬墓群の地山掘削土の流入土、1層は火葬墓群・窯状遺構に伴う流入堆積土と考えられ、1層の現存堆積量からして、多量の炭の排出があったことが認められ、このことは特に窯状遺構の性格を考える際の一助となろう。

また、以上のことから、13層以下の炭の含有が、8号住居に関連するもので、14層は8号B（中）住居の後述するBPの埋土、B層はこの8号B（中）住居焼失後に掘られた8号A（新）住居のBP11の埋土、10・11層はその支柱BP11の抜去痕土と考えられる。

8号A（新）住居跡

主柱穴配置は、北側主柱列2個を検出したのみで、主軸方向は不明であるが、以下は一応東西主軸でA P 11・12を検出したものとして説明する。

北壁は、9号住居に切られるまで検出し得たものと、50cm前後南側で検出した一段低いものとの二者を確認したが、前者の壁プランは東部と西部で大きく屈折する。

A P 12とB P 12の新・旧関係は確認していないが、西側北壁方向とほぼ一致するのはA P 11—12柱列方向で、東側北壁方向とほぼ一致するのがB P 11—12柱列方向であることから、A P 11・12を8号A（新）住居の主柱穴とした。

以上の復原配置を採り、東西主柱間 $3.99\text{m} \times \frac{1}{4} \div 1.00\text{m}$ を仮数 c とすると、A P 11—12柱列から北壁までは仮数 $c \times 1.5 = 1.5\text{m}$ にほぼ一致する。

また、A P 11とB P 11、A P 12とB P 12は0.2m前後の配置差しかなく、B P 11—14柱列から西壁までも、この仮数 $c \times 1.5\text{m}$ とほぼ一致することから、南北主柱間も3.99mで、東西主軸Oから北壁までと南北軸Oから西壁までは共に仮数 c の3.5倍と考えてよいだろう。

8号B（中）住居跡

主柱穴配置は、8号A（新）住居で既述したように、B P 11・12のみを検出したものとして復原し、東西主柱間 $3.55\text{m} \times \frac{1}{4} \div 0.89\text{m}$ を仮数 c とすると、B P 11—12柱列から北壁までは1.35mを測り、仮数 $c \times 1.5 = 1.34\text{m}$ にほとんど一致し、B P 11—14柱列から西壁までは約1.40mで仮数 c の1.5倍とほぼ一致する。

上記のことから、南北主柱間も東西主柱間3.55mで、東西主軸Oから北壁までと南北軸Oから西壁までは共に仮数 c の3.5倍と考えてよいだろう。

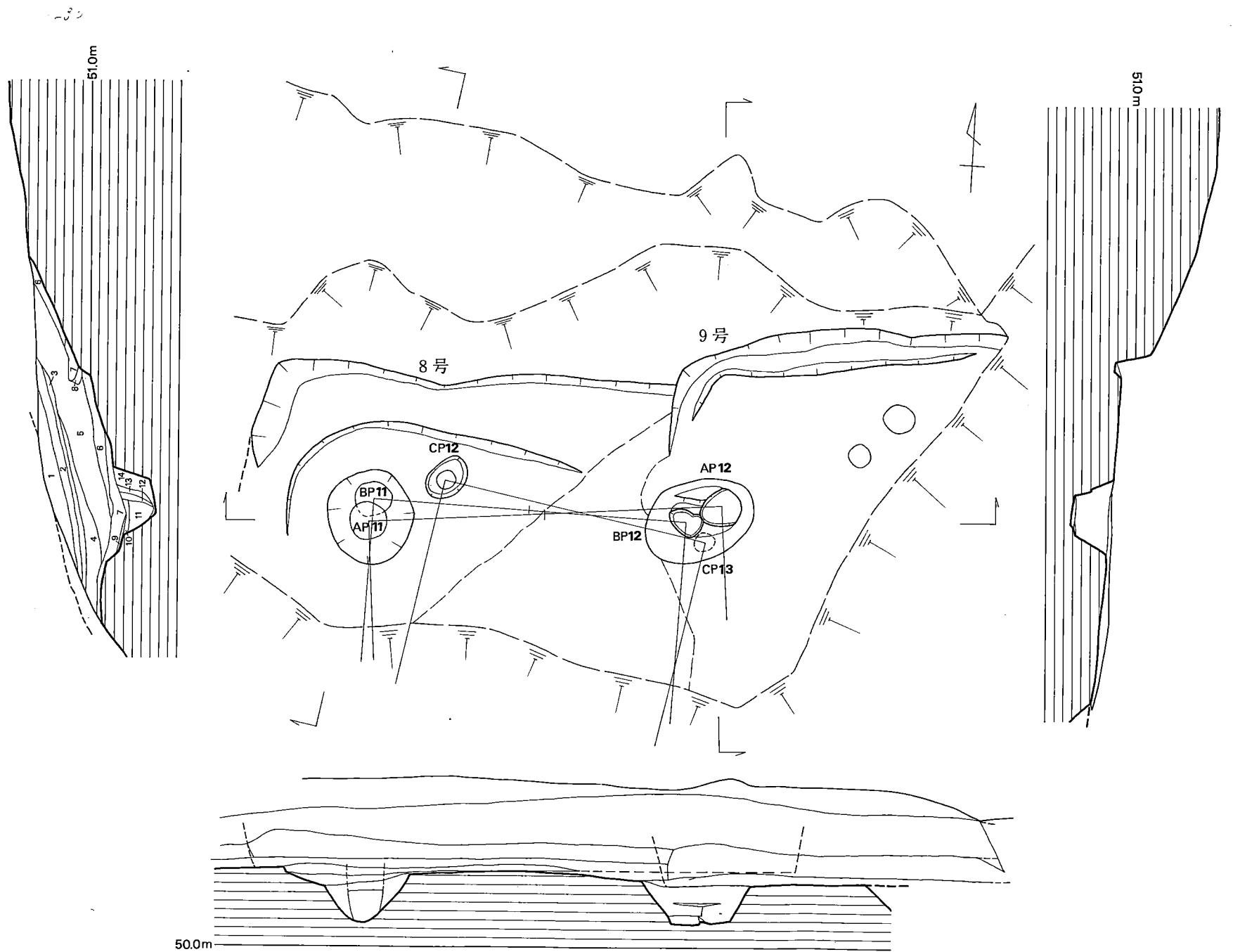
8号C（古）住居跡

主柱穴配置は、南北主軸でC P 12のみを検出し、東西主柱列C P 12—13柱列方向を北壁方向と一致させて復原すると、C P 12—13柱列から北壁まではほぼ0.50mを測り、既述の8号A（新）住居の仮数0.9975mの $\frac{1}{2}$ にほぼ一致する。

上記のことから、C P 12—13間を2.9925mとすれば、C P 13はA P 12—B P 12間で両柱穴に南接する位置に配され、南北主柱間を3.99mとすれば、8号C（古）住居の仮数 c も $3.99\text{m} \times \frac{1}{4} = 0.9975\text{m}$ となり、東西軸Oから北壁まではこの仮数 c の2.5倍となり、南北主軸OからC P 11—12までは仮数 c の1.5倍、同軸から西壁までは2倍となる。

9号住居跡（図版78—2，第122図）

第1丘陵上位付近の標高51.91m（北壁側傾斜変換線最高標高）で検出し、南端部床面地山標高は50.53mで、この間の現況傾斜角は12.5°を測る南側傾斜面に設けられた住居である。



- | | | | |
|----|---------------------------------|-----|-----------------------|
| 1層 | 暗黄褐色粘質土(炭片を含む) | 8層 | 赤褐色粘質土(地山ブロック) |
| 2層 | 黄白色粘質土 | 9層 | 淡茶褐色粘質土 |
| 3層 | 淡赤褐色粘質土(炭片を含む) | 10層 | 暗白灰色粘質土 |
| 4層 | 黄褐色粘質土(炭片を含む) | 11層 | 灰黒色粘質土(焼土・大きい炭片を多く含む) |
| 5層 | 淡黄褐色粘質土
(赤褐色粘質土地山ブロック・炭片を含む) | 12層 | 灰褐色粘質土(焼土を含む) |
| 6層 | 灰黄色粘質土(炭片を含む) | 13層 | 明茶褐色粘質土(焼土を含む) |
| 7層 | 暗灰茶色粘質土(炭片を多く含む) | 14層 | 赤褐色粘質土 |

0 2m

第122図 8・9号住居跡実測図 (1/60)

住居東半部～南半部の床面は、地山流失のため遺存しないが、盛床を施したものと考えられる。

北壁下で壁溝を確認し、床面の柱穴は2個を検出したが、柱穴底面の平面プランと標高記入を忘れている。

主軸など不明な点が多いが、東西主軸か。

10号住居跡（図版75—2，76・77—1，第122図，表29・30）

第1丘陵の最下位付近の標高43.38m（北壁部最高標高）の南急傾斜面で検出した。

住居の西半部を6号住居から切られ、7号住居の西側を切る。

住居は、2期を確認したため、以下の説明では、10号A（新）住居の柱穴などをAPなどと呼び、10号B（古）住居の柱穴などをBPなどと呼ぶ。

10号A（新）住居跡

南端部床面の調査区外の推定床面地山標高は約41.50mで、北壁部との現況推定傾斜角は約14°を測る。

南北主軸下での地山床面の現況推定比高差は約1.0mを測り、住居南半部の厚い盛床部が流失している。

主柱穴配置は、AP12・13のみを検出し、AP11・14は主軸間柱穴AP32の遺存状態からして、盛土部に配されたため流失したと思われる。

AP11は環柱穴列上でAP12—81柱列方向に、AP14は環柱穴列上でAP11—77とAP13—78柱列下に配されたものと考えられ、 \angle AP11・12・13は90°を測る。

主軸柱穴は、AP12—13柱列下でAP22を検出し、南北O下にAP22・72が配されていることなどから、AP21はAP11—14下ではなく、環柱穴列上の南北O下に配したものと思われ、後述の補柱穴AP82がAP13—14柱列下に配されなかったことと共に、AP11—13以南の意図的な床面確保に起因するものか。

主軸間柱穴は、AP32を検出したが、上記のAP21の位置を補完するものとして、南北O下に配されたものと思われる。

環柱穴は、AP72が南北主軸O下に、AP74がAP11—13柱列線上に配され、AP73は南北主軸OとAP13—14柱列線の中軸下に配されていることなどから、AP71・76は東西O下に、AP75・77・78はそれぞれAP12—13・AP11—14・AP13—14柱列線上に配されたものと考えられる。

補柱穴は、既述のように、東西O下にAP81のみが配されている。

壁溝は、AM22～23が南北主軸以東の北壁～東西O以北の東壁にかけて検出された。

以上のように、各柱穴などは整然と配されているが、環状柱列全体は円形を呈さず、長楕円形状であるが、この環状柱列の長楕円形状と床面形状との関係は、2号住居で詳述したとおりである。

AO_2 …… AP21垂木先方向は、AP78—11の直角二等分線方向で、AP11例ではAP21—71、AP71例ではAP11—12、AP12例ではAP71—72、AP72例ではAP12—72、AP73例ではAP72—74、AP74例ではAP73—75の各直角二等分線方向であり、この7本の各二等分線延長で得た三角形の中心が AO_2 である。

AO_3 …… 同様にしてAP75—78で得た三角形の中心が AO_3 である。

このようにして求められた、各 AO_2 ・ AO_3 と各環状柱穴間の距離が、測点 $AO_2=AO_3=Ar_2=Ar_3=3.02m$ で、それぞれの環状柱穴列部の床面プランが、 $AR_2=AR_3=\frac{1}{2}r_2=\frac{1}{2}r_3=4.03m$ である。

上記のように、主柱穴は AO_1 を中心とする半径 $Ar_1=2.29m$ 上に、AP73以西～AP21以西の環状柱穴列とその間の壁溝は AO_2 を中心とする半径 $Ar_2=3.02m$ と $AR_2=4.03m$ 上に、AP74以东～AP78以东の環状柱穴列とその間の壁溝は AO_3 を中心とする半径 $Ar_3=3.02m$ と $AR_3=4.03m$ 上に配した形状に復原される。

なお、 $Ar_1=2.29m$ は1号住居の東西主柱間・床面半径 R の $3.30m$ とほとんど一致する。

10号B（古）住居跡

主柱穴配置は、検出したAP12・13と切り合い関係にあるBP12・13は別途に確認していないことから、BP12・13の柱材がそのままAP12・13として再利用されたものと考えてよく、その他の検出し得た柱穴AP群も同様に再利用されたことが考えられる。

なお、壁溝は、AP11—12柱列線上の北壁下以东からのBM22～23を検出したが、BM22はAP74で近接することからAP74は環柱穴BP74ではなく、対角柱穴BP42で壁柱穴BP52の機能を兼ねたものとするべきであろう。

また、南北 AO 軸以西のBM22は、既述の AO_2 を中心とする半径 $AR_2=4.03m$ の円から一致せず、同軸以东のBM22～23も AO_3 を中心とする半径 $AR_3=4.03m$ の円に一致せず、後者のBM22～23は、 AO_1 を中心とする半径 $AR_1=測点O_1 \times \frac{3}{2} = 2.29m \times \frac{3}{2} \div 4.01m$ と一致する。

上記のことから、BP73はAP74として再利用され、BP75～78の環状柱穴は、 AO_1 を中心とする半径 $Br_1=測点O_1 \times \frac{1}{2} \div 3.44m$ 上に、BP75例ではBP12—13柱列延長線下、BP78例ではBP13—14柱列延長線下のように配されたものか。

なお、南半部の環状柱穴と壁溝間との距離よりも、北半部の環状柱穴と壁溝間の距離が大きいことから、AP81はBP81と重複しない新期の柱穴で、1号住居のように、AP71がBP21・AP76がBP22となるような主軸柱配置を採り、住居南半部のより広い床面確保を意図したこと

も考えられ、このとき、A P 22は補柱穴B P 82となろう。

11号住居跡（図版79—1，付図8，表31・32）

第1丘陵中位付近の標高46.84m（東壁遺存最高標高）で検出し、中央土壇西端の標高は46.27mで、この間の現況傾斜角は9.5°を測る西側緩傾斜面に設けられた住居である。

東西主軸での地山床面の比高差は約0.4m以上となり、相当の盛床を施したものと考えられる。

なお、後述の13号住居とは壁堤を考慮すると重複関係にある。

主柱穴配置は、P 11～14のいずれも検出していないが、4号住居の柱穴配置で復原した。

主軸柱穴は、P 31・32・34を欠番としたが、P 12—13柱列にP 34を設け、P 11—14柱列にはP 31・32を配さずに主軸柱P 21を設けたものか。

壁溝は、M 22～23を検出し、東壁から南壁にかけてもほぼ直線的に設けている。

中央土壇は、D 11・12を検出し、D 11が新しく、その形状と位置からこのD 11が住居に伴うものと考えられる。

なお、D 12の所在から、11号住居は新・古の2期が認められるものか。

以上の復原配置を採り、東西主柱間 $2.72\text{m} \times \frac{1}{4} = 0.68\text{m}$ を仮数 c とすると、東西主軸OからP 13—14柱列間 $4.18\text{m} \times \frac{1}{2} = 2.09\text{m}$ は仮数 $c \times 3 = 2.04\text{m}$ とほぼ一致し、同軸から南壁までも仮数 c の4倍となり、南北Oから東壁までは仮数 c の3倍となる。

12号住居跡（図版80，付図8，表33・34）

第1丘陵中位付近の標高41.93m（東壁側傾斜変換線最高標高）で検出し、西端部床面地山標高は41.13mで、この間の現況傾斜角は11.5°を測る西側傾斜面に設けられた住居である。

東西主軸での、東壁側地山床面の標高は約45.46m、復原西壁側の地山床面の標高は約44.80mで、相当の盛床を必要としたものと考えられる。

12号住居は、13号A（新）住居の西側床面を切ることから、13号B（古）住居→13号A（新）住居→12号住居の順に新しくなることが確認された。

なお、各柱穴は完掘したが、底面の標高記入を忘れたため、深さは不明である。

土層観察

断面図に示すように、壁溝底から20cm前後の壁面が遺存し、8層堆積面の傾斜は壁面崩壊によるものである。

床面は若干傾斜しており、盛土・張床を施したものと思われるが流失していた。

主柱穴配置は、後述する主軸・主軸間・補柱穴などの検出から図のように復原した。

南北主柱間4.63mは、検出住居群の主柱間のなかでは最大で、主軸柱上の架材の安定のため

に西側に主軸間柱のためのP 31・32を配したと思われる。

主軸柱穴は、東壁側にP 21が配されるが、西側には主軸間柱P 31・32を配したため、P 22は当初から設けていない。

主軸間柱穴は、P 31のみを検出し、P 32は盛土のため流失したものか。

補柱穴はP 82, その他の柱穴はP 91・92を検出した。

壁溝は、M 21～23を検出し、コーナー部は隅丸を呈すが、全体は直線的である。

以上の復原配置を採り、東西主柱間 $3.46\text{m} \times \frac{1}{4} \doteq 0.87\text{m}$ を仮数cとすると、南北主軸OからP 11—12柱列間 $4.63\text{m} \times \frac{1}{2} = 2.31\text{m}$ は仮数c $\times 2.5 \doteq 2.18\text{m}$ に近く、同軸から東壁までと東西Oから南壁までは仮数cの3倍となり、南北主軸Oから北壁までは仮数cの4倍となる。

13号住居跡 (図版82—2, 付図8, 表35—38)

第1丘陵中位付近の標高46.28m (東壁遺存最高標高) で検出し、東端部床面地山標高は約45.50mで、この間の現況傾斜角は 10° を測る西緩傾斜面に設けられた住居である。

東西主軸での、東壁側地山床面での標高は約45.80m, 復原西壁側の地山床面の標高は約44.90mで、15号住居外周の地山整形を考慮しても相当の盛床を施したものと考えられる。

住居は、南壁の張り出しの状態や柱穴配置などから2期が重複することを確認したため、以下の説明では、13号A (新) 住居の柱穴などをAP などと呼び、13号B (古) 住居の柱穴などをBP などと呼ぶ。

13号A (新) 住居跡

土層観察

断面図に示すように、壁溝底から20cm前後の壁面が遺存し、7層上位堆積面の傾斜は壁面崩壊によるものである。

床面は、東半部に張床の10層を検出したが、この10層中には黄緑色粘質土層が薄い膜状に認められた。

主柱穴配置は、AP 12のみを検出したが、AP 12とBP 13が共に壁寄りに配され、AP 12—22間の $2.47\text{m} \times 2 = 4.94\text{m}$ とBP 12—13間5.12mが近いことなどから、AP 11—14間を5.12mと復原した。

また、東西主柱間も6号B (古) 住居のBP 14—13間4.22mを採って復原した。

主軸柱穴は、AP 22のみを検出したが、AP 21は流失したものか。

壁溝は、土層観察で既述したように、東壁でM 22を確認したが、全体を検出していない。

中央土壇は、南北O下で東西主軸Oに南接するD 11を検出した。

以上の復原配置を採り、東西主柱間 $4.22\text{m} \times \frac{1}{4} \doteq 1.06\text{m}$ を仮数cとすると、東西主軸Oか

ら A P 11—12柱列間 $5.03\text{m} \times \frac{1}{2.5} \div 2.01\text{m}$ は仮数 $c \times 2 = 2.12\text{m}$ に近く、同軸から北壁までと南北 O から東壁までは仮数 c の 3 倍となり、東西主軸 O から南壁までは仮数 c の 3.5 倍となる。

13号B（古）住居跡

主柱穴配置は、B P 12・13を検出し、補柱穴 B P 81・82も検出したので、東西主柱間を4.22 mと復原した。

主軸柱穴は検出していないので、前述の B P 81・82を B P 21・22とすべきかも知れないが、既述の13号A（新）住居プランに類似することから東西主軸とした。

以上の復原配置を採り、東西主柱間 $4.22\text{m} \times \frac{1}{4} \div 1.06\text{m}$ を仮数 c とするとき、東西主軸 O から B P 11—12柱列間 $5.12\text{m} \times \frac{1}{2.5} \div 2.05\text{m}$ は仮数 $c \times 2 = 2.12\text{m}$ とほとんど一致し、同軸から南壁までは仮数 c の 3 倍となる。

14号住居跡（図版81—1，付図3）

第1丘陵中位付近の標高46.90～47.20m間で、北壁～東壁と東壁溝の一部を検出した。

詳細は不明であるが、既述の2号溝とは壁方向が異なることなどから、西斜面に設けられた住居とした。

15号住居跡（図版81—2，付図8）

第1丘陵中位付近の標高44.97 m（東壁遺存最高標高）の西緩傾斜面に設けられた住居である。

東壁と北～東～南壁溝を検出したのみで、柱穴群配置などの詳細は不明であるが、壁溝プランと規模は1号住居と類似する。

3. 遺物

土器

1) 1号住居跡（図版90，第123図1～5）

1～5は1号住居跡埋土中出土の須玖Ⅱ式土器である。1は甕で、口縁部のみ残存する。鋤形口縁は長くのびて垂下する。2は蓋で、器高は低く、天井部は扁平である。2個1組の穿孔がある。全体に煤の付着がみられる。3・4は壺の底部である。5は甕の底部である。1～5の色調は赤褐色で、器表面は風化・剝落が甚しく、調整等を把握できない。

2) 2号住居跡（図版90，第123図6～9）

6～9は2号住居跡出土の須玖Ⅱ式土器である。6・7は壁堤外溝第5層から出土した甕で

ある。鋤形口縁は長く垂下し、口縁部直下に突帯がつく。6は器表面に丹塗り痕が残る。8は周溝内から出土した素口縁の鉢である。9は周溝内から出土した壺の底部である。底部中央には穿孔がある。色調は赤褐色で、器表面は、風化・剝落が甚しく、調整等を把握できない。

3) 3号住居跡(図版91, 第123図10~13)

10~13は3号住居跡周溝内出土の須玖Ⅱ式土器である。

10は高杯で、鋤形口縁が長く垂下する。11・12は壺の底部である。器壁は薄い。底部から斜目上方にやや内湾させ立ちあがり、端部に達する。しかし口縁部にはならず、粘土輪積みの接着箇所とみる。13は甕の底部である。

4) 4号住居跡(図版91, 第123図14・15)

14~15は4号住居跡出土の須玖Ⅱ式土器である。14は住居跡床面から出土した甕で、口縁端部が肥厚し、立ち上がりが強い。口縁部直下に突帯がつく。色調は赤褐色である。遠賀川以東地域の土器である。15は支脚で、器壁が分厚い。色調は暗赤褐色である。器表面は風化・剝落が甚しく、調整等は把握できない。

5) 6号住居跡(図版91, 第125図16~30)

6号住居跡は、調査後の遺構整理過程で、新・古二相に分かれることが確認できた。しかし調査時には、この点についての認識が十分でなかったため、土器の取り上げは、6号住居跡東側上層・下層、6号住居跡西側の3ヵ所に区別したにとどまった(6号住居跡東側については、7・10号住居跡に切られることもあり、厳密にどちらに帰属するかはつかめない)。

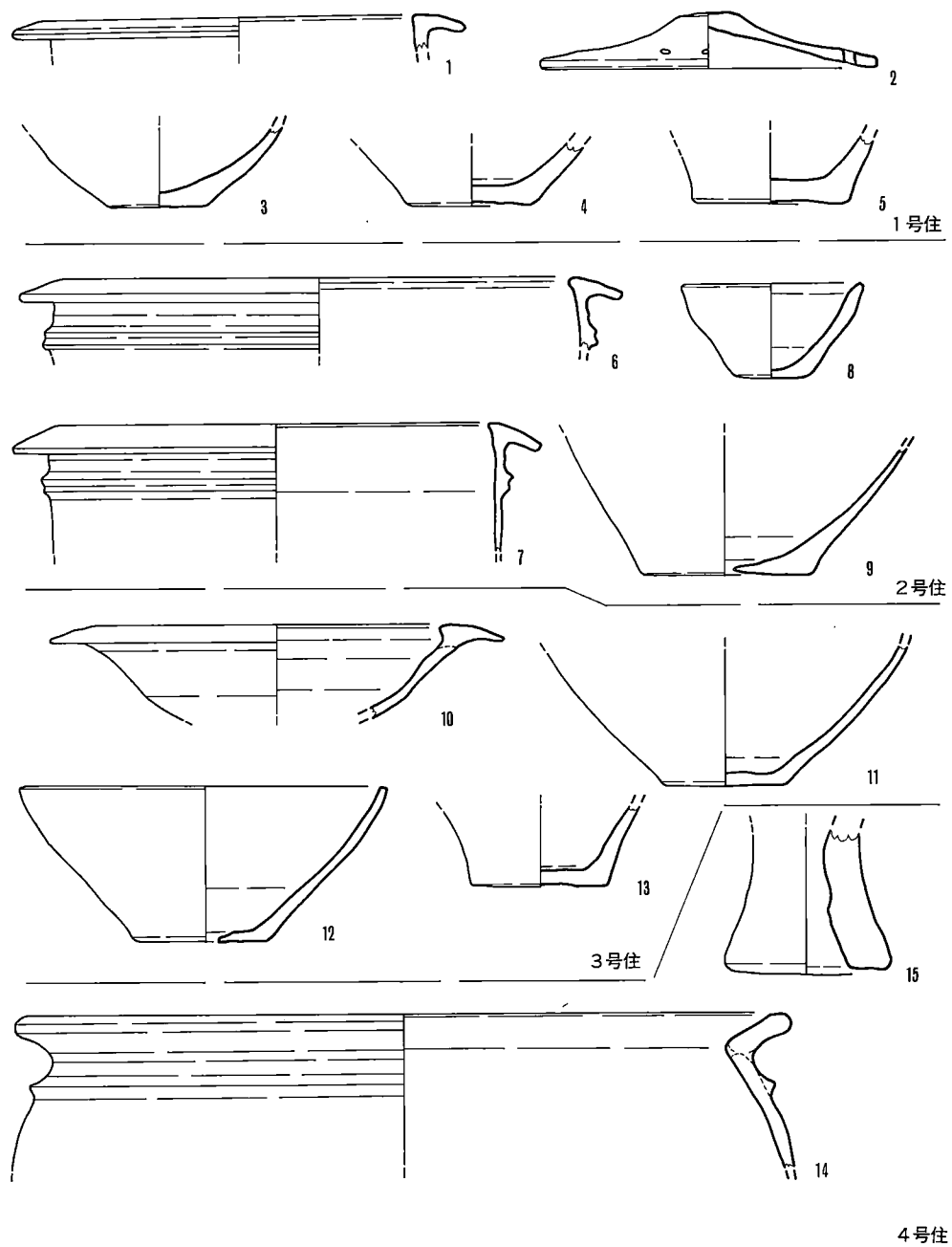
16~20は、6号住居跡東側上層出土の須玖Ⅰ~Ⅱ式土器である。

16は跳ね上げ口縁を有する甕である。遠賀川以東地域の土器である。17は広口壺である。鋤形口縁は平担面をもつ。18は鋤形口縁で、長く垂下する。19は甕の底部で、器壁が厚い。底部中央に穿孔がある。20は、壺の底部で、器壁が薄い。色調は黄褐色である。

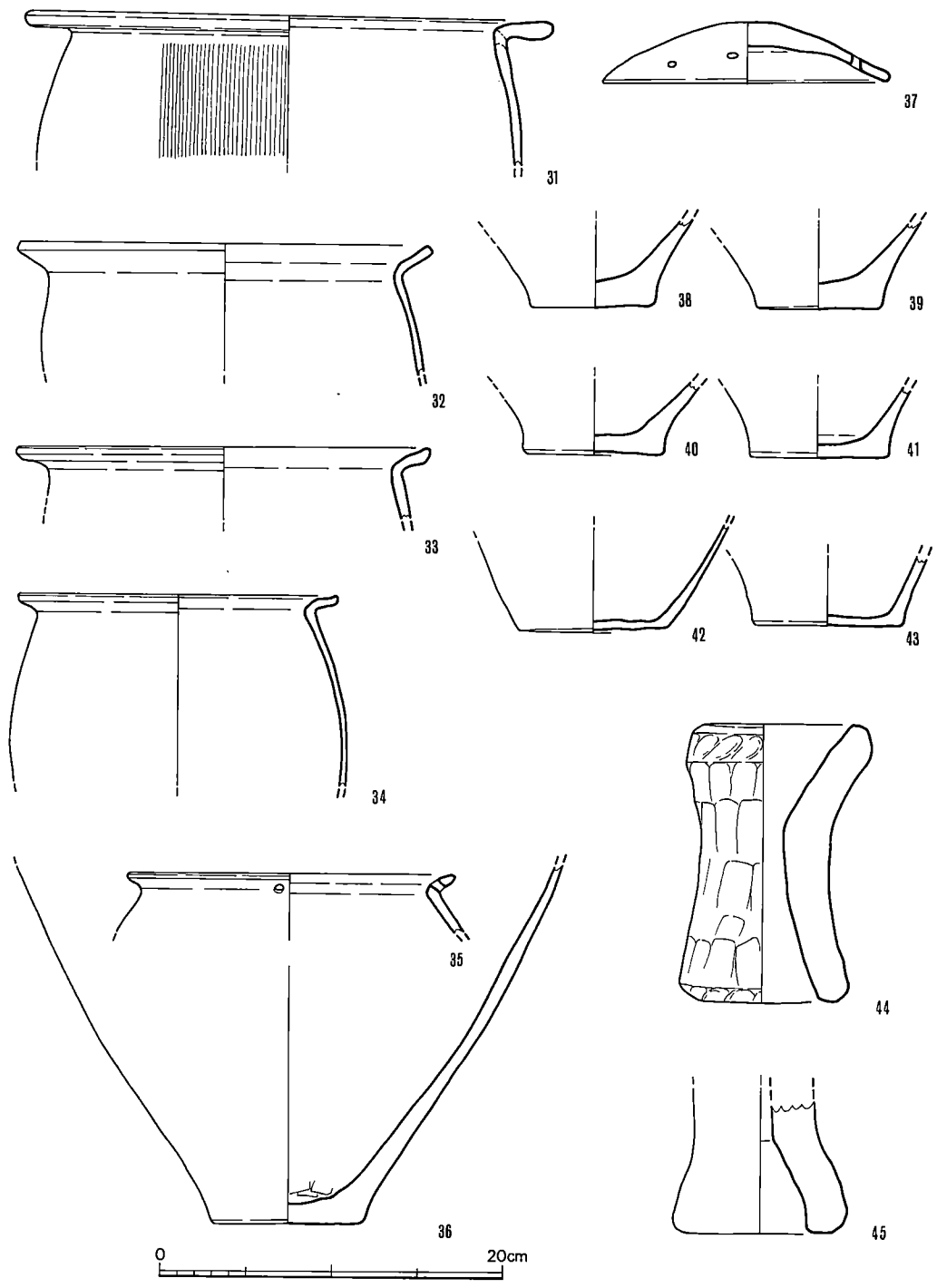
21~28は、6号住居跡東側下層出土の須玖Ⅰ~Ⅱ式土器である。

21は跳ね上げ口縁を有する甕である。口縁部直下に突帯がつく。遠賀川以東地域の土器である。22は、口縁部が「く」の字に屈曲し、端部がやや肥厚する。23は鉢で、口縁部の「く」の字の立ち上がりが強い。体部径は口径より大きい。24は甕の底部で、中央に穿孔がある。25・26は甕の底部で、やや肥厚している。27は、跳ね上げ口縁を有する鉢である。遠賀川以東地域の土器である。28は2個1組の穿孔を有する蓋である。

29~30は6号住居跡西側出土の須玖Ⅱ式土器である。29は器高の低い扁平な蓋である。30は壺の底部で器壁が薄い。



第123图 1~4号住居跡出土土器実測図 (1/4)



第124图 7号住居跡出土土器実測图 (1/4)

16～30の器表面はどれも風化・剝落が甚しく調整等を把握できない。

6) 7号住居跡(図版91, 第124図)

7号住居跡は, 調査後の遺構整理過程で, 新・古二相に分かれることが確認できた。しかし調査時には, この点についての認識が十分でなかったため, 土器の取り上げは, 7号住居跡東・西床面の2ヵ所に区別したにとどまった(7号住居跡西床面については, 6・10号住居跡との重複関係から, 厳密にどちらに帰属するかは把握できない)。

31～45は7号住居跡東・西床面出土の須玖Ⅰ～Ⅱ式土器である。

31は鋤形口縁を有する甕である。色調は赤褐色で, 器表面には縦方向にハケ目調整がみられる。32「く」の字に立ち上がる口縁部を有する甕である。33～34は跳ね上げ口縁を有する甕で, 遠賀川以東地域のものである。34は33より強く屈曲する跳ね上げ口縁を有する甕である。口縁内外面に丹塗り痕がみられる。35は, 口縁部に蓋受け用の穿孔を有する西床面出土の短頸壺である。36は甕の胴部で, 器壁は薄い。37は2個1組の穿孔を有する蓋である。天井部はやや丸味をもつ。器表面に丹塗り痕がみられる。38～41は甕の底部で, 器壁は分厚い。42～43は壺の底部で, 器壁が薄い, 44～45は支脚で, 肥厚で上下区別がない。44は器表面に縦方向のヘラ削り調整, 口縁部辺に調整のための指頭圧痕が残る。

7) 8号住居跡(図版91, 第125図31～34)

9号住居跡により東壁部が切られる。

31～34は8号住居跡出土の須玖Ⅰ～Ⅱ式の土器である。31は甕の底部である。32は鋤形口縁を有する高杯である。32は跳ね上げ口縁を有する甕で, 遠賀川以東地域のものである。34は, 「く」の字にやや長く伸びる口縁部直下に突帯を付ける甕である。どれも風化・剝落が甚しく調整等の観察はできなかった。

8) 9号住居跡(図版91, 第126図46～48)

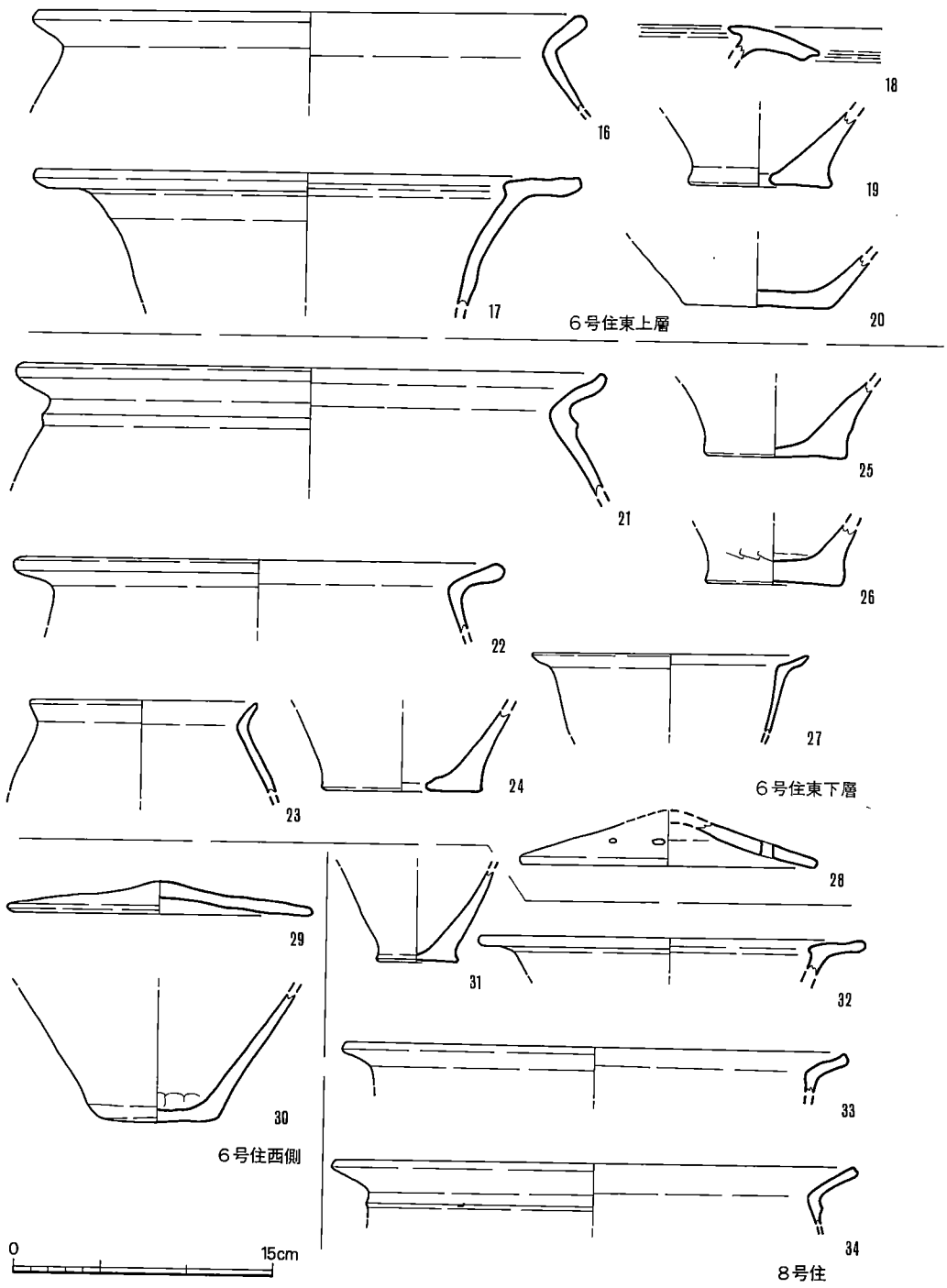
9号住居跡は, 8号住居跡東壁部を切る。

46～48は9号住居跡出土の須玖Ⅱ式土器である。46は鋤形口縁が内側に突出し, やや外側に垂下する。47～48は底部で, 器壁は薄い。

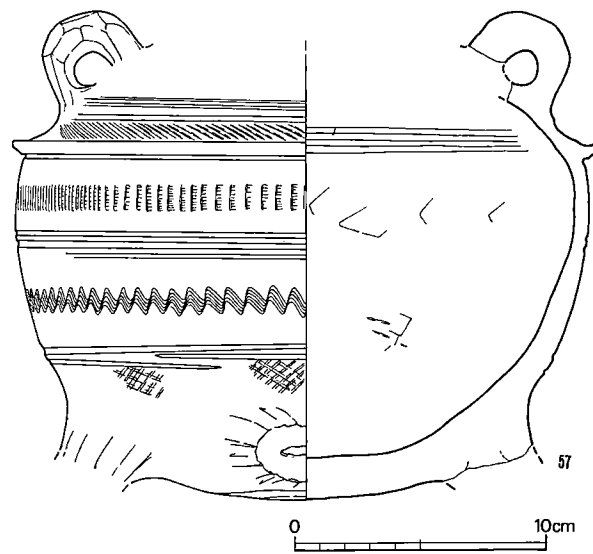
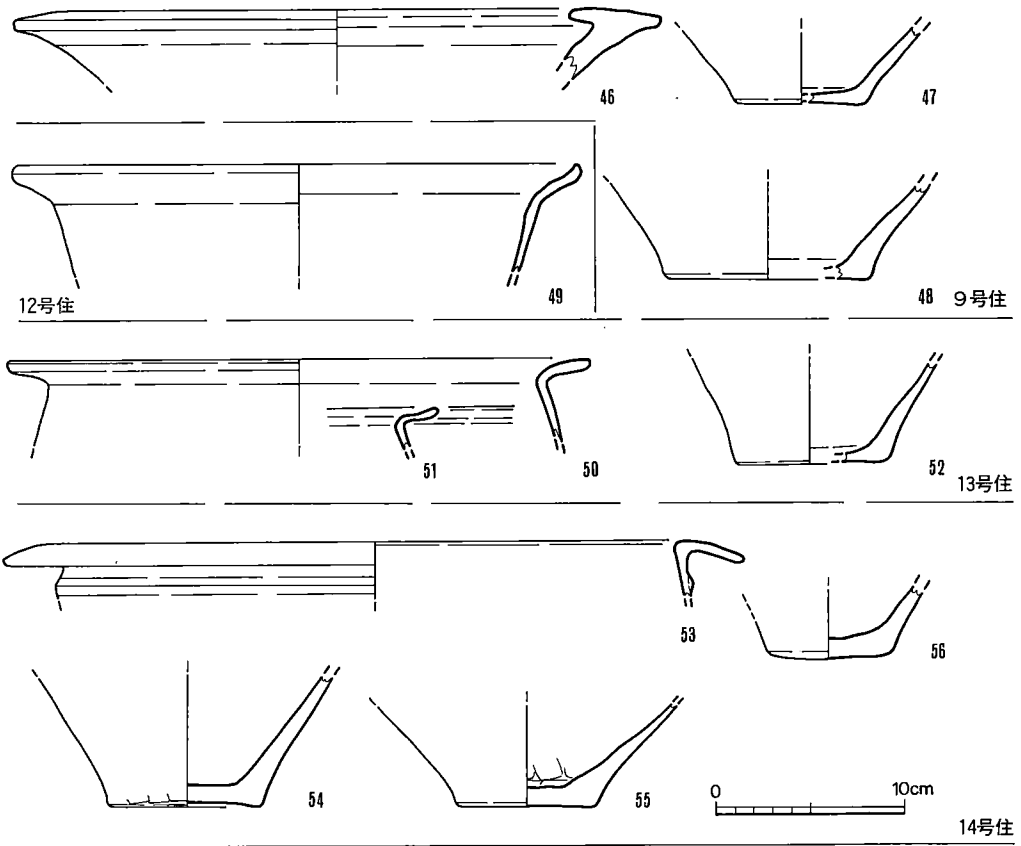
9) 12号住居跡(第126図49)

49は跳ね上げ口縁を有する甕で, 遠賀川以東地域のものである。

10) 13号住居跡(図版91, 第126図50～52)



第125图 6·8号住居跡出土土器実測図 (1/4)



第126图 9·13·14号等住居跡等出土土器实测图 (1/4)

13号住居跡は、調査後の遺構整理時に新・古二相に分かれることがわかった。しかし、調査時には、この点についての認識が十分でなかったため、土器の取り上げは、6号住居跡東周溝としている（新・古関係のみならず、すべて新相に含めて良いと思う）。

50～52は13号住居跡出土の須玖Ⅱ式土器である。50は「く」の字口縁部がやや長く伸びる甕である。51は、跳ね上げ口縁を有する甕である。遠賀川以東地域のものである。52は、甕の底部である。

11) 14号住居跡（図版91，第126図53～56図）

53～56は14号住居跡出土の須玖Ⅱ式土器である。53は長く伸び垂下する鋤形口縁を有する甕で、口縁部直下に突帯がつく。54～56は甕の底部である。

12) その他（図版91，第126図57）

57は第3ピーク南斜面から下がった谷状の部分から出土した特異な須恵器である。四つの足と体部上半を欠失している。底部は二個一組の足が底部外周辺に貼付される。球形の胴部は最大径部に三条の凹線，下部に二条の凹線そして肩部に突帯をめぐらし，二つの文様帯をつくる。下方に短く屈曲する波状文，上方に縦位に櫛歯文を施す。また突帯上には，斜目に浅い櫛歯文がみられる。突帯上方には，半円形の把手が付く，用途は不明である。

その他出土遺物（図版92）

1) 1号住居跡

石庖丁2点，石斧1点，紡錘車1点，砥石1点，用途不明品1点が出土した。

石庖丁は，2点共凝灰岩製である。1点は $\frac{2}{3}$ 残し，刃部は両刃で，背部は平坦面を持ち，直線的にのびる他の1点は $\frac{1}{2}$ 残し，刃部は片刃である。石斧は，短冊型の完形品であるが風化が甚しい。刃部は歯こぼれしている。全長10.5cm，刃部幅3.7cmを測る。紡錘車は，雲母片岩製の完形品である。直径4.6cm中心よりややはずれて両方からの穿孔がある。砥石は砂岩製で両面共使用痕があるが，一方がより凹みを持ちその使用頻高の高さを知る。用途不明品は調整剝離痕がみられるため石器としてとりあげた，ホルンフェルス製である。

2) 4号住居跡

紡錘車1点が出土している。

紡錘車は， $\frac{1}{2}$ 残存し，直径3.6cm程を測る雲母片岩製である。

3) 5号住居跡

石庖丁片1点が出土している。

石庖丁片は、片岩製で、片刃の刃部のみ残す。

4) 7号住居跡

石庖丁片2点と砥石1点に住居跡東側から出土している。

石庖丁は、1点が砂岩製で $\frac{1}{2}$ 残存している。刃部は両刃で、背部は平坦面をもち外湾気味になる。他の1点は、片岩製の小片で、片刃の刃部のみ残す。砥石は略円形で、両面共使用痕を残し、凹味が出来る程その使用頻度は高い。

5) 14号住居跡

完形の石庖丁1点が床面直上から出土している。

石庖丁は凝灰岩製の完形品である。刃部は両刃で、背部は断面し字形になり、外湾気味になる。全長17.2cmを測る。

6) その他

火葬墓群がある頂上部付近で出土した砥石で、粘板岩製である。各面共使用痕があり、小口側には叩打痕のようなものが残る。各面共凹状になり、その使用頻度の高さを示す。

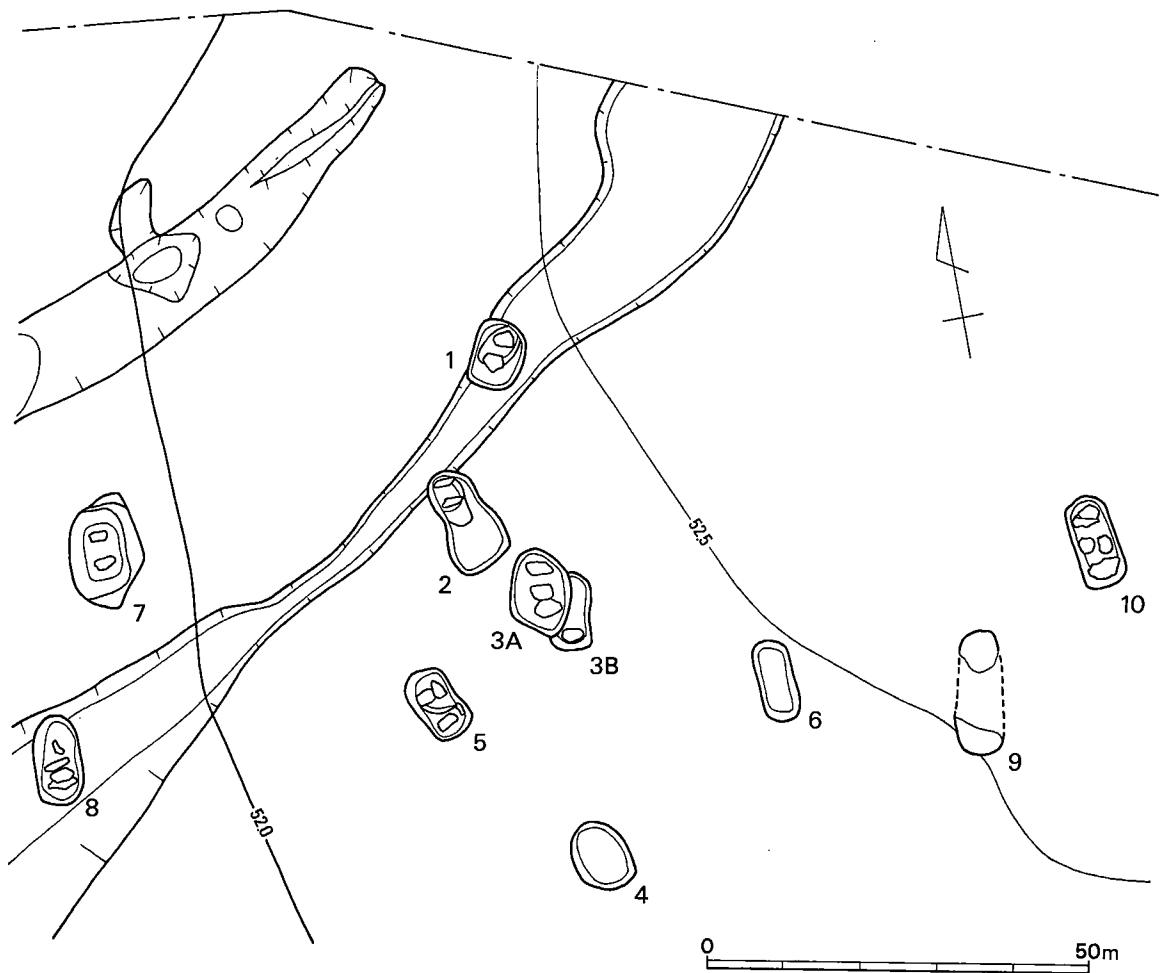
以上のように弥生時代中期住居跡群について、その遺構と出土遺物を説明してきた。

住居跡の新旧関係（切り合いから）は6→10→7号住居跡、8→9号住居跡、13→12号住居跡になり、その時期は、出土土器等から須玖Ⅱ式を中心とした弥生時代中期前半の遺構であることがわかった。また1つの住居跡も斜面に立地しているため、数度の建て直しがあること、周堤・外構を有することを確認するなど貴重な資料を得ることができた。

第3節 歴史時代の遺構と遺物

1. はじめに

トヲノ尾遺跡では、10基の火葬墓と1基の火葬関連施設が確認できた。火葬墓は、第1丘陵部頂上の標高51.5～53mに立地し、大半は、標高52～52.5mの間に集中する。これらは、ほぼ楕円形の平面プランをもち、土坑内に、数個の人頭大の台石を置き、埋土中には炭化物、焼土、



第127図 火葬墓群配置図 (1/100)

人骨片等が見られる。また、一部の火葬墓では、底部や側壁面が焼けて赤変している部分があり、台石も焼けて黒変しているものがある（図版83～84、第127図）。

以下、これらの火葬墓と火葬関連施設について順に説明していく。

2. 遺 構

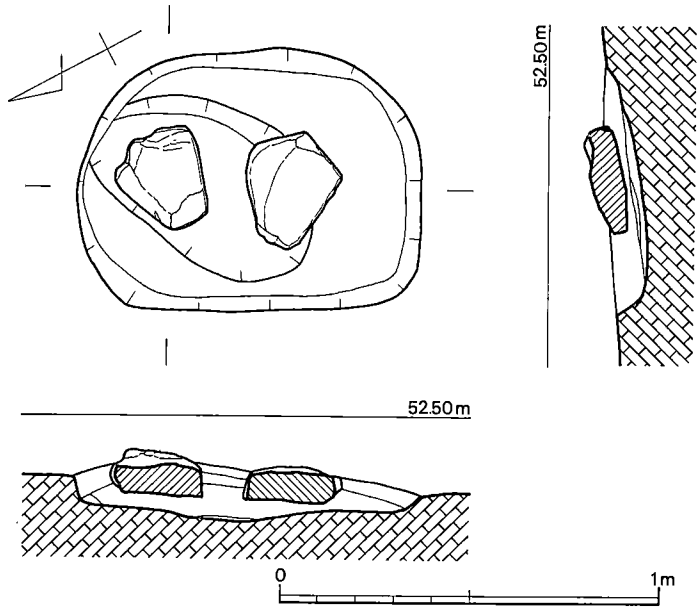
1) 1号火葬墓（図版85—1、第128図）

長さ91cm、幅69cm、深さ14cmを測る楕円形の平面プランで、断面形は逆台形を呈する。北半部では長さ60cm、幅40cm程の凹みがある。主軸はN-28°-W方向に取る。台石は2個あり、長軸上に乗る。共に底部から5cm程浮いている。側壁面の赤変や台石の黒変はない。また、出土遺物はない。

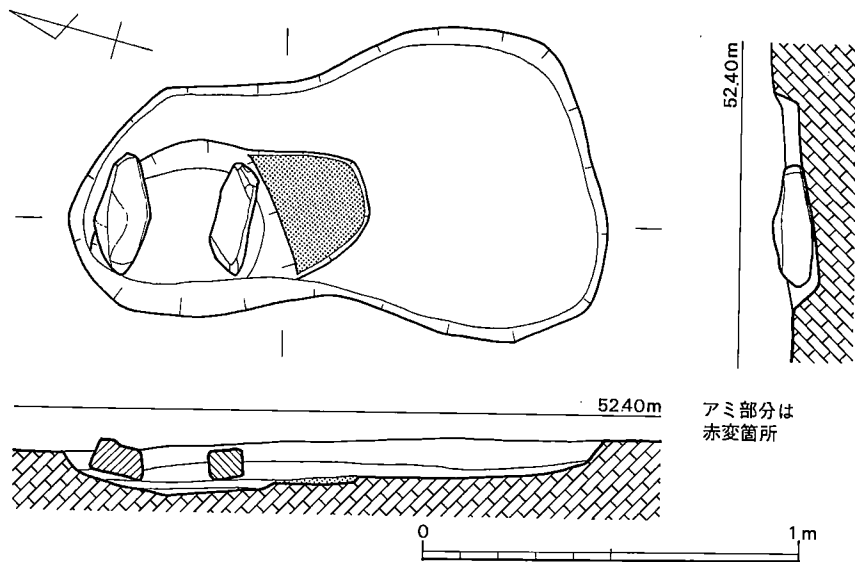
2) 2号火葬墓

(図版85-1, 第129図)

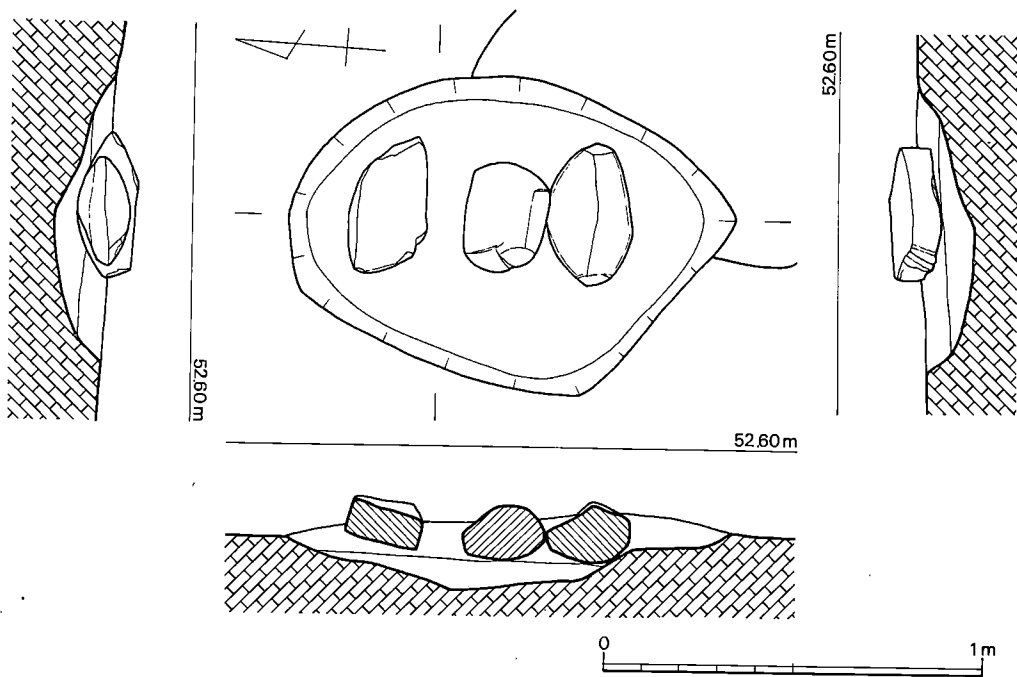
長さ144cm, 幅66~82cm, 深さ11~13cmを測る瓢丹形の平面プランで, 断面形は逆台形を呈する。北半部では長さ72cm, 幅35cm程の凹みがある。主軸はN-14°-W方向に取る。台石は北側に寄って2個あり, 長軸上にある。共に底部から5cm程浮いている。凹み南側には灰層が見られる。台石は黒変していない。出土遺物はない。



第128図 1号火葬墓実測図 (1/20)



第129図 2号火葬墓実測図 (1/20)

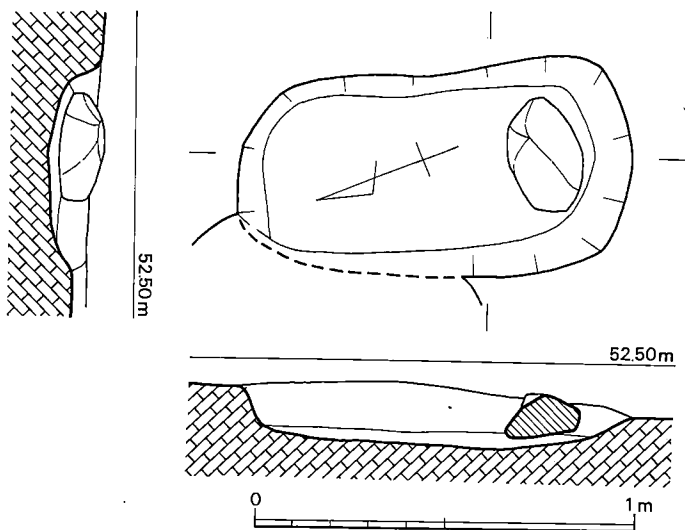


第130図 3-A号火葬墓実測図 (1/20)

3) 3-A号火葬墓

(図版86-1, 第130図)

火葬墓群中、唯一切り合い関係があり、3-B号火葬墓に切られる。長さ118cm、幅85cm、深さ17cmを測る長楕円形の平面プランで、断面形は2段掘りの舟底形を呈する。中央部に凹みがある。主軸はN-4°-W方向に取る。台石は、長軸上に3個ある。それぞれは、底部から7cm程浮いている。側壁面の赤変や台石の黒変はない。出土遺物はない。

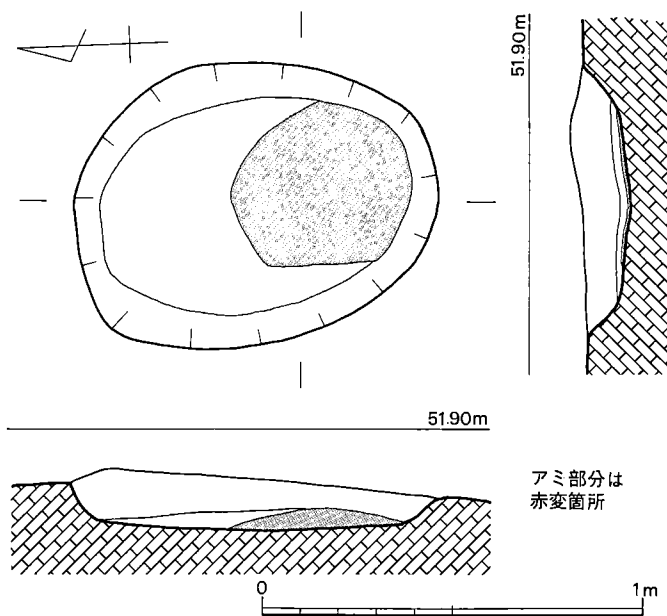


第131図 3-B号火葬墓実測図 (1/20)

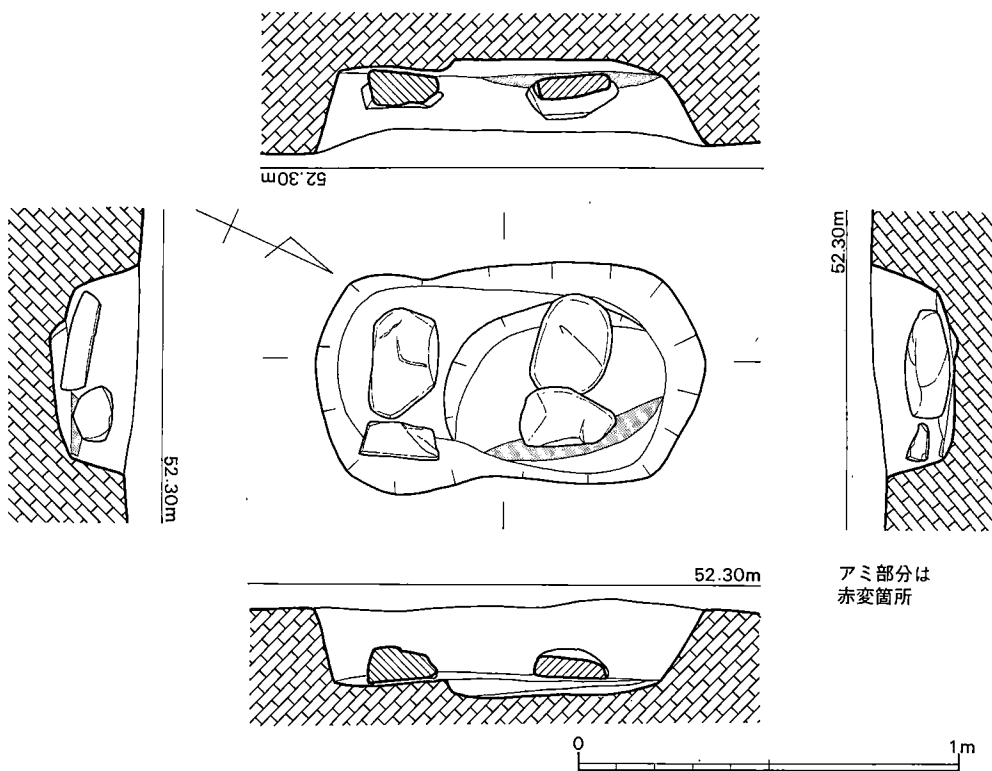
4) 3-B号火葬墓

(図版86-2, 第131図)

火葬墓群中, 唯一切り合い関係がある。3-A号火葬墓を切る。長さ103cm, 幅53cm, 深さ9~17cmを測る長楕円形の平面プランで, 断面形は舟底形を呈する。主軸はN-18°-E方向に取る。台石は北側に寄って長軸上に1個あり, 底部から3cm程浮いている。側壁面の赤変や台石の黒変はない。出土遺物はない。



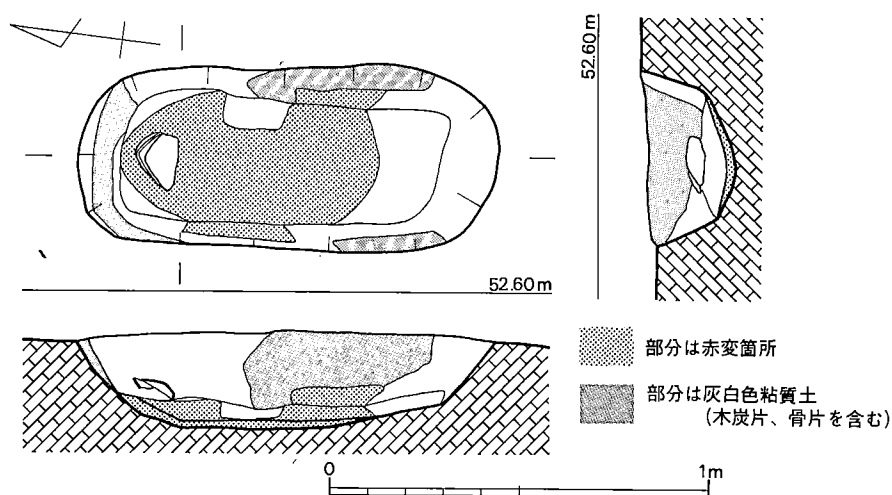
第132図 4号火葬墓実測図 (1/20)



第133図 5号火葬墓実測図 (1/20)

5) 4号火葬墓 (図版87-1, 第132図)

長さ96cm, 幅74cm, 深さ15cmを測る楕円形の平面プランで, 断面形は船底形を呈する。台石はないが, 北半部底面には赤変して焼けているところがある。主軸はN-2.5°-E方向に取る。土器片, 骨片等の出土遺物はない。



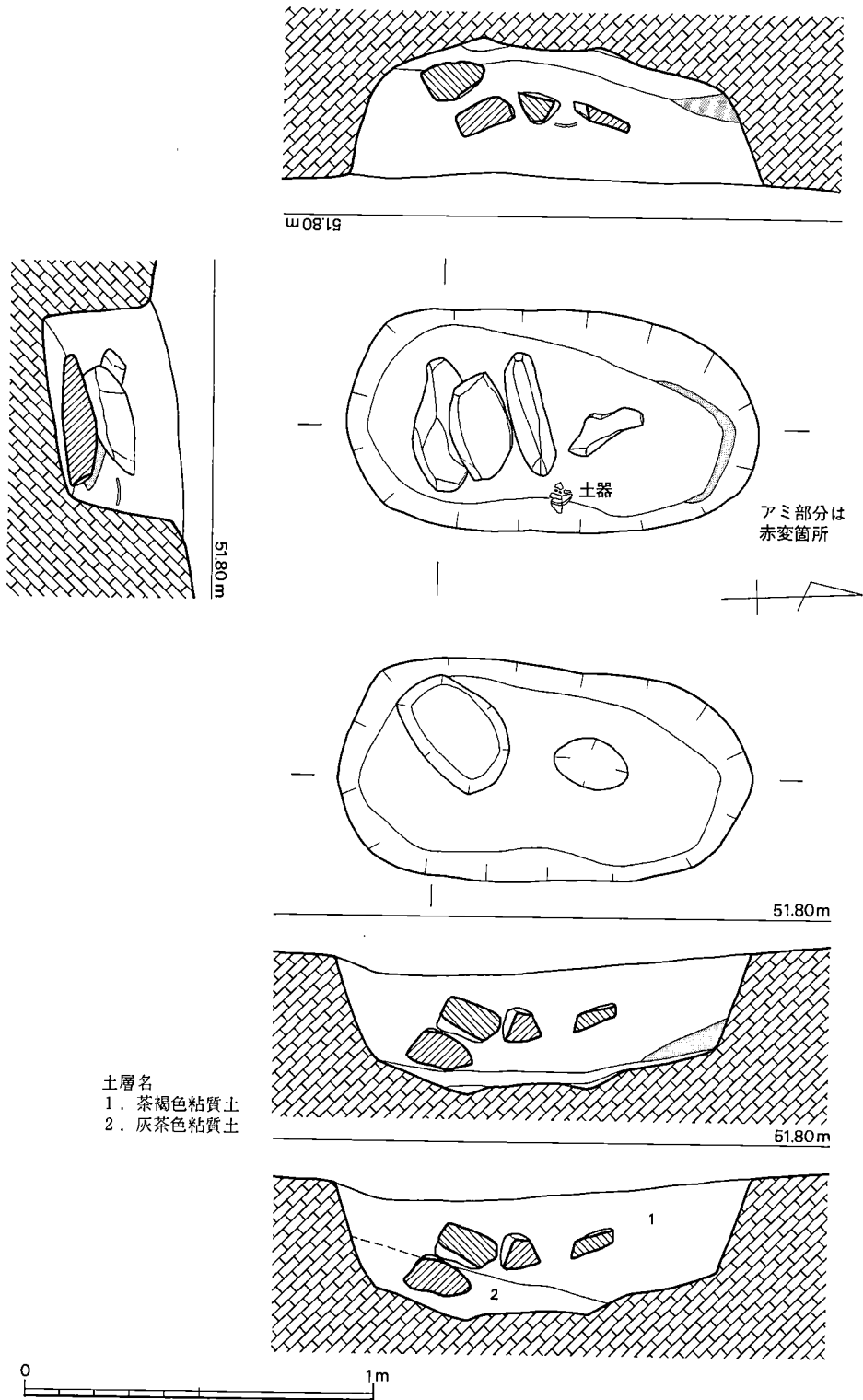
第134図 6号火葬墓実測図 (1/20)

6) 5号火葬墓 (図版87-2, 第133図)

長さ103cm, 幅54cm, 深さ18~23cmを測る長楕円形の平面プランで, 断面形は逆台形を呈する。北半部に長さ50cm, 幅45cm程の凹みがある。主軸はN-24.5°-W方向に取る。台石は4個あり, 2個1組にして, 短軸に平行に置かれる。台石は南側の長軸上にのるものは底面に接するが, 他のは底面から3cm程浮いている。北側台石下には焼土が厚さ3cm程堆積する。出土遺物は4枚の銭貨があり, 南側の長軸上にのらない台石の北側で, 底面から5cm程浮いて, 重なって検出できた。銭貨は, 北宋代の「至道元宝」「治平元宝」「紹聖元宝」, 明代の「永楽通宝」の4枚である。骨粉が埋土中にみられた。

7) 6号火葬墓 (図版88-1, 第134図)

長さ110cm, 幅50cm, 深さ25cmを測る長楕円形の平面プランで, 断面形は船底形を呈する。主軸はN-8°-W方向に取る。台石はないが, 北側側壁面は焼けて赤変しているところがある。また, 北側によって灰層がある。北側主軸上では頭蓋骨片が底面から7cm程浮いて残存していた。出土遺物はない。



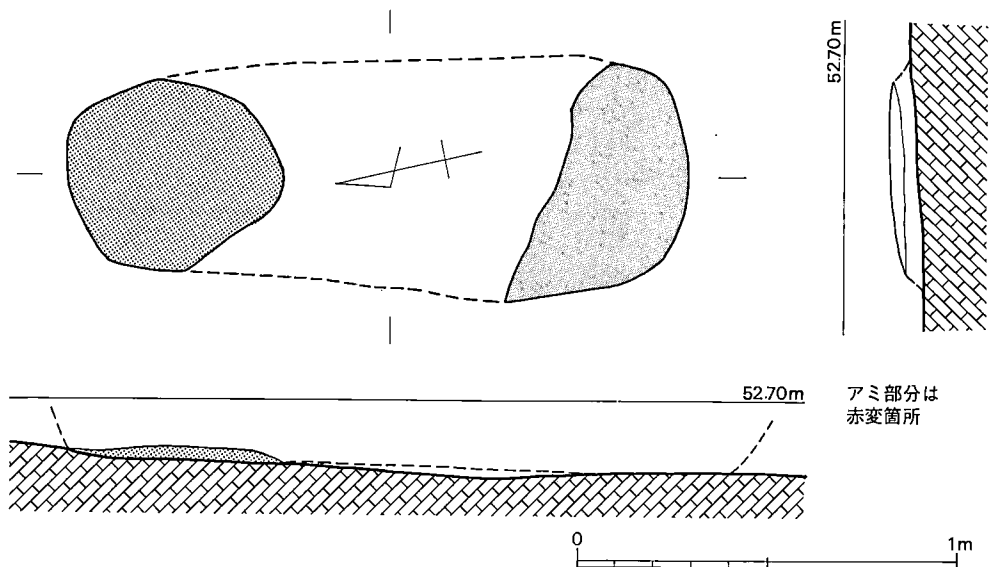
第136図 8号火葬墓実測図 (1/20)

8) 7号火葬墓 (図版88-2, 第135図)

長さ142cm, 幅99cm, 深さ23cmを測る長楕円形の平面プランで, 断面形は船底形を呈する。主軸はN-10°-W方向に取る。台石は2個あり, 共に長軸上にある。南側のものは上面を粗割りして, フラット面を作っている。それぞれは底面から5cm程浮いている。全体に灰層(灰白色粘質土で木炭, 骨片を若干含む)が見られ, 北東側側壁面は赤変して焼けているところがある。中央部及び北側に骨片があり, 北側台石の下にも骨片がある(それぞれは底面から3~5cm程浮いている。北側の骨片は頭蓋骨であり, 緑錆が付着する)。中央部東側では土師器片がある(底面から10cm程浮いている)。北側台石の下の骨片の存在から推定して, 2回以上の火葬行為が考えられる。

9) 8号火葬墓 (図版89-1, 第136図)

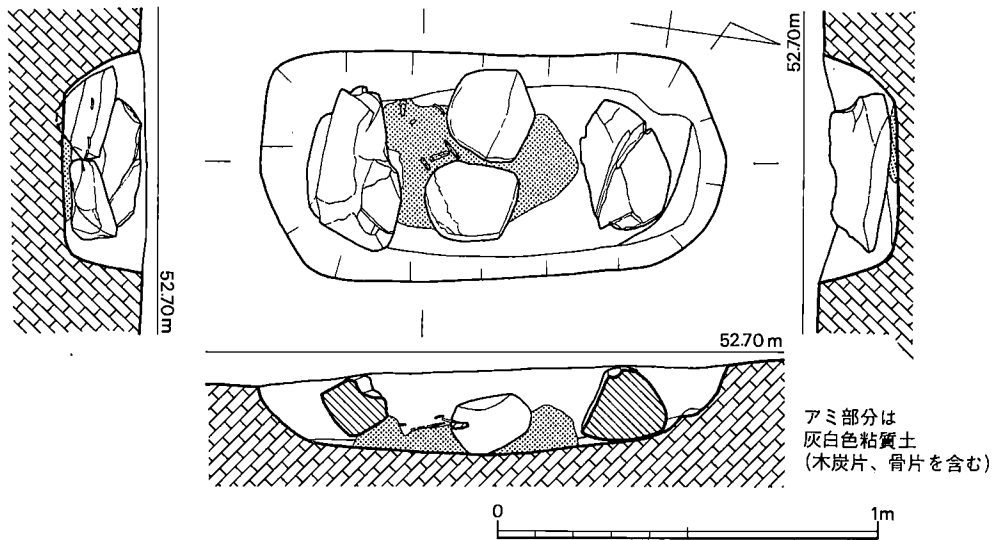
長さ119cm, 幅63cm, 深さ38cmを測る長楕円形の平面プランで, 断面形は逆台形を呈する。主軸はN-2°-E方向に取る。台石は4個あり, 長軸上にある。北側から3つの台石は底面から15cm程浮くが, 南端の台石はそれらより下にあり, 底面から5cm程浮いている。埋土は2層確認でき, 第1層は, 茶褐色粘質土(北側から3つの台石はこの層中にある), 第2層は, 灰茶色粘質土(南端の台石はこの層中にある)で骨粉, 木炭片は上層よりも格段多い。北側側壁面には赤変して焼けているところがある。南から2番目の台石は上面が赤茶色に焼けているが裏面までは焼けていない。北端とその南の台石東側で土師器が底面から20cm程浮いた状態で検出できた。



第137図 9号火葬墓実測図 (1/20)

10) 9号火葬墓 (第137図)

上方は削平を受け、底面しか確認できなかった。長164cm, 幅65cmを測る長楕円形の平面プランである。主軸はN-13.5°-E方向に取る。北側部分には, 5mm大の炭化材を含む灰褐色床面が僅かに観察できた。出土遺物はない。



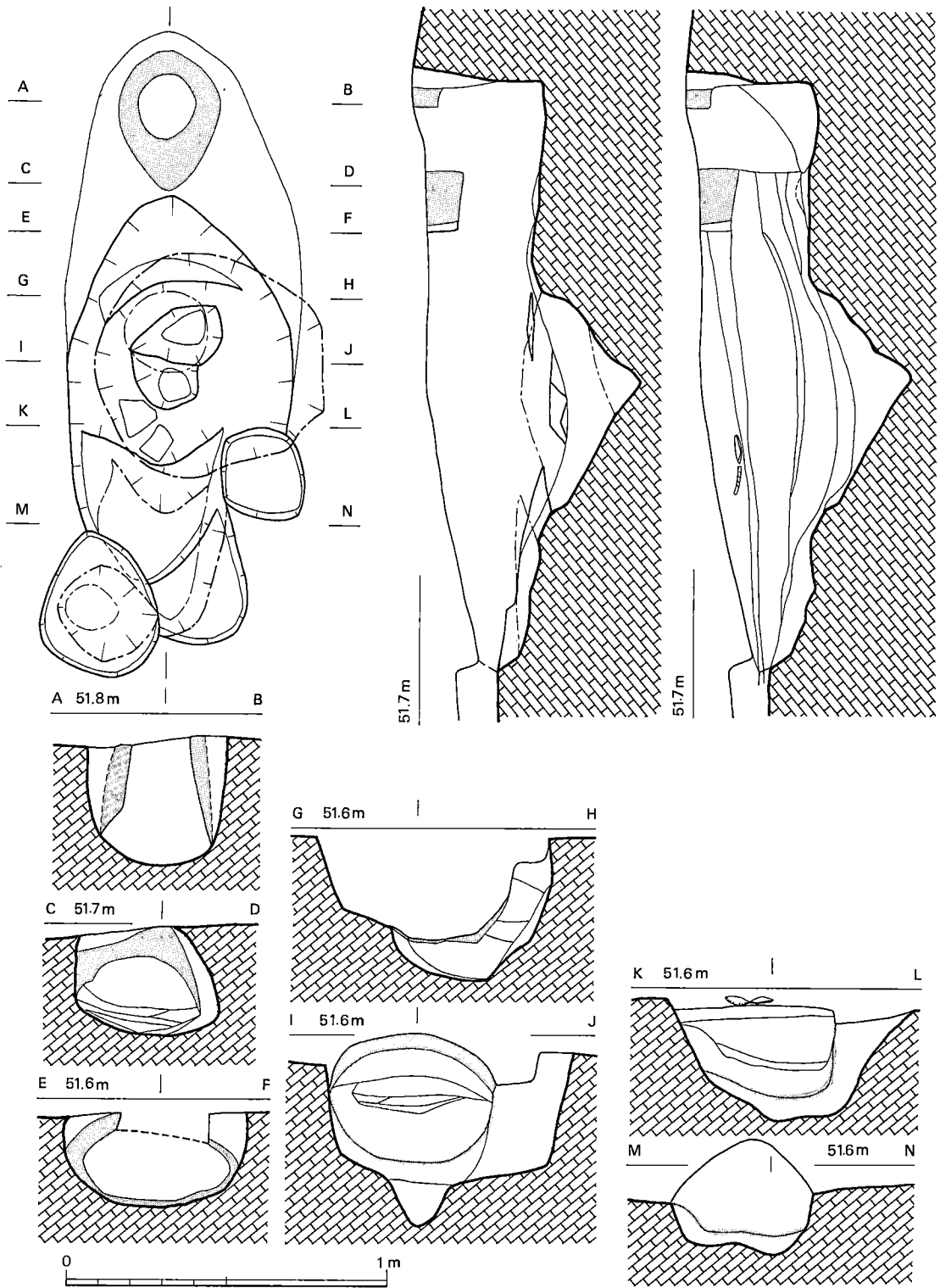
第138図 10号火葬墓実測図 (1/20)

11) 10号火葬墓 (図版89-2, 第138図)

長さ123cm, 幅60cm, 深さ23cmを測る長楕円形の平面プランで, 断面形は逆台形を呈する。主軸はN-8°-W方向に取る。台石は4個あり, 長軸上にある。中央部のものは2個ある。北端の台石は2つに割れている(火を受けて節理したものである)。北側台石の下面は火を受けている。台石は, 南側と中央部東側のものが底面から3cm程浮いている。南側台石と中央部台石の間では骨片がみられ, 一部は頭蓋骨と判断できる。骨片の下には灰層がある。床面はほぼ平坦である。中央部の台石は2つ共上面が平坦で, 遺体を置き易いようにしており, 南北の台石はやや斜目に据えられ, 遺体を支える役目を果たしていたと考えられる。出土遺物は骨片以外にはない。

12) 1号火葬関連施設 (第139図)

第一頂上部南斜面上段, 火葬墓群のある平坦面からやや下った標高51.5m付近で検出した。当初炭焼き窯を推定していた。しかし, 火葬墓群がこの遺構を中心にして展開しているようで,



第139図 1号火葬関連施設実測図 (1/20)

遺体を茶毘に付した火葬施設として促えた。

長さ326cm、幅71cmの長楕円形を呈し、主軸は、N-3°-Eの方向を取る。中央部は深さ30cmほど掘りくぼませたピットがある。火葬施設は燃焼部、煙道、煙突からなり、北側に煙突がある。壁面は赤く激しく焼け、厚いところでは5cmほどあり、複数回の火葬を伺わせる。そのことは埋土が焼土層と炭層の互層を成していることから追認出来る。

中央のピットは空気供給の便を図ったものと思われるが、何回かの火葬後からはその役目を果たしていない。長さ235cm、幅55cm、深さ20cmほどの長楕円形の土坑内で火葬が続いていたようである。人骨等の検出はなく、火葬の後、丁寧に集骨されたのだろう。出土遺物には上層で二次加熱を受け、赤変してボロボロになった形状不明の土師器片が2点ある。

3. 遺物

遺物の出土は、骨片、骨粉以外では土師器と銭貨がある。土師器は7、8号火葬墓から、銭貨は5号火葬墓から出土している。

1) 土師器 (第140図)

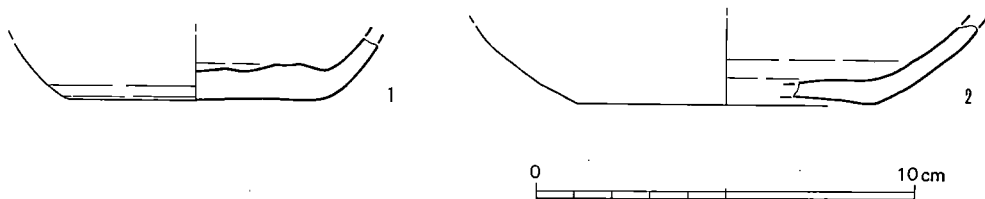
7、8号火葬墓からそれぞれ一点が出土している。共に器種は不明である。

7号火葬墓のものは(第140図1)は、口縁部が欠失していて、さらに底部も1/2が残存しているのみである。底径が6.4cm、高が1.5cm以上である。内面は体部に横ナデ、底面も丁寧な横ナデを施す。外面は底部に糸切り離し痕が見られる。橙褐色を呈し、胎土は精選されている。

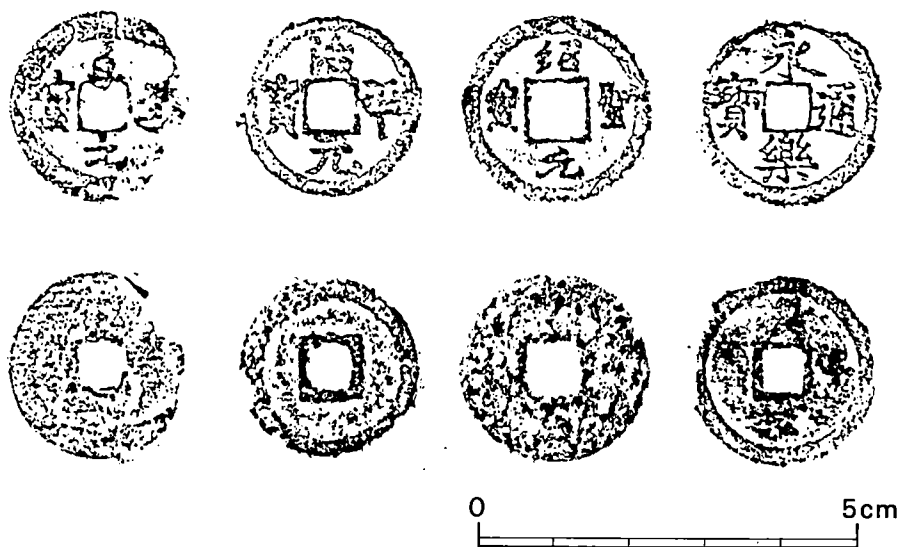
8号火葬墓のものは(第140図2)は、口縁部が欠失していて、さらに底部も1/3が残存しているのみである。底径7.8cm、高2cm以上である。内外面とも風化が甚だしく調整は不明である。体部には二次加熱による黒変が見られる。茶褐色を呈し、胎土は1mm程の砂粒を含む。

2) 銭貨 (第141図, 表39)

5号火葬墓から計4種4枚の銭貨が鑄着し、重なって出土している。他の火葬墓からは出土していない。全て判読可能である。一番古いものは、至道元宝(初鑄年995年, 北宋太宗元年)で、最も新しいものは、永楽通宝(初鑄年1406年, 明永楽六年)とかなり時間差をもっている。それぞれは表39に示すとおりである。



第140図 7・8号火葬墓出土土器実測図 (1/2)



第141図 5号火葬墓錢貨拓影図 (1/1)

表39 出土錢貨一覽表

錢貨名	時代	初 鑄 年	外 徑	外縁厚さ	備 考
至道元寶	北宋	至道元年(995年)	25 mm	3 mm	草書
治平元寶	北宋	治平元年(1064年)	24 mm	2 mm	真書
紹聖元寶	北宋	紹聖元年(1094年)	25 mm	2 mm	草書
永樂通寶	明	永樂六年(1406年)	25 mm	2 mm	真書

第4節 おわりに

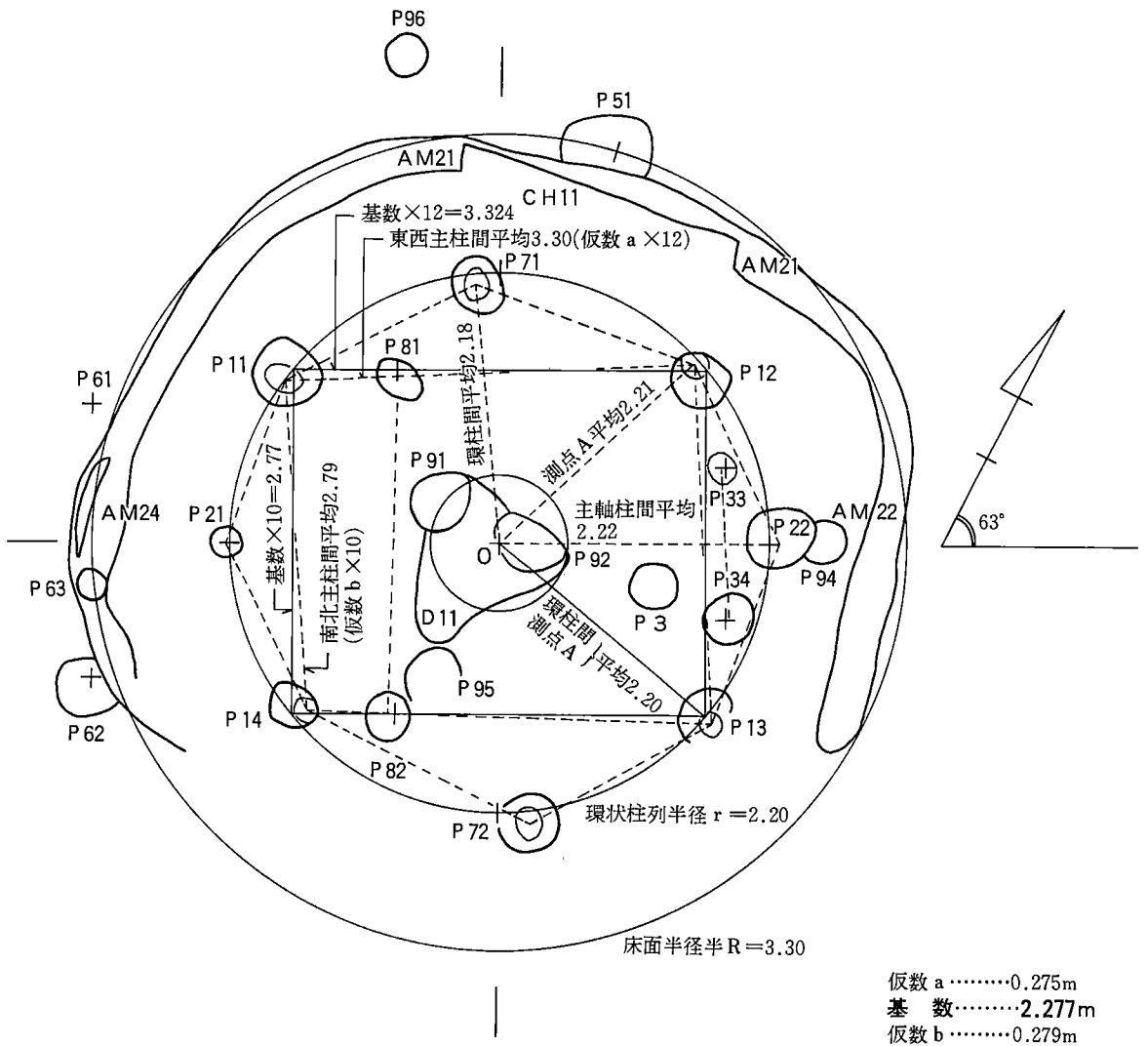
1. 4号住居跡模式図について

1号住居には、既述したように、あまりにも整然とした柱穴群の配置が認められた。

その特徴を列記すれば、以下のとおりである。

①環柱間・測点Aの各計測値平均は、それぞれ2.18m・2.21mでほとんど一致し、両者の平均は2.20mである。

②上記平均2.20mと主軸柱間2.22mも、またほとんど一致する。



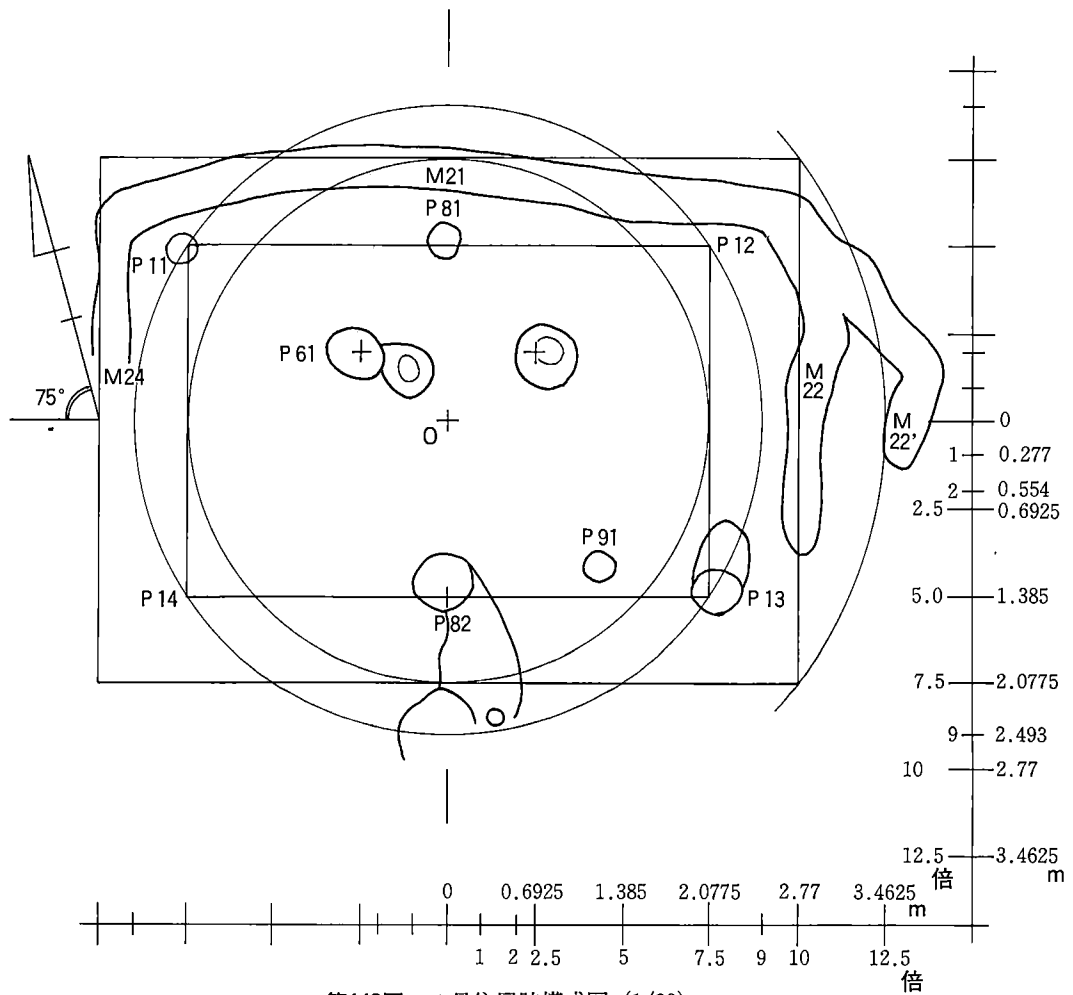
第142図 1号住居跡模式図 (1/30)

③上記平均2.20mの $\frac{1}{2}$ は、東西主柱間平均3.30mと一致し、床面半径ともほぼ一致する。

④上記平均2.20mは、主柱間差 $0.51\text{m} \times 4 = 2.04\text{m}$ と近似し、南北主柱間 $2.79\text{m} \times 1.2 \div 3.35\text{m}$ と東西主柱間3.30mはほぼ一致する。

以上のことから、各柱穴間・環状柱穴半径 r ・床面半径 R について、何らかの単位の所在が予期された。

詳細は省くが、南北主柱間2.79mは、仮数 b を0.279 mとすれば、 $b \times 10 = 2.79\text{m}$ で、東西



第143図 4号住居跡模式図 (1/30)

主柱間3.30mは、仮数 a を0.275とすれば、 $a \times 12 = 3.30\text{m}$ となる。

基数を、仮数 $a \cdot b$ の平均0.277 mとしたとき、1号住居を含む住居群のすべてに近い計測値及び $R \cdot r$ などの算出値がほぼ基数の整数値で割れるという確証を得た（基数を仮数 a や仮数 b としての検討例は省略する）。

以上のことから、1号住居を例に、基数0.277 mを使用して、表7・8中の計測値・算出値の内訳から住居構築の際の設計値を示したものが表8中の倍率と基数×倍率で、第143図の1号住居模式図では、破線で検出柱穴中心を結び、実線で設計諸柱穴位置および環柱穴列プランと床面プランを示した。

また、各住居の算出一覧表右端にも、同様にその参考例として、仮数 $a \cdot b$ と基数の三者のどれを使用したら、算出値と最も近似するかを、仮数 a では▲印、仮数 b では●印で示した。

ところで、この基数値0.277 mは、三雲遺跡賀賀石Ⅰ-23出土の前期末～中期中葉の6軒の円形住居プランの検討で得た基準尺度0.2765 m = 1尺とも一致する。

以上のことから、前期末～中期初頭に属するトラノ尾遺跡出土の円形・方形住居群の構築に際しても、秦・前漢尺の1尺 = 27.65 cmが使用されたものと考えてよいだろう。

2. 火葬墓群について

トラノ尾遺跡では、10基の火葬墓と1基の火葬墓関連施設を検出した。それらは、東西13.5 m × 南北7.5 mの区画のなかに立地している。調査前に顕著な土盛りや標石などの外部表象施設は全く無かった。発掘の結果、火葬墓の下部施設とその年代は以下のようにまとめられた。

1) 火葬墓とその年代

火葬墓の下部施設は大きく3つに分類できる。

a. 火葬施設 地山を穿ち、遺体を台石に置き、茶毘に付した施設である。火葬の後、丁寧に集骨され、土壇内には人骨がほとんど残らない。

b. 火葬施設墓 aの火葬施設をそのまま墓として使用するもので、土壇内から人骨片が灰層の中から多量に出土する。

c. 火葬収骨墓 火葬施設で火葬された人骨を骨蔵器等に収め、新たに土壇を掘削して埋納する。

トラノ尾遺跡では、10基の火葬墓が検出されたが、それらは、火葬施設ないしは火葬施設墓である蓋然性が高い。それは、土層中に灰層、木炭片が見られ、明らかに燃焼行為のあること、土壇内壁体が固く赤変し、数度の加熱が看取できること、土壇内には夥しい人骨片がみられ、収骨行為による取り残しだけでは割り切れない量があること、骨蔵器等の収骨容器がないこと、

さらに土坑内では銭貨や土師器などの副葬品が出土したこと等から首肯できよう。

次に、火葬施設、火葬施設墓の構造と副葬品について見ていきたい。以下のような諸特徴があげられる。

- a. 平面形態 楕円形
- b. 断面形 舟底形（3-A, 3-B, 4, 6, 7, 10）
 逆台形（1, 2, 5, 8, 9）
- c. 大きさ 長軸1m前後（1, 3-A, 3-B, 4, 5, 6, 8, 10号墓）
 長軸1.5m前後（2, 7, 9号墓）
- d. 主軸方向 略北側
- e. 台石 長軸上に並べる（1, 2, 3-A, 3-B, 5, 7, 8, 10号墓）
 2個1組を単軸に平行して並べる（5号墓）
- f. 土坑内赤変箇所 有（4, 5, 6, 7, 8, 10号墓）
 無（1, 2, 3-A, 3-B号墓）
- g. 骨粉、骨片 有（5, 6, 7, 8, 10号墓）
 無（1, 2, 3-A, 3-B, 4, 6, 9号墓）
- h. 土坑内凹み 有（1, 2, 3-A, 5号墓）
 無（3-B, 4, 6, 7, 8, 9, 10号墓）
- i. 副葬品 土師器（7, 8号墓）
 銭貨（5号墓）

以上のような特徴から、若干の検討をしてみたい。

eについてまとめてみると、台石は座棺（木棺）または直接遺体を置く為の台に使用されたものであろう。台石は長軸に対して横位に置かれ、据付の安定性を考慮している。また、台石はほとんどが底面から浮いた状態にある。これは火葬行為後の灰層等の掻きだしが不徹底であったにもかかわらず、続けて台石を据え直して、再び火葬行為をしたことによるものか、火葬か等、色々推測できるが、現時点では即断できない。ただ台石の上下両面共、焼けているもの行為にはいる前に木材等を焼却して土坑内の清掃行為をしてから台石を置いたことによるものがあることは何回かの火葬行為のなかで台石が据え直していただろうことは間違いない。

fについてまとめてみると、土坑内の赤変が著しいものは何回かの火葬行為があったことを物語っている。しかし遺体焼却に当たっては、当時火力等の関係で、長時間を要したであろうから一概に火葬回数を推し量ることは出来ない。ところで、赤変箇所のあるものはg項目の骨粉、骨片の有るものと一致する。とくに6, 10号墓では土坑内から頭蓋骨片が出土し、火葬施設墓としての機能を十分に果たしていることがよくわかる。ところで、副葬品の土師器、銭貨共加熱を受けていない。これは、5, 7, 8号墓が火葬施設墓としての最終段階を表出していると推定できる。

また、土壇内の凹みについては、火葬行為時の土壇内への通気を考慮して設けられたものであろう。

i の副葬品では、5号墓からは錢貨が4枚出土している。4枚が重なって出土した。後世に一般化する「六文錢」の習俗は、その萌芽を認知することが出来るものの、未だ定式化していないようである。また他の墓より錢貨の出土が無いことから、5号墓の被葬者の頂点にした造墓関係が窺える。これは、火葬墓の構造からも追認できよう。その他、現行民俗例に知られる剃刀・はさみ等の「切れもの」の副葬をみることは出来ない。

以上のことをふまえ、トヲノ尾遺跡の火葬墓群について、その特徴より火葬施設、火葬施設墓という2種に細分した結果を各号墓に充てはめてみると、

火葬施設 1, 2, 3-A, 3-B号墓

火葬施設墓 4, 5, 6, 8, 10号墓

と言うことになる。中でも5, 7, 8, 10号墓の火葬施設墓は、その機能を十分に果たしていたことを把握できる。

こうした台石を持つ火葬施設墓の類例を他に探してみると、福岡県筑紫野市の剣塚遺跡（15世紀初頭の火葬施設墓）、兵庫県龍野市福田片岡遺跡（15～16世紀の火葬施設墓）がある。しかし、トヲノ尾遺跡のように、それらが骨蔵器をもつ火葬墓などと共になることなく、単独の集団墓として検出された例はない。

最後に、造墓の時期について考えてみる。7, 8号墓から出土した土師器は、その器形から14世後半から15世紀初頭に位置付けられる。これは、5号墓出土錢貨のうち最も後出する永楽通宝（1406年）ともよく一致する。こうしたことから、トヲノ尾遺跡の火葬墓群の造墓時期は15世紀前後、室町時代末期と考えておきたい。

2) 造墓集団とその背景

ここでは、数少ない関連古文献をもとに、造墓集団の実態を若干明らかにしておきたい。

トヲノ尾遺跡の所在する篠栗町は、平安期から小中（現在の尾仲）、鎌倉期から金出、乙犬が、戦国期からは田中の地名が文献に登場する。以下、（「日本地名大辞典＝福岡県」角川書店、1988年）をもとに、各地の沿革を見ていく。

小中は「安楽寺草創日記」によると、延喜19（920）年に安楽寺崇尼観算が、御墓寺として同荘を安楽寺に寄進するとある。以後、鎌倉期に及んで、正和3（1315）年に武蔵国御家人本庄国房が関東裁許状に従い、小中荘地頭職を由利頼久に売却していて、地頭職の存在が確認できる（根津嘉一郎文書*鎌倉幕府裁許状集上）。室町期では、享徳3（1455）年8月安楽寺公文所が御祭田楽直の弁済を要求した寺領荘園の一つに当荘が見える（太宰府天満宮文書）。

金出は弘安9（1287）年12月28日の岩門合戦ののちに注進された恩賞配分状に、木工助三郎

入道道念跡の金井手地頭職が渋谷重郷に与えられたと見える（比志島文書＊旧記雑録前編1）。嘉吉2（1443）年8月19日には、大内教弘配下の周布和兼は金井手山へ軍を進軍させた（萩藩関関録121―1）。当地は室町期に、守護大内氏による家臣への給地宛行に使われていたようである。

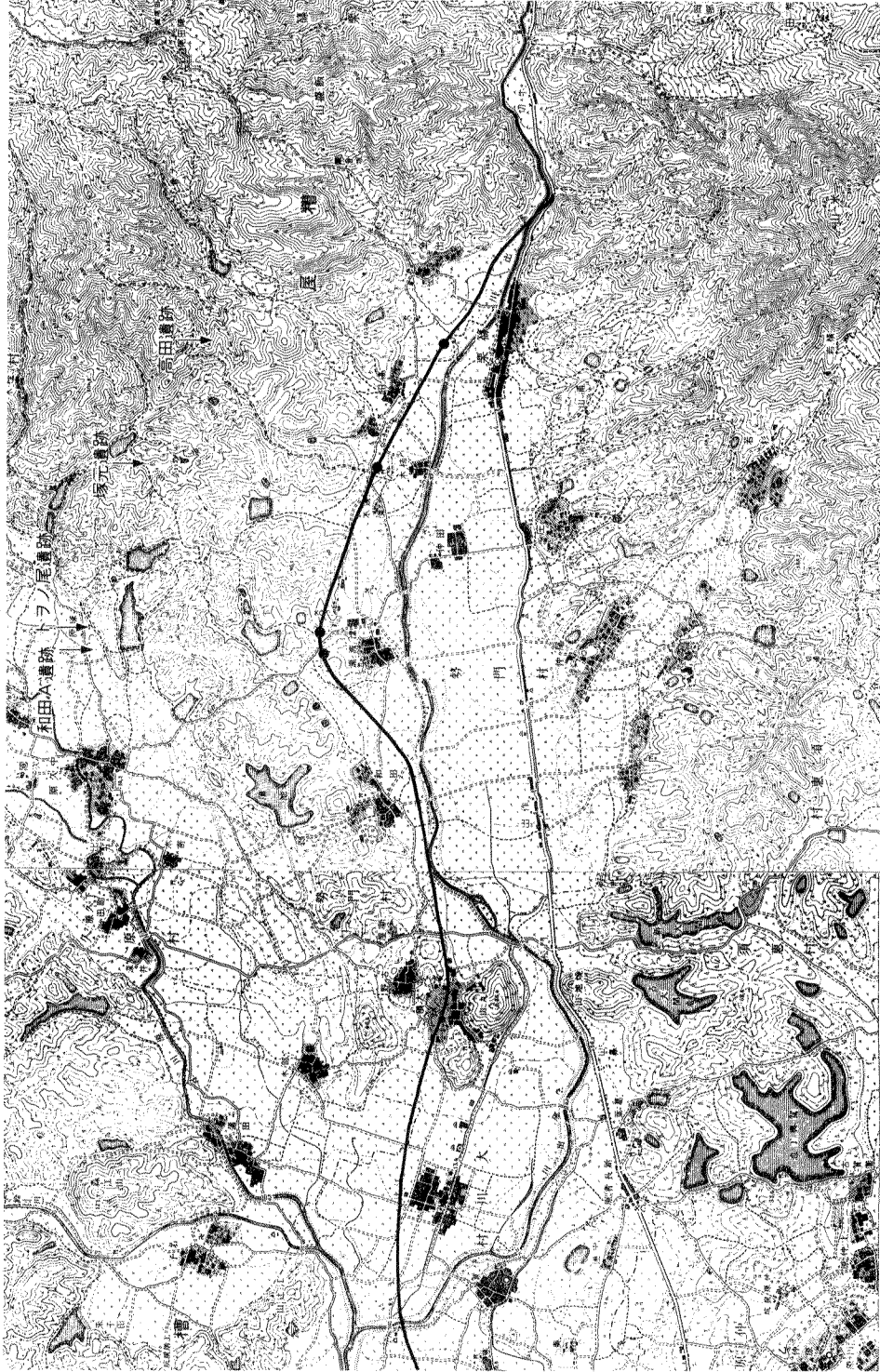
乙犬は弘安9（1287）年12月28日、岩門合戦少貳景資方についた管崎宮執行成直から没収された当地は、3人に分配されている（比志島文書＊鎌倉遺文16130）。しかし、正平21（1367）年4月の執行成員注文によれば、当地は管崎宮若宮仮殿遷宮の饗膳米を負担している（石清水文書2＊大日本古文書）。管崎宮領は石清水八幡宮別当家田中坊を本家と仰いでいたが、永享6（1435）年には、田中坊の庶家北坊の良清が知行していた。同年3月30日、良清は神没欠如の援助を受ける見返りとして倉光下郷30石、乙犬郷20石の年貢米を沽却のうえ田中坊に渡すことを契約している。永享10（1439）年には、田中坊の直務支配地になっている。

以上、やや冗長に文献の引用をしたが、当地は鎌倉期から室町期にかけて荘園として発達しつつ、また地行地としてもその機能を果たしていたことが看取できた。歴史的にみて、14世紀後半から荘園は解体し始め、15世紀代には武士団の支配化に入っていく。つまり、当時の幕制については、各荘園の有力者層が結集して造墓する時代から、在地の有力諸層が、各丘陵上に林立するかのように小規模墓地群を造営する時代へと移行する途上のものと考えられる。また、明治33年の地図（第148図）によると、トラノ尾遺跡は、谷奥部に立地し、周辺からは直接目にされることがない奥津城であったことがわかる。そこで、トラノ尾遺跡の造墓集団であるが、これら文献に現れた在地の官人、武士、僧侶層などが大いに係わっていたことは自明のことであろう。トラノ尾遺跡からは、墓誌等の検出がないので、これ以上被葬者像に踏み込むことは出来ないが、今後同様な火葬集団墓資料が周辺から検出されるのを期待し、その時点で再度検討してみることにしたい。

註1 馬田弘稔編「塚堂遺跡Ⅳ」（『一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第4集、福岡県教育委員会、1985）

註2 柳田康雄編「三雲遺跡Ⅰ」（『福岡県文化財報告』第58集、福岡県教育委員会、1980）

註3 馬田弘稔編「塚堂遺跡Ⅴ」（『一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第5集、福岡県教育委員会、1988）



第144図 明治時代の篠栗とノヲノ尾遺跡火葬墓群位置 (1/40,000) [明治33年、陸地測量部発行]

表7 1号住居跡(東西軸)計測表

主軸方向	欠番	南北主柱間	東西主柱間	主軸柱間	主軸間柱間	番号	柱 穴		柱 痕
東 西	P61	$P_{11}-P_{14}$	$P_{11}-P_{12}$	P_{21} -南北0	$P_{31}-P_{32}$		標 高	深 さ	標 高
N-63°-E		2.68	3.32	2.20	1.22	P ₁₁			
		$P_{12}-P_{13}$	$P_{14}-P_{13}$	P_{22} -南北0		P ₁₂			
		2.89	3.28	2.23		P ₁₃			
	平均	2.79	3.30	2.22	P ₂₁ -P ₁₁	P ₁₄			
		補柱間	施設柱間	環柱間	1.39	平均			
		$P_{61}-P_{62}$	$P_{61}-P_{62}$	$P_{71}-0$	$P_{11}-P_{71}$	P ₂₁			
		2.74	2.34※	2.08	1.73	P ₂₂			
				$P_{72}-0$	$P_{71}-P_{12}$	P ₃₁			
				2.27	1.88	P ₃₂			
			平均	2.18	$P_{12}-P_{22}$	P ₇₁			
				測点A	1.60	P ₇₂			
				$P_{11}-0$	$P_{22}-P_{13}$	P ₆₁			
				2.19	1.54	P ₆₂			
				$P_{12}-0$	$P_{13}-P_{72}$	P ₆₁			
				2.34	1.67	P ₆₁			
				$P_{13}-0$	$P_{72}-P_{14}$	P ₆₂			
				2.25	2.03	P ₆₃			
				$P_{14}-0$	$P_{14}-P_{21}$	P ₆₁			
				2.05	1.50	P ₆₂			
			平均	2.21	1.67	P ₆₃			

※ $P_{61}-P_{62}=(P_{62}-東西0) \times 2$
 $=1.17 \times 2$
 $=2.34$

表8 1号住居跡算出表

算出部	内 訳	倍率	仮数×倍率	基数×倍率
東西主柱間	3.30	12	▲3.30	2.216
南北主柱間	2.79	10	●2.79	
主軸柱間	2.22	8		
主軸間柱間	1.22	4.5	▲1.24	
P62-東西0	1.17	4	●1.116	
主柱間差	(東西主柱間)-(南北主柱間)=3.30-2.79=0.51	2	▲0.55	
環状柱列半径 r	{(環柱間)+(測点A)} $\frac{1}{2}$ =(2.18+2.21) $\frac{1}{2}$ =2.20	8	▲2.20	
床面半径 R	(環柱列半径) $\times \frac{2}{3}$ =2.20 $\times \frac{2}{3}$ =3.30	12	▲3.30	
$P_{11}-P_{14}$ 内面積	(4.19 \times 2.13) $\frac{1}{2}$ +(4.19 \times 2.27) $\frac{1}{2}$ =4.46235+4.75565=9.218m ²			
環状柱列内面積	$\pi r^2=15.1976m^2$			
床面積	$\pi R^2=34.1946m^2$			
中央土壇D11面積	(0.2 ² \times 14)+(0.05 ² \times 167)+(0.05 ² \times 78) $\frac{1}{2}$ = =0.56+0.4175+0.0975=1.075			
D ₁₁ 半径 r ₁₁	r ₁₁ =0.585	2	●0.558	

▲仮数 a=0.275 基数=0.277 ●仮数 b=0.279

表9 2号住居跡計測表

主軸方向	欠番	東西主柱間	南北主柱間	主軸柱間	測点 B	番号	柱 穴		柱 痕			
							標 高	深 さ		標 高		
南 北 N-15°-E	P ₆₁	P ₁₁ -P ₁₄	P ₁₁ -P ₁₂	P ₂₁ -南北O	P ₂₁ -P ₁₁	P ₁₁ P ₁₂ P ₁₃ P ₁₄ 平均 P ₂₁ P ₂₂ 平均 P ₇₁ P ₇₂ P ₇₃ P ₇₄ P ₇₅ P ₇₆ 平均 P ₆₁ P ₆₂ P ₆₁ P ₆₂ P ₆₃ P ₆₄ P ₆₅ P ₆₆ P ₆₇						
		4.06	4.31	2.57	2.05							
		P ₁₂ -P ₁₃	P ₁₄ -P ₁₃	P ₂₂ -南北O	P ₁₁ -P ₇₁							
		3.88	4.01	1.94	1.82							
		平均	3.97	4.16	2.26					P ₇₁ -P ₇₂		
		1.54	施設柱間		測点 O ₂					測点 O ₃	測点 A	測点 O ₄
		P ₆₁ -P ₆₂	P ₇₆ -O ₂	P ₇₄ -O ₃	P ₁₁ -O ₁					P ₇₁ -O ₄	P ₇₂ -P ₇₃	
		2.10※	3.81	2.64	3.03					3.38	1.70	
		P ₁₃ -O ₂	P ₇₃ -O ₃	P ₁₂ -O ₁	P ₁₁ -O ₄					P ₇₃ -P ₇₄		
		3.66	2.81	2.81	3.28					1.91		
P ₇₅ -O ₂	P ₇₂ -O ₃	P ₁₃ -O ₁	P ₂₁ -O ₄	P ₇₄ -P ₇₅								
3.62	2.66	2.86	3.22	2.61								
平均	3.70	2.70	P ₁₄ -O ₁	P ₁₄ -O ₄	P ₇₅ -P ₁₃							
			2.78	3.52	1.87							
		平均	2.87	P ₇₇ -O ₄	P ₁₃ -P ₇₆							
				3.42	1.72							
			平均	3.36	P ₇₆ -P ₇₇							
					1.45							
					P ₇₇ -P ₁₄							
					1.35							
					P ₁₄ -P ₂₁							
					2.07							
				平均	1.83							

※ P₆₁-P₆₂=(P₆₂-南北O)×2
 =1.05×2
 =2.10

表10 2号住居跡算出表

算 出 部	内 訳	倍率	仮数×倍率	基数×倍率
東西主柱間	4.16	15		4.155
南北主柱間	3.97	14.5	▲3.99	
主軸柱間	2.26	8	●2.23	
主柱間差	4.16-3.97=0.19	0.5	●0.14	
環状柱列半径 r	{(測点O ₂)+(測点O ₃)+(測点O ₄)} $\frac{1}{3}$ = =(3.70+2.70+3.36) $\frac{1}{3}$ =3.26	12	▲3.30	
床面半径 R	(環状柱列半径 r)× $\frac{1}{2}$ =3.26× $\frac{1}{2}$ =1.63	15.5	●4.33	
P ₁₁ ~P ₁₄ 内面積	(5.60×3.11) $\frac{1}{2}$ +(5.60×2.79) $\frac{1}{2}$ =8.708+7.812=16.52m ²			
環状柱列内面積	$\pi r^2=33.3707m^2$			
床面積	$\pi R^2=59.4167m^2$			
中央土壇D ₁₁ 面積	(0.2 ² ×12)+(0.05 ² ×88)+(0.05 ² ×57) $\frac{1}{2}$ =0.48+0.22+0.0715 =0.77125m ²			
D ₁₁ 半径 r	D ₁₁ r=0.496	2	▲0.55	

▲仮数 a = 0.275 基数 = 0.277 ●仮数 b = 0.279

表11 3号住居跡計測表

主軸方向	欠番	東西主柱間		南北主柱間		測点 O ₂		測点 B		番号	柱 穴		柱 痕
		標高	深さ	標高	深さ	標高	深さ	標高	深さ		標高	深さ	
南 北 N-9°-E	P ₆₁ ・P ₆₂	P ₁₁ -P ₁₄		P ₁₁ -P ₁₂		P ₇₁ -O ₂		P ₇₁ -P ₁₁		P ₇ P ₁₂ P ₁₃ P ₁₄			
		5.88		4.70		3.48		1.90					
		P ₁₂ -P ₁₃		P ₁₄ -P ₁₃		P ₁₁ -O ₂		P ₁₁ -P ₇₃		平均			
		4.74		4.38		3.53		1.52					
		平均		5.31		4.54		P ₇₃ -O ₂		平均			
								P ₇₃ -P ₇₅					
		施設柱間		主軸柱間		測点 A		3.48					
		P ₆₁ -P ₆₂		P ₂₁ -東西O ₁		P ₁₁ -O ₁		P ₇₅ -O ₁		平均			
		0.60※2		2.46		3.78		3.38					
				P ₂₂ -東西O ₁		P ₁₂ -O ₁		P ₁₂ -O ₂		平均			
				2.97※1		3.27		3.48					
				平均		2.72		P ₁₃ -O ₁		平均			
								3.25					
								3.30		平均			
								2.47					
								P ₁₄ -O ₁		平均			
								3.61					
								3.52		平均			
								1.98					
								3.48		平均			
								P ₇₆ -O ₂					
								3.45		平均			
								P ₇₆ -P ₇₄					
								0.97		平均			
								P ₇₄ -O ₂					
								3.44		平均			
								P ₇₄ -P ₁₄					
								1.70		平均			
								P ₁₄ -O ₂					
								3.47		平均			
								P ₁₄ -P ₇₂					
								1.67		平均			
								P ₇₂ -O ₂					
								3.47		平均			
								P ₇₂ -P ₇₁					
								0.97		平均			
								P ₇₂ -O ₂					
								3.62		平均			
								P ₇₂ -P ₇₁					
								3.28		平均			
								P ₇₂ -P ₇₁					
								1.95		平均			
								P ₇₂ -P ₇₁					

※1 P₂₂と(P₁₂-P₁₃柱列)の間
 ={(P₁₁-P₁₂柱列とP73-75柱列の間)
 +(P₁₃-P₁₄柱列とP74-76柱列の間)} $\frac{1}{2}$
 =(0.76+0.68) $\frac{1}{2}$
 =0.72

※2 P₆₁-P₆₂=(P₆₂-南北O₁)×2
 =0.80×2
 =1.60

表12 3号住居跡算出表

算出部	内	訳	倍率	仮数×倍率	基数×倍率
東西主柱間 P ₁₁ -P ₁₄	5.88		21	●5.86	
東西主柱間 P ₁₂ -P ₁₃	4.74		17		4.71
南北主柱間 P ₁₁ -P ₁₂	4.70		17		4.71
南北主柱間 P ₁₄ -P ₁₃	4.38		16	▲4.40	
東西主柱間差	5.88-4.74=1.14		4	●1.12	
南北主柱間差	4.70-4.38=0.32		1	●0.279	
主 軸 柱 間	2.72		10	▲2.75	
環状柱列半径 r	測点O ₂ =3.47		12.5		3.46
床 面 半 径 R	(環状柱列半径 r)× $\frac{1}{2}$ =4.63		16.5	●4.60	
P ₁₁ -P ₁₄ 内面積	(6.86×3.96) $\frac{1}{2}$ +(6.86×2.97) $\frac{1}{2}$ =13.5828+10.1871=23.7699m ²				
環状柱列内面積	πr^2 =37.8084m ²				
床 面 積	πR^2 =67.3119m ²				
中央土壇D ₁₁ 面積	(0.2 ² ×36)+(0.05 ² ×191)+(0.05 ² ×106) $\frac{1}{2}$ =1.44+0.4775+0.1325=2.05m ²				
中央土壇D ₁₂ 面積	(0.2 ² ×12)+(0.05 ² ×131)+(0.05 ² ×75) $\frac{1}{2}$ =0.48+0.3275+0.09375=0.90125m ²				

▲仮数 a=0.275 基数=0.277 ●仮数 b=0.279

表13 4号住居跡計測表

主軸方向	欠番	南北主柱間	東西主柱間	施設柱間	測点 A	番号	柱穴		柱痕
							標高	深さ	
東西 N-15°-E	P ₁₂ ・P ₁₄ M ₂₃	P ₁₁ -P ₁₄	P ₁₁ -P ₁₂	P ₈₁ -P ₈₂ 1.51	P ₁₁ -O	P ₁₁ P ₁₂ P ₁₃ P ₁₄			
		P ₁₂ -P ₁₃	P ₁₄ -P ₁₃	測点間 P ₈₁ -南北O	P ₁₂ -O				
		平均 (2.72)	(4.18)	1.17	P ₁₃ -O	平均			
		補柱間 P ₈₁ -P ₈₂ 2.62			P ₁₄ -O	P ₈₁ P ₈₂			
				平均	(2.49)	P ₉₁			

表14 4号住居跡算出表

算出部	内訳	倍率	仮数×倍率	基数×倍率
主柱間差	(東西主柱間)-(南北主柱間)=4.18×2.72=1.46	5.5	▲1.51	2.49
主柱列半径 r	測点A=2.49	9		
北・南床面半径 R _N ・R _S	R _N =R _S ={(東西主柱間)½}⅓=4.18×½×⅓=2.09	7.5	●2.09	
東・西床面半径 R _E ・R _W	R _E =R _W ={(東西主柱間)½}⅓=4.18×½×⅓=2.79	10	●2.79	
N・E・S・W壁 ~主柱列間	N=E=S=W={ (東西主柱間)½ }⅓ =2.09×⅓=0.696≒0.70(仮数 c)	2.5	●0.70	
P ₁₁ ~P ₁₄ 内面積	(南北主柱間)×(東西主柱間)=2.72×4.18=11.3936㎡			
床面積	2 R _N ×2 R _E =2 R _S ×2 R _W =4 (2.09×2.79)=23.3244㎡			

▲仮数 a=0.275 基数=0.277 ●仮数 b=0.279

表15 5号住居跡計測表

主軸方向	欠番	南北主柱間	東西主柱間	施設柱間	測点 A	番号	柱穴		柱痕
							標高	深さ	
東西 N-77.5° -W	P ₁₁ ・P ₁₃ P ₁₄ ・P ₈₂ M ₂₂ ・M ₂₃ D ₁₁	P ₁₁ -P ₁₄	P ₁₁ -P ₁₂		P ₁₁ -O	P ₁₁ P ₁₂ P ₁₃ P ₁₄			
			4.34※2		P ₁₂ -O				
		平均 (2.72)※1	4.34		P ₁₃ -O	平均			
		補柱間 P ₈₁ -P ₈₂ (2.72)			P ₁₄ -O	P ₈₁ P ₈₂			
				平均	(2.56)				

※1 東西主柱間=4号住居跡南北主柱間

※2 P₁₁-P₁₂=(P₈₁-P₁₂)×2=2.17×2=4.34

表16 5号住居跡算出表

算出部	内 訳	倍率	仮数×倍率	基数×倍率
主 柱 間 差	(東西主柱間)-(南北主柱間)=4.34-2.72=1.62	6	▲1.65	
主柱列半径 r	測点A=2.56	9	●2.51	
北・南床面半径 R _N ・R _S	R _N =R _S ={(東西主柱間)½}⅓=4.34×½×⅓=2.17	8	●2.24	
西床面半径 R _E ・R _W	R _E =R _W ={(東西主柱間)½}⅓=4.34×½×⅓=2.89	10	●2.80	
M ₂₄ 半径R _{M24}	R _{M24} =R _N =R _S =2.17	8	●2.24	
N・E・S・W壁 ~主柱間	N=E=S=W={ (東西主柱間)½ }⅓ =4.34×½×⅓=2.17×⅓=0.723≒0.72	2.5	●0.70	
P ₁₁ ~P ₁₄ 内面積	(南北主柱間)×(東西主柱間)=2.72×4.34=11.8084㎡			
床 面 積	(R _N +R _S)×(R _E +R _W)=(2.17×2)×(2.89×2) =4.34×5.78=25.0852㎡			
東床面半径R _E	R _E ={(東西主柱間)½}⅓=4.34×½×⅓=3.616≒3.62			

▲仮数 a = 0.275 基数 = 0.277 ●仮数 b = 0.279

表17 6号A(新)住居跡計測表

主軸方向	欠 番	南北主柱間	東西主柱間	主軸柱間	測点 A	番号	柱 穴		柱 痕	
							標 高	深 さ		標 高
東 西 N-79°-W	AP ₂₁ ・AP ₅₃ AP ₁₄ ・AP ₅₁ AP ₅₃ ・AP ₅₄ AD ₁₁ ・AM ₂₁ ~AM ₂₄	AP ₁₁ -AP ₁₄	AP ₁₁ -AP ₁₂	AP ₂₁ -南北O	AP ₁₁ -O	P ₁₁ P ₁₂ P ₁₃ P ₁₄ 平均				
		3.51	3.04	(1.53)	2.25					
		AP ₁₂ -AP ₁₃	AP ₁₄ -AP ₁₃	AP ₂₂ -南北O	AP ₁₄ -O					
		3.00	3.11	1.57	2.19					
		平均	3.26	3.08	1.55		AP ₁₃ -O			
		補柱間			2.09					
		AP ₅₁ -AP ₅₂			AP ₁₄ -O					
		3.18			2.41					
		測 点 間			平均		2.24			
		AP ₅₁ -AP ₁₁	AP ₅₁ -AP ₁₁		測点間					
1.58	1.10		AP ₅₅ -南北O							
AP ₅₂ -AP ₁₂	AP ₅₂ -AP ₁₂		0.67							
1.48	1.08		AP ₅₅ -東西O							
平均	1.53	1.10	0.25							

表18 6号A(新)住居跡算出表

算出部	内 訳	倍率	仮数×倍率	基数×倍率
主 柱 間 差	(南北主柱間)-(東西主柱間)=3.26-3.08=0.18	0.5	●0.14	
主柱列半径 r	測点A=2.24	8	●2.24	
北・南床面半径 R _N ・R _S	R _N =R _S ={(東西主柱間)½}⅓=3.08×½×⅓=2.695 ≒2.70	10	▲2.75	
東・西床面半径 R _E ・R _W	R _E =R _W ={(東西主柱間)½}⅓=3.08×½×⅓=3.85	14	▲3.85	
N・S 壁 ~主柱列間	N=S={ (東西主柱間)½ }⅓=1.54×⅓=1.155≒1.16	4	●1.12	
E・W 壁 ~主柱列間	E=W={ (東西主柱間)½ }⅓×3=1.54×⅓×3=2.31	8	●2.23	
P ₅₁ ・P ₅₂ ~主柱列間	P ₅₁ =P ₅₂ ={(東西主柱間)½}⅓=1.54×⅓=0.308≒0.31	1	●0.28	
P ₁₁ ~P ₁₄ 内面積	{(4.59×2.32)½}+(4.59×2.02)½=5.3244+4.6359=9.9603㎡			
床 面 積	2R _N ×2R _E =2R _S ×2R _W =4(2.70×3.85)=41.5800㎡			

▲仮数 a = 0.275 基数 = 0.277 ●仮数 b = 0.279

表19 6号B(古)住居跡計測表

主軸方向	欠番	南北主柱間	東西主柱間	測点A	番号	柱穴	柱痕	
東西 N-75°-W	BP ₁₃ ・BP ₁₄	BP ₁₁ -BP ₁₄	BP ₁₁ -BP ₁₂	BP ₁₁ -O	BP ₁₁	標高	深さ	
	BP ₈₂ ・BM ₂₃	5.14						BP ₁₂ -O
	BM ₂₄	BP ₁₂ -BP ₁₃	BP ₁₄ -BP ₁₁					
平均	(4.22)※	5.14	BP ₁₃ -O	平均				
	補柱間			BP ₁₄ -O				
	BP ₈₁ -BP ₈₂							
	(4.22)			平均				
※ 南北主柱間=13号住居跡の東西主柱間				平均	3.33			

表20 6号B(古)住居跡算出表

算出部	内訳	倍率	仮数×倍率	基数×倍率
主柱間差	(東西主柱間)-(南北主柱間)=5.14-4.22=0.92	3.5	▲0.96	
主柱列半径 r	測点A=3.33	12		3.32
北~西床面半径 R _N ~R _W	R _N =R _E =R _S =R _W =r=3.33	12		3.32
N・S壁 ~主柱列間	N=S=r-(南北主柱間)½=3.33-(4.22×½) =3.33-2.11=1.22	4.5	▲1.24	
E・W壁 ~主柱列間	E=W=r-(東西主柱間)½=3.33-(5.14×½) =3.33-2.57=0.76	2.5	●0.70	
BP ₁₁ ~BP ₁₄ 内面積	(南北主柱間)×(東西主柱間)=4.22×5.14=21.6908㎡			
床面積	2R _N ×2R _E =2R _S ×2R _W =4r²=44.3556㎡			

▲仮数=0.275 基数=0.277 ●仮数b=0.279

表21 7号A(新)住居跡計測表

主軸方向	欠番	南北主柱間	東西主柱間	主軸柱間	測点A	番号	柱穴	柱痕	
東西 N-84°-W	P ₁₂ ~P ₁₄	P ₁₁ -P ₁₄	P ₁₁ -P ₁₂	P ₂₁ -南北O	P ₁₁ -O	P ₁₁	標高	深さ	
	M ₂₃ ・M ₂₄	P ₁₂ -P ₁₃	P ₁₄ -P ₁₃	P ₂₂ -南北O					P ₁₂ -O
	D ₁₁								
平均	2.24※1	2.76※2	2.86※3	P ₁₃ -O	平均				
				P ₁₄ -O	P ₂₁				
				平均	P ₂₂				
				平均	平均				
※1 南北主柱間=(P ₁₁ -東西O)×2=1.12×2=2.24									
※2 東西主柱間=(P ₁₁ -南北O)×2=1.38×2=2.76									
※3 主軸柱間=(P ₂₁ -P ₂₂)½=5.72×½=2.86									
※4 測点A=√(P ₁₁ -東西O)²+(P ₁₁ -南北O)²									
=√1.12²+1.38²=√1.2544+1.9044									
=√3.1588=1.78				平均 1.78※4					

表22 7号A(新)住居跡算出表

算出部	内訳	倍率	仮数×倍率	基数×倍率
主柱間差	(東西主柱間)-(南北主柱間)=2.76-2.24=0.52	2	▲0.55	
主柱列半径 γ	測点A=1.78	6.5	▲1.79	
北・南床面半径 R _N ・R _S	R _N =R _S =(東西主柱間)½×2=2.76×½×2=2.76	10	▲2.75	
東・西床面半径 R _E ・R _W	R _E =R _W =(東西主柱間)½×2.5=2.76×½×2.5=3.45	12.5	▲3.44	
P ₁₁ ~P ₁₄ 内面積	(南北主柱間)×(東西主柱間)=2.24×2.76=6.1824㎡			
床面積	2R _N ×2E _N =2R _S ×2R _W =4(2.76×3.45)=38.0880㎡			

▲仮数a=0.275 基数=0.277 ●仮数b=0.279

表23 8号A(新)住居跡計測表

主軸方向	欠番	南北主柱間	東西主柱間	測点A	番号	柱穴		柱痕
						標高	深さ	
東西 N-85°-E	AP ₁₂ ・AP ₁₄	AP ₁₁ -AP ₁₄	AP ₁₁ -AP ₁₂	AP ₁₁ -O	AP ₁₁			
			3.99		AP ₁₂			
		AP ₁₂ -AP ₁₃	AP ₁₄ -AP ₁₃	AP ₁₂ -O	AP ₁₃			
		平均 (3.99)	3.99	AP ₁₃ -O	AP ₁₄			
				AP ₁₄ -O	平均			
				平均				2.82

表24 8号A(新)住居跡算出表

算出部	内訳	倍率	仮数×倍率	基数×倍率
主柱間差	0			
主柱列半径 γ	測点A=2.81	10	●2.79	
北・南・東・西 床面半径R	$R_N=R_S=R_E=R_W=\{(東西主柱間)\frac{1}{2}\} \cdot 3.5/2$ $=3.99 \times \frac{3}{4} = 3.49$	12.5	●3.49	
P ₁₁ ~P ₁₄ 内面積	(南北主柱間)×(東西主柱間)=3.99×3.99=15.9201㎡			
床面積	$2R_N \times 2R_E = 2R_S \times 2R_W = 4(3.99 \times 3.99) = 63.6804 \text{㎡}$			
仮数 c	$\{(東西主柱間)\frac{1}{2}\} \cdot \frac{1}{2} = 0.9975$	3.5	●0.98	

▲仮数 a = 0.275 基数 = 0.277 ●仮数 b = 0.279

表25 8号B(中)住居跡計測表

主軸方向	欠番	南北主柱間	東西主柱間	測点A	番号	柱穴		柱痕
						標高	深さ	
東西 N-88.5° -W	BP ₁₂ ・BP ₁₄	BP ₁₁ -BP ₁₄	BP ₁₁ -BP ₁₂	BP ₁₁ -O	BP ₁₁			
			3.5		BP ₁₂			
		BP ₁₂ -BP ₁₃	BP ₁₄ -BP ₁₃	BP ₁₂ -O	BP ₁₃			
		平均 (3.55)	3.55	BP ₁₃ -O	BP ₁₄			
				BP ₁₄ -O	平均			
				平均				2.51

表26 8号B(中)住居跡算出表

算出部	内 訳	倍率	仮数×倍率	基数×倍率
主 柱 間 差	0			
主 柱 列 半 径 r	測点A=2.51	9	●2.51	
北・南・東・西 床面半径R	$R_N=R_S=R_E=R_W=\{(東西主柱間)\frac{1}{2}\}^{\frac{3}{2}}$ $=3.55\times\frac{3}{4}=3.11$	11	●3.07	
P ₁₁ ~P ₁₄ 内面積	(南北主柱間)×(東西主柱間)=3.55×3.55=12.6025㎡			
床 面 積	2R _N ×2R _E =2R _S ×2R _W =4(3.55×3.55)=50.41㎡			
仮 数 c	$\{(東西主柱間)\frac{1}{2}\}^{\frac{1}{2}}=0.8875$	3	●0.84	

▲仮数 a=0.275 基数=0.277 ●仮数 b=0.279

表27 8号C(古)住居跡計測表

主軸方向	欠 番	東西主柱間	南北主柱間	測 点 A	番 号	柱 穴		柱 痕	
						標 高	深 さ	標 高	
南 北 N-11.5° -E	CP ₁₁ -CP ₁₄	CP ₁₁ -CP ₁₄	CP ₁₁ -CP ₁₂		CP ₁₁ -O				
		CP ₁₂ -CP ₁₃	CP ₁₄ -CP ₁₃		CP ₁₂ -O				
		平均	(3.00)	(4.00)		CP ₁₃ -O			
						CP ₁₄ -O			
		平均	(2.50)						

表28 8号C(古)住居跡算出表

算出部	内 訳	倍率	仮数×倍率	基数×倍率
主 柱 間 差	(南北主柱間)-(東西主柱間)=3.99-2.9925=0.9975	3.5	●0.98	
主 柱 列 半 径 r	測点A=2.50	9	●2.51	
北・南床面半径R	$2R_N=2R_S=\{(南北主柱間)\frac{1}{2}\}2.5/2=3.99\times2.5/4=2.50$	7	●2.51	
東・西床面半径R	$2R_E=2R_W=\{(南北主柱間)\frac{1}{2}\}^{\frac{3}{2}}=3.99\times\frac{3}{4}=1.995$	9	●1.95	
P ₁₁ ~P ₁₄ 内面積	(東西主柱間)×(南北主柱間)=2.9925×3.99=11.9401㎡			
床 面 積	$(R_N+R_S)(R_E+R_W)=(2.50\times2)(1.995\times2)=19.95㎡$			
仮 数 c	$\{(南北主柱間)\frac{1}{2}\}^{\frac{1}{2}}=0.9975$	3.5	●0.98	

▲仮数 a=0.275 基数=0.277 ●仮数 b=0.279

表29 10号A(新)住居跡計測表

主軸方向		欠番	東西主柱間	南北主柱間	測点O ₂	測点B	番号	柱穴		柱痕
南北		AP ₁₁ ・AP ₁₄ AP ₂₁ ・AP ₃₁ AM ₂₁ ・AM ₂₄	AP ₁₁ -AP ₁₄	AP ₁₁ -AP ₁₂	AP ₁₁ -O ₂	AP ₂₁ -AP ₁₁		標高	深さ	標高
N-15°-E				3.38※1	3.02	1.93	AP ₁₁			
			AP ₁₂ -AP ₁₃	AP ₁₄ -AP ₁₃	AP ₁₂ -O ₂	AP ₁₁ -AP ₇₁	AP ₁₂			
			3.09		2.99	1.77	AP ₁₃			
		平均	3.09	3.38	AP ₇₂ -O ₂	AP ₇₁ -AP ₁₂	AP ₁₄			
					3.04	1.77	平均			
主軸柱間	測点A	測点O ₃	主軸間柱間							
AP ₂₁ —東西O ₁ (2.84)	AP ₁₁ -O ₁	AP ₇₅ -O ₃	AP ₃₁ -AP ₃₂	AP ₇₃ -O ₂	AP ₁₂ -AP ₇₂					
		3.16	0.6※3	3.01	1.78					
AP ₂₂ —東西O ₁ 1.76	AP ₁₂ -O ₁	AP ₇₆ -O ₃		AP ₇₄ -O ₂	AP ₇₂ -AP ₇₃					
		(3.02)		3.03	9.80					
平均	2.30	AP ₁₃ -O ₁	AP ₇₇ -O ₃	平均	3.02	AP ₇₃ -AP ₇₄				
	測点間		(3.02)		AP ₂₁ -O ₂	1.53				
	AP ₇₅ -AP ₁₃	AP ₁₄ -O ₁	AP ₇₈ -O ₃		(3.02)	AP ₇₄ -AP ₇₅				
	1.33※2		(3.02)		AP ₇₁ -O ₂	1.23				
	平均	(2.29)	(3.02)		(3.02)	AP ₇₅ -AP ₇₆				
				平均	(3.02)	1.75				
						AP ₇₆ -AP ₇₇				
						1.74				
						AP ₇₇ -AP ₇₈				
						1.80				
						AP ₇₈ -AP ₂₁				
						1.54				
						平均				
						1.62				

※1 AP₁₁-AP₁₂=(AP₁₁-AP₈₁)×2
=1.69×2
=3.38

※2 AP₇₅-AP₁₃=(AP₁₂-AP₂₁)
=1.33

※3 AP₃₁-AP₃₂=(AP₃₂-南北O₁)×2=0.3×2=0.6

表30 10号A(新)住居跡算出表

算出部	内訳	倍率	仮数×倍率	基数×倍率
主柱間	{(東西主柱間)+(南北主柱間)} $\frac{1}{2}$ =(3.09+3.38) $\frac{1}{2}$ =3.24	11.5	●3.20	
環状柱列半径 r	{(測点O ₂)+(測点O ₃)} $\frac{1}{2}$ =(3.02+3.02) $\frac{1}{2}$ =3.02	11	▲3.02	
床面半径 R	(環状柱列半径 r)× $\frac{4}{3}$ =3.02× $\frac{4}{3}$ =4.03	14.5	●4.05	
AP ₁₁ ~AP ₁₄ 内面積	3.09×3.38=10.4442m ²			
環状柱列内面積	πr^2 =28.6381m ²			
床面積	πR^2 =50.9964m ²			

●仮数 a = 0.275 基数 = 0.277 ▲仮数 b = 0.279

表31 11号住居跡計測表

主軸方向	欠番	南北主柱間	東西主柱間	主軸間柱間	測点 A	番号	柱 穴		柱 痕
							標高	深 さ	
東 西 N-7°-E	P ₁₁ -P ₁₄ P ₃₁ ・P ₃₂ P ₃₄ ・M ₂₁ M ₂₄	P ₁₁ -P ₁₄	P ₁₁ -P ₁₂	P ₃₁ -P ₃₂	P ₁₁ -O	P ₁₁			
		P ₁₂ -P ₁₃	P ₁₄ -P ₁₃	P ₃₃ -P ₃₄	P ₁₂ -O	P ₁₂			
						P ₁₃			
	平均	(4.18)	(2.72)	(1.51)	P ₁₃ -O				
					P ₁₄ -O				
				平均	(2.49)				
						P ₃₁			
						P ₃₂			
						P ₃₃			
						P ₃₄			
						平均			
						P ₅₁			
						P ₅₂			

表32 11号住居跡算出表

算 出 部	内 訳	倍率	仮数×倍率	基数×倍数
主 柱 間 差	(南北主軸間)-(東西主軸間)=4.18-2.72=1.46	5.5	▲1.51	2.49
主 柱 列 半 徑 r	測点A=2.49	9		
北・東・西床面半径	R _N =R _E =R _W ={(東西主柱間)½}½=2.72×½×½=2.04	7.5	▲2.06	
南 床 面 半 徑	R _S ={(東西主柱間)½}½=2.72	10	▲2.75	
P ₁₁ ~P ₁₄ 内面積	(南北主柱間)×(東西主柱間)=4.18×2.72=11.3696㎡			
床 面 積	(R _N +R _S)×(R _E +R _W)=4.76×4.08=19.4208㎡			
仮 数 c	{(東西主柱間)½}½=0.68	2.5	▲0.69	

▲仮数 a=0.275 基数=0.277 ●仮数 b=0.279

表33 12号住居跡計測表

主軸方向	欠番	南北主柱間	東西主柱間	主軸柱間	測点 A	番号	柱 穴		柱 痕
							標高	深 さ	
東 西 N-81°-M	P ₁₁ ・P ₁₄ P ₃₂ ・P ₃₁	P ₁₁ -P ₁₄	P ₁₁ -P ₁₂	P ₂₁ -南北O (1.73)	P ₁₁ -O	P ₁₁			
		P ₁₂ -P ₁₃	P ₁₄ -P ₁₃	主軸間柱間 4.63	P ₁₂ -O	P ₁₂			
				P ₃₁ -P ₃₂ 1.38 ^{※2}	P ₁₃ -O	P ₁₃			
	平均	4.63	(3.46) ^{※1}	1.35	P ₁₃ -O				
		P ₂₂ -P ₁₃	P ₃₁ -南北O	P ₂₂ -P ₂₁	P ₁₄ -O				
		1.88	1.30	1.35		P ₂₁			
						P ₃₁			
						P ₃₂			
						P ₃₁			
						P ₃₂			
						P ₃₁			
						P ₃₂			
						平均			
				平均	(2.89)				

※1 東西主柱間=(P12-13柱列)-P31=3.46

※2 主軸間柱間=(P31-東西O)×2=0.69×2=1.38

表34 12号住居跡算出表

算出部	内 訳	倍率	仮数×倍率	基数×倍率
主 柱 間 差	(南北主柱間)-(東西主柱間)=4.63-3.46=1.17	4	●1.12	3.46
主柱列半径 r	測点A=2.89	10.5	▲2.89	
南・東・西床面半径 R _s ・R _e ・R _w	R _s =R _e =R _w ={(東西主柱間)½}½=3.46×½×½=2.595	9.5	▲2.61	
北床面半径 R _N	R _N ={(東西主柱間)½}½=3.46×½×½=3.46	12.5		
P ₁₁ ~P ₁₄ 内面積	(南北主柱間)×(東西主柱間)=4.63×3.46=16.0198㎡			
床 面 積	2 R _e ×(R _N +R _s) = 2 R _w ×(R _N +R _s) =6.95×8.105=56.3298㎡			
仮 数 c	{(東西主柱間)½}½=3.46×¼=0.865	3	●0.84	

▲仮数 a = 0.275 基数 = 0.277 ●仮数 b = 0.279

表35 13号A(新)住居跡計測表

主軸方向	欠 番	南北主柱間	東西主柱間	主軸柱間	測点 A	番号	柱 穴		柱 痕				
							標 高	深 さ		標 高			
東 西 N-89°-N	AP ₁₁ ・AP ₁₃	AP ₁₁ -AP ₁₄ (5.12)	AP ₁₁ -AP ₁₂	AP ₂₁ -南北O	AP ₁₁ -O	AP ₁₁							
	AP ₁₄ ・AP ₂₁						AP ₁₂ -AP ₁₃ 4.94*	AP ₁₄ -AP ₁₃	AP ₂₂ -南北O	AP ₁₂ -O	AP ₁₂		
	AP ₂₁ ・AP ₂₂											平均	AP ₂₁ -東西O 1.41
						平均							

※ AP₁₂-AP₁₃=(AP₁₂-AP₂₂)×2
=2.47×2=4.94

表36 13号A(新)住居跡算出表

算出部	内 訳	倍率	仮数×倍率	基数×倍率
主 柱 間 差	(南北主柱間)-(東西主柱間)=5.03-4.22=0.81	3	▲0.83	3.32
主柱列半径 γ	測点A=3.32	12		
北・東・西床面半径 R _N ・R _e ・R _w	R _N =R _e =R _w ={(東西主柱間)½}½=4.22×½×½=3.165	11.5	▲3.16	
南床面半径 R _s	R _s ={(東西主柱間)½}3.5/2=4.22×½×3.5/2=3.9625	14.5	▲3.99	
AP ₁₁ ~AP ₁₄ 内 面 積	(南北主柱間)×(東西主柱間)=5.03×4.22=21.2266㎡			
床 面 積	2 R _e ×(R _N +R _s) = 2 R _w ×(R _w +R _s) =6.33×7.1275=45.1171㎡			
AD ₁₁ 内面積				
仮 数 c	{(東西主柱間)½}½=4.22×¼=1.055	3.5	●1.10	

▲仮数 a = 0.275 基数 = 0.277 ●仮数 b = 0.279

表37 13号B(古)住居跡計測表

主軸方向	欠番	南北主柱間	東西主柱間	主軸柱間	測点 O	番号	柱 穴		柱 痕
		BP ₁₁ -BP ₁₄	BP ₁₁ -BP ₁₂	BP ₂₁ -南北O	BP ₁₁ -O		標高	深さ	
東西 N-82°-N	BP ₂₁ ・BP ₂₂					BP ₁₁			
						BP ₁₂			
		BP ₁₂ -BP ₁₃ 5.12	BP ₁₄ -BP ₁₃ 4.22*	BP ₂₂ -南北O	BP ₁₂ -O	BP ₁₃			
	平均	5.12	4.22	(2.11)	BP ₁₃ -O	BP ₁₄			
					BP ₁₄ -O	平均			
						平均			(3.32)

※ BP₁₄-BP₁₃=(BP₂₂-BP₁₃)×2
=2.11×2=4.22

表38 13号B(古)住居跡算出表

算出部	内 訳	倍率	仮数×倍率	基数×倍率
主 柱 間 差	(南北主柱間)-(東西主柱間)=5.12-4.22=0.9	▲3.5	0.96	
主 柱 列 半 徑 γ	測点A=3.32	●12		3.32
北・南・東・西床面 半 徑 R _N - _w	R _N =R _s =R _e =R _w ={(東西主柱間)½}½ =4.22×½×½=3.165	▲11.5	3.16	
BP ₁₁ ~BP ₁₄ 内 面 積	(南北主柱間)×(東西主柱間)=5.12×4.22=21.6064m ²			
床 面 積	(R _N +R _s)×(R _e +R _w)=(3.165×2) ² =40.0689m ²			
仮 数 c	{(東西主柱間)½}½=4.22×¼=1.055	▲4	1.10	

▲仮数 a =0.275 基数=0.277 ●仮数 b =0.279

版 函



1. トヲノ尾遺跡全景（南から）



2. トヲノ尾遺跡全景（西から）



1. 1980年夏 トヲノ尾遺跡予備調査伐開風景



2. 1980年夏 トヲノ尾遺跡予備調査作業風景



1. 1980年夏 トヲノ尾遺跡予備調査発掘後風景（北から）



2. 1980年夏 トヲノ尾遺跡予備調査発掘後風景（東から）



1. トヲノ尾遺跡発掘区表土剥ぎ風景（東から）



2. トヲノ尾遺跡発掘区表土剥ぎ風景（南から）



1. トヲノ尾遺跡南斜面作業風景（北から）



2. トヲノ尾遺跡南斜面作業風景（南から）



1. トヲノ尾遺跡第1頂上部作業風景（東から）



2. トヲノ尾遺跡第1頂上部発掘後風景（西から）



1. 和田A遺跡発掘調査前全景（東から）



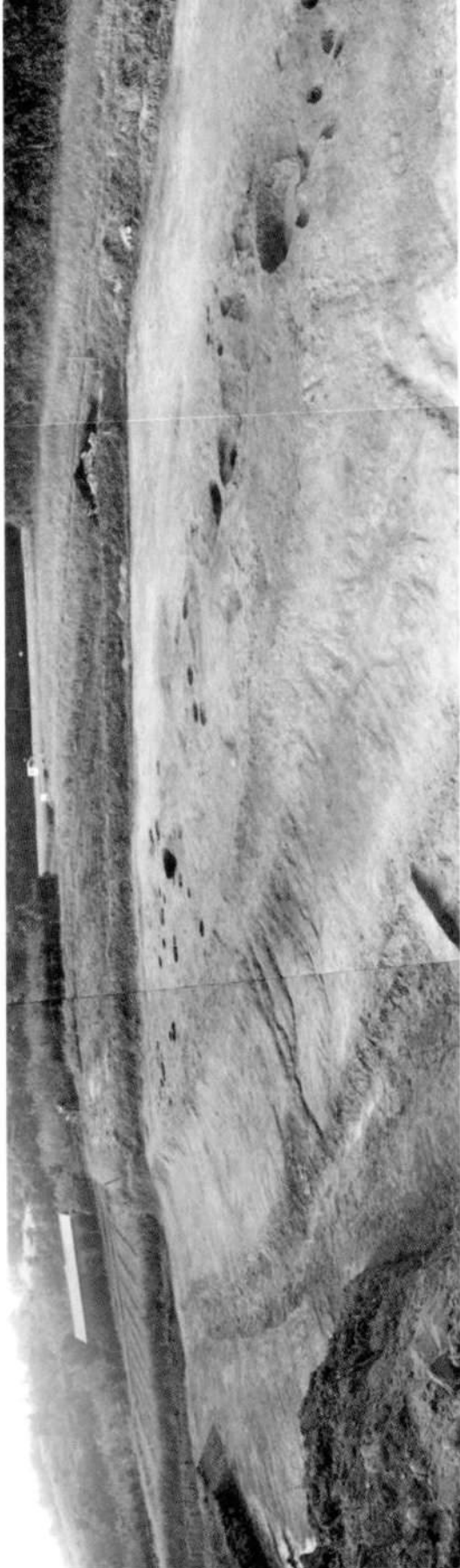
2. 和田A遺跡試掘風景（南から）



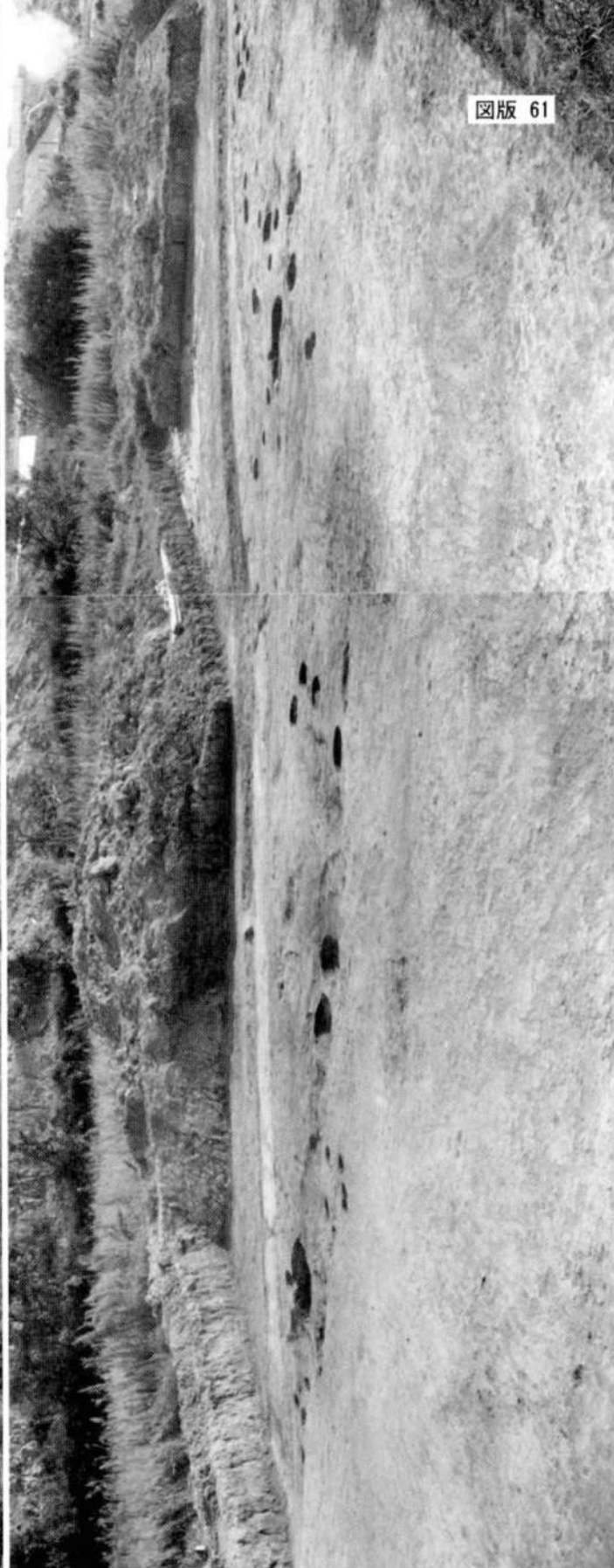
1. 和田A遺跡東側試掘風景（南から）



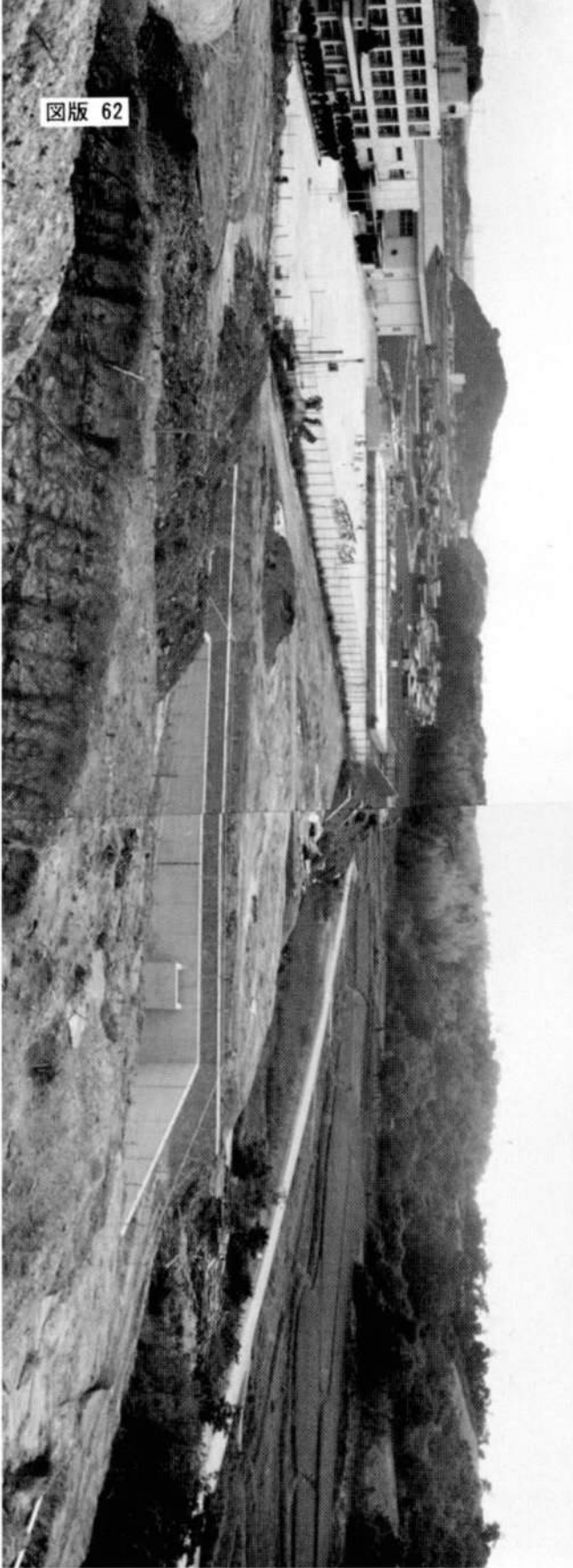
2. 和田A遺跡発掘区表土剥ぎ風景（東から）



1. 和田 A 遺跡発掘後風景 (東から)



2. 和田 A 遺跡発掘後風景 (北から)



2. 和田B遺跡及び福岡平野をみる(東から)



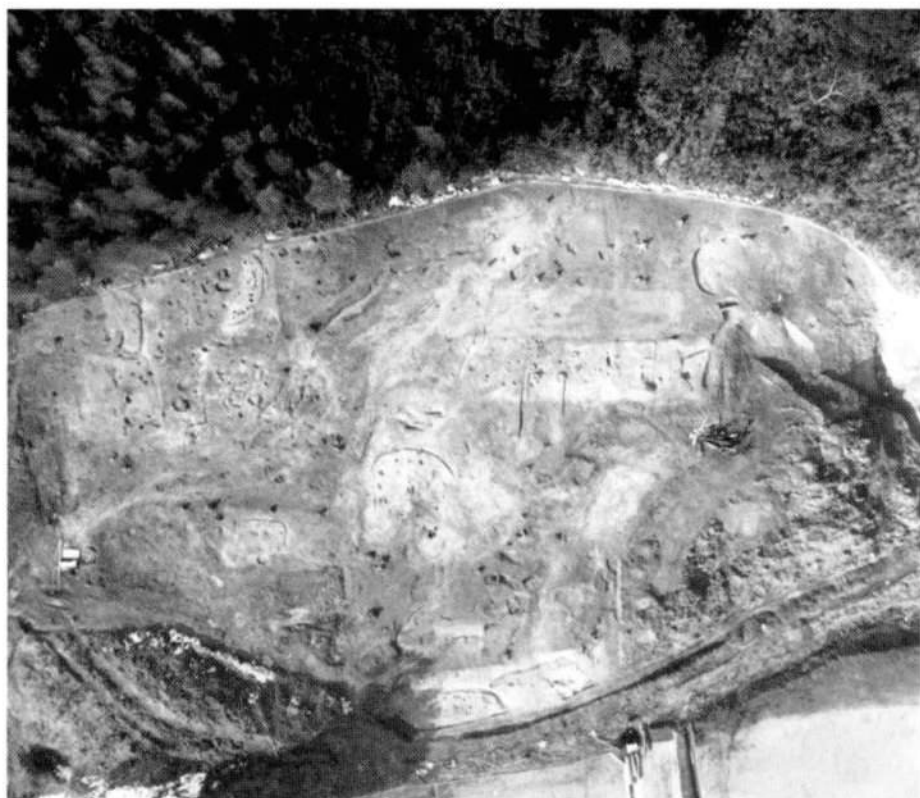
1. 和田A遺跡全景(東から)



1. トヲノ尾遺跡気球写真撮影風景



2. トヲノ尾遺跡発掘事務所及び休憩所近景



1. トラノ尾遺跡全景（真上から）



2. トラノ尾遺跡第1頂上部西南斜面遠景（真上から）



1. トヲノ尾遺跡第1頂上部南側斜面遠景（西から）



2. トヲノ尾遺跡第1頂上部南側斜面遠景（南から）



1. トヲノ尾遺跡試掘調査の東西トレンチ（東から）



2. トヲノ尾遺跡南北トレンチの2号溝状遺構出土状態（南から）



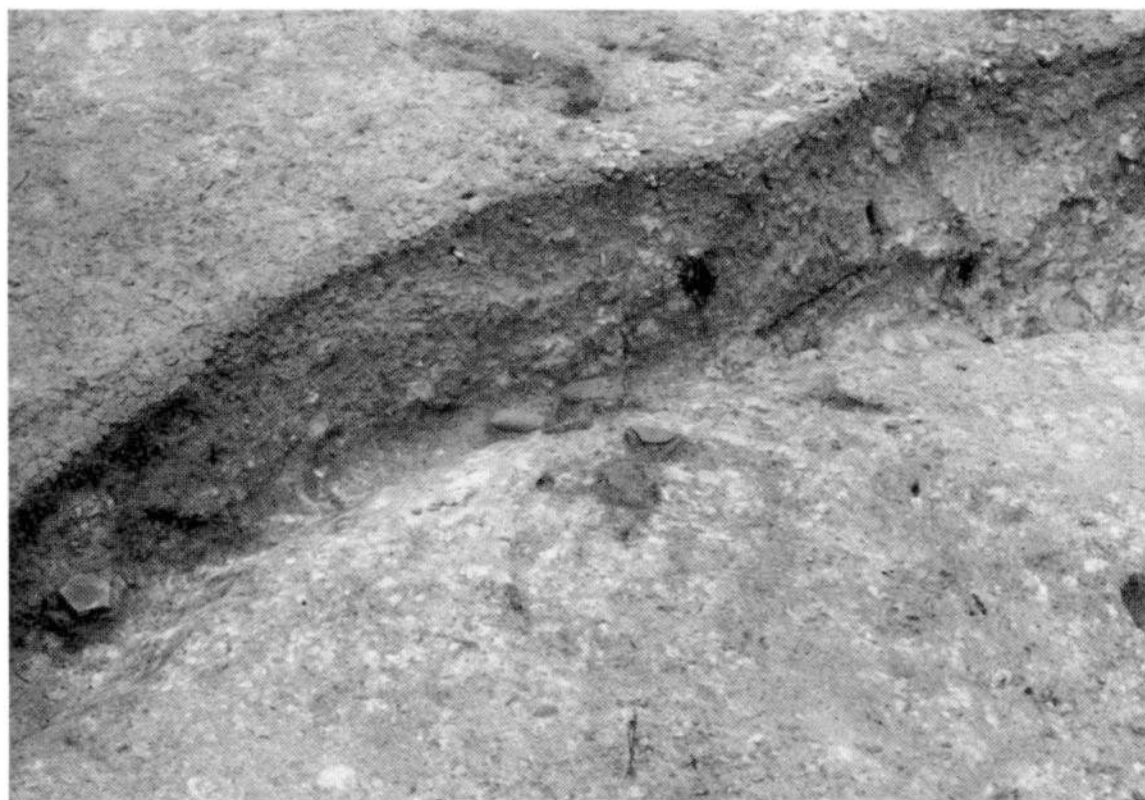
1. トヲノ尾遺跡1号住居跡(南から)



2. トヲノ尾遺跡2号住居跡と1号溝状遺構(西から)



1. トヲノ尾遺跡2号住居跡と1号溝遺構(南から)



2. トヲノ尾遺跡2号住居跡北壁部の遺物出土状態(南から)



1. トヲノ尾遺跡2号住居跡の試掘調査時の土層断面（西から）



2. 同（西から）



3. 同（西から）



1. トヲノ尾遺跡2号住居跡壁堤と壁堤外溝（西から）



2. トヲノ尾遺跡2号住居跡壁堤の土層断面（西から）



1. トヲノ尾遺跡 2号住居跡と西側緩斜面の状態（南から）



2. トヲノ尾遺跡 3号住居跡中央土壇の土層断面（南から）



1. トヲノ尾遺跡 3号住居跡と2号溝状遺構（西から）



2. トヲノ尾遺跡 3号住居跡と壁外地山整形の状態（西から）



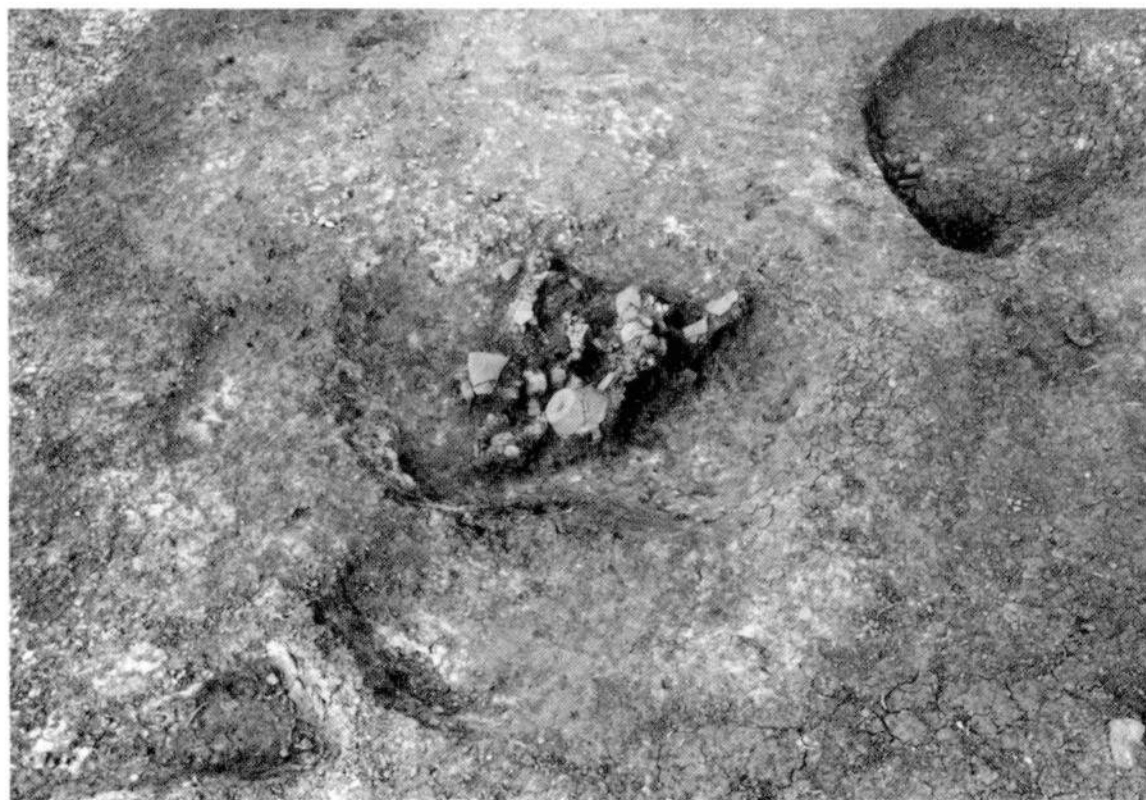
1. トヲノ尾遺跡3号住居跡の土層断面（南から）



2. トヲノ尾遺跡2号溝状遺構の土層断面（西から）



1. トヲノ尾遺跡3号住居跡周堤外溝の土器出土状態（西から）



2. 同（南から）



1. トヲノ尾遺跡4号住居跡(南から)



2. トヲノ尾遺跡5・6・10号住居跡と3号溝状遺構(南から)



1. トヲノ尾遺跡6・10号住居跡の土層断面（西から）



2. トヲノ尾遺跡10号住居跡の遺物出土状態（南から）



1. トヲノ尾遺跡10号住居跡の遺物出土状態（西から）



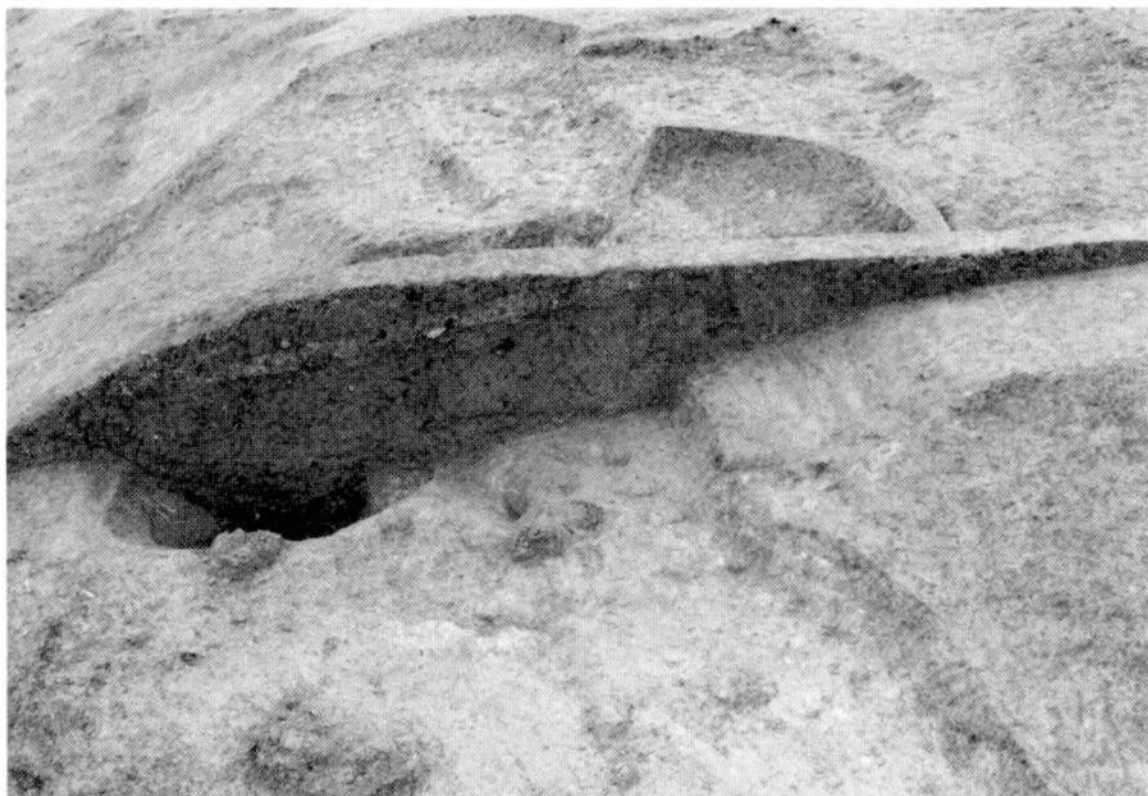
2. トヲノ尾遺跡7号住居跡と壁外地山整形の状態（南から）



1. トヲノ尾遺跡7号住居跡の土層断面（東から）



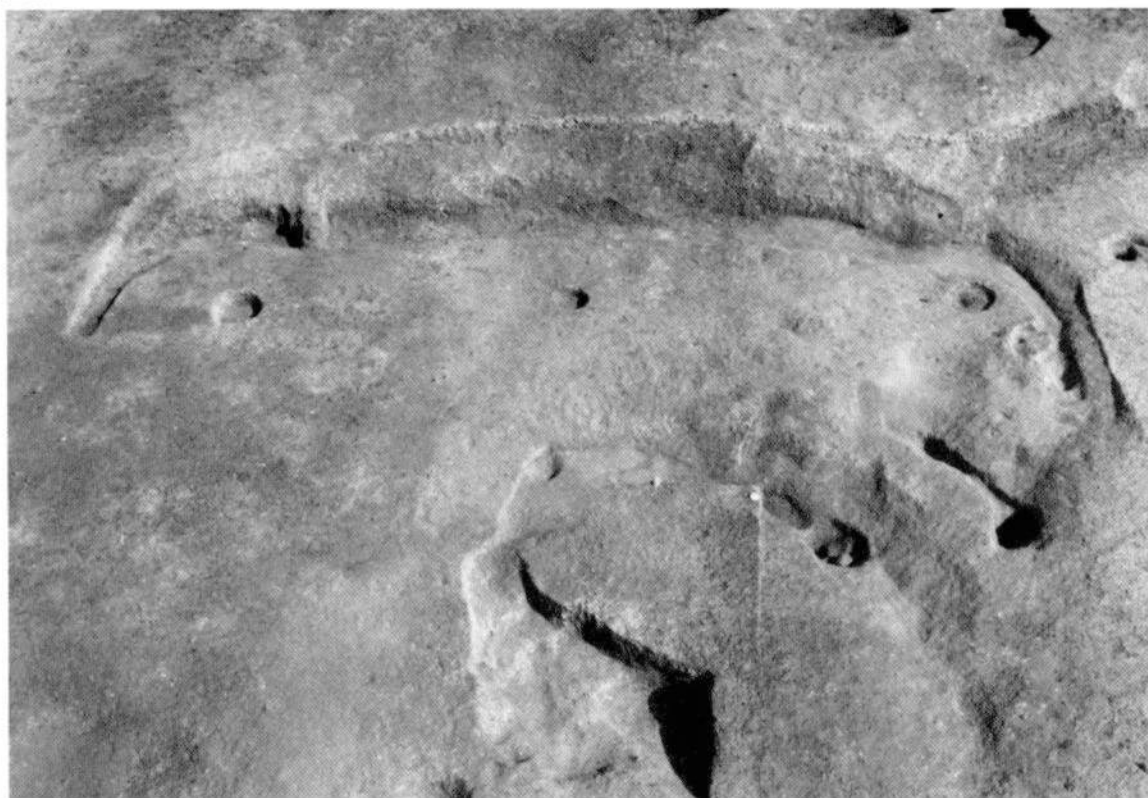
2. トヲノ尾遺跡8・9号住居跡と壁外地山整形の状態（北から）



1. トヲノ尾遺跡8号住居跡の土層断面（東から）



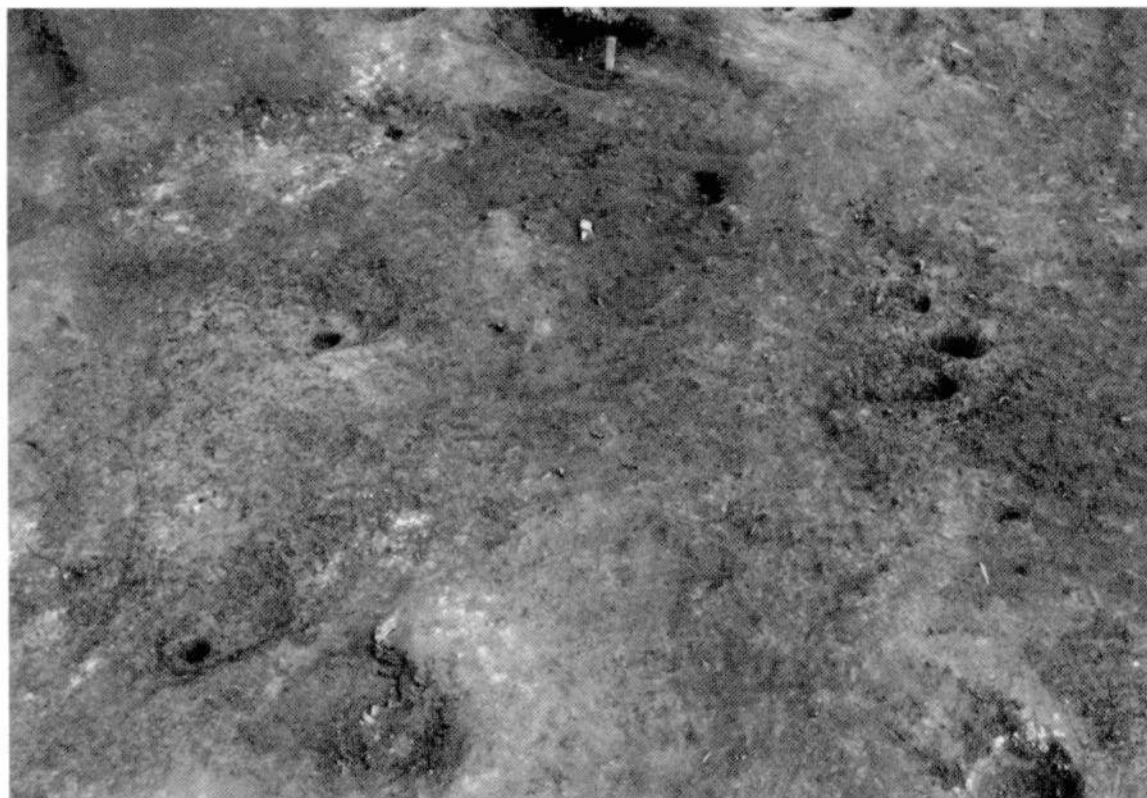
2. トヲノ尾遺跡11号住居跡（西から）



1. トヲノ尾遺跡12号住居跡（西から）



2. 同土層断面（北から）



1. トヲノ尾遺跡14号住居跡（南から）



2. トヲノ尾遺跡15号住居跡（西から）



1. トヲノ尾遺跡5号住居跡と3号溝状遺構（南から）



2. トヲノ尾遺跡13号住居跡（西から）



1. トヲノ尾遺跡第1項上部全景（真上から）



2. トヲノ尾遺跡火葬墓群遠景（真上から）



1. トヲノ尾遺跡火葬墓群全景（南から）



2. トヲノ尾遺跡火葬墓群全景（西から）



1. トヲノ尾遺跡1号火葬墓



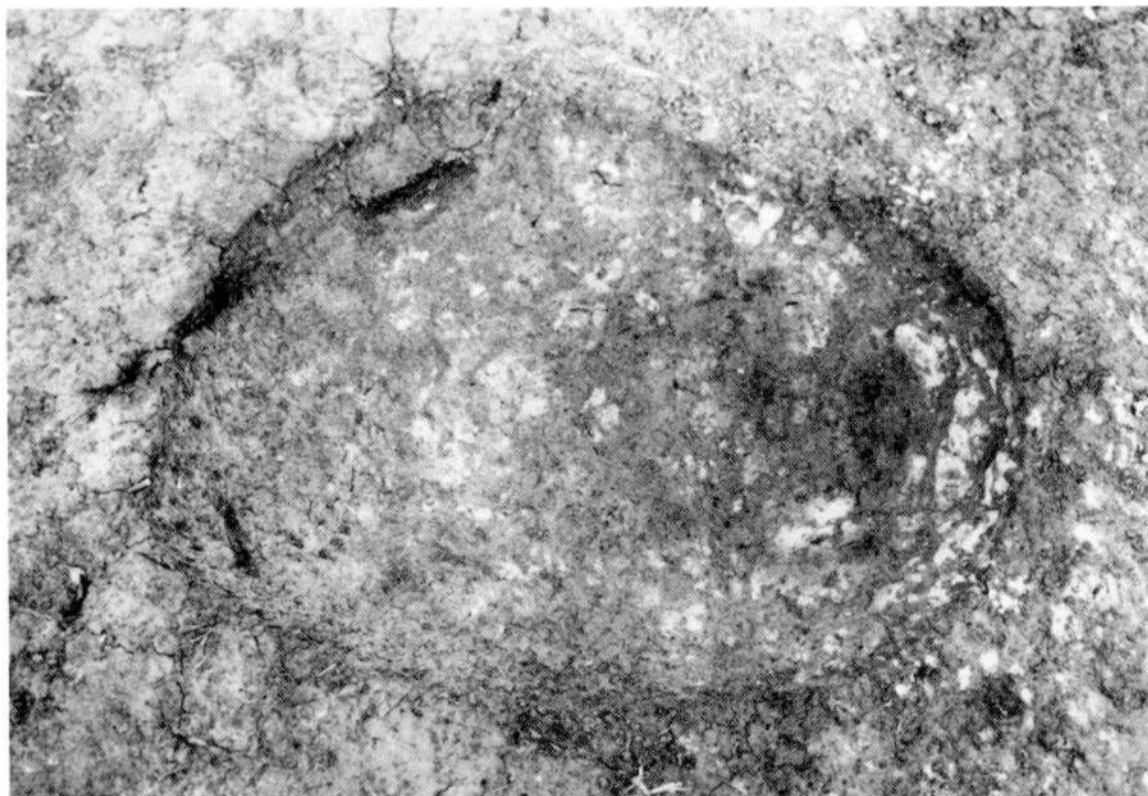
2. トヲノ尾遺跡2号火葬墓



1. トヲノ尾遺跡3-A号火葬墓



2. トヲノ尾遺跡3-B火葬墓



1. トヲノ尾遺跡4号火葬墓



2. トヲノ尾遺跡5号火葬墓



1. トヲノ尾遺跡 6号火葬墓



2. トヲノ尾遺跡 7号火葬墓



1. トヲノ尾遺跡8号火葬墓



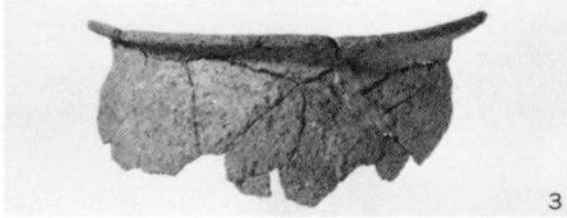
2. トヲノ尾遺跡10号火葬墓



1



2



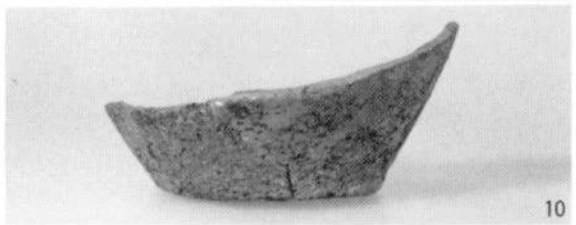
3



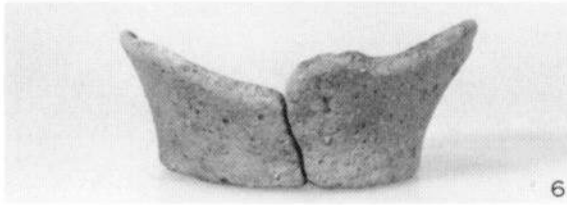
4



5



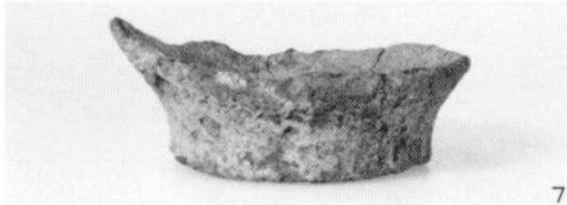
10



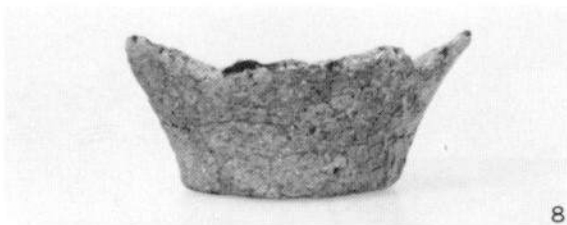
6



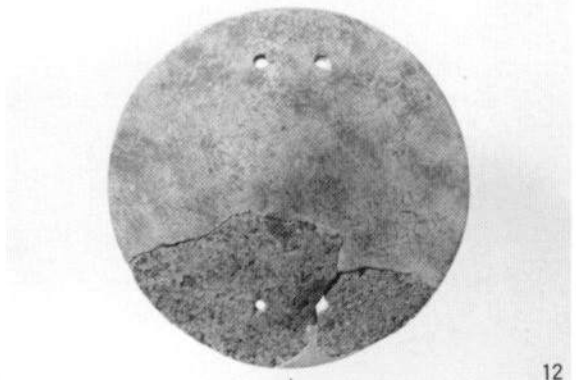
11



7



8



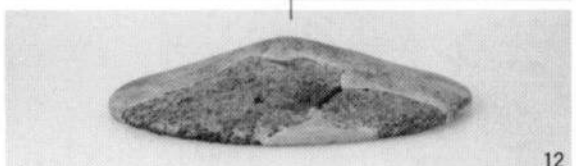
12



13



14



12

トヲノ尾遺跡7号(新・古)住居跡出土土器

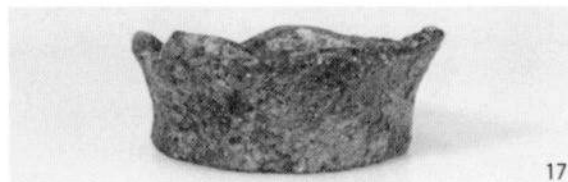


15



3号住

16

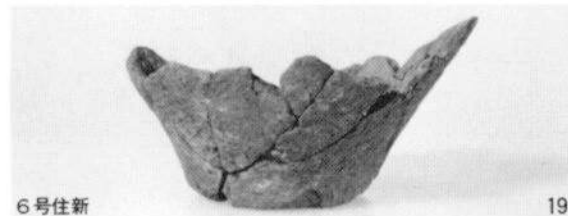


17



6号住古

18



6号住新

19



24



14号住

20



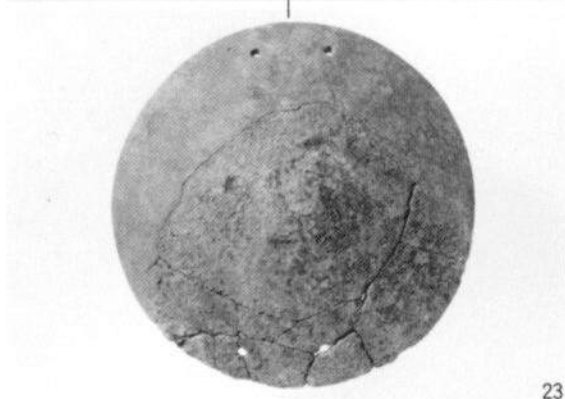
4号住

21

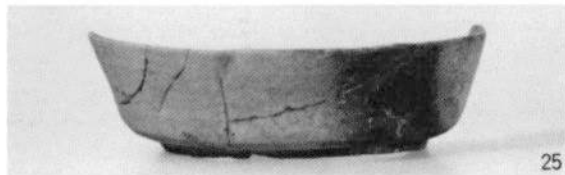


6号住

22

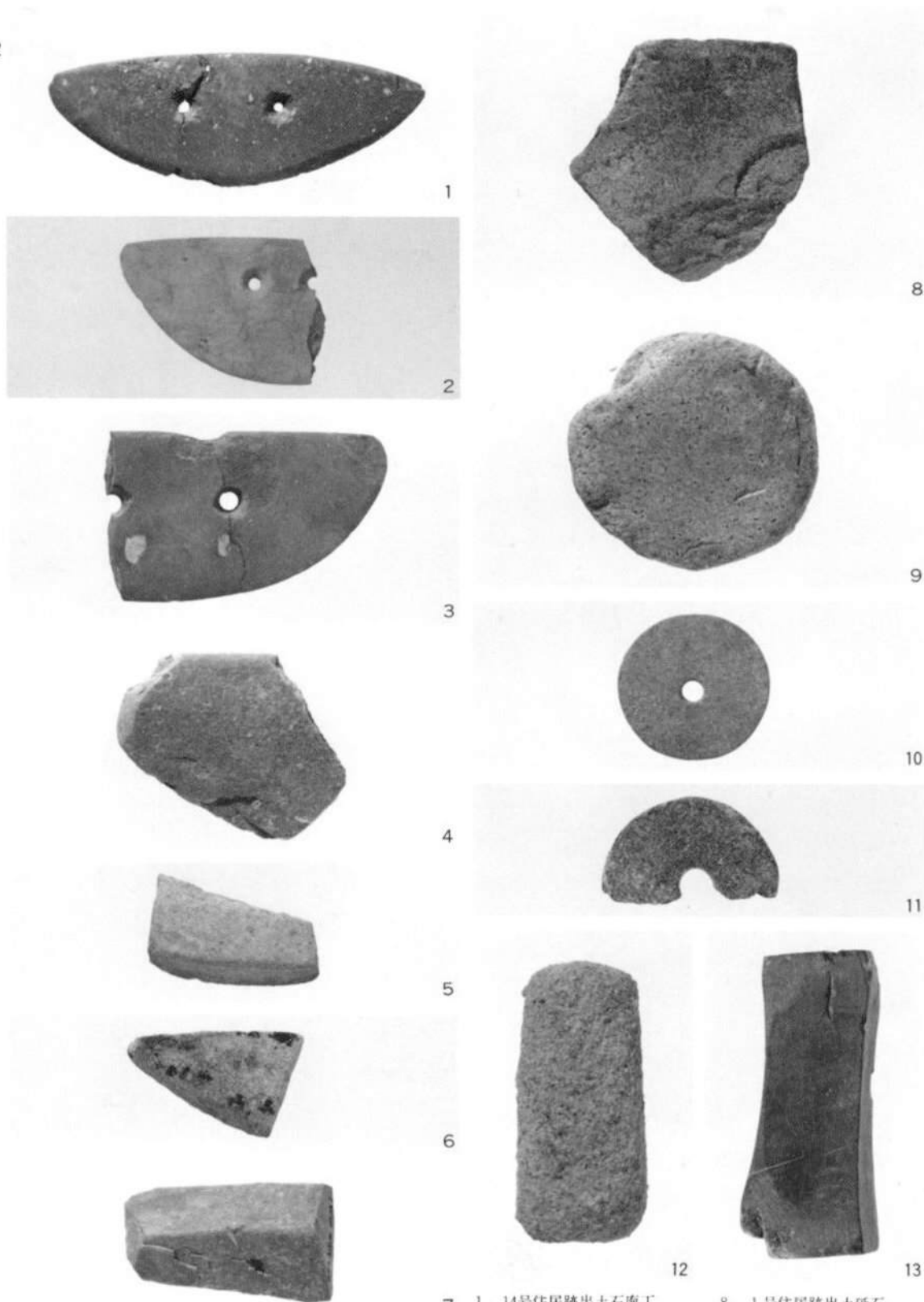


23



25

トラノ尾遺跡各住居跡及びその他の出土土器



トヲノ尾遺跡各住居跡等出土石製品

- 1. 14号住居跡出土石庖丁
- 2. 7号住居跡出土石庖丁片
- 3. 1号住居跡出土石庖丁片
- 4. 1号住居跡出土石庖丁片
- 5. 5号住居跡出土石庖丁片
- 6. 7号住居跡出土石庖丁片
- 7. 1号住居跡出土用途不明石器
- 8. 1号住居跡出土砥石
- 9. 7号住居跡出土砥石
- 10. 1号住居跡出土紡錘車
- 11. 4号住居跡出土紡錘車片
- 12. 1号住居跡出土石斧
- 13. 第1ピーク頂上部出土砥石

福岡東バイパス関係埋蔵文化財調査報告

平成2年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 福岡印刷株式会社
福岡市中央区天神3丁目4番3号

福岡県行政資料

分類番号	所属コード
JH	2133051
登録年度	登録番号
元	11

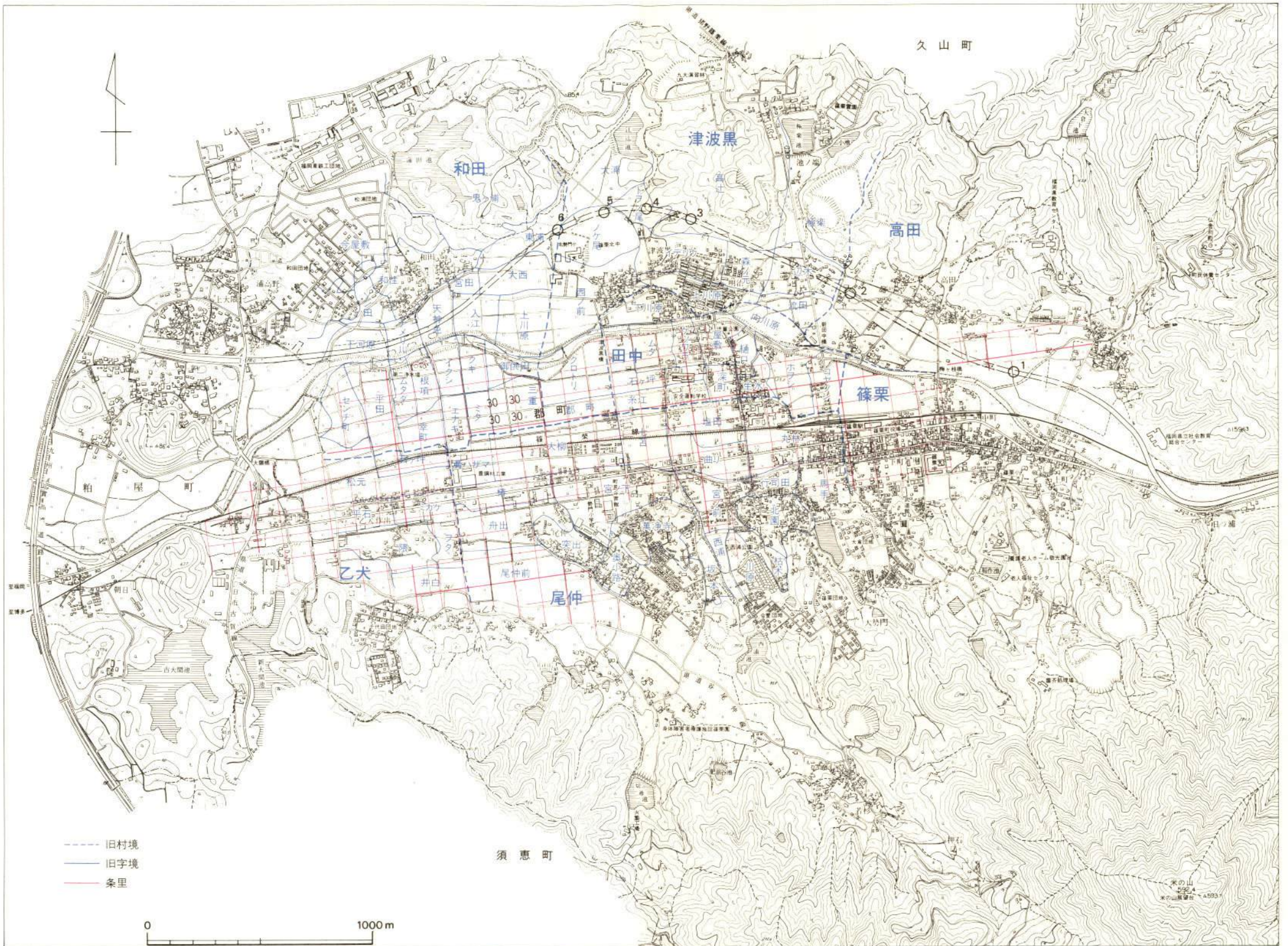
一般国道
201号線 福岡東バイパス関係埋蔵文化財調査報告

高田
塚元 遺 跡
トラノ尾

福岡県粕屋郡篠栗町所在遺跡の調査

付 図

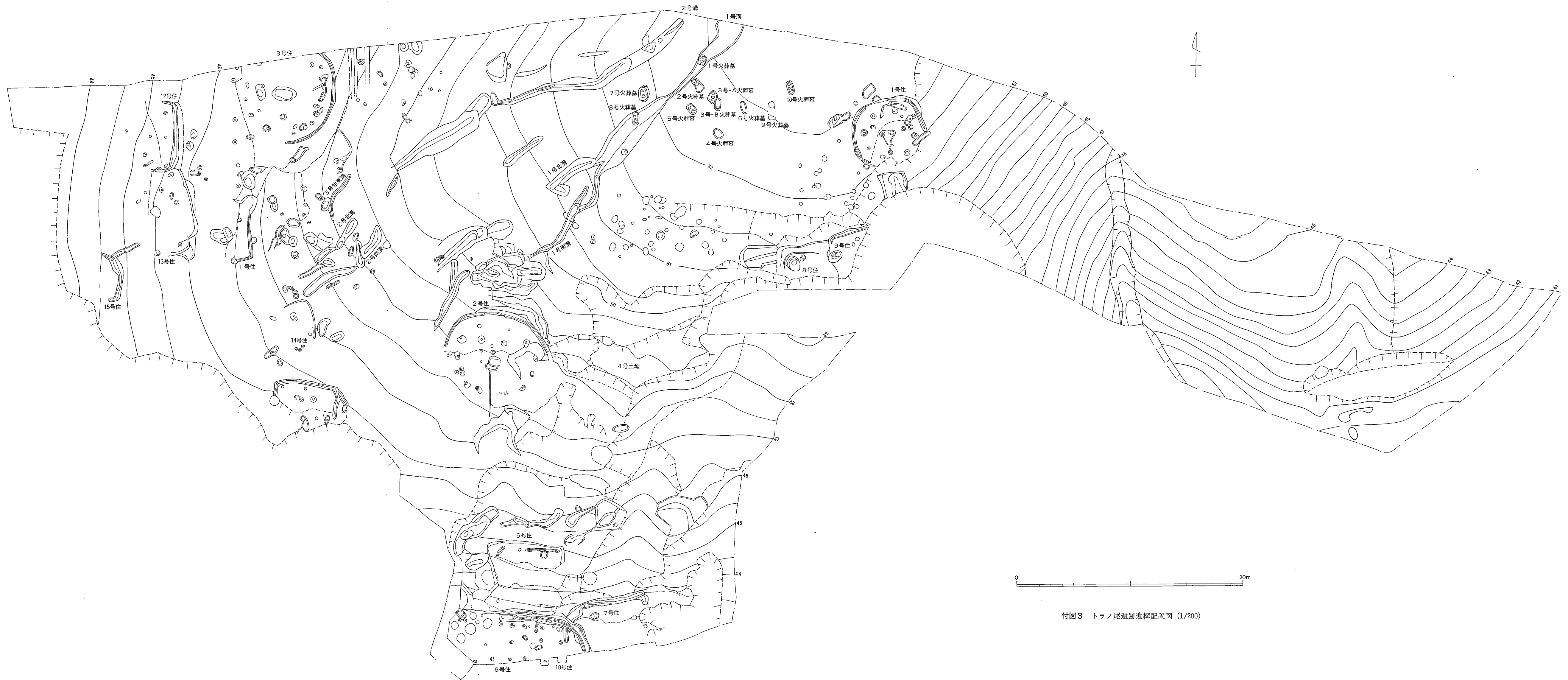
- 付図 1 福岡東バイパス路線内調査全体図(1/200,000)
- 付図 2 高田遺跡遺構実測図(1/200)
- 付図 3 トヲノ遺跡遺構配置図(1/200)
- 付図 4 和田A遺跡遺構配置図(1/200)
- 付図 5 トヲノ尾遺跡2号住居跡実測図(1/60)
- 付図 6 トヲノ尾遺跡3号住居跡実測図(1/60)
- 付図 7 トヲノ尾遺跡5～7・10号住居跡実測図(1/60)
- 付図 8 トヲノ尾遺跡11～13・15号住居跡実測図(1/60)



付図1 福岡東バイパス路線内調査全体図 (1/200,000)



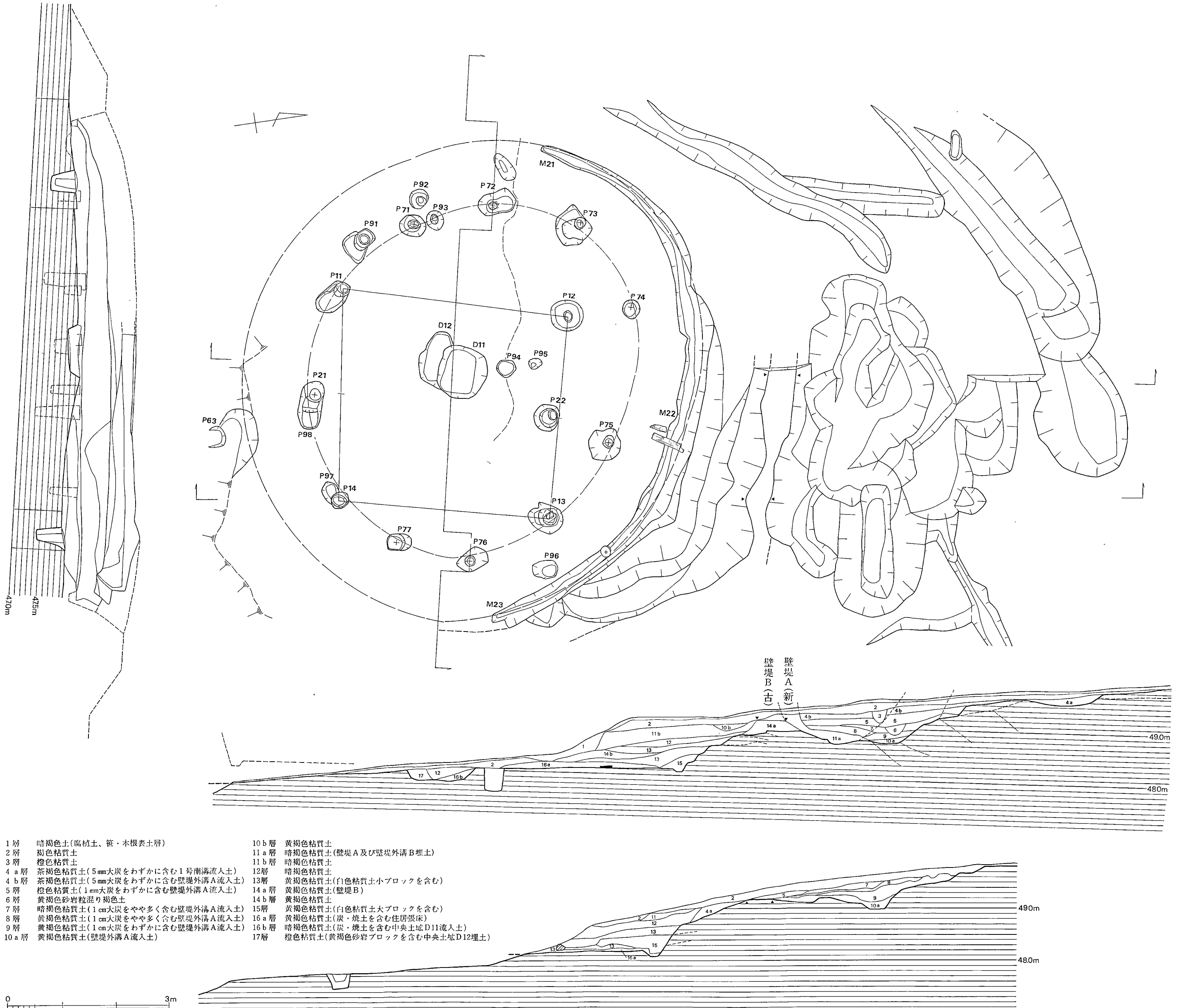
付図2 高田遺跡遺構実測図 (1/200)



付図3 トヲノ尾遺跡遺構配置図 (1/200)

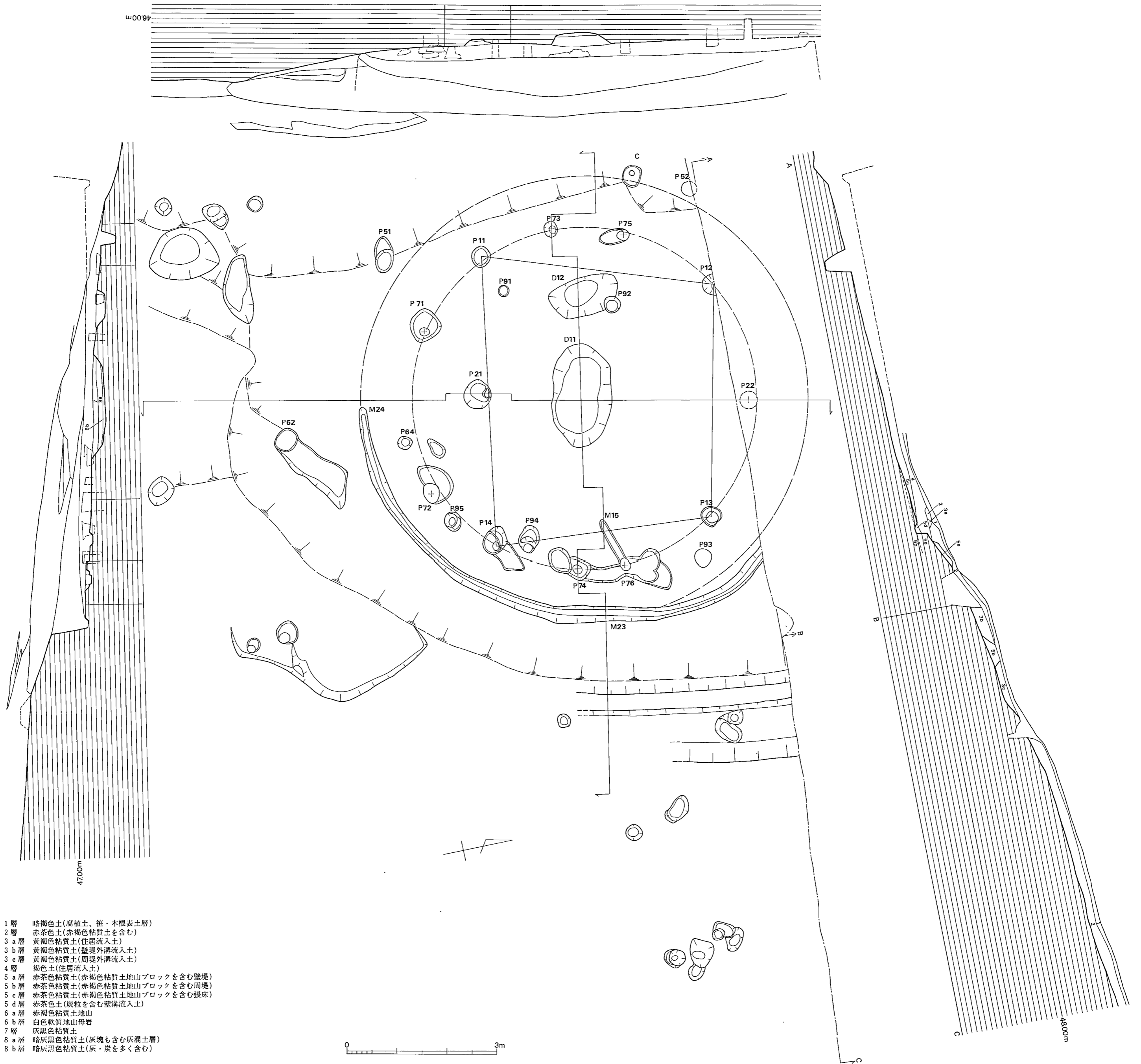


付図4 和田A遺跡遺構配置図(1/200)



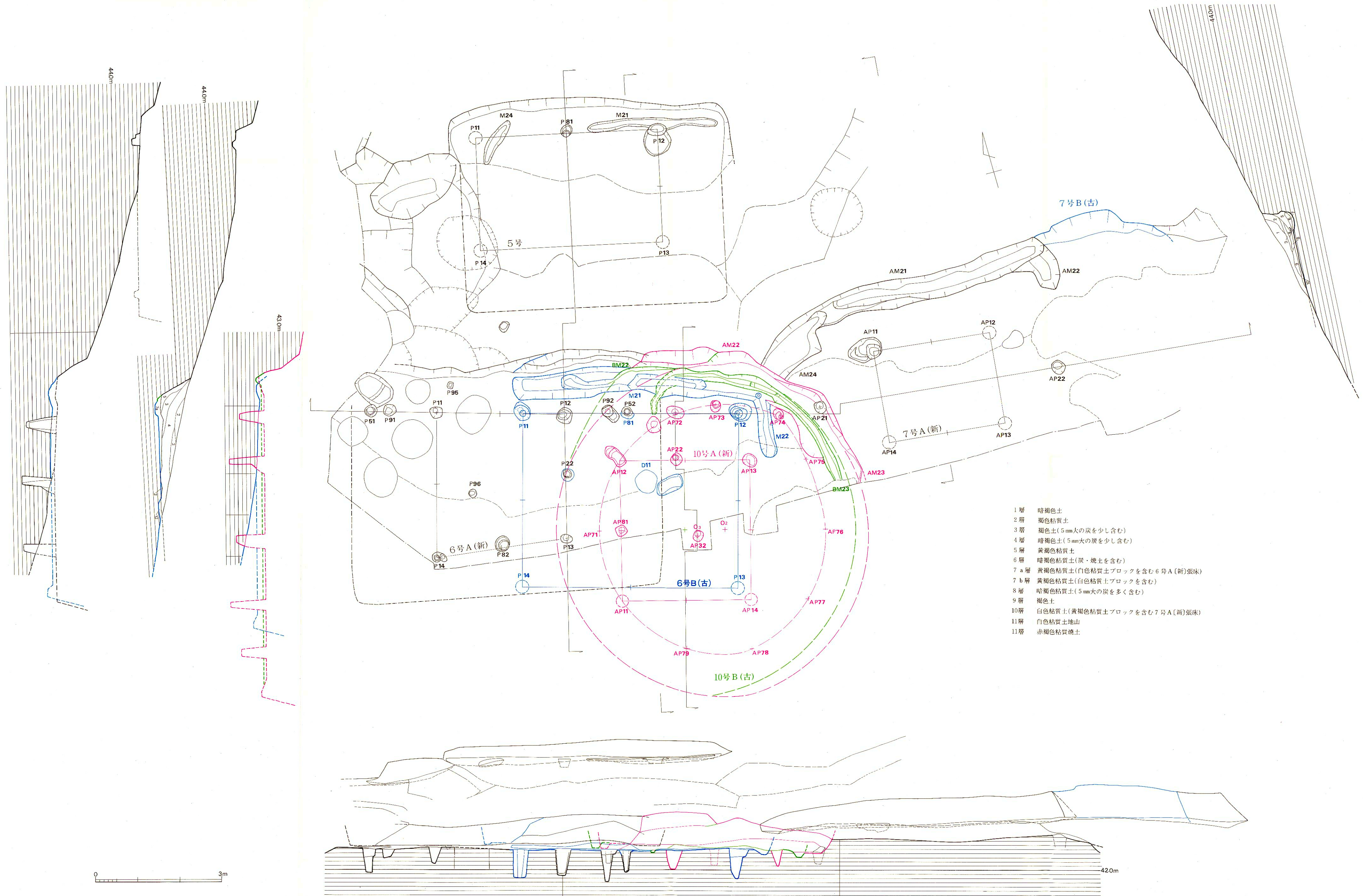
- | | | | |
|------|------------------------------|------|------------------------------|
| 1層 | 暗褐色土(腐植土、笹・木根表土層) | 10b層 | 黄褐色粘質土 |
| 2層 | 褐色粘質土 | 11a層 | 暗褐色粘質土(壁堤A及び壁堤外溝B埋土) |
| 3層 | 橙色粘質土 | 11b層 | 暗褐色粘質土 |
| 4a層 | 茶褐色粘質土(5mm大炭をわずかに含む1号南溝流入土) | 12層 | 暗褐色粘質土 |
| 4b層 | 茶褐色粘質土(5mm大炭をわずかに含む壁堤外溝A流入土) | 13層 | 黄褐色粘質土(白色粘質土小ブロックを含む) |
| 5層 | 橙色粘質土(1mm大炭をわずかに含む壁堤外溝A流入土) | 14a層 | 黄褐色粘質土(壁堤B) |
| 6層 | 黄褐色砂岩粒混り褐色土 | 14b層 | 黄褐色粘質土 |
| 7層 | 暗褐色粘質土(1cm大炭をやや多く含む壁堤外溝A流入土) | 15層 | 黄褐色粘質土(白色粘質土大ブロックを含む) |
| 8層 | 黄褐色粘質土(1cm大炭をやや多く含む壁堤外溝A流入土) | 16a層 | 黄褐色粘質土(炭・焼土を含む住居張床) |
| 9層 | 黄褐色粘質土(1cm大炭をわずかに含む壁堤外溝A流入土) | 16b層 | 暗褐色粘質土(炭・焼土を含む中央土壇D11流入土) |
| 10a層 | 黄褐色粘質土(壁堤外溝A流入土) | 17層 | 橙色粘質土(黄褐色砂岩ブロックを含む中央土壇D12埋土) |

付図5 トヲノ尾遺跡2号住居跡実測図(1/60)



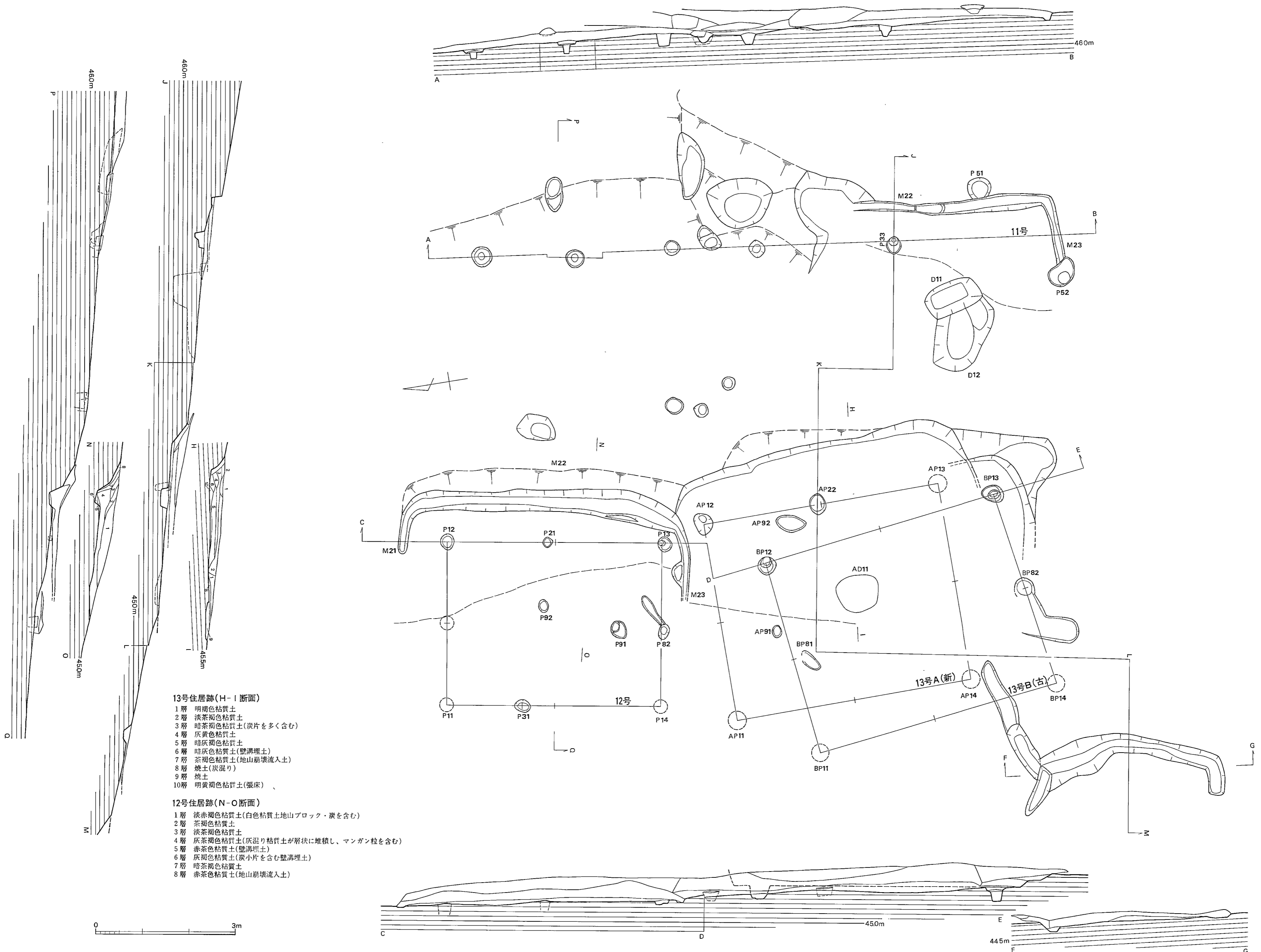
- 1層 暗褐色土(腐植土、笹・木根表土層)
- 2層 赤茶色土(赤褐色粘質土を含む)
- 3 a層 黄褐色粘質土(住居流入土)
- 3 b層 黄褐色粘質土(壁体外溝流入土)
- 3 c層 黄褐色粘質土(周堤外溝流入土)
- 4層 褐色土(住居流入土)
- 5 a層 赤茶色粘質土(赤褐色粘質土地山ブロックを含む壁堤)
- 5 b層 赤茶色粘質土(赤褐色粘質土地山ブロックを含む周堤)
- 5 c層 赤茶色粘質土(赤褐色粘質土地山ブロックを含む張床)
- 5 d層 赤茶色土(炭粒を含む壁溝流入土)
- 6 a層 赤褐色粘質土地山
- 6 b層 白色軟質地山母岩
- 7層 灰黒色粘質土
- 8 a層 暗灰黒色粘質土(灰塊も含む灰混土層)
- 8 b層 暗灰黒色粘質土(灰・炭を多く含む)

付図6 トヲノ尾遺跡3号住居跡実測図(1/60)



- 1層 暗褐色土
- 2層 褐色粘質土
- 3層 褐色土(5mm大の炭を少し含む)
- 4層 暗褐色土(5mm大の炭を少し含む)
- 5層 黄褐色粘質土
- 6層 暗褐色粘質土(炭・焼土を含む)
- 7 a層 黄褐色粘質土(白色粘質土ブロックを含む6号A(新)張床)
- 7 b層 黄褐色粘質土(白色粘質土ブロックを含む)
- 8層 暗褐色粘質土(5mm大の炭を多く含む)
- 9層 褐色土
- 10層 白色粘質土(黄褐色粘質土ブロックを含む7号A(新)張床)
- 11層 白色粘質土地山
- 11層 赤褐色粘質焼土

付図7 トヲノ遺跡5～7・10号住居跡実測図(1/60)



付図8 トヲノ尾遺跡11~13・15号住居跡実測図(1/60)